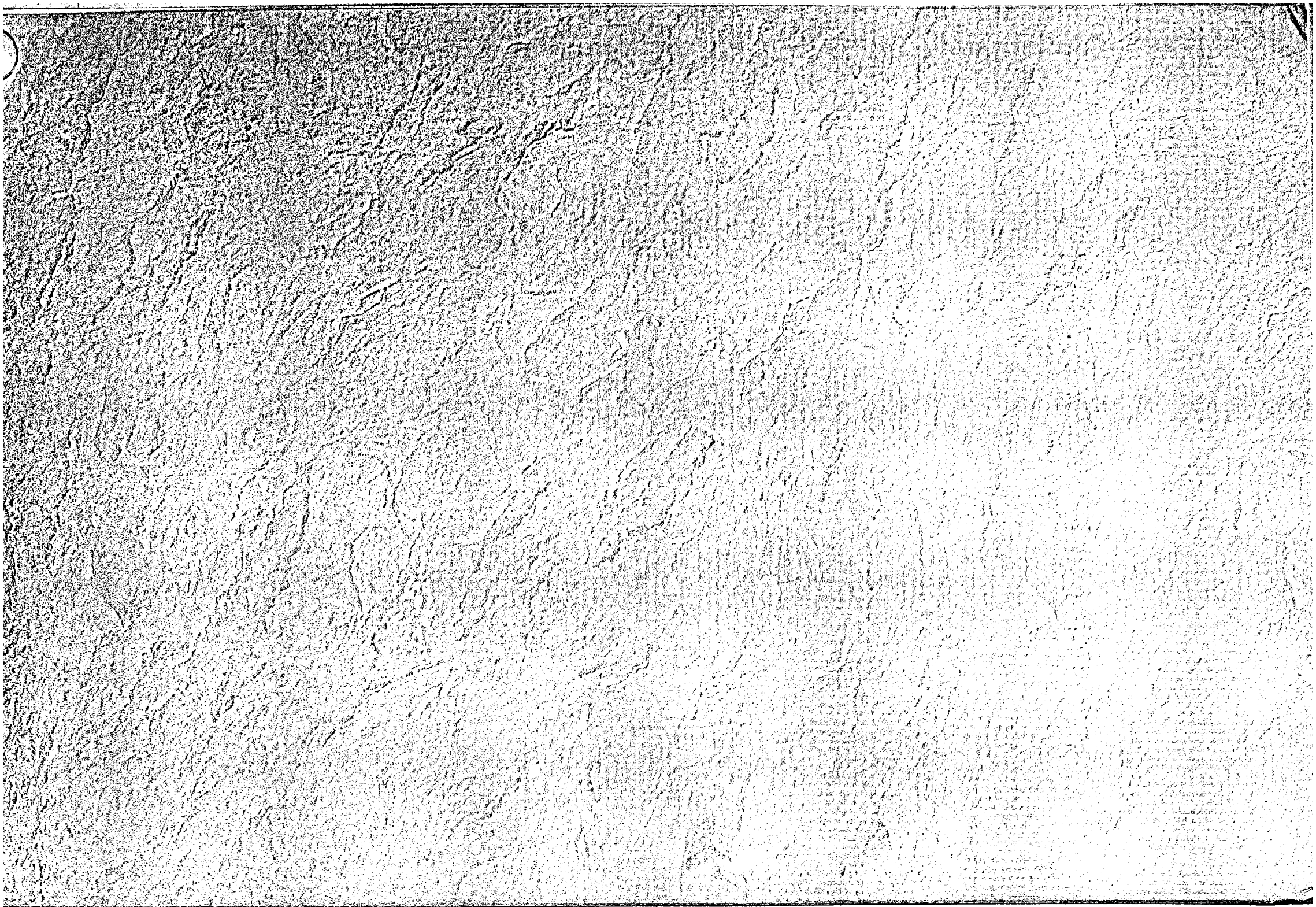
ハラホト出土モンゴル文書の研究

Study on the Mongolian documents found at Qaraqota

吉田順一・チメドドルジ 編

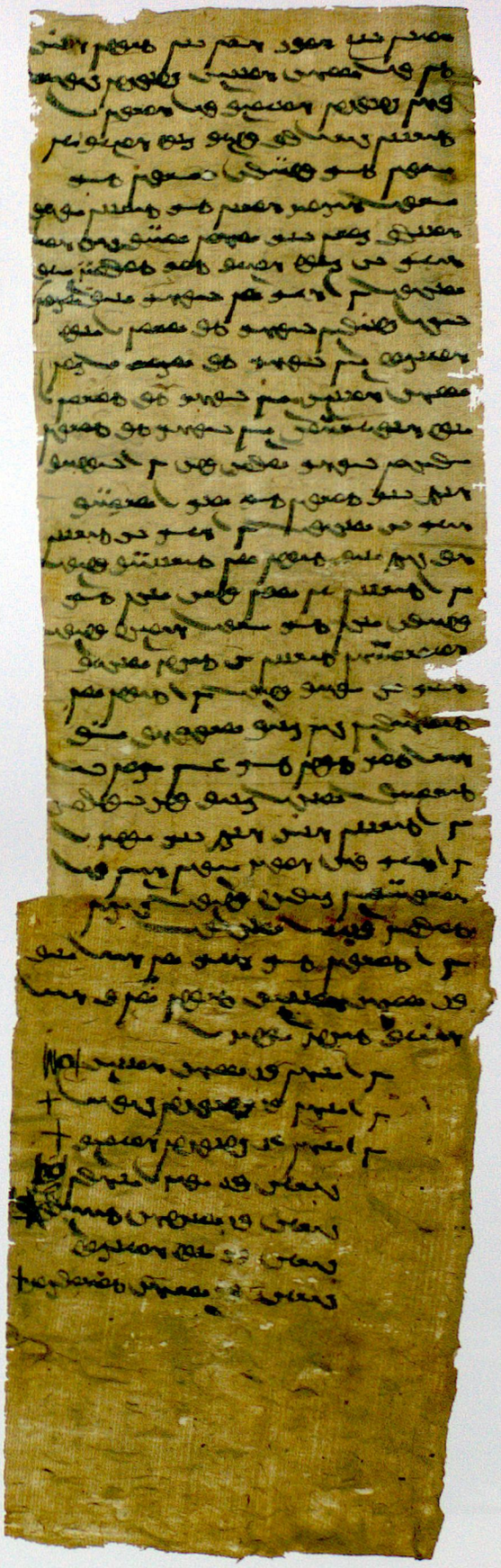
雄山閣



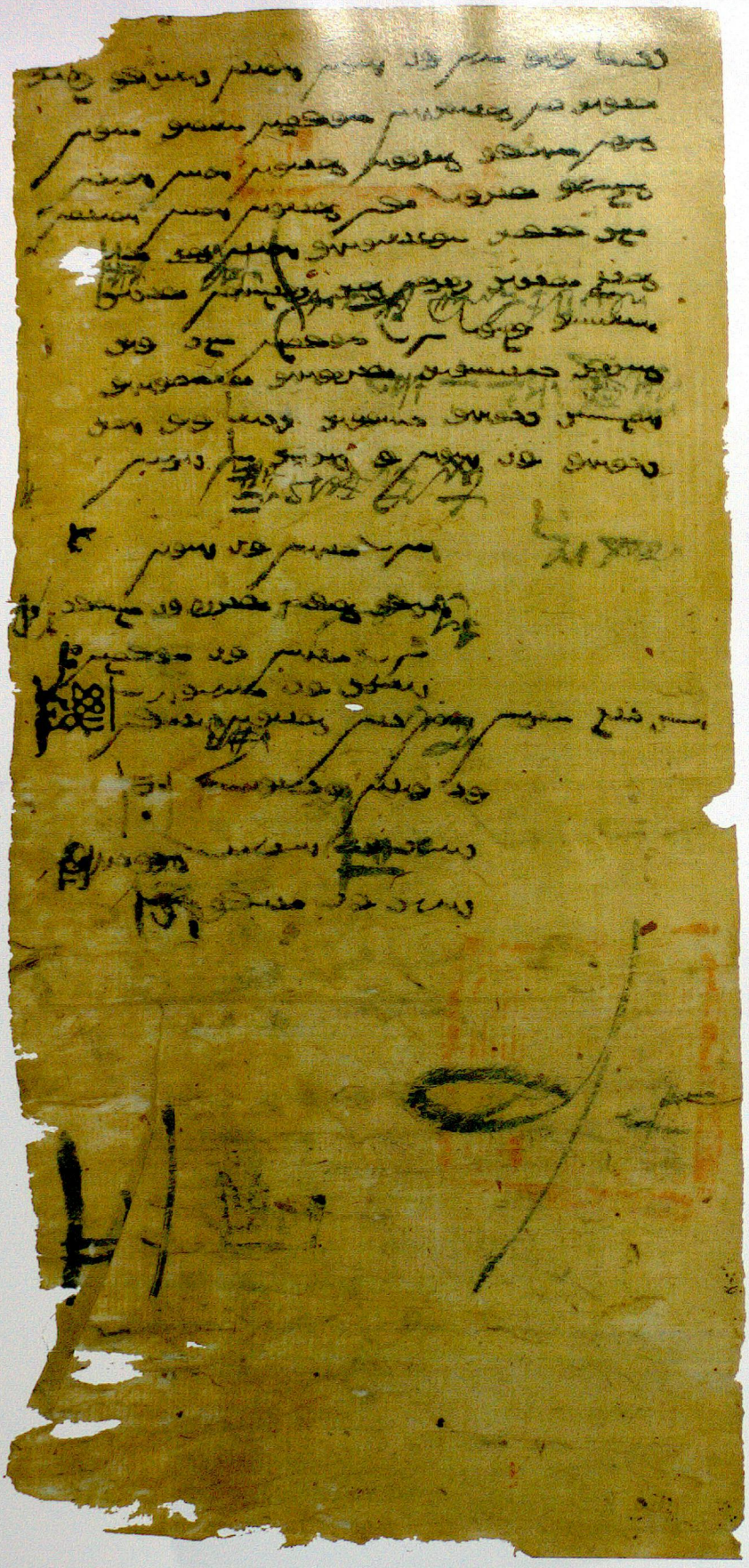
『ハラホト出土モンゴル文書の研究』　正誤表

本文中に誤記がございましたので下記のとおり訂正させていただき、関係各位にお詫び申し上げます。

頁	行	誤	正
94	8	参照。。	参照。
94	26	罗桑丹津	罗卜桑丹津
155	20	“”RP”	“”RP’”
158	27	ことをを	ことを
175	上表左９行目	temrür	temür
185	21	küri-lig čä	küri-lig-čä
188	16	[tu]rup	t[u]rup
199	19	*laf*	*lab*
210	24	殺	殺 大
221	7	（李逸友 1991: 137）	（李逸友 1991: 137）。
223	22	撃退、排除」	「撃退、排除」
228	33	temprorary	temporary
247	9	であった。	・・・ならば、
249	11	**ḤṬH’**	**ḤṬH’**
276	左 36	;F21:W37-0752, 07 【G, 07】	削除
277	左 45	;F21:W37-0754, 02【E, 02】	削除
277	右 44	näng F21:W37-0751, 12【A, 12】	(näng) F21:W37-0751(2), 12【B, 12】
278	左 5	F21:W37-0751(2), 08【B, 08】	F21:W37-0751, 08【A, 08】



（No.001）文書番号F61：W9

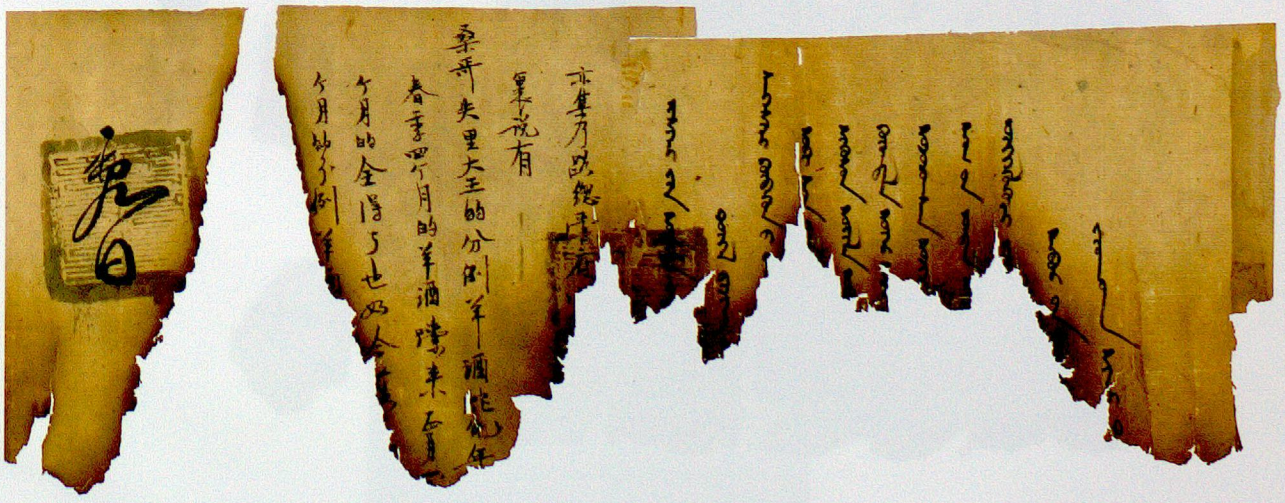


（No.005）文書番号MON02

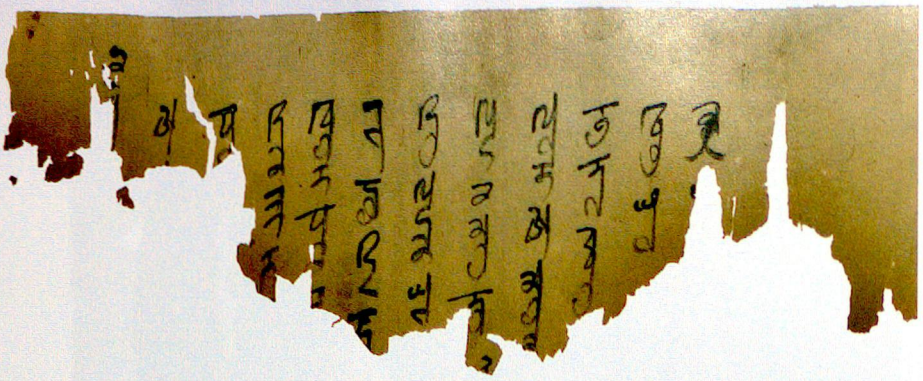
NIEDERSÄCHS.
STAATS. U. UNI.-
BIBLIOTHEK
GÖTTINGEN



（No.016）文書番号F9：W31b



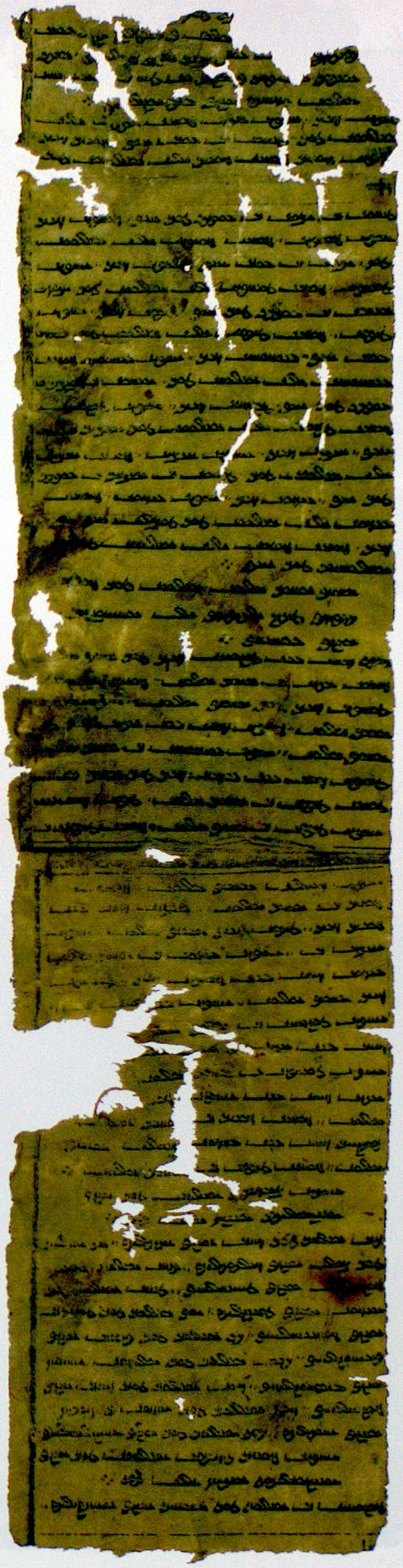
（No.018）文書番号F116：W204（一部）



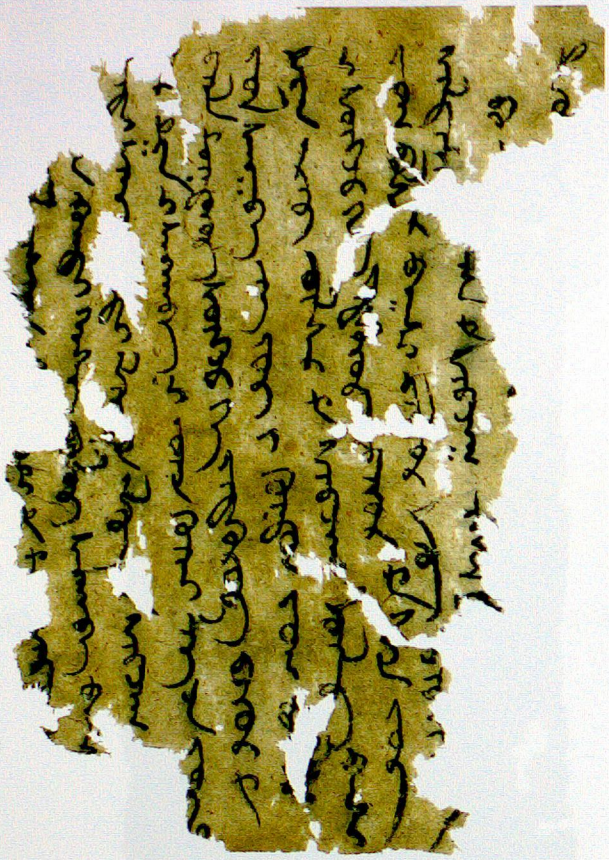
（No.042）文書番号84H・F116：W584／1758（一部）



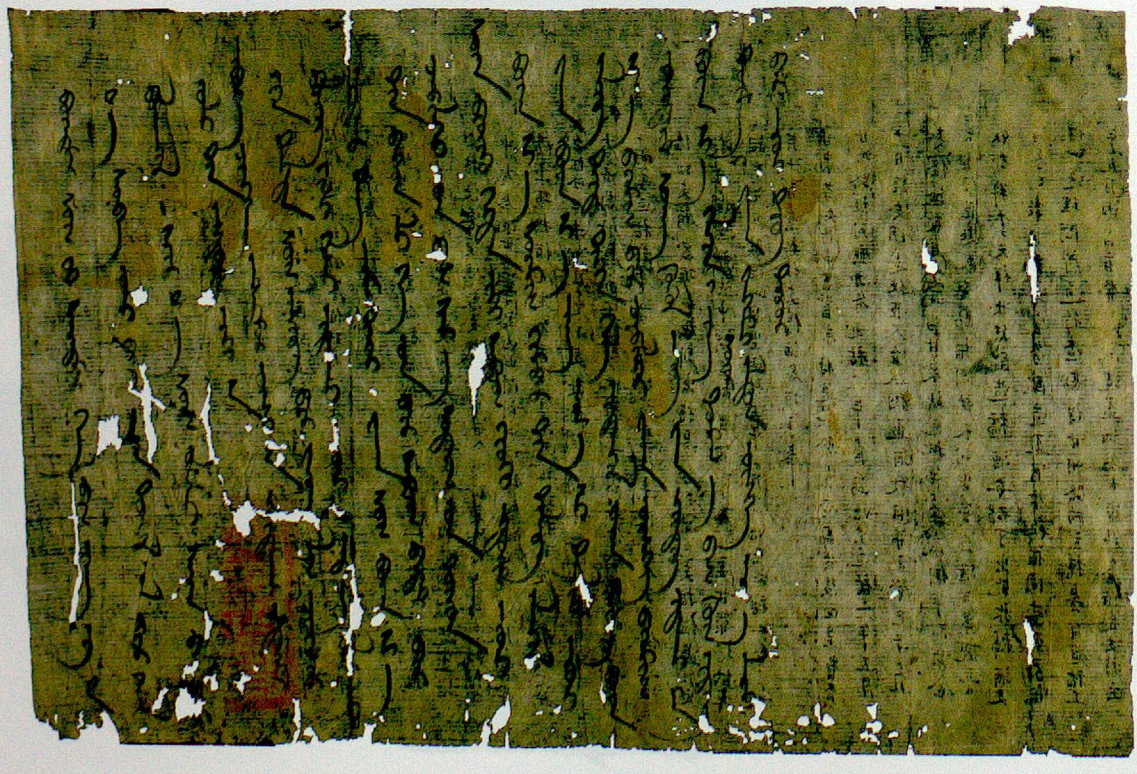
（No.057）文書番号HF125c



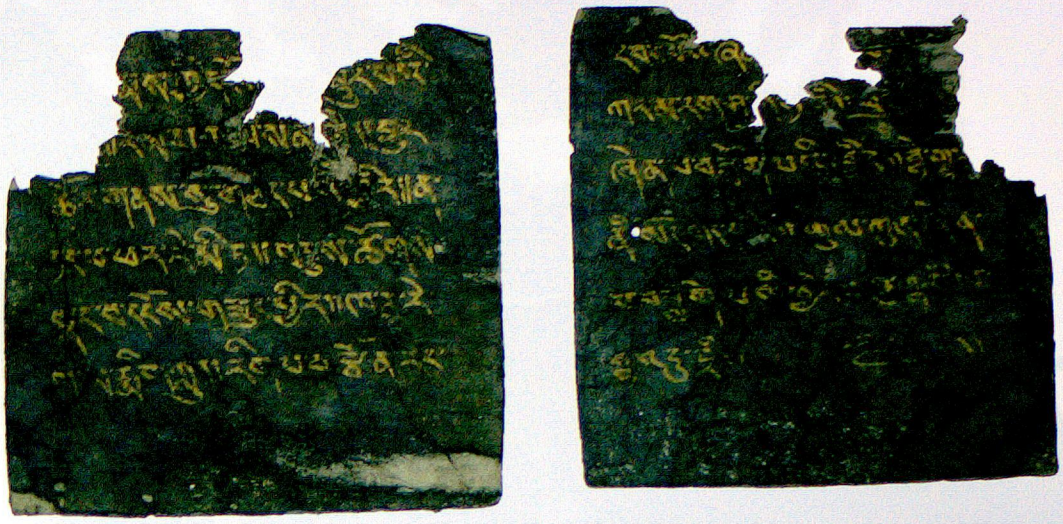
（No.062）文書番号F9：W57



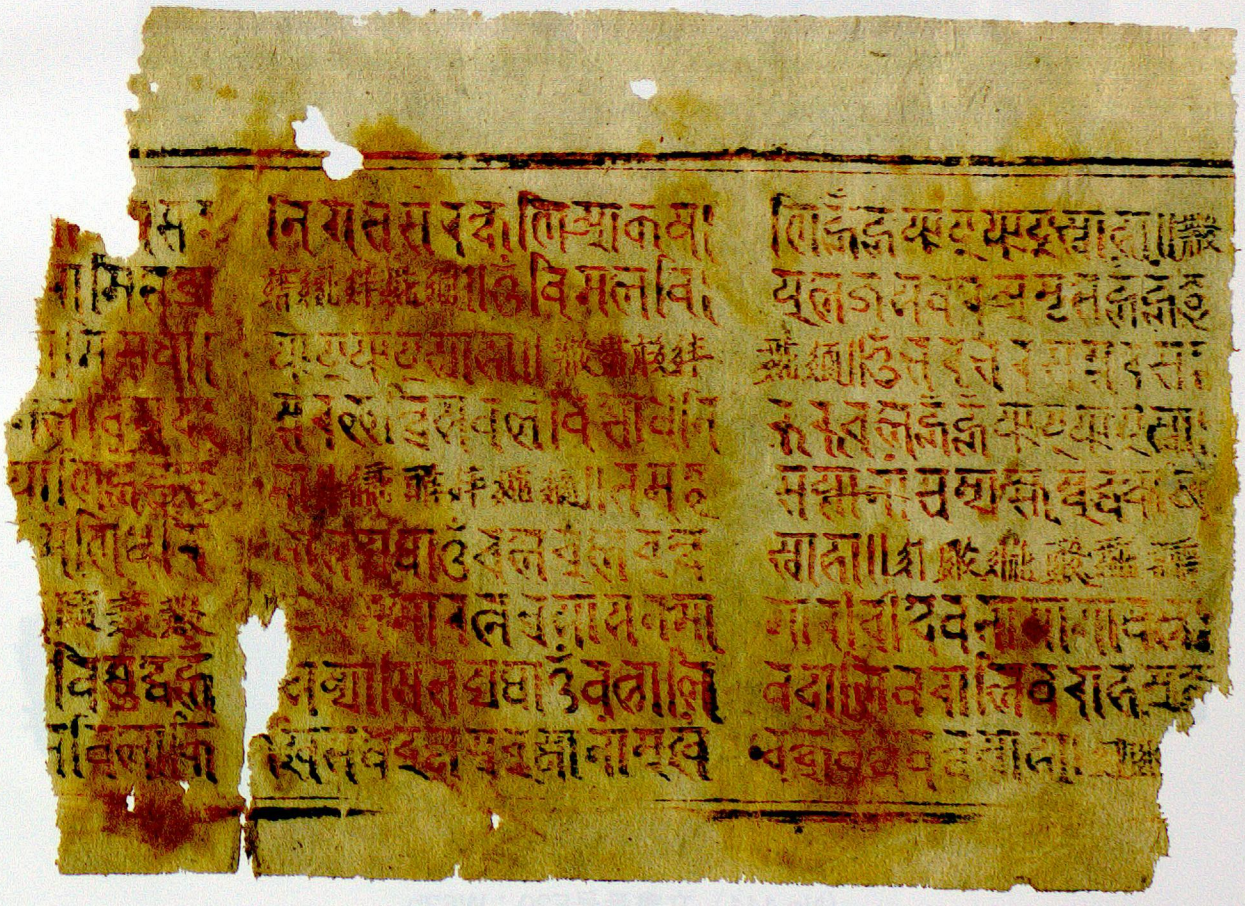
（No.088）文書番号F13：W68



（No.095）文書番号F9：W105



（No.105）TIB03



（No.106）文書番号F13：W83



（No.110）文書番号F20：W63a



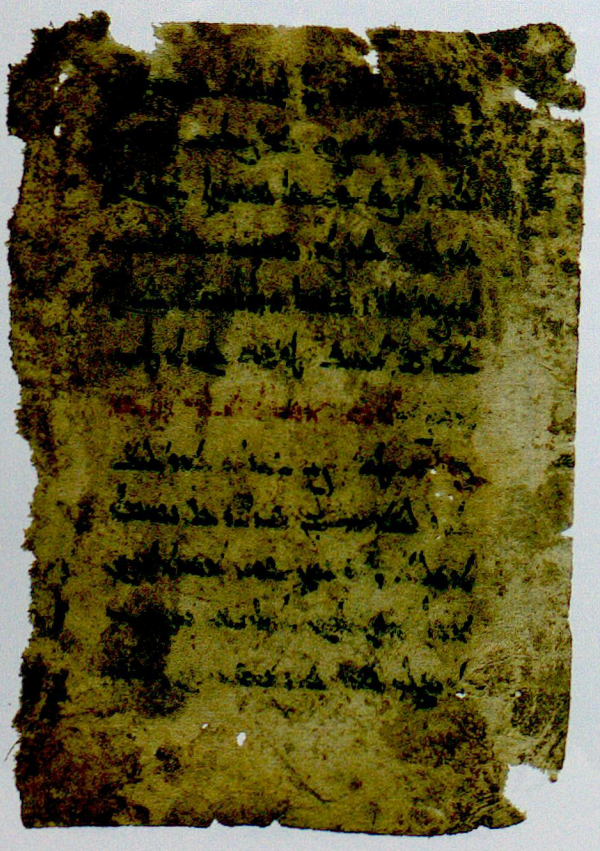
（No.111）文書番号F20：W63b



（No.123）文書番号H彩101



（No.124）A文書番号F21：W37—0751



（No.125）B文書番号F21：W37—0751（2）

ハラホト出土モンゴル文書の研究

Study on the Mongolian documents found at Qaraqota

目　次

序　文……1
凡　例……10
第一部　モンゴル文書……12
第二部　ウイグル文字テュルク語文書……183
第三部　チベット文書……200
第四部　西夏文字・梵字文書……209
第五部　アラビア文字文書……214
第六部　シリア文字文書……232
逐語索引……254
執筆者紹介……290
図版編……295

序　文

1983・1984 年に中国内モンゴル文物考古研究所・アラシャン（阿拉善）盟文物考古站が、内モンゴル自治区アラシャン盟にあるハラホト（黒城）において、元朝期のおおよそ 3,000 件に及ぶ文書を発見した（過去におけるハラホト出土の文書やそれに対する報告・研究等については、「モンゴル文書」の部の「はじめに」を参照されたい）。これらは、ハラホトの官庁址から出土したこともあって世俗文書が主で、中でも公文書類が最も多いとされる。3,000 件のうち、3 分の 2 以上を漢文文書が占めている。これらについては、ハラホト文書の発掘責任者であった内モンゴル文物考古研究所の李逸友氏によって報告書がすでに出されている。次に数が多いのが西夏文字文書である。これらについては、中国社会科学院の史金波氏に研究が委託された。

本書は、漢文文書と西夏文文書以外のすべての文書を扱って研究したものである。にもかかわらずタイトルを『ハラホト出土モンゴル文書の研究』としたのは、本書が早稲田大学と内モンゴル大学のハラホト出土モンゴル文書に関する共同研究の成果だからであり、また扱った文書の中で、モンゴル文書の数が最も多いからである。

本書は、日本の早稲田大学文学学術院教授の吉田順一を早稲田大学側の研究代表者とし、中国の内モンゴル大学モンゴル学学院教授のチメドドルジ（斉木徳道爾吉）を内モンゴル大学側の研究代表者とする共同研究の体制を築いて実施された研究の成果である。そこでこの共同研究について、最初に記すことにしたい。

吉田順一は、かねて内モンゴル大学との交流があり、特に同大学モンゴル史研究所のイリンチン（亦隣真）教授とは 1981 年以来学術上の交流を重ねてきた。そして 1995 年に同大学を訪問したとき、当時内モンゴル社会科学院で研究をしていた井上治とともにイリンチン教授宅に招かれた。私たちはそのとき、イリンチン教授がハラホト文書の研究を内モンゴル文物考古研究所から委託されていることを聞き知っていたので、研究の内容や進捗の具合などをたずねた。それに対してイリンチン教授は、私たちに懇切に説明をし、かつ同文書十数枚のコピーを示し、直接手に取って見ることを許してくれた。文書の中には B4 か A3 くらいのサイズのものも数葉あり、複写されたものとはいえ、大きなウイグル式モンゴル文字で書かれた文書に私たちは圧倒された。以来、ハラホト文書に強い関心を抱き続けていた。だが残念なことに、イリンチン教授は研究の成果を世に問うことなく、1999 年春に亡くなられた。私たちは、同文書の研究の行方を大いに心配した。

その後間もなく、同年 9 月に、吉田順一が、内モンゴル社会科学院歴史研究所のチョイジ（喬吉）研究員を 1 年間早稲田大学に招いたとき、同氏の話からハラホト文書の研究が当時内モンゴル大学モンゴル文化研究所長であったチメドドルジ教授の手に移ったこと、しかし同教授は新たに発見された清朝初期のモンゴル文檔案の研究と刊行の仕事のために、2001 年の夏までハラホト文書の研究に従事する時間を取り難いことなどを知った。吉田は、チメドドルジ教授とも旧知の間柄であり、同教授を日本に招いてモンゴル史に関する共同研究を行いたいと考えていたほどであったから、ハラホト文書の研究が遅れることを懸念して当時早稲田大学文学部非常勤講師であった井上治と相談を重ね、ついに同教授と同文書の共同研究を行い、研究の促進を企てることを決意したのである。そしてこの考えを 2000 年 3 月にチメドドルジ教授に伝えたところ、幸いに内諾を得た。

そこで私たちは、具体的な共同研究の方法について意見を交換し、早稲田大学側の共同研究者と内モンゴル大学側の共同研究者を選定し、その上で同年10月13日に北京に出張してチメドドルジ教授と会見し、共同研究に関する最終的な合意に達した。

その後吉田順一、井上治、永井匠は、モンゴル文書研究班を組織し、2001年8月初旬に内モンゴル大学を訪問して研究について再度打ち合わせをし、今後の共同研究の円滑な推進のために、李逸友氏の考古報告が迅速に刊行されるよう努めることも求めた。そしてはじめて李逸友氏に会い、それまでチメドドルジ教授と協議して準備を進めてきた共同研究について直接説明をし、共同研究による研究の促進について同氏の了承を得た。

このような段階を踏んで、吉田順一とチメドドルジは、共同研究に関する協定文を作成し、2001年11月27日に署名した。その内容は、吉田順一が研究費用と出版費用を獲得し、その費用によって内モンゴル大学と共同研究を行いかつ研究成果を刊行するということを骨子とするものであった。吉田順一は協定文発効以前から、共同研究に関する協議の内容に従って2001年度と2002年度の早稲田大学特定課題研究助成費を獲得していた。そして協定文に従って、2002年度～2005年度の日本学術振興会科学研究費補助金を獲得し、2007年度の日本学術振興会研究成果公開促進費を獲得した。

協定書締結と同時に、一部の文書の写真が早稲田大学側に渡され、共同研究が動き出した。このときチメドドルジ教授に文書のカラー写真の撮影とそのネガフィルムの供与を頼み、2002年3月に早稲田大学モンゴル文書研究班の3人は内モンゴル大学に出かけて、同教授からそれらを受け取り、研究は本格化した。

これらの事前準備の段階において、当時早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程の学生であったソーハン・ゲレルト（現在内モンゴル農業大学助教授）が重要な役割を果たし、本研究の実現に貢献したことを、ここに記しておかなければならない。

研究は、早稲田大学モンゴル文書研究班が主導的に進め、内モンゴル大学側と連携しながらモンゴル文書の研究を進めるとともに、モンゴル文書以外の文書について日本の研究者に研究を依頼し、それぞれの担当者の疑問に応えて、文書原物の調査や写真の取り直しなどを行い、文書研究全体を統括した。モンゴル文書以外の文書の研究担当者は、個別に解読に努め、必要に応じて関連研究者の協力・援助も得て研究を進めた。

早稲田大学モンゴル研究班は、年に1、2度フフホトを訪れ、内モンゴル大学側との打ち合わせ、解読、文書原物の調査、文書写真の撮り直しなどを行い、共同研究を遂行した。

その過程で起ったいくつかのことを記す。

第一に、残念なことだが、李逸友氏が共同研究発足後間もなく亡くなった。そのため共同研究の対象であるモンゴル文書以下の文書の考古報告の刊行が遅れ、われわれの研究や研究成果の公表に影響が生じた。具体的には、文書の解読にとって重要な各文書が発掘された場所とそこの状態、紙や墨の種類などについて知ることができなかった。各文書の寸法も最初は不明であった。早稲田大学モンゴル文書研究班は、チメドドルジ教授に何度か資料の提供を求め、何とかこれらの資料を入手しようと努めたが、ついに実現しなかった。

第二に、2003年に内モンゴル文物考古研究所に保管してある未処理の小断片の文書を調べ、研究対象になり得ると思われる14点を選び出し、保存処理を同研究所に依頼した。翌年、保存処理の終わった文書を見て検討したが、結局どれも解読しなかった。ただしそれらの影印は、本書に掲載してある。

第三に、研究は当初、内モンゴル大学側の情報に基づいて、モンゴル文書と、数的に少ないウイグル文書とチベット文書を扱うものとして出発した。しかしながら内モンゴル大学から写真を受け取ってみると、後述するようにそれら以外のものも含まれていることが明らかとなったことなどから、研究体制を補強する必要が生じた。このようにして、解読に携わる研究者が次第に増えた。早稲田大学モンゴル文書研究班についても、2004年度から舩田善之（九州大学人文科学研究院専任講

師）を加え、研究体制を強化した。

日本学術振興会の科学研究費補助金による研究は 2005 年度が最終年度であった。そこで、2006 年 3 月に『ハラホト出土文書（モンゴル文）の研究』と題する研究成果報告書を作成し、日本学術振興会に提出した。そして同年 5 月に早稲田大学モンゴル文書研究班全員が内モンゴル大学に出かけて、12 日に内モンゴル大学と共同の研究成果報告会（中国での呼称は「中日合作“黒城出土元代蒙古文文献研究”項目結題報告会」）を開催した。

その後も、研究を続け、その成果をまとめたのが本書である。

本研究の大きな特徴は、文書に書かれた言葉と文字の種類が多いことにある。共同研究が実際に動き出すまで、早稲田大学側は研究対象となる文書を見ておらず、当初、本文書はモンゴル文書として説明され、少数のウイグル文書、チベット文書が含まれていると説明されていた。ところが協定が結ばれて写真を受け取って見てみると、アラビア文字文書や見慣れぬ文字の文書があることが分かった。見慣れぬ文字の文書は、調べた結果シリア文字文書であることが分かった。それだけではない。研究が進められる過程で、シリア文字文書の中にシリア語まじりのテュルク語文書があることが判明した。また、当初チベット文書に分類されていたものの中に西夏文字･梵字文書が含まれていることも判明した。アラビア文字文書には、ペルシア語の文書だけではなく、アラビア語の文書とテュルク語の文書も含まれることが判明した。このため、かなりの数の研究者が関わることになった。

それらのうち、名を挙げるべきは、次の研究者である。

モンゴル文書については、吉田順一、井上治、永井匠、舩田善之、チメドドルジ、チョイジ、オヨンビリグ、ボインデルゲル。

ウイグル文書については、梅村坦、松井太。シリア文字で書かれたシリア語まじりのテュルク語文書については、梅村のほか、ペーター・ツィーメ（Peter Zieme）、武藤慎一。これらの責任担当者は梅村坦である。

チベット文書については、武内紹人、石濱裕美子。はじめ石濱裕美子がかかわったが、その後専ら武内紹人が本格的に研究した。

西夏文字・梵字文書については荒川慎太郎。

アラビア文字文書については、宇野伸浩、矢島洋一、磯貝健一、松井太。責任担当者は宇野伸浩である。

シリア文字文書のうち、シリア語のものについては武藤慎一。

以上の責任担当者とそれ以外の研究者の協力関係の実際については、それぞれの文書を扱う各部において具体的に記されている。

以上のうち、執筆者として扱うべき研究者については、執筆者一覧に略歴等を掲載してある。

本書に掲載した画像の枚数と実際に解読した文書の点数は次表のとおりである。

ハラホト出土モンゴル文書（漢語・西夏語以外の文書）の影印数と解読文書数表

	影印枚数	言語の種類	解読点数	
ウイグル式モンゴル文字文書	101	モンゴル語	71	86
パクパ文字文書	71	モンゴル語	15	
ウイグル文字文書	16	テュルク語	16	16
チベット文字文書	5	チベット語	5	5

西夏文字・梵字文書	1	西夏語・梵語	1	1
アラビア文字文書	17	アラビア語	3	16
		ペルシア語	10	
		テュルク語	3	
シリア文字文書	1	シリア語	1	
	16	シリア語まじりテュルク語	10	11
合計	228			135

＊「アラビア文字ペルシア語文書」10点のうち、6点は漢語官文書末尾に記された「アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語の添書」、1点は漢語官文書末尾に記された「アラビア文字ペルシア語・テュルク語の添書」である。また「ウイグル式モンゴル文字モンゴル語文書」、「パクパ文字モンゴル語文書」の中にも漢語官文書末尾の添書と考えられるものがあるが、添書か否か判断の困難なものもある。そのため、これら全体に対して漢語官文書添書という分類項目を設けて括ることを避けた。

本書は、上述したように文書を言語別または文字別に分けて解読し、これらの文書のうち、解読した文書それぞれにローマナイズ、訳、注釈、解説を施し、言語または文字別に「はじめに」と索引を付した。索引は一括して巻末に配置した。

ローマナイズ、訳、注釈、解説の形式は全文書に共通するように努めたが、本書で扱っている文書が文字、言語ともに多様であることもあって、必ずしも意図するようにはならなかった。

本書に、全文書の画像の影印を載せた。それらは、原文書をスキャンしたものに基づいている。ただしモンゴル文書の最初の研究者であるイリンチン内モンゴル大学教授に研究を委ねられていたモンゴル文書のうちの5点が、同教授の没後に所在不明となり、今のところ見つかっていない。そのため、たまたまゼロックス=コピーされて残っていたものの写真を載せるよりほかなかった。文書番号 MON01、F116:W503、F214:W1、MON06、F21:W28 がそれらである。また影印には、小断片であったり判読困難であったりするために今回解読の対象からはずしたものが、相当数含まれている。

本書は、日本と中国のモンゴル史研究者の共同研究の成果であるから、モンゴル文書については、各文書について日本語と漢語の両方によって訳文・注釈・解説を付けた。またモンゴル文書の冒頭にある「はじめに」にも漢訳を付した。各モンゴル文書の漢語注釈は、基本的に日本語注釈を漢訳したものであるが、わずかであるが漢訳が付されていないものもある。また抄訳されたもの、書き加えのあるもの、厳密に漢訳していなかったり、日本語文とずれがあったりするものもあるが、注の趣旨に矛盾がなければ容認して、そのまま載せた。

なお本序文は本書全体に関わるものであるから、漢訳を付した。

ハラホト文書が元朝期の文書であることはすでに指摘されている。このことは、本書で扱った文書についても当てはまる。すなわち本書で解読された文書中、年代を知る手がかりとなる文言を含むいくつかの文書の年代は、1300年代前半から中ごろに関わるからである。

文書の内容を大まかに述べると、モンゴル文書は、穀物や家畜の貸借に関する契約文書、エチナ路総管府の官人等に下された命令文書、仏典や道教経典、暦断簡などである。以上のほかさまざまな文書があるが、内容を把握し難い断簡が多い。ウイグル文書は、納税や契約、商取引に関するもののほか、歴史的背景をもつ書簡や仏典関係のものがある。チベット文書は、チベット仏教の聴聞録である。西夏文字・梵字文書は、いくつかの陀羅尼が列挙される仏教文献の断片であり、梵字の

各陀羅尼の題名が西夏語で記されている。アラビア文字文書は、テュルク語の行政文書と思われるもの、漢語行政文書末尾の添え書きと思われるもの、ニザーミーのペルシア語叙事詩『フスラウとシーリーン』やスーフィー関係の書物などの一部と思われるものである。シリア文字シリア語文書は、シリア・キリスト教（いわゆるネストリウス派）の文書で、キリスト教の三一神関連の内容をもつ。シリア文字によるシリア語まじりのテュルク語文書は、新約聖書のマタイ福音書などの一節を引用している。

これらの文書以外に、漢字・漢語、西夏文字・西夏語の文書が多量に存在しているのであるから、当時のハラホトは、まさに多民族・多言語・多元社会というモンゴル帝国・元朝の様相が、そのまま凝縮されていたかのような状態であったことが伺われるのである。これらの文書は、モンゴル帝国・元朝期のモンゴルの歴史と文化にとってきわめて重要な資料であるのであり、本研究は、それらに対する基礎的研究を最初に行って学界に提示する意義をもつ。

本共同研究においてモンゴル文書以外の文書の研究に関わった研究者諸氏は、文書情報が不足し、また原文書を直接手にすることができない状態で、あるいは研究の時間が足りない中で、鋭意研究を進められ、本共同研究に協力を惜しまれなかった。ここに深甚なる謝意を表したい。

モンゴル文書研究について言うと、早稲田大学モンゴル文書研究班の研究は、最初早稲田大学の吉田研究室で行ったが、井上治、舩田善之の両名が途中で職を得て早稲田大学から遠隔の地に離れ、研究に影響が出た。そのため週に一度インターネットを使用しての研究会を開いて研究を続ける方法に変更した。これらの研究会において終始早稲田大学側の共同研究代表者の身近にいた永井匠が実務を執り行い、またモンゴル文書の研究、そして研究成果の取りまとめに力を尽くし、さらに内モンゴル大学側との連絡、モンゴル文書以外の言語・文字の研究成果の取りまとめにも努めた。このことを、ここに特記したい。また中国社会科学院民族学人類学研究所副研究員ムンフダライ氏にも、種々の点で協力いただいたことを記したい。

最後に、株式会社雄山閣宮田哲男社長に対して謝意を表したい。

＊本書は、平成19年度の科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けた学術図書である。

序　文

1983 年和 1984 年，中国内蒙古文物考古研究所与阿拉善盟文物考古站在内蒙古自治区阿拉善盟哈喇浩特（黑城）发现了约 3000 件元朝时期的文书（关于在此之前的哈喇浩特出土文书及其报告与研究方面，请参阅「蒙古文书」的「前言」部分）。这些文书，出土于哈喇浩特官厅遗址，以世俗文书为主。其中，公文书类为最多。另，在 3000 件文书中，汉文文书占三分之二以上。关于这些汉文文书，哈喇浩特文书的发掘负责人、内蒙古文物考古研究所的李逸友撰有报告书。在出土文书中，西夏文文书的数量占其次。西夏文文书，曾被委托给中国社会科学院的史金波来进行研究。

本书是对出土文书中，除汉文文书与西夏文文书以外的所有文书进行研究的成果。题目定为『哈喇浩特出土蒙古文书研究』，是出于如下两个方面的考虑。其一是，本书为早稻田大学和内蒙古大学对哈喇浩特出土蒙古文文书进行合作研究的成果。另一是，所研究的文书中蒙古文文书占了绝大多数。

本书是，由日本早稻田大学文学学术院教授吉田顺一作为早稻田大学方的研究代表，中国内蒙古大学蒙古学学院教授齐木德道尔吉作为内蒙古大学方的研究代表，构建合作研究体制，进行合作研究的成果。在此，首先介绍本次合作研究的情况。

吉田顺一很早就与内蒙古大学有交流。尤其是和该大学蒙古史研究所的亦邻真教授，早在 1981 年就开始了学术上的交往。1995 年访问该大学时，和当时在内蒙古社会科学院进行研究的井上治一起，受邀访问了亦邻真教授的住宅。在那个时候，我们才获悉亦邻真教授受托于内蒙古考古研究所，对哈喇浩特出土文书进行研究。于是，就询问了研究的内容以及进展情况。亦邻真教授恳切地向我们做了说明，并拿出十几片文书的复印件，且允许我们拿在手里看。文书中，有数张大约有 B4 或 A3 规格大小。虽然是复印件，但我们被那些用回鹘式蒙古文较大字体书写的文书所震惊了。从那以来，对哈喇浩特文书一直抱着很强的关心。遗憾的是，还未等研究成果问世，亦邻真教授却于 1999 年春天逝世了。我们曾非常担心该文书研究的去向。

在那不久之后的同年 9 月，吉田顺一邀请内蒙古社会科学院历史研究所乔吉研究员来早稻田大学进行为期 1 年的研究时，从他得知哈喇浩特文书的研究转到当时为内蒙古大学蒙古文化研究所所长的齐木德道尔吉教授那里。又获悉当时该教授正忙于新发现的清朝初期蒙古文档案的研究与刊行工作，因此到 2001 年夏天为止，很难抽出时间从事哈喇浩特文书的研究。吉田和齐木德道尔吉教授是故知，甚至曾想过邀请该教授来日本进行有关蒙古史方面的合作研究。然而，又担心哈喇浩特文书的研究受到延误，于是和当时为早稻田大学文学部非常勤讲师的井上治商量之后，最终做出了和齐木德道尔吉教授合作对哈喇浩特文书进行研究的决定。2000 年 3 月，把我们的想法转达给该教授，并幸运地得到了他的私下同意。

从此，我们就合作研究的方法交换了意见，选定了早稻田大学方的研究人员与内蒙古大学方的研究人员。同年 10 月 13 日，前往北京会见齐木德道尔吉教授，就合作研究达成了最终的共识。

在那之后，吉田顺一、井上治、永井匠组织了蒙古文文书研究班，于 2001 年 8 月上旬访问了内蒙古大学，就合作研究事宜，再度进行磋商。为了合作研究的顺利进行，我们也曾请求李逸友的考古报告能够迅速刊行。于是，我们初次会见了李逸友，向他直接说明了我们和齐木德道尔吉教授之间进行的协商、以及合作研究的准备情况。以合作的方式来促进研究的设想，曾得到他的认可。

进入这一阶段之后，吉田顺一和齐木德道尔吉起草有关合作研究的协议书，并于 2001 年 11 月 27 日签署。协议的主要内容为，由吉田顺一来获得研究经费和出版经费。用获得的经费，与内蒙古大学进行合作研究以及刊行研究成果。吉田顺一于协议书生效之前，就依照合作研究协议的内容，获得了

2001年度与2002年度的早稻田大学特定课题研究资助费。后来，根据协议书又获得了2002年度至2005年度的日本学术振兴会科学研究费补助金、以及2007年度的日本学术振兴会研究成果公开促进费。

缔结协议书的同时，一部分文书的照片被送到早稻田大学方，合作研究开始启动。同时，委托齐木德道尔吉教授对文书进行彩色摄影以及提供胶片，早稻田大学蒙古文文书研究班的三人于2002年3月前往内蒙古大学，从齐木德道尔吉教授获取胶片，研究从而进入了正式阶段。

需要注明的是，在事前准备的过程中，当时为早稻田大学大学院文学研究科博士后期课程学生的索罕·格日勒图（现为内蒙古农业大学副教授）曾发挥重要作用，对本研究的实现做出了贡献。

该研究，以早稻田大学蒙古文文书研究班为主导，并和内蒙古大学方携手，推进了蒙古文文书的研究。与此同时，将蒙古文以外的文书，委托给日本学者来进行研究。并根据各个承担人提出的疑问，进行对文书原物的调查以及重新拍照等，来协调了文书研究的全盘。承担研究蒙古文以外文书的人员，各自尽力解读文书，根据需要征得有关研究人员的协助，来推进了研究。

早稻田大学蒙古文文书研究班，每年访问呼和浩特一至两次，以和内蒙古大学方进行磋商、解读文书、调查文书原物、重新拍摄照片等，推进了合作研究。

下面将记述发生于该过程的几件事情。

第一，非常遗憾的是，李逸友在合作研究开始不久就去世了。因此，作为合作研究对象的、包括蒙古文文书在内的文书之考古报告的刊行拖延，这对我们的研究以及成果的公布产生了影响。具体而言，对文书解读非常重要的，关于文书发掘的地点及其状况、以及纸墨种类等情况无从了解。对各种文书规格的大小，最初也不清楚。早稻田大学蒙古文书研究班曾向齐木德道尔吉教授数次请求提供资料，努力获得这些资料，但最终未能实现。

第二，2003年，曾调查内蒙古文物考古研究所保管的未经处理的文书小断片，从中选出了认为有可能成为研究对象的14件，委托该研究所保存处理。第二年，对保存处理完的文书进行了探讨，可是一件也未能解读出。这些文书小断片的影印件已收录于本书。

第三，该研究，当初根据内蒙古大学方提供的消息，主要以蒙古文文书为主、同时涉及少量的回鹘文文书和藏文文书而出发的。可是收到内蒙古大学方送来的照片之后，才知道如同下面将记述的那样，其它文种的文书也包含在里面。为此，便发生了强化研究体制的需要。这样，参加解读的学者也逐渐增加。就早稻田大学的蒙古文文书研究班而言，从2004年开始，增加了舩田善之（九州大学人文科学研究院专任讲师），加强了研究体制。

2005年，是根据日本学术振兴会科学研究费补助金立项研究的最终年度。因此，2006年3月，完成题为『哈喇浩特出土文书（蒙古文）的研究』的研究成果报告书，提交日本学术振兴会。同年5月，早稻田大学蒙古文文书研究班的全体成员赴内蒙古大学，12日和内蒙古大学方召开了合作研究成果报告会（在中国的称呼为：中日合作“黑城出土元代蒙古文文献研究”项目结题报告会）。

从此之后继续进行研究。本书就是对这一研究成果的总结。

该研究之很大的特点在于，文书之语言与文字种类的多样性。直到实际启动合作研究为止，早稻田大学方并未见过这些文书。当初，文书被说明为蒙古文文书为主、其中含有少量的回鹘文文书和藏文文书。可是，缔约协定并收到文书照片之后，才知道其中还有阿拉伯文文书以及陌生文字的文书等。并经过调查，才判明了那些陌生文字的文书是叙利亚文文书。不仅如此，在研究进展的过程中，还判明了叙利亚文文书中，有夹杂叙利亚语的突厥语文书。另外，判明了当初被分类成藏文文书的文书中含有西夏文以及梵文的文书。还判明了阿拉伯文文书中不仅有波斯语文书，还有阿拉伯语文书和突厥语文书。因此，关系到了相当人数的学者。

在他们当中，应列举姓名的学者如下。

关于蒙古文文书的为，吉田顺一、井上治、永井匠、舩田善之、齐木德道尔吉、乔吉、乌云毕力格、

宝音德力根。

关于回鹘文文书的为，梅村坦、松井太。关于用叙利亚文字书写的、夹杂叙利亚语的突厥语文书的为，梅村之外，还有派塔·茨默（Peter Zieme）、武藤慎一。这一组的负责人是梅村坦。

关于藏文文书的为，武内绍人、石滨裕美子。开始时石滨裕美子也参与，后来主要是武内绍人进行了正式的研究。

关于西夏文·梵文文书的是荒川慎太郎。

关于阿拉伯文文书的为，宇野伸浩、矢岛洋一、磯贝健一、松井太。这一组的负责人为宇野伸浩。

叙利亚文文书之中，关于叙利亚语的是武藤慎一。

上述各组的负责人与其他学者之间协作关系的实际情况，已在各个文书的相关部分予以记载。

在以上各位之中，做为执笔者的学者，在执笔者介绍里载有简历。

书中所录影印的件数以及实际解读文书的件数如下表。

哈喇浩特出土蒙古文文书（汉语·西夏语之外文书）的影印件数与解读文书件数表

	影印件数	语言种类	解读件数	
回鹘式蒙古文文书	101	蒙古语	71	86
八思巴文文书	71	蒙古语	15	
回鹘文文书	16	突厥语	16	16
藏文文书	5	藏语	5	5
西夏文·梵文文书	1	西夏语·梵语	1	1
阿拉伯文文书	17	阿拉伯语	3	16
		波斯语	10	
		突厥语	3	
叙利亚文文书	1	叙利亚语	1	11
	16	夹杂叙利亚语的突厥语	10	
合计	228			135

*「阿拉伯文波斯语文书」的 10 件文书中，6 件是写在汉语官文书末尾的「阿拉伯文叙利亚语·八思巴文蒙古语的跋文」，1 件是写在汉语官文书末尾的「阿拉伯文波斯语·突厥语的跋文」。另外，「回鹘式蒙古文蒙古语文书」和「八思巴文蒙古语文书」之中，也有被认为写在汉语官文书末尾之跋文的。然而，这些是否是跋文，却难于判断。因此避免了设立汉语官文书跋文的分类项目。

正如前所述，该研究将文书按语言或文字进行分类解读，对解读的文书进行了罗马字转写、翻译、注释、解说。还按文书的语言文字类别附了「前言」和索引。索引一并置于卷末。

书中，曾试图做到罗马字转写、译文、注释、解说等形式在全书中的统一。然而，本书所涉及的文书之语言与文字的多样性，因此未必能如愿以偿。

书中收录了所有文书的影印件，这些为根据文书原物进行扫描而成的。但是被委托给蒙古文文书最初的研究者、内蒙古大学教授亦邻真的蒙古文文书之中的 6 件，在该教授逝世之后下落不明，至今仍未找到。所以，插载了偶然用静电印刷复制机复制的照片，别无他法。那些文书的编号为 MON01、F116:W503、F214:W1、MON06、F21:W28。另，本书所收录的影印件之中，包括了相当数量的、因为是小断片或者辨认困难而被排除于解读对象之外的文书的影印件。

因为本书是日本和中国的蒙古史学者共同研究的成果，所以，对蒙古文文书均附加了日语和汉语两种语言的译文·注释·解说。而且，将蒙古文文书的「前言」部分也译成了汉语。各个蒙古文文书的汉语注释，基本上是对日语注释的汉译。只有少量部分没有附加汉译。另外，抄译、添写的部分有的

没有严密进行汉译，和日文部分稍有差异。如果不与注解的宗旨产生矛盾的话，就容许予以附加。

因为该序文涉及到本书的全体内容，所以也附加了汉译。

曾被指出的那样，哈喇浩特出土的文书是属于元朝时期的文书。这一说法也适合于本书所涉及的文书。这是因为，本书所解读的文书之中，从能够窥见其年代线索的若干件文书来看，其年代属于1300年代前叶至中叶。

如果大体阐述文书内容的话，蒙古文文书是关于谷物与家畜借贷方面的契约文书；向亦集乃路总管府的官人等下达的命令文书；佛教经典和道教经典；历书的断简等。除此之外，还有各种各样的文书，难以把握内容的断简居多。回鹘文文书是，除了关于纳税与契约、商品交易之外，有历史背景的书简和佛教经典。藏文文书有，藏传佛教的听闻录。西夏文字・梵字文书是，列举若干陀罗尼的佛教文献之断片，梵字的各个陀罗尼的题名用西夏语记录。阿拉伯文文书为，被认为是突厥语的行政文书和汉语行政文书末尾的跋文、以及内扎米的波斯语叙事诗『霍斯陆与西琳』、以及有关伊斯兰教神秘主义斯非的书之一部分等。用叙利亚文字写的叙利亚语文书中、有叙利亚基督教（所谓的景教派）方面的文书，其中包括有关基督教三一神的内容。用叙利亚文字写的、夹杂有叙利亚语的突厥语文书，引用了新约圣书的马太福音书的一节等。

除了这些文书以外，还大量存在汉字和汉语、西夏文字和西夏语的文书，因此从中可以窥见到当时的哈喇浩特所具有的、多种民族・多种语言・多元社会的蒙古帝国・元朝之状况被凝缩的情景。这些文书，对研究蒙古帝国・元朝时期的历史与文化，成为极其重要的资料。该研究，对这些文书进行了最初的基础性研究，将具有对学术界起到提示的意义。

该合作研究中，参与蒙古文书以外文书的各位，在文书方面的信息不足，且不能直接使用原件、研究时间有限等情况下，锐意进取、不惜余力地协助了研究。在此向他们深表谢意。

说起蒙古文文书的研究，早稻田大学的蒙古文书研究班，当初是在早稻田大学的吉田研究室里开展研究的。可是后来，由于井上治和舩田善之二人就职，去了离早稻田大学很远的地方。所以，研究受到了影响。于是，变更了研究方式，即使用网络每周召开一次研究会的方式，来继续进行研究。需要特此记载的是，在此期间，在早稻田大学方面合作研究代表人之身旁的永井匠，执行了实际业务。并且，他还在蒙古文书的研究、以及研究成果的汇总方面尽心尽力，还和内蒙古大学方的联系，以及蒙古文以外语言文字文书之研究成果的汇总等方面，也做出了很大的努力。另外，还应记载的是，在各种方面曾得到中国社会科学院民族学与人类学研究所副研究员孟达来的协助。

最后，向雄山阁股份公司的宫田哲男社长深表谢意。

＊本书是获得平成19年度科学研究费补助金（研究成果公开促进费）的学术图书。

凡　例

ローマナイズに関するもの

{}	正書法上、または文脈上不要であるが、綴ってある文字。
< >	正書法では必要であるが、綴ってない文字。
///	テキストが破損していることを示す。破損箇所の大小にかかわらず、/ は三つで表す。
[]	テキスト破損部分を復元した綴り。
(/)	ローマナイズに複数の可能性があるもの。
?	文字が書いてあることは確認できるが、判読不能であることを示す。?の数は判読不能の文字の長さに合わせる。
()	推測を含む案を示した箇所、またはローマナイズに疑問の残ることを表す。蓋然性が低い場合は?を付す。
＼abc／	追記してあるとみなせる語句。
|	パクパ文字で続けて表記されているが、分けて解釈して読んだもの。

和訳に関するもの

…	判読不能或いは破損により文意が取れないことを表わす。
[ ]	テキスト破損箇所を復元した部分の和訳。
(/)	和訳に複数の可能性があるもの。
【 】	翻訳者による補足・説明・言い換え。
( )	テキストに推測を含むため試訳を示した箇所、または和訳に疑問の残る箇所を表す。蓋然性が低い場合には、？を付す。
→	前行の末尾から次行の冒頭へ意味がかかることを表わす。
←	次行の冒頭から前行の末尾に意味がかかることを表わす。

ローマナイズ・和訳どちらにも係わるもの

※	ニシャン（花押）

なお、正式な文書番号が不明である文書は、モンゴル文書は MON01、MON02……、チベット文書は TIB01、TIB02……、アラビア文字文書は ARAB01、ARAB02……、シリア文字文書は SYR01、SYR02 と仮に文書番号を付した。

凡　例

罗马字转写方面:

{}	正字法上，或者上下文的联贯性上不需要，但有记写的文字。
< >	正字法上有必要，但未记写的文字。
///	表示文本有破损。无论破损处的大小如何，均用三个 / 来表示。
[]	文本破损之处的复原字样。
(/)	罗马字转写有数种可能性。
?	能够确认有文字，但不能辨认的部分。？的数则表示不能辨认文字的长度。
()	表示含有推测之处或者罗马字转写有疑问的地方。可能性较小的场合，付“？”。
\ abc /	认为被追记的语句。
|	表示分开解读用八思巴字连续拼写的地方。

日译方面:

…	表示不能辨认或者因受破损而文意不明。
[ ]	文本破损之处复原部分的日译。
(／)	日译上有数种可能性。
【 】	译者的补充・说明・换言。
( )	表示对文本中的推测部分所进行的试译，或者表示日译文中尚有疑问。可能性较小的场合，付“？”。
→	表示从前一行的末尾到后一行的开头有意义上的关联。
←	表示从后一行的开头到前一行的末尾有意义上的关联。

罗马字转写和日译方面:

※	手印（花押）

另外，对正式文书编号不明的文书，则编排了临时的文书编号。如：蒙古文文书为 MON01、MON02……，藏文文书为 TIB01、TIB02……，阿拉伯文文书为 ARAB01、ARAB02……，叙利亚文文书为 SYR01、SYR02 等。

第一部　モンゴル文書

はじめに

ハラホト遺跡からは 1900 年代初頭にロシアのコズロフ隊が大量の文書を発見している。とくに 1909 年の探検・発掘では、2000 点以上の文書類や数百点の仏教関係の遺物（仏画など）が発見され、ロシアにもたらされた。また、スタイン隊の 1914 年の発掘によっても少なくない文書が獲得された。さらに中国の西北科学考査団（1927 年）、内モンゴル文物工作隊（1962 年、1963 年）、甘粛省考古隊（1976 年、1979 年）の発掘調査でも、幾ばくかの文書が獲得されたようである。

このように獲得されたハラホト出土文書の多くは、すでに知られているように、漢文と西夏文のものである。その全体像は、徐々にしかも確実に、『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏黑水城文献』1-12（上海古籍出版社、1996-）や『英國國家圖書館藏黑水城文献』1-4（上海古籍出版社、2005-）、『黑城出土文书（汉文文书卷）』（科学出版社、1991）によって、広く研究者に知られるようになってきた。また、内モンゴル隊発見の西夏文文書は、中国の西夏研究者の手にゆだねられたと聞くが、それは『中國藏西夏文献』1-20（敦煌文藝出版社、2007-）のなかの内蒙古編に収められ広く公開されるものと思われる。また、これら漢文・西夏文出土文書を用いた研究はすでに数多くある。

漢文・西夏文に比べて数量の点ではるかに少ないモンゴル語文書の研究は、それほど盛んであるとは言えない状況にあったと言えよう。これは、ベルリン・コレクションのトゥルファン出土モンゴル語文献の研究と比較してみると一層際だつ。

ここで、本共同研究に至るまでの、先古典期に属するモンゴル語出土文献研究の流れを大きく捉え、本共同研究が扱うモンゴル語出土文献の研究を位置づけてみたい。

ベルリン・コレクション中のトゥルファン出土モンゴル語文書研究には、これまで、ラムステット、ポッペ、フランケ、アアルト、カラ、ハザイ、ツェレンソドノム、アルタンゲレル、タウベ、ヴァイアースなどの研究者が関わってきたが、学界にたいする貢献の点では、1950 年代にベルリン・コレクション中のトゥルファン出土モンゴル語文書の写真を刊行したヘーニッシュの業績の右に出るものはない（Haenisch 1959）。言うまでもなく、それまでにも『元朝秘史』や『エルデニ・イン・トプチ』、『アルタン・トプチ』の諸本をはじめとした文献資料は決して少なくなかった。しかし、『元朝秘史』に並ぶ時代の、ウイグル文字で書かれ、しかもトゥルファンという実際の地域社会で相応の機能を果たした資料群の写真がまとめて刊行されたことの意義は大きかった。この意味で、モンゴル語の古文献・古文書の欠乏状態を相当に解消したとも言えよう。ごの時期には、すでに世界各所からモンゴル語古文献・古文書が開拓・発見され、その研究も行われてはいたが、ヘーニッシュの業績は、モンゴル研究における一種の衝撃であった。

ヘーニッシュの業績以降、上掲の研究者らに加え、リゲティ、クリーヴス、ハイシッヒ、デルファー、モスタールト、リンチェン、ダムディンスレン、ロブサンバルダン、イリンチン、包祥、ジョーナスト、ハスエルデニ、村山七郎、小澤重男などの研究によって一層の進展を見、モンゴルの言語学、仏教学、文学の研究に大きな進展をもたらした。なお、こうした諸業績のかなりの部分は、リゲティの手によって Monumenta linguae mongolicae collecta とその索引編 Indices verborum linguae monumentis traditorum としてまとめて収められ、研究者に便宜を与えた。本書で取り扱っているモ

ンゴル語文書の解読と分析に当たっては、このリゲティの業績のうち、Ligeti (1972a-c) と Ligeti (1973) に負うところが極めて大きい。なお、最近、モンゴルのトゥムルトゴーがリゲティの集成と発想や構成をほぼ同じくするウイグル文字モンゴル語資料集成を刊行した (Tumurtogoo 2006)。これには、新たに発見され研究された文献やオロンスム文書の一部が収載されているほか、索引も充実しており、関連の研究者にまた一つ有益な資料が増えた。

これらヘーニッシュの業績とその衝撃が一段落を迎えたかに見えた1990年代に入り、モンゴル学界はまた大きな刺激、あるいは研究上の便宜を受けることになった。モンゴル人民共和国でヘーニッシュの衝撃をもっとも強く受けたツェレンソドノムが、タウベと共同で、それまでの関連の研究を総合し、モノクロではあるが鮮明な写真を添えた研究を刊行した (Cerensodnom, Taube 1993)。これは、ヘーニッシュの衝撃とは異なった形での新たな影響を学界、とくに新しい世代のモンゴル、中央アジア研究者に与えた。たとえば日本では、この労作に書評を寄せた松川節 (松川節 1995) や、モンゴル国で先古典期モンゴル文字資料集を刊行したジャンチヴ (Жанчив 2005) などに代表される新しい世代の研究者のみならず、モンゴルの言語学界の頂点に立つトゥムルトゴーの上掲資料集成にも新鮮な刺激と研究意欲を与え、その精力的なモンゴル語古資料・古文献への取り組みの源泉や促進剤となったと言えるのではなかろうか。

モンゴル語古文献・古文書研究に更なる展開を期待させるもう一つの出来事が、1990年代に明らかになった。それは、中国内モンゴル自治区オルドス市 (旧イェヘ・ジョー盟) オトク旗にあるアルジャイ石窟に記されたウイグル文字モンゴル語の題記に関するハスエルデニらのモノグラフ (Qaserdeni, Danzan 1997) の刊行である。このモノグラフで扱われている題記は、元朝期をやや降る時期のものである可能性が指摘されており、あるいは先古典期から古典期への移行過程にある時期のモンゴル語、モンゴル文字の様相を呈していることが考えられる。また、元朝北遷後のハラホトからモンゴル言語文化が一挙に消滅したとは考え難く、漢文文書には、いわゆる北元期にかかるものではないかと思われる文書がある。以上から、北遷から時期的に遠くない時期に関わるであろうと思われる当該石窟のモンゴル文題記は、今後の研究の深化が大いに期待されるものである。なお、当該モノグラフには、紙に書かれた文書の類は収められてはいないが、そうした種類の文書がいずれは発見されることを大いに期待させるものであった。

1990年代にはトゥルファン以外からも、断片的ではあるが、刺激的な情報をもたらした個別の研究によって、モンゴル語古資料・古文書が、鮮明な形でわれわれにもたらされた。それは、『西藏歷史檔案薈萃』におさめられた八点のパクパ字モンゴル語文書である (“出土文書の大量公開”という上述のヘーニッシュの業績とは性格を異にするが)。この『西藏歷史檔案薈萃』刊行の前提として、パクパ文字研究の第一人者ジョーナストの存在を忘れることはできない。ジョーナストのチベットにまで及ぶ精力的な資料探求とそれにもとづく研究業績 (照那斯图 1990) と合わせて、40点に及ぶパクパ文字モンゴル語文献資料集 (照那斯图 1991) が刊行されたことは、ポッペの業績 (Поппе 1941) 以来、石刻資料中心であったパクパ字モンゴル語資料に加え、チベットに然るべき量のモンゴル語文書資料が存在することを総括的にわれわれに示したのである。ジョーナストの資料集に収められた資料原件の写真はあまり鮮明なものではなかったが、『西藏歷史檔案薈萃』にその一部が見事なカラー写真で収められ、関連の研究者に大いに歓迎されている。

さらにもう一点、とくに漢地に広く分布する、石刻上のモンゴル古文、とくに蒙漢合璧碑文の存在も指摘しなければならない。この方面では、クリーヴスが長年積み重ねてきた業績を最初にあげるべきであろうが、1990年代の動きとして指摘しておきたいのは、杉山正明の蒙漢合璧碑文への一連の取り組みである (杉山正明 1990；1991)。もちろん杉山以前にも蒙漢合璧碑への取り組みはあった。また、杉山の研究は、蒙漢合璧碑を個別に扱ったものであり、“出土文書の大量公開”とはやはり性格を異にする。しかし、杉山の取り組みが、日本におけるその後の“大元ウルス”期の一次資料探求熱の起爆剤になったと思われることと、そこで示した研究方法が中村淳と松川節の研究 (中村淳、松川節 1993) などに十分に吸収されていると思われることに、その意義を見出すのである。

今世紀に入っても、モンゴル語古文献・古文書研究に一層の展開を期待させる公刊がなされている。その第一は、2000年から2004年にかけて刊行された敦煌莫高窟北区石窟の調査研究報告書『敦煌莫高窟北区石窟』(第一〜三巻)である。そこにはモンゴル語出土資料が紹介されており、この釈読に当たったガルディは、ウイグル文字とパクパ字によるモンゴル語出土資料50点余りを発表した。

また、上述したアルジャイ石窟の研究にも進展が見られた。同石窟の研究を積極的に推進している巴図吉日嘎拉らが紹介したところでは(巴图吉日嘎拉、杨海英 2005：2006)、かなりの量の紙を材料とする断簡が発見されているようである。公開された断簡はどれも経典の断簡であるが、このほかにも公開されるに至っていないアイテムがあるとのことである。今後の公開と研究の進展が期待されるところである。

さらに、パクパ文字モンゴル語資料の点では、フグジルトらの労作(呼格吉勒图、萨如拉 2003)が現れた。この中には、上記のポッペ、ジョーナストらが公開した資料以外の新しい資料が含まれており、中に本書でも取り扱っているハラホト出土の文書も含まれている。この資料集成の刊行は、新発見資料の大量公開というわけではないが、今後の研究者に多大な便宜を与えるものと評価できるであろう。

本共同研究の発端は、1995年の夏にさかのぼる。すでにそれ以前に吉田順一も井上治も、内モンゴル大学のイリンチン教授から個別にハラホト出土文書に関する情報を得ており、両人は、1995年にそのモンゴル語文書がイリンチン教授の手元に保管されていることを確認したのである。この早稲田大学と内モンゴル大学の共同研究は、内モンゴル大学側の代表者チメドドルジ教授とその共同研究者によるイリンチン教授の遺作整理という準備段階を含めて10年以上の歳月を要したが、早稲田大学側の吉田順一と井上治の立場からその発端を回顧すれば、両大学の本共同研究は、上に記した1990年代初頭からの一次資料探求熱の一連の流れ、とくに1991年の『黑城出土文书(汉文文书卷)』によって高められたハラホト文書への熱い興味がその背景にあったといえる。

上に、ハラホト出土の文書のうち、漢文・西夏文文書に比べて数量の点ではるかに少ないモンゴル語文書の研究は、それほど盛んであるとは言えない状況にあったと記した。しかし、旧ソ連のレニングラード(現サンクトペテルブルク)に所蔵されているハラホト出土モンゴル語文献の情報については、ハラホト発掘に当たったコズロフの旅行記(Козлов 1923)に採録されているコトヴィチの初歩的分析報告により、全17点のおおよその内容が知られていた。また、1914年のスタイン隊によって発掘されたものは、Stein (1928)に一点の写真が載せられている。こうした初歩的な情報が本格的な研究へと展開するのは、(旧)ソ連科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支所蔵のモンゴル語文献に精通していたプチコフスキーが、ごく簡単な関連情報を一葉の契約文書原件(G106)の写真とともに明らかにしたことにはじまる(Пучковский 1954: 90-127)。旧ソ連蔵ハラホト出土モンゴル語文献研究の本格的な研究の第一歩としての地位を占めるクリーヴスの研究(Cleaves 1955)は、この旧ソ連発の関連情報に敏感に反応した1950年代の研究であった。クリーヴスののち、旧ソ連蔵ハラホト出土モンゴル語文献に関する研究はしばらく現れなかったが、1970年に、モスクワのムンクーイェフが二葉の刻本断簡に関する研究を写真付きで発表し(Munkuyev 1970)、1972年にはカラがクロートコフ・コレクションの一点の命令文(G120)のテキストを公刊した(Kara 1972)。旧ソ連から発表されたものは上の四点にとどまり、その後しばらくの間、旧ソ連蔵ハラホト出土モンゴル語文献の研究は現れなかった。

一方の中国では、1970年代の甘粛省考古隊による出土物の中の文書が一点紹介されたのみであった(陈炳应 1983)。この状況は、現物はあるが公開と研究が十分とはいえなかった旧ソ連とは異なり、紹介すべきモンゴル語文献が出土していなかったことによるものと考えてよいであろう。この状況が大きく変わったのは、上述した1983年から1984年の中国内モンゴル文物考古研究所・阿拉善盟文物考古站による発掘調査で大量の出土物が獲得され、そのうちの漢文文書の一部が、『黑城出土文书(汉文文书卷)』にテキストならびに写真付きで明らかにされたことによる。この『黑城出土

文书（汉文文书卷）』に収められた漢文文書には、蒙漢合璧のものがあり、これに着目したのが、松井太（1997）である。さほどに鮮明とはいえない写真をもとに精緻な考察をおこなった松井の業績は、内モンゴル蔵ハラホト出土文書研究の新たな展開を約束するものであったと同時に、すでにイリンチン教授の手にあるハラホト出土モンゴル語文献の存在を知り、その共同研究への準備を進めていた吉田と井上にとって新鮮な刺激となったばかりでなく、その後結成された本共同研究グループの研究においても参照されたのである。

松井は上掲論文の註3)において、コズロフ将来のハラホト出土モンゴル語文献の研究を、同支所のウスペンスキー氏らと共同で進める旨を明らかにした。コズロフ将来のハラホト出土モンゴル語文献は、本共同研究においても、参照し比較対照すべきアイテムであると位置づけていたものであったため、実にタイミングのよい情報であった。2000年11月、松井は日本モンゴル学会秋季大会において、「カラホト出土モンゴル語文献」と題して報告を行い、その研究の一端を公にした。これをうけてわれわれは、その本格的研究成果の公開も時間の問題であると判断して待った。この間、2003年に、カラがコズロフ将来のハラホト出土モンゴル語文献の研究を発表した（Kara 2003. この文献の入手に当たり大谷大学の松川節氏にお世話になったことを特に記して謝意を表する）。これには、すでに公刊され研究された文書を含め、G111、G110 *recto*、G110 *verso*、G122 *recto*、G113、G121、G114、G119、G118、G107、G112、G106、G108、G109、G120 *recto*、G120 *verso*（ウイグル語）、G115、G117、G116が扱われており、いずれの文書も写真が掲げられている。これは、ハラホト出土モンゴル語文書の研究史上、文字通りの最大の業績であり、本研究においても、破損した部分の解読や解釈の助けになった。なお、このカラの研究はのちに漢訳本が刊行されている（卡拉 2006）。カラによって、コズロフ将来のハラホト出土モンゴル語文書が写真付きで公開されたことは、ハラホト出土モンゴル語文献研究の進展はいうまでもなく、モンゴル研究の発展にとって記念すべき出来事であることは間違いない。しかし、上掲の松井による報告では、1062行もの内容を有する暦占冊子の存在が報告されているが、それはこのカラの研究には含まれていない。松井をはじめとする研究グループ、あるいはカラによって、この冊子の研究成果が発表されることを鶴首して待ちたい。

モンゴル語文書については、解読した全文書を1.契約文書、2.行政文書（2-1.ウイグル式モンゴル文字文書、2-2.パクパ文字文書）、3.宗教文書（3-1.ウイグル式モンゴル文字文書、3-2.パクパ文字文書）、4.その他（4-1.ウイグル式モンゴル文字文書、4-2.パクパ文字文書）に分類し、それぞれの分類の中では、行数の多い順に文書を配列した。

文書番号HF125a～HF125dの文書（「3-1.ウイグル式モンゴル文字文書」に分類）は一連の文書と考えられるので、行数の多寡にかかわらず、写真番号順に配列した。

文書番号不明の文書については、MON01, MON02……のように順番に仮の文書番号を付した。

ウイグル式モンゴル文字の転写はリゲティ式（Ligeti 1972a参照）に拠り、パクパ文字の転写は以下の表で示す転写方式に拠った。

パクパ文字（子音字）の転写（八思巴文字（辅音字）的转写）

パクパ文字 (八思巴文字)	別字 (别字体)	転写字 (转写字母)
ꡀ		k
ꡁ		k‘
ꡂ		g
ꡃ		ŋ
ꡄ		č
ꡅ		č‘
ꡆ		ǰ
ꡇ		ñ
ꡈ		ṭ
ꡉ		ṭ‘
ꡊ		ḍ
ꡋ		ṇ
ꡌ		t
ꡍ		t‘
ꡎ		d
ꡏ		n
ꡐ		p
ꡑ	ꡬ	p‘
ꡒ		b
ꡓ		m
ꡔ		c

パクパ文字 (八思巴文字)	別字 (别字体)	転写字 (转写字母)
ꡕ	ꡭ	c‘
ꡖ		j
ꡗ	ꡮ	w / v
ꡘ		ž
ꡙ		z
ꡚ		‘
ꡛ		y
ꡜ		r
ꡝ		l
ꡞ		š
ꡟ		s
ꡠ		h
ꡡ		q
ꡢ		γ
ꡣ	ꡯ	f / hu̯
ꡤ		ʁ
ꡥ		i̯
ꡦ		
ꡧ		u̯
ꡨ		r

パクパ文字（母音字）の転写（八思巴文字（元音字）的转写）

語頭 （词首）	語中 （词腰）	転写字 （转写字母）
		a
		e
		ö
		ô
		ü
		u
		ė
		ė
		i
		o
		ô
		î
		ê
		ï
		qā
		gē
		dū
		ai

語頭 （词首）	語中 （词腰）	転写字 （转写字母）
		oi
		ei
		ei̯
		ui̯
		üi̯
		dua/ua

パクパ文字（韻母）の転写（八思巴文字（韵母）的转写）

韻母 (韵母)	文字
a	○
am	○
an	○
aŋ	○
aw	○
ay	○
e	○
eė	○
eėn	○
ei	○

韻母 (韵母)	文字
eiŋ	○
eim	○
eiw	○
em	○
en	○
eŋ	○
eon	○
eu	○
euė	○
eum	○

韻母 (韵母)	文字
eun	○
euŋ	○
ew	○
ey	○
ė	○
ėm	○
ėn	○
ėw	○
i	○
i̯a	○

韻母 (韵母)	文字
i̯am	○
i̯an	○
i̯aŋ	○
i̯aw	○
i̯ay	○
iiŋ	○
i̯uė	○
im	○
in	○
iŋ	○

韻母(韻母)	文字
u̯n	○
u̯o	○
u̯ow	○
u̯u	○
u̯un	○
u̯uŋ	○
u̯uw	○
u̯w	○

韻母(韻母)	文字
u̯aŋ	○
u̯am	○
u̯an	○
u̯aw	○
u̯ay	○
u̯e	○
u̯en	○
u̯ė	○
u̯i	○
u̯in	○

韻母(韻母)	文字
o	○
on	○
oŋ	○
u	○
uė	○
un	○
uŋ	○
uw	○
uia̯n	○
u̯a	○

韻母(韻母)	文字
iw	○
iy	○
i̯a	○
i̯am	○
i̯an	○
i̯aŋ	○
i̯aw	○
i̯ay	○
i̯iŋ	○
i̯uė	○

モンゴル文書文書番号・整理番号対照表（蒙古文文书的文书编号・整理编号对照表）

文書番号（文书编号）	整理番号（整理编号）
84H・F116:W212/1384	No.076
84H・F116:W505/1677	No.047
84H・F116:W507/1679	No.080
84H・F116:W510/1682	No.045
84H・F116:W511/1683	No.023
84H・F116:W514/1686	No.044
84H・F116:W518/1690	No.043
84H・F116:W519/1691	No.046
84H・F116:W584/1758	No.042
84HF84	No.026
84HFA205	No.041
ARAB01	No.118
F9:W31b	No.016
F9:W57	No.062
F14:W15	No.073
F14:W16	No.020
F17:W9	No.011
F19:W72a	No.078
F19:W72b	No.079
F20:W64	No.059
F21:W27	No.075
F21:W28	No.074
F29:W1	No.010
F41:W10	No.082
F41:W11	No.069
F42:W1	No.068
F42:W3	No.065
F43:W23	No.030
F61:W6	No.002
F61:W9	No.001
F62:W19	No.007

文書番号（文书编号）	整理番号（整理编号）
F79:W5	No.014
F79:W6	No.006
F79:W7	No.012
F111:W1	No.083
F111:W2	No.036
F116:W2	No.071
F116:W29	No.038
F116:W62	No.034
F116:W92	No.037
F116:W96c	No.112
F116:W169	No.052
F116:W204	No.018
F116:W213	No.039
F116:W349	No.029
F116:W454	No.040
F116:W503	No.031
F116:W512	No.032
F116:W521	No.021
F116:W544	No.113
F116:W556	No.114
F116:W565	No.115
F116:W566	No.116
F116:W572	No.024
F116:W595	No.022
F116:W728(W554)	No.048
F124:W1	No.015
F135:W80	No.008
F137:W1	No.084
F144:W3	No.025
F144:W4	No.067
F155:W11	No.061
F192:W1	No.063
F197:W30	No.081

文書番号（文书编号）	整理番号（整理编号）
F197:W32	No.049
F209:W67	No.035
F209:W68	No.017
F209:W69	No.003
F210:W23	No.060
F210:W24	No.050
F211:W2	No.077
F214:W1	No.033
F224:W3	No.013
F234:W1	No.064
F245:W5	No.066
F250:W3	No.009
HF125a	No.055
HF125b	No.056
HF125c	No.057
HF125d	No.058
HF197B	No.028
MON01	No.004
MON02	No.005
MON03	No.019
MON04	No.027
MON05	No.051
MON06	No.072
MON07	No.053
MON08	No.054
Y1:W101	No.085
Y1:W119	No.070
Y1:W2	No.086

第一部　蒙古文文书

前言

1900 年代初叶，俄国的科兹洛夫队在哈喇浩特遗址发现了大量的文书。特别是 1909 年的探险和发掘中，发现了 2000 件以上的文书以及数百件有关佛教的遗物（佛画等），并将其运回了俄国。其后，斯坦因队在 1914 年的发掘中也获得了不少文书。后来，中国西北科学考查团（1927 年）、内蒙古文物工作队（1962 年、1963 年）、甘肃省考古队（1976 年、1979 年），在调查发掘中，似乎也获得了一些文书。

众所周知，这些从哈喇浩特出土的文书中，大多数是汉文文书和西夏文文书。其总体情况，由于《俄罗斯科学院东方研究所圣彼得堡分所藏黑水城文献》1-12（上海古籍出版社、1996-）、《英国国家图书馆藏黑水城文献》1-4（上海古籍出版社、2005-），以及《黑城出土文书（汉文文书卷）》（科学出版社、1991）的出版，逐渐且广泛地被研究者们所知晓。此外，内蒙古队发现的西夏文文书，据说已经委托给了中国的西夏学学者。可望，这些西夏文文书将被收录于《中国藏西夏文献》1-20（敦煌文艺出版社、2007）的“内蒙古编”，因而被广泛了解。此外，使用这些汉文・西夏文出土文书进行的研究，至今已有很多。

与汉文和西夏文文书相比，数量较少的蒙古文文书的研究，可以说尚处于并不十分繁盛的状态。关于这方面，如果与柏林收藏吐鲁番出土蒙古文文献所进行的研究相比较，情况就会更加明显。

在此，想回顾一下到本合作研究开始为止的、对前古典时期的蒙古文出土文书研究的进展情况，进而对该合作研究所进行的蒙古文文书的研究作一定位。

就柏林收藏的出土于吐鲁番的蒙古文文书方面，迄今为止，像兰司铁、鲍培、弗朗克、阿尔托、卡拉、哈匝依、策仁索德那木、阿拉坦格日勒、陶伯、魏弥贤等，曾予以研究。如果从学术上的贡献方面来讲，还没有人能超过 1950 年代曾刊行柏林收藏吐鲁番出土蒙古文文书照片的海涅什之业绩（Haenisch 1959）。当然，那个时代，像《元朝秘史》、《蒙古源流》、《黄金史纲》这样的文献资料并不少见。但是，年代上既能够与《元朝秘史》相并行的、且用回鹘文字书写的、又能够反映当时吐鲁番地区社会实况之资料群的照片进行汇总并予以刊行，其意义是巨大的。从这个意义上讲，在很大程度上缓解了蒙古语古文献、古文书缺少的状况。这一时期，尽管在世界各地均有蒙古语古文献、古文书被开拓与发现，其研究也不断进行，但是海涅什的业绩，对蒙古学研究领域是一个震动。

海涅什的业绩问世之后，在上述各位学者之外，还由于李盖提、柯立夫、海西希、多尔发、田清波、仁钦、达穆丁苏荣、罗布桑巴拉登、亦邻真、包祥、照那斯图、哈斯额尔敦、村山七郎、小泽重男等学者的研究，蒙古研究有了进一步的发展，给蒙古的语言学、佛教学、文学的研究带来了巨大的进展。在这些业绩当中，相当部分已在李盖提编的《Monumenta linguae mongolicae collecta》及其索引编《Indices verborum linguae monumentis traditorum》中所收录，为学者们提供了方便。在对本书所涉及的蒙古文文书进行解读和分析时，极大地仰赖了李盖提的业绩当中的“Ligeti 1972 a-c”以及“Ligeti 1973”。最近，蒙古国的特穆耳陶高也刊行了回鹘式蒙古文蒙古语资料集成（Tumurtogoo 2006）。特穆耳陶高的这部资料集成与上述李盖提的集成，在构想及构成方面大致相同。其中，不仅收载了新近发现和研究的文书和奥伦苏木文书的一部分。除此之外，还附有索引，学界又增加了一部有益的资料。

进入了海涅什的业绩及其冲击被认为告一段落的 1990 年代，蒙古学学界又受到了很大的刺激，或者

可以说是得到了研究上的方便。在蒙古人民共和国，受到海涅什冲击最为强烈的策仁索德那木，与陶伯进行合作，综合汇总了截止当时的相关研究，并且添附了虽然是黑白的却非常清晰的照片（Cerensodnom, Taube 1993）。这却以海涅什的冲击不同的形式，对学术界特别是对研究蒙古和中央亚的新一代学者，产生了新的影响。例如，不仅对在日本为这部力作撰写书评的松川节（松川节 1995）、以及在蒙古国刊行了先古典时期蒙古文字资料集的占其布（Жанчив 2005）等人为代表的新一代学者产生了新的刺激，而且对处于蒙古语言学界顶点的特穆耳陶高的上述资料集成，也形成了新的刺激，并增强了研究欲望。可以说，这也成为精力充沛地研究蒙古语古代资料、古代文献的源泉与促进剂。

为蒙古语古代文献·古代文书研究的进一步发展带来期望的，则是进入 1990 年代以后的事情。那就是哈斯额尔敦等人的，关于在中国内蒙古自治区鄂尔多斯市（原伊克昭盟）鄂托克旗境内阿尔寨石窟发现的、用回鹘式蒙古文书写的“题记”方面的专题研究论文的发表（Qaserdeni, Danzan 1997）。这些专题论文所涉及的“题记”，被认为可能属比元朝稍晚的时期，或者可以认为，这些“题记”所反映的是，从前古典期向古典期过渡的那一阶段的某个时期的蒙古语言和蒙古文字的面貌。另外，很难想象，蒙古语言文化从元朝北迁以后的哈喇浩特一举消失。汉文文书中也存在被认为是涉及到所谓的北元时期的文书。根据以上情况，我们相信，可推测为写于离北迁并不远的时期的该石窟的蒙古文“题记”，其研究之深化是很值得期待的。况且，该专题论文还没有包含写在纸上的文书类，然而那些文书类的发现，将被寄予极大的期待。

1990 年代，从吐鲁番以外的地方也发现了清晰的蒙古语古资料或古文书，虽然是断片，但其研究却带来了让人兴奋的信息。那就是被收录于《西藏历史档案荟萃》中的、8 件八思巴字蒙古语文书（尽管跟以上介绍的 Haenisch 的“出土文书的大量公布”的业绩有性质上的差别）。作为这部《西藏历史档案荟萃》刊行的前提，八思巴文字研究的第一人照那斯图则是不可忘记的。照那斯图曾投入很大的精力，远至赴西藏搜集资料。以这些资料为基础而取得的研究成果（照那斯图 1990），以及与其相配套的、总数达 40 件的八思巴文蒙古语文献资料集（照那斯图 1991）。他的业绩，实际上自鲍培的研究成果（Поппе 1941）问世以来的、以石刻资料为主的八思巴文蒙古语资料加于扩展，其中包括存在于西藏的蒙古语文书资料，并将这些资料汇总在一起，展示给了我们。尽管收载于照那斯图资料集中的文书照片并不是很清晰。后来，其中的一部分却以清晰的彩色照片形式，被收载于《西藏历史档案荟萃》中，广泛受到了相关学者的欢迎。

还有一点必须指出，那就是广泛分布于汉族地区的古蒙古文石刻，特别是蒙汉合璧碑文的存在。在这方面，首先应列举的是柯立夫长年积累的业绩。另外，在此还想指出的是，1990 年代的研究动态。那就是杉山正明对蒙汉合璧碑文进行的一系列的研究（杉山正明 1990; 1991）。当然，在杉山之前就已经有人对蒙汉合璧碑文进行研究。而且，杉山的研究是对蒙汉合璧碑文的专题研究，跟“出土文书的大量刊布”有着不同的性质。但是，我们认为杉山的研究，则成为其后在日本掀起的、探索“大元兀鲁思”时期第一手资料之热潮的起爆剂。而且，杉山的研究方法为中村淳、松川节的研究（中村淳、松川节 1993）所充分采纳，从中可以发现其研究的意义。

进入本世纪之后，也曾出现使蒙古语古文献和古文书的研究得以进展的公开出版物。首先要提及的是，自 2000 年至 2004 年间刊行的敦煌莫高窟北区石窟的调查研究报告《敦煌莫高窟北区石窟》（第一～三卷）。这部书中包含了介绍蒙古语出土资料的内容。承担此项释读工作的嘎尔迪，曾在这部书里刊布了 50 多件用回鹘式蒙古文和八思巴文书写的蒙古语出土资料。

阿尔寨石窟的研究也取得了进展。据积极推进该石窟研究的巴图吉日嘎拉等人的介绍（巴图吉日嘎拉、杨海英 2005; 2006），似乎又发现了相当数量的纸上书写的文书之断片。已经刊布的均为佛经典籍的断片。此外，还有尚未刊布的项目。今后的刊布及其研究是被期望的所在。

在八思巴文蒙古语资料方面，出现了呼格吉勒图等人的力作（呼格吉勒图、萨如拉 2003）。在该著作中、除了前面所介绍的、由鲍培以及照那斯图等人公开发表的资料以外，还包含了新的资料。其中包括本书所收载的、出土于哈喇浩特的文书。这部资料集成的刊行，虽然称不上是新发现资料的大量公开，却可以认为，它将为今后的研究提供很大的方便。

本合作研究的发端，可追溯到 1995 年的夏天。事实上，在那之前，吉田顺一和井上治，已经从内蒙

古大学的亦邻真教授那里获得了有关哈喇浩特出土文书方面的消息。1995 年，吉田顺一和井上治又确认那些蒙古语文书保管在亦邻真教授手里的事实。这项早稻田大学和内蒙古大学的合作研究，如果将内蒙古大学方的代表齐木德道尔吉教授以及其他研究人员整理亦邻真教授的遗作，作为准备阶段包括在内的话，共用了十年以上的岁月。如果从早稻田大学方的吉田顺一和井上治的立场回顾的话，两所大学合作研究的缘起，则在于上述的 1990 年代初期掀起的探求第一手资料的热潮、以及特别是 1991 年《黑城出土文书（汉文文书卷）》的出版而高涨起来的对哈喇浩特出土文书的浓厚兴趣的背景之中。

在哈喇浩特出土文书中，数量上远比汉文文书和西夏文文书少得多的蒙古文文书的研究，其状况并不十分繁盛。然而，关于现在收藏于原苏联列宁格勒（今圣彼得堡）的、出土于哈喇浩特的蒙古文文书，根据当时负责发掘的科兹洛夫的旅行记（Козлов 1923）中所摘录的科特维奇的初步的分析报告，其总共 17 件的大致内容已经被了解。还有，1914 年斯坦因队发掘获得的文献资料，也已在 Stein (1928) 中刊布了一件照片。从这样的初步信息转向正式的研究的是，对原苏联科学院东方学所列宁格勒分所的蒙古语文献资料非常精通的普齐柯夫斯基，刊布十分简单的相关资料和一件契约文书原件（G 106）而开始的（Пучковский 1954：90-127）。对原苏联所藏哈喇浩特出土蒙古文文书最早正式进行学术研究的则是柯立夫。他的研究（Cleaves 1955），对原苏联的相关信息做出了迅速的反应。在柯立夫之后，原苏联所藏哈喇浩特出土蒙古语文献的研究一时沉寂下来。但是，到 1970 年，莫斯科的孟库也夫曾研究两件刻本断片，并刊布了其照片（Munkuyev 1970）。1972 年，卡拉刊行了科罗得科夫收藏品中的一件命令文（G120）的原文（Kapa 1972）。原苏联发表出来的只有以上四件。其后，再也没有出现对原苏联所藏哈喇浩特出土蒙古语文献的研究成果。

在中国，由甘肃省考古工作队于 1970 年代发掘的出土文物中，只有一件被介绍了出来（陈炳应 1983）。但是这种情况，与原苏联的拥有实物却未对其进行充分的研究与公布则不同，当时则没有可作介绍的蒙古语文献的出土。使这种情况发生巨大变化的，是在上述的 1983 年至 1984 年，由中国内蒙古文物考古研究所和阿拉善盟文物考古站在调查发掘中获得了大量的出土文物。其中，汉文文书的一部分，在《黑城出土文书（汉文文书卷）》中予以刊布。在这部《黑城出土文书（汉文文书卷）》所收的汉文文书中，包含有蒙汉合璧文献。对此特别留意的则是松井太（1997）。松井以并不很清晰的照片为基础、进行缜密分析的业绩，保证了内蒙古所藏哈喇浩特出土文书之研究的扩展。这一点，已得知在亦邻真教授手里掌握的哈喇浩特出土的蒙古语文献、且正为共同研究做准备的吉田和井上来说，不仅是一次新的刺激，还成为了在那之后结成合作研究小组时的参照。

松井在他的上述论文的注 3）里，曾公布了他和原苏联科学院东方学所列宁格勒分所的乌斯宾斯基，就对科兹洛夫带回的哈喇浩特出土蒙古文文书进行合作研究的意向。由于科兹洛夫带回的哈喇浩特出土蒙古语文献，在本合作研究中，已被列为应该作为参照以及作以比较对照的内容，所以对于我们来说，这确实是时机恰好的消息。2000 年 11 月，松井在日本蒙古学会秋季大会上，以《哈喇浩特出土蒙古语文献》为题做了报告，把他的研究内容的一部分公布于众。我们收到这些信息之后认为，其正式研究成果的公开只是时间上的问题，并予以等待。在此期间，卡拉于 2003 年发表了他对科兹洛夫带回的哈喇浩特出土蒙古文文书的研究成果（Kara 2003．获得卡拉的文献，有赖于大谷大学松川节的帮助，特记于此，以表谢意）。在这部研究成果中，包括已经公开发表和研究的文书在内，共有如下：G111、G110 recto、G110 verso、G122 recto、G113、G121、G114、G119、G118、G107、G112、G106、G108、G109、G120 recto、G120 verso（畏吾儿语）、G115、G117、G116，每一件文书均登载了照片。这在哈喇浩特出土蒙古文文书的研究史上，实属最大业绩。他的成果，在本研究中对文书的破损部分的解读与解释，起到了邦助。卡拉的这部书曾被译成汉语出版（卡拉 2006）。卡拉将科兹洛夫带回的哈喇浩特出土蒙古文文书以附照片的形式刊行，这不仅是哈喇浩特出土蒙古文文书研究的进展，而且对蒙古学研究的发展来说也是一件值得纪念的事情。但是，在前面谈到的松井所做的报告当中，曾披露有 1062 行字的历占册子的存在。可是卡拉的研究中没有包含这一历占册子。我们翘首期待着以松井为代表的研究小组，或者由卡拉，将这本册子的研究成果发表出来。

关于蒙古文文书，所解读的全部文书分为 1.契约文书，2.行政文书（2-1.回鹘式蒙古文文书、2-2.八

思巴文文书），3.宗教文书（3-1.回鹘式蒙古文文书、3-2.八思巴文文书），4.其他（4-1.回鹘式蒙古文文书、4-2.八思巴文文书）等类。并在各个分类当中、根据其行数的多少进行排列。

文书编号为 HF125a～HF125d 的文书（分类于 3-1.回鹘式蒙古文文书），可视为一个系列的文书，因此不论行数的多少，根据其照片的编号顺序进行了排列。

关于编号不明的文书，按顺序编排了临时的文书编号。如 MON01, MON02……等。

回鹘式蒙古文的转写依据李盖提（参见 Ligeti 1972a）的转写方式，八思巴字的转写依据下表所示的转写方式（参见日文版“蒙古文文书　前言”的末尾部分）。

1. 契約文書

(№001) 文書番号 F61:W9

サイズ：縦 21.5cm　横 80cm

01 qonin jil qubi sara-yin tabun sini
羊の年、正月初旬の五日
羊儿年正月初五，

02 -te ba ousi qoyili kōb<e>gün kebeg
に。我々オウシ・コイリ、息子ケベグ、
我等，斡失火亦立、子怯伯

03 basa kōb<e>gün süjülü ba γurban-a
また息子スジュル、我々三人に、
又子索竹鲁，我等三人，

04 tariyan kereg-dü bolju mibü solju-ača
穀物が必要となって、ミブ・ソルジュより
为要粮食使用，自咩布唆儿竹处【借讫】得

05 arban taγar buγdai arban taγar
十石の小麦、十石の
十石小麦、十石

06 arba qamtu qorin taγar tariyan abču
大麦、併せて二十石の穀物を受け取って、
大麦，共二十石口粮。【为此】

07 qoyitu müren-iyer usun uγu_kei qung
北の川によって灌漑した荒れた
将用北河灌溉之荒闲

08 γajar-yi mibü solju-tur tutuγ_laju

土地をミブ・ソルジュに担保にして
地作保与了咩布唆儿竹。

09 ög{e}be en_e γaǰar-un ǰabsar inu o̱mün_e
与えた。この土地の境は南は
此地地界，南到

10 yeke kö̱ndelen ǰabsar-tu o̱rün_e ibü
イェケ・コンデレンを境に持つ、西はイブ・
也可坤都令界，西与野蒲

11 soǰimbu-la ǰabsar-tu umur_a mo̱n
ソジムブと境を持つ、北はまさにその
唆占布之界接，北接此

12 ousi qoyili-la ǰabsar-tu dorun_a
オウシ・コイリと境を持つ、東は
斡失火亦立之界，东接

13 ibü qibaǰarγui-la ǰabsar-tu do̱rben
イブ・ヒバジャルグイと境を持つ、四つの
野蒲乞叭札儿灰之界，四

14 eteged ǰabsar u̱düi bui en_e yabuqu
側の境はこの程度である。この通行する
边境界如此。将此以

15 šim-iyer do̱rben tayar ür_e oruq̄u
枡によって四石の種が入る
行用枡可种四石种子

16 γaǰar-yi ög{e}be en_e γaǰar-yi tariya
土地を与えた。この土地を耕作
之地与了。此地耕种

17 =qu kem inu tabun od tariiq̄u bolba
する期限は五年耕作することとなった。
期限为五年。

18 en_e tariyan-ača od bu̱ri nigen tayar
この穀物から年ごとに一石の
由该种粮每年收

19 buγdai nigen tayar arba seülkü bolba
小麦、一石の大麦を収めることとなった。

小麦一石、大麦一石。

20 qočuruγsan tariyan-i tegüs ögčü
残った穀物をすべて与えて
将其余粮食全支与，

21 γaǰar-yi abqu bolba en_e tabun on
土地を取ることとなった。この五年
方收回土地。在此五年间，

22 dausatala ken minu urbab<a>su aγu
が尽きるまで、我が方の誰かが【約束に】違うならば、国
若谁食言，须向广积仓

23 sang-ṭur tabun tayar čayan amun-i
庫に五石の脱穀済みの穀物を
抵押五石米。

24 daruqu üge minu bui yabutuγai
納める【という】私の言葉がある。有効であれ。
以此言立据。

25 en_e tariyan sinei šim-iyer abuγ_a
この穀物を市斗で取った。
此米以市斗取了。

26 en_e γaǰar bai sub<a>γ alban qala ba
この土地にある用水路、税と役を我等
此地之水渠，税和役，我等

27 γurbaγula medekü bolba kemen
三人がつかさどることとなった、といって
三人承担。为此

28 tutuγ bičig ög{e}be
担保文書を与えた。
与了担保文字。

29 en_e dọrben tayar γaǰar-un sang inu
この四石の【種を播く広さの】土地のその地税は
此【可种】四石【种子】之地之地税

30 bi ousi qoyili tabun on-u sang
私オウシ・コイリが五年の地税を
我斡失火亦立将五年的地税

31 saŋ<a>ǰu tegüs abuγ_a
計算してすべて取った。
计以全得了。

32 en_e nišan bi ousi qoyili ※
このニシャンは、私、オウシ・コイリ。 ※
此手印 我斡失火亦立。 ※

33 en_e nišan bi köb<e>gün kebeg ※
このニシャンは、私、息子ケベグ。 ※
此手印 我儿子怯伯。※

34 en_e nišan bi köb<e>gün soǰulu ※
このニシャンは、私、息子ソジュル。※
此手印 我儿子索竹鲁。※

35 ger<e>či bi ab<a>γ_a isda ※
証人、私、伯父イスダ。 ※
知见人 我叔父亦思答。 ※

36 ger<e>či bi ügüsi taqaltu ※
証人、私、ウグシ・タハルト。 ※
知见人 我兀古失塔罕秃。※

37 ger<e>či bi ibü soǰimbu
証人、私、イブ・ソジムブ。
知见人 我野蒲唆占布。

38 ger<e>či bi lorsi toqutemür ※
証人、私、ロルシ・トホテムル。 ※
知见人 我罗儿失脱黑帖木儿。※

【注釈】

03 qubi sara: モンゴルの伝統的な月の呼び方の一つとして『華夷訳語』（乙種本）に見えるものを示す。

	『華夷訳語』時令門	
1月	qubi sara	豁必撒剌
2月	quǰir sara	豁者兒撒剌
3月	ögeljin sara	兀格勒陳撒剌
4月	köküyi sara	可可亦撒剌
5月	ularu sara	兀剌魯撒剌
6月	uiru sara	兀亦魯撒剌
7月	quran sara	古闌撒剌
8月	buγu sara	不忽撒剌
9月	quča sara	忽察撒剌
10月	kel(e)btür sara	客勒卜禿兒撒剌
11月	idelkü sara	亦得勒忽撒剌
12月	kögeler sara	可可勒兒撒剌

なお、モンゴル語の月の呼び方についてハスバガナ（Qasbayan_a 1996: 448-453）は三通りにまとめる。

1. 季節における月による方法

qabur-un 春の	terigün(eki) sar_a 頭（初め）の月	1月
	dumdadu sar_a 中の月	2月
	ečüs(köl) sar_a 末（足）の月	3月
ǰun-u 夏の	terigün(eki) sar_a 頭（初め）の月	4月
	dumdadu sar_a 中の月	5月
	ečüs(köl) sar_a 末（足）の月	6月
namur-un 秋の	terigün(eki) sar_a 頭（初め）の月	7月
	dumdadu sar_a 中の月	8月
	ečüs(köl) sar_a 末（足）の月	9月
ebül-ün 冬の	terigün(eki) sar_a 頭（初め）の月	10月
	dumdadu sar_a 中の月	11月
	ečüs(köl) sar_a 末（足）の月	12月

2. 月の名による→上の『華夷訳語』表を参照

3. 月の数による→γurban sar_a, dörben sar_a, tabun sar_a, ǰirγuγan sar_a, arban sar_a, arban nigen sar_a

01-02 sini-ṯe: モンゴル語の日の数え方についてハスバガナ（Qasbayan_a 1996: 448-453）は大きく二種類にまとめる。これに若干の補足を加えて説明すると、原則として以下のようにまとめられる。

1. 三分法（それぞれ上・中・下旬にあたる）
①月の初めの 10 日、つまり 1 日から 10 日＝《数詞＋sined》
②月の真ん中の 10 日、つまり 11 日から 20 日＝《数詞》
③21 日以降の月の終わりの 10 日、つまり 21 日から 30 日＝《数詞＋qaγučin～qaγučid》
2. 数単位法（現代のわれわれの数え方と同じ）

02 köb<e>gün: 本文書では「息子」に当る言葉は köbgün と綴られている。現代の正書法では köbegün である。口語の発音を表記したものと考えられる。

04 mibü: 張澍『西夏姓氏録』（林旅芝 1975: 14, 59）の咩布氏と同一の姓である可能性が高い。

05 taγar: 松井太（1997: 36-43; 2004: 163-157）によって、モンゴル時代の穀物容量単位は、以下のように収斂されていたことが明らかになっている。

容量（*l*）	漢語	モンゴル語	ウイグル語	ペルシア語
84.0	石	taγar	šïγ / taγar	taġār
8.4	斗	šim	küri	kīla
0.84	升	šingsi	šing	mann
0.084	合		qav	

モンゴル語 šim は、漢語「升」起源の語であるが、ハラホト文書 F214:W1 により、taγar, šim がそれぞれ「石」「斗」に対応していたことが知られる（松井太 1997: 37）。『蒙古訳語（至元訳語）』では、漢語「豆斗」（＝斗）にモンゴル語「深」（<šim）が、『華夷訳語』では、漢語「斗」にモンゴル語「参 šim」が対応している（松井太 1997: 40）。

05 buγdai: 現代正書法では buγudai と綴る。buγdai はウイグル文より借用した形である（山田信夫 1993 所収 Lo17、Lo18 参照）。内モンゴル所蔵ハラホト出土モンゴル語文書では、「小麦」は buγdai と表記される場合が多い。この形は、藤井有鄰館所蔵の「軍隊手当にかんする報告」（Franke 1970: 137-147）や『ムカディマート・アル・アダブ』（Поппе 1938）に確認できる。一方、現代正書法通りの buγudai も先古典期モンゴル文字資料、たとえば『華夷訳語』（乙種本）花木門の「buγudai 小麥 卜兀歹」やハラホト出土貸借契約文書（Cleaves 1955）に確認できる。なお、本文書では音節末の γ と q に傍点が付いている。これは先古典期モンゴル文字の一つの特徴である。

06 arba: arba は古典文語では多く arbai と綴る。『ムカディマート・アル・アダブ』（Поппе 1938）に arbaị, arbayi と見え、『華夷訳語』（甲種本）に「大麥：阿兒拍（arpai）」、同（乙種本）に「arbai：大麥：阿兒拍（arpai）」と現れる。一方の arba は「居庸関石刻（東壁）」（07-1）に事例が確認される（呼格吉勒図、萨如拉 2004: 431）。両種『華夷訳語』に「阿兒拍（arpai）」と見えることは、テュルク語 arpa と関係づけてよい。Doerfer 1963-75: No.445 参照。

07 usun uγu_kei qung: usun uγu-の部分の意味は「水を飲む」であるが、これを 8 行目冒頭の γaǰar にかかると考えて「（土地が）水を飲む→灌漑する」の意味に解釈した。また uγu_kei は動詞 uγu-「飲む」の語幹に動詞から形容詞を形成する語尾-qai/-kei の女性形の-kei が接続したものと考えた（Sečenčoγtu 1988: 2561）。すなわち usun uγu_kei で「灌漑した」の意味に取る。qung は漢語の「荒」（近世音 huaŋ）であると解釈して「荒れた」と訳した。qung γaǰar は、「荒閑地」に相当すると考えられる。

08 tutuγ_laǰu: 「質草、担保、抵当」の意味のテュルク語 tutuγ（cf. Doerfer 1963-75: No.1349）に動詞を作る語尾-la-と副動詞語尾-ǰu のついた形。トルファン出土「三村の住民へ穏やかな所有を保証する文書」に tutuγ の用例がある（Cerensodnom, Taube 1993: 173-176）。

10 ibü: 張澍『西夏姓氏録』（林旅芝 1975: 34）の野蒲氏と同一の姓である可能性が高い。

11 soǰimbu-la: soǰimbu-la の-la は共同格語尾。古典文語の-luγ_a の口語的表記。『元朝秘史』には-lu'a と現れる。Cf. *-lā / -lɛ̄*（Ramstedt 1976）.

14 ụdüi: ụdüi は現代正書法では edüi である。üdüi（'WYDWY）と書かれるべきところ、第一音節に

Yが一つ足りない。

14-15 yabuqu šim: šim が容量単位としての斗だけではなく一斗枡を表すことについては、松井太（1997: 36-43）参照。なお、「yabuqu 通行する」は、漢語の「行用」の「行」を直訳したものか。『元典章』典章 21・戸部巻 7・倉庫・行用圓斛（21/2b）にみえる「行用圓斛」・「亡宋行用文思院斛」や、典章 57・刑部巻 19・諸禁・雑禁・禁私斛斗秤尺（57/34a-b）、斛斗秤尺牙人（57/34b-35b）に見える「行用度尺升斗等秤」・「係官見行用法物」などの「行用」の用例を参照。

15-16 dǫrben taγar ür_e oruqu γaǰar: 「四石の種を蒔くことができる広さの土地」の意味。

16-17 tariya=qu: 16 行目の最後から 17 行目の冒頭にかけて、T'RYY' XW と読める綴りがある。これを現代正書法で tariqu と綴る動詞の異綴と考えて tariya=qu と読んだが、tariqu の i にあたる部分を長母音に発音する可能性のある綴りをもつ例をこの文書以外の他の資料に発見していない。tariy_a に現在・未来の形動詞語尾-qu を直結させてしまったものであろうか。

17 tariiqu: tariiqu は tariqu であると考える。上の tariya=qu とこの tariiqu の存在から、この文書においては、名詞 tariy_a に由来すると思われる tariya-と tarii-が動詞語幹として用いられていることがわかる。いずれの場合も単なる書き損じではないと見なしておきたい。

18 od: od は on の複数形。後文の内容から、小麦・大麦の返済は複数年にわたるので複数形になっていると考えられる。『元朝秘史』§21 に見える、アラン・コアが、夜、光に感じて孕んだことを説明することばの中に、sōnit būri（傍訳：夜 毎）という表現がある。数夜にわたって光が入ってきたので、sōni の複数形が使われていることがわかる。この od も同様の理由による。

19 seūlkū: 漢語「収」（近世音 ʃiəu）に動詞を形成する語尾-l(a)と現在・未来の形動詞語尾-kū が接続しているものと解した。

22 dausatala: dausatala は daγustala が口語の影響でこのように書かれたものであろう。

22-23 aǰu sang: 広積倉（亦集乃路の銭糧を管理する部門）を指す。

25 sinei šim: 「市斗」（漢語文書に現われる）を指す。

25 abuγ_a: -γ_a / -ge は、過去の行為の結果やその結果が現在も続いていることを示す未完了の形動詞語尾（*nomen imperfecti*）であり、終止形としても機能する。この場合、過去に「取（ab-）」った行為の結果が持続していて「取（ab-）」ったままであることを示すが、とくに行為結果の持続の意味が強く示される。たとえば「駐日モンゴル国大使館（yapon ulus-tur saγuγ_a mongγul ulus-un elčin sayid-un yamu）」という表現には saγuγ_a（→saγu-γ_a）が見える。この saγuγ_a は、大使館の設置は過去のことであるが、その設置された状態が現在も続いているものであることを示している。この -γ_a / -ge を和訳する場合には、「～した」、「～している」、「～しつつある」のような訳語などが適当であろう。漢語との対応関係を見ると、F116:W572 の 6 行目、F116:W92 の 2 行目に tegüs abuγ_a の用例がある。ともに、ウイグル文字モンゴル語・漢字漢語の合璧文書であるが、断片のため、漢語面で tegüs abuγ_a に対応する箇所は確認できない。ただし、この二件の文書は、李逸友（1991: 125-135）の「諸王妃子分例類」に分類される文書であり、多くがほぼ同種の内容を共有している。これらを通検すると、tegüs abuγ_a に対応する漢語は「全得了也」であることがわかる。「了也」は動作の完了の実現を表す。

26 bai: 「あらゆる」という意味の可能性もある。

27-28 : 27-28 行目のところで紙が貼り合わされている。

29 -un: 30 行目の on と形は似ているが、ここを on と読むと、「この四石の【種を播く広さの】土地の一年のその地税は」というやや不自然な文となってしまうことを考慮し、-un と読んだ。

32 nišan: ペルシア語 nišān に起源し、ウイグル語文書・モンゴル語文書においては、花押に相当する。ただし、ニシャンとあって花押ではなく印章が押されている例もある。山田信夫（1978）参照。

34 soǰulu: 本文書 3 行目では sūǰūlū となっている。

03 qubi sara: 《华夷译语》（乙种本）所记传统的蒙古月令如下表：

	《华夷译语》时令门	
1 月	qubi sara	豁必撒剌
2 月	qujir sara	豁者儿撒剌
3 月	ögeljin sara	兀格勒陈撒剌
4 月	köküyi sara	可可亦撒剌
5 月	ularu sara	兀剌鲁撒剌
6 月	uiru sara	兀亦鲁撒剌
7 月	quran sara	古阑撒剌
8 月	buγu sara	不忽撒剌
9 月	quča sara	忽察撒剌
10 月	kel(e)btür sara	客勒卜秃儿撒剌
11 月	idelkü sara	亦得勒忽撒剌
12 月	kögeler sara	可可勒儿撒剌

还有，哈斯巴根（Qasbaγan_a 1996: 448-453）将蒙古人的月令归纳为如下三方面：

1. 分季的月令：

qabur-un 春季	terigün(eki) sar_a 首月	1 月
	dumdadu sar_a 中月	2 月
	ečüs(köl) sar_a 末月	3 月
ǰun-u 夏季	terigün(eki) sar_a 首月	4 月
	dumdadu sar_a 中月	5 月
	ečüs(köl) sar_a 末月	6 月
namur-un 秋季	terigün(eki) sar_a 首月	7 月
	dumdadu sar_a 中月	8 月
	ečüs(köl) sar_a 末月	9 月
ebül-ün 冬季	terigün(eki) sar_a 首月	10 月
	dumdadu sar_a 中月	11 月
	ečüs(köl) sar_a 末月	12 月

2. 传统月令：→参考以上《华夷译语》表。

3. 数序月令：→γurban sar_a, dörben sar_a, tabun sar_a, ǰirγuγan sar_a, arban sar_a, arban nigen sar_a

01-02 sini-ṯe: 关于蒙古语的数日方法，哈斯巴根（Qasbaγan_a 1996: 448-453）大体归纳为两种。其上

再加若干补充和说明，可归纳如下。

1. 三分法（分别以上、中、下旬表示）

①一个月的前 10 天、即 1 日至 10 日＝《数词＋sined》

②一个月的中间 10 天、即 11 日至 20 日＝《数词》

③21 日以后的 10 天、即 21 日至 30 日＝《数词＋qaγučin～qaγučid》

2. 数序数法（等于我们现在所使用的数法）。

02 köb<e>gün: 在 F61:W9 文书中，与“儿子”对应的词是 köbgün。现代正确的书写方法是 köbegün，此处为口语发音。

04 mibü: 很可能与张澍《西夏姓氏录》（林旅芝 1975: 14, 59）中的咩布氏同姓。

05 taγar: 据松井太（1997: 36-43; 2004: 163-157），蒙古时期的谷物容量单位可归纳如下：

容量（*l*）	汉语	蒙古语	畏吾语	波斯语
84.0	石	taγar	šïγ / taγar	taġār
8.4	斗	šim	küri	kīla
0.84	升	šingsi	šing	mann
0.084	合		qav	

蒙古语的 šim 虽起源于汉语的“升”，但据黑城文书 F214:W1，可知蒙古语的 taγar、šim 分别与汉语的“石”、“斗”相对应（松井太 1997: 37）。在《蒙古译语（至元译语）》中，汉语“豆”（＝斗）与蒙古语“深”（<šim）相对应，而在《华夷译语》中，汉语的“斗”与蒙古语的“参 šim”对应（松井太 1997: 40）。

05 buγdai: 现代的正字法是 buγudai。buγdai 借自回鹘文（参见山田信夫 1993 所收 Lo17、Lo18）。在内蒙古所藏的黑城出土的蒙古文文书中，将“小麦”记为 buγdai 的情况较多。该写法又见于藤井有邻馆所藏的《关于军粮文卷》（Franke 1970: 137-147）和《穆卡迪玛特·阿勒·阿达布词典》（Поппе 1938）。另一方面，现代正字法中的 buγudai 也能从古代蒙古文字资料，例如《华夷译语》（乙种本）花木门中的“buγudai 小麥 卜兀歹”及黑城出土的贷借契约文书（Cleaves 1955）中得到确认。在 F61:W9 中，音节末的 γ 与 q 附有识点，这是古代蒙古文字的一个特征。

06 arba: arba 在古代文字中多写作 arbai。《穆卡迪玛特·阿勒·阿达布词典》（Поппе 1938）中记为 arbaị、arbayi，《华夷译语》（甲种本）记为“大麦：阿兒拍（arpai）”，（乙种本）也与之相同，记为“arbai: 大麦：阿兒拍（arpai）”。另一方面，arba 一字也能从“居庸关石刻（东壁）”得到确认。两种《华夷译语》所见的“阿兒拍（arpai）”与突厥语的 arpa 有关联。参见 Doerfer 1963-75: No.445。

07 usun uγu_kei qung: usun uγu-为“喝水”之意。但考虑到 usun uγu-与第八行开头语 γaǰar 有关联，所以将它解释为“（土地）喝水→灌溉”。认为 uγu_kei 是由动词 uγu-“喝”的词干后接由动词变派生形容词的词尾-qai/-kei 的阴性形式-kei 而成（Sečenčoγtu 1988: 2561）。即 usun uγu_kei 为“灌溉了”之意。将 qung 解释为汉语的“荒”，qung γaǰar 表示“荒闲地”。

08 tutuγ_laǰu: 该字是由“质、担保、抵押”之意的突厥语 tutuγ（cf. Doerfer 1963-75: No.1349）后接派生动词的词尾-la-与副动词词尾-ju 而成。吐鲁番出土的《稳定三村住民所有之保证文书》中有 tutuγ 的例句（Cerensodnom, Taube1993: 173-176）。

10 ibü: 很可能与张澍《西夏姓氏录》（林旅芝 1975: 34）中的野蒲氏同姓。

11 soǰimbu-la: soǰimbu-la 的-la 为共同格后缀，相当于早期书面语的 -luγ_a。《元朝秘史》中为-lu'a。Cf. *-lā/-lɛ̄*（Ramstedt 1976）。

14 ụdüi: 现代正字法作 edüi。

14-15 yabuqu šim: šim 不仅指作为容量单位的“斗”，也指“一斗枡”，参见松井太的（1997: 36-43）。“yabuqu”可能是硬译了汉语“行用”的“行”。参见《元典章》典章 21・户部 7・仓库・行用圆斛（21/2b）中的“行用圆斛”、“亡宋行用文思院斛”及典章 57・刑部 19・诸禁・杂禁・禁私斛斗秤尺（57/34a-b）、斛斗秤尺牙人（57/34b-35b）中所见到的“行用度尺升斗等秤”、“系官见行用法物”等

中的“行用”的用例。

15-16 dǫrben taγar ür_e oruᵭu γaǰar: oruᵭu γaǰar 等于“需…种子之地”。

16-17 tariya=qu: 第 16 行末尾至第 17 行开头之间，存在有可读为 T'RYY' XW 的字样。尽管将其读为 tariya=qu，但从其他文献中尚未发现 tariqu 中的 i 这一部分中带有发为长元音之字符的例子。该形式，或许是在 tariy_a 一词上直接附加形动词后缀-qu 而形成。

17 tariiᵭu: 可以认为，tariiᵭu 就是 tariqu。根据以上出现的 tariya=qu 以及在此出现的 tariiᵭu，可以推测，来源于名词 tariy_a 的形式，在该文献中则以 tariya-和 tarii-的动词词干形式出现。

18 od: od 是 on 的复数形。

19 seülkü: seülkü 可能是在汉语“收”之后接动词词尾-l(a)和现在、未来式的形容动词语尾-kü 而成。

22 dausatala: daγustala 的口语形式。

22-23 aγu sang: 指广积仓（管理亦集乃路钱粮的机构）。

25 sinei šim: 直译为“市之斗”，指“市斗”（见于汉文文书）。

25 abuγ_a: -γ_a / -ge 是表示过去行为的结果及这一结果的持续状态的形容动词词尾（*nomen imperfecti*）。F116:W572 的第 6 行、F116:W92 的第 2 行中有 tegüs abuγ_a 之句，两份文书俱为畏吾体蒙古文和汉字的合璧文书，但因为是残片，尚不能确认汉语部分与 tegüs abuγ_a 直接对应处。但这两份文书被分类到李逸友（1991: 125-135）的《诸王妃子分例类》中，且其它文书与两份文书内容大致一样。可知，与 tegüs abuγ_a 相对应的汉语是“全得了也”。

26 bai: 该形式也有可能表示“所有的”之意。

27-28 : 第 27-28 行处纸张有粘连。

32 nišan: 起源于波斯语 nišān，相当于回鹘文文书、蒙文文书中的花押。但有时不仅表示花押，还表示盖章的意思。参见山田信夫（1978）。

34 soǰulu: 本文书第 3 行中作 süǰülü。

【解説】

これはオウシ・コイリとその息子ケベグ、スジュルがミブ・ソルジュから十石の小麦と十石の大麦をもらい受けるかわりに、土地を担保として差し出したことに関する契約文書である。16-21 行目によると、オウシ・コイリから担保としてミブ・ソルジュに差し出された土地は五年の期限付きでオウシ・コイリが耕し、その間その土地から取れる収穫のうち毎年小麦一石、大麦一石をオウシ・コイリが取り、それ以外の収穫は全てミブ・ソルジュのものとし、五年後に土地はオウシ・コイリのもとに返還されるという契約であろう。26-27 行目には、担保として差し出された土地の用水路・税・役に関してはオウシ・コイリが負担することになっていたことが記されている。29-31 行目の地税（五年の地税）については、その出所、ならびに既に現物で取ったことを表すのか、或いは地税を払う責任を負ったことを表しているのかなどは判然としない。

这是一件契约文书。其内容为：斡失火亦立（オウシ・コイリ）与他的[两个]儿子怯怕（ケベグ）和索竹鲁（スジュル），收领到咩布唆儿竹（ミブ・ソルジュ）的十石小麦和十石大麦。与此相应，他们也把[自己的一块]土地作为抵押品（担保物）[暂时]提供（提交）给了对方。

如果再根据第 16 行至第 21 行的字句（条款），这项合同的具体内容为，斡矢火亦立以抵押品（担保物）的名义提交给咩布唆儿竹的那片土地，在五年之内仍由斡矢火亦立耕作使用。在这五年期限之内，从这片土地上取得的所有收获，斡矢火亦立每年只能从中留取一石小麦和一石大麦，除此以外的收获，全部属于咩布唆儿竹。但五年的期限终结之后，这片土地将返还给斡矢火亦立。

除此以外，在第 26 行至第 27 行，还有一条相关内容：做为担保物而抵押的那片土地，[在抵押期间]所需支付或者承担的水渠使用费、捐税、赋役，皆由斡矢火亦立承担。

但是对于第 29 行至 31 行所说的地租（五年的地租）问题，表示的是其出处，还是表示已经以实收

取，或者表示承担支付地税的责任等，则都不明确。

(No.002) 文書番号 F61:W6

サイズ：縦 19cm　横 42.2cm

01 γaqai jil γurban sara-yin qorin yisün-e
猪の年、三月二十九日に
猪儿年三月二十九日

02 ba šiṇ dorǰi ạde üimi siuγsi
我々は、シン・ドルジが、これらウイミ・シウグシ、
我们申朵儿只，此等兀迷修失、

03 oldi singküri lorsai sayǰai üikü
オルディ・シンクリ、ロルサイ・サイジャイ、ウイク・
温迪省忽里、罗儿赛赛斋、畏苦

04 siiγi li singgi tan tabun kümün-e
シーギ、リ・シンギたち五人に
失吉、里省吉等五人根底

05 vabtan bičig ögür_ün ạde tabun
ヴァプタンが文書を与えるに、これら五
瓦不坛立文书，此五人

06 kümün-ṭür sang ačiqu kesig kürügsen
人に地税を運ぶ輪番が至った。
值运送地税之番。

07 tabun tayar tabun šim čayan amun-i
【このため】五石五斗の脱穀済みの穀物を
将其五石五斗米

08 bi dorǰi ačiǰu sang-i tüsürkü sangči-a
私ドルジが運んで、地税を納入する徴税人に
我朵儿只承运至掌地税之征税人处。

09 kürgekü bolba ene amun-i ačiǰu qor
届けることとなった。この穀物を運んで、損耗
因运载此米有鼠耗，

10 qoms_a bolqui-yi tayar-tur niǰ<e>gel šim
するものを、一石につき一斗ずつ

每石加了一斗。

11 ögbe kölesün inu qamuγi tabin
与えた。その賃金は全てを五十
工钱共五十

12 tabun süke čau-yi mǫn ongdur nigen γar
五錠の鈔を、同じくその同じ年に、一人で
五锭钞，于同年已由我一人

13 -iyar dayulīju abuγ_a bi kölesün-i ačīju
強制的に取った、私は。賃金は、運んで
强行取得。其工钱，将运至

14 teṉde kürtele yaγun ber osal umtaγai
そこに至るまで何であれ過失
彼处之前，如有任何闪失，

15 bolbasu bi dorǰi ögkü bolba basa
になるならば、私ドルジは返済することになった。また
我朵儿只将赔偿。又，

16 mon_a qoyin-a kürgeǰü ireǰü
以後届けて来て
以后而运至，

17 basa kölesün (ạribesü?) abuγsan sükes-i nigen
また賃金を（求めるならば？）、受け取った錠を一に
再索要工钱，则将所取之锭以

18 -ṯür nigen qolbaǰu ögiged
一を付けて返済して、
双倍退还，并

19 ǰrlγ-un yosuγar kündü erigütü bolsuγai
仰せのとおりに重罪人となろう、
依圣旨治重罪。

20 kemen ene bičig ögbe
といってこの文書を与えた。
为此立文。

21 tabun taγar tabun šim-ṯur tabun šim
五石五斗に五斗
于五石五斗…五斗

22 kemen KWYSY?
と、…
么道…

23 ene nišan šin dorǰi ※
このニシャンはシン・ドルジ。※
此手印 申朵儿只。※

24 ene nišan bičig ögügči nökür irüči ※
このニシャンは文書を与えた者ノコル・イルチ。※
此手印 立文人那可儿亦鲁赤。※

25 gereči bi šagiriba
証人、私、シャギリバ。
知见人 我沙吉儿八。

26 ger[eči]///S_'
証人…
知见人…

27 ///? sirsi ※
…シルシ。※
…昔儿失。※

【注釈】

01 yisün-e: yisün-e の-e の部分は yisün の下にスペースがないため、yisün の左側に書かれている。

02 ạde: 周知のように、先古典期モンゴル文文献では、語頭の e が"で書かれる現象が見られる。この ede も"D'と書かれており、ハラホト出土モンゴル文字文献にも先古典期文語の特徴が確認される。

07, 10, 21 tayar: F61:W9 の注 05 tayar を参照。

06 kesig: 松井太（1998）は、ウイグル語文書の分析を通じて、käzik がトゥルファン出土の唐代漢文文書にみえる漢語「番」の透写語（calque）であり、「番役」ないし「(役の）当番」と解釈すべきと述べる。この kesig は「輪番」の意味で『元朝秘史』にも頻出する。

07, 10, 21 šim: F61:W9 の注 05 tayar を参照。

08 tüsürkü: tüsürkü を「納める」「納入する」の義に解することについては、松井太（1997）を参照。古典モンゴル語では tüsür-の「納める」としての用法を確認することは困難であるが、『元朝秘史』§279 にはそれに近い用例が確認できる。tüsür-は、§279 に見える例を除いては、酒（神酒）を「注ぐ」意味（傍訳：傾）になっているのに対し、§279 には、阿兀舌剌孫　速客思　中豁惕　弩木惕　中忽牙黑　者別　倉兀惕　禿速舌児抽　巴剌中合惕　撒乞兀魯牙 a'urasun sükes qot numut quyaq ǰebe tsangut tüsürčü balaqat saki'uluya（織物、銀錠、箭筒、弓、甲冑、矢、地税を「注」して諸城（＝倉庫）を守らせよう－「注」は傍訳のまま）とある。"織物、銀錠などの有価物や武器類、税物を入れる"意味で用いられている。この例のみ、傍訳が「注」となっていることも、単に「容器に入った液体を別のものに入れる＝注ぐ」という意味ではないことを示唆している。なお「注」には「交付、付」という意味もある。

08 sangči: sang（<倉。中世音・近世音とともに ts'aŋ）に職掌を表す接尾辞-či が付加され、「収税吏・

徴税人」を表す（松井太 1997: 30；2002: 111）。漢字音の再構は藤堂明保（1978）による（以下同）。

10 nǐǰ<e>gel: 古典文語では nǐǰegel。nǐǰeged とも書く。ǰ のあとに母音 e を補っておいたが、『ムカディマート・アル・アダブ』（Поппе 1938）に nǐǰ[e:]t とある。先古典期や一部の古典期モンゴル文字文献には ɛ の後に g が直書きされる例が見られる。たとえば、「忻都王碑文」（Cleaves 1949）には gečkikü（文語 giskikü）、『エルデニ・イン・トブチ』（Haenisch 1955）に gičkigsen、『元朝秘史』§90 に抹赤吉周（möčgǰǰü）などがあるが、ǰ に関して同様の事例は未発見である。

09-11 qor qoms_a bolqui-yi tayar-tur nǐǰ<e>gel šim ögbe: 旧中国においては、糧食徴収に当たって、輸送・保管中目減りする分という「鼠耗」の名目で、多く上乗せ徴収していた。『元典章』典章 21・戸部 7・倉庫・收糧鼠耗分例（21/2b-3a）、『通制条格』巻 14・倉庫・糧耗（14/12b-13a）、『大元海運記』巻下・收江南糧鼠耗則例（87-88）は、至元 22 年（1285）10 月の記事として（『元典章』は至元 33 年 3 月に作る。至元 23 年 3 月の誤りであろう）、江南の民田の税石の鼠耗は一石につき七升という数字を伝える。本箇所の数字はこれより大きい。

11 qamuγi: X'MWNKY に見えるが、これは qamuγ に i が直書きされた qamuγi と見る。

12 süke čau: süke は銀の重量単位及び交鈔（元代の紙幣）の貨幣単位の錠に相当する。『続増華夷訳語』数目門（『北京圖書館古籍珍本叢刊』6: 177）に「sükes　錠　速客思」とある。čau は「鈔」（近世音 ʦʻau）を写したもので、交鈔のこと。süke(s) čau の用例としては、「1340 年アルグ令旨碑」l.12（Cleaves 1965: 43, 60, n.51；Ligeti 1972a: 60），1338 年「ジグンテイ碑文」（Cleaves 1951: 55-56, 97, n.127；Ligeti 1972a: 56）ll.26, 28, 30, 31 がある。前田直典（1944 : 23-24）参照。

12 ongdur: ハルハ方言、ブリヤート方言では oŋ（cf. Poppe 1955: 74）。モンゴル語の語末の*n と*ŋ が融合して ŋ としてあらわれ、名詞語幹末の ŋ は母音にはじまる接尾辞をとると通常 n と交替するが、必ずしもこの交替が起こらない場合がある。

12-13 nigen γar-iyar: 「一つの手で」という意味ではなく、「一人の手で（他人を経由せず、直接）」という意味。現代モンゴル語でもそのように解釈できる。

13 abuγ_a: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。

15 ögkü: この ögkü は 13 行目の kölesün「賃金」を受けている。

17-18 nigen-ṯür nigen qolbaǰu: これと同じ表現がウイグル文契約文書には bir-kā bir qošup と見える。山田信夫（1993）所収 Sa17、Lo16 参照

18 ögiged: ögüged の別形。

24 bičig ögügči: bičig ögügči「文書を与えた者」とはヴァプタンの文書をシン・ドルジのもとに届けた者のことを言っているのであろう。

01 yisün-e: 因 yisün 下无空格，所以把 yisün-e 的-e 写在 yisün 的左侧。

02 ạde: 众所周知，古代蒙文文献中有将词头的 e 写作"（AA）的现象。这个 ede 也被写作"D'（AATA），可见从黑城出土的蒙文文献中也有古蒙古文的特征。

07, 10, 21 tayar: 参见 F61:W9 注释 05 tayar。

06 kesig: 松井太（1998），通过分析回鹘文文书，认为 käzik 是吐鲁番出土的唐代汉文文书中所出现的汉语"番"的直译（calque），解释为"番役"或"值班"。《元朝秘史》中屡见"轮班"之意的 kesig。

07, 10, 21 šim: 参见 F61:W9 注释 05 tayar。

08 tüsürkü: 将 tüsürkü 解释为"交纳"、"缴纳"，参见松井太（1997）。在古蒙古语中 tüsür-有两个含义：其一为"注入"、"倾倒"，另一为"付、交付"。《元朝秘史》§279 中可见后一用例。

08 sangči: sang（＜仓 tsʻaŋ）之后附加表示职务的词尾-či，表示"收税吏、征税人"之意（松井太 1997: 30；2002: 111）。

10 nǐǰ<e>gel: nǐǰegel 的草写。

09-11 qor qoms_a bolqui-yi tayar-tur nǐǰ<e>gel šim ögbe: 在旧中国，征收粮食时，因运输、库藏有损耗，所以以"鼠耗"的名义多征收。《元典章》典章 21・户部 7・仓库・收粮鼠耗分例（21/2b-3a）、《通

制条格》卷 14・仓库・粮耗（14/12b-13a）、《大元海运记》卷下・收江南粮鼠耗则例（87-88）：至元 22 年（1285）10 月记事（《元典章》作至元 33 年 3 月，实际上是至元 23 年 3 月之误），江南民田的税粮鼠耗为每石七升，这里的损耗额比江南高。

11 qamuγi: 看上去似乎为 X'MWNKY 字形，但将其看作 qamuγ 上直接加写 i 而形成的 qamuγi 形式。

12 süke čau: süke 相当于银子的重量单位和交钞（元代的纸币）的货币单位的“錠”。《续增华夷译语》数目门（《北京图书馆古籍珍本丛刊》6: 177）中写作“sükes 錠 速客思”。čau 即“钞”，指交钞。有关 süke(s) čau 的用例，还出现于《1340 年阿鲁令旨碑》l.12（Cleaves 1965: 43, 60, n.51；Ligeti 1972a: 60）、1338 年《竹温台碑文》（Cleaves 1951: 55-56, 97, n.127；Ligeti 1972a: 56）ll.26, 28, 30, 31。参见前田直典（1944 : 23-24）。

12 ongdur: ong 为 on 的方言形式。如喀尔喀方言、布利亚特方言中以 oŋ 的形式出现（cf.Poppe 1955: 74）

12-13 nigen γar-iyar: 不是指人的一只手，而指经一人之手（不靠别人，直接）。现代蒙古语同。

13 abuγ_a: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。

17-18 nigen-ṯür nigen qolbaǰu: 与此同样的现象在回鹘文契约文书中为 bir-kä bir qošup。参见山田信夫（1993）所收的 Sa17、Lo16。

18 ögiged: 是 ögüged 的另一种形式。

【解説】

シン・ドルジが、地税（五石五斗の脱穀済みの穀物）を運ぶ輪番がめぐってきたウイミ・シウグシ、オルディ・シンクリ、ロルサイ・サイジャイ、ウイク・シーギ、リ・シンギの五人の代わりに、地税を徴税人のもとに届けることを請け負ったことに関する契約文書。運搬途中での穀物の損失に対する賠償（一石に対して一斗）、運賃（五十五錠、ここから一斗につき一錠の割合で運賃が設定されていたことが分かる）、運搬途上で過失を犯せば運賃を返済すること、等についての規定が見られる。17 行目の「また賃金を求めるならば」は意味を取りにくいが、賃金の二重請求について言ったものか。21-22 行目は他の行に比べると書き方がやや不自然である。契約内容を記した 20 行目までと、署名の部分が始まる 23 行目以降と行頭の高さが一致していない。特に 22 行目はかなり下から書き始められている。こうしたことから考えると、21-22 行目は後から書き込まれたものかもしれない。この 2 行は、それ以前に記されている運搬途中での穀物の損失に対する賠償に関する記述かとも思われるが、意味するところははっきりしない。

这是一件契约文书。其内容为申朵儿只（シン・ドルジ）承包了以前由兀迷修失（ウイミ・シウグシ）、温迪省忽里（オルディ・シンクリ）、罗儿赛赛斋（ロルサイ・サイジャイ）、畏苦失吉（ウイク・シーギ）、里省吉（リ・シンギ）等五人轮流前去搬运地租（五石五斗已经脱去皮壳的谷物）的差事，由申朵儿只负责把地租运送到接收地租人那里。从这件契约文书可以得知如下一些当时的相关约定。例如：在运送途中造成的谷物损失应该如何赔偿（损失一石赔偿一斗）；运送费用的数额是多少（共计五十五锭。据此又可以看出，当时双方商定的运费应该是一斗谷物一锭[白银]）；如果在运送地租途中犯了不该犯的错误，则必须退还运费等等。

但是，对其第 17 行中的“【如果】再索要工钱【的话】”一语之含义难以理解，也许为针对再度索取工钱而言。

如果把第 21 行至第 22 行的行文，与其它各行作一比较，就会发现，其书写方法多少有些不太自然。[从第 1 行]至第 20 行所记载着的是合同内容，第 23 行以下为签署姓名的部分，但它们的顶格书写格式并不一致。尤其是第 22 行，是从距离顶格以下很远的地方才开始写起的。根据上述情况可以认为，第 21 行至第 22 行的内容很可能为后加的。该两行文字所记述的或许为前面已经记述过的、关于在运送途中所造成的谷物损失该如何赔偿的内容，但它究竟意味着什么，尚不清楚。

(No.003) 文書番号 F209:W69

サイズ：縦 19.5cm　横 42.5cm

01　bičin jil qubi sara-yin tabun sinede
猿の年の正月の初旬の五日に、
猴儿年正月初五日，

02　bi sarambai tariyan keregtü boljᵘ kii
私、サラムバイは穀物が必要となって、ヒー・
我撒蓝伯，为要口粮使用，

03　temür-eče yabuqu šim-iyer tayar naiman
テムルから通行する枡によって一石八
问到奇帖木儿处借讫得行用

04　šim buγdai asayuju abuγ_a mọn
斗の小麦を借りて取った。同
升一石八斗升小麦。

05　on-u naiman sara-ṯur büḏgeju ọgkü bolba
年八月に完済することになった。
约定同年八月还毕。

06　en_e buγdai-yi büḏgeju ọgtel bi saranbai
この小麦を完済する間に、私、サランバイが
至将此小麦还毕，我撒蓝伯，

07　γadan_a dotan_a bui ügei bolbasu tusudai
外にも内にももいなくなれば、同取代
如东西迷闪，则同取代保人、

08　bausin bi degü tayambai yayun-a ber
保人である私、弟タガムバイは何事も
我弟弟塔甘伯一面

09　ụlü siltan büḏgeju ọgsü kemen bičig
理由にすることなく完済しようと文書を
替还无辞。为此

10　ọgbe
与えた。
立文。

11　en_e nišan bi saranbai ※

このニシャンは、私、サランバイ。※
此手印，我撒蓝伯。※

12 en_e nišan bi taγambai ※
このニシャンは、私、タガムバイ。※
此手印，我塔甘伯。※

13 ger<e>či bi qarataγur ※
証人、私、カラタグル。※
知见人，我哈喇塔吾儿。※

14 ger<e>či bi köke
証人、私、コケ。
知见人，我阔阔。

15 bičin jil qubi sara-yin tabun sinede
猿の年の正月の初旬の五日に
猴儿年正月初五日，

16 bi šara tariyan keregtü bolju temür-eče
私シャラは穀物が必要となって、テムルから
我失剌，为要口粮使用，问帖木儿

17 yabuqu šim-iyer yisün šim buγdai
通行する枡によって9斗の小麦を
处借讫得行用升九斗升小麦。

18 asaγuju abuγ_a en_e buγdai-yi büdgejü
借りて取った。この小麦を完
至将此小麦还毕，

19 ǫgtel bi šara {bui} γadan_a dotan_a
済する間に、私シャラが外にも内にも
我失剌，如东西迷闪，

20 bui ųgei bolbasu tunsudai bausin
いなくなれば、同取代保人である
则同取代保人、

21 bi qarabuq_a yaγun-a ųlü si<l>tan
私ハラブハは何事も理由にすることなく
我哈喇不花一面替还

22 büdgejü ǫgsü kemen bičig
完済しようと文書を

无辞。为此

23 o̱gbe
与えた。
立文。

24 en_e nišan bi šara ※
このニシャンは、私、シャラ。※
此手印，我失剌。※

25 en_e nišan bi qarabuq_a ※
このニシャンは、私、ハラブハ。※
此手印，我哈喇不花。※

26 ger<e>či bi sayitemür ※
証人、私、サイテムル。※
知见人，我塞帖木儿。※

27 ger<e>či bi toquči ※
証人、私、トホチ。※
知见人，我脱火赤。※

【注釈】

01, 15 qubi sara: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。

01, 15 sinede: F61:W9 の注 01-02 sini-te を参照。

03, 17 yabuqu šim: F61:W9 の注 14-15 yabuqu šim を参照。

03 tayar: F61:W9 の注 05 tayar を参照。

04, 17 šim: F61:W9 の注 05 tayar を参照。

04, 06, 17, 18 buydai: F61:W9 の注 05 buydai を参照。

04, 18 asayuǰu: Sečenčoytu（1988: 84a）の aysu「借債」に、aysu から派生する語として「質問する」の意味の asayuqu と同形の綴りが挙げられており、これが aysuqu の意味であると説明されている。ここではこれを容れて、asayuqu は aysuqu と同義と考える。なお、F17:W9 の 2, 4 行目、F79:W7 の 3 行目に見える asuǰu は asayuǰu の口語形であると判断した。

04, 18 abuy_a: F61:W9 の注 25 abuy_a を参照。

05 büdgeǰü: büdgeǰü は bütügeǰü の口語表記と判断した。Cf. *bütχə*（Ramstedt 1976）。

06 en_e: ene を分かち書きした en_e は、先古典期モンゴル文字資料、たとえばトルファン出土の「人間の徳についての詩」（Ligeti 1972a: 153-158）や、「ある告訴にかんする法律的な宣告」（Ligeti 1972a: 222-223）にも見える。

06 o̱gtel: o̱gtel は ögtel_e の-e が書き落とされたか、その口語形（ogtěl）かのどちらかであろう。

06, 11 saranbai: sarambai の m の“下向きの角”を書き忘れたものであろう。

07, 19-20 yadan_a dotan_a bui ügei bolbasu:《yadan_a dotan_a（外にも内にも）bui ügei（いる、いない）bolbasu（なるならば）》は、逃亡することを意味する。これと同一或いは類似の表現は、MON01 の 14 行目[yadaγ]si dotaγsi o[dabasu]「[外]に内に[行くならば]」、F250:W3 の 6-7 行目 ger-tür bui ügei yadan_a dotan_a bolbasu「家にいなくなったり、外に内になったならば」、等がある。この yadan_a dotan_a bui ügei bolbasu はこうした行方不明となること表す表現形式のひとつである。ウイグル文文

書にもこれと類似した表現が見られ、《ičtin（内へ）taštïn（外へ）bolsar（なるならば）》、《örü（上へ）qodï（下へ）bolsar（なるならば）》、《yoq（ない）bar（ある）bolsar（なるならば）》とある。黒城漢語文書にも同類の契約文書は多く、李逸友（1991: 186-190）に収められている。これらの文書における、対応する漢語の言い回しを列挙すると、F2:W57「東西迷閃」、F95:W1「見不辦閃趟失走」、F125:W40, F62:W28, F62:W27「走在東西」（李逸友 1991: 187-188）。

07-08 tusudai bausin: 共同債務者（同借人）を同取人という（仁井田陞 1960: 770-771）。債務者が支払期限を越えても返還できない場合、代理返還の責を負うものを代保人という（仁井田陞 1960: 548-551）。

16 temür: このテムルは 2-3 行目に記されているヒー・テムル（kii temür）であろう。

20 tunsudai bausin: 本文書の注 07-08, tusudai bausin を参照。

01, 15 qubi sara: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。

01, 15 sinede: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-ṯe。

03, 17 yabuqu šim: 参见 F61:W9 注释 14-15 yabuqu šim。

03 tayar: 参见 F61:W9 注释 05 tayar。

04, 17 šim: 参见 F61:W9 注释 05 tayar。

04, 06, 17, 18 buydai: 参见 F61:W9 注释 05 buydai。

04, 18 asayuǰu: Sečenčoytu 1988: 84a 中，解释 aysu“借債”一词时，曾列举由 aysu 派生的、跟表示“询问”之意的 asayuqu 持有同样词形的形式，并将其解释为和 aysuqu 同义。由此，可以认为 asayuqu = aysuqu。另外，F17:W9 的第 2 行和第 4 行、F79:W7 的第 3 行中出现有 asuǰu 的形式，将其可认为是 asayuǰu 的口语形式。

04, 18 abuy_a: 参见 F61:W9 注释 25 abuy_a。

05 büḏgeǰü: 认为 büḏgeǰü 是 bütügeǰü 的口语形。Cf. *būtχə*（Ramstedt 1976）。

06 en_e: 即 ene 的分写形式。

06 ǫgtel: ǫgtel 这一形式，或许为漏写 ögtel_e 之_e 字符的形式，或许为按 ögtel_e 之当时的读书音写的形式。

06, 11 saranbai: saranbai 是将 sarambai 中的 m 写作 n。

07, 19-20 yadan_a dotan_a bui ügei bolbasu: 《yadan_a dotan_a（外、内）bui ügei（有、无）bolbasu（如、的话）》是躲避之意。与此同样或类似的例子有 MON01 的第 14 行中的[yaday]si dotaysi o[dabasu]、F250:W3 的第 6-7 行中的 ger-tür bui ügei yadan-a dotan_a bolbasu 等。在回鶻文文书中也能看到类似的表现。如《ičtin（往内）taštïn（往外）bolsar（如成为）》、《örü（往上）qodï（往下）bolsar（如成为）》、《yoq（没）bar（有）bolsar（如成为）》等。黑城汉语文书中有很多类似的契约文书，李逸友已将这些收录（1991: 186-190）。这些文书中与其相对应的汉语表达方法，如 F2:W57“东西迷闪”、F95:W1“见不办闪趟失走”、F125:W40, F62:W28, F62:W27“走在东西”（李逸友 1991: 187-188）等。

07-08 tusudai bausin: 将共同债务人（同借人）称同取人（仁井田升 1960: 770-771）。债务人超过借款期限而不能返还时，称代理返还的人为代保人（仁井田升 1960: 548-551）。

16 temür: 这个 temür 可能是第 2-3 行中所记载的奇帖木儿（kii temür）。

20 tunsudai bausin: 参见本文书的注释 07-08, tusudai bausin。

【解説】

二つの内容が一枚の紙に書かれている。どちらも小麦の貸借に関する契約文書で、日付は「猿の年の正月の初旬の五日」である。借主は初めの文書がサラムバイ、後の文書がシャラと異なっているが、貸主は最初の文書がヒー・テムル、後の文書がテムルとなっており、同一人物であると考えられる。いずれもテムルなる人物が他者に貸し出した穀物に関する契約について記したものなので、一枚の紙に書かれたのだろうか。書式は返済期限に関する記述の有無を除けば、ほぼ同一である。

这是一种把两项内容写在同一张纸上的文书。而这两项内容均为有关小麦借贷的契约文书。契约形成日期为“猴儿年正月初五日”。契约中出现的债务人，前后并不一致，在前文里做撒蓝伯（サラムバイ），而在后文里却做失剌（シャラ）。其债权人，在前文做奇帖木儿（ヒー・テムル），而在后文里做帖木儿（テムル），即这是同一个人。由于这两项内容所记写的，均为叫帖木儿的人向他人贷放（出借）谷物（粮食）的契约，所以将二者书写在同一张纸上。这两项契约的行文格式，除了还贷期限的有无以外，其余内容大致相同。

(No.004) 文書番号 MON01

01 ///' T///
…
…

02 ///[t]aγar buγdai nige[n]///
…石の小麦、一…
…石小麦，一…

03 ///W γurban taγar[-tur]///
…三石［に］…
…三石…

04 /// baitemür qoyar [on]///
…バイテムルが二［年］…
…白帖木儿两［年］…

05 ///N-W qoyin_a [eke]///
…の後…
…之后…

06 ///[bu]γdai nigen taγar [ögbe]///
…小麦一石［を与えた］…
…［与了］小麦一石…

07 ///' ker ber qoyar [on-u]///
…もし二［年の］…
…若两［年］…

08 ///[e]s_e γarbasu k[ümün]///
…出ないならば、［人］…
…［不］出，［人］…

09 ///N asiγ ü[gei basa]///
…利息［なしで、また］…
…［无］利息，［又］…

10 ///YN küliyeber ü[kübesü]///
…フリイェベルが［死ぬなら］…
…库力耶别儿［若死］…

11 /// morin mital[ǰu]//
…馬がひるん［で］…
…马畏缩…

12 /// osul boǰu [ükübesü]///
…過失があって［死ぬならば］…
…因过失［死］…

13 /// basa esentemür[-ün]///
…またエセンテムル［の］…
…又也先铁帖木儿［之］…

14 ///[γadaγ]si dotaγsi o[dabasu]///
…［外］に内に［行くならば］…
…［东西迷闪］…

15 ///L γurban t[aγar nige]///
…三［石、一］…
…三［石，一］…

16 /// kemen morin ǰil [arban]///
…と言って、馬の年［十］…
…如此，马年［十］…

17 ///ende
…ここに
…在此…

18 /// bi sartaγul ///
…私、サルトール…
…我撒儿桃勒…

19 /// bi baitemür ///
…私、バイテムル…
…我白帖木儿…

20 /// bi buq_a temür ///
…私、ブハ・テムル…
…我不花帖木儿…

21 ///bi daulaš_a ///

…私、ダウラシャ…
…我倒喇沙…

22 ///bi taštemür ///
…私、タシュテムル…
…我答失帖木儿…

23 ///bi ümer ///
…私、ウメル…
…我兀马儿…

【注釈】

02 buγdai: F61:W9 の注 05 buγdai を参照。
03, 06 taγar: F61:W9 の注 05 taγar を参照。
05 eke: eke の後に続く語が不明なので、この eke の意味を確定できない。
10 küliyeber: 人名であると解した。
11 mital[ǰu]: イリンチンが補ったテキストには mitalǰu とあるが、mital-という動詞は今のところ確認できない。これを mita-l-ǰu と分解し、-l-を動詞を作る接尾辞と解しておく。なお、mital の確認できる用例には、mital ügei（「何事に対してもひるまない」『アルタン=ハーン伝』（吉田順一他 1998: §210））がある。
14 [γadaγ]si dotaγsi o[dabasu]: F209:W69 の注 07, 19-20 γadan_a dotan_a bui ügei bolbasu を参照。
17 ///ende: この行だけ字が薄い。後で書き加えられたものかも知れない。
21 daulaš_a: ペルシア語 daulat šā ダウラト・シャーに由来する人名（ただし、daulat はアラビア語語彙）。漢語史料では多く「倒剌沙 tau-la-ṣa」と写す。本箇所のウイグル文字表記は、漢字表記に由来する可能性がある。
23 ümer: アラビア語ʿumar ウマルに由来する人名。漢語史料では多く「烏馬児」に作る。

02 buγdai: 参见 F61: W9 注释 05 buγdai。
03, 06 taγar: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。
05 eke: 因不明 eke 后接的词，所以很难确定 eke 之意。
10 küliyeber: 解释为人名。
11 mital[ǰu]: 亦邻真补写的原文中有 mitalǰu。现无法确认 mital-这一动词。将该词分解为 mita-l-ǰu 的话，-l-为构成动词的结尾辞。确认 mital 的例子有 mital ügei “无论对什么事也不畏怯”《阿拉坛汗传》（吉田顺一他 1998: §210）。
14 [γadaγ]si dotaγsi o[dabasu]: 参见 F209:W69 注释 07, 19-20 γadan_a dotan_a bui ügei bolbasu。
17 ///ende: 只是这一行的字迹为淡薄，该行或许为后来加写的。
21 daulaš_a: 该人名是从波斯语 daulat šā 演变而来。（但 daulat 是阿拉伯词汇）。在汉文史料中多处写为“倒剌沙 tau-la-ṣa”。该处的畏吾文字的表记可能是从汉字演变而来的。
23 ümer: 从阿拉伯语ʿumar 演变而来的人名。在汉文史料中多处记为“乌马儿”。

【解説】

MON01, MON06 の原件は現在行方不明であり、内モンゴル大学の故イリンチン教授が原件を書写したもの、及び下部が切れている原件のコピーしか利用することができなかった。MON01 と MON06 は一枚の紙にコピーされているが、内容をみると、同一文書の二つの部分とは考え難いので別の文書として解釈した。ローマナイズ、訳はコピーに拠り、コピーで読むことが出来なかった箇所につ

いては、故イリンチン教授の書写したものを参照した。MON01 の 2～16 行目の各行末尾の[ ]は故イリンチン教授のローマナイズに拠る。
借り主をバイテムルとする、二年の契約期間を持った小麦の貸借に関する馬の年の契約文書であろうと思われるが、上下が破損しているため、詳しい内容はよく分からない。

MON01, MON06 的原件现下落不明，内蒙古大学已故亦邻真教授抄写了原件，并只利用了下部破损原件的复印件。虽将 MON01 和 MON06 复制在一张纸上，但观之内容，很难认为它们是同一份文书的两部分，所以将它看作另一份文书。拉丁音写以及翻译依据了复印件，复印件中难读之处参照了已故亦邻真教授的抄本。MON01 的第 2～16 行的各行末尾的[ ]内依据了已故亦邻真教授的拉丁音写。
这好像是一件债务人叫白帖木儿（バイテムル）的、合同期限为二年、于马儿年形成的、关于小麦借贷的契约文书。因上下均有破损，所以其详细内容不易理解。

(No.005) 文書番号 MON02

サイズ：縦 20.2cm　横 43cm

01 ging bau-ača bi saban qonin keregtü bolǰu
ギンバオから私サバンは羊が必要になって
我撒班，为要绵羊使用，

02 öber-ün törügsen abdula nereṭü arban
肉親であるアブドラという名前の十
将自己的名叫阿卜堵剌的

03 tabun nasutu degüben dörben γunan qonin
五歳の自分の弟を、四頭の三歳のオス羊の
十五岁的亲弟，为四只三岁公绵羊，

04 demleǰü ögbe ede dörben γunan qonid
質草として与えた。これら四頭の三歳のオス羊を
典当给了京保。

05 ali üdür abčirabasu qonin-ṯur '??///
いつか持ってくるならば、羊には…
【我】如有一日将该四只三岁公绵羊还来，

06 töl ügei kümün-ṯür kölesün ügei
子羊なしで、人には賃金なしで
约定羊…不索要羔羊，人不索取工钱。

07 γaryaqu bolba en_e abdula ali ber
出すこととなった。このアブドラがいかようにも
该阿卜堵剌如有因

08 tengri ǰayaγabar ükübesü oryubasu
天命によって死ぬならば、逃亡するならば、
天命而死亡，或逃亡，

09 qulaγai kibesü yaγubar ging bau qor
盗みをなすならば、何であれギンバオが害を
或行窃，或因故京保加害【于阿卜堵剌】，

10 kibesü bi saban-u deger_e kemen
なすならば、私サバンの上に、と言って、
我撒班将一面承当。

11 en_e nišan bi saban ※
このニシャンは、私、サバン。※
此手印，我撒班。※

12 qamtu tu{'}tuγ ögkü bi alqudai ※
共に質を与える、私、アルホダイ。※
同典当人，我阿勒忽歹。※

13 en_e nišan bi abdula ※
このニシャンは、私、アブドラ。※
此手印，我阿卜堵剌。※

14 gereči bi aračabš_a ※
証人、私、アラチャブシャ。※
知见人，我阿剌察卜沙。※

15 γaqai ǰil naiman sara-yin dörben sinede
豚の年の八月の初旬の四日に
猪儿年八月初四日，

16 bi bayan bičibe ※
私、バヤンが書いた。※
我，伯颜书写。※

17 gereči bi seǰeg tebiš ※
証人、私、セイジェグ・テビシュ。※
知见人，我塞集克迭威失。※

18 gereči bi indu ※
証人、私、インド。※
知见人，我忻都。※

【注釈】

02 abdula: アラビア語 'abd-ullāh アブドッラーに由来する人名。

03 γunan: 家畜の年齢別用語として、γuna(n)「三歳の牡家畜」、γunaǰi(n)~γunǰi(n)「三歳の牝家畜」、döne(n)「四歳の牡家畜」がある。これらの語は、語幹の γu-, dö-が、モンゴル語の基本数詞である γurba(n)「三」、dörbe(n)「四」の語基と同じであるから、モンゴル語起源であることが分かる。γunan は、現代モンゴル語で、ふつう三歳の牡牛や駱駝に使われ、羊には使われない（三歳の羊は kǐjalang と称される）。だが γunan はかつては今より広い意味をもっていたようで、『元朝秘史』には「temüge_otčigin qunan （「中忽難」：傍訳「三歳」）büle'e」（§60）とあって、人の年齢としても使われている。この語のかつての意味の範囲を推定する上で、歴史上モンゴル族と牧畜の点で深く関わってきた近隣のツングース系とチュルク系の部族の言語が参考となる。満州・ツングース系諸族はこの語をモンゴル語から借用したが、例えば満州語では、gūna は「three-year-old cow（三歳の牡の牛）」を表わし、それはモンゴル語の γuna(n)に由来するとされる（Rozycki 1994: 94）。また、エヴェンキ語では、この語は gonaŋ, という形で使われ、「①（名詞）三歳の牡の牛; ②（形容詞）三歳の（牡の家畜、獣）」を言う（杜・道尔吉 1998: 232）。チュルク系のカザフ族では qunan という形で借用され、「三歳の牡の家畜」を指す（Poppe 1991）。さらに調べると「①三歳の牡の馬; ②三歳の牡の馬、牡の羊」の意味ももち、qunan qoy は「三歳の牡の羊」を指す（金炳喆 1979: 817）。『元朝秘史』とカザフ語における形から、この語の原形は qunan であったことが分かる。以上から、モンゴル語の γunan は、「三歳の牡の家畜、獣」（エヴェンキ語による）を指していた可能性があり、本文書の γunan qonin は、「三歳の牡の羊」（カザフ語による）の意味で用いられたと理解される。

04 demleǰü: 「質入れする」を意味する「典」（近世音 tien）に名詞を動詞化する接辞 le が接続して形成された動詞と解釈した。同義の漢語として「当」（近世音 taŋ）もあり、宋元期の文書・戯曲など漢語史料には両方頻見されるが、ハラホト漢語文書には、「典」が用いられる傾向にある。例えば、Y1:W137, F277:W55（李逸友 1991: 152, 189）などを参照。

10 deger_e: deger_e の_e は通常左側に払うが、この_e は r と分かち書きされた上に右側に払われている。

15 sinede: F61:W9 の注 01-02 sini-ṯe を参照。

02 abdula: 是从阿拉伯语'abd-ullāh 演变而来的人名。

03 γunan: 作为家畜年龄用语，γuna(n)指“三岁的牡家畜”，γunaǰi(n)~γunǰi(n)指“三岁的牝家畜”，döne(n)指“四岁的牡家畜”。这些用语中的词根γu-, dö-与蒙古语基数词γurba(n)“三”、dörbe(n)“四”的词根一致。可见这些词起源于蒙古语。γunan 在现代蒙古语中一般指三岁的牡牛和骆驼，而不指羊（三岁的羊叫 kǐjalang）。但在古代 γunan 的使用范围比现在广，《元朝秘史》中有“temüge_otčigin qunan（‘中忽难’：傍译‘三岁’）büle'e”（§60），这里用于人的年龄。为了推定 γunan 在古代所应用的意义范围，不仿参考历史上与蒙古民族在牧畜业方面有着密切关系的通古斯系和突厥系部族的语言。满州・通古斯诸族也借用了蒙古语。例如，满语中 gūna 表示“three-year-old cow（三岁的牡牛）”。该形式来源于蒙古语的 γuna(n)（Rozycki 1994: 94）。在鄂温克语中，这个词以 gonaŋ 的形式使用，并表示“①（名词）三岁的牡牛；②（形容词）三岁的（牡家畜、兽）”等义（杜・道尔吉 1998: 232）。突厥系的哈萨克族以 qunan 的形式借用了该词，指“三岁的牡家畜”（Poppe 1991）。在哈萨克语中，该词还表示“①三岁的牡马；②三岁的牡马、牡羊”等意。如 qunan qoy 是指“三岁的牡羊”（金炳喆 1979: 817）。从《元朝秘史》，以及哈萨克语中的形式可以看出，该词的原形为 qunan。由以上可知，蒙古语的 γunan 原来很有可能指“三岁的牡家畜、兽”（据鄂温克语），而将该文书中的 γunan qonin 可以理解为“三岁牡羊”（据哈萨克语）。

04 demleǰü: 该形式可解释为，表示“典押”意义的“典”上，附加名词构成动词的后缀-le 而形成。在汉语中，做为其同义词的还有“当”一词。且这两个词在宋元时期的文书和戏曲等汉语史料中均频

繁出现。然而，在黑城汉文文书中，往往使用“典”这一词的倾向。有关该词的实例参见 Y1:W137, F277:W55（李逸友 1991: 152, 189）等。

10 deger_e: deger_e 之_e 通常写在左侧，但在这里不仅把_e 和 r 隔开了，又将_e 写在右侧。

15 sinede: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-te。

【解説】

サバンがギンバオから四頭の三歳のオス羊を受け取り、その質草としてアブドラという自分の弟を与えることに関する契約文書。4-7 行目の「これら四頭の三歳のオス羊をいつか持ってくるならば、羊には…子羊なしで、人には賃金なしで出すこととなった」とは、サバンが借りたのと同様の四頭の三歳のオス羊をギンバオに返す際には、利息としての子羊をつける必要はなく、またギンバオも質草となっていた間のアブドラに対する賃金を払わなくてもよい、ということを言っているのであろう。10 行目の「私サバンの上に」というのは「私サバンが責任を負う」という意味の言葉であると思われる。12 行目には、サバンとならんで質を提供する人物としてアルホダイという人物が見えているが、これが何らかの具体的な責任を負うか否かは明確でない。なお、15-16 行目からこの契約書はバヤンという人物が書いたものであることが分かるが、14 行目の証人アラチャブシャはこの契約そのものに対する証人、17 行目のセイジェク・テビシュ、18 行目のインドはバヤンが契約書を書いたことに対する証人である。

这是一件关于撒班（サバン）将自己的弟弟阿卜堵剌（アブドラ）抵押给京保（ギンバオ），从京保那里租借到四只三岁公羊的契约文书。

根据第 4 行至第 7 行所记述的内容：“【我】如有一日将该四只三岁公绵羊还来，约定羊…不索要羔羊，人不索取工钱”，这似乎在说，撒班将用与所借的那四只三岁公羊相同的羊只向京保还清债务时，则没有必要附带小羊。而京保也不必支付阿卜堵剌因抵押而留居期间的工钱。

其第 10 行中的：“bi saban-u deger_e”这句话，则指的是：“我撒班将一面承当”的意思。

在第 12 行里，出现和撒班一样出具（提供）抵押物品的人物阿勒忽歹（アルホダイ），但这位阿勒忽歹是否承担具体责任，则不明确。

根据其第 15 行至第 16 行可知，这件契约文书是由叫伯颜（バヤン）的人写的。其第 14 行的证人阿剌察卜沙（アラチャブシャ）是该契约行为的证人。而第 17 行中的赛集克迭威失（セイジェク・テビシュ）和第 18 行中的忻都（インド），则是伯颜写这件契约文书的证人。

(No.006) 文書番号 F79:W6

サイズ：縦 27cm　横 34.3cm

01　/// qorin tabun-a
…二十五日に
…二十五日

02　///[kereg-t]ü bolǰu lorsi
…［が必要］となり、ロルシ
…［为要…使用］，罗儿失

03　/// bolǰu si ǰarim
…となり、一石半

…使用、一石半

04 ///Y aysuǰu abuba
…を借りて取った。
借得…

05 ///[sa]ra-yin qorin tabun-a
…月の二十五日に
…月二十五日

06 /// čau tabun šim
…鈔、五斗
…钞，五斗

07 ///[ög]kü bolba tere kem öbür
［与え］ることとなった。その期限のうちに
［给与］。若在限内不按此

08 es_e bütegebesü mǫn yosuγar as_iγ
完済しなければ、その通りに利息を
还毕，其利息照此

09 yabuqu bolba ene tariyan[-i]/// bütegetele
行うこととなった。この穀物［を］完済するまでに、
行要。至还毕此粮，

10 /// sonu///(M?) b[ui]///ügei bolbasu
…ソヌが…［いたり］いなくなったりすれば、
若索奴东西迷闪，

11 tungsu ṯai bausin /// bi maltan yaγun
同取代保人である私、マルタンが何ごと
同取代保人我麻儿坦

12 -ṯur ber ülü siltan bütegeǰü
にも言い訳せずに完済して
一面替还无辞。

13 ögsügei kemen bičigiyen ögbei
あげよう、と文書を与えた。
为此立文。

14 ene nišan bi sona-yin ※
このニシャンは、私、ソナの。※
此手印 我索纳的。※

15 ene nišan bi maltan
このニシャンは、私、マルタン。
此手印 我麻儿坦。

16 ger<e>či sombu ※
証人ソンボ。 ※
知见人 唆木卜。※

17 ger<e>či simu
証人シム。
知见人 失木。

【注釈】

04 aγsuǰu: F209:W69 の注 04, 18 asaγuǰu; F17:W9 の注 02, 04 asuǰu を参照。
06 čau: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。
06 šim: F61:W9 の注 05 taγar を参照。
07 öbür: 空間の範囲・位置を表す öbür「内」が時間の範囲・前後を表わす語として、用いられたものであろう。
08 as_iγ: 短尾の s での分かち書きは tus_a、es_e などの例を、先古典期、古典期を問わずモンゴル文字資料に数多く見ることができる。
08-09 as_iγ yabuqu: 「利息を支払う」の意味である。また F250:W3 の注 06 singsi yabuqu を参照。
10 sonu: F79:W5 の 2 行目にはロルシ・ソヌ（lorsi sonu）という人物が現れる。
11 tungsu ṯai bausin: F209:W69 の注 07-08 tusudai bausin を参照。

04 aγsuǰu: 参见 F209:W69 注释 04, 18 asaγuǰu; F17:W9 注释 02, 04 asuǰu。
06 čau: 参见 F61:W6 注释 12 süke čau。
06 šim: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。
07 übür: 这大概是用表示空间范围和位置的 öbür“内”一词，来表示时间范围和前后的意志。
08 as_iγ: 在古代蒙古文资料中，多处见有短尾的 s 隔开写的例子，如 tus_a、es_e。
08-09 as_iγ yabuqu: “支付利息”之意。参见 F250:W3 注释 06 singsi yabuqu。
10 sonu: F79:W5 第 2 行中出现过 lorsi sonu 之名。
11 tungsu ṯai bausin: 参见 F209:W69 注释 07-08tusudai bausin。

【解説】

ソナがマルタンを同取代保人としてロルシ某から穀物（おそらく一石半）を借りることに関する契約文書。7-9 行目から、一定の期限内に借りた穀物を完済できなかった場合に、利息を払う形式の契約であったことが分かる。借主がいなくなれば保証人が責任をとるという内容の文言が見られ、かつ署名の先頭に借主がくるという文書の形式、および SWN までが一致していることなどから考えると、10 行目の sonu と 14 行目 sona は同一人物と考えざるをえない。

这是一件关于索纳（ソナ）以麻儿坦（マルタン）为同取代保人，而从罗儿失某某（ロルシ某）借谷物（粮食）（大约为一石半）的契约文书。

根据第 7 行至第 9 行的内容可知，这是一种在一定期限内债务人如果不能还清全部债务，就要[另外再]支付利息的借贷形式。

引起注意的是，在这件契约文书的行文措辞中，能够得知，如果债权人不在，就要由担保人负责的

内容；而且其文书形式为，在契约文书上签署姓名时，债权人的姓名要列在最前面；甚至连 SWN 都没有什么区别。根据这些情况，只得认为，第 10 行中的 sonu 和第 14 行中的 sona 应为同一个人。

(No.007) 文書番号 F62:W19

サイズ：縦 27.5cm　横 28cm

01　(bolba) T///
(なった) …
(成为) …

02　irgenü yosuγar '?///SKX: Y'R///
民のしきたりにしたがって…
依民人之例…

03　ba čan///čoŋǰ[a]///nai sambu soǰa?///
私たちチャン…チョンジ[ャ]…ナイ、サムブ、ソジャ…
我等 čan…čoŋǰ[a]…nai、三卜、soǰa…【应为复数人名】

04　ögtele bui ügei γadan_a dotan_a
与えるまでにいたりいなくなったり、内に外に
[还] 毕前，若东西迷闪，

05　bolbasu tung suu tai [bausin]
なったならば同取代 [保人である]
同取代 [保人]

06　bi toquči yaγun-tur ber ülü
私トホチが何事においても
我脱火赤依照此书

07　siltan en_e bičigün yosuγar büdg[eǰü]
理由とすることなく、この文書の通りに完全に準備して
一面替还无辞。

08　ögsü kemen en_e bičig ögbe
与えようといってこの文書を与えた。
为此立文。

09　en_e nišan bi čoŋǰa///
このニシャンは私、チョンジャ…
此手印 我 čoŋǰa…

10　en_e niš[an]///

このニシャンは…
此手［印］…

11 en_e ni[šan]///
このニシャンは…
此手［印］…

12 gereči ///
証人…
知见人…

13 gere[či]///
証人…
知见人…

14 bi qi///
私、キ…
我 qi…

【注釈】

02 irgenü yosuγar: F79:W7 の注 05 irgen-ü yosuγar を参照。

03 čoŋ[a]: čoŋ[a]は 9 行目にも再び現れる。

04-05 bui ügei γadan_a dotan_a bolbasu: F209:W69 の注 07, 19-20 γadan_a dotan_a bui ügei bolbasu を参照。

05 tung suu dai [bausin]: F209:W69 の注 07-08 tusudai bausin を参照。

02 irgenü yosuγar: 参见 F79:W7 的注解 05 irgen-ü yosuγar。

03 čoŋ[a]: čoŋ[a]这一形式，在第 9 行的署名部分里，也作为署名人中的第一人来出现。

04-05 bui ügei γadan_a dotan_a bolbasu: 参见 F209:W69 的注解 07, 19-20 γadan_a dotan_a bui ügei bolbasu.

05 tung suu dai [bausin]: 参见 F209:W69 的注解 07-08 tusudai bausin.

【解説】

チャン…、チョンジ[ャ]…等を借り手とし、トホチをその同取代保人とする貸借に関する契約書であろう。貸し手や何についての貸借であるかは破損箇所に記載されていたのであろう。

这应该是一件关于借贷的契约文书。其中，čaŋ（チヤン…）、čoŋ[a]（チョンジ［ャ］…）等人是租借人（债务人），而脱火赤（トホチ）则是其同取代保人。

但是关于其中必不可少的出租（出借）人（债权人）是谁以及他们互相之间借贷的是什么东西（物品）等内容，当初（原本）无疑被记写在现已破损缺失的地方。

(No.008) 文書番号 F135:W80

サイズ：縦 22cm　横 24.5cm

01 arsl[an?] ?? ?? temür-ün ayimay-un bögken
アルス［ラン？］…テムルのアイマグのブグケンは
阿儿思［兰？］…帖木儿爱马之卜可肯

02 kičir keregtü bolǰu sibayučin-u
キチル駱駝が必要となり、シバグチンの
为要 kičir 骆驼使用，在昔宝赤之

03 mǫnggüǰeng-ün ayimay-un qulatai-ača
モングジェンのアイマグのホラタイから
蒙古章爱马之忽喇台处

04 nigen dönǰi kičir abur_un ün_e
一頭の四歳の雌のキチル駱駝を取るのに、その代価である
取一峰四岁 kičir 骆驼。以

05 inu nigen bökün quqaγčin temegen
一こぶの灰白色の雌駱駝を
单峰灰白色雌驼充其值。

06 ögbe mo{Y}n_a qoyin_a ebečin
与えた。今後病気
与了。今后如果疾病

07 bu{Y}su ečegs_en turbasu
ではなく、痩せたら
以外，消瘦

08 ǰasay-un yosuyar qulayai bolsuγai
ジャサグの通りに泥棒【の罪】となろう
将依札撒治偷盗罪。

09 kemen bi bičig-iyen ögbe
と、私は文書を与えた。
为此立文。

10 ükerǰil quǰir sara qorin naiman_a
牛の年の二月二十八日に
牛儿年二月二十八日。

11 bi bögken bičibe ※
私、ブグケンが書いた。※
我卜可肯书写了。※

12 gereči küṯeder

証人クテデル。
知见人 苦帖迭儿。

13 gereči ölgentemür
証人オルゲンテムル。
知见人 斡儿干帖木儿。

14 ???? ????
…
…

【注釈】

01 ayimaγ: 『元朝秘史』では阿亦馬黒 (ayimaq) の傍訳を「部落」とするのみであり、元朝期の社会組織の実態を明らかになしえない。ayimaγ は後代になって、種類、種族、部類、盟（行政単位）などの意味に使われるようになったが、共通しているのは、“ある要素を共有する事物・事象・概念を内包している枠組み”という点である。ayimaγ については、ウラディーミルツォフの「古い氏族（オボグ）が細かく分裂して生まれた、様々な血縁につながる血縁家族の連合あるいは集合体」という有名な説明がある (Владимирцов 1934: 136-137)。これは確かに上に述べた“ある要素を共有する事物・事象・概念を内包している枠組み”を逸脱していないが、これがモンゴル言語圏のどの部分にまで通用するのか。ayimaγ の実態を把握しようとするならば、“共有されているある要素”を明らかにしなければならないが、たいていの場合（対訳語彙をもってしても）、それを確定できないところに ayimaγ の語釈の難しいところがある。

元代漢語文献では音写した形で「愛馬」が現れる。『山居新語』巻 1（197）に「至元四年（1338）…上亟命分其酒於各愛馬【即投下】」とあり、愛馬＝投下という説明がなされる。蒙漢合璧碑文では、ayimaq aima·ud が「各枝児」と訳出される（1314 年盌屋重陽万寿宮アユルバルワダ聖旨・1321 年易州龍興観ダギ懿旨。呼格吉勒图、萨如拉 2004: [14]l.7, [31]l.4)。

『元典章』にも、多く「枝児」が見られ、これが ayimaγ ~ ayimaq の定訳であることが窺えるほか、音写した形の「愛馬」もみられる。例えば以下を参照。『元典章』典章 49・刑部巻 11・諸盗・強盗・剜豁土居人物依常盗論（49/11a-b)：「根脚裏成吉思皇帝時分、立札魯花赤呵、諸王・駙馬各怯薛歹・各愛馬蒙古・色目人毎奸盗・詐偽・婚姻・駆良等事、交管来」。『元典章』典章 2・聖政 1・恤站赤・延祐 7 年 11 月（2/17b)：「今後、諸衙門并諸王・公主・駙馬各枝児、常加撙節、如有必合差人馳駅幹辦公事，斟酌応副、務従省減」。

村上正二（1940: 29-33）は投下と愛馬について、『元典章』に投下・愛馬が併記される事例（典章 8・吏部巻 2・官制 2・承蔭・整治駆陞品級 8/13b-15b：「各投下有缺用人呵、只教他自愛馬裏選着委付、大数目裏人毎不教冒着入去」）から、投下は本投下（遊牧本領）と食邑（漢地・江南などの分領）を包摂するのに対し、愛馬は本投下のみを指すとの見解を示した。『元典章』には投下・枝児が併記される事例（典章 9・吏部巻 3・官制 3・投下官・投下達魯花赤 9/7b-8a：「今後、諸王・駙馬各投下各枝児裏行與文書」など）もあり、投下＞愛馬＝枝児とみて大過なかろう。

また、杉山正明（1993: 187-188）は、「モンゴル時代の漢文文献にみえる「投下」という単語はその麾下の遊牧集団、さらには時にその所領と属民をもさし、少なくともそのうちの集団や所領・属民についてはモンゴル語のアイマク aimaq に相当すると見られる」とまとめる。

02 kičir: 『元朝秘史』、『アルタン=ハーン伝』にも現れる。何か特色をもつ西方産の駱駝と思われる（吉田順一他 1998: 370 注③ 参照)。

02 sibaγučin: 鷹匠。元代漢語史料においても、音写した「昔宝赤」「昔博赤」として頻見される。元朝のシバグチについては、さしあたって片山共夫（1982)；沖田道成（1997；1998）参照。

07 ečegs_en: 先古典期・古典期モンゴル文字資料では、否定辞の es_e が s で分綴される例が多数見られるので、これも s で綴りが一旦中断されたと見ておく。接尾辞が分綴される例としては、準備の副動詞語尾-run / -rün が-r_un / -r_ün となる例があるが、-gsen が-gs_en と分かち書きされた例を、訳注者はこれまで見たことがない。

08 ǰasaγ: 罰則の根拠として、ǰasaγ が挙げられている例としては、ハラホト出土モンゴル文書にもみられ、またウイグル語文書にもみられる。この文書では ǰasaγ は台頭されているが、ハラホト出土モンゴル文書では平出されており、ウイグル語文書では、尊敬形式が用いられていないものもある。よって、この ǰasaγ (uig. yasa) が、敬意を払うべき高いレベルから発せられたものであることを完全には証しえないが、台頭した例が現存することから、「高いレベルで規定された（あるいは当時の権威者によって認定された）ところの罰を与えうる根拠」を内包して用いられていたことは間違いなかろう。

01 ayimaγ: 《元朝秘史》中阿亦馬■（ayimaq）的傍译仅作“部落”，还不能明确反映元代社会组织的实态。在元代汉文文献中，“爱马”以音写的形式多次出现。《山居新语》卷 1（197）中有“至元四年(1338)…上亟命分其酒于各爱马【即投下】”，认为爱马等于投下。蒙汉合璧碑文中将 ayimaq aima·ud 译为“各枝儿”（1314 年周至重阳万寿宫爱育黎拔力八达圣旨・1321 年易州龙兴观答吉懿旨。呼格吉乐图、萨如拉 2004: [14]l.7, [31]l.4）。

《元典章》中也多处见“枝儿”一词，从该词除了能看到它是 ayimaγ ~ ayimaq 的固定译法以外，也能看到音写形式的“爱马”。例如，《元典章》典章 49・刑部卷 11・诸盗・强盗・剜豁土居人物依常盗论（49/11a-b）：“根脚里成吉思皇帝时分，立札鲁花赤呵，诸王、驸马各怯薛歹、各爱马蒙古、色目人每奸盗・诈伪・婚姻・驱良等事、交管来”。《元典章》典章 2・圣政 1・恤站赤・延祐 7 年 11 月（2/17b）：“今后，诸衙门并诸王、公主、驸马各枝儿，常加撙节，如有必合差人驰驿干办公事，斟酌应副，务从省减”。

村上正二（1940: 29-33）曾谈到投下与爱马的关系，认为《元典章》并列记载投下与爱马的事例（典章 8・吏部卷 2・官制 2・承荫・整治骤升品级 8/13b-15b：“各投下有缺用人呵，只教他自爱马里选着委付，大数目里人每不教冒着入去”）说明，投下包含本投下（蒙古游牧地）和食邑（汉地江南之分地），而爱马只指本投下。《元典章》中也有并列记载投下与枝儿的事例（典章 9・吏部卷 3・官制 3・投下官・投下达鲁花赤 9/7b-8a：“今后，诸王、驸马各投下各枝儿里行与文书”等），因此可以认为投下＞爱马＝枝儿。

杉山正明（1993: 187-188）认为，“蒙古时期的汉文文献中所见到的‘投下’这一单词指其麾下的游牧集团，甚至有时指领地与属民，至少在其中的集团及领地、属民的意义上相当于蒙古语的 aimaq”。

02 kičir: 见于《元朝秘史》、《俺答汗传》，认为西方产的带有某种特色的骆驼（参见吉田顺一他 1998: 370 注释③）。

02 sibaγučin: 鹰匠。在元代汉文史料中，多处见其音写形式“昔宝赤”、“昔博赤”等。有关元朝的“昔宝赤”，参见片山共夫（1982）；冲田道成（1997；1998）。

07 ečegs_en: 在古代蒙古文资料中，因多处见以 s 隔开否定词 es_e 的例子，所以这里也认为 s 中断了 ečegs_en。后缀被隔开的例子有表示准备意义的副动词附加成分-run / -rün 变为-r_un / -r_ün。翻译者至今从未见过将-gsen 隔开写成-gs_en 的例子。

08 ǰasaγ: 作为惩罚条文之根据，该词既见于黑城出土蒙古文文书，也见于回鹘文文书。该文书中 ǰasaγ 一词虽以抬头位置的形式出现。但黑城出土蒙古文文书中往往以一般位置的形式出现，还有，在回鹘文文书中也不以尊敬的形式使用。因此，虽然 ǰasaγ (uig. yasa) 一词本身并不意味它发布自可尊敬的高位之处，但根据以抬头形式使用的情况，可以认为其表现形式中应包含“从高位之处（或者为当时的有权人士）所给予的惩罚”之意。

【解説】

ブグケンがホラタイから一頭の四歳の雌のキチル駱駝を借りることに関する契約書。ブグケンはキチル駱駝を借りる代価としてホラタイに一こぶの灰白色の雌駱駝を与えること、ブグケンがホラタイから借りたキチル駱駝が病気以外の理由で痩せたら、ブグケンが泥棒の罪となることが記されている。ブグケン、ホラタイがそれぞれ属するアイマグの名前が記されていることが特徴的である。8 行目に契約文書の罰則事項の根拠として「ジャサグ」が出現していることは興味深い。「ジャサグ」の問題については、最近，チョクト（2003；2005；2006）が『元朝秘史』や『集史』などを用いて、モンゴル帝国初期における本義を明らかにし，その指す概念についても、「一過性の命令、持続性のある法令、ある程度永続性のある制度」が含まれるといったような広汎性を指摘している。今後は、本文書や漢語史料を含む各種文書史料も視野に入れてフビライ以降の様相も明らかにしていく必要があろう。

这是一件关于卜可肯（ブグケン）从忽喇台（ホラタイ）那里租借了一峰四岁的雌性 kičir（キチル）骆驼的契约文书。作为租借 kičir 骆驼的代价，卜可肯也把一峰灰白色的雌性单峰骆驼交给了忽喇台。但是契约中写道，卜可肯从忽喇台租借的这峰 kičir 骆驼如果因生病以外的原因消瘦，卜可肯将被视为犯了如同盗贼一样的罪。

这件契约文书中还记有卜可肯、忽喇台各自所属的爱马克之名，这也是该契约文书的特点。

饶有兴趣的是，在第 8 行里出现有作为契约文书之惩罚规则的根据而使用的“札萨”（ジャサグ）一词。关于“札萨”的问题，最近朝克图（チョクト 2003；2005；2006）使用《元朝秘史》以及《史集》中的资料，阐明了札萨之蒙古帝国初期的本义，并指出札萨所指的概念包括“临时性的命令、长期性的法令、某种程度上的永久性的制度”等，具有广泛性。应该认为，今后有必要运用包括该文书以及汉文史料等各种文书史料，将把忽必烈以后的札萨之情况也需要研究清楚。

(No.009) 文書番号 F250:W3

サイズ：縦 20.5cm　横 21.5cm

01　bičin ǰil qubi sar<a>-yin tabun sinde bi
猿の年の正月の初旬の五日に、私
猴儿年正月初五，我

02　ǰang bükü taraan kereg-tü boljᵘ ordin
ジャンブクは穀物が必要となり、オルディン
张孛阔为要粮食使用，于斡儿丁处

03　-ača qar_a emegen-ü s[inei]/// šim-iyer tabun
からハラ・エメゲンの［市斗の］枡で五
用哈喇也蔑干［市］枡带息借得五

04　šim amun asiγ-tu abuba asiγ-iyan
斗の穀物を利息付きで受け取った。その利息を
斗米。利息

05　sar<a> bᵘri nigen šim-ṯur nigečiten

月毎に一斗に単位をもつ
毎月一斗为份。【如此】

06 singsi yabuqu bolba bükü ger-tür
利息を行うことになった。ブクが家に
行息。若孛阔

07 bui ügei γadan_a dotan_a bolbasu
いなくなったり、外に内になったならば、
东西迷闪，

08 tungsui ṯai bausin en_e minu busu
同取代保人がこの私の他の
同取代保人依着我的

09 nige bičigün yosuγar sanaǰu [tegü]s
もう一つの文書に従って計算して
另一件文书结算

10 büḏgeǰü ö<g>sügei kemen
完済しようと
还毕。为此

11 bičig-iyen ögbe en_e nišan bükü ※
文書を与えた。このニシャンはブク。 ※
立文。此手印 孛阔。※

12 en_e nišan bausu ※
このニシャンはバウス。 ※
此手印 暴速。※

13 geregeči mǫnketü ※
証人モンケトゥ。 ※
知见人 蒙哥秃。※

【注釈】

01 qubi sar<a>: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。

01 sinde: F61:W9 の注 01-02 sini-ṯe を参照。

02 taraan: 文書に確認できる綴りは TR"N であるが、この時代の契約文書の定式から考えると、ここには tariyan と書かれるべきものが、taraan と書かれたものと思われる。Cf. *tarān*（Ramstedt 1976）

03 qar_a emegen: 人名と解した。

03 s[inei]/// šim: F61:W9 の注 25 sinei šim を参照。

04, 05 šim: F61:W9 の注 05 tayar を参照。

05 nigečiten: NYK'CK'D'N に見える。これは「単位」を意味する nigeči（nigeče）に関係する語であろうと思われるが、例えば nigečgeden（単位を定めて？）と読んでもこれにあたる用例が発見でき

ない。そこで、K'の部分を語末のYと見て、nigečiten（単位をもつ）と解釈した。
06 singsi yabuqu: singsi は容量単位「升」を指す。F61:W9,05 の tayar の注に掲げた表を参照。前行から続けて、1 斗につき 1 升の利息を行う、という意味になる。ハラホト出土の漢語契約文書をみると、1 石につき 1 斗の利息を課している事例が多く（李逸友 1991: 187, F2:W57, F95:W1, Y1:W87）、利率の面からも齟齬はない。なお、yabuqu は、おそらくハラホト出土の漢語契約文書にもみえる「行息」の「行」を意訳した用法であろう。
08 tungsui ţai bausin: F209:W69 の注 07-08 tusudai bausin を参照。
10 ö<g>sügei: ögsügei の g が落ちている。キリル文字表記モンゴル語の辞書には өх（＝өгөх）が載せられている（Цэвэл 1966: 448）ので、口語的な綴りと見ることもできる。
13 geregeči: このgeregečiは他の契約文書ではgereči と記される場合がほとんどであり、現代正書法でもgereči と書く。gereči はgere（条約、契約）-či と分解できる（Sečenčoγtu 1988: 1259）ので、geregeči のgeregeは、gereči の語幹gere-と関係があると考えられる。現代ハルハ方言、チャハル方言等ではgere（ger_e）は[gərə:]と発音されるところから、問題のgeregeの下線部は[ə:]を反映したものではないかと考えられる。あるいは、geregečiをgere-geči と分解し、動詞から名詞を形成する接尾辞-γači/-geči が誤用されたものと考えることもできる。

01 qubi sar<a>: 参见 F61:W9 注释 01qubi sara。
01 sinde: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-ţe。
02 taraan: 文书中能确认的虽然只有 TR"N。但，从这个时期的契约文书的定式来看，我们认为这里将应写作 tariyan 的字，写成了 taraan。Cf. *tarān*（Ramstedt 1976）
03 qar_a emegen: 理解为人名。
03 s[inei]/// šim: 参见 F61:W9 注释 25 sinei šim。
04, 05 šim: 参见 F61:W9 注释 05 tayar。
05 nigečiden: 形似 NYK'CK'D'N。该形式似乎与表示“单位”的 nigeči（nigeče）有关。然而，将其读为 nigečgeden“定以单位？”，也不见有其用例。于是，将第二个 K'视为 Y，读成 nigečiten“持有单位”。
06 singsi yabuqu: “singsi”是指容量单位“升”的意思。另请参考 F61:W9,05 中的、有关“tayar”的注释里所列的表格。

从其前行开始，说的是每斗需要征收（支付）一升利息的意思。如果我们注意观察黑城出土的汉语契约文书，就会发现那里有很多每石需要征收（利息）一斗的事例（李逸友 1991: 187, F2: W57, F95: W1, Y1: W87）。从利率方面考虑，互相之间也并不存在龃龉。

而且其中的“yabuqu”，可能是在出土于黑城的汉语契约文书里面也能够看到的、“行息”的“行”的意译用法。

08 tungsui ţai bausin: 参见 F209:W69 注释 07-08 tusudai bausin。
10 ö<g>sügei: 一词中的 g 字符被遗漏。在斯拉夫文蒙古语词典中见有 өх（＝өгөх）的形式（Цэвэл 1966: 448）。因此，也可以认为，文书中的该词形为按口语书写所致。
13 geregeči: geregeči 这一形式，在其它契约文书中几乎以 gereči 的形式出现。按现在的正字法，也作 gereči。gereči 一词，根据其形态结构可以分解为 gere（条约、契约）＋-či（Sečenčoγtu 1988: 1259）。那末，geregeči 一词中的 gerege，可认为跟 gereči 之词干 gere-有关联。在喀尔喀、察哈尔等方言中，gere（ger_e）发音为[gərə:]。因此，gerege 形式之 ege 对应于以上方言形式中的[ə:]。如果将 geregeči 形式进行分解的话，可作 gere-geči。其后缀部分跟动词派生名词的后缀-γači/-geči 相对应。或许，geregeči 是在 gere（条约、契约）的词根上，误接动词构成名词的后缀-γači/-geči 而产生的形式。

【解説】
ジャンブクがオルディンから五斗の穀物を毎月一斗の利息で借りることに関する契約文書。3 行

目の「ハラ・エメゲンの［市斗の］枡」の意味は不明。他の文書では「通行する枡（yabuqu šim）」となっていることが多い。8-9 行目によるとこの文書とは別に同取代保人の負うべき責任が規定された文書があるようであるが、今回我々が扱った文書の中には、そのような文書は見られない。

这是一件关于张孛阔（ジャンブク）向斡儿丁（オルディン）借贷了五斗谷物的契约文书，利息是每月一斗。但是第三行中的“哈喇也蔑干（ハラ・エメゲン）［市］枡”这一词语的意思不明。在其他文书里使用的大多是“行用枡（yabuqu šim）”的词语。

如果根据第 8 行至第 9 行的内容，似乎还应存在与此不同的、规定同取代保人应承担哪些责任的文书。但是，我们目前所解读的文书中，尚未见到类似的文书。

(No.010) 文書番号 F29:W1

サイズ：縦 19cm　横 17cm

01 bi bükes baysi keregtü bolju 'WLM
私、ブケスはバクシが必要になって、…
我孛怯思为请榜式用，

02 küngere-eče qudalduju abuysan tabun
クンゲレから買い取った五
将买自孔克儿处之五

03 nasutu er_e eljigen-i manu sangbatu-ača
歳の私の牡ロバを、サンバトより【が】
岁儿驴，由桑拔都

04 nigen ǰarim (qadirm_a) -yin tula sanaǰu
1.5 (qadirm_a)のために計算して
为一个半(qadirm_a)之故算

05 ögbe ene eljigen-ü mon_a
与えた。このロバの【を】以
与了【榜式】。此后如

06 qoyin_a nadača busu-ača
後、私から【が】他の者から【によって】
我将此驴使他人

07 sanabasu
計算するなら
算，

08 ǰasay-un yosuyar eregütü
ジャサグのきまり通りに刑罰を受けることに

照札撒断罪。

09 bolsuγai kemen kes_i bičig
なろう、といって契約文書を
为此立契文。

10 -iyen ögbei///
与えた。…
与了。…

11 gereči///
証人…
知见人…

【注釈】

04 nigen ǰarim (qadirm_a): ǰarim は「半分」の意味。qadirm_a は何らかの単位（重量／貨幣）か？

08 ǰasaγ: F135:W80 の注 08 ǰasaγ を参照。

09 kes_i: kes_i をモンゴル語で解釈することができないので、kes_i を漢語「契子」あるいは「契字」（ともに近世音は k'iəi-tsī）からの借用語であるとみなした。つまり、kes_i bičig は漢語で言えば、「契子文字」あるいは「契字文字」になると理解した。ただし、管見の限り、同時代の漢語契約文書に、「契子文字」あるいは「契字文字」の用例は見あたらない。例えば、ハラホト漢語文書 F277: W55（李逸友 1991: 189）には、「故立典契文字為憑照用」といった表現はある。根拠となる事例に欠くが、契約あるいは契約文書の意味として口頭語で用いられていた「契子」あるいは「契字」をモンゴル語が借用し、それが bičig（文書。同時代の漢語では多く「文字」）と熟し、「典契文字」「売契文字」「地契文字」「文契」等に相当する用語となったと考えておく。

04 nigen ǰarim (qadirm_a): ǰarim 是“半分”之意。而 qadirm_a 一词指的是什么单位（重量 / 货币），尚不清楚。

08 ǰasaγ: 参见 F135:W80 注释 08 ǰasaγ。

09 kes_i: kes_i 因不能解释为蒙古语词，所以认为 kes_i 是借自汉语的“契子”或“契字”。即 kes_i bičig 指汉语的“契子文字”或“契字文字”。但又限于管見，在同时代汉文契约文书中未见到“契子文字”或“契字文字”的用例。如黑城出土汉文文书 F277: W55（李逸友 1991: 189）中记有“故立典契文字为凭照用”的词语。虽然缺少证据，但可认为是表示契约或契约文书的口头语“契子”或“契字”被借到蒙古语，并将它与 bičig（即文书，同时代的汉语中多作“文字”）一词结合，形成相当于“典契文字”“卖契文字”“地契文字”“文契”的词语。

【解説】

この文書は意味が取りにくいが、ブケスがバクシと称される有識者を用いることが必要となり、クンゲレより購入してあった五歳の牡ロバをサンバトによって値踏み（1.5 qadirm_a）させて誰か（バクシか？）に与えたこと、以後ブケスがサンバト以外の者に値踏みをさせることがあれば、ブケスが刑罰を受けることに関する契約文書であろう。qadirm_a は不明であるが、契約の内容から考えると、ロバの値段に関わる意味があるのではなかろうか。

该文书的内容很难理解。大概是，叫孛怯思的人，出于用叫榜式的有识之人的需要，将从孔克儿购买的五岁公驴，让桑拔都估价（1.5qadirm_a）之后，给了某某人（榜式?）。然后，如果孛怯思让桑

拔都以外的人估价的话，孛怯思将受处罚的契约书。qadirm_a的词义不明。如果从契约的内容考虑，可推测该词或许跟驴的价格有关。

(No.011) 文書番号 F17:W9

サイズ：縦 27.5cm　横 23cm

01 üker ǰil qubi sara-yin nigen sinide
牛の年の正月の初旬の一日に、
牛儿年正月初一日，

02 bi yaqur šiqui asuǰu buγdai amun
私、ヤフル・シフイが借りて、小麦と穀物が
我牙忽儿失灰为要麦米使用，

03 kereg-tü boldǰu günü-eče nigen taγar
必要となって、グヌより一石の
于古奴处借到

04 buγdai nigen taγar ＼čaγan／ amun asuǰu
小麦と一石の脱穀済みの穀物を借り
一石小麦和一石白米。

05 abuba en_e buγdai en_e čaγan am[un]///
受けた。この小麦とこの脱穀済みの穀物は、
将此小麦和白米

06 mön ǰil M N///?/// S///
同じ年…
本年…

07 nǰegel šim asiγ yabuqu bol[ba]///
一斗ずつの利息を行うこととな［った］。
各计一斗行息。

08 en_e buγdai amun-i ögtele [bi šiqui] ///
この小麦と穀物を返済する前に、［私、シフイが］
还此麦米前，［我失灰］

09 ///[ger-tür] bui ügei bolbasu ???///
［家に］いなくなったならば、…
如东西迷闪…

10 ///???///

...
...

【注釈】

01 qubi sara: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。

01 sinide: F61:W9 の注 01-02 sini-te を参照。

02 yaqur: 李逸友（1991：pl.17(1), F214:W1）（本書所載の F214:W1 はその前半 6 行分（漢語部分を含めば 8 行）に当る）について考察した松井太（1997: 31-32）は、pl.17(1),F214:W1 の 11 行目冒頭に記される語を Yaqoi～Yoqai とし、おそらく西夏語の姓.a-xwa～?a-xia か、もしくはその漢字音写とみられる複姓「也火」のウイグル文字表記であろう、としている。もしこの F17:W9 の 2 行目の yaqur が pl.17(1),F214:W1 の 11 行目冒頭と同じ姓を表しているとすると、松井太（1997）の見解は再考の余地があるかも知れない。

02, 04 asuǰu: asuǰu は asaγuǰu の口語形であると考えられる。F209:W69 の注 04, 18 asaγuǰu を参照。ハラホト出土貸借契約文書（Cleaves 1955）には、buγudai asiγ ügei aγsuǰu abuba（小麦を利息なしで借りた）という表現があり、ここでは aγsuǰu が使われている。

02, 04, 05, 08 buγdai: F61:W9 の注 05 buγdai を参照。

03 taγar: F61:W9 の注 05 taγar を参照。

04 ＼čaγan／ amuṉ: čaγa あるいは ǰaqa amun に見え、『蒙古訳語』の「米：ǰaqa amu」の実際の事例かとも思われるが、次行ではあきらかに čaγaṉと記されているので、'が一つ足りないものと解釈しておく。čaγa(n) amun は脱穀した穀粒。

07 šim: F61:W9 の注 05 taγar を参照。

09 [ger-tür] bui ügei bolbasu: bui の前の破損箇所には、F250:W3 の 6-7 行目からの類推により ger-tür が入るものと考えた。γadan_a dotun_a bui ügei bolbasu という用例もあるが、破損したスペースから考えるとここに γadan_a dotun_a が入る可能性は少ない。

01 qubi sara: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。

01 sinide: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-te。

02 yaqur: 松井太（1997: 31-32）曾考察李逸友（1991：pl.17(1), 214:W1（本书所载的 F214:W1 是其前半 6 行（如果包括汉文部分则为 8 行），将 pl.17(1), F214:W1 的第 11 行开头所记的词看做 Yaqoi～Yoqai，并认为该词恐怕为西夏语中的姓.a-xwa～?a-xia 或者是其汉字音写的复姓“也火”的畏吾文表记。如 F17:W9 的第 2 行中的 yaqur 与 pl.17(1), F214:W1 的第 11 行开头语表示同样姓氏的话，那么松井太（1997）的说法也许有商榷之处。

02, 04 asuǰu: asuǰu 可能是 asaγuǰu 的口语形。参见 F209:W69 注释 04,18。

02, 04, 05, 08 buγdai: 参见 F61:W9 注释 05 buγdai。

03 taγar: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。

04 ＼čaγan／ amuṉ: 或作 čaγa(n) amun，指已去壳的谷粒。

07 šim: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。

【解説】

ヤフル・シフイがグヌより利息付で一石の小麦と一石の脱穀済みの穀物を借りたことについての契約文書。6-7 行目は、F250:W3 の 4-5 行目を参考にすると、毎月一斗ずつの利息を払うという意味であろうか。そうであるとすれば、本文書 6 行目の S///は sara「月」の語頭の S かも知れない。

这是一件关于牙忽儿失灰（ヤフル・シフイ）以支付利息的形式，从古奴（グヌ）手里借贷一石小麦和一石白米的契约文书。如果参考 F250:W3 之第 4 行至第 5 行的内容，该文书第 6 行至第 7 行，

大概指的是每个月支付一斗利息的意思。如果这种说法无误，那么本契约文书第 6 行中的“S///”就应为 sara[月]一词的头一个字符。

(No.012) 文書番号 F79:W7

サイズ：縦 28.5cm　横 18.5cm

01 ///ǰil tabun sara-yin naiman sinede
…年の五月の初旬の八日に
…年五月初八日，

02 /// arba keregtü bolǰu yabuqu šim-iyer
…大麦が必要となって、通行する枡によって
…为要大麦使用，借到市斗

03 ///[t]aγar arba asuǰu abuγ_a en_e arba büdgeǰü
…石の大麦を借りて取った。この大麦を完済して
大麦…石。还毕此麦

04 /// inu doluγan sara-yin nigen sinede büdgeǰü
…七月の初旬の一日に完済して
…至七月初一日还毕

05 ///[te]re kem-tür es_e büdgebesü irgen-ü yosuγar
…その期限で完済しなければ、民のしきたりにしたがって
…如不按期还毕，照民约

06 /// yabuqu bolba ///[en]_e nišan lorsi siuǰa ※
…行うこととなった。[この] ニシャンはロルシ・シウジャ。 ※
行事。此手印 落失修加※

07 en_e nišan siltuγuča ※
このニシャンはシルトグチャ。 ※
此手印 失儿秃火札。※

08 gereči bi ümü ǰarsai ※
証人、私、ウム・ジャルサイ。 ※
知见人 我兀木札儿赛。※

【注釈】

01 sinede: F61:W9 の注 01-02 sini-te を参照。
02 arba: F61:W9 の注 06 arba を参照。
03 asuǰu: F209:W69 の注 04, 18 asaγuǰu; F17:W9 の注 02, 04 asuǰu を参照。
02 yabuqu šim: F61:W9 の注 14-15 yabuqu šim を参照。

03 abuγ-a: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。
05 irgen: 蒙漢合璧聖旨碑の対訳漢語では「民戸毎」(少林寺聖旨碑第二截 1261 年フビライ聖旨・第三截 1268 年フビライ聖旨)・「百姓毎」(盩厔重陽万寿宮「宸命王文」碑 1314 年アユルバルワダ聖旨)と訳される(中村淳、松川節 1993: 72; 呼格吉勒図、萨如拉 2004: 146-164[14])。『蒙古訳語』には、「民戸:益(千立)[立干]」とある(至順刊本『事林広記』続集巻 8・文芸類・訳語・蒙古訳語・君官 8b)。
05 irgen-ü yosuγar: F62:W19,02 にも現れる。この部分を含む、「民のしきたりにしたがって、…(利息を)行うこととなった」という言い回しは, 敦煌・トルファン出土の漢語貸借契約文書にみえる、「依鄉法酬利」「看鄉原生利」「便于鄉例生利」「于看鄉元, 逐月生利」(「元」は「原」に通じる)「[准]鄉元例生梨」(「梨」は「利」に通じる)「于看鄉元生利」「便青鄉元生利」(张传玺 1995: 337, 384, 397, 644, 646, 647)と同種の言い回しとみなせる。「鄉法」については、王启涛 (2005: 616-617) も参照。

ところで、宋元史料にしばしば「鄉原体例」「鄉原例」などと現れる用語の解釈について、宋代史学界において論争が起こったことがあった。それは、「鄉原」の語義を「鄉村の」と解釈し、「鄉原体例」を「鄉村の慣習」「民間の慣行」と理解する立場に対して、上述の契約文書も含めた各種史料の用例を根拠に、「鄉原」の語義は「従来の」と解釈すべきであるとの批判に始まったものであった。後者は、「鄉原体例」は「従来の方式」「従前の規定」という意味となり、むしろ「公権力側によって提議・施行された」方式・規定と理解すべきであるという主張である。ここでは、「鄉村の」説を批判して「従来の」説を主張した高橋芳郎 (1981;1982) と、この見解に対して再批判を行った柳田節子 (1995) を挙げておく。

もし、本文書の irgen-ü yosuγar が漢語契約文書の「依鄉法」「看鄉原」「便于鄉例」などに対応するとみなすことができ、この対応を宋元史料の「鄉原体例」にまで拡大して当てはめることができるならば、元代のモンゴル語史料に、uridu yosuγar (以前の決まりにしたがって) という常套句が存在する以上、「鄉原体例」は「鄉村の慣習」「民間の慣行」といった意味に解釈するのが妥当であろう。

01 sinede: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-ṯe。
02 arba: 参见 F61:W9 注释 06 arba。
03 asuǰu: 参见 209:W69 注释 04,18 asaγuǰu; 参见 F17:W9 注释 02,04 asuǰu。
02 yabuqu šim: 参见 F61:W9 注释 14-15 yabuqu šim。
03 abuγ-a: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。
05 irgen: 蒙汉合璧圣旨碑的对译汉语为“民户每”(少林寺圣旨碑第二截 1261 年忽必烈圣旨・第三截 1268 年忽必烈圣旨)、“百姓每”(周至重阳万寿宫《宸命王文》碑 1314 年爱育黎拔力八达圣旨)。(中村淳、松川节 1993: 72; 呼格吉勒图、萨如拉 2004: 146-164[14])。《蒙古译语》中有“民户:益(千立)[立干]”(至顺刊本《事林广记》续集卷 8、文艺类、译语、蒙古译语、君官 8b)。
05 irgen-ü yosuγar: 这组词语,在 F62: W19, 02 里面也出现。“照民约行事(利息)”这种措词,与敦煌、吐鲁番出土的汉语借贷契约文书里面所见的“依乡法酬利”、“看乡原生利”、“便于乡例生利”、“于看乡元,逐月生利”(“元”通“原”)、“[准]乡元例生梨”(“梨”通“利”)、“于看乡元生利”、“便青乡元生利”(张传玺 1995: 337,384,397,644,646,647)等等,我们都可以将其看做是相同种类的措词。关于“乡法”,参照王启涛 (2005: 616-617)。

在宋元史料中,类似“乡原体例”、“乡原例”等的词语也曾经屡次出现。对于这类词语的解释,在宋史学界也曾发生过争论。一种观点把“乡原”的语意解释成是“乡村的……”,把“乡原体例”理解成是“乡村的常规”、“民间的惯例”的意思。而持另一种观点的人们则以包括前述契约文书在内的各种史料实例为根据,主张应该将“乡原”的语意解释成是“历来(以往,从来,向来)的……”的意思。其中,持后一种观点的人们认为,与其把“乡原体例”理解成是“历来的方式”、“从前的规定”的意思,就把它理解成是“缘于官府的权力而被提出并且实施的”方式或者规定。

我们在这里例举出了批评“乡村的……”说而主张“历来的……”说的高桥芳郎（1981；1982），还例举出了对于这种观点进行了再批判的柳田节子（1995）。

如果本件文书中的“irgen-ü yosuγar”能够与汉语契约文书中的“依乡法”、“看乡原”、“便于乡例”等相互对应，而且这种对应还能够不存在龃龉地扩大适用于宋元史料中的“乡原体例”，那么，我们把“乡原体例”的意义解释成“乡村的习惯”、“民间的常规”，就应该是比较妥当的了。是因为在元朝时期的蒙古语史料中，就无疑曾经存在着“uridu yosuγar”（依在先体例……）这种惯用套语。

【解説】

大麦の貸借に関する契約文書。署名の部分から判断すると、借主はロルシ・シャウジャであろうと思われる。破損している部分があって、完全な契約内容は分からないが、五月の初旬の八日に借りて、七月の初旬の一日を期限に完済する契約であったようである。なお、F79:W6 の 7-9 行目に期限内に完済できなければ、利息が発生するという形式の契約が見られることから、本文書 6 行目の yabuqu の前に「利息」を意味する語が書かれていた可能性が考えられる。

这是一件关于借贷大麦的契约文书。如果从签署姓名的部分来判断，债务人的名字应为落失修加（ロルシ・シャウジャ）。由于这件契约文书受到破损，所以无法了解其完整的内容。尽管如此，仍可以得知这件合同的借贷日期为五月初旬的八日，七月初旬的一日之前必须还清债务等内容。

另，由于 F79:W6 的第 7 行至第 9 行，是一段关于如果在[商定的]还债期限内没有还清债务，就要发生利息[而须债务人向债权人支付]的合同内容。所以在本件契约文书(F79:W7)第 6 行的“yabuqu”的前面，应该有表示其意思为“利息”的词语。

(№013) 文書番号 F224:W3

サイズ：縦 14.5cm　横 18cm

01　nigen tayar-tur qorin ??///
　　一石に二十…
　　一石【付】二十…

02　naiman sara-yin qorin doluγa[n]///
　　八月二十七日…
　　八月二十七日…

03　bayilγabasu nigen süke ča[u]///
　　やめさせるならば、一錠の鈔…
　　若罢了，一锭钞…

04　sayidin es_e eribesü///
　　サイディンが探さなければ…
　　撒亦丁若不索要…

05　temegen dege[r_e]///
　　テメゲンの上に…
　　帖麦干之上…

06 tuγtemür deger_e///
トクテムルの上に…
脱黒帖木儿之上…

07 bolbasu buu abutuγa[i]///
になれば取るな。…
休要者！…

08 ///N P///
…
…

【注釈】
01 taγar: F61:W9 の注 05 taγar を参照。
03 süke ča[u]: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。
05 temegen: 5 行目には temegen dege[r_e]とあるが、6 行目にも tuγtemür deger_e///「トクテムルの上に…」という同じような形が現れていることから、temegen を人名として解釈した。

01 taγar: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。
03 süke ča[u]: 参见 F61:W6 注释 2 süke čau。
05 temegen: 第 5 行中有 temegen dege[r_e]，第 6 行也同样出现了 tuγtemür deger_e///“脱黑贴木儿之上…”。由此，将 temegen 解释为人名。

【解説】
まず 1 行目に「一石に二十…（nigen taγar-tur qorin ??///）」とあり、穀物が関係することをうかがわせる。また 3 行目には「一錠の鈔…（nigen süke ča[u]///）」とあるように、具体的な金額が記されている。さらに 5、6 行目にそれぞれ「テメゲンの上に…（temegen dege[r_e]///）」、「トクテムルの上に…（tuγtemür deger_e///）」とある。これに類似する表現が契約文書 MON02 の 10 行目に「私サバンの上に（bi saban-u deger_e）」として見え、これらは「某某が責任を負う」という意味であると思われる。以上から、この文書は穀物が関係した何らかの契約文書であろうと推測される。

首先，在其第 1 行里，存在着“一石【付】二十…（nigen taγar-tur qorin ??///）”的记述，由此我们可以窥见到这件文书似乎与谷物粮食有关。
此外，在其第 3 行里，还有“一锭钞（nigen süke ča[u]///）”的词语，记写下了具体的金额。
还有，其第 5 行和第 6 行，则分别有“帖麦干之上（テメゲンの上に）…（temegen dege[r_e]///）”、“脱黑帖木儿之上（トクテムルの上に）…（tuγtemür deger_e///）”等的内容。我们在契约文书 MON02 的第 10 行里还能够见到“我撒班将一面承当（bi saban-u deger_e）”的内容。所以我们认为这也是“某某承担责任”的意思。
根据以上种种情况我们推测，这件文书应该是有关谷物粮食的契约文书。

(No.014) 文書番号 F79:W5

サイズ：縦 13cm 横 12.5cm

01 barš̆il dörben sara-yin ///
虎の年の四月の…
虎儿年四月…

02 lorsi sonu čau kereg-t[ü]///
ロルシ・ソヌは鈔が必要と…
落失索那为要钞使用…

03 iǰigeči-ečе čau kereg ///
イルジゲチから鈔が必要…
于燕只吉赤处…为要钞…

04 süke ＼čau／ tabun šim bu[γdai]///
錠の鈔、五斗の小麦…
钞锭、小麦五斗…

05 mǫn onu yaramaγ ///
同じ年の硬貨…
本年的硬币…

06 {bu} ene ǰarim süke[s]///
この半分の錠…
该半锭…

07 bütegeǰü 'W///
完済し…
还毕…

【注釈】

02, 03, 04 čau: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。なお、4 行目の čau は 4 行目の tabun の左横に書いてある。

04, 06 süke: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。

04 šim: F61:W9 の注 05 taγar を参照。

04 bu[γdai]: F61:W9 の注 05 buγdai を参照。

05 yaramaγ: テュルク語の yarmaq（コイン、おかね）。Clauson（1972: 969a-b）、Doerfer（1963-75: No.1854）参照。三宅俊彦（2005: 22-25）に挙げられている西夏の一括出土銭の事例から西夏で銅銭が通行していたことは間違いないので、何らかの貨幣がハラホト一帯で使われていた可能性が高い。ここは「硬貨」と訳した。

02, 03, 04 čau: 参见 F61:W6 注释 12 süke čau。将第 4 行中的 čau 写在第 4 行 tabun 的左边。

04, 06 süke: 参见 F61:W6 注释 12 süke čau。

04 šim: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。

04 bu[γdai]: 参见 F61:W9 注释 05 buγdai。

05 yaramaγ: 突厥语"yarmaq"（硬币、货币、钱）的意思。另请参照 Clauson（1972: 969a-b）、Doerfer（1963-75: No.1854）。根据三宅俊彦（2005: 22-25）里登载着的西夏出土钱币总汇，西夏地区无疑

曾经流通过铜钱，所以这很有可能是［作为当时的］某种货币而在黑城特一带［流通］使用。这里，我们将其译作"硬币"。

【解説】

ロルシ・ソヌが鈔を借りたことに関する契約文書と思われる。鈔の他に小麦や硬貨について記されているが、文書の下部が破損しているため、これらがこの契約とどのように係わるのかは判然としない。貸主は3行目に現れるイルジゲチか。

这是一件关于落失索那（ロルシ・ソヌ）借贷了钱款的契约文书。除钱钞以外契约文书里还记写着小麦以及硬币，但因这件契约文书的下半部分破损缺失，故无法明确其中的小麦以及硬币与这件契约文书之间的密切关系。

债主（债权人）或许为在其第3行里出现的燕只吉赤（イルジゲチ）。

(No.015) 文書番号 F124:W1

サイズ：縦 27cm　横 15cm

01　/// P???' ///
…
…

02　gereči bi köke YY///
証人、私、コケ…
知见人，我，阔阔…

03　(gereči) (bi) ???L??TWS P??? ///
（証人、）（私、）…
（知见人，）（我，）…

04　(gereči) bi abudala darĳi (sasuu)///
（証人、）私、アブダラ・ダリジ（・サスー）…
（知见人，）我，阿卜答剌答礼只（撒速）…

05　(gereči) bi č(o)ng(du)n bičibe (※)
（証人、）私、（チョンドン）が書いた。（※）
（知见人，）我，（冲冬）书写。（※）

【解説】

何らかの契約文書の末尾における証人と筆写者の署名の部分であろう。

这应该为某契约文书之末的、由证人和书写者（抄写者）签署姓名的部分。

2. 行政文書

2-1. ウイグル式モンゴル文字文書

(No.016) 文書番号 F9:W31b

サイズ：縦 23.5cm　横 24cm

01　qaγan-u ǰrlγ-iyar
ハーンの仰せによって
皇帝圣旨里

02　qong tais_i-yin linǰiber
皇太子の令旨によって
皇太子令旨里

03　ešin_e luu songgun vuu-yin noyad üge manu
エチナ路総管府のノヤンたちのわれらがことば
亦集乃路总管府官人每台旨俺每的：

04　man-a qariyaṯu qabunki naγur qara taš naγur
われらに属するハブンヒ湖、ハラ・タシュ湖、
属俺每的哈本乞湖、哈喇塔思湖

05　lobuki ??? sarmabai kiged ???? ??? ǰaγura
ロブヒ…サルマバイと…の間で、
罗卜乞…撒蓝伯和…之间，

06　ber ulus γadan_a dotun_a-ača künesürken amun
国たみはあちこちから糧食を探し求めており、【そのような】口・
人每自内外寻找粮食，向为糊口

07　qoγulai teǰiyegen oduγsan irgen-e en_e
喉を養い行った民に、この
而四去之百姓派遣此

08　õǰei temür quubitai qoyar (elči) bolγan
オルジェイ・テムルとホービタイを（使者）として
完泽帖木儿、忽必台二人（为使者）

09　tursiǰu ilebei ügegün (dutaγun) ulus-i
探り遣わした。貧しく（欠乏した）国たみを
往探。将贫（穷之）众

10　??/// ??XWY-(tur?) (nöküd?) ber yabuǰu

…（に？）（仲間たち？）が行って
…（時分？）…（伴当毎？）前去…

11 yosu ügegü küčü buu kürgetügei basa
道理なく力を及ぼすな。また
勿施非礼之力。再，

12 ber qudal-iyar yabuǰu ulaγan qara barīǰu
虚偽によって行き駅馬などをとって
有冒名抓鋪马、

13 buliyan tatan yabuqun mayun aran bōgesü
略奪してゆく悪い民がいれば、
抢劫等歹民，

14 barīǰu man-a čölge-ṯür kürgeǰü iredkün
捕らえて我に【我が】路に移送してくるように。
抓捕并送至我路者！

15 ///?? bōgesü ōǰei temür
…いれば、オルジェイ・テムル
…如有…完泽帖木儿

16 ///??tuγai basa
…せんことを。また
…愿行者！又，

【注釈】

01 qong tais_i-yin linǰiber: 本文書は、モンゴル文字が薄い上に裏面の漢文が裏写りしており、しかも所々破損しているため解読困難な部分があるものの、第一行目の冒頭が qaγan であり、第二行目の冒頭が qong であり、しかもこの二語がほぼ同位置に台頭されていることは明らかに読み取れる。第一行目に ǰrlγ が見えていることから、その冒頭が台頭された qaγan であることは疑う余地がないが、二行目は qong 以下の tais（s は短尾の s）以降がやや読み取りにくくなっているため、若干の推測を入れて解読せざるを得ない。qaγan と同位置に台頭されうる qong tais に始まる貴人として「皇太子（近世音 huaŋ t'ai tsï）」を想定してよい。tais の下には若干の空白をおいた後に Y が書かれているように見える、つまり tais_i と書かれているように見える。「子（近世音 tsï）」の ts 音はモンゴル文字では s をもって書かれる。これは、F43:W23 と F116:W454 にも確認できる（それぞれの箇所の注参照）。また s に続く字画が分かち書きされることはモンゴル文字文献には頻見の現象であることから、qong tais_i は皇太子の音訳であると見なしてよい。こう考えると、その下の不鮮明な部分も、-yin lingǰiber と読むことが可能になる。先古典期のモンゴル文書には、"möngke tngri-yin küčün-dür yeke suu ǰali-yin ibegel-dür"という常套句が冒頭に位置するものが多いが、この文書のように、qaγan-u（あるいは qan-u）ǰrlγ-iyar から始まる文書は、「文書の出だし」（藤井有鄰館蔵）（Franke 1965: 120-127）、「インドゥスタン宛旅行関係文書」（Franke 1968: 7-14）がある。

13〜14 世紀のモンゴル帝国期、ハーン（大ハン）の命令は ǰrlγ（仰せ）とよばれ、漢語文献では「聖旨」と訳された。これに対しハーン以外の有力者の命令は，üge（ことば）と言い，漢語文献で

は、発令者の立場により、「令旨」（男性王族）・「懿旨」（女性王族）・「法旨」（帝師・国師ら宗教権威者）・「鈞旨」（駙馬・将相ら）と訳し分けられ、そのまま直訳した「言語」も多く見られる（杉山正明 1990a: 372-373；杉山正明 1990b: 442-444；小野浩 1993: 124, n.1；小野浩 1997: 225, n.1）。逆に、元朝中期になるとモンゴル語文献でも「令旨」・「懿旨」・「法旨」を音写した形の liŋǰi, iǰi, faǰi がみられるようになる。本文書の年代が確定できず、また固有名詞の言及もないため、本箇所の「皇太子」が誰であるか同定はできないが、ウイグル文字モンゴル語で「皇太子」を qong tais_i と綴った事例として貴重である。なお、ハラホト漢語文書に、「皇帝聖旨裏、皇太子令旨裏」という文面が一例ある（李逸友 1991: 142, F62: W29）。これは、この冒頭句を漢語に直訳した言い回しである。

03 luu: 1346 年カラコルムの蒙漢合璧碑に、"qorum bürün urida ön-čang luu neretü čölge bülege（コルムとはかつて元昌 luu〔路〕という名の čölge であった）"とあることから（Cleaves 1952）、luu（路）は元朝期のモンゴル語資料に見える čölge（パクパ文字モンゴル語 ᠴᠦᠯᠭᠡ）に対応していることが明らかである。čölge は「河流の貫通する牧草の豊かな渓谷」という意味（吉田順一他 1998: 366 参照）。

03 ešin_e luu songgun vuu: 現在の中国内モンゴル自治区アラシャン（阿拉善）盟ダライフブ（達頼庫布）鎮の東南約 25km、ハラホト遺跡に置かれていた、当時の地方行政官衙。路総管府は、フビライの至元初めより、各地に正式に設置され始め、中書省・行中書省の下に置かれ、州・県あるいは府を統括した。亦集乃路総管府は、至元 23 年（1286）の設置で、甘粛行省に属した（『元史』巻 60・地理志 3・甘粛等処行中書省・亦集乃路：1451；同巻 91・百官志 7・諸路総管府：2316）。

03 noyad: 直訳体文献では「官人毎」と訳される。『蒙古訳語』には、「官人：那延」とある（至順刊本『事林広記』続集巻 8・文芸類・訳語・蒙古訳語・人事門 8a）。

04 qabunki nayur qara taš nayur: 『粛鎮志』巻 1・山川・張掖（『中国方志叢書』華北地方甘粛省所収順治十四年抄本：巻 1/21a）、及び梁份『秦辺紀略』巻 3・甘粛北辺近疆・居延沢（『四庫全書存目叢書』史部第 228 冊所収復旦大学図書館蔵乾隆鈔本：90；青海人民出版社点校本：203）によると、居延沢は俗に「三海子」と呼ばれる三つの小さな湖、哈班・哈巴児・哈剌失（排印本では矢）に分かれている。「三海子」は『混一疆理歴代国都之図』にみえる各班脳児（γurban nayur）に相当するとの井上充幸（2005: 103-104）の指摘がある（転写については我々の方式に改めた）。この三つの湖の名前については、モンゴル語・西夏語の可能性があるとするのみで、不明とする。qabunki, qara taš がそれぞれ哈班、哈剌失（本来は「哈剌塔失」「哈剌答失」などであったろう）に対応することは間違いないであろう。また、井上充幸（2005: 104）は、それぞれが現在のガション＝ノール・ソゴ＝ノール・旧居延沢（現在の天鵝湖）に相当する可能性を挙げるが、あくまでも可能性とするのみである。

06 künesürken: künesü（食糧）に名詞から動詞を形成する接尾辞-rke-が付き、さらに非分離の副動詞語尾-n がついたものと解釈し、上記のように訳出した。

07 irgen: 蒙漢合璧聖旨碑の対訳漢語では「民戸毎」（少林寺聖旨碑第二截 1261 年フビライ聖旨・第三截 1268 年フビライ聖旨）・「百姓毎」（盤屋重陽万寿宮「宸命王文」碑 1314 年アユルバルワダ聖旨）と訳される（中村淳、松川節 1993: 72；呼格吉勒図、薩如拉 2004: 146-164[14]）。『蒙古訳語』には、「民戸：益（千立）［立干］」とある（至順刊本『事林広記』続集巻 8・文芸類・訳語・蒙古訳語・君官 8b）。

08 öǰei temür: 本行冒頭の語は裏面の漢語文書の字と重なっており読みにくいが、15 行目に öǰei temür なる人物が現れていること、またかろうじて判読できる筆画や前後の文脈からこの箇所もそのように読んで無理がないことから、öǰei temür であろうと判断した。

13 buliyan tatan: 同様の表現が蒙漢合璧命令文にもみえる。例えば、「少林寺聖旨碑第四截 1312 年アユルバルワダ聖旨」（中村淳、松川節 1993: 48-53）には、"ked ked ber bolǰu bulǰu tataǰu bu abutuqayi"（誰々であっても奪い引っ張ってとるな）とある。対訳漢語聖旨において、対応する漢語は「奪要」。他の命令文では「扯拽」「扯要」「扯拽奪要」などとも訳される。

01 qong tais_i-yin linǰiber: 该文书，不仅蒙古文的字迹淡薄，而且其背面的汉文洇出，再加上处处受破损，因此尚有难以解读的部分。尽管如此，仍可以辨认其第一行的第一个词为“qaγan”，第二行的第一个词为“qong”，而且该两个词几乎以相同的位置抬头书写。

根据其第一行里能够看见的“ǰrlγ”，所以此行第一个词语是以“qaγan”为其抬头的情况不容怀疑。但是其第二行，自其中的“qong”开始、“tais”（其中的“s”是短尾“s”）以下的内容，研读起来就显得多少有些困难了，所以我们也不得不夹杂着若干推测对其进行解读。

能够与“qaγan”在相同位置进行抬头记写的“qong tais”，作为处于该行起始位置的贵人，我们应该（可以）把他假想为“皇太子”。在这个“tais”的下面，隔着若干处空白，接下来记写着的似乎是一个“Y”字，据此我们认为这里记写着的、应该是“tais_i”。汉语“子”字的“ts”音，在蒙古文字中也往往用“s”来表述（标音记写）。这在F43:W23以及F116:W454的内容里也可以得到确认（另请参见其各处不同的注释）。而且这个“s”的后面的字词，都是分隔开来记写着的，这也是蒙古文文献中经常出现的情况。所以我们认为将这个“qong tais_i”看成是“皇太子”的音译，比较合适。

如果按照这种思路解读下去，则其后面的模糊不清的那一部分的内容，我们随之也可以解读懂（通）了，是“-yin linǰiber”。在先古典期的蒙古文文书里面，有很多把“möngke tngri-yin küčün-dür yeke suu ǰali-yin ibegel-dür”这种惯用套语记写在开头部位的例子。而像本件文书这样，以“qaγan-u（或者是qan-u）ǰrlγ-iyar”为其起始的，则有“文书的开头”（收藏在藤井有邻馆）（Franke 1965: 120-127），还有“印度斯坦旅行关系文书”（Franke 1968: 7-14）。

十三至十四世纪的蒙古帝国，称可罕（大汗）的命令为“ǰrlγ”（札鲁里克），汉语文献译作：“圣旨”。与此相对，除可罕以外的有实力的人的命令，亦被称为“üge”（言语），在汉语文献里，则因命令发出者的地位不同而分别译成“令旨”（男性皇族）、“懿旨”（女性皇族）、“法旨”（帝师、国师等宗教权威者）、“钧旨”（驸马以及将相等），也有不少原封不动地将其译作“言语”的例子（杉山正明 1990a: 372-373；杉山正明 1990b: 442-444；小野浩 1993: 124, n.1；小野浩 1997: 225, n.1）。

然而，降至元朝中叶，在蒙古语文献里面也已经能够看见缘于音写汉语的“令旨”、“懿旨”、“法旨”而形成的［蒙古语的］“linǰi”，“iǰi”，“faǰi”了。

我们无法确定本件文书的［确切］年代，且因为在其中记写着的文字符号里面又没有固有名词，所以我们不能识别出这里的“皇太子”指的是谁，但它（他）作为一个用畏兀儿体蒙古语将“皇太子”拼写为“qong tais_i”的实例，是很贵重的。此外，在黑城汉语文书里面，也有一例“皇帝圣旨里，皇太子令旨里”的行文（李逸友 1991: 142, F62:W29）。我们认为，这是将这个启始惯用句［从蒙古语］直接译成汉语时采用［形成］的说法［措辞］。

03 luu: 因为在1346年的哈喇和林（カラコルム）的蒙汉合璧碑里有“qorum bürün urida ön-čang luu neretü čölge bülege（所谓“和林”<コルム>，曾经是元昌luu［路］这一名称的čölge）”（Cleaves 1952）这样一段记载，所以我们这里的这个“luu（路）”，能够与在元朝时期的蒙古语文献资料里也曾经出现过的“čölge”（八思巴字蒙古语“č'ölge”）互相对应，就是非常明确的了。“čölge”的意思是“河流贯穿、牧草丰美的溪谷”（另请参见：吉田顺一等 1998: 366）。

03 ešin_e luu songgun vuu: 黑城遗址坐落于现在中国内蒙古自治区阿拉善盟达赖库布镇东南约25公里处，它是当时这里的地方行政衙署。路总管府，是从忽必烈的至元初年起，开始在全国各地正式设置的，它处在中书省、行中书省辖下，而管理所属州、县或者府。亦集乃路总管府设置于至元23年（公元1286年），隶属于甘肃行省（《元史》卷60・地理志3・甘肃等处行中书省・亦集乃路：1451；《元史》卷91・百官志7・诸路总管府：2316）。

03 noyad: 在直译体文献里面被译成“官人每”，而在《蒙古译语》里面，亦被译作：“官人”、“那延”（至顺刊本《事林广记》续集卷8・文艺类・译语・蒙古译语・人事门8a）。

04 qabunki naγur qara taš naγur: 根据：《肃镇志》卷1・山川・张掖（《中国方志丛书》华北地区甘肃省所收顺治14年抄本，卷1/21a）；梁份《秦边纪略》卷3・甘肃北边近疆・居延泽（《四库全书存目丛书》史部第228册所收复旦大学图书馆藏乾隆抄本：90；青海人民出版社点校本：203），则“居延泽”是指称作“三海子”的那三个小湖，被划分为哈班、哈巴尔、哈剌失（排印本作“矢”）。

井上充幸（2005: 103-104）曾经指出，“三海子”相当于《混一疆理历代国都之图》中所见的“各班脑儿”（但其转写已经改变成为我们的方式了）。关于这三个湖的名称，他只主张这些地名是蒙古语或西夏语的可能性，但具体情况不明。而其中的“qabunki”和“qara taš”，应该分别相当于“哈班”、“哈剌失”（似乎本来是“哈剌塔失”、或者“哈剌答失”等）。而且，井上充幸（2005: 104）还例举出了认为它们分别相当于现在的嘎顺淖尔、苏泊淖尔、旧居延泽（现在的天鹅湖）的可能性，然而这充其量不过是一种可能。

06 künesürken: 该形式解释为，künesü（食粮）上附加名词构成动词的后缀-rke-，然后加接联合副动词后缀-n 而形成。在译文，将该词根据上述形式译出。

07 irgen: 在蒙汉合璧圣旨碑的对译汉语里译作：“民户每”（少林寺圣旨碑第二截 1261 年忽必烈圣旨、第三截 1268 年忽必烈圣旨），或者译作：“百姓每”（周至重阳万寿宫「宸命王文」碑 1314 年爱育黎拔力八达圣旨）（中村淳、松川节 1993: 72；呼格吉勒图、萨如拉 2004: 146-164[14]）。另外在《蒙古译语》里面，则有“民户：益（千立）[立干]”（至顺刊本《事林广记・续集・卷八・文艺类・译语・蒙古译语・君官》8b）的行文。

08 öljei temür: 该行的第一个词，曾和背面之汉文文书的字发生重叠，因此难于辨认。然而，第 15 行出现有 öljei temür 的人物。如果根据笔画以及上下文勉强试读的话，该处也可读成那样。因此将其判断为 öljei temür。

13 buliyan tatan: 与此相同的表述（记述）在蒙汉合璧命令文书里面也能够看到。例如，在《少林寺圣旨碑第四截 1312 年爱育黎拔力八达圣旨》（中村淳、松川节 1993: 48-53）中刊刻着的“ked ked ber bolǰu buliǰu tataǰu bu abutuqayi”（不以是谁休（倚气力）夺要者）就是其例。在对译汉语圣旨里，其对应的汉语译作“夺要”。而在其他的命令文书里面，它又被译为“扯拽”、“扯要”、“扯拽夺要”等等。

【解説】

17 行目以降は完全に失われてしまっているが、残存部分によって判断すると、「ハーンの仰せによって」、「皇太子の令旨によって」という冒頭句に始まり、管轄下にあるハブンヒ湖、ハラ・タシュ湖近辺の民のもとに（ロブヒ、サルマバイ等の地名と思われるものが記されているが、破損箇所もありハブンヒ湖、ハラ・タシュ湖とどのような位置関係にあるのかは不明である）、オルジェイ・テムルとホービタイを遣わし、その地域或いは交通路の安全を乱す者を取り締まらせたことについて、エチナ路総管府のノヤンたちが発給した文書ということができよう。9-11 行目には「貧しく（欠乏した）国たみを…道理なく力を及ぼすな」という記述がみられる。10 行目の一部が破損しているため意味を取りにくいが、使者のオルジェイ・テムルとホービタイに命令したものと考えられるので、彼らが派遣先やその道中で貧窮した民に対して強制的手段に訴えて不法をなすことを禁じたものであろう。また使者の派遣先について、「国たみはあちこちから糧食を探し求めており、【そのような】口・喉を養い行った民に」とあることからすると、この度の使者の派遣は貧しい民の状況視察をも兼ねていたのかも知れない。

なお、本文書の裏面には漢語文書が記されているが、それについては李逸友（1991: 112）を参照のこと。モンゴル語文書と裏面の漢語文書の内容は無関係である。

该文书的内容，从第 17 行以下完全破损缺失。如果根据其残存部分进行推测，这应该是一件从亦集乃路总管府的诺颜们发的文书。

自其中的“皇帝圣旨里”、“皇太子令旨里”等起头语句开始，其以下的内容大致为：向其管辖下的哈本乞（ハブンヒ）湖、哈喇塔思（ハラ・タシュ）湖附近的民众生活的地区（这里还记有“罗卜乞（ロブヒ）”、“撒蓝伯（サルマバイ）”等可能为地名的一些词。但是因有破损，故而它们与前述哈本乞湖、哈喇塔思湖在地理位置上的关系，尚不清楚）派遣完泽帖木儿（オルジェイ・テムル）和忽必台（ホービタイ），以严格惩治扰乱当地治安和交通秩序的人。

在第 9 行至第 11 行里面，能够看到“…将贫（穷之）众…勿施非礼之力”的记述。

其第 10 行，因为有一部分破损缺失，所以很难完全弄清其含义，虽然如此，仍可以认为，这一部分的内容应为当时给完泽帖木儿以及忽必台下达的命令，意为禁止他们在被派遣的地方以及在赴任途中对贫穷的民众使用强制[迫]手段和非法妄为。

关于[这两位官差的]派遣地，因为在该文书里还有“人每自内外寻找粮食、向为糊口而四去之百姓”的记述，由此可以推知，这次被差遣的使者或许还兼有视察贫穷民众生活状况的任务。

此外，在该文书的背面还记写着一段汉文。关于这段汉文，可参考李逸友(1991：112)。蒙古语文书与其背面的汉文，在内容上没有关系。

(No.017) 文書番号 F209:W68

サイズ：縦 19.5cm　横 22cm

01　///[ni]gen temegen ǰam-ṯur yorčiba
…一頭の駱駝が道に行った。
…一峰骆驼在站走失。

02　lui sorumbu nigen temegen daruba
ロイ・ソロムボが一頭の駱駝を押えた。
啰移索栾卜隐匿骆驼一峰。

03　qoyar temegen ǰam-ṯur yorčiba
二頭の駱駝が道に行った。
两峰骆驼在站走失。

04　ibü ükü nigen temegen daruba
イブ・ウクが一頭の駱駝を押えた。
野蒲兀苦隐匿骆驼一峰。

05　nigen temegen ükübe
一頭の駱駝が死んだ。
倒死骆驼一峰。

06　ibü yonadiqudai γurban temegen daruba
イブ・ヨナディクダイが三頭の駱駝を押えた。
野蒲药纳地忽歹隐匿骆驼三峰。

07　nigen ǰam-ṯur oruba nigen ükübe
一頭が道に入った。一頭が死んだ。
一峰入了站。一峰倒死。

08　ibü sibirqui nigen daruba
イブ・シビルクイが一頭を押えた。
野蒲失必儿灰隐匿一峰。

09 qoyar temegen ǰam-ṯur oruba
二頭の駱駝が道に入った。
两峰骆驼入了站。

10 ou toldi γurban temegen daruba
オウ・トルディが三頭の駱駝を押えた。
斡屯的隐匿骆驼三峰。

11 γurban ǰam-ṯur or<u>ba
三頭が道に入った。
三峰入了站。

12 mongγul soγda tabun temegen daruba
モンゴル・ソグダが五頭の駱駝を押えた。
蒙古人速古答隐匿骆驼五峰。

13 soni sibau nigen daruba
ソニ・シバウが一頭を押えた。
索倪昔班隐匿一峰。

14 ǰo ištemür qoyar temegen daruba
ジョ・イシュテムルが二頭の駱駝を押えた。
赵也失铁木儿隐匿骆驼二峰。

15 kebiḏki dolun temegen daruba
ケビドキが七頭の駱駝を押えた。
怯必的吉隐匿骆驼七峰。

16 adiraman arban daruba
アディラマンが十頭を押えた。
阿的儿蛮隐匿十峰。

【注釈】
02 lui: 張澍「西夏姓氏録」(林旅芝 1975: 37) の囉哆氏と同一の姓である可能性が高い。
04, 06, 08 ibü: ibü 姓は F61:W9 の 10, 13, 36 行目にも現れる。F61:W9 の注 10 ibü を参照。
15 dolun: dolun は doluγan の口語表記である。

02 lui: 很可能是与张澍《西夏姓氏录》(林旅芝 1975: 37) 中出现的啰哆氏同姓。
04, 06, 08 ibü: ibü 姓出现于 F61:W9 中的第 10,13,36 行。参见 F61:W9 注释 10 ibü。
15 dolun: dolun 是 doluγan 的口语形。

【解説】
この文書は、駅站への駱駝供給に関して、その出入りを記録したもののようである。この文書に現れる人物が西夏やモンゴルの官牧制度のどこに位置する人員であるかが不明なため、この文書の位置づけや機能も明らかではない。『天盛改旧新定律例』第十九に官畜関係の諸規定が見られるが(史

金波、聂鸿音、白滨 2000；Кычанов 1989)、具体的にこの文書とどのように関係するかは明らかでない。なお、『天盛改旧新定律例』第十九については、島田正郎（2003）の第五章も参照。黒城漢語文書 F135:W19（李逸友 1991: 172）が同類の文書である可能性が推測されるので、以下に掲げておく。

1.
□至至元年■
開坐前去伏乞□□
2.
駝貳只
□□剋站倒死駝馬
駝貳只
3.
即的站倒死馬壹拾■
■站倒死駝馬壹■
4.
馬兀木■
在城站■
5.
馬■
壹拾貳■
6.
月
7.
具呈　伏乞

该文书似为记载关于向驿站供骆驼，及其往返情况。因不明确文书中所出现人物在西夏以及元朝的官牧制度中处于何等地位，所以很难确定该文书的地位和种类以及用途。从《天盛改旧新定律例》第十九中可以看到有关官营畜牧业关系的诸多规定（史金波、聂鸿音、白滨 2000；Кычанов 1989），但尚不能确定与该文书有何具体联系。关于《天盛改旧新定律例》第十九，也可以参见岛田正郎（2003）的第五章。可以推测，黑城汉文文书 F135:W19（李逸友 1991: 172）与该文书为同类文书，下面例举相关内容。

1.
□至至元年■
开坐前去伏乞□□
2.
驼贰只
□□剋站倒死驼马
驼贰只
3.
即的站倒死马壹拾■
■站倒死驼马壹■
4.
马兀木■
在城站■

5.
马■
壹拾弐■
6.
月
7.
具呈　伏乞

(No.018) 文書番号 F116:W204

サイズ：縦 24cm　横 88.4cm

01　yisinei-yin songgun vu///
エチナの総管府…
亦集乃总管府……

02　tükel bičig-iy[er] ///
トゥケルが文書［によって］…
秃怯里文字[里]…

03　sangasiri kōbegūn-ū k[e]s[ig]///
サンガシリ大王の［分け前］…
桑哥失里大王的［分例］…

04　qubi sara t[erigü]l[en]///
正月を［始めとして］…
正月［为头］…

05　sigüsün γuyila qub[i sara]///
丸ゆで用の羊を求めた。正［月］…
索要羊只。正［月］…

06　kürtele qoyar sara[s]///
まで二ヶ月…
至…两个月…

07　qočuruγsan qoǰid[aγsan]///
残った、遅れ［た］…
缺的、误期的…

08　saras-un undan si[güsün]///
ヶ月の酒、［丸ゆで用の羊］…
月每之酒［羊］…

09 öggegülküyi no[yad]///
与えさせることをノ［ヤンら］…
支与官［人毎］…

10 qabur-un ??///
春の…
春…

11 jiryuγan sini-ṯ[e]///
初旬の六日に…
初六日…

【注釈】

01 yisinei: yisinei は漢字で「亦集乃（近世音 iəi tsiəi nai）」（李珍華等 1993 では「集」の近代音を tɕi とする）。現在は ejen_e と表記する。本書で扱うハラホト出土モンゴル語文書に幾通りかの表記がなされており、84H·F116:W519/1691 にはパクパ字で yi ji nay と記されている。これ以外には、「忻都王碑文」に isin_a čölge（エチナ路）と現れる。「集」（tsiəi, tɕi）に対応するモンゴル文字が s であることは、「忻都王碑文」（Cleaves 1949）に「集賢直学士」が sigen jí geusi（「集」は si に対応）と、「張応瑞碑文」（Cleaves 1950）に「封贈」（贈の近世音 tsəŋ. パクパ字表記 jhiŋ）が vungsing（「贈」は sing に対応）と表記されていることからわかる。

01 yisinei-yin songgun vu: F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。

02 tükel: 人名。黒城漢語文書 F116:W509, F116:W546, F116:W569, F116:W573, F116:W596（李逸友 1991: 128-131）に出現する「禿忒里」。ウイグル語文書に現れる tükāl（山田信夫 1993, vol.2: 295）と同名であろう。

03 sangasiri köbegün: sangasiri köbegün は漢語面には、「桑哥失里大王」として現れる。杉山正明（1982: 264-265）は、幽王家の系譜を東西文献から復元した際、『明実録』洪武 13（1380）年 7 月甲寅にみえる「故元省哥失里・阿者失里王」の省哥失里と、黒城漢語文書の桑哥失里大王と同一人物であることを指摘する。

köbegün～大王の対応については、『蒙古訳語』（至順刊本『事林広記』続集巻 8・文芸類・訳語・蒙古訳語・君官門 8a）にみえる、「大王　口[*kö'ün]」を参照。なお、「太子　口[*kö'ün]」ともある。モンゴル語で「子、息子」を意味する köbegün ~ kö'ün ~ ke'ün が「皇子、王子」の意味で用いられることについては、杉山正明（1993: 236）参照。また、杉山は、漢語「太子」「大王」の対応語が kö'ü[n]とされていたらしい、と推測するが、本文書はこれを証明する。

04 qubi sara: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。

05 sigüsün: この文脈では、sigüsü(n)のいくつかの意味のうち、「肉食（敬語）」や「駅夫・馬夫に与える食べ物の取り分」の意味が適当であろう。ここでは、これに対応している漢語「湯羊」の意味をも考慮して「貴人の取り分である肉」という意味で解釈してよかろう。

05 γuyila: γuyila→γuyi-la<γuyu-la。-la は過去を表す終止形の動詞語尾。γuyu～γuyi は「ソルハルナイ伝」（Ligeti 1972a: 197-207；Cleaves 1959）に mǫngke bolqu usun tngri-ṯeče jalbarin γuyildusu kemen ügüleǰü（不滅になる水を天よりともに乞おうといって）の事例がある。漢語面の対応箇所には「嗦来」とある。

08 undan: 『元朝秘史』などに見える undan（温丹）の傍訳は「飲」、「止渇」。『ムカディマート・アル・アダブ』（Поппе 1938）では unda'ān に airan（バターミルク）というチャガタイ語対訳が見える。いわゆるアルコール飲料のみを指すのではなく、飲み物一般、あるいは発酵乳飲料をさす。ここでは undan sigüsün に対応する漢語「羊酒」も考慮し、「酒」と訳した。

11 sini-ṯ[e]: F61:W9 の注 01-02 sini-ṯe を参照。

01 yisinei: 与 yisinei 相对应的汉字是“亦集乃”。现写为 ejen_e。本书中所收的黑城出土蒙古文文书中有几种写法：84H·F116:W519/1691 中以八思巴字记为 yi ji nay。除此之外，《忻都王碑文》（Cleaves 1949）中记为 isin_a čölge（亦集乃路）。与“集”（tsiəi, tɕi）相对应的蒙古文字 s 的例句为《忻都王碑文》中将“集贤直学士”记为 sigen ǰi geusi（“集”与 si 相对应）、《张应瑞碑文》（Cleaves 1950）中将“封赠”（赠的近世音 tsəŋ、八思巴记为 jhiŋ）记为 vungsing（“赠”与 sing 相对应）。

01 yisinei-yin songgun vu: 参见 F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。

02 tükel: 人名。是黑城汉文文书 F116:W509, F116:W546, F116:W569, F116:W573, F116:W596（李逸友 1991: 128-131）所见“秃怯里”，元代此蒙古、突厥名常见，又译“秃坚、土干”等。可能与畏吾文文书中所出现的 tükäl（山田信夫 1993, vol.2: 295）同名。

03 sangasiri köbegün: sangasiri köbegün 在蒙汉合璧文书中的汉语面记为“桑哥失里大王”。杉山正明（1982: 264-265）从东西文献中复元幽王家的系谱时指出《明实录》洪武 13 年（1380）7 月甲寅条中所出现的“故元省哥失里、阿者失里王”中的省哥失里与黑城汉文文书中所出现的桑哥失里大王为同一人。但是根据黑城汉文文书“桑哥失里大王分例羊酒文卷”（李逸友 1991: 128-131），此桑哥失里大王是延祐年间（1314-1320 年）人，与《明实录》所见省哥失里虽然同名，但年龄悬殊太大。

有关 köbegün～大王的对应，可参照《蒙古译语》（至顺刊本《事林广记》续集卷 8・文艺类・译语・蒙古译语・君官门 8a）中所见到的“大王　口[*kö'ün]”。也有“太子　口[*kö'ün]”。关于蒙古语中“儿、儿子”之意的 köbegün～kö'ün～ke'ün 以用来指“皇子、王子”方面，参见杉山正明（1993: 236）。杉山认为与汉语‘太子’‘大王’相对应的语是 kö'ü[n]，本文书也证实了此观点。

04 qubi sara: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。

05 sigüsün: 据文书的前后内容，sigüsü(n)的几种意义之中，最恰当的为“肉食（敬语）”和“给驿夫、马夫的食物份额”。但考虑到与此相对应的汉语是“汤羊”，所以解释为“贵人份额之肉”更合适。

05 γuyila: γuyila→γuyi-la＜γuyu-la。-la 表示过去终止形的动词词尾。γuyu～γuyi 在《祖勒合乃传》（Ligeti 1972a: 197-207；Cleaves 1959）中有 mǫngke bolqu usun tngri-ṯeče ǰalbarin γuyildusu kemen ügüleǰü（为了不想灭亡向天求水）的事例。汉语面的对应处有“嗦来”。

08 undan: 《元朝秘史》中所见到的 undan（温丹）的傍译是“饮”、“止渴”。《穆卡迪玛特・阿勒・阿达布词典》（Поппе 1938）中的 unda'ān 与察合台语 aṯran（バターミルク）相对译。它不仅单指酒精饮料，而且还指一般饮料或指发酵乳饮料。这里考虑到与 undan sigüsün 相对应的汉语词是“羊酒”，所以译为“酒”。

11 sini-ṯ [e]: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-ṯe。

【解説】

この文書は写真によると、モンゴル語文書と漢語文書が別々の紙に書かれて、貼り合わせられたものであることが分かる。なお漢語文書に関しては、李逸友（1991: 129）に掲載されている。もし、このモンゴル語文書と漢語文書が関連する内容の文書であるとすると、内容はサンガシリ（桑哥失里）大王に対する酒と丸ゆで用の羊（羊酒）の分例に関する文書で、漢語文書の「春季四个月的羊酒嗦来」、モンゴル語文書の「トゥケルが文書［によって］…」「まで二ヶ月…」「残った、遅れ［た］…」という記述から推測すると、春季の四ヶ月分の分例のうち、まだ支給されていない分（おそらく二ヶ月分）の支給に関してトゥケルなる人物がエチナ路総管府にあたえた文書であろう。

根据照片我们可以看出，这件行政文书是后来将原本分别记写在两片不同纸张上的蒙古语文书和汉语文书粘贴在一起而形成的。关于其中的汉语文书，在李逸友（1991: 129）中具有登载。

如果承认这件蒙古语文书和汉语文书是内容上互相关联的[两件]文书，那么这两件文书的共同点就是关于贡献给桑哥失里（サンガシリ）大王的贡酒以及汤羊（用来制作煮全羊的羊只）、即所谓羊酒分

例的内容。

根据汉语文书中所记述的“春季四个月的羊酒嗦来”，并根据蒙古语文书中所记述的“秃怯里（トゥケル）文字[里]…”、“至…两个月…”、“缺的、误期的…”等等内容，可以推测，这是一件由那位叫做秃怯里的人写给亦集乃（エチナ）路总管府的行政文书。其内容是：每年春季都必须支付的、四个月的“分例”，到了书写这份行政文书的时候，尚有一部分没有支付，于是秃怯里就尚未支付的“分例”（大约是两个月的量）问题方面，给亦集乃路总管府写了这件行政文书。

(No.019) 文書番号 MON03

サイズ：縦 17.2cm　横 32.6cm

01　///[-y]in noyad-ta
… [の] ノヤンたちに
… [之] 官人毎

02　///?-YY'R ügüleǰü
…によって述べて
据…说

03　/// [un]dan sigüsün-ü ? .
… [酒]、丸ゆで用の羊の…
…酒羊…

04　///[t]erigülen köüler sara
…始めとして十二月
…为头十二月

05　///N tegüs abuγa edüge
…全て取った。今
…全得了也。今

06　///[sa]ra ter[i]gülen γurban sara
…月を始めとして三月
…月为头三个月

07　/// saras-un un[d]an sigüsün
…ケ月の酒、丸ゆで用の羊
…月每之酒羊

08　///uridu yosuγar ögegegülkü-yi
…以前の通りに与えさせることを
…依在先体例支与

09　///Y bečin ǰil köüler sara-y[i]n///

…猿の年の十二月の…
…猴儿年十二月…

10 ///':. ※
… ※
… ※

【注釈】
01 noyad: F9:W31b の注 03 noyad を参照。
03 ?: この行の?で表した箇所に記されているものは埋め草の可能性もある。
04, 09 köüler: köüler は kögeler の口語表記と解釈した。
05 abuγa: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。

01 noyad: 参见 F9:W31b 注释 03 noyad。
03 ?: 此行中用?表示之处，也有可能为补白文字。
04, 09 köüler: köüler 是 kögeler 的口语形。
05 abuγa: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。

【解説】
酒と丸ゆで用の羊の分例文書であることは確かであるが、誰の分例についてのものであるかは不明である。F116:W595 の 4-5 行目の「十月を始めとして十二月…まで三ヶ月の【分を】全て取った。」、F144:W3 の 6-7 行目の「…十月を始めとして十二月…までの三ヶ月の鈔は」など、三ヶ月を単位として分例が与えられていることを示す文書が存在することから、本文書は某が猿の年の十月から十二月までの三ヶ月分を全て受け取ったこと、次の年の一月から三月までの分を以前の通りに支給することに関してエチナ路総管府のノヤンたちに対して発行された文書であろう。

毫无疑问这是一件关于贡酒和汤羊[煮全羊所需羊只]之“分例”的行政文书，但此“分例”应该贡献（支付）给谁，则不明确。
我们注意到，在 F116:W595 的第 4 行至第 5 行里，有“十月为头至十二月三个月【分例】全得了。”的内容，在 F144:W3 的第 6 行至第 7 行里，还有“…十月为头至十二月…至…三个月钞…”的内容，都是以三个月为一个领取（支付）“分例”的时间单位。
根据有记述这些内容之文书存在的事实，我们认为，本件行政文书是关于某个猴儿年的自十月份至十二月份的三个月的“分例”已经全部领取、要求对方按照以前的惯例把次一年度一月份到三月份的“分例”支付出来这两种事情而给亦集乃路总管府的官员（ノヤン）发去的行政文书。

(No.020) 文書番号 F14:W16

サイズ：縦 21.8cm　横 31.2cm

01 ///?M?/// siükün bičig///
…シウクンが文書…
…寿坤文字…

02 ??? bečin jil arban nigen///

…猿の年の十一…
…猴儿年十一［月］…

03 (küleǰü?) abuγsan-i bečin ǰil §??///
(受け？) 取ったのを猿の年…
…责领，猴儿年…

04 γurban ?? TW γurban ulaγan-u nigen
三…三頭の駅馬の一頭を
三…三匹鋪马之一匹…

05 ǰrlγ ?///
仰せ…
圣旨…

06 P///KD'???/// qoyar čing-ün günǰiber
…二丞の鈞旨によって
…依二丞之钧旨

07 bi TW///? ????CW ??C? XYD??N///??///
私は…
我…

08 'WY?///YYS . ǰil 'R?/// KWYM??///
…年…
…年…

09 TWY///
…
…

【注釈】

01 siükün: siükün は漢語の官職名の可能性もある。

03 (küleǰü?): küliyeǰü の口語表記と解した。

06 qoyar čing: 二丞、つまり右丞・左丞、二人の丞（近世音 ʧʻɪəŋ）と解釈した。元代漢語文献において「二丞」をこの意味で用いる例は、管見の限りみられないが、『宋宰輔編年録』巻 12・重和元年（1118）9月庚寅に、尚書左丞・右丞を「二丞」と呼ぶ用例がある。右丞・左丞は鈞旨の発令者としても齟齬はない。

06 günǰi: 「鈞旨」（近世音 kiuən-ʦi̯ĭ）を音写したもの。既知のモンゴル語命令文に「鈞旨」の用例は極めて少なく、「鈞旨」を写したモンゴル語の数少ない用例として重要。従来知られていた用例については、Ligeti（1972a: 235）; Franke（1965: 125）を参照。

01 siükün: siükün 也有可能是汉语中的官职名。

03 (küleǰü?): 是 küliyeǰü 的口语形式。

06 qoyar čing: 意为二丞，即右丞、左丞。限于管见，还没有看到在元代汉文文献中有“二丞”的用例。但《宋宰辅编年录》卷 12・重和元年（1118）9 月庚寅条中，有将尚书左丞、右丞称之为“二丞”的用例。即使是鈞旨的发令人也与“二丞”不矛盾。
06 günǰi: 为“鈞旨”的音写。在已知的蒙文命令文中极少有“鈞旨”的例子。作为音写“鈞旨”的蒙古语少有的用例，显得很重要。就已知的用例可参照 Ligeti（1972a: 235); Franke (1965: 125）。

【解説】
「仰せ（ǰrlγ）」や「二丞の鈞旨（qoyar čing-ün günǰiber）」など興味深い語が現れるが、駅馬のやり取りに関する文書であることが推測できる以外に、詳しいことは分からない。

其上面记写着“圣旨”（ǰrlγ）以及“二丞之钧旨”（qoyar čing-ün günǰiber）等等颇有意义的词语，但是据此我们只能推测这是一件关于彼此双方互相交涉驿马方面的行政文书，而除此以外的详细情况，尚不清楚。

(№021) 文書番号 F116:W521

サイズ：縦 22.3cm　横 57cm

01 yisinei-y<i>n songgun vuu-yin noyad ///
エチナ総管府のノヤンたち…
亦集乃总管府官人每…

02 tükel bičig///
トゥケルが文書…
禿怯里文字［里］…

03 sanggasiri kōbegün-ü kesig unda[n]///
サンガシリ大王の分け前の酒…
桑哥失里大王分例酒…

04 ǰil dörben sara terigü[len]///
年の四月を始めとして…
年四月为头…

05 TWR kürtele γurb[an]///
まで三…
至…三…

06 edüge doluγan sara ///
今七月…
如今七月…

07 TWR kürtele γurban sa[ras]///
まで三ヶ月…

至…三个月…

08 γuyumu ker ber uridu///
求めている。もし前の…
索要。怎生［依在］先…

09 noyad medetü[gei]///
ノヤンたちが知れ。…
官人每识者……。

【注釈】

01 yisinei-y<i>n songgun vuu: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。

02 tükel: F116:W204 の注 02 tükel を参照。

03 sanggasiri köbegün: F116:W204 の注 03 sangasiri köbegün を参照。

01 yisinei-y<i>n songgun vuu: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。

02 tükel: 参见 F116:W204 注释 02 tükel。

03 sanggasiri köbegün: 参见 F116:W204 注释 03 sangasiri köbegün。

【解説】

トゥケルからエチナ路総管府に宛てたサンガシリ大王に対する酒（とおそらく丸ゆで用の羊）の分例に関する文書。各行下部が破損しているので完全な内容は不明であるが、他の分例文書の内容と対照して推測すると、サンガシリ大王が某年四月から六月までの分例を既に受領したこと、彼が現在七月から九月までの分例を求めていること、及びそれに対する処置をノヤンたちが行うべきことが書かれていたものと思われる。写真から分かるように、この文書も漢語文書との合璧であるが、漢語文書の部分は李逸友（1991: 130-131）に掲載されている。李は写真左側の断片を一体のものと見、さらに 3 行目を「頭至六」、4 行目を「為頭至玖」としているが、それが正しければ、「四月を始めとして六月まで」、「七月を始めとして九月まで」の「四月」と「七月」がモンゴル語文書に見えて、「六」と「九」が漢語文書に見えるということになろう。しかし、左側断簡を一体のものと見なした理由が明らかでない以上、この推測が根拠あるものといえないことは言うまでもない。

这是一件由秃怯里（トゥケル）发给亦集乃（エチナ）路总管府的、关于支付给桑哥失里（サンガシリ）大王之贡酒（恐怕其中还包括汤羊[用于煮全羊的羊只]）的“分例”的行政文书。

由于本件文书各行文字的下半部分都存在破损丢失情况，所以我们无法知道它的全部内容，但若对照其他“分例”文书的内容进行推测，我们认为这件文书涉及三件事情：桑哥失里大王已经领取某年四月至六月的“分例”；桑哥失里大王现在正在要求七月至九月的“分例”；对这件事情采取相应措施是官员（诺颜）们所应该履行的职责。

如果仔细观察照片我们都会知道，这也是一件与汉语文书合璧的文书，其中的汉语文书部分，在李逸友（1991: 130-131）里已有登载。

李逸友先生把照片左侧的那枚断简看成是一枚完整的简牍，并且进一步认为其第 3 行是“头至六”、第 4 行是“为头至玖”。如果这种看法正确的话，可以认为“以四月为头至六月”、“以七月为头至九月”里面的“四月”和“七月”就出现在蒙古语文书里，而“六”和“九”则出现在汉语文书里。如果左侧的那枚断简是一枚完整简牍的说法不能成立的话，那么我们只能说这种推测也是没有根据的。

(№022) 文書番号 F116:W595

サイズ：縦 27.3cm　横 82.2cm

01 yisin_e songgun vuu///
エチナ総管府…
亦集乃总管府…

02 tükel///
トゥケルが…
禿怯里…

03 sanggasiri kōbegün-ü kesig ??///
サンガシリ大王の分け前…
桑哥失里大王分例…

04 jil arban sara terigülen kögel[er]///
年十月を始めとして十二月…
年十月为头至十二月

05 kürtele γurban saras-un tegüs abuγ[_a]///
まで三ヶ月の【分を】全て取った。…
三个月【分例】全得了。

06 edüge moγai jil qubi sara///
今、蛇の年の正月…
如今蛇儿年正月…

07 sara šün sara ///
月、閏月…
月、闰月…

08 ?///?///
…
…

09 yosuγar ögkü ?///
通りに与える…
依…体例支与…

【注釈】

01 yisin_e songgun vuu: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。
02 tükel: F116:W204 の注 02 tükel を参照。
03 sanggasiri köbegün: F116:W204 の注 03 sangasiri köbegün を参照。
05 abuγ[_a]: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。

06 moγai jil: 正月～三月の間に閏月がある蛇年を 1260～1380 年の間に求めると、延祐 4 年（1317 年）のみである。李逸友（1991: 128-131）の「桑哥失里大王分例羊酒文巻」に収められる漢語文書で紀年がわかるものも、ほとんどが延祐 4 年であり、符合する。
06 qubi sara: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。
07 šün sara: F116:W572 の注 05 eš_ün を参照。

01 yisin_e songgun vuu: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
02 tükel: 参见 F116:W204 注释 02 tükel。
03 sanggasiri köbegün: 参见 F116:W204 注释 03 sangasiri köbegün。
05 abuγ[_a]: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。
06 moγai jil: 从 1260 年～1380 年之间，正月至三月间有闰月的蛇年只有延祐 4 年（1317 年）。据李逸友（1991: 128-131）的“桑哥失里大王分例羊酒文卷”中所收的汉文文书中的纪年可知，符合延祐 4 年。
06 qubi sara: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。
07 šün sara: 参见 F116:W572 注释 05 eš_ün。

【解説】

トゥケルからエチナ路総管府に宛てたサンガシリ大王に対する酒と丸ゆで用の羊の分例に関する文書。写真によると、この文書はモンゴル語文書と漢語文書が別々の紙に書かれて、貼り合わせられたものであることが分かる。漢語文書に関しては、李逸友（1991: 128）に掲載されている。モンゴル語文書と漢語文書が何らかの関連があるからこそ貼り合わせてあると考えられること、このモンゴル語文書と漢語文書双方の内容から、「エチナ総管府のノヤンたちに、トゥケルが文書によって述べるに、サンガシリ大王の分け前の酒と丸ゆで用の羊は、龍の年の十月を始めとして十二月に至るまでの三ヶ月分を全て取った。今蛇の年の正月から三月までの閏正月を含む四ヶ月の分け前の酒と丸ゆで用の羊を、以前の通りに与えさせることをノヤンたちが知れ」というような内容を矛盾無く再構成できること、漢語文書の最後に「訳史也火」と記されていること、などから、このモンゴル語文書と漢語文書は同一内容の文書のモンゴル語版と漢語版と考えてよかろう。

这是一件由秃怯里（トゥケル）发给亦集乃（エチナ）路总管府的、关于支付给桑哥失里（サンガシリ）大王贡酒和汤羊[用来烹制煮全羊的羊只]之“分例”的行政文书。

根据照片可知，这件文书是后来才被粘合在一起的，其组成部分的蒙古语文书和汉语文书原本被分别记写在两枚不同的纸张上。关于其中的汉语文书，在李逸友（1991: 128）中已有登载。

根据以下三条理由，我们认为这件由蒙古语文书和汉语文书粘合在一起而形成的行政文书，是一件内容[完全]相同的行政文书的蒙古语版和汉语版两种不同的版本。理由之一，这件蒙古语文书一定是和汉语文书有什么联系才被[当时]粘合在一起的；理由之二，注意观察这件蒙古语文书和汉语文书双方的内容，“亦集乃总管府官人每根底，秃怯里文字里说有，桑可失里大王的分例羊酒龙儿年十月为头至十二月终三个月的全得了也，如今蛇儿年正月为头至三月终通闰四个月的分例羊酒嗦有怎生依在先体例与的官人每识者”，蒙古语文书和汉语文书都可以毫无矛盾地互相解释通对方的内容；理由之三，汉文文书的最后部分明确记有“译史也火”。

(No.023) 文書番号 84H・F116:W511/1683

サイズ：縦 21.8cm　横 58.3cm

01 isinei čölke songgun v[u] ///
エチナ路総管［府］…
亦集乃路总管［府］…

02 sanggasiri köbegün///
サンガシリ大王…
桑哥失里大王…

03 jil doluγan sa[ra]///
年七月…
年七月…

04 kürtele γurban///
まで三…
至…三…

05 arban sara terigü[len]///
十月を始めとして…
十月为头…

06 γurban [sa]r[as]///
三［ヶ月］…
三［个月］…

07 uridu yo[suγar]///
以前の［きまりによって］…
［依］在先［体例］…

08 moγai jil yisün sara///
蛇の年の九月…
蛇儿年九月…

【注釈】

01 isinei čölke songgun v[u]: F116:W204の注01 yisinei; F9:W31bの注03 ešin_e luu songgun vuuを参照。
02 sanggasiri köbegün: F116:W204 の注 03 sangasiri köbegün を参照。

01 isinei čölke songgun v[u]: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
02 sanggasiri köbegün: 参见 F116:W204 注释 03 sangasiri köbegün。

【解説】

写真によると、モンゴル語文書と漢語文書が別々の紙に書かれた上で、貼り合わされ、押印されている。このように、文書を翻訳して合璧文書を送付する場合，それぞれの文書を別々の紙に書写した後，貼り合わせ，そこに押印するという作成方法が取られていたことが分かる。モンゴル語文書に「七月」、「十月」、「以前の［きまりによって］」、「蛇の年の九月」、漢語文書に「九」、「十二月」、「依在先的体」、「年九月」とあることなどを手がかりに考えると、サンガシリ大王が蛇の年（延祐

四年、1317年）の七月から九月までの分例を既に受領したこと、十月から十二月までの分例について前例の通り与えさせることに関して、蛇の年（延祐四年）の九月にエチナ路総管府に対して発行された同一内容の文書のモンゴル語版と漢語版と推測される。

根据照片，这是一件粘合而成的文书。蒙古语文书和汉语文书原来分别记写在互不相同的纸上，后经粘合并且加盖印章而成。

据此可知，当时制做这类文书的方法是：翻译内容，将不同语言文字的文书分别抄写在不同的纸上，然后将两种不同文字的文书粘合在一起，加盖印章。

根据蒙古语文书里的“七月”、“十月”、“[依] 在先 [体例]”、“蛇儿年九月”；再根据汉语文书里的“九”、“十二月”、“依在先的体”、“年九月”等等线索，我们推测，这是一件关于以下两个事情的、于蛇年（延祐四年，公元1317年）九月发送给亦集乃路总管府的、内容完全相同的行政文书的蒙古语版和汉语版。这两个事情为：桑哥失里（サンガシリ）大王已经领收到蛇儿年（延祐四年）七月至九月的分例。关于十月至十二月的分例，将根据以往的惯例给与。

(No.024) 文書番号 F116:W572

サイズ：縦 24.2cm　横 112.2cm

01 isinei songgun vuu-yin///
エチナ総管府の…
亦集乃总管府…

02 tükel bičig-i[yer]///
トゥケルが文書［によって］…
秃怯里文字［里］…

03 sanggasiri köbegün-ü kesig [unda]n s[igüsü]///
サンガシリ大王の分け前の［酒と丸ゆで用の羊］…
桑哥失里大王分例［酒羊］…

04 jil qubi sara terigülen γurban sara K///
年の正月を始めとして三月…
年正月为头…三月

05 eš_ün sara-luγ_a ///
閏月と…
闰月…

06 tegüs abuγ_a ///
全て取った。…
全得了…

07 undan sigü[sün]///
酒と丸ゆで用の羊…

酒羊…

08 noyad medeṭü[gei]///
ノヤンたちが知れ…
官人毎识者…

【注釈】

01 isinei songgun vuu: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。
02 tükel: F116:W204 の注 02 tükel を参照。
03 sanggasiri köbegün: F116:W204 の注 03 sangasiri köbegün を参照。
04 qubi sara: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。
05 eš_ün: eš_ün は、対応する漢語文書と比較すると、「閏」に当るものと思われる。「閏」(近世音 ɲuən) は羅常培、蔡美彪 (2004) でそのパクパ字表記を確認できなかったが、同じ近世音 ɲuən の「潤」が žėun となっていることが確認できる。ハラホト文書 HF125a, HF125c には「人」(近世音 ɲən. パクパ字 žin) をモンゴル文字で šin と音写している。この近世漢語の r とモンゴル文字 š の対応は、『華夷訳語』(乙種本) (『北京圖書館古籍珍本叢刊』6: 67) に「šüṇ ayi：閏月：順哀」と見えることや、Doerfer (1963-75: No.1331) に šün (＜閏) が挙げられていることからテュルク語にも確認できる。さらにガベン (Gabain 1974: 389) は žim, ăžim と「壬」(近世音 ɲəm) の対応を明らかにしており、古テュルク語では近世漢語音 r を音写した ž の前に母音が現れる場合があることがわかる。以上から、ここで問題としている eš_ün は「閏」の音写であると考える。
06 abuɣ_a: F61:W9 の注 25 abuɣ_a を参照。

01 isinei songgun vuu: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
02 tükel: 参见 F116:W204 注释 02 tükel。
03 sanggasiri köbegün: 参见 F116:W204 注释 03 sangasiri köbegün。
04 qubi sara: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。
05 eš_ün: 将 eš_ün 与相对应的汉文文书比较，可知为“闰”。罗常培、蔡美彪(2004)中没能确认“闰”的八思巴文拼写法，但肯定了“润”音写为 žėun。在黑城文书 HF125a、HF125c 中将“人”以蒙语音写为 šin。该字的首辅音与蒙古文字的 š 相对应。如《华夷译语》(乙种本)(《北京图书馆古籍珍本丛刊》6: 67) 中出现「šüṇ ayi：闰月：顺哀」，Doerfer (1963-75: No.1331) 中提到 šün (＜闰)，因此可知该词也出现于突厥语中。况且冯・加班 (Gabain 1974: 389) 曾确认 žim, ăžim 和“壬”(近世音 ɲəm) 的对应关系，认为在古突厥语中将汉语 r 写为 ž 时，前面加有元音的现象。由上可知，这里的 eš_ün 是“闰”的音写形式。
06 abuɣ_a: 参见 F61:W9 注释 25 abuɣ_a。

【解説】

この文書も、写真によると、モンゴル語文書と漢語文書が別々の紙に書かれた上で、貼り合わされ、押印されている。漢語文書は李逸友 (1991: 130) に掲載されている。モンゴル語文書、漢語文書ともに「三月」、「閏」とあり、漢語文書に「至六月三个月的」とあることなどを手がかりに考えると、サンガシリ大王が延祐四年の正月から三月までと、閏月の分の四ヶ月の分例を既に受領したこと、四月から六月までの三ヶ月分の分例について前例の通り与えさせることに関して、トゥケルによってエチナ路総管府に対して発行された同一内容の文書のモンゴル語版と漢語版と推測される。モンゴル語文書は二つの部分に分かれているが、残存箇所の形状から見ると重なって出土したものであると考えられること、それを踏まえて文書整理者が一連の文書と判断したと思われること、文面に齟齬がないことから、同一文書とみてよかろう。なお、モンゴル語文書の右側にさらに文書の

一部と思われる紙が貼られているが、貼られている文書については，内容を確認できないため，その機能も不明である。

根据照片可知，这件行政文书为将原本记写在两张互不相同的纸上的蒙古语文书和汉语文书，经过粘合、加盖印章而形成的。其中的汉语文书，在李逸友（1991: 130）中已有登载。

在蒙古语文书和汉语文书里，都有“三月”、“闰”等词，在汉文文书里还有“至六月三个月的”的记述。根据这些线索我们认为，这是一件针对以下两项事情的、自秃怯里（トゥケル）发送给亦集乃路总管府的、内容完全相同的行政文书的蒙古语版和汉语版。其中的两项事情是：桑哥失里（サンガシリ）大王已经收领到了延祐四年正月至三月的，另外再加上一个闰月的，共四个月的“分例”；按照过去的惯例支付自四月至六月共三个月的“分例”。

虽然蒙古语文书已经分离成为两半，但从残存部分的形状来看，它们当初应该是重叠在一起出土的。文件的内容也互不矛盾，所以我们将其视为同一件文书。

然而，在这件蒙古语文书的右侧，还粘贴着一片似乎是文书之一部分的纸张，由于我们不能确认它的内容，所以这片被粘贴在蒙古语文书右侧的纸张的具体作用，尚不清楚。

(No.025) 文書番号 F144:W3

サイズ：縦 21.5cm　横 12.5cm

01 ///? sara t[eri]g[ü]l[en]///
…月を［始めとして］…
…月［为头］…

02 ///'W ǰiran süke čau-yi
…六十錠の鈔を
…六十锭钞

03 ///[ǰi]l-ün kögel[er] sara-y<i>n arban
…年の十二月十
…年十二月十日

04 ///T'Y isinei kürči irekü arγui
…エチナにやって来るアルグイ
…前来亦集乃之阿鲁灰

05 ///aluγ qatun-u kesig undan sigüsün
…ルグ・ハトンの分け前の酒、丸ゆで用の羊
…鲁格妃子分例酒羊

06 ///inu arban sara terigülen kögeler sara
…十月を始めとして十二月
…十月为头至十二月

07 ///[kür]tele γurban sara_sun čau inu tabin

…までの三ヶ月の鈔は五十
…至…三个月钞五十锭

08 ///[s]ǐǰir ?///??///
…両…
…两…

【注釈】

02 süke čau: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。
04 isinei: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。。
06 terigülen: 一度 terigüten（など、はじめ）と書いたものを terigülen（始めとして）に書き換えている。
07 sara_sun: sara_sun→sara-s-un。sara（月）に、複数形を作る接尾辞 s（通常は単数形に直結する）と属格語尾-un が連綴された sun が sara と分綴された珍しい例。
07 čau: F61:W6 の注 12 süke čau を参照
08 [s]ǐǰir: 『続増華夷訳語』（『北京圖書館古籍珍本叢刊』6）数目門に sǐǰir「両」。銀の重量単位及び交鈔（元代の紙幣）の貨幣単位の両に相当する。前田直典（1944: 24）参照。17 世紀のモンゴル文年代記『エルデニ・イン・トブチ』（Haenisch 1955）やロブサンダンジン『アルタン・トブチ』（Bira 1990）では「混じりけのない」の意味で用いられる。

02 süke čau: 参见 F61:W6 注释 süke čau。
04 isinei: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
06 terigülen: 将一度写为 terigüten（等、首次）的字改写为 terigülen（以、为首）。
07 sara_sun: sara_sun→sara-s-un。sara（月）的复数加属格词尾-un 而成。但是 sara 与 sun 分开写的例子极少。
07 čau: 参见 F61:W6 注释 12 süke čau。
08 [s]ǐǰir: 《续增华夷译语》（《北京图书馆古籍珍本丛刊》6）数目门中有 sǐǰir“两”字，相当于银的重量单位及交钞（元代的纸币）的货币单位的两。参见前田直典（1944：24）。17 世纪蒙古文编年体史书《蒙古源流》（Haenisch 1955）和罗桑丹津《黄金史纲》（Bira 1990）中以用来“纯粹”之意。

【解説】

5 行目によると、某（aluγ より上の部分は破損しており不明）ハトンに対する分例文書のようであるが，欠損部分が多く確定はできない。仮に分例文書であるならば，他の一群の分例文書と異なり，鈔による分例支給があったことを示す事例となる。

根据第 5 行，这似乎是一件向某位哈屯（ハトン）献纳“分例”的行政文书（因为从 aluγ 往上的部分破损丢失，内容不明），但是由于破损缺失的部分太大了，所以对这件文书的具体归属我们无法确定。如果能够假定这确实是一件“分例”文书，它也与其他的很多“分例”文书不同，是一个曾经用钞币支付了“分例”的例子。

(No.026) 文書番号 84HF84

サイズ：縦 20cm　横 45.5cm

01 ///'-'C'
…から
…由…

02 ///D'N buliγan qulaγan-ača
…狡猾に言い逃れする盗人たちから
…由说狡辩之辞而逃之强盗每…

03 ///??MW edüge es_e bariγdaγs<a>d
…いま捕まっていない者たち
…至今未曾捕获者

04 ///ükütegüs-e bičig bayulγaǰu ede
…クテグスに文書を下し、これら
…给…苦脱古思下文书【将】这等

05 ///küyi
…することを
…者!

06 ///R ilebe noqai ǰil yisün
…送った。犬の年の九
…给了。狗儿年九

07 sara-yin
月の
月

08 arban dörben-e
十四日に。
十四日

【注釈】

03 buliγan: buliγan には二つの解釈の可能性がある。ひとつは buliγa-n<buliya-n と見なして「奪って」と訳す。もう一つは「狡猾に言い逃れする」という意味の buliγai の複数形と見る。ここでは文脈から後者を採った。

03-04：3 行目と 4 行目の間はかなり間隔がある。1, 5 行目がかなり上方で行が終わっていることから考えると、3 行目と 4 行目の間にも破損箇所に行が存在した可能性がある。

03 buliγan: buliγan 有两种解释的可能。一种为 buliγa-n<buliya-n，译为“夺”。另一种是有“说狡辩之辞而逃”之意的 buliγai 的复数形。这里采用了后者。

03-04：第 3 行与第 4 行之间有相当大的间隔。从第 1, 5 行相当靠上的情况来看，第 3 行和第 4 行之间的破损处很可能还有字行。

【解説】

文書の発信者は不明である。文書上部が破損しているが、残っている部分の内容から推測すると、まだ捕まっていない犯罪者を捕らえるよう命じた文書か。

文书的发出者是谁不清楚。这件文书的上半部分破损缺失，根据其残留部分上的内容推测，这应该是一件追捕一个在逃的犯罪嫌疑人的命令文书。

(No.027) 文書番号 MON04

01 ///?///
…
…

02 ///?///N üǰetüge[i]///
…見よ
…看者

03 /// tügütü-de arban
…トゥグトゥに十
…给…秃古秃十

04 γur[ban] kümün T/// d[örbe]n t[ü]men čerig
三人…四万の兵士
三人…四万兵

05 -tür tata[γda]qu buyu ene bičig kürgegülüged
に徴されるのである。この文書を送らせて
抽调。将这文书送毕

06 ǰam čerig alban-da[ča] qariγultuγai kemegsen-ü
站役、軍役から帰らせよ、と言った
由站役、兵役处遣返么道

07 tula edüge ede (tügütü?) ///??///
ために、今、これら（トゥグトゥ？）…
之故如今【将】这等（秃古秃？）…

08 KWY??///
…
…

【注釈】

03, 07 tügütü: 人名か地名であろう。

06：6 行目には alban の下と qariγultuγai の下の 2 箇所に＋が書いてある。

03, 07 tügütü: 人名或地名。
06 : 第 6 行中的 alban 与 qariγultuγai 的下方各记有十号。

【解説】
站役、軍役から帰還させるよう命じる内容がみえるが、全体としてどのような内容を持つ文書なのかははっきりしない。

只能够看到从站役、军役还归原址的命令，但这是一件大致属于什么内容的文书，却并不清楚。

(No.028) 文書番号 HF197B

サイズ：縦 18cm　横 18.5cm

01 ///?aluγ qaṭun-u kesig . ///
…ルグ・ハトンの分け前…
…鲁格妃子分例…

02 ///'jil arban sara ?///
…年の十月…
…年十月…

03 /// kürtele γurban saras ///
…に至るまで三ヶ月…
至…三个月…

04 taki[y]_a jil qubi s[ara]///
鶏の年の正月…
鸡儿年正月…

05 -TWR kürtele γurban [saras]///
に至るまで三［ヶ月］…
至…三［个月］…

06 ///? ker (ber?)///
…もし…
…怎生…

07 ///[m]edeṭü[gei]///
…知れ。…
…识者…

【注釈】
04 qubi s[ara]: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。

04 qubi s[ara]: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。

【解説】

某（?aluγ より上の部分は破損しており不明であるが、F144:W3 に現れるハトンと同一人物である可能性が高い）ハトンの猿の年の十月から十二月までの三ヶ月分の分例、鶏の年の正月から三月までの三ヶ月分の分例に関する文書であろう。

这似乎是关于某位哈屯（ハトン）（由于从“?aluγ”以上的部分破损缺失所以无法究明，但这很可能与 F144:W3 中出现的那位哈屯是同一个人）的、从猴儿年的十月到十二月的三个月的“分例”以及从鸡儿年的正月到三月这三个月的“分例”的文书。

(№029) 文書番号 F116:W349

サイズ：縦 27cm　横 43cm

01　/// yin ///
…の…
…之…

02　noyad medeṯūgei moγai ǰil yisün sara
ノヤンたちは知れ。蛇の年の九月
官人每识者！蛇儿年九月

03　arban ǰiryuyan-a
十六日に
十六日

04　buralgi bi[čig]///
ボラルギが文書…
不兰奚文[字]…

05　buluγan qaṯun-u kesig γulir amun moγai ǰil
ボルガン・ハトンの分け前の穀粉と脱穀した穀物、蛇の年
卜鲁罕妃子分例米面、蛇儿年

06　/// doluγan sara ///
…七月…
…七月…

【注釈】

05 γulir amun: γulir（口語 γuril）は穀粒を挽いて粉末にしたもの。amu(n)は穀類の総称、あるいは脱穀した穀粒。李逸友（1991: 125-135）の「諸王妃子分例類」に収録されている漢語文書では、これに対応する表現は「米面」（面は麺の簡体字）となっている。米は広義では脱穀した穀物の意、麺は小麦粉。「米麺」と熟した場合は、両者を並列した意味と、米粉という意味がある。『蒙古訳語』

には「米：jaqa amu」、「麺：γulir」とある。また、『元典章』典章16・戸部巻2・分例・官吏・應副行省曳剌米麺等分例（16/6b）の文中では、「每名宿頓處應副米一升、麺一斤」とあり、標題の「米麺」が米と麺を並列に用いていることがわかる。

05 γulir amun: γulir（口语 γuril）是指将谷粒磨成粉状。amu(n)是谷类的总称或是脱谷的米粒。李逸友（1991: 125-135）的“诸王妃子例类”中所收录的汉文文书中，与此相对应的是“米面”（面是麵的简体字）。在广义上米是指已脱谷的谷物，面是小麦粉。在一般场合，“米面”有将两者并列表示“米”、“面”和指米粉这两种意思。《蒙古译语》中有“米：jaqa amu”、“面：γulir”一词。以及《元典章》典章16・户部卷2・分例・官吏・应副行省曳剌米面等分例（16/6b）的文中记为“每名宿顿处应副米一升、面一斤”，可知标题的“米面”是指米和面。

【解説】

写真では文書番号F116:W349として5つの断片が一連の文書として扱われる。いま，便宜的に左から順に番号を振った。F116:W349-1とF116:W349-2は，同一の印影の左部分と右部分があり，同一文書が焼けたため二つに分かれたことがわかる。F116:W349-3は，漢語文書（李逸友1991: 133に録文がある）とモンゴル文書を貼り合わせたものである。F116:W349-4とF116:W349-5は，モンゴル語のみである。F116:W349-3の漢語文書では，引用文書の発行者が撒里叉（サリジャ）であるのに対し，F116:W349-5のモンゴル語文書では，引用文書の発行者がボラルギである。つまり，この両文書についていうならば，同一内容の文書のモンゴル語版、漢語版ではないことは自明である。しかしボルガン・ハトン（卜魯罕妃子）に対する穀粉と脱穀した穀物（米面）の分例に関する文書という点では同じであると考えてよい。おそらくは，分例文書がひとまとめに保管されていたために，焼け方・残り方がほぼ同様の形状となり，その状態で出土したために，文書整理者はこれらの断片を一連の文書として整理したのであろう。

F116:W349-4とF116:W349-5はともに「蛇年」の分例文書である。おそらくまとめて出土したであろうことから，ともにボルガン・ハトンの分例文書であると考えて大過なかろう。この条件下で，F116:W349-3，4，5の相互関係について推論を立てておこう。

上述のように，F116:W349-4とF116:W349-3が同一内容のモンゴル語版・漢語版ではないことは動かない。

F116:W349-4の文書は，蛇年9月16日に発給された文書である。他の分例文書を参照すると，9月発給の分例文書では7～9月の分例が支給されたことが述べられた後，10～12月の分例を以前通り支給されたいと求める内容であるのが通例である（例えばMON03; 84H·F116:W511/1683）。

F116:W349-5には「7月」の字句が見える。したがって，二つの可能性が考えられる。第一の可能性は，4～6月の分例が支給されたことが述べられた後，7～9月の分例を以前通り支給されたいと求める内容の文書（つまり蛇年6月に発給された分例文書）の断片である可能性。この場合，F116:W349-3と一連の文書であることになる。第二の可能性は，7～9月の分例が支給されたことが述べられた後，10～12月の分例を以前通り支給されたいと求める内容（つまり蛇年9月に発給された分例文書）の断片である可能性。この場合，F116:W349-4と一連の文書であることになる。なお，前後関係は，F116:W349-5，F116:W349-4の順番でなければならない。

根据照片来看，[文书整理工作者]是把五枚断片编连在一起（视此五枚断片为一组同类文书）而组成了文书编号为F116:W349的这件行政文书的。这里，为了方便研究工作，我们也按照从左到右的顺序对它们进行了号码编排。

F116:W349-1和F116:W349-2分别带有同一印迹的左半部分和右半部分，很明显这是一张文书（纸片）被烧成了两截。F116:W349-3是把汉语文书（李逸友1991: 133中载有录文）和蒙古语文书粘合在一起而形成的。在F116:W349-4和F116:W349-5上，都只有蒙古语。

在F116:W349-3的汉语文书部分里，引用文书的发出者是撒里叉（サリジャ），但是在F116:W349-5的蒙古语文书中，引用文书的发出者却是不兰奚（ボラルギ）。非常明显，这两枚文书并不是内容相同的同一件文书的蒙古语版和汉语版。然而这两枚文书所记述着的，又全都是关于需要贡献（缴纳、支付）给卜鲁罕妃子（ボルガン・ハトン）的面粉和已经脱去壳皮的谷物（所谓“米面”）之“分例”的内容。在这一点上，这两枚文书又是完全相同的。我们认为，[在最原始时期]这两枚文书都被作为“分例”文书归拢在一起加以保管，[后来]它们被烧残或者被损坏，外形逐渐相同，并且在这种状态下被发掘出土，所以文书整理工作者们把这些断片看成是一组（内容互相有联系的）文书而加以整理归类。

F116:W349-4和F116:W349-5，都是关于“蛇儿年”的“分例”文书。而且它们被挖掘出土时可能就[重叠]在一起，所以它们都被看成是关于卜鲁罕哈屯（ボルガン・ハトン）的“分例”文书，我们认为这种看法并无大过。

现在，我们就在前面所说的这些条件下，对于F116:W349-3，4，5的相互关系做一些推测。

如前所述，F116:W349-4和F116:W349-3并不是内容相同的同一件文书的蒙古语版和汉语版的说法不容怀疑。

F116:W349-4，是蛇儿年九月十六日发出的一件文书。如果参照其他的“分例”文书，九月份发出的“分例”文书的内容大都是说七月至九月的“分例”已经收领，接下来的内容是要求按以往通例将十月至十二月的“分例”交纳（支付、贡献）上来，此为这类行政文书的通例。

在F116:W349-5里，能够看到“七月”这样一个字句，对此我们认为这里有两种可能性。

其中的第一种可能性，这是一枚记写着四至六月的“分例”已经收领、要求按照以往惯例支付（贡献）七至九月的“分例”内容的行政文书（也就是蛇儿年六月发出的“分例”文书）的断片。如果是这种情况的话，那么[这枚断片]就能和F116:W349-3构成[内容相互]关联的文书。

其中的第二种可能性，这是一枚记写着七至九月的“分例”已经收领、要求按照以往惯例支付（贡献）十月至十二月的“分例”内容的行政文书（也就是蛇儿年九月份发出的“分例”文书）的断片。如果是这种情况的话，那么[这枚断片]就能和F116:W349-4构成[内容互相]关联的文书。

此外，他们的前后关系必然是以F116:W349-5，F116:W349-4为其顺序的。

(№030) 文書番号 F43:W23

サイズ：縦 30cm　横 12cm

01　　? TW///
　　…
　　…

02　　arad edüged-tü[r]///
　　平民は昨今…
　　人每如今…

03　　///öljitemür [souč]ing-un (alban/altan?) buyu mön
　　…オルジェイテムル左丞の（税／金？）である。同じく
　　…完者帖木儿左丞的（税/金？）。同

04　　///öljitemür součing-luγ_a sayitur keleldükü-yi
　　…オルジェイテムル左丞とよく話し合うことを
　　…与完者帖木儿左丞好生商议

05 bay duraṯu nereṯü ///[kü]mün-ü tula///
バグ・ドラトという名の者のために…
为名拔克都喇禿之人之故…

06 ///N duraṯu ???N P?N ///
…ドラト…
…都喇禿…

【注釈】

02 edüged: edüge の複数形。

03, 04 součing: 官名「左丞」(近世音 tso-ʧʻɪəŋ) を写したもの。左丞は、中書省・尚書省・行中書省に置かれた宰執職。右丞相・左丞相・平章政事・右丞に次ぐ。součing は、1362 年「忻都王碑文」の l. 2 に součing esenbuq_a (左丞エセンブカ) という用例がある (Cleaves 1949: 62, 97, n.20；Ligeti 1972a: 63)。「左 (近世音 tso)」ts がモンゴル文字 s で表記されている例として『華夷訳語』(乙種本) (『北京圖書館古籍珍本叢刊』6) の巴咱兒 (咱 tsa) −basar をあげておく。

03 (alban/altan?): 全体の文脈が不明で、読みも推測なので、とりあえず「(税／金？)」と訳した。

06 ???N: ???の部分は黒く塗りつぶされている。

02 edüged: 是 edüge 的复数形。

03, 04 součing: 官名。为“左丞”。左丞是设于中书省、尚书省、行中书省的宰执职，次于右丞相、左丞相、平章政事、右丞。součing 在 1362 年《忻都王碑文》的 l. 2 中有 součing esenbuq_a (左丞也先不哈) 的例子 (Cleaves 1949: 62, 97, n.20; Ligeti 1972a: 63)。将“左”之辅音 ts 以蒙古文字 s 来标写的例子，有《华夷译语》(乙种本) (《北京图书馆古籍珍本丛刊》6) 中的巴咱兒 (咱 tsa) −basar。

06 ???N: ???之部分已被涂抹。

【解説】

オルジェイテムル左丞、バグ・ドラトなどの固有名詞が現れる。行政関係の文書ではないかと推測されるが、詳しい内容は分からない。

在这上面能够看到完者帖木儿 (オルジェイテムル) 左丞、拔克都喇禿 (バグ・ドラト) 等等固有名词，我们推测它应该是一件有关行政方面的文书，而其详细内容却无法搞清楚。

(№031) 文書番号 F116:W503

01 ///[ʃi]l dörben sara ///
… 四月…
…年四月…

02 /// kürtele γurban saras-un ///
…まで三ヶ月の…
…至…三个月…

03 ///[e]düge doluγan sara T///

…今、七月…
…如今七月【为头】…

04 /// TWR kürtele γurban ///
…まで三…
…至…三个…

05 /// γuyumu ker ber uridu yosuγar ???
…求めている。もし以前の決まりによって、…
索要…。怎生依在先体例…

06 /// noyad medeṯügei moγai ///
…ノヤンたちが知れ。蛇…
…官人等知者。蛇…

【解説】
F116:W503 は原件が所在不明であるので、コピーに拠った。この種の分例文書を参考に破損部分を補って考えると、某の四月から六月までの三ヶ月分を全て受領したという内容、及び七月から九月までの三ヶ月分の分例を求めるという内容が記された文書であろう。年は最終行にみえる「蛇」によって「蛇の年」であると考えてよいだろう。

F116:W503 原件的下落不明，我们使用的是复印件。
参考这个种类的“分例”文书以为研究破损缺失部分之内容的辅助资料，我们认为，这是一件记述了以下两个事情的行政文书：一、某年四月至六月的三个月的“分例”已经全部收领；二、要求得到七月至九月这三个月的“分例”。关于这是哪一年的问题，因为最后一行里有“蛇”存在，所以我们认为它可能是“蛇儿年”。

(No.032) 文書番号 F116:W512

サイズ：縦 15.5cm　横 18cm

F116:W512a

01 ///isin_ne songgan-u noyad
…エチナ総管のノヤンたち
…亦集乃总管之官人每

02 ///čig-tür singlamau edeni
…にシンラマオはこれらを
…在…省剌毛将此等

03 ///YK'N-W 'WY '///
…の…
…的…

F116:W512b

01 ///WN-TWR 'WYL///
…に…
…在…

02 ///WN buyu ker ber
…である。もし
…，若…

03 ///laqu-yi
…することを
…

【解説】
断片 a の 1 行目より左側にさらに行があったかどうかは不明であるが、もし断片 a の 1 行目が完全な状態の本文書の 1 行目であったとすると、エチナ総管府宛、或いはエチナ総管府を発給元とする文書ということになろう。何についての文書なのかは破損がひどく推測も困難である。

从断片 a 的第 1 行起，其左侧不知是否还有行文。如果[目前能够看到（读懂）的]断片 a 上的第 1 行，假如是本件文书完整无缺的第 1 行，那么这就应该是一件发给亦集乃总管府的、或者是一件从亦集乃总管府发出的文书了。但它是一件关于什么事情的文书呢？由于破损缺失太严重了，我们无法推测。

(No.033) 文書番号 F214:W1

01 arban sara-yin X///
十月の…
十月…

02 si sarambai γurban taγar///
シ・サランバイが三石…
石撒兰伯…三石…

03 γurban šim buγdai tüsürb[e]///
三斗の小麦を納めた。…
交纳三斗小麦…

04 arban sara-yin qorin ???///
十月二十…
十月二十…

05 bolai temür qorin naiman taγa[r]
ボライ・テムルが二十八石
孛来帖木儿交纳二十八石

06 buγdai tüsürbe
小麦を納めた。
小麦。

【注釈】

01 sara-yin X: sara-yin の後には q 或いは γ で始まる qoyar, γurban, qorin, γučin 等が想定される。
02, 05 taγar: F61:W9 の注 05 taγar を参照。
02 : 2 行目左側に漢字で「収石撒蘭伯小麦三石…」と記されている。黒城漢語文書の F214:W1 では、この部分の漢字を「収石撒蘭僧小麦三石」としているが（李逸友 1991: 110, pl.17(1)）、松井太（1997）が指摘しているように、モンゴル語で記されている人名が si sarambai であることを考えると、「僧」は「伯」とすべきである（松井太 1997: 28-29）。
03 šim: F61:W9 の注 05 taγar を参照。
03, 06 buγdai: F61:W9 の注 05 buγdai を参照。
05 : 5 行目左側に漢字で「収孛羅帖木小麦廿八石…」と記されている。黒城漢語文書の F214:W1（李逸友 1991: 110, pl.17(1)）、松井太（1997: 28,31）も同様である。

01 sara-yin X: 在 sara-yin 之后以 q 或 γ 为开头的字有 qoyar, γurban, qorin, γučin 等。
02, 05 taγar: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。
02 : 第 2 行左侧以汉字记载为“收石撒兰伯小麦三石…”。黑城汉文文书 F214:W1 中，将这部分汉字记为“收石撒兰僧小麦三石”（李逸友 1991: 110, pl.17(1)），但正如松井太（1997）所指出的那样，如认为它是以蒙古语记的人名 si sarambai 的话，“僧” 应作“伯”（松井太 1997: 28-29）。
03 šim: 参见 F61:W9 注释 05 taγar。
03, 06 buγdai: 参见 F61:W9 注释 05 buγdai。
05 : 第 5 行左侧以汉字记为“收孛罗帖木小麦廿八石…”。黑城汉文文书 F214:W1（李逸友 1991: 110, pl.17(1)）和松井太（1997: 28,31）中的记载也与此相同。

【解説】

本文書は原件が手元にないので、コピーに拠った。シ・サランバイとボライ・テムルなる者の小麦の納入についての文書である。李逸友（1991: 110）に本文書の漢語部分が、また同書 pl.17(1)に本文書の写真が掲載されている。また松井太（1997）に本文書に関する詳細な考察があるので参照されたい。

因为在我们的手跟前没有本文书的原件，我们使用的也是复印件。这是一件关于石撒兰伯（シ・サランバイ）和孛来帖木儿（ボライ・テムル）已经缴纳了小麦的行政文书。在李逸友(1991: 110)中，已有对本件文书的照片的登载（pl.17(1)）。此外在松井太（1997）里也有对于本件文书的详细的考察研究，可以参考。

(No.034) 文書番号 F116:W62

サイズ：縦 27cm　横 43cm

01 isin_e songgun vu-yin noyad-ta
エチナ総管府のノヤンたちに
亦集乃总管府官人每根底

02 buralgi bičig-iyer ügülemü
ボラルギが文書によって述べる。
不兰奚文字里说有

03 ///N qaṭun-u ke[sig]///
…ハトンの分け前…
…妃子分例…

04 ///N tegüs abuγ[_a]///
…全て取った。
…全得了也

05 ///[ter]igülen yisün sara ///
…始めとして九月…
…为头【至】九月…

【注釈】

01 isin_e songgun vu: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。
04 abuγ[_a]: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。

01 isin_e songgun vu: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
04 abuγ[_a]: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。

【解説】

写真によると、モンゴル語文書と漢語文書が同じ文書番号F116:W62を持つ文書となっているが、モンゴル語文書には「…始めとして九月」と記されているのに対し、漢語文書には「至十二月終三个月全得了」、「正月為頭至三月通閏四个月」とあり、書かれたのが「延祐四年正月」とあることから考えると、モンゴル語文書と漢語文書の内容が対応するものでないことは間違いない。なお李逸友（1991: 132）にはF116:W62とされる漢語文書が掲載されているが、写真のものとは明らかに別のものである。この種の分例文書を参考に破損部分を補って考えると、モンゴル語文書はボラルギからエチナ路総管府に宛てた某ハトンに対する分例に関する文書で、某ハトンが四月から六月までの三か月分の分例を全て受領したこと、七月から九月までの三か月分の分例を求めていること、及びそれについてしかるべく処置すべきことを内容とした文書であろう。

如果根据照片来看，这是一件让蒙古语文书和汉语文书使用同一个完全没有区别的文书编号F116:W62的行政文书。但在蒙古语文书里面，有“…为头【至】九月…”的记述；而在汉语文书里面，也有“至十二月终三个月全得了”、“正月为头至三月通闰四个月”等的记述；其书写时间为“延祐四年正月”。根据这些情况考虑，蒙古语文书和汉语文书的内容并不能互相对应，这是毫无疑问的。

此外，在李逸友（1991: 132）里面，[也]登载着一件以F116:W62为编号的汉语文书。而李逸友先生书里的这件F116:W62汉语文书，与我们这里所讨论的编号也是F116:W62的行政文书，非常明显是两个互不相同的东西。

参考这个种类的“分例”文书以为研究破损缺失部分之内容的辅助资料，我们认为[其中的]蒙古语文书是一件[至少]包含着以下[三项]内容的文书。其一，这件文书是从不兰奚（ボラルギ）发给亦集乃（エチナ）路总管府的，内容是关于某位哈屯（某ハトン）的“分例”问题，这位哈屯已经领收到了自四月至六月的三个月的全部（所有）“分例”；其二，要求得到自七月至九月的三个月的“分例”；其三，对此请予酌情处理。

(№035) 文書番号 F209:W67

サイズ：縦 18.5cm　横 12cm

01　moγai ǰil doluγan sara-yi[n]///
蛇の年の七月の…
蛇儿年七月…

02　aq_a degü ǰirγuγan aq_a qar_a///
兄弟六人、兄ハラ…
兄弟六人、兄哈喇…

03　öbür-ün aq_a minu baγatur///
わが兄バートル…
我之兄霸都鲁…

04　ǰam alban ba toqun qas///
站役をわれらトホン、ハス…
站役我等脱欢、哈思…

05　///???? P'R ????///
…
…

【注釈】

03 öbür: この öbür は öber と解する。

03 ŏbür: 将 öbür 理解为 öber。

【解説】

蛇の年の七月に書かれた、站役に関する文書であろうと推測されるが、詳しいことは分からない。

我们推测，这是一件书写于蛇儿年七月、关于站役的行政文书，但其详细内容却无法搞清楚。

(№036) 文書番号 F111:W2

サイズ：縦 20.1cm　横 12.4cm

01 isin_e-yin songgan vu
エチナの総管府
亦集乃总管府

02 noyad ba mayui
ノヤンたちとマゴイ・
官人每与马兀

03 munamaš_i-yin ǰamčid
モナマシの駅夫ら
木南子站户每

04 /// (araǰi)///
…（交換）…
…（交换）…

【注釈】

02-03 mayui munamš_i-yin ǰamčid: マゴイ・モナマシは、ハラホト出土漢語文書の F131:W8（李逸友 1991: 175）に現れる駅站名「馬兀木南子」（近世音：ma u mu nam tsï）に比定される。なお、ハラホト出土漢語文書 F2:W65（李逸友 1991: 175, pl.14(1)）には、「馬木兀南子站」が現れる。モノクロの写真版では確認が困難であるが、李逸友 1991 の移録に間違いないとすれば、本文書のモンゴル語表記から、こちらが誤写であることが確定する。なお、エチナ路の駅站については、李逸友（1987；1991: 29-36）に詳しい。

02-03 mayui munamš_i-yin ǰamčid: mayui munamš_i 即为黑城出土汉文文书 F131:W8（李逸友 1991: 175）中出现的驿站之名“马兀木南子”（近代发音为 ma u mu nam tsï）。还有，黑城出土汉文文书 F2:W65（李逸友 1991: 175, pl.14(1)）中，以“马木兀南子站”的形式出现。尽管从黑白照片难于辨认，但如果李逸友 1991 的移录没有差错的话，根据该文书中的蒙古文拼写形式，可确定其书写有误。另，关于额集乃路的驿站方面，李逸友（1987; 1991: 29-36）中有详细记载。

【解説】

エチナ総管府宛、或いはエチナ総管府を発給元とする行政文書であろう。残存箇所からは駅站に関するものであることが推測される。

这应该是发给亦集乃总管府的、或者是发自于亦集乃总管府的一件行政文书。
根据目前能够看到（读懂）的内容，我们推测这是一件关于驿站的文书。

(No.037) 文書番号 F116:W92

サイズ：縦 26cm　横 17.5cm

01 ///N sara terigülen///
…月を始めとして…
…月为头…

02 ///kürtele γurban saras-un tegüs abuγ_a
…到るまでの三ヶ月分を全て取った。
至…三个月全得了也

03 ///[e]düge moγai jil qubi sara terigülen
…今、蛇の年の正月を始めとして
…如今蛇儿年正月为头

04 ///RP'N sara_su{Y}n ///
…三ヶ月の…
…三个月…

【注釈】

02 abuγ_a: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。

03 qubi sara: F61:W9 の注 01 qubi sara を参照。

04 ///RP'N: 分例類の文書によると、分例は三ヶ月を単位に支給がなされていることが分かるので、γurban の可能性が高い。ただし、閏月を含めて四ヶ月になる場合もあるので、dörben の可能性もある。

02 abuγ_a: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。

03 qubi sara: 参见 F61:W9 注释 01 qubi sara。

04 ///RP'N: 据分例类的文书，分例是以三个月为单位支付的 ，所以很可能是 γurban。但如遇闰月的话，也有 dörben 的可能。

【解説】

写真では、モンゴル語文書と漢語文書が同じ文書番号 F116:W92 を持つ文書となっているが、モンゴル語文書に「蛇の年の正月」とあるのに対し、漢語文書には「蛇児年七月」とあることから、モンゴル語文書と漢語文書の内容が対応するものでないことは明らかである。なお漢語文書のほうは李逸友（1991: 133）に掲載されている。この種の分例文書を参考に破損部分を補って考えると、モンゴル語文書は、某が前年の龍の年の十月から十二月までの三ヶ月分の分例を全て受領したこと、蛇の年の正月から三月までの三ヶ月分の分例を求めていること、などを内容とする文書であろう。

根据照片，这也是一件让蒙古语文书和汉语文书使用同一个完全没有区别的文书编号 F116:W92 的行政文书。但是在蒙古语文书里面，有“蛇儿年正月”的记述。与此相对，在汉语文书里面则有“蛇儿年七月”的记述。非常明显，这里的蒙古语文书和汉语文书，其内容并不能互相对应。

此外，在李逸友（1991: 133），也有对于这枚汉语文书的登载。参考这个种类的“分例”文书以为研究破损缺失部分之内容的辅助资料，我们认为，其中的蒙古语文书的内容有以下两项：其一，某个人已经收领到了前一年即龙儿年的自十月至十二月的三个月的全部“分例”；其二，要求得到蛇儿年的自正月至三月的三个月[额度]的“分例”。

(No.038) 文書番号 F116:W29

サイズ：縦 25.6cm　横 16.5cm

01 isinei-yin songgun vu noyad-ta .
エチナの総管府のノヤンたちに
亦集乃总管府官人每根底

02 sarïja bičig-iyer ǰïγar_un
サリジャが文書によって指示するに、
撒里叉文字里说有

03 ??? qaṯun-u kesig γulir amun ///
…ハトンの分け前の穀粉と脱穀した穀物…
…妃子分例米面…

【注釈】

01 isinei-yin songgun vu: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。
02 sarïja: 人名。黒城漢語文書 F116:W349, F116:W363, F116:W371（李逸友 1991: 133）に「撒里叉」として現れる。李逸友（1991）が「撒里义」と録すのは誤り。

01 isinei-yin songgun vu: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
02 sarïja: 人名。黑城汉文文书 F116:W349、F116:W363、F116:W371（李逸友 1991: 133）中所见“撒里叉”。李逸友（1991）录为“撒里义”，误。

【解説】

別々の紙に書かれたモンゴル語文書と漢語文書が貼り合わせられ、貼合部に押印されている。漢語文書は李逸友（1991: 132）に掲載されている。モンゴル語文書は、エチナ路総管府のノヤンたちに宛てたサリジャによる某ハトンの穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書である。

把分别记写在不同的纸片上的蒙古语文书和汉语文书粘合在一起，在粘合部分加盖了印章。其中的汉语文书，在李逸友（1991: 132）中具有登载。其中的蒙古语文书，它的内容是，一个叫做撒里叉（サリジャ）的人，就某位哈屯（某ハトン）的面粉和已经脱去壳皮的谷物的“分例”问题，给亦集乃（エチナ）路总管府的诺颜们发出了这封文书。

(No.039) 文書番号 F116:W213

サイズ：縦 11.8cm　横 11.5cm

01 (isi/yisi)ne čölke-y<i>n T///
エチナ路の…
亦集乃路…

02 vu noyad-ta . T///
府のノヤンたちに…
府官人每根底…

03 ????N ??N ??///

…
…

【注釈】

01 (isi/yisi)ne čölke: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。

01 (isi/yisi)ne čölke: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。

【解説】

「府のノヤンたちに」という文言から公文書であると判断される。????N とした語は qaγan と読める可能性もあろう。ただ qaγan と読むならば、通常は台頭するはずの語を台頭していない、それどころかむしろ行を下げているという破格の文書と見なさなければならず、確定はできない。またこの文書は原件が手元になく写真を見たのみであるが、写真による限り、??N ??の部分は保存処理の際に紙をずらして張り付けてしまったようである。

根据其中的“府官人每根底”这一词句，可以判断这是一件公府文书。被写做“????N”的这个词语，存在着能够读做“qaγan”的可能性。但是，如果要把它当成“qaγan”的话，那么它一定会被抬头书写，但是[在这件文书里]它不但没出现于抬头位置，反而却出现于降格的位置。因此，将其不得不看做是一件破例的文书，而该词则尚不能确定。

这件文书的原件不在我们手头，我们只能看到它的照片。根据其照片，这件文书的??N ??部分，在保存处理的时候，纸片的位置似乎是先被挪错开，后来才又粘糊上的。

(№040) 文書番号 F116:W454

サイズ：縦 8.5cm　横 33cm

01　isin_e l[u]///
　　エチナ路…
　　亦集乃路…

02　?///
　　…
　　…

03　natun visi ///
　　ナートン妃…
　　纳冬妃子…

【注釈】

01 isin_e l[u]: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。

03 natun visi: 黒城漢語文書に現れる「納冬（納敦）妃子」である（李逸友 1991: 134-135）。84H·F116:W584/1758 の 1 行目に na t'///, 84H·F116:W514/1686 の 2 行目に na ?///, 84H·F116:W510/1682 の 2 行目に na·a t'u, 84H·F116:W519/1691 の 3 行目に na t'u, 84H·F116:W505/1677 の 2 行目に na·a t'///と記されるが、幾つかの書き方があって、どれが標準的な書き方かは定められない。かな書きでは「ナ

ートン」に統一した。
03 visi: visi は同じ文書に書かれている漢語「妃子（近世音 fəi tsï）」のこと。先古典期のモンゴル文字資料で、f 音を文字 v で、ts 音を文字 s で表記したことが明らかである。その例としては、モンゴル語訳『孝経』（Rachewiltz 1982）の、kungvusi（＝孔夫子．近世音 kʻuŋ fu tsï）を挙げておく。後代のモンゴル年代記に biiji, bigji などとあるのはこの「妃子」のことである。

01 isin_e l[u]: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
03 natun visi: 黑城文书中所出现的"纳冬（纳敦）妃子"（李逸友 1991: 134-135）。84H·F116:W584/1758 的第 1 行写为 na tʻ///, 84H·F116:W514/1686 的第 2 行写为 na ?///, 84H·F116:W510/1682 的第 2 行写为 na·a tʻu, 84H·F116:W519/1691 的第 3 行写为 na tʻu, 84H·F116:W505/1677 的第 2 行写为 na·a tʻ///，但尚不能确定究竟哪个是标准的写法。现统一为片假名"ナートン"。
03 visi: visi 在同样文书中写为汉语的"妃子"。古代蒙古文资料中，将 f 音写为文字 v，将 ts 音写为文字 s。例如，蒙古语译《孝经》（Rachewiltz 1982）中有 kungvusi（孔夫子）。后代的蒙古编年体史书中的 biiji, bigji 即为"妃子"。

【解説】
別々の紙に書かれたモンゴル語文書と漢語文書が貼り合わせられている。漢語文書は李逸友（1991:134）に掲載されている。モンゴル語、漢語ともにナートン妃（納冬妃子）に対する分例文書であろう。

这件文书也是把分别记写在不同的纸片上的蒙古语文书和汉语文书粘合在一起而形成的。其中的汉语文书，在李逸友的（1991:134）里已有登载。无论其中的蒙古语部分还是汉语部分，都是关于纳冬妃子（ナートン妃）之"分例"的文书。

(No.041) 文書番号 84HFA205

サイズ：縦 32cm　横 8.5cm

01　(ergigambu?) songgun-u suu bičig
（エルギガムブ？）総管の疏文書
（也儿吉干布？）总管之疏文

02　si vubun sanggüng-a kürtügei
シ府判がサングンに至れ。
石府判相公里到者！

【注釈】
02 vubun: F245:W5 の注 01, 03 vaubun 参照。
02 sanggüng: 相公（近世音 siaŋ koŋ）を写したもの。「相公」は本来宰相を意味するが、明末以前、とくに元代においては、多く知県以上の官員などに対する尊称として用いられていた（岸本美緒 2000: 66-67）。本文書は断片で前後の文脈が確定できないため、本箇所の sanggüng は宰相を指す可能性と、ある官員に対する尊称として使われていた可能性の両方を想定しておく必要があろう。
なお、ウイグル語文書には šangun ~ šngun という称号がみえ（山田信夫 1993, vol.2: 279）、漢語「将軍」に起源するとみられている。同様の語として、šenggün という称号が『元朝秘史』に現れ、村

上正二（1970: 55）は šenggün センゲンについて、「中国語の「将軍」とか、それから転訛した「詳穏」（遼の時代にしきりに使われた称号）、あるいは丞相を意味する「相公」などのモンゴル語化されたもの」と注する。さらに、フビライ期に叛乱を起こした李璮は、マルコ・ポーロにリタン・サンゴン Litan šangon として登場し、愛宕松男（1971: 9-10）は、「サンゴンとは、中国語の「将軍」tsiang-chun に由来するモンゴル語 šenggün か、あるいは「相公」siang-kung を訛ったものである」と注する。

本箇所の sanggüng については、二音節目が-ng となっていることから、「将軍」（近世音 tsiaŋ kiuən）ではなく、「相公」に由来する称号とみて大過なかろう。

02 vubun: 参见 F245:W5 注释 01, 03 vaubun。

02 sanggüng: 是为相公。“相公”原指宰相，明末以前特别是元代用以尊称知县以上的官员。（岸本美绪 2000: 66-67）。本文书因是断片，无法确定其前后内容，因此所以该处的 sanggüng 或指宰相或是某官员的尊称。

畏吾文文书中有 šangun ~ šngun 这样的称号。（山田信夫 1993, vol.2: 279），该字起源于汉语的“将军”。作为同样语的 šenggün 这一称号也出现于《蒙古秘史》，村上正二在（1970: 55）中，解释 šenggün 为“或是汉语的将军，以及从将军转讹的‘详稳’（辽代普遍使用的称号），或是丞相之意的‘相公’这一词的蒙古语形式”。忽必烈时期，起兵叛乱的李璮被马可波罗称为“Litan šangon”，爱宕松男在（1971: 9-10）中认为“该字或许是从汉语‘将军’tsiang-chun 而来的蒙古语 šenggün，或者是‘相公’siang-kung 之讹”。

此处的 sanggüng，从第二音节的-ng 来看，该字不指“将軍”而是指由“相公”而来的称号。

【解説】

エルギガムブ（？）総管が発給した「疏」形式の文書である。この二行のみでは、その具体的な内容を窺うことはできない。「至れ」という文言、モンゴル語で記されていること、ハラホトから出土したことなどを総合して判断するならば、本文書は奏疏の類ではないと判断される。おそらくは、地方官府あるいはその官員が仏僧・道士などを招請した「疏」文書ではないかと推測する。元代の仏寺・道観は、このような「疏」文書を石刻として残している。なお、「宣差河解山東等處達魯花赤疏」（山西省芮城県永楽宮現存。飯山知保、井黒忍、舩田善之 2002: 174[22-23]）の本文は漢字漢語であるが、ウイグル文字ウイグル語の添書が附されている（森安孝夫 2001: 176）。

这是一件由也儿吉干布（エルギガムブ）（？）总管发出的、奏“疏”形式的文书。

[然而]仅凭这两行[文字]，我们无法窥视其具体的内容。

如果根据文书中出现有“到者”的词语，并由蒙古语书写，且出土于黑城等诸方面综合进行判断，可以认为这件文书不应该属于奏疏类，它也许是一件地方官府或其官员延请僧侣、道士的“疏”文书。

元朝时期的佛寺、道观珍藏这种刊刻着“疏”的石碑（石刻），可以说不乏其例。而且，《宣差河解山东等处达鲁花赤疏》（现存中国山西省芮城县永乐宫。参见饭山知保、井黑忍、舩田善之 2002: 174[22-23]）的正文，是用汉字汉语写成的，但附有畏兀儿（ウイグル）文字畏兀儿语的字样（森安孝夫 2001: 176）。

2-2. パクパ文字文書

(No.042) 文書番号 84H・F116:W584/1758

サイズ：縦 12.5cm　横 65cm

01　na t'///
ナート［ン］…
纳［冬］…

02　a ?///
…
…

03　b?///
…
…

04　·an za ra ///
…月…
…月…

05　qur ban za [ra]///
三ヶ月…
三个月…

06　ė du ·e d?///[t'e ri]
いま…
如今…

07　·u len yė [sun]///
［始めとして九］…
［为头至九］…

08　le na mu ru ?///[qu]
…秋…
…秋…

09　lir a mun///
［穀粉と］脱穀した穀物…
米［面］…

10　u ri t'u ///
以前…
在先…

11　qu yi ///
…
…

12 no [yad]///
ノ［ヤンたち］…
官［人毎］…

【注釈】
01 na t': ナートンについてはF116:W454の注03 natun visiを参照。

01 na t': 关于纳冬，参见F116:W454注释03 natun visi。

【解説】
本文書はナートン妃の穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書であろう。
なお、本項に収められる文書はすべてパクパ字モンゴル語の公文書である。モンゴル時代のパクパ字公文書の原物としては、照那斯図（1991）等でとりあげられた、チベットや広東南華寺に伝世する聖旨・法旨が知られていたが、ハラホト出土のパクパ字モンゴル語公文書群は、以下の二点において重要である。
第一に、寺観に対して保護や免税免役を保証する内容をもち、形式面で完全に定型化されているパクパ字モンゴル語聖旨等とは、内容・形式を異にするパクパ字モンゴル語公文書の例であること。
第二に、パクパ字の字体が若干くずされた形で記されている点で、従来知られていた聖旨・法旨の原文書の字体とは異なる。こうしたパクパ字の筆記体の存在は石刻史料・典籍で間接的にその存在が知られていたのみであるが、本文書群はまさにこうした字体が書かれた原文書である。

这是一件关于纳冬妃子（ナートン妃）的面粉和已经脱去壳皮的谷物等等“分例”的行政文书。归入该项的文书全部为八思巴字蒙古语官用文书。作为蒙古时代的八思巴字官用文书的实物（原件），照那斯图（1991）等人曾经例举西藏以及广东南华寺世代相传的圣旨、法旨，颇为著名，而从黑城出土的八思巴字蒙古语官用文书群，在以下两个方面显得特别重要。
其一，与具有保护寺庙道观以及保证免除其税役的内容的，在形式上已经完全定型化了的八思巴字蒙古语圣旨相比较，则是一件在内容和形式上与前者不同的八思巴字蒙古语官用文书。
其二，该文书和以往所知的那样，其八思巴字被书写为有些变形的字体。在这一点上，［本件文书］与圣旨、法旨的原文字体互不相同。以前，人们仅能通过石刻史料以及图书典籍才能间接地知道这种八思巴字手写体（笔记体、记录体）的[曾经]存在，而本组文书（本文书群）则确实是用这种字体记写下来的原文文书。

(No.043) 文書番号 84H·F116:W518/1690

サイズ：縦 12.8cm　横 37.5cm

84H·F116:W518/1690a

01 ?///
…
…

02 ·?///
…

…

03 n?///
…
…

84H·F116:W518/1690b

01 ·?///
…
…

02 ·u ///
…
…

03 le ///[qu]
…
…

04 lir ///
［穀粉］…
［面］…

05 u ri [t'u]///
［以前］…
［在先］…

06 qu yi///
…
…

07 no yad///
ノヤンたち…
官人毎…

【解説】

本文書は二つの部分に分かれている。4行目のlirはγulir「穀物」（パクパ字ではqu lir）のlirの部分を表すパクパ字で、5行目のu riはuridu「以前の」（パクパ字ではu ri t'u）のu riの部分であろう。とするとこの文書もやはり、穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書であろう。

本文书被分为两部分。其第4行的“lir”，应该是蒙古语γulir（面粉、谷物）（八思巴字作“qu lir”）中的“lir”部分的八思巴字表述；而其第5行的“u ri”，则应该是uridu（以前的）（八思巴字作“u ri t'u”）中的“u ri”这一部分。如果这些看法没有错误，那么这也是一件关于面粉以及已经脱去壳皮的谷物的所谓“分例”文书。

(No.044) 文書番号 84H·F116:W514/1686

サイズ：縦 7.5cm　横 15.4cm

01　??///
…
…

02　na ?///[a]
ナー［トン］…
纳［冬］…

03　mun///
［脱穀した穀物］…
［米］…

04　t'e [ri·u len]///
［始めとして］…
［为头］…

05　k'ur [t'e le]///
［至るまで］…
［至］…

06　t'e [ri·u len]///
［始めとして］…
［为头］…

07　za ra ///
月…
月…

08　?///
…
…

09　???///
…
…

【注釈】

02 na: ナートンについては F116:W454 の注 03 natun visi を参照。

02 na: 关于纳冬，参见 F116:W454 注释 03 natun visi。

【解説】

2 行目の na は抬頭されていることから、ナートン妃の na と考えて大過なかろう。3 行目の mun は 84H·F116:W584/1758 の 9 行目に記されている a mun「脱穀した穀物」の mun の部分、5 行目の k'ur は kürtele（k'ur t'e le）の k'ur の部分を表したものと考えられる。以上のことから、この文書もナートン妃の穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書と考えてよかろう。

其第 2 行的“na”，被记写在抬头（起始）的位置，据此我们将其看成是纳冬妃子（ナートン妃）中的“na”应该没有大过。除此以外我们还认为，第 3 行的“mun”，是 84H·F116:W584/1758 之第 9 行中所记述着的“a mun”（脱去壳皮的谷物）的“mun”部分；第 5 行的“k'ur”，是“kürtele（k'ur t'e le）”中的“k'ur”的部分。根据这些情况我们又认为，这也是一件关于纳冬妃子的面粉以及脱去壳皮的谷物的所谓“分例”文书。

(No.045) 文書番号 84H·F116:W510/1682

サイズ：縦 8.5cm　横 23cm

01　yi ji [nay]///
エチ［ナ］…
亦集［乃］…

02　na·a t'u [ɟ]///
ナートン…
纳冬…

03　a m[un]///
［脱穀した穀物］…
［米］…

04　za ra ?///
月…
月…

05　ra du ?///
…
…

06　ye yi ///
…
…

07　har [ban]///
［十］…
［十］…

08 l?///
…
…

【注釈】

01 yi ji [nay]: 84H·F116:W505/1677 の 1 行目 yi ji nay に従って、[nay]の部分を補った。F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。

02 na·a t'u [f]: [f]とした文字は一部が見えているに過ぎないが、84H·F116:W519/1691 の 3 行目 na t'u f[i]に基づいて[f]とした。ナートンについては F116:W454 の注 03 natun visi を参照。

01 yi ji [nay]: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。

02 na·a t'u [f]: 关于纳冬妃，参见 F116:W454 注释 03 natun visi。

【解説】

yi ji [nay]「エチ［ナ］」、na·a t'u 「ナートン」、a m[un]「脱穀した穀物」などの言葉が見られることからすると、エチナ路総管府宛のナートン妃の穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書であろう。

因为这里能够看到"yi ji[nay]"「亦集[乃]」(エチ[ナ])、"na·a t'u" 「纳冬」(ナートン)、"am[un]"「[米]」等等词语，据此我们认为，这是一件发给亦集乃（エチナ）路总管府的、关于纳冬妃子（ナートン妃）的面粉以及脱去壳皮的谷物的所谓"分例"的行政文书。

(№046) 文書番号 84H·F116:W519/1691

サイズ：縦 14cm　横 19cm

01 yi ji nay l[u]///
エチナ［路］…
亦集乃［路］…

02 da ?///
…
…

03 na t'u f[i]///
ナートン［妃］…
纳冬［妃］…

04 a m[un]///
［穀物］…
［米］…

05 (z?)///
…
…

06 za [ra]///
［月］…
［月］…

07 a///
…
…

【注釈】
01 yi ji nay l[u]: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。
03 na t'u f[i]: ナートン妃については F116:W454 の注 03 natun visi を参照。

01 yi ji nay l[u]: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
03 na t'u f[i]: 关于纳冬，参见 F116:W454 注释 03 natun visi。

【解説】
別々の紙に書かれたモンゴル語文書と漢語文書が貼り合わせられている。モンゴル語文書はエチナ路総管府宛のナートン妃の穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書であろう。漢語文書の部分は、

01 亦集///
02 納冬///

である。この漢語部分は李逸友（1991）に収録されていない。

这件行政文书也是由原本记写在不同纸张上的蒙古语文书和汉语文书粘合而成。
其中的蒙古语部分，是一件发送给亦集乃（エチナ）路总管府的、关于纳冬妃子（ナートン妃）的面粉以及脱去壳皮的谷物的所谓“分例”文书。
其中的汉语部分，记写作：

01 亦集///
02 纳冬///

这件汉语文书，在李逸友（1991）中没有登载。

(No.047) 文書番号 84H·F116:W505/1677

サイズ：縦 11.5cm　横 29cm

01 yi ji nay lu ///
エチナ路…
亦集乃路…

02 na·a t'///
ナート［ン］…
纳［冬］…

03 a ?///
…

…

04 za ra///
月…
月…

05 du///
…
…

【注釈】

01 yi ji nay lu: F116:W204 の注 01 yisinei; F9:W31b の注 03 ešin_e luu songgun vuu を参照。
02 na·a t'ə: ナートンについては F116:W454 の注 03 natun visi を参照。

01 yi ji nay lu: 参见 F116:W204 注释 01 yisinei; F9:W31b 注释 03 ešin_e luu songgun vuu。
02 na·a t'ə: 关于纳冬，参见 F116:W454 注释 03 natun visi。

【解説】

別々の紙に書かれたモンゴル語文書と漢語文書が貼り合わせられている。3 行目の a ?///が a mun であるならば、この文書もエチナ路総管府宛のナートン妃の穀粉と脱穀した穀物の分例に関する文書であろう。漢語文書の部分は、

01 亦（集）///
02 ?///
03 納冬（妃）///

である。この漢語部分は李逸友（1991）に収録されていない。

这件行政文书是由原本记写在不同纸张上的蒙古语文书和汉语文书经过粘合而形成的。

如果其第 3 行的“a ?///”是“a mun”［之一部分］的话，那么这又是一件发给亦集乃（エチナ）路总管府的、关于纳冬妃子（ナートン妃）的面粉和脱去壳皮的谷物的所谓“分例”文书。

其中的汉语部分，记写作：

01 亦（集）///
02 ?///
03 纳冬（妃）///

这件汉语文书，在李逸友（1991）中也没有登载。

(No.048) 文書番号 F116:W728(W554)

サイズ：縦 28.5cm　横 144.2cm

01 ///[k'u](ŋ) ·a(n)|(t)u γan ※
［控］案牘　韓　※
［控］案牍　韩　※

02 čhi

...
...

03 /// geiŋ li ǰa ya|ši li (※)
経歴ジャヤシリ (※)
经历札牙失礼 (※)

【解説】

本文書は、李（1991: 120, pl.4(1)）に漢語録文と全体の図版が掲載される。これによると、本文書は二枚の断片からなっており、ここでとりあげる、パクパ字三行は、小さい方の断片に含まれており、文書全体の末尾部分に相当する。漢語文書の末尾の日付・サインの部分に相当するため、右から行番号を振ってある。

本文書のパクパ字は、手書きではなく、黒墨による刻印であると思われる。木活字によってフォーマットが用意されていたか、各役職や姓・名の刻印がそのつど押印されたか、残存文書では判断しかねるが、いずれにしても煩雑な文書行政の業務簡素化を図った措置である。この意味で、本文書は当時の文書行政を考える上で重要な史料であろう。

その内容は、李（1991: 120, F116:W554）に掲載される漢語文書本文に照らせば、首領官三名が「考較銭糧」（路総管府の銭糧を調査報告すること。詳しくは『元典章』21・戸部巻7・倉庫・銭糧　支・歳終季報銭糧）に際して、その報告内容について、相違ないことを「甘結」（相違があれば甘んじて罪を受けるとして証明すること）し、職名と姓あるいは名が記された箇所に花押を認めたものであると判断される。提控案牘が職位のより高い経歴より前置されているのも、当時の漢語文書の形式に則ったものである。

ここで、注目されるのは、職名と姓あるいは名が、パクパ字の刻印によって記されている点である。とくに、非漢語名であるジャヤシリのみならず、韓という漢姓や、漢語の職名もパクパ字表記になっている点である。つまり、本文書を確認する人間あるいは受領者が、本案件について証明を行った人物を、漢字ではなくパクパ字で認識する必要があったと考えられるのである。ハラホト出土文書から安易に帰納することは避けなければならないが、元代の多元社会の一つの側面を反映していると位置づけられよう。なお、本文書の書写者と目される、「吏　張世雄」のみは漢字で表記されている。本案件については書写者ではなく、銭糧の調査報告内容を証する人員が誰であるかが認識されなければならなかったのに対し、漢字を解さない確認者ないし受領者にとって書写者が誰であるかは不問とされることによるであろうか。

本件文书的汉语录文和全部图版，在李逸友（1991: 120，pl.4(1)）里都有收载。

根据这些资料可知，本件文书是由两枚断片构成的。这里所要讨论的三行八思巴字，被记写在小断片上，它大致相当于本件文书整体的末尾部分。为了能够与汉语文书末尾的日期以及签字的要求（格式）相称，[本件文书]从右面开始编排了行码（行的号码）。

本件文书里的八思巴字，并非手写，是用黑墨刻印上去的。或许当时已经备有木质活字，既作为画押使用的是事先刻好的各种官职和姓名之刻印，这一点尚不能从残存文书进行判断。不管怎样，可以为这些是当时试图简化原本烦杂的文书行政业务而采取的积极有效的措施。从这个意义上看来，本件文书在研究当时的文书行政[制度]方面，也具有重要的史料价值。

如果我们以此对照李逸友（1991: 120，F116:W554）里所登录刊载着的汉语文书的正文，我们就能够大致判断出本件文书的内容应该是，三位首领官（首领官三名）在“考较钱粮”（对于路总管府的钱粮情况进行的调查及其写出的报告。详见《元曲章》21・户部卷7・仓库・钱粮　支・岁终季报钱粮）的时候，假如其[当地的]实际情况与其报告内容相符无误，即与之进行“甘结”（如果当地的实际情况与其报告内容不相符合，则成为其甘愿接受惩罚的证明），并且在记写着其官职名、姓氏或名字的地方

加画花押。

将职位更高的经历置于提控案牍的后面，则是依照了当时汉语文书的写作形式。

这里引起我们非常关注的是，当时他们的官职名、姓氏以及名字都在使用已经刊刻好的八思巴字去印刷（记写）。特别值得一提的是，不仅如非汉语名字的札牙失礼（ジャヤシリ），就连“韩”这个汉人姓氏，甚至连汉语的职务称号等等，当时也都被使用八思巴字去表述了。

这也就是说，当时，这些文书的确认人或者接收（收领）人，都必须使用八思巴字而不是使用汉字来对本事件（本案件）的证明人进行认识。

当然，我们必须避免仅仅根据黑城出土文书就想轻而易举地对其进行归纳总结的做法，但是我们却应该将其放在这确实反映了元朝时期多元社会的一个侧面的位置上，对这些[历史]现象进行认识和评价。

在本件文书里，只有“吏　张世雄”这几个字是用汉语记写着的。其中的“张世雄”，应该是本件文书的书写者。

对于本案件来说，并不是一定要认识其中的书写者，而是必须要认识能够证明钱粮调查报告内容的人员是谁。对于不认识（不懂得）汉字（汉语）的确认人或者接收（收领）人来说，他们是不管书写者是什么人的。

(No.049) 文書番号 F197:W32

サイズ：縦 51.5cm　横 20cm

01　ŋiw gi fu bun žin ǰeun c'hi
右、本人に給付する。これを准けよ。
右 给 付 本 人 准 此

02　seu ?///
須く…
须…

【解説】

一行目は「右給付本人准此」という漢語をパクパ字で写している。李逸友（1991: 90）に前の行の漢語部分の録文が掲載されており、「帖木立充本渠社長」とある。したがって、本文書は、帖木立を本渠に設けられた社（郷村管理組織）の社長とする任命書であろう。元代亦集乃路における渠と社については、古松崇志（2001: 40）参照。

一行目の内容を踏まえれば、二行目のseuは、「須至～者」という結句の「須」と思われる。従来確認されていない社長に対する任命書という点で、非常に貴重な文書であるだけでなく、かかる任命書の末尾の定型句がパクパ字漢語で記されている貴重な事例である。なお、李逸友（1991: 90）が「八思巴字蒙古文一行」と注するのは誤り。

在其第 1 行里，用八思巴字音写（记写）着这样一段汉语：“右给付本人准此”。

在李逸友（1991: 90）中收录登载着的前面一行的汉语部分的录文里，有“帖木立充本渠社长”句。

所以，本件文书应该是任命帖木立为设立在“本渠”地区的[一个]“社”（乡村管理组织）的“社长”的任命书。关于元朝时期亦集乃路地区的“渠”和“社”，另请参见古松崇志（2001: 40）。

根据其第 1 行的内容，我们认为其第 2 行中的“seu”是“须至～者”这个结尾语句中的“须”字。

作为一张对于以前一直没有得到确认的“社长”的任命书，这是一件非常宝贵的文书。不仅如此，

在这张任命书的末尾部分用八思巴字汉语记写[音写]着的、具有一定规格（规律）的句子，也是一个非常宝贵的例子。此外，这张任命书还可以纠正李逸友（1991: 90）中对于“八思巴字蒙古文一行”所做注释（说明）之误。

(No.050) 文書番号 F210:W24

01 /// sen a ǰu ·u ė du ·e ber bö ·e su
…したのであった。今ならば
…了也。于如今

02 /// ·r t'od qa ·ul bo[l] ǰu sėw qo t'an da·a rin
…トトカウルとなって粛城を経由し
…做脱脱禾孙经过肃城

【注釈】

02 t'od qa ·ul: 脱脱禾孫（站赤監督官、站赤監察官）。『元史』巻 88・百官志 4・通政院に「国初、置駅以給使伝、設脱脱禾孫以辨奸偽」、『元史』巻 101・兵志 4・站赤に「元制站赤者、駅伝之訳名也。……其官有駅令、有提領、又置脱脱禾孫於関会之地、以司辨詰、皆総之於通政院及中書兵部」とある。『元典章』典章 36・兵部巻 3・駅站・脱脱禾孫（36/11a-b）も参照。

02 sėw qo t'an: sėw は漢字を写していると推測されるが、元代碑刻・『八思巴字百家姓』（ともに罗常培、蔡美彪 2004: 225-267 による）及び『蒙古字韻』（照那斯图、杨耐思 1987）に sėw という綴りはみられない。そこで、sėw は、別の綴りの誤記、あるいは異なる体系に基づく表記と考えた。比較的蓋然性の高い対応する綴り・漢字の候補としては、罗常培、蔡美彪（2004: 237）の seu（胥・須・粛・宿・夙）、あるいは『蒙古字韻』下 11b5 の siw（脩・修・羞・秀・宿など）が挙げられる。つまり、sėw qo t'an が「粛城」（粛州の城）を指しているという解釈を一つの案として提出しておく。

02 t'od qa ·ul: 脱脱禾孙（站赤监督官、站赤監察官）。《元史》卷 88・百官志 4・通政院:“国初、置驿以给使传、设脱脱禾孙以辨奸伪”。《元史》卷 101・兵志 4・站赤:“元制站赤者，驿传之译名也。……其官有驿令、有提领、又置脱脱禾孙于关会之地、以司辨诘、皆总之于通政院及中书兵部”。也可参见《元典章》典章 36・兵部卷 3・驿站・脱脱禾孙（36/11a-b）。

02 sėw qo t'an: 我们推测，“02 sėw qo t'an”中的“sėw”，记写着的应该是汉字。但是在元代碑刻、《八思巴字百家姓》（均是在罗常培、蔡美彪 2004: 225-267 所载）以及《蒙古字韵》（照那斯图、杨耐思 1987）里面，我们却找不到“sėw”这种拼写方法。由此看来，这个“sėw”可能是另外一种拼写的笔误（写错），亦或许是按照别的拼写系统来写的。作为其中可能性比较大的相应汉字，我们可以例举出罗常培、蔡美彪（2004: 237）的“seu”（胥、须、肃、宿、夙），还可以列举出《蒙古字韵》下 11b5 中的“siw”（脩、修、羞、秀、宿等等）。从而，我们认为，“sėw qo t'an”是指“肃城”（肃州之城）的意思。这止是一个方案而已。

【解説】

文書全体の内容は不明であるが、見えている部分は、何者かがトトカウルとなって「粛城」を経由し、おそらく更にどこかへ赴くことに関する記述である。駅站の監察に関する行政文書の一部であろうか。

对于这件文书的整体内容，我们不得其详。目前能够看到[读懂]的那一部分的内容是，一个[没有留下姓名的]人，做为脱脱禾孙，途经“肃城”，看样子他还要赶往另（下）一个地方。

根据其上记述着的这些内容，我们认为这件行政文书应该是有关驿站监察的行政文书的一部分。

(No.051) 文書番号 MON05

01 saŋ ga ši ri k'e·u
サンガシリ大王
桑哥失里大王

02 nu k'e ši gun///
の分け前の…
之分例…

【注釈】

01 saŋ ga ši ri k'e·u: サンガシリ大王については F116:W204 の注 03 sangasiri köbegün を参照。

01 saŋ ga ši ri k'e·u: 关于桑哥失里大王，参见 F116:W204 注释 03 sangasiri köbegün。

【解説】

李逸友（1991: 129-131）に収録される F116:W546, F116:W593, F116:W568, F116:W598 などと同種の文書と目されるが、本文書自体は李逸友（1991）に収録されていない。パクパ字モンゴル語の部分は、本文書によって支持庫に命じる支給がサンガシリ大王（桑哥失里大王）に対する分例のためであることを示す添書きであろう。

这件行政文书虽然被看做是与李逸友（1991: 129-131）中所登载收录着的 F116:W546、F116:W593、F116:W568、F116:W598 等属于同一种类的文书，但这件行政文书本身，在李逸友（1991）中却没有登录收载。

其中的八思巴字蒙古语部分，应该是一段附言。记写在本件文书上的这段附言所显示出来的意思是，通过该文书向仓库[支持库] 传命令的，是为了支付桑哥失里大王的“分例”。

(No.052) 文書番号 F116:W169

サイズ：縦 19cm　横 21.5cm

01 ///ɣin shi yi///
…運司…
…运司…

【解説】

運司は「都転運使司」・「都漕運使司」などの略称（田中謙二 1965: 395）。前者には，塩の生産・課税などを管轄する「都転運塩使司」（しばしば「塩運司」と略称される）など各種の転運使司があり，後者は漕運を管轄した。パクパ字 ɣin shi（運司）の上部が破損しているため，略称としての「運

司」である可能性と，「…運司」である可能性が想定される。次行（左側）に漢字で「亦集乃交割課…」とあることから，エチナ路における専売品の課税に関わる文書ではないかと推測される。

“运司”为“都转运司”、“都漕运使司”等的略称（田中谦二 1965: 395）。前者有，管理咸盐的生产及其课税的“都转运盐使司”（常略称为“盐运司”）等各种转运使司，后者是管理漕运的。八思巴字的 ɣin shi（運司）之上部有破损。可以推想，该形式以略称 “运司”来使用的可能性，也有以“…运司”来使用的可能性。其次行（左侧）中写有“亦集乃交割课…”的汉字。由此可以推测，该文书可能与亦集乃路之专卖商品的课税有关。

(No.053) 文書番号 MON07

01 ɣuŋ chi giw ši ži ɣaw
洪字玖拾貳號
洪字玖拾贰号

【解説】

このパクパ字及び下の漢字は勘合形式で、本文書にはその左半分部分が書かれている。漢字は「洪字玖拾貳號」で（「玖拾」の部分はパクパ字から推測）、パクパ字の漢字復元はこれに合致する。同箇所の右には漢字で「實支黃米伍碩肆斛整」とあり、左には、「…（下？）廣積倉官滿殊失厘准此」とある。したがって、これは黄米（キビ）5石4斗支給に際して、受領者側の支給証明文書と照合するためにエチナ路の広積倉の官員に下された官側の控えであろう。「洪字玖拾貳號」は本文書の識別番号で、冒頭の「洪」は『千字文』に従って附されたものである。ハラホトからはこうした官糧・官銭・官蓄の出納に関連する漢語文書が多く出土している（李逸友 1991: 88, F64:W2, 97, F116:W192, F116:W193, 111, F111:W58, F111:W72, 114, F111:W54, 123, F209:W66, 125-130, F9:W33, F20:W39, F249:W23, F26:W101, F74:W2, F116:W546, F116:W593, 132-133, F116:W65, F116:W90, 136-137, F13:W121, F13:W124, 142-143, F132:W104, F9:W105, 193, F9:W107, 205, F20:W20）。なお、本文書は李逸友（1991）に収録されていない。

这几个八思巴字和它下面的汉字可以互相对照（核对），它们被记写在本件文书的左半部分。

其中的汉字是“洪字玖拾贰号”（这里的“玖拾”，是根据八思巴字推测出来的），与八思巴字的汉字复元能够互相吻合。

在与此同一位置的右侧，还记写着一段汉字：“实支黄米伍头肆斗整”；在其左侧，又记写着“…（下？）广积仓官满殊失厘准此”一段汉字。

根据这些情况我们认为，这是在缴纳了五石四斗黄米（キビ）之后（的时候），为了能够随时与（缴纳者手中的那件）接收证明文书（收具）互相对照而呈递给亦集乃路广积仓的官吏衙府的。

“洪字玖拾贰号”是本件文书的识别号码，最前面的那个字“洪”字，则是根据《千字文》而附记上去的。

从黑城出土的这种与官粮、官钱、官蓄有关连的汉语文书，除此之外还有很多（李逸友 1991: 88, F64:W2, 97, F116:W192, F116:W193, 111, F111:W58, F111:W72, 114, F111:W54, 123, F209:W66, 125-130, F9:W33, F20:W39, F249:W23, F26:W101, F74:W2, F116:W546, F116:W593, 132-133, F116:W65, F116:W90, 136-137, F13:W121, F13:W124, 142-143, F132:W104, F9:W105, 193, F9:W107, 205, F20:W20）。

但是本件文书在李逸友（1991）中却没有收录。

(No.054) 文書番号 MON08

サイズ：縦 50cm　横 158cm

01　　/// (d/ʃ)u· qu yin t'[u la]///
…する[ために] …
…的［上头］…

【解説】
パクパ字の右側に漢字で「付亦集乃路総管」とある。これは「右、劄付亦集乃路総管府。准此」の一部と考えられる。t'u la（～のために）という表現は、F116:W96c, F116:W544, F116:W556, F116:W565 などパクパ文字・アラビア文字合璧文書にも見られる。パクパ字の部分はモンゴル系官僚が漢語の行政文書をチェックした後にそれに関する説明・指示などを文書の末尾に記したものの一部であろう。(本書「アラビア文字文書」の箇所所載の【漢語・ペルシア語合璧文書の全体に関する解説】を参照)。

在八思巴字的右侧还记写着汉字“付亦集乃路总管”。我们认为这是“右、劄付亦集乃路总管府。准此”的一部分。
其中的“t'u la”（上头）这种表现手法，我们在 F116:W96c、F116: W544、F116:W556、F116:W565 等等八思巴文字和阿拉伯文字合璧的文书里面也能看到。
其中的八思巴字的内容，应该是当时的蒙古系的官员在核实对证了汉语的行政文书之后，将其有关的说明、指示记写在文书的末尾而形成的（另请参见本书“阿拉伯文字文书”部分所收载着的《汉语、波斯语合璧文书的整体解说》）。

3. 宗教文書

3-1. ウイグル式モンゴル文字文書

(No.055) 文書番号 HF125a

サイズ：縦 30.5cm　横 28cm

01　　kemeǰüg[ü]///
言った…
如此说…

02　　si KWY?///
楫…
楫…

03　　šin-i ///
人を…
人…

04 kereg Y///
事…
事…

05 -T'K'N X'?///
…
…

06 boljalduγsa[n]///
約束し合った…
相约…

07 morin kölge///
乘用馬…
乘马…

08 čin šin-i ///
真人を…
真人…

09 üdür šau buyan ?/// KWYL??///
（日／昼）、醮の善行…
（日／昼）…醮善

10 γurban üdür XWCYLYCYN-ṯur ///
三日…に…
三日…

11 月 arban dörben 上十[四]
十四
十四

【注釈】

03 šin: šin「人」は一般名詞の「人」の意味ではなく、「真人」の「人」の部分である。

06 boljalduγsa[n]: boljaは現代正書法ではboljuであるが、『元朝秘史』には、boljaju（孛勒札周　傍訳「約會着」）、boljaʼan（孛勒札安　傍訳「約會」）、boljal（孛勒札勒　傍訳「約會」）、boljalduju（孛勒札勒都周　傍訳「約會了着」）、boljalduya（孛勒札勒都牙　傍訳「約會咱」、「相約着」）等とあり、いずれも語幹がboljaである。アルグンがフィリップ美麗王に宛てた書簡においては、19行目にčerigüd-iyen boljaldur ileǰü, 22行目にkem boljal qoǰidaju čerigüdi nemegülbesüとあって、ここでもboljaである（Mostaert 1962: 17, 31, pl.Ⅳ; Ligeti 1972a: 246）。また『ムカディマート・アル・アダブ』にもboljal "срок"（期日、期限）, boljalduba tünlē "заключил с ним условие"（彼と約定した）とある（Поппе 1938: 120）。先古典期モンゴル語において、管見のかぎりではboljaを語幹とする例しか発見できなかったので、語幹はboljaであった可能性が高いと考えられる。boljuはboljaが母音の同化によって変化したものであろう。

09 šau: 醮（近世音 tsieu）を写したもの。醮の意味は、まつる（酒をそなえて神を祭る）、道士が祭

壇を設けて祭る。

03 s̱in: s̱in “人” 不指一般名词的 “人” 而是指 “真人” 的 “人”。
06 boǰalduɣsa[n]: boǰa-这一形式，按现在的正字法作 boǰu-。但是，在《元朝秘史》中出现 boǰaǰu（孛𐮀札周　傍译「约会着」）、boǰa'an（孛𐮀札安　傍译「约会」）、boǰal（孛𐮀札𐮀　傍译「约会」）、boǰalduǰu（孛𐮀札𐮀都周　傍译「约会了着」）、boǰalduya（孛𐮀札𐮀都牙　傍译「约会咱」、「相约着」）等词，这些词的词干均为 boǰa-。在《阿鲁浑汗致美丽的腓力四世皇帝的信》的第 19 行有 čerigüd-iyen boǰaldur ileǰü, 第 22 行有 kem boǰal qoǰidaǰu čerigüdi nemegülbesü，即均以 boǰa-的形式出现（Mostaert 1962: 17, 31, pl.Ⅳ; Ligeti 1972a: 246）。另，《穆卡迪玛特・阿勒・阿达布词典》中也作 boǰal “срок（日期、期限）”，boǰalduba tūnlē “заключил с ним условие”（和他约定了）（Поппе 1938: 120）。据了解，中世纪蒙古语中只出现以 boǰa-为词干的形式。因此，其词干形式很有可能 boǰa-。至于 boǰu-这一形式，或许是 boǰa-在语音上发生同化而形成。
09 šau: 是为醮。醮之意为祭祀（供酒祀神），道士设祭坛祭祀。

【解説】
HF125d の **【解説】** を参照。

(№056) 文書番号 HF125 b

サイズ：縦 30.5cm　横 28cm

01　月 arban dörben 下[十四]///
　　十四
　　十四

02　idegen lab ögčügü : tere ///
　　食べ物を確かに与えたのだった。（それ／その）…
　　实与了食物，其…

03　on kei qur_a ///?Y??///
　　年、風雨…
　　年，风雨…

04　boǰu tariyan///
　　になって、穀物…
　　…粮…

05　sayin boǰuɣu///
　　よくなったのであった…
　　好了…

06　üileḏčü ?///
　　おこなって…
　　行…

07 šin ???///
人…
人…

08 liu si T///
劉楫…
刘楫…

09 ǰegüden///
夢…
梦…

10 kümün///
人…
人…

11 ///?///?///
…
…

【注釈】

03 kei qur_a: 現代モンゴル語では kei が「風」の意味で使われることはないが、『元朝秘史』には kei は「克（傍訳「風」）」とあり、先古典期モンゴル語では「風」の意味で使われていたことが分かる。また kei qur_a と熟す例は『入菩提行論の解説』に見られる（Ligeti 1972a: 132; Cleaves 1954: 54, pl.23）。

07 šin: この šin「人」は一般名詞の「人」の意味ではなく、「真人」の「人」の部分である。

10 kümün: kümün の M は、字幹をはさんで、左側に字棘二つ（"）と右側に下向角をもって書かれている。この M の二字棘は先古典期のモンゴル文字の書法上の特徴であり、語頭形にも語末形にも字幹の左側の二字棘が書かれる場合がある。

03 kei qur_a: 在现代蒙古书面语中的 kei 没有“风”之意，但《元朝秘史》中记为 kei“克（傍译‘风’）”。可见 kei 在古代蒙古语中使用于“风”之意。kei qur_a 的例子，如《入菩提行论解说》（Ligeti 1972a: 132; Cleaves 1954: 54, pl.23）。

07 šin: 这里的 šin“人”不指一般名词的“人”，而是“真人”的“人”。

10 kümün: kümün 的 M 隔开字干，将左边的两个字棘（"）写在右边的下向角。这个 M 的两个字棘是古代蒙古文字的书法上的一个特点，不管是词头形还是词末形，都有词干的左侧写两个字棘的情况。

【解説】

HF125d の【解説】を参照。

(No.057) 文書番号 HF125c

サイズ：縦 30.5cm　横 26cm

HF125c-a

01 月 arban γurban 下十三
十三
十三

02 toṉil[γaq]u-yin tula buyaṉ
脱させるために功徳を
使…解脱，萌生

03 üileḏkü-e sedkil egüskebei .
行うことに心を起こした。
行善之心。

04 maṉaγar üdür düli . sun
翌日の日中、孫
翌日白昼，要来

05 čin šin-i üǰir_e
真人を見るために
見孙真人。

06 iresügei kememü . ker ber či
来よう、という。もしお前が
若你

07 šiltaγalaǰu eṉe buyan-i es_e
口実をつくってこの功徳を
推辞，不行此善，

08 üileḏbesü bida keǰiy_e toṉilqu .
行わないなら、私たちはいつ脱するのか。
我等何时解脱。

09 tegüber čimada irebei kemeged
それによってお前の所に来た、といって、
为此来到你处。

10 bügüd[e]///K'Y boǰu ///?///
すべて…になって…
全都成为…

HF125c-b

01 ?? ?///

…
…

02 küčündür ///
力において…
气力里…

03 [liu si]///
［劉楫］…
［刘楫］…

【注釈】

00 : HF125c 文書は木版本断簡で 10 行からなる断簡と 11 行目以降の一部と見られる小断簡からなる。前者を HF125c-a, 後者を HF125c-b とした。

00 : この木版本断簡には、γ, š, n に傍点が打たれているだけでなく、音節末の n、現在では q と転写する”（γ～q）にも傍点が打たれており、先古典期モンゴル文字文献に見られる特徴の一つがよく保たれている。

a04 üdür: 先古典期モンゴル文字文献では、現代正書法で edür と綴る語を üdür と綴った例が、「張応瑞碑文」(Cleaves 1950) や「ジグンテイ碑文」(Cleaves 1951)、「忻都王碑文」(Cleaves 1949)、元代モンゴル語訳『孝経』(Rachewiltz 1982)、トゥルファン出土モンゴル語文書 T II, D159 や暦断簡 (Cerensodnom, Taube 1993: 148-163)、「ボニフェウス八世宛ガザン書簡」(Mostaert, Cleaves 1952) に多数見える。また、ハラホト出土モンゴル文書 F20:W64 にもこの例がある。

a05 čin ǰin: 真人（近世音は tʃɪən rɪən）を写したもの。「人」(近世音 rɪən. パクパ字 žin) をモンゴル文字で šin と音写している。この近世漢語の r とモンゴル文字 š の対応は、「1346 年カラコルム蒙漢合璧碑文」(Cleaves 1952) に見える šim morin ǰil (l.7) の šim (「壬」. 近世音 rɪəm) や yiu šim (l.12) の šim (「壬」) に確認できる。

b03 [liu si]: 破損していてほとんど文字は見えないが、本行の左に「劉楫」と漢字で記してあることから、HF125d の 8 行目からの類推で、ここには liu si と書いてあったものと考える。

00 : HF125c 文书是木版本断片，由 10 行组成的断片和 11 行以后部分的小断片构成。前者为 HF125c-a, 后者为 HF125c-b。

00 : 该木版本断片不仅在 γ、š、n，旁作了视点，还在现转写为 q 的”（γ～q）和音节末之 n 旁作了视点。保存了古老的蒙文文献的一个特征。

a04 üdür: 在古代蒙文文献中，将现代正字法中的 edür 写为 üdür。例如在《张应瑞碑文》(Cleaves 1950) 和《竹温台碑文》(Cleaves 1951)、《忻都王碑文》(Cleaves 1949)、元代蒙古语译《孝经》(Rachewiltz 1982)、土鲁番出土的蒙古文文书 T II, D159 以及皇历断片 (Cerensodnom, Taube 1993: 148-163)、“波尼拔斯八世致合赞汗书” (Mostaert, Cleaves 1952) 中多见。黑城出土的蒙文文书 F20:W64 中也有这种例子。

a05 čin ǰin: 是为真人。蒙古文字中将“人” (八思巴字 žin) 音写为 šin。该字的首辅音 r 与蒙古文字 š 的对应，可以从见于“1346 年哈剌和林蒙汉合璧碑文” (Cleaves 1952) 中的 šim morin ǰil (l.7) 的 šim (“壬”) 和 yiu šim (l.12) 的 šim (“壬”) 得到确认。

b03 [liu si]: 因破损而几乎看不到文字。但从本行左边记有汉字“刘楫”来看，并从 HF125d 的第 8 行类推，这里应写为 liu si。

【解説】
HF125d の【解説】を参照。

(No.058)文書番号 HF125d

サイズ：縦 30.5cm　横 26cm

01　///?L///L'R_WN///
…ことには…
…

02　bügüde qadqulduγan-ṯur ükügsed .
全て戦いで死んだ者たち
尽是战阵

03　-ūn sūṉesün aṉu būlegei .
のその魂である。
之亡魂。

04　maṉdur buyan üiledügči ügei
我々には功徳を行なう者がいない
我等因无行善者，

05　-yin tula ejiy_e-ṯe
ので今に
至今

06　kürtele es_e toṉilbai . edüge
至るまで脱しなかった。今
未能解脱。今

07　i yang qoṫun-ṯur bükü
宜陽城にいる
住宜阳城之

08　liu si ṉereṯū bayan kümün
劉楫という名の金持ちが
名为刘楫之富者

09　gergei-lügeben ayedüjü bidaṉi
自分の妻と仲直りして我々を
与其妻和好，将我等

10　月 arban γurban 上十三

十三
十三

【注釈】

03 bülegei: bülegei（→bü-legei）は bü-（ある、いる）に完了の終止形語尾-layai / -legei のついた形。-layai / -legei は古典期以降の文語では-luγ_a / -lüge と書かれるが、先古典期文語では-layа(-layˍa) / -lege; -layai / -legei; -luγa(-luγˍa) / -lüge; -luγai / -lügei の諸形があり、以下のような性・数による使い分けが存在した。

-layа(-layˍa)『元朝秘史』: -la'a	-luγa(-luγˍa)『元朝秘史』: -lu'a	男性単数形
-lege『元朝秘史』: -le'e	-lüge『元朝秘史』: -lü'e	女性単数形
-layai / -legei～-luγai / -lügei 『元朝秘史』: -la'ai / -le'ei～-lu'ai / -lü'ei		複数形

05 ejiy_e-te: 「忻都王碑文」（Cleaves 1949）に ejiy_e、『元朝秘史』§167 に額只額（eji'e、到今）、『華夷訳語』（甲種本）（栗林均 2003）に額者額窟児帖列（eje'e kürtele、到今）と見える。

07 i yang: 宜陽は河南省洛陽の南部にある。

03 bülegei: bülegei（→bü-legei）是由 bü-（有）后接终止形词尾-layai / -legei 而构成。-layai / -legei 在古时期以后的书面语中被写作是-luγ_a / -lüge，但在更早的先古典期书面语中有-layа(-layˍa) / -lege; -layai / -legei; -luγa(-luγˍa) / -lüge; -luγai / -lügei 等多种形式，根据性、数分别使用的方法如下。

-layа(-layˍa)《元朝秘史》: -la'a	-luγa(-luγˍa)《元朝秘史》: -lu'a	男性单数形
-lege《元朝秘史》: -le'e	-lüge《元朝秘史》: -lü'e	女性单数形
-layai / -legei～-luγai / -lügei 《元朝秘史》: -la'ai / -le'ei～-lu'ai / -lü'ei		复数形

05 ejiy_e-te: 《忻都王碑文》（Cleaves 1949）中见为 ejiy_e，《元朝秘史》§167 中见为额只额（eji'e、到今），《华夷译语》（甲种本）（栗林均 2003）中见为额者额窟儿贴列（eje'e kürtele、到今）。

07 i yang: 宜阳位于河南省洛阳南边。

【解説】

HF125a～HF125d は、一部の木版本の一連の残簡だと思われる。何よりも、上図下文の形式をとっていることが注目される。金元期に隆盛し始めたこの形式がモンゴル語典籍にも波及していたことを直截に示す原物史料としてその価値は高い。数枚のしかもそれぞれが断片であることもあり、具体的な内容を知り得ないが、「孫真人」・「劉楫」・「宜陽」といった固有名詞が確認される。おそらく漢語から翻訳されたものであろうが、残念ながら漢語原本の比定には至っていない。道教典籍、あるいは道教を主題とした文学作品であろう。孫真人は、『千金要方』等の著者として伝えられる孫思邈（581-682）であろうか。

なお、モンゴル時代の上図下文形式の典籍については、宮紀子（1998）を参照。

我们认为这是一些残简断片，是一部木版书的一连串残简断片。

其中最引人注目的，是它们［所特有］的上图下文的书写排版形式。从金元时期就已经开始繁盛起来的这种书写排版形式，那时也涉及到了蒙古语典籍。作为能够直截了当地证明这种现象的实物史料，这一连串残简断片具有非常高的价值。

因为这组残简断片只有数枚，而且它们都已经是断片，故而我们无法搞清楚它们所述说的具体内容，但是我们能够确认其上至今仍然记写着的“孙真人”、“刘楫”、“宜阳”等的固［特］有名词。我们认为其内容应该是从汉语翻译过来的什么东西，然而遗憾的是我们无法找出汉语原书与之进行比定。它或许是一部道教典籍，也可能是一部以道教为主题的文学作品。其中的“孙真人”，有可能是由于

编著了《千金要方》(《千金翼方》) 等而闻名于世的孙思邈 (581-682)。
此外，有关蒙古时期的上图下文的书写排版形式的典籍，另请参见宮紀子 (1998)。

(No.059) 文書番号 F20:W64

サイズ：縦 21cm　横 9cm

01　üdür beri bayulγaǰu kür[e]g[en]///?///
日、降嫁させて婿…
…日娶亲…婿…

02　///gü̱dgegsen-ü qoyin_a bayan sayin boltu
…した後、裕福になって
…之后，至富贵

03　nasun-ṯur kürkü čöken : ügegü dutaγu boltu
寿命に達する者は少ない。貧困になって
寿终者少。至贫缺

04　ükükü qaγačaqu olan . ǰarimud tetürü buruγu
死別する者は多い。若干の顛倒し誤った
死别者众。 有些信仰乖谬

05　büsiregčid amitan-u ilγal anu yaγun-u
信仰する者たちである衆生の区別は何の
之众，其别因

06　tula öber_e bolumui : ker ken ber ilaǰu tegüs
ために別になるのか。もし誰かが世尊
何而异。如何…世尊…

07　///(N?)
…
…

【注釈】

01 üdür: HF125c の注 a04 üdür を参照。

01 kür[e]g[en]: 現代正書法kürgen (婿) を先古典期モンゴル文語ではküregenと書いた例が、「張応瑞碑文」の1.19, 21, 27, 51 (Cleaves 1950)、ボニフェウス8世あてガザン書簡 (Mostaert, Cleaves 1962) などに見えている。

04 tetürü: 「華夷訳語」(甲種本) に「顛倒：帖禿魯」、同 (乙種本) に「tetürü：顛倒：帖禿魯」とある。

06 ilaǰu tegüs : ilaǰu tegüs のあとに nögčigsen を補って「世尊」と解釈した。

01 üdür: 参见 HF125c 注释 a04 üdür。
01 kür[e]g[en]: 该形式，按现在的正字法作kürgen（女婿）。在中世纪蒙古语文献中，以küregen的形式出现。其实例见《张应瑞碑文》的l.19, 21, 27, 51（Cleaves 1950），以及《合赞汗致罗马教皇布尼法斯八世的信》（Mostaert, Cleaves 1962）等。
04 tetürü: 《华夷译语》（甲种本）中写作“颠倒：帖禿魯”，（乙种本）中也作“tetürü：颠倒：帖禿魯”。
06 ilaǰu tegüs : 在 ilaǰu tegüs 之后补写 nögčigsen，并其将解释为“世尊”。

【解説】
木版の仏教関係のテキストであると考えられる。断簡なので詳しい内容を明らかにすることは難しいが、貧富の差は死の前では何の意味も無く、仏の教えを信仰する者は、誤った信仰を持つ者と区別されるという見解を展開する導入の部分で、「もし誰かが世尊」以下に仏法を信仰した場合の利益が説かれるのではなかろうか。

这应该是一件宣传佛教教义的木版原文。但由于它是一件残缺不全的断片，故而难以搞清楚其[全部]内容。现在我们能够窥视到的内容是：[世间的]贫富差距在人[的肉体]死去之前没有任何意义，信奉佛祖教喻的人将会被与坚持错误信仰的人区别开来等等，将其[对于佛教的]见解展开于导入部分。而自“如何…世尊…”以下，则似乎是在解说如果信奉佛教就会得到哪些好处。

(No.060)文書番号 F210:W23

サイズ：縦 20.5cm　横 11.8cm

01　eteged n̲igül-i kü üiledbesü :
側の罪をこそ行えば、
若但做孽恶

02　ede ǰobalan̲g-ud kürten̲ bui :
これらの苦を被るのである。
遭此诸多灾难。

03　erket̲ü bilig-tü bolbasu :
力ある智慧を持つようになるならば、
若成就权力与智慧

04　erüsün̲ buyan̲-t̲ur kičiyegdekü̈i ::
得て功徳に努めるべきである。
应谨慎于功德。

05　keǰiy_e nigül-iyen̲ daγusγaǰu :
いつか罪を終えて
何时将罪恶终结

【解説】
木版の仏教関係のテキストであると考えられる。やはり断簡なので詳しい内容は不明であるが、苦果をもたらす罪行を戒め、智慧によって功徳をおこなうことを説いている部分であろう。

这应该也是一件宣传佛教教义的木版原文。由于它又是一枚断简[文字不全]，所以我们无法明白其详细内容。这里所宣传的内容大概是：禁戒造成苦果的罪恶（罪孽），劝导人们用智慧去建立功德（虔诚修行）。

3-2. パクパ文字文書

(No.061) 文書番号 F155:W11

サイズ：縦 23.5cm　横 15cm

01　lu· su (ni?) ???///???///
…
…

02　ü li ge ri yer sa ba yèr t'in ǰü k'?///
たとえによって器世間…
依例…器世間…

03　·ed a mi t'a nu be ye sun č'a qi ???///
…衆生の体の…
…众生之体…

04　č'aq lan ü lig de yu : sa ba [yèr t'in ǰü]///
比べられる。器［世間］…
…相媲。器［世間］…

05　ǰü bü t'u k'u yin šil t'a ·a///
…成就することの因は…
…成就之因…

06　t'en de t'ö rög č'in a ?///
そこで生まれた…
彼处降生…

07　t'u ü è le dug sen ǰ?///
…行なった…
…行…

08　?er bü /// be ///

…
…

【解説】
木版の仏教関係のテキストであろうが、詳しい内容は不明である。

这似乎还是一件宣传佛教教义的木版原文，但其详细内容却无法明白。

4. その他

4-1. ウイグル式モンゴル文字文書

(No.062) 文書番号 F9:W57

サイズ：縦 9.5cm　横 39cm

01 ///MY TWN///
…
…

02 /// odun-u yabudal ǰil ? ǰüg
…星の運行、年…方角
…星之行，年内在…方向

03 bögesü ///' ǰü(g) mör ülü tata[q]u . öki
であれば…方角、道を引かない。【ある】娘を
则不向…方向出行。将［某］女

04 öbür_ün beri baγular_un T'''?///??? ǰüg
己の【息子の】嫁にもらうに…方角
娶为媳妇，不要向…方向

05 odun esergü ülü yabuγuld(a)qu ::
星は逆行させられない。
逆星而行。

06 nigen sini : arban nigen qorin nigen ede
初旬の一日、十一日、二十一日、これらの
初一、十一、二十一，这等日子里

07 üdüd-tür : dorun_a ǰųg ayu qoyar sini
日々には東方にある。初旬の二日、
在东方。初二、

08 [a]rban qoyar qorin qoyar ede üdüd-tür
十二日、二十二日、これらの日々には
十二、二十二，这等日子里

09 二
二
二

10 dorun_a emüne_e ǰobki-ṯur ayu . γurban sini
東南の方角にある。初旬の三日、
在东南方。初三、

11 arban γurban . qorin γurban ede üdüd
十三日、二十三日、これらの日々
十三、二十三，这等日子里

12 -tür . emün_e ǰųg ayu dörben sini : arban
には、南方にある。初旬の四日、十
在南方。初四、十

13 dörben . qorin dörben . ede üdüd-tür emün_e
四日、二十四日、これらの日々には南
四、二十四，这等日子里在西南

14 örün_e ǰobki-ṯur ayu : tabun sini . arban
西の方角にある。初旬の五日、十
方。初五、十

15 tabun : qorin tabun ede üdüd-tür (örün_e)
五日、二十五日、これらの日々には（西）
五、二十五，这等日子里在（西）

16 ǰųg ayu : ǰiryuγan sini : arban ǰiryuγan qorin
方にある。初旬の六日、十六日、二十
方。初六、十六、二十

17 ǰiryuγan ede üdüd-tür . örün_e (ümer_e)
六日、これらの日々には西（北の）
六，这等日子里在西（北）

18 ǰobki-ṯur ayu . doluγan sini : arban doluγan
方角にある。初旬の七日、十七日、
方。初七、十七、

19 qorin doluγan ede üdüd-tür ümer_e (ǰųg)

二十七日、これらの日々には北（方に）
二十七，这等日子里在北（方）。

20 ayu : naiman sini : arban naiman . qorin naiman
ある。初旬の八日、十八日、二十八日、
初八、十八、二十八，

21 ede üdüd-tür . dorun_a ümer_e ǰobki
これらの日々には東北の方角
这等日子里在东北方。

22 -ṯur ayu : yisün sini : arban yisün . qorin
にある。初旬の九日、十九日、二十
初九、十九、二十

23 yisün ede üdüd-tür dumda ayu (: arban)
九日、これらの日々には真ん中にある。（十日）
九，这等日子里在正中。初（十）、

24 sini . qorin γučin ede üdüd-tür :
←初旬の【初旬の（十日）】、二十日、三十日、これらの日々には
二十、三十，这等日子里

25 oγturγui-ṯur ayu ::
天にある。
在空中。

26 urṯu oqur odun üdüd-tür (qurim?)
長い【星】、短い星の日々に（結婚の宴を？）
在长【星】·短星日子举行（喜筵？）、

27 kibesü degel eḏkebesü ed orayulb[asu]
行なうならば、服を裁断するならば【作るならば】、財を納める
ならば、
裁衣、纳财，

28 ülü ǰoqiqu ::
適さない。
不宜。

29 qubi sara-yin doluγan sini-ṯür (urṯu odun)
正月の初旬の七日には（長い星、）
正月初七（长星）

30 qorin nigen-e oqur odun : (qoyar/quǰir) (sara-yin)

二十一日には短い星、二（月の）
二十一短星。二（月）

31 dörben sini-ṯür urṯu odun : (arban yisün-e)
初旬の四日には長い星、（十九日には）
初四长星，（十九）

32 oqur odun : γurban sara-yin nigen (sini-ṯür)
短い星、三月の（初旬の）一日（には）
短星。三月（初）一

33 urṯu odun : arban jiryuγan-a oqur (odun)
長い星、十六日には短い（星、）
长星，十六短（星）。

34 dörben sara-yin yisün sini-ṯür urṯu odun
四月の初旬の九日には長い星、
四月初九长星，

35 qorin tabun-a oqur odun : tabun sara-yin
二十五日には短い星、五月の
二十五短星。五月

36 arban tabun-a urṯu odun : qorin tabun-a
十五日には長い星、二十五日には
十五长星，二十五、

37 (naiman) sinede urṯu odun (qorin)
初旬の（八日）には長い星、（二十）
初（八）长星。（二十）

38 qoyar-a oqur odun : naiman sara-yin
二日には短い星、八月の
二短星，八月

39 qoyar sini : tabun sini urṯu (o)du(n) (arban)
初旬の二日、初旬の五日は長い星、（十）
初二、初五长星。（十）

40 naiman-a : arban yisün-e : oqur odun
八日、十九日には短い星、
八、十九短星。

41 yisün sara-yin γurban sini : (dörben)
九月の初旬の三日、（四日は）

九月初三、初（四）

42 sini urṯu odun : arban ǰi[ryu]γan-a
←初旬の【初旬の（四日は）】、長い星、十六日には、
长星。十六、

43 arban doluγan-a oqur od[un]///
十七日には短い星、…
十七短星。…

44 sara-yin nigen (sini urṯu) odu[n]///
月の（初旬の）一日は（長い）星、…
月（初）一（长）星，…

45 arban dörben-e oqur odun ///
十四日には短い星、…
十四短星，……

46 nigen sara-yin arban sin[i]///
一月の初旬の十日、…
一月初十…

47 odun : qorin qoyar-a [o]qur odun :
星、二十二日には短い星、
星。二十二日短星。

48 kögeler sara-yin yisün š̲inide urṯu
十二月の初旬の九日には長い
十二月初九长

49 odun : qorin tabun-a [o]qur odun ::
星、二十五日には短い星。
星。二十五短星。

50 arban (mösür/mösükü) üdüd-tür ülü
十（干）の日々に
十（干）日里

51 üileddekü üiles ede bui ::
行なわれないことはこれらである。
不行诸事有这等。

52 ga üdür-tür sang ülü negegdekü : yi üdür
甲の日には倉は開かれない。乙の日
甲不开仓。乙不

53 -tür modun ülü siḵügdükü : bing üdür-tür
には木は切られない。丙の日には
栽树。丙不

54 γolumta ülü taqiγdaqu : ding üdür-tür
炉は祀られない。丁の日には
祭灶。丁

55 üsün ülü düil<e>dekü : ou üdür-tür tariγ_a
髪は対にされない。戊の日には穀物は
发不成对。戊不

56 ülü quriyaγdaqu : gi üdür-tür bičig ülü
収穫されない。己の日には書は
受田。己书

57 buyaγuldaqu : ging üdür-tür utasun arqaγ
…されない。庚の日には糸は縁を
…不成。庚不经络。

58 ülü yabuγuldaqu : sin üdür-tür sang ülü
行かせられない。辛の日には倉は、ない→
辛仓不被盗。

59 qulaγdaqu : š̲im üdür-tür usun-u subaγ
盗まれる【盗まれない】。壬の日には水路は
壬不掘渠。

60 ülü erügdekü : güi üdür-tür ülü ǰaγalduγdaqu .
掘られない。癸の日には訴えられない。
癸不词讼。

61 arban qoyar gesigün üdüd-tür ülü
十二支の日々に、ない→
十二支日里不行

62 üileddekü̈i üiles ede bui ::
行なわれることは【行なわれないことは】、これらである。
诸事有这等。

63 quluγan_a üdür-tür ǰiruqai ülü üǰegüldekü :
鼠の日には占いは見せられない。
子不问卜。

【注釈】

07 üdüd: üdür の複数形。üdür については HF125c の a04 に対する注を参照。トゥルファン出土暦断簡に、ayungɣ_a-tu üdüd（Cerensodnom, Taube 1993: 55r8）とある。

17 ümer_e: 現代正書法では umar_a。『元朝秘史』09:14:03 に「兀篾古列（ümere)」（傍訳：北行)、『華夷訳語』（甲種本）1:25b2 に「北　兀篾古列（ümere)」（栗林 2003)、モンゴル語訳『孝経』34a1 に ümer_e（Rachewiltz 1982: 82）などと見える。

28 ǰoqiqu: 27 行目から 28 行目にかけて、-basu/besü ülü ǰoqiqu という表現が出てくるが、これは「～するのはよくない」という意味を表している。

43： 前後関係から判断して、この行の末尾には arban の語が書かれていたものと考えられる。即ち次行の冒頭の sara と合せて、arban sara「十月」となる。

45： 前後関係から判断して、この行の末尾には arban の語が書かれていたものと考えられる。即ち次行の冒頭の nigen sara と合せて、arban nigen sara「十一月」となる。

50 arban (mösür/mösükü̈i): (mösür/mösükü̈i)の意味は不明であるが、以下の行の内容から考えて「十干」を指していることは間違いないと思われる。

55 düil<e>dekü: toyil<a>-「剃髪する」の可能性もあるが、語末が-kü であることに鑑み、düil<e>-で解釈した。

57-58 utasun arqaɣ ülü yabuɣuldaqu: 糸で縁取りをしてはならないということを指しているものと考えられる。

58-59 sang ülü qulaɣdaqu: 意味がよく分からない。あるいは sang を ǰang と見て、「醤は混ぜられない」とする解釈も可能かも知れない。

07 üdüd: üdüd”是“üdür”的复数形式。关于“üdür”，另请参见 HF125c 中的、对于“a04”所作的注释。另外，在吐鲁番出土的《历断简》里，也有“ayungɣ_a-tu üdüd”（Cerensodnom, Taube 1993: 55r8）的记写。

17 ümer_e: 现代正字法（正书法）作“umar_a”。在《元朝秘史》09:14:03 里面，可以看见“兀篾古列（ümere）”（傍译：北行）；在《华夷译语》（甲种本）1:25b2 里面，能够找到“北　兀篾古列（ümere）”（栗林 2003）；在用蒙古语翻译的《孝经》34a1 里面，还能够发现“ümer_e”（Rachewiltz 1982: 82）等的记述。

28 ǰoqiqu: 从其第 27 行到其第 28 行，有“-basu/-besü ülü ǰoqiqu”的记述，这段语句所表示的意思是“做……不好（不要……）”。

43： 根据其前后文关系判断，在本行的末尾部分，可能［曾经］记写着“arban”这一词语。这也就是说，如果与其下一行的第一个单词“sara”互相拼合，就能构成“arban sara（十月）”的意思。

45： 根据其前后文关系判断，在本行的末尾部分，可能［曾经］记写着“arban”这一词语。这也就是说，如果与其下一行的第一个单词“nigen sara”互相拼合，就能构成“arban nigen sara（十一月）”的意思。

50 arban (mösür/mösükü̈i): 对于其中的“（mösür/mösükü̈i）”，虽然我们不清楚它的含意，但是根据其后的内容考虑，我们认为它无疑是指“十干”而言。

55 düil<e>dekü: 有可能是“toyil<a>-”（“剃发”的意思），鉴于其语尾写做：“-kü”，所以我们把它解释成了“düil<e>-”。

57-58 utasun arqaɣ ülü yabuɣuldaqu: 我们认为这段语句的意思是：不能用丝线镶边儿。

58-59 sang ülü qulaɣdaqu: 这段语句的意思我们也不能完全知晓。其中的“sang”或许可以看做是“ǰang”，这样就可以将其解释成“酱菜（酱油）搅拌不动”的意思。

【解説】

嫁取りや服の裁断などの行為と、それをおこなうに適した吉日と星の位置（方位）の関係、ある

特定の日（十干・十二支の日）とその日におこなってはならない行為（倉を開く、木を切る、竈をまつる、など）との関係が記されている。行為と日時・方位と適不適の関係で解説する内容から、トゥルファン出土の暦断簡（Cerensodnom, Taube 1993: 147-163, Nrs.49-67; Franke 1964; Kara 1979）と何らかの関係を有するものではないかと思われる、ただし、トゥルファン出土の暦断簡は表のような罫線が入っているのに対して、この版式にはそのような罫線は見られない。よって、ここでは、トゥルファン出土の暦断簡に類した文献の一部であると考えるにとどめておく。

本件文书记写着的内容是，嫁娶、裁衣等的行为以及与此相适应的吉日和星辰方位的关系，还有某个（某些）特定的日子（十干、十二支的日子）和这个（这些）日子不能干的事情（例如：开仓、裁树、祭灶等等）之间的关系。

根据本件文书中具有解说“行为、日时、方位、是否适合”等互相之间关系的内容，我们认为它与从吐鲁番出土的《历断简》（Cerensodnom, Taube 1993: 147-163, Nrs.49-67; Franke 1964；Kara 1979）多少有些关系。然而，从吐鲁番出土的《历断简》，其上面附带着格线。但在我们这里所说的这种版式里，却看不到类似的格线。因此，我们只能说本件文书是与从吐鲁番出土的《历断简》相类似的一个文献。

(№063) 文書番号 F192:W1

サイズ：縦 14cm　横 15.4cm

01 ///M??S?? čaγ-un///
…時の…
…时的…

02 ///W (d[oluγ]an?) sara-yi[n]///
…（七？）月の…
…（七？）月…

03 ///ǰug yabuyu /// tere Y///
…方角に行く。…その…
朝…方向行走。…那…

04 /// T?? (salki?) kei kiyes///??///
…風が吹く…
…风吹…

05 /// YY.'W"YW TWWR ///YW : (γaǰar?) ?///? (sibar?)///
…（土地？）…（泥？）…
…（土地？）…（泥土？）…

06 ///K'R S'CYR K'YYCY ?/// WY///WYW : ?///YYC///?? WY///
…
…

07 ///(q)aš (de)bter (oraγulbasu) (noyalaqu) nere ///[a]bbasu (ǰaryu)///
…玉の冊子を（入れれば）（高位になる）名を取れば、（訴訟）…
…进玉册、上官、（诉讼）…

08 ///??W?CYP?SW : ??///?SW ǰas///?? . degel eḏ(ke)be(s)ü mod
…服を裁断するならば【作るならば】、木
…裁衣、[栽]树、

09 /// ??? KWY??KWP'SW . ǰoqi[qu]///
…適する。
…宜。

10 ///??YP'SW : ǰögebesü /// ür_e sačubasu : ülü ǰoqiqu ::
…運べば、種を播けば、適さない。
…搬运、播种，不宜。

11 /// ??WY??P'SW : KWY?///???S???(P')SW : bičig bayiγulbasu .
…文書を立てれば、
…立文书、

12 ///(qudaldu) kibesü : ür_e sačubasu : mod siḏkübesü
…（商いを）すれば、種を播けば、木を植えれば、
…（交易）、播种、植树、

13 ///(aduγusun) teǰigebesü qoriyan sebligü(lbe)sü : tökü(m)
…（獣を）飼えば、囲いを修繕すれば、道を
…饲养（动物）、修造围栅、加固

14 ///[be]kilebesü ǰoqiqu ::
堅固にすれば、適する。
路面，宜。

15 /// mör asaqbasu čimalaγulbasu : ülü ǰoqiqu :
…道を尋ねれば、文句を言われれば、適さない。
…问路、被责怪，不宜。

16 ///???///(baribasu?) : ǰ[oq]iqu ::
…（捕らえれば？）適する。
…（抓捕？），宜。

17 /// ülü ǰo[qiq]u ::
…適さない。
…不宜。

18 ///[uri]dus-un mör-tür ǰalγaldubasu noyalaqu nere abbasu

…先祖代々の道につなぎ合わせれば【埋葬すれば？】、高位になる名を取れば、
…与祖先之路相连【葬埋?】、上官、

19 ///(ger arilγabasu?)/// : ökin γ[arγa]basu : beri baγulbasu : (ger)
…（家を掃除すれば、？）娘を【嫁に】出せば、嫁を取れば、（家）
…（打扫家？）、嫁女、娶亲、（家）

20 ///?N'W'C/// emčile(gül)besü ///D///P'SW ǰasabasu : kebid
…治療させれば…直せば、店
…治[病]、修…、…（开？）店、

21 [delgerebesü?]///WN_' ?///(S)W (ǰoq)iqu :: ///mör γarbasu : ülü ǰoqiqu :
［開けば？］…適する。…道に出れば適さない。
…宜。…出行，不宜。

22 ///???///(P'P'S/WLB'S)/// PWYR///?///WN
…
…

23 ///KW///D///??? (utasu)///
…（糸）…
…（线）…

24 /// ??///YY'"///'S///?///
…
…

【解説】

縦に罫線が彫られている版式上の特徴は、トゥルファン出土の暦断簡（Cerensodnom, Taube 1993: 147-163, Nrs.49-67; Franke 1964; Kara 1979）に酷似している。破損が著しいため、テキストを十分に比較することは難しいが、ある特定行為の実施の適・不適を述べていることは間違いないので、トゥルファン出土の暦断簡と同じ文献の異なる一部であると言えよう。トゥルファンとハラホトの二か所から、同じ文献に由来する可能性の高い断簡が出土したことは、中央アジアにおいて、暦という人間生活のあらゆる側面に密接に関係する文献が流通していたことを証明するものであり、文化史的にも意義ある出土品であるといえよう。

其纵向雕刻格线的版式特征，也酷似从吐鲁番出土的《历断简》（Cerensodnom, Taube 1993: 147-163, Nrs. 49-67; Franke 1964; Kara 1979）。

由于本件文书破损缺失情况相当严重，故而难以充分[深入]对照比较原文。但是因为它确凿无疑地也记述着适合或者不适合实施某种特定行为的内容，所以我们认为它是和从吐鲁番出土的《历断简》属于同种文献的不同部分。

从吐鲁番和黑城这两个地方都出土了非常可能发源于同一种文献的断简。这件事情本身就可以证明，在当时的中央亚细亚，"历"这种与人类生活的各个方面都有密切联系的文献，曾经流通。所以，本件文书又是一件在文化史方面也具有重要价值（意义）的出土文物。

(No.064) 文書番号 F234:W1

サイズ：縦 20cm　横 22.5cm

01　///-YY'R ///
…によって…
…依…

02　///L///N sa_yid ///
…良き…
…好人毎…

03　/// egün-eče qarĭji ///
…これより戻って…
…由此回…

04　///[ba]yiγul_qun ke[m]en ///
…立てると言って…
…立…么道…

05　///???lig bičig-iyen ///
…文書を…
…文书…

06　/// ked es_e bayiγulbasu ///
…だれかが立てなければ…
…谁人若不立…

07　///L yosuγar kündü ///
…の通りに重い…
…依…体例…重…

08　'C/// ???///N balγad b///
…諸城…
…城每…

09　kemen ?///? ?? (PYN?) Y'YL??///
といって…
么道…

10　bičig ??N ????? ///
文書…
文字…

11　ǰil yisün sara-yin γur[ban]///

年の九月の初旬の三日
年九月初三

12 sini-te P///
に。…
日…

13 (bayaliγ?) ///
(バヤリク？)…
(巴牙里克？)…

14 P'///???///
…
…

【注釈】

03 qarĩji: qarĩji は qarĩju の口語形である。

04 [ba]yiγul_qun: この語は冒頭部分が破損している、途中墨が薄くなっている部分がある、などの理由から、ローマナイズ、解釈の難しい文字である。この文書は全体に破損箇所が多く、文意が取りにくいが、6行目に/// ked es_e bayiγulbasu ///「…だれかが立てなければ…」とあることなどから、まずこの語を冒頭の ba の部分が欠けた bayiγul-であると判断した。1より上の部分と下の部分が繋がっているか否かについても、判断を下しにくいが、切れてはいるものの一つの語であると判断しローマナイズではアンダースコアで接続した。qun と読んだ部分の u は字腹（W）の上の部分しかなく途中で切れているように見えるが、字腹（W）の下の部分が前の行の egün の n の払いと重なっている可能性があること、7行目の yosuyar の o のように、本文書の書写者は字腹（W）を先端が下にたれた i のように書いた後に、下の部分をあとから書き足すという書き癖があるように思われること（つまり字腹（W）の頂点に当る部分が欠けているように見えること）、などから字腹（W）であると判断し、また当時の命令形の使い方（語幹のみの命令は少ない）、先古典期には-qun という現在未来の複数形の存在していることから、qun とした。

06 ked: ken の複数

08 balγad: balγad（balayad）は balγasun（balayasun）の複数形。『元朝秘史』の傍訳には「城」とされる場合がほとんどであるが、"壁"や"壁に囲まれたところ"のように、もう少し意味は広い。先古典期においては、balayad と balγad の二通りの書き方があったが、用例の数から見るとこの時期は balayad の方が多い。balγad～balγasun は「ジグンテイ碑文」(Cleaves 1951)、「ソルハルナイ伝」(Ligeti 1972a: 197-207；Cleaves 1959)、「イラス・ホージャの命令による免税許可状」(Cerensodnom, Taube 1993: 168-170)、『ムカディマート・アル・アダブ』(Поппе 1938) などに用例が見られる。

12 sini-te: F61:W9 の注 01-02 sini-te を参照。

13 bayaliγ: 人名か？

03 qarĩji: qarĩji 是 qarĩju 的口语形式。

04 [ba]yiγul_qun: 该词的词头部分已破损，中间部分又墨迹变淡，因此是一个拉丁转写和解释都很难的字。整个文书也因多处破损，所以很难理解该文书的内容，但从第 6 行中有/// ked es_e bayiγulbasu /// "…谁人若不立…"来看，首先可以判断这个词是缺词头部分 ba 的 bayiγul_。虽然较难判断该行 1 以上部分和以下部分有没有联系，但视为该处是破损处的一部分，在拉丁转写中用下短线连接。在读作 qun 的部分中，只有 u 的上部隐约可见，而其下部可能和前一行的 egün 的 n 相重叠。或正如第 7 行中

yosuγar 的 o 一样，本文书的书写者在书写 u 时先将 u 的上段像往下卷曲的 i 一样书写，然后从下面在补画 u 的下段（也就是说 u 好象缺笔一样）。根据这些判断为 u。还有，根据当时动词命令形的使用方法（只有以词干作命令形的现象少见）和古代有表示现在未来的复数形-qun 的情况，所以将其读做 qun。

06 ked: 是 ken 的复数。

08 balγad: balγad（balayad）是 balγasun（balayasun）的复数形。《元朝秘史》中的傍译指“城”的情况较多，就像“壁”与“被壁围绕的地方”例子一样，意义稍微有些广。在古时期，有 balayad 和 balγad 的两种通用的写法，但从该两字的使用次数来看，在这个时期较多用 balayad。有关 balγad～balγasun 的用例如《竹温台碑文》（Cleaves 1951）、《祖勒合乃传》（Ligeti 1972a: 197-207; Cleaves 1959）、《据亦里亚思火者之令之免税许可状》（Cerensodnom, Taube 1993: 168-170）、《穆卡迪玛特・阿勒・阿达布词典》（Поппе 1938）等。

12 sini-t̲e: 参见 F61:W9 注释 01-02 sini-t̲e。

13 bayaliγ: 或许是人名。

【解説】

F192:W1 の 11 行目には bičig bayiγulbasu「文書を立てれば（文書を作成すれば）」という表現があり、本文書の 4, 6 行目にもそれぞれ[ba]yiγul_qun, bayiγulbasu、5 行目に bičig という語が見られることから、何らかの「文書を立てる（文書を作成する）」事に関する内容かと思われるが、詳細は不明である。また、文書本文の最後に日付けが記され、最後に署名があるという形式から、何らかの契約文書である可能性もあろう。

在 F192:W1 的第 11 行里，记述着“bičig bayiγulbasu”的内容，本件文书的第 4 行和第 6 行也都分别各自存在着“[ba]yiγul-qun, bayiγulbasu”的记述，在本件文书的第 5 行里，还能看见“bičig”这个单词。根据这些情况，本件文书似乎是关于“定立文书”的内容，但其详细情况却不得而知。

此外，在本件文书正文的靠后部分写有日期，其最后部分还有签名，所以本件也存在着一点应该属于契约文书的可能性。

(No.065) 文書番号 F42:W3

サイズ：縦 24cm　横 14.5cm

F42:W3a

01　ong PY///
　　王…
　　王…

02　bayil///
　　…
　　…

03　ileb///
　　派遣…
　　遣…

04 ong-un///
王の…
王的…

05 ayimaγ 'L///
アイマグ…
爱马…

06 ködege T'K///
田舎…
野…

F42:W3b

01 ///ngǰang-un bodi YW///
…ンジャンの菩提…
…ngǰang 之菩提…

02 ///S'CY buyan SWRD?S K'P///
…功徳…
…功德…

03 ///? ba irekü-ṯür ?///
…私たちが来る時…
…我等来时…

04 ///???K'D' künün 'S?///
…
…

F42:W3c

06 ///?
…
…

07 ///' ?///
…
…

08 ///???N (ged/ked) ??///
…(と言って／誰) …
…(么道／谁) …

09 qariyuluγsan-i gamǰu singgün 'W///

返したものを甘州省の…
…将…遣返了者 甘州省之…

10 T///WRS_' šim 'WYN sayim///
…
…

11 γurban erdenis-un adisdid TW///
三宝の加持…
三宝之摂授…

12 tügel üǰeldükü boltu[γai]///
平安を一緒に見ることにしよう。
愿惠及众人!

【注釈】

00 : F42:W3 は三つの断片からなっており、それを一枚の白い紙に貼り付けて一つの文書として扱っている。F42:W3a の下に間隔を空けて F42:W3b が貼ってあり、F42:W3a の右側に少し間隔を空けて F42:W3c が貼ってある。F42:W3b の 01～04 は F42:W3a の 01～04 に対応するように、また F42:W3c の 06 が F42:W3a の 06 に対応するように貼ってある。これを一つの文章と見ると、全体で 12 行の文書が三つの部分に分かれているというかたちとなる。

b01 ///ngǰang: [bi]ngǰang「平章」(近世音 p'iəŋ-tʃiaŋ) であろうか。平章は、中書省・尚書省・行中書省に置かれた宰執職、平章政事。ウイグル文字モンゴル語表記 bingǰang は、1362 年「忻都王碑文」の ll. 7, 9, 11, 19, 25, 26, 32, 36, 38, 40, 41 に用例がある (Cleaves 1949: 62-67, 102, n.41; Ligeti 1972a: 64-66, 68, 70-72)。

b04 künün: 意味不明。kümün の m の「下向きの角」の筆画を落したものであろうか。

c09 gamǰu singgün: gamǰu は「甘州」(近世音 kam-tʃiəu) を写したもの。singgün は singün < sing-ün「省 (近世音 ʂəŋ) の」のヴァリアントと考える。甘州省は、甘粛等処行中書省を指す。治所は甘州 (現在の張掖) に置かれていた。『元史』巻 60・地理志 3 (1449) 及び巻 91・百官志 7・行中書省 (2307) にあるように正式名称は「甘粛等処行中書省」であり、各種史料には略称として「甘粛行省」・「甘粛省」が頻見されるが、「甘州行省」の用例も何例か見られる (『元史』巻 12・世祖本紀・至元 20 年 6 月丙戌：255；巻 14・世祖本紀・至元 24 年 7 月癸丑：299；巻 101・兵志 4・站赤・至元 19 年 4 月及び至元 20 年 11 月：2586)。ほか、甘粛行省を γamǰu šing(ün)と翻訳した例が、1362 年「忻都王碑文」の ll. 24, 25, 32 に用例がある (Cleaves 1949: 64-65, 114, n.112; Ligeti 1972a: 68, 70)。

00 : F42:W3 是由三个断片组成，将这三个断片粘贴在一张白色纸上，组成一份文书。F42:W3a 的下方留一些间隔粘贴了 F42:W3b，F42:W3a 的右侧留一些间隔粘贴了 F42:W3c。F42:W3b 中的 01～04 和 F42:W3a 中的 01～04 相对应； F42:W3c 中的 06 和 F42:W3a 中的 06 相对应而粘贴。如把它看作是一个文章，那么，整个 12 行的文书可分为三部分。

b01 ///ngǰang: 也许是指 [bi]ngǰang“平章”。平章是设于中书省、尚书省、行中书省的宰执职，即平章政事。以畏吾体蒙古文记载的 bingǰang 见于 1362 年《忻都王碑文》中的 ll. 7, 9, 11, 19, 25, 26, 32, 36, 38, 40, 41 (Cleaves 1949: 62-67, 102, n.41; Ligeti 1972a: 64-66, 68, 70-72)。

b04 künün: 不明其意。或许是 kümün 的缺笔 (m 缺笔，变成了 n)。

c09 gamǰu singgün: gamǰu 是为“甘州”。将 singgün 看作是 singün < sing-ün“省的”的变体。甘州省是指甘肃等处行中书省。治所设在甘州 (现在的张掖)。《元史》卷 60・地理志 3 (1449) 及卷 91・百

官志 7・行中书省（2307）中的正式名称为“甘肃等处行中书省”，在各种史料中也多见略称的“甘肃行省”、“甘肃省”，但也有“甘州行省”的用例。（如《元史》卷 12・世祖本记・至元 20 年 6 月丙戌:255;卷 14・世祖本记・至元 24 年 7 月癸丑:299;卷 101・兵志 4・站赤・至元 19 年 4 月以及至元 20 年 11 月：2586）。此外还有将甘肃行省翻译为“甘州省”（γamǰu šing(ün)）的例子，如 1362 年《忻都王碑文》中的 ll. 24, 25, 32 等（Cleaves 1949: 64-65, 114, n.112; Ligeti 1972a: 68, 70）。

【解説】

「三宝（γurban erdenis）」を台頭していることから、本文書は仏教徒が書いたものと思われる。また「菩提（bodi）」、「功徳（buyan）」などの語が見られることから、仏教に関係する内容を持つものであろう。ただ、「派遣（ileb///）」の語や、「甘州省の（gamǰu singgün）」という行政区画の名前が見えていることからすると、仏典に類するものではなかろう。書簡の可能性もあろうが、内容の詳細が不明なため、断定はできない。

根据其将“三宝（γurban erdenis）”记写在抬头的位置来看，这应该是一件由佛教徒写的文书。再根据其中的“菩提（bodi）”、“功德（buyan）”等的词语，这件文书似乎具有宣传佛教教义的内容。但是，从其中也有“派遣（ileb///）”的单词，以及“甘州省之（gamǰu singgün）”这种行政区划名称等等情况考虑，这件文书似乎又不应该归入佛典。应该将它归入书简类的可能性也存在着。因为我们不清楚它的详细内容，所以我们无法断定。

(No.066) 文書番号 F245:W5

サイズ：縦 17.5cm　横 17.5cm

01 buyanbuq_a vaubun
ボヤンボハ府判
卜颜不花府判

02 čeregtü čiubun
チェレグトゥ州判
彻哩秃州判

03 baitemür vaubun
バイテムル府判
白铁木儿府判

04 kiu kü tamayači
キウ・ク・タマガチ
邱库知印

05 orta čobu
オルタ主簿
斡儿答主簿

06 qilim tungči

キリム同知
黑林同知

07 kisang čobu
キサン主簿
乞桑主簿

08 J̌amǰiu
ジャムジウ
占纠

09 sau ????
サウ…
曹…

10 yerü yisün kümün
計九人
计九人

【注釈】

01, 03 vaubun: 1362 年「忻都王碑文」(Cleaves 1949: 66, 122, n.177; Ligeti 1972a: 71) の l. 37 にみえる vubun のヴァリアントと解釈した。本碑漢語面の対応箇所は「総管府判官」。この省略語「府判」(近世音は fu-p'uon) を音写したもの。判官は、達魯花赤・総管・同知・治中に次ぐ官 (『元史』巻 91・百官志 7・諸路総管府: 2316)。黒城漢語文書 Y1:W140, F234:W18 (李逸友 1991: 101, 207) に「府判」の用例が確認される。

02 čiubun: 州判官の省略語「州判」(近世音は tʃiəu -p'uon) を音写したものと解釈した。達魯花赤・州尹／知州・同知に次ぐ官 (『元史』巻 91・百官志 7・諸州 : 2317)。

05, 07 čobu: 「主簿」(近世音は tʃu-pu) を音写したものと解釈した。県の属僚。県簿・簿ともいう。達魯花赤・県尹・県丞に次ぐ (『元史』巻 91・百官志 7・諸県 : 2318)。

06 tungči: F21:W28 の注 01,05 tngči,tungči を参照。

01, 03 vaubun: 解释为 1362 年《忻都王碑文》(Cleaves 1949: 66, 122, n.177; Ligeti 1972a: 71) 的 l.37 中所见到的 vubun 的异写。此碑的汉语面对应处是“总管府判官”。其省略语为“府判”。判官是次于达鲁花赤、总管、同知、治中的官职。(《元史》卷 91・百官志 7・诸路总管府: 2316)。从黑城汉文文书 Y1:W140, F234:W18 (李逸友 1991: 101, 207) 可证实“府判”的用例。

02 čiubun: 州判官的省略语是“州判”。次于达鲁花赤、州尹 / 知州、同知之官职。(《元史》卷 91・百官志 7・诸州 : 2317)。

05, 07 čobu: 解释为“主簿”的音写。县之下属。是为县簿、簿。次于达鲁花赤、县尹、县丞之官职 (《元史》卷 91・百官志 7・诸县 : 2318)。

06 tungči: 参见 F21:W28 注释 01, 05 tngči, tungči。

【解説】

9 名の名前と官職を列挙しただけのこの文書の用途などはいっさい不明である。花押などもみえないので公文書 (正本) の一部とも考えにくい。あるいは、何らかの覚書であろうか。州判及び次

の主簿が存在することから、所掲の官職はエチナ路以外にも及ぶ可能性がある。また、漢語文書では通常、品級の低い官から高い官へと列記する（黒城漢語文書の例としては、李逸友 1991: 145-146, T9:W3 を参照）が、本文書にはこうした傾向はみられない。

这件文书仅仅列举出了九个人的名字及其官职，但其用途却全然不明。因上面没有花押指印等，所以也很难将其视为公文文书（正本）的一部分。也许是关于某事的备忘录（摘要记录）？

从州判以及其次的主簿的存在来看，这里所记写的官职有可能涉及至亦集乃路以外的地方。

一般说来，在汉语文书里面，如果要开列官员的姓名，惯从品级较低的官员向品级较高的官员逐级排列（就黑城汉语文书中的例子，见李逸友 1991: 145-146，T9:W3），但在这件文书里面，我们却看不到这种倾向。

(No.067) 文書番号 F144:W4

サイズ：縦 11.5cm　横 17cm

01 ///???///???KW ///
…
…

02 mingling qoyar T///
ミンリンが二…
明领…二…

03 namur-un ạčūs s[ara]///
秋の終わりの［月］…
秋末［月］…

04 qurdaq̄_a T'D///
ホルダハ…
忽儿答哈…

05 q̄atun-u "RP'///
ハトンの…
妃子的…

06 TWR kürtele ?///
まで…
至…

07 ün_e inu ?///
その値段は…
价…

08 tariqu SY///

植える…
耕种…

09 [γ]učin sïǰïr///
三十両…
三十两…

【注釈】

04 qurdaq̆_a: 人名と解した。

04 qurdaq̆_a: 解释为人名。

【解説】

本書で扱った分例文書では、kesig の受領（通常 3 ヶ月分ごとにまとめて）の対象者は、「対象者名＋属格＋kesig」の形で記されるが、本文書 5 行目の「ハトンの…（q̄atun-u "RP'///）」の"RP'の部分は kesig ではありえない。また qatun が王族の妃を指すと仮定すると、qatun に前置されていたであろう妃の名が台頭・平出などの敬意表現を施されていないことになり、我々が知っている分例文書の形式に矛盾する。従ってこの文書が分例文書である可能性は低いであろう。

7 行目「その値段（ün_e inu）」や 8 行目「植える（tariqu）」などの表現があり、また 9 行目「三十両（[γ]učin sïǰïr）」と具体的な金額が記されていることから考えると、金銭の授受が絡んだ農産物或いはそれを植える土地に関係する何らかの文書である可能性が考えられよう。

在本书所研究处理的“分例文书”之中，对于 kesig 的收领（通常是每三个月集中进行一次）对象，是按照“[收领]对象+所属格+kesig”的格式来记写的。但是在本件文书第 5 行的“妃子的…（q̄atun-u "RP'///）”中的“"RP”部分，不可能有“kesig”存在。

如果我们假定 qatun 是指王爷的妃子，那么应该书写在 qatun 前面的[这位]妃子的称号（名字），在这里就没有遵循台头、平出等等以表示尊敬的行文格式，因而就与我们所知道的“分例”文书的格式不相符合，所以我们认为这件文书属于“分例”文书的可能性很小。

我们还注意到，在其第 7 行中有“价（ün_e inu）”的记述，在其第 8 行中则有“耕种（tariqu）”这个词语，在其第 9 行中还有“三十两（[γ]učin sïǰïr）”这个具体金额。综合以上情况，这也可能是一件缠绕着金钱授受关系的农业产品文书或者是一件有关种植农作物的土地的文书。

(No.068) 文書番号 F42:W1

サイズ：縦 21.5cm　横 30cm

01 S'DK///??? ?///?? K'///
…
…

02 TWR TW?R ///WN S'?///
に…
裏…

03 (S'S'S?) [ke]sig T///SW///
…分け前…
…分例…

04 aqa vabṯan noya[n]///
兄ヴァブタン・ノヤン
兄瓦不坛官人

05 ??? [sa]ra-yin kesig
…ヶ月の分け前
…个月分例

06 ǰayun darasun kürčü
百の酒が至り
至百份酒

07 ǰirayad sara-yin kes[ig]///
約六十ヶ月の分け前
六十个月分例

08 ǰayun darasun S'D///
百の酒…
百份酒…

09 buq_a ?///??///kürb[e]///
ボハ…至った…
不花…至…

【注釈】

04 aqa: aqa は ạne の可能性もある。
04 vabṯan noya[n]: vabṯan は F61:W6 の 5 行目にも vabtan bičig ögür_ün「ヴァブタンが文書を与えるに」として現れる。

04 aqa: 也可能是 ạne。
04 vabṯan noya[n]: vabṯan 在 F61:W6 的第 5 行中记为 vabtan bičig ögür_ün“瓦不坛立文书”。

【解説】

「約六十ヶ月の分け前（ǰirayad sara-yin kes[ig]）」である「百の酒（ǰayun darasun）」の扱いについての文書であると思われる。「分け前（kesig）」という言葉から考えると、ある種の分例文書であろうか。ただしサンガシリ大王他に対する分例文書と比較すると、内容・書式の点で共通性はあまり見られない。またヴァブタン・ノヤンがこの「六十ヶ月の分け前」である「百の酒」にどのように係わっているのかも不明である。なお、写真では文字の書かれている断片の下に、花押のある断片が見られるが、断片の形状から見て同一文書の一部ではないと判断し、考察の対象から除外した。

这应该是一件关于如何打理（处置、经营）本来属于“六十个月分例（ǰirayad sara-yin kes[ig]）”中

的“百份酒（Jayun darasun）”的文书。但从其中的“ 分例（kesig)”这个词语考虑，这似乎又应该是某一种“分例”文书。

然而如果我们将此去与有关桑哥失里（サンガシリ）大王等人的“分例”文书相互比较，我们就会发现，无论其行文内容还是其书写格式，二者之间都没有多少共通点。

而且，这位瓦不坛官人（ヴァブタン・ノヤン）与这里的“六十个月分例”中的“百份酒”有什么关系也不清楚。

另外，从照片里可以看到，在记写着文字的断片的下面，还有[一个]那上面有花押（签字）的断片。但是，根据断片的形状我们可以肯定，这不是同一件文书的断开部分，所以我们把它排除于考察研究对象的范围之外了。

(No.069) 文書番号 F41:W11

サイズ：縦 21.5cm　横 13.5cm

01 üker jil kölker sara-yin qorin
牛の年の十二月二十
牛儿年十二月二十

02 qoyar-a bi temür-yin nigen sir_a
二日に、私、テムルの一頭の黄色い
二日，将我铁木儿之一头黄色

03 ///MDW ünege///nigen ata
…メス牛…一頭の去勢
…牝牛…一峰骟驼

04 temegen (Jaγabaqai?) belge inu ünegenü
駱駝…その特徴はメス牛の
…识别标记为：牝牛

05 abita γaǰar-tur tamγ_a-tu nigen
abita のところに印のある一頭が
abita 处有烙印的一头

06 bui ※ basa qoyitu ?///N-TWR
いる。※ また後の…に
※ 又在后边…

07 ※ süǰi-tür WY??? [tam]γ_a
※ 腰のわきに…［印］
※ 在胯部…［印］

08 ???///???///???///
…

…

【注釈】

01 kölker: この時代には、kögeler[xɵ:lər]（MON03 の 4, 9 行目の köüler は kögeler の口語形と考えられる）と kökeler[xɵxlər]（『華夷訳語』には「可可勒兒撒剌」とある）の二通りの表記（発音）があったと思われる。この場合は後者であり、さらに[xɵxlər]の l と x が交替した発音を kölker と表記したものであろうか。

05 abita: 家畜の部位の名前であろう。abita γaǰar-tur tamγ_a-tu「abita のところに印のある」とあることから考えると、尻近辺の可能性が高いと考えられる。現在では使われない。『元朝秘史』§12 の abit（阿必惕 傍訳「肚臟」）と関係があるかも知れない。

06-07 : 6 行目の bui の後、7 行目冒頭の※の箇所にはタムガの烙印が書かれている。

07 süǰi: 現代正書法では següǰi。現代口語では suudʒ と発音する。恐らく当時の口語においては següǰi の-egü-における両母音間の-g-が既に脱落し、その前後の母音が長母音-~~uu~~-を形成しており、その長母音-~~uu~~-を ü の一綴りで表したのであろう。

01 kölker: 可能在这一时期有 kögeler[xɵ:lər]（MON03 的第 4,9 行中的 köüler 可能是 kögeler 的口语形）和 kökeler[xɵxlər]（《华夷译语》中有“可可勒兒撒剌”）两种写法（发音）。这里或许是后者，是否将“xɵxlər”中的 l 与 x 交替的发音标记为 kölker?

05 abita: 似乎为家畜部位的名称。据 abita γaǰar-tur tamγ_a-tu“abita 处有烙印”和后文 basa qoyitu ?///N-tur（又在后边），可以推测可能指的是后臀部位。该词也许与《元朝秘史》§12 中的 abit（阿必惕 傍译“肚臟”）有关系。

06-07 : 第 6 行的 bui 之后和第 7 行开头处的※处写有烙印样式

07 süǰi: 现代的正确书写方法是 següǰi。现代的口语中发音为 suudʒ。也许在当时口语中 següǰi 中的-egü-部分的两个元音间的-g-脱落之后，其前后元音变为长元音-~~uu~~-，将其记为 ü。

【解説】

テムルなる人物のメス牛や去勢駱駝についての記述が見られるが、これらの家畜に関する契約文書なのか、或いは納入・登録に関する文書なのか不明であるので、「その他」に分類した。文書中にタムガの烙印と思われるものが記されており、当時からそのような方法による家畜管理が行なわれていたことをを示す史料として興味深い。

这件文书记述着的是一个名字叫做铁木儿（テムル）的人的牝牛以及骟驼。但这究竟是一件关于家畜的契约文书，还是一件缴纳[物品、赋税]和登录方面的文书，尚不清楚。所以把这件文书归入“其他”类之中。

文书中出现 tamγ_a（火印、烙印）这个单词，因此可似推测，至晚从那个时期起，已经开始使用这种方法对家畜进行管理。这作为一条史料，可以说很有价值。

(No.070) 文書番号 Y1:W119

サイズ：縦 26cm　横 21cm

01　　///? tekin üge minu auǰi-tur nigeṇ
　　…テキンの我が言葉、胴着に一枚の
　　…的斤言語俺的，裲裆里一面

02 dalun（arasun?）saŋǰin ǰaqa selte
肩の【部分に当てる】（革？）と布の縁取りと一緒に。
肩【之部分】的皮革和布匹的边饰一同。

03 buγdaγ-tur čečeg aya??i nigen bütüŋ-ün
姑姑帽に花、…一揃いの
姑姑冠上【用】 花…一整匹

04 bürčečeg（durdun）selte nigen NWP'CY
勿忘草の【模様のある】（絹の織物）と一緒に。一つの葉
勿忘草【花纹】的绢一同。一叶

05 -yiŋ aγ γadar selte nigen qoš čoγ
の【模様のある】白い表地と一緒に。一対の帽子飾り。
【花纹】的白色面料一同。一对帽饰

06 nigen γutusun eden-ŋi ker ber o{Y}sal
一足の靴。これらをいかにしても過失
一双靴子。此等怎生无过失

07 ülü bolγaŋ bütejü ögkü-yi či mede
なく作って与えることをおまえが知れ。
做与，你识者。

08 eŋde čau iŋu büt[ügej]ü ögesü
ここでその鈔を完全に準備して与えよう。
钞由此付与。

【注釈】

01 tekin: tekin の上に字画が見え、それが台頭されていることからすると、○○・テキンという名、あるいは名＋称号（tekin）を持つ、敬意を表すべき高位の人物であろう。tekin に関しては Clauson（1972: 483）を参照。

03 bütüŋ-ün: buγdaγ という語を消してその左隣に bütün と書いてある。bütün-ün の-ün は bütün に修正する前の buγdaγ につけた属格が、そのまま bütün に接続する属格として用いられたものであろう。

04 (durdun): durdun は『五体清文鑑』布帛部の durdung（漢語：縐紬）に対応するウイグル語 durdun であろう。

04 NWP'CY: nabči（葉）の書き損じであろうか。ここでは nabči の意味でとっておく。

06 eden-ŋi: eden-i の口語表記であろう。

07 bütejü: bütejü は büt(ü)gejü と他動詞になるべきところ。bütügejü は現代口語では butəədʒ と発音されるが、あるいは e 一文字で長母音-əə-を表しているのかも知れない。

08 čau: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。

01 tekin: 在 tekin 这一词的上边见有笔画，且以抬头的形式出现。因此可推测，这一形式可能为“～tekin”或者“人名＋称号（tekin）”的，用于某一可尊敬的、高位人物的称呼。关于 tekin 这一专名的解释，参见 Clauson（1972: 483）。

03 bütün-ün: 擦掉 buγdaγ 后，在其左侧写了 bütün。bütün-ün 中的-ün 是 bütün 修改之前的 buγdaγ 的属格，照原样将以-ün 作为 bütün 后接续的属格来使用。

04 (durdun): 可能是《五体清文鉴》布帛部中的与蒙古语 durdung（汉语：绉绸）对应的畏吾语 durdun。

04 NWP'CY: 可能为 nabči（叶）一词的破损形式，这里取 nabči 之意。

06 eden-ni: 可能是 eden-i 的口形式的记录。

07 büteǰü: büteǰü 应构成他动词 büt(ü)geǰü。bütügeǰü 在现代的口语中发音为 butəədʒ，或许 e 表示长元音-əə-。

08 čau: 参见 F61:W6 注释 12 süke čau。

【解説】

某テキンなる人物からの胴着、姑姑帽、帽子飾り、靴などの作成を命ずる文書。ただし「おまえ（či）」とあるだけで、誰に対して命令されたものかは明示されていない。文書の左端はきれいな直線となっており、左側に破損箇所はない可能性が高い。仮に、1 行目より左の部分に破損箇所があったとするならば、そこに日付や請負人の名が明示されていた可能性もあろう。

一方、依頼の代価としては、「その鈔（čau inu）」とだけあって金額が明示されていない。さらに、末尾に署名・花押・印などもみえない。以上から、依頼人または請負人による下書か覚書と理解すべきであろうか。この推測が正しければ、日付や請負人の名が明示されていないことも整合的に説明できる。

这是一件由某位“的斤”发出的、命人制做裲裆、姑姑冠、帽饰以及靴鞋等等物品的文书。

但是，我们只能看到其中记写着的“你（či）”这个单词，看不到[承接这些任务的]包工人个人的名字。这件文书的左端至今还保留着完整的（清晰的）直线，所以其左侧没有遭受到破损缺失的可能性很大。

如果假定这件文书从第一行起其左侧部分遭受到了破损缺失的话，那么在这个部位[曾经]记写过日期以及[承接这些任务的]包工者的姓名的可能性就存在着。

另一方面，关于委托制做的工钱（代价、价格）问题，我们只能看见“钞（čau inu）”这个词语，具体金额无法明确。更有甚者，在这件文书的末尾部分，理应存在的签名、划押、或者印章等等内容，我们也是看不到。

综合上述种种情况我们认为，或许这原来是一件由委托人或者包工者记写的草稿或者备忘录。如果这一推测没有错误的话，那么即使这件文书上没有日期以及包工者的姓名，从理论上讲其所含内容也互相并不矛盾。

(№071) 文書番号 F116:W2

サイズ：縦 16cm　横 19cm

01　///oǰu köbegetü-ber bur čilgütei
…得て、コベゲトによってボル・チルグテイ
…得…，用阔别怯禿…不里赤勒古台

02　///N barǰu ügüler_ün ene ele
…捕らえて述べるには、これこそ
…逮住…说有：唯此

03 ///L' degel-ün ǰaq_a türegen_e
…服の襟をトゥレゲネが
将…衣之领，秃热格捏

04 ///?? ????? ???? ????
…
…

05 ///bükü-i-ṯür kemen ///ügüleyü
…ある時にと…言う
…有时…么道说有

06 ///N kürsü (ba?) kemeǰü či ta
…至ろう、(我々は？)、と言い…
（我等？）至…么道…

07 /// küigüng bayatur köbegüd-teče
…クイグン・バートルは子供たちから
…国公霸秃鲁自家中儿郎每

【注釈】
01 köbegetü: 人名と解釈した。
01 bur čilgütei: 人名と解釈した。
03 türegen_e: 人名と解釈した。dörüge(n)（「鐙」）をこのように綴ったのかも知れない。
06 či ta: 不明。モンゴル語以外の言語の語彙を音写した可能性もある。

01 köbegetü: 解释为人名。
01 bur čilgütei: 解释为人名。
03 türegen_e: 解释为人名。也可能是 dörüge(n)（“镫”）。
06 či ta: 不明。可能音写了蒙古语以外言语词汇。

【解説】
2行目冒頭が破損しているので断言はできないが、1〜2行目に見える内容から、コベゲトがボル・チルグテイを捕らえた時に述べたことが2行目末以降に書かれているものだろうか。この推測が正しいならば、この文書は供述調書のようなものであろうかと思われる。

由于第2行的起始部分破损缺失，所以我们无法下断言，但根据其第1行至第2行里尚能看清楚的内容，我们认为从其第2行的末尾部分以下所记写着的内容，似乎是阔别怯秃(コベゲト)在捉捕到不里赤勒古台（ボル・チルグテイ）时叙说的事情。如果这种推测正确的话，那么这件文书就应该是一个记录着（审讯）供辞（供述）内容的案卷之类的东西了。

(No.072) 文書番号 MON06

01 /// ???-yi n̲ada ügüle///

…を私に述べ…
…这般与我说…

02 ///[k]öbegün ügüler_ün ///
…息子が述べるには…
…儿郎曰…

03 ///ede bügüde-yi M///
…これら全てを…
…将这等全体…

04 ///W γal-ṯu qoruqai ///
…蛍…
…萤火虫…

05 /// üsün-ṯür ?///
…毛に…
…毛里…

06 /// TWR gürü ügei XW///
…に石のない…
…里无石…

【注釈】

04 γal-ṯu qoruqai: γal-tu qoruqai は『華夷訳語』（甲種本）には、「螢　ᵖ哈里禿ᵖ豁羅孩」とある（栗林 2003: 19）。また同、乙種本には、「螢　哈里禿豁羅孩（γal-tu qoruqai）」とある（『北京圖書館古籍珍本叢刊』6: 13）。
06 gürü: 『元朝秘史』に古ᵗᵍ魯（傍訳：石）、枯ᵗᵍ魯（傍訳：石）とある。

04 γal-ṯu qoruqai: γal-tu qoruqai 在《华夷译语》（甲种本）中记为“萤　ᵖ哈里禿ᵖ豁罗孩”（栗林 2003: 19）。乙种本中也记为“萤　哈里禿豁罗孩（γal-tu qoruqai）”（《北京图书馆古籍珍本丛刊》6: 13）。
06 gürü: 《元朝秘史》中有古ᵗᵍ魯（傍译：石）、枯ᵗᵍ魯（傍译：石）。

【解説】

MON06 は原件が所在不明であるので、コピーに拠った。MON01 の解説を参照。

「…を私に述べ…」、「…息子が述べるには…」とあることからすると、F116:W2 で推測した、供述調書のようなものかもしれない。また「蛍」「毛に」「石のない」のように何かの譬えとして用いられているような表現が見えることから、物語あるいは仏典の可能性も考えられよう。いずれにしろ契約文書のようなものとは考えにくい。

MON06 的原件，下落不明。我们使用（依据）的是复印件（拷贝）。另请参照 MON01 的解说。

根据其中所记述着的“…这般与我说…”、“…儿朗曰…”等等内容，这应该是一件我们在 F116:W2 中已经推测过的、记录着（审讯）供辞（供述）内容的类似案卷的文书。

再根据其中使用着的“萤火虫”、“毛里”、“里无石”等等多少有些比喻意义的语词，它又有可能是故事（传奇）或者佛典。不管你怎么说，很难将这件文书认定为契约文书。

(No.073) 文書番号 F14:W15

サイズ：縦 19.2cm　横 11.6cm

01　/// sin-ün qabur
…（申？）【年】の春
…（申？）【年】春

02　///?
…
…

03　/// bičig ügeben
…自分の文書、ことばを
…将自己文字、言语

04　/// 中都
…中都
…中都

05　/// da(n?) č'üg t'uw
…（中都？）
…（中都？）

【注釈】

04 中都: 漢字で「中都」と記されている。大徳 11 年（1307）、即位後の武宗ハイシャンが旺兀察都の地に宮闕を建て中都とした。興和路（現在の河北省張北県）の治所の北に位置する。この中都の研究史については、刘晓（2004: 200-203）及び刘晓（2005: 165-166）にまとめられているので参照されたい。

05 č'üg t'uw: č'üg t'uw は意味不明。あるいは前行の中都をパクパ字で写そうとしたものか。文語の ng+n+V がハルハ口語では g+n+V になる例が知られている（čingnaqu→чагнах）が、ng+d+V が g+d+V と発音される事例は管見の限り発見できていない。なぜ č'üŋ ではなく č'üg と書かれたのかを説明できない。

04 中都: 在汉字中记写为“中都”。大德 11 年（1307），即位后的武宗海山建行宫于旺兀察都之地，称为中都，位于兴和路（现在的河北省张北县）治所之北。关于中都的研究史详见刘晓（2004: 200-203）及刘晓（2005: 165-166）。

05 č'üg t'uw: č'üg t'uw 不明其意。或许是将前行中的中都音写为八思巴字，文语中的 ng+n+V 在喀尔喀口语中变为 g+n+V（čingnaqu→чагнах），但限于管见，还没发现 ng+d+V 发音为 g+d+V 的事例，为何不写 č'üŋ 而写 č'üg，其理由无法说明。

【解説】

テキストに一貫した秩序が見られないことから、筆記の練習に用いられたものであろう。

原文内容没有前后相承的条理（次序），它最初可能是一个被当成书法练习本而使用的东西。

(No.074) 文書番号 F21:W28

01 tngči abaγ_a noyan-u geg[en]///
同知アバガ・ノヤンの（御前？）…
同知阿八哈官人之（貴処？）…

02 maγui öčüken daul[aš_a]///??///
卑小なダウラ［シャ］…
卑微之倒喇[沙]…

03 engke tegüs (amur) ???///
平安、完全な（安寧）…
太平、完全的（安康）…

04 ilemüi
遣わす。
遣

05 tungči abaγ_a-yin esen engke///
同知アバガの平安…
同知阿八哈之平安…

06 "Y???///
…
…

【注釈】

01,05 tngči,tungči: ともに、官名の同知（近世音 t'oŋ-ṭṣī）を音写したもの。後者の方がより精確に写している。同知は、官府の副官で、枢密院・宣政院・大司農司など中央の各種官府や地方行政府の路府州等に置かれた。ここで同知と呼ばれるアバガ・ノヤンは、エチナ路総管府の同知であろうか。路総管府において、同知は、ダルガ（達魯花赤）、総管に次ぐ地位にある。

02 daul[aš_a]: MON01 の注 21 daulaš_a を参照。

01,05 tngči,tungči: 俱为官名同知的音写，后者更为准确。同知是官府的副官，设在枢密院、宣政院、大司农司等中央各官府及地方行政机构的路、府、州等地。这里所称呼的阿八哈官人或许指亦集乃路总管府的同知。在路总管府中，同知的地位次于达鲁花赤及总管。

02 daul[aš_a]: 参见 MON01 注释 21 daulaš_a。

【解説】

F21:W28 は原件が所在不明であるので、コピーに拠った。ダウラシャから同知アバガ・ノヤンに宛てて書かれた文書の断片であろう。5 行目の「同知アバガの平安…(tungči abaγ_a-yin esen engke///)」というアバガの平安を祈念する内容は、書状の挨拶、起こし言葉の部分に相当するものであろう。3 行目「平安、完全な（安寧）（engke tegüs (amur)）」の文句については、5 行目と異なり、擡頭が施されていない。前行末尾が破損しているため断定が難しいが、あるいは差出人側の平安を報告している部分であろうか。以上を踏まえると、6 行目以降の欠損部分に書状の本題が書かれていたもの

と考えられる。4行目に「遣わす（ilemüi）」とあることから、ダウラシャから同知アバガ・ノヤンに宛てて使者を派遣して何らかの用件を伝えた書状ではないかと推測される。

因不明 F21:W28 的原件所在之处，所以根据了复印件。

这是一件从倒喇沙（ダウラシャ）发给同知阿八哈官人（アバガ・ノヤン）的文书的断片。

在其第 5 行中记写着的“同知阿八哈的平安…（tungči abaγ-a-yin esen engke///）”这种祈祷阿八哈平安的内容，大致可以看成是书信的寒喧问候、开头用语。

关于其第 3 行当中的“太平、完全的（安康）（engke tegüs (amur)）”这段字句，与第 5 行不同，没有进行抬头。因为前行末尾破损缺失，故而难以断定，或许这段内容是报告发信人平安无事的？

综合以上各种情况我们认为，本件文书第 6 行以下的破损缺失部分，曾经记写着[这封]书信的正题（正文）。

在其第 4 行中，还记有“遣（ilemüi）”这个词语。据此我们推测，这也许是一封由倒喇沙遣使者、差往阿八哈官人的、传达某一事情的信件。

(No.075) 文書番号 F21:W27

サイズ：縦 8.4cm　横 12cm

01　///???
…
…

02　/// γaǰar-un qolača ///
…地の遠くから…
…由遥远之地…

03　///N-T' sögüḏčü ///
…回跪いて…
…跪拜…次…

04　/// amuγulang sayin ///
…安寧…
…安康…

05　///?///
…
…

【注釈】

03 -T'：回数を表す-ta/-te と解釈した。

03 -T'：解释为表示次数的-ta/-te。

【解説】
遠隔の地から高貴な者に敬意を示して安寧を祈願して送られた文書の一部か。文書番号からF21:W28と同一地点から出土したと思われ、また何者かの安寧を願う内容が共通して見られることから、同種の文書であることが推測される。

这应该是一件从遥远的地方发来的、向尊贵的人物表示敬意、祈祷安宁的文书。从它的文书编号看，它应该与 F21:W28 从同一地点出土，而且[这两件文书中的]祝福某位人物安宁无事的内容也相同无误，据此我们推测[它们是属于]同一种类的文书。

(No.076) 文書番号 84H·F116:W212/1384

サイズ：縦 11.5cm　横 12.5cm

01　'WD'''///
…
…

02　jirun öčüke[d]///
六十の小さい…
六十个小的

03　qočurb[a]///
残った…
缺了…

04　ügegü///
無い…
无…

05　TWY?///
…
…

【解説】
破損がひどく、見えている語から内容を推測することは困難である。

因为破损缺失特别严重，所以仅从能够看见的词语来推测其内容，非常困难。

(No.077) 文書番号 F211:W2

サイズ：縦 21cm　横 8cm

01　///?///N///L?N segülen

…収めて
…收…

02 ///[d]arasun nigen qonin-u miq_a-i ausi
…酒、一頭の羊の肉をアオシ
…酒、一只羊之肉斡失

03 ///??? abču yorčibai ba basa
…持って行った。われわれはまた
…携带去了。我等又

04 /// qumaqai-ṯur ＼yorčiba／ tabun sūke abuγ_a
…砂地に行った。五錠を取った。
…沙地里去了。得了五锭钞了。

05 /// ??YCW iregsen-ṯür γurban (šultus_a?)
…来たときに三つの…
…来时三个…

【注釈】

01 segülen: S'KWL"N に見えるが segülen に解した。F61:W9 の注 19 seülkū を参照。
02 -i: -i と解釈した綴りは下の語の語頭である可能性もあろう。
04 süke: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。
04 yorčiba: yorčiba は 4 行目の右に書かれている。挿入であると考えられる。
04 abuγ_a: F61:W9 の注 25 abuγ_a を参照。

01 segülen: 被见为 S'KWL"N，但解释为 segülen。参见 F61:W9 注释 19 seülkū 。
04 süke: 参见 F61:W6 的注释 12 süke čau。
04 yorčiba: 将 yorčiba 写在第 4 行的右边。认为该字是插入的文字。
04 abuγ_a: 参见 F61:W9 注释 25 abuγ_a。

【解説】

「収めて」、「…持って行った」、「五錠を取った」という記述は、金銭或いは何らかの物品の授受をうかがわせる。また「…持って行った」、「われわれはまた…砂地に行った」、「…来たときに」という記述から、各地を移動していたことが考えられる。以上を総合すると、本文書は各地を移動しながら行なった商売あるいは物の授受に関する記録書ないし報告書の類であろうか。「…酒、一頭の羊の肉（///[d]arasun nigen qonin-u miq_a)」という表現は、分例文書に頻出する「酒、丸ゆで用の羊（unda(n) sigüsün)」と似てはいるが、他に分例文書との類似点は見られない。各地を移動する際の食料としたものか、或いは運んだ物品の一つかもしれない。

根据其中的“收”、“…携带去了”、“得了五锭钞了”等的记述，我们可以窥视到其内容中有金钱或者某种物品的授受关系。

再根据其中的“…携带去了”、“我等又…沙地里去了”、“…来时”等的记述，当时他们似乎是在各地不停地往来移动着。

综合以上情况，本件文书更可能是关于在各地移动经商或者某种物品往来授受的记录册、报告书。

其中还有“…酒、一只羊之肉（///[d]arasun nigen qonin-u miq-a）”的记述，这与“分例”文书中频繁出现的“酒、汤羊（煮全羊用的羊肉）（unda(n) sigüsün）”很相似，但除此以外本件文书与“分例”文书再没有类似的地方。可能是在各地往来移动时期的食品，也可能是他们所转运的物品中的一种。

(№078,079) 文書番号 F19:W72 a ,b

サイズ　a：縦 16cm　横 7.7cm　b：縦 7cm　横 9cm

F19:W72a

01　///WS///N arban sǐǰ[ir?] ///
…10（两？）…
…十（两？）…

02　/// ḏai oḏči baulaǰu ///
…ダイ・オトチが保証して…
歹斡脱赤做保…

03　///WR///
…
…

F19:W72b

01　/// TWR isi T///
…に、イシ…
…里，亦希…

02　///?W PWL///
…
…

03　/// čau ?///
…鈔…
…钞…

04　///???N (čaγun?) ///
…
…

【注釈】

a01 sǐǰ[ir?]: sǐǰir については、F144:W3 の注 08 [s]ǐǰir を参照。

a02 ḏai oḏči: oḏči については『華夷訳語』（甲種本）に「太醫　斡脱赤」とあり（栗林 2003: 35）、同、乙種本には同じく「太醫　斡脱赤」とあって、モンゴル語では ötüči と記されている（『北京圖

書館古籍珍本叢刊』6: 29)。『汉语大词典』2によると、「太醫」は「古代宮廷中の医薬を管理する官員」であり、また「宋元以後は一般の医者に対する敬称として用いるようになった」という（汉语大词典编辑委员会、汉语大词典编纂处 1988: 1475)。ここに ḏai oḏči とある ḏai は『華夷訳語』の「太醫」の「太」と関係があるかも知れない。あるいは漢語の「大」の可能性もあろう。
b03 čau: F61:W6 の注 12 süke čau を参照。

a01 sīǰ[ir?]: 关于 sīǰir，参见 F144:W3 注释 08 [s]ǰir。
a02 ḏai oḏči: 对于 oḏči，《华夷译语》（甲种本）中记为“太医　斡脱赤”（栗林 2003: 35），在乙种本也同样记为“太医 斡脱赤”，蒙古语记为 ötüči（《北京图书馆古籍珍本丛刊》6: 29)。据《汉语大词典》2，“太医”是“古代宫廷中掌管医药的官员”、“宋元以后用为对一般医生的敬称”（汉语大词典编辑委员会、汉语大词典编纂处 1988: 1475)。文书中有 ḏai oḏči 词，其中的 ḏai 或许与《华夷译语》中的《太医》之“太”有关系，也有可能是汉语“大”。
b03 čau: 参见 F61:W6 注释 12süke čau。

【解説】
F19:W72 は二つの断簡からなる。それぞれが別々の一枚の白い紙に貼り付けられており、その白い紙が綴り合わされている。
「10（両？）…（arban sīǰ[ir?] ///）」や「鈔（čau）」といった金銭に関する記述があること、「ダイ・オトチが保証して（ḏai oḏči baulaǰu）」という表現が出てくることからすると、金銭が絡んだ何らかの保証付きの契約に関する文書の断片であろうか。

F19:W72 由两枚断简构成。这两枚断简分别被粘贴在不同的白纸上，而这两张白纸又被拼缀在一起。
其中有“十（两？）…（arban sīǰ[ir?] ///）”、以及“钞（čau）”等的关于金钱的记述，还有“歹斡脱赤（ダイ・オトチ）做保…（ḏai oḏči baulaǰu）”这种词语。根据这些情况，本件文书似乎是一件纠缠于金钱、又有某些担保的、属于契约文书的一个断片。

(No.080) 文書番号 84H·F116:W507/1679

サイズ：縦 11.8cm　横 9cm

01　čūbei mani X'???///??///
チュベイ、我らが…
出伯，我等…

02　sügčü-ṯür///
粛州に…
肃州里…

03　abuγai PY///
おじ…
叔父…

04　[n]igen sar[a]///
一月…

一个月…

【注釈】

01 čübei: チュベイの名が台頭されていること、また「粛州」という地名が現れていることから、このチュベイはチャガタイの孫アルグの次子チュベイと考えてよかろう。ドアが当主となる中央アジアのチャガタイ家と袂を分かってフビライの下に投じ、豳王号を与えられ、河西西半を根拠とし、以後代々襲封し元末まで続き、ハミ王家につながる。チュベイ王家の歴史と系譜については、杉山正明（1982；1983）に詳細な考証がある。

02 sügčü: 地名「粛州」（近世音 siu-tʃiəu, 中古音 siuk-tʃiəu）を写したもの。当時は粛州路。現在の酒泉。

01 čübei: 察合台孙阿鲁忽之次子。与笃哇当家的中亚察合台家绝交后投奔忽必烈，被授予豳王称号，以河西西半为根据地，直至元末，代代袭封，与哈密王国连接。对出伯家族的历史和家谱，杉山正明（1982；1983）有详细的考证。

02 sügčü: 地名“肃州” 的音写。当时是肃州路，即现在的酒泉。

【解説】

チュベイの名が現れる注目すべき文書である。チュベイの名の他に、「粛州」という地名、「一月」という日付が現れる。断片であり、読み取れる語から内容を推測することは困難であるが、チュベイやその根拠地であった粛州に関する文書、あるいは少なくとも一部にチュベイ、粛州に関する内容を含む文書であろう。

因为这上面出现了出伯（チュベイ）这个名字，所以是一件值得注意的文书。

除了出伯这个名字以外，这件文书上还记有“肃州”这个地名以及“一个月”这个日期。

由于这是一枚断片，想根据[目前]能够读懂的词语来推测其[全部]内容，是非常困难的。但这[无疑]是一件有关出伯及其根据地肃州的文书，至少是一件包含着关于出伯、肃州之内容的文书。

(№081) 文書番号 F197:W30

サイズ：縦 16.5cm　横 8.7cm

01　Jang ying samǰing ?///
　　ジャンイン参政…
　　张英参政…

02　　õlǰeitemür qola ese ///
　　オルジェイテムルは遠く…ない
　　完者帖木儿不…远…

03　　asaqču ileged TW(T?)///
　　尋ねて遣わして…
　　遣问…

04　　D'N-('C'?) ///??/// ???///

…（から？）…
…（由？）…

【注釈】

01 samǰing: 官名「参政」（近世音 sam-tʃiəŋ）を写したもの。参政は、中書省・尚書省・行中書省に置かれた宰執職、参知政事。samǰing は、1362 年「忻都王碑文」の l. 2, 24, 39 に用例がある（Cleaves 1949: 62, 64, 66, 95, n.9; Ligeti 1972a: 63, 68, 71）

01 samǰing: 官名「参政」的音写。参政是设在中书省、尚书省、行中书省宰执职，即参知政事。samǰing、在 1362 年《忻都王碑文》里有 l. 2, 24, 39 等实例（Cleaves 1949: 62, 64, 66, 95, n.9; Ligeti 1972a: 63, 68, 71）

【解説】

紙の上部、左側がほぼ直線であること、1 行目の左側にスペースがあるが、そこに文字が見られないことから、文書の書き出しの部分とみてよかろう。冒頭にジャンイン参政の名があることから、彼が文書の発信者、あるいは受取人かのいずれかであることは間違いなかろう。オルジェイテムルについては、文書下部が破損しているため、彼が発信者、受取人いずれかであるかを含め、本文書の送達にどのように関わっていたかは判然としない。「尋ねて遣わして」とあることから、本文書が何事かを尋ねるために使者を遣わしたことに関する内容であったことが推測される。

纸的上部、左侧，基本上呈直线状态；其第 1 行的左侧也是一片空白，没有文字。根据这些情况，此处似乎可以看做是本件文书行文写字的开头部分。

因为在这件文书的起始部分，写有张英（ジャンイン）参政的名字，所以此人无疑应该是本件文书的发出者或者接收者。

关于其中的完者帖木儿（オルジェイテムル），因为本件文书的下半部分有破损缺失现象，所以他是发信人还是接收者，其跟本文书的递送接收之间的关系，无法进行判断。

根据其中记述着“遣问”的词语，从此可以推测本件文书关系到[某人]为打听[询访]某件事情而派遣使者的内容。

(No.082) 文書番号 F41:W10

サイズ：縦 22cm　横 8.5cm

01　///N
…
…

02　///N ///??S??Y
…
…

03　kemen KWY///Y bičig yabuγulba
と、…文書を送った。
么道，遣…书。

04 ene nišan [bi] sambu-yin ※
このニシャンは、[私、] サムブの ※
此手印我三卜的※

【解説】
4 行目の後に、文字を書くに十分な余白があるにもかかわらず字が書かれていないことから、4 行目が本文書の最終行であるか、この余白部分にさらに文書（未発見）が継ぎ足されていたことが推測される。もし4行目が最終行であったとすると、ニシャンを記しているのはサムブのみであり、継ぎ足しがあったとすると、ニシャンを記しているのはサムブのみではない可能性がある。ただし、どのような内容の文書であるかはこの部分だけでは明らかにはできない。

尽管从其第 4 行以后[下]还[剩、留]有充分的、可以书写文字的空白，但是这里却没有写字。据此我们推测，第 4 行是本件文书的最后一行，或者为该空白处曾有过接续的[未发现的]文书。
如果第 4 行确实就是[本件文书的]最后一行，那么把画押〔ニシャン（nišan）〕记写下来的就只有三卜（サムブ）了。[但是]如果有接续添补的内容的话，那么把画押〔ニシャン（nišan）〕人记写下来的，可能就不是仅有三卜了。
然而，仅仅依靠这些记述，我们无法搞清楚本件文书的具体内容。

(No.083) 文書番号 F111:W1

サイズ：縦 12.5cm　横 6.8cm

01 ulaγan moγai [ǰ]il ///
赤い蛇年【丁巳年】…
红蛇儿年【丁巳年】…

02 uqaǰu atuγai kemen///
理解しているように、と…
識有者！么道…

03 töregsen(ü/i)///W///
生まれた（ものの／ものを）…
生了（的）…

【注釈】
01 ulaγan moγai [ǰ]il: モンゴル語の古典的文献における紀年表記は、〈動物（十二支）〉+ǰil を基本として、これにさらにいくつかの要素が付け加わった形式を持っている。『元朝秘史』、『アルタン・ハーン伝』、『エルデニ・イン・トプチ』を中心に形式を整理して列挙すると以下の通りである。

五行・十干部		十二支部	
		taulai	ǰil
		動物	年
	qaraγčin	γaqai	ǰil
	色彩+性語尾	動物	年
	γal (qutuγ-tu)	noqai	ǰil
	元素	動物	年
	uu	bars	ǰil
	十干漢字音	動物	年
er_e	usun	bečin	ǰil
性別	元素	動物	年
γal (qutuγ-tu)	em_e	taulai	ǰil
元素	性別	動物	年
em_e	čaγan	qonin	ǰil
性別	色彩（+性語尾）	動物	年

このうち、五行と十二支はそれぞれ、次の表のように陰（女）と陽（男）の属性を帯び、陰性の五行は陰性の十二支と、陽性の五行は陽性の十二支と組み合わさる。

ulaγan moγai [ǰ]il の moγai は陰性なので、ulaγan は陰性の ulaγan、別の書き方をすれば ulaγčin（＝丁）か em_e γal であることがわかる。

五行				十干
元素	色彩	性別（＝陰陽） 元素	色彩（＋女性語尾 -γčin/-gčin）	漢字音写
modu（木）	köke（青）	er_e modu（男木）	köke（青〔男〕）	ga（甲）
		em_e modu（女木）	kökegčin（青女）	yi（乙）
γal（火）	ulaγan（赤）	er_e γal（男火）	ulaγan（赤〔男〕）	bing（丙）
		em_e γal（女火）	ulaγčin（赤女）	ding（丁）
sirui（土）	sir_a（黄）	er_e sirui（男土）	sir_a（黄〔男〕）	uu（戊）
		em_e sirui（女土）	siraγčin（黄女）	gi（己）
temür（鉄）	čaγan（白）	er_e temür（男鉄）	čaγan（白〔男〕）	ging（庚）
		em_e temür（女鉄）	čaγaγčin（白女）	sin（辛）
usu（水）	qar_a（黒）	er_e usu（男水）	qar_a（黒〔男〕）	sim（壬）
		em_e usu（女水）	qaraγčin（黒女）	güi（癸）

十二支	
陽（男）性	陰（女）性
quluγan_a（子）	üker（丑）
bars（寅）	taulai（卯）
luu（辰）	moγai（巳）
mori（午）	qoni（未）
beči（申）	takiy_a（酉）
noqai（戌）	γaqai（亥）

01 ulaγan moγai ʃil: 在古典蒙古语文献中，纪年的基本表示方法是：<动物（十二地支）> + ǰil。然而通常的［民间的］表示方法还要在此基础上再添加几种其他成分。如果我们以《元朝秘史》，《阿拉坛汗传》，《蒙古源流》为基准，并且将其进行整理列举，就可以得出下列表格：

五行・十干部		十二支部	
		（taulai）兔	ǰil
		动物	年
	qaraγčin	（γaqai）猪	ǰil
	色彩+性语尾	动物	年
	γal (qutuγ-tu)	（noqai）狗	ǰil
	元素	动物	年
	uu	（bars）虎	ǰil
	十干汉字音	动物	年
er_e	usun	（bečin）猴	ǰil
性别	元素	动物	年
γal (qutuγ-tu)	em_e	（taulai）兔	ǰil
元素	性别	动物	年
em_e	čayan	（qonin）羊	ǰil
性别	色彩（+性语尾）	动物	年

在这里，五行和十二地支都分别具有阴（女）和阳（男）的属性。正如下面的表格所示，阴性的五行［只能］与阴性的十二地支搭配，阳性的五行［也只能］与阳性的十二地支搭配。

因为“ulaγan moγai ʃil”中的“moγai”属于阴性，所以“ulaγan”就［只能］用阴性的“ulaγan”，如果使用其它的记写方法，就变成“ulaγčin”（=丁）或者是“em_e γal”了。

五　行				十干
元素	色彩	性別（=阴阳）元素	色彩（＋女性语尾 -γčin/-gčin）	汉字音写
modu（木）	köke（青）	er_e modu（男木）	köke（青［男］）	ga（甲）
		em_e modu（女木）	kökegčin（青女）	yi（乙）
γal（火）	ulaγan（赤）	er_e γal（男火）	ulaγan（赤［男］）	bing（丙）
		em_e γal（女火）	ulaγčin（赤女）	ding（丁）
sirui（土）	sir_a（黄）	er_e sirui（男土）	sir_a（黄［男］）	uu（戊）
		em_e sirui（女土）	siraγčin（黄女）	gi（己）
temrür（铁）	čaγan（白）	er_e temür（男铁）	čaγan（白［男］）	ging（庚）
		em_e temür（女铁）	čaγaγčin（白女）	sin（辛）
usu（水）	qar_a（黑）	er_e usu（男水）	qar_a（黑［男］）	sim（壬）
		em_e usu（女水）	qaraγčin（黑女）	güi（癸）

十　二　支	
阳（男）性	阴（女）性
quluγan_a（子）	üker（丑）
bars（寅）	taulai（卯）
luu（辰）	moγai（巳）
mori（午）	qoni（未）
beči（申）	takiy_a（酉）
noqai（戌）	γaqai（亥）

【解説】

モンゴル語文献に見えるいくつかの紀年形式のうち、本文書の ulaγan moγai [j]il のような、〈色彩〉＋〈十二支〉＋jil で構成されるものは、管見の及んだかぎりでは、13～14 世紀のモンゴル文語資料においては本文書でのみ確認できる。この点で注目すべき文書である。

从现有蒙古语文献中能够看到的几种纪年形式，比如像本件文书里所采用的“ulaγan moγai [j]il”这样的：“色彩”＋“十二地支”＋“jil”这种纪年方法的构成形式，据我们所知，在十三至十四世纪的蒙古文文献资料中，只有该文书里才能得以确认。在这一点上，该文书是一件值得注意的文书。

(No.084) 文書番号 F137:W1

サイズ：縦 28cm　横 9cm

01　'Y(R/C)'KD?///KYL inu ///? metü ""'W?///?WN 'Y?///
…ように…

…像…

02 čaḍqulang (kenüken/gegegen?) čaγan güi qas meṯü ked///
満ち足りた（誰かのものである／明らかな？）白く美しい玉のように（いくつ／誰）…
像饱满（某人的 / 明亮？）白玉，（几个 / 谁）…

03 ///?W??D///???///??///
…
…

【注釈】
02 güi qas: güi は漢字「珪」（近世音 kuəi）を写したものと推定した。güi qas は、「珪玉」、すなわち、美しい玉を指すという意味で解釈した。

02 güi qas: 我们推断，“02 güi qas” 中的 “güi”，应该是汉字 “珪”（近代读音为：kuəi）的音写。我们就认为，“güi qas” 是 “珪玉” 的意思。

【解説】
2 行目の「満ち足りた（誰かのものである／明らかな？）白く美しい玉のように（いくつ／誰）…」という記述から考えると、契約文書や行政文書の類ではなかろう。何らかの物語、或いは仏典の一部であろうか。

根据其第 2 行中的 “像饱满（某人的/明亮？）白玉、（几个/谁）…” 等的记述，本件文书似乎不应该归入到契约文书类或者行政文书类里。它或许是某个故事（传奇）或者佛典的一部分。

(No.085) 文書番号 Y1:W101

サイズ：縦 26.5cm　横 6cm

01 ///luγan ○ medeged
…知って
…虽知晓…

02 bögetele ene arban nigen sara-yin nigen
いながら、この十一月の一日
到本十一月初一日

03 sinede kürtele keyid-tür-iyen anu
←初旬の【初旬の一日】　までその自分の寺で、
在那自己的寺庙

【解説】
見えている部分は、或る日から某年十一月一日まで、ある寺で何事かが行なわれたことを示しているものと思われるが、その他の内容は不明である。

目前我们能够读懂的那些文字所表现出来的意思大概是，从某天开始到某年的十一月一日，在某所寺院举行了某件事情，而其他的内容却不清楚。

4-2. パクパ文字文書

(No.086) 文書番号 Y1:W2

サイズ：縦 13.6cm　横 22cm

01　ki k'i gi ŋi či č'i ǰi (ñ)i///[t]i///(t')i///[di] [ni] [pi] [p'i] [bi]

02　mi ci c'i///ji wi ži zi ·i yi ri///[li] [ši] [si] [hi] [ai]

03　ii ui ėi oi qi γi fi ci ei ///

【解説】

パクパ文字を筆記練習したもの、或いはパクパ文字を筆記する際に参考にしたものか。各字母に韻母 i が附された綴りが記されている。段毎に左から右に『書史会要』巻 7・大元・帝師巴思八 (22a) の配列と合致している。したがって、本文書は左から右への横書きとして行番号を振ってある。1 行目の文字の多くには漢字が附されているが、これは筆記者の注記のようなものか。

这或许是一张八思巴字练习写字纸，或许是一枚用八思巴字做记录时的参考资料。每一个字母都附缀记写着韵母 i。每一段落从左到右都与《书史会要》卷 7・大元・帝师巴思八（22a）的排列[顺序]互相吻合。所以本件文书是从左往右横向书写、横向编排行码（行的号码）的。

在其第 1 行的很多文字的旁边，都附记着汉字，这也许是本枚练习写字纸（记录参考资料）的主人[当时]所作的注记。

参考文献

巴图吉日嘎拉、杨海英 2005『阿爾寨石窟──成吉思汗的佛教紀念堂兴衰史』東京：風響社。

── 2006『阿尔寨石窟』鄂尔多斯：内蒙古自治区鄂尔多斯市鄂托克旗文物保护管理所、阿尔寨石窟保护研究所。

北京圖書館古籍出版編輯組『北京圖書館古籍珍本叢刊』6、北京：書目文献出版社。

Бира, Ш. 1990 (orusil bičigsen) *Эртний хаадын үндэслэсэн төр ёсны зохиолыг товчлон хураасан алтан товч хэмээх оршбой*, Ulaγanbaγatur: Ulus-un keblel-ün γaǰar.

Cerensodnom, D. and M. Taube 1993 *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung.* (Berliner Turfantexte, XVI), Berlin: Akademie Verlag.

陈炳应 1983「黑城新出土的一批元代文书」『考古与文物』1983(1): 55-62 + pls.10-12.

チョクト（朝克圖）2003「チンギス・カンの大ジャサの内容に関する考察」『史滴』25:130-115.

──2005「『モンゴル秘史』におけるジャサグについて」『日本モンゴル学会紀要』35: 1-16.

── 2006「モンゴル帝国期におけるジャルリグについて──『モンゴル秘史』に見えるジャルリグとジャサグの関係を中心に」『内陸アジア史研究』21: 1-16.

Clauson, G. 1972 *An Etymological Dictionary of pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford : Clarendon Press.

Cleaves, F. W. 1949 "The Sino-Mongolian Inscription of 1362 in Memory of Prince Hindu", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 12: 1-133 + 27pls.

── 1950 "The Sino-Mongolian Inscription of 1335 in Memory of Chang Ying-Jui", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 13: 1-131 + 35pls.

── 1951 "The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of J̌igüntei", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 14: 1-104 + 32pls.

── 1952 "The Sino-Mongolian Inscription of 1346", *Harvard Journal of Asiatic Studies*,15: 1-123.

── 1954 "The Bodistw-a Čari-a Awatar-un Tayilbur of 1312 by Čosgi Odsir", *Harvard Journal of Asiatic Studies*,17: 1-129+ 24pls.

── 1955 "An Early Mongolian Loan Contract from Qara Qoto" *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 18: 1-49 + 4pls.

── 1959 "An Early Mongolian Version of the Alexander Romance", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 22: 1-99 + 8pls.

── 1965 "The *Lingǰi* of Aruγ of 1340", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 25: 31-79+1pl.

『大元海運記』：『史料四編　大元馬政記　大元倉庫記　大元官制雑記　大元海運記』臺北：廣文書局、1972（排印本）

Doerfer, G. 1963-75 *Turkische und mongolische Elemente im Neupersischen : unter besonderer Berucksichtigung alterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit*, 4vols., Wiesbaden: F. Steiner.

杜・道尔吉编 1998『鄂汉词典』海拉尔：内蒙古文化出版社。

Franke, H. 1964 *Mittelmongolische Kalenderfragmente aus Turfan,* München: Bayerische Akademie der Wissenschaften, Philosophis-Historische Klasse.

── 1965 "A 14th Century Mongolian Letter Fragment", *Asia Major* XI: 120-127.

── 1968 "Ein weiteres mongolisches Reisebegleitscreiben aus Čaγatai (14. Jh.)", *Zentralasiatische Studien* 2: 7-14.

──1970 "Zwei mongolischer Textefragmente aus Zentralasien", *Mongolian Studies*, Amsterdam: Gruner: 137-147.

古松崇志 2001「元代カラホト文書解読（1）」『オアシス地域研究会報』1(1): 37-47.

Gabain, A. 1974 *Alttürkische Grammatik*, 3.Auflage,Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Haenisch, E. 1955 *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang(alias*

Sanang Secen), Berlin: Akademie-Verlag.

—— 1959 *Mongolica der Berliner Turfan-Sammlung. II: Mongolische texte der Berliner Turfan-Sammlung in Faksimile.* (Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst ; Jahrg. 1959, Nr. 1)

汉语大词典编辑委员会、汉语大词典编纂处 1988『汉语大词典』2 上海：汉语大词典出版社。

『華夷訳語』（乙種本）：『北京圖書館古籍珍本叢刊』6（影印明抄本）

呼格吉勒图、萨如拉 2004『八思巴字蒙古语文献汇编』呼和浩特：内蒙古教育出版社。

飯山知保、井黒忍、舩田善之 2002「陝西・山西訪碑行報告（附：陝西：山西訪碑行現存確認金元碑目録）」『史滴』24: 151-184.

井上充幸 2005「明代エチナ史素描——古地図と文献資料によるアプローチの試み——」『オアシス地域研究会報』5(1): 98-135.

Ё. Жанчив 2005 *Сонгодог монгол бичгийн өмнөх үеийн дурсгалууд*, Улаанбаатар.

金炳喆编 1979『哈汉词典』乌鲁木齐：新疆人民出版社。

卡拉 2006［匈］G・卡拉著、敖特根译『东方学研究所圣彼得堡分所收藏哈喇浩特及西域出土中世纪蒙古文文献研究』北京：民族出版社。

Кара, Д. 1972 *Книги монгольских кочевников*, Москва : Издательство "Наука", Главная редакция восточной литературы.

Kara, G. 1979 "Wietere mittelmongolische Bruchstücke aus der Berliner Turfansammlung", *Altorientalische Forschungen*, 6: 81-203

—— 2003 "Mediaeval Mongol Documents from Khara Khoto and East Turkestan in the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies", *Manuscripta Orientalia*, 9-2, 2003: 4-40.

片山共夫 1982「元朝の昔宝赤について——怯薛の二重構造を中心として——」『九州大学東洋史論集』10: 59-75.

岸本美緒 2000「「老爺」と「相公」——呼称から見た地方社会の階層感覚——」山本英史編『伝統中国の地域像』東京：慶應大学出版会: 51-84.

Козлов П.К. 1923 *Монголия и Амдо и мертвый город Хара-хото*, Москва-Петроград : Государственное издательство.

Кычанов, Е. И. 1989 *Измененный и законово утвержденный кодекс девиза царствования небесное процветание (1149-1169)*. Книга 4, Москва : Издательство "Наука", Главная редакция восточной литературы.

栗林均 2003『『華夷訳語』（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

栗林均、确精扎布 2001『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

李逸友 1987「黑城文书所见的元代纳憐道站赤」『文物』1987(7): 36-40.

——1991『黑城出土文书（汉文文书卷）』北京：科学出版社。

李珍華等 1993『漢字古今音表』北京：中華書局。

Ligeti, L. 1972a *Monuments préclassiques 1: XIIIe et XIVe siècles.* (Monumenta linguae Mongolicae collecta ; 2), Budapest : Akadémiai Kiadó.

—— 1972b *Monuments en écriture 'phags-pa. Pièces de chancellerie en transcription chinoise.* (Monumenta linguae Mongolicae collecta ; 3), Budapest : Akadémiai Kiadó.

—— 1972c *Monuments préclassiques. 1. XIIIe et XIVe siècles.* (Indices verborum linguae Mongolicae monumentis traditorum ; 1-2), Budapest : Akadémiai Kiadó.

—— 1973 *Monuments en écriture 'phags-pa ; Pièces de chancellerie en transcription chinoise.* (Indices verborum linguae Mongolicae monumentis traditorum ; 3), Budapest : Akadémiai Kiadó.

林旅芝 1975『西夏史』香港：大同印務。
刘晓 2004「元代都城市研究概述——以上都、大都、中都为中心」中村圭尔、辛德勇编『中日古代城市研究』北京：中国社会科学出版社：184-203.
——2005『元史研究』福州：福建人民出版社。
罗常培、蔡美彪 2004『八思巴字与元代汉语：增订本』北京：中国社会科学出版社。
前田直典 1944「元代の貨幣単位」『社会経済史学』14(4)；前田直典 1973: 19-39.
——1973『元朝史の研究』東京：東京大学出版会。
松井太 1997「カラホト出土蒙漢合璧税糧納入簿断簡」『待兼山論叢 史学篇』31: 25-49.
—— 1998「モンゴル時代ウイグリスタン税役制度とその淵源——ウイグル文供出命令文書にみえるKäzikの解釈を通じて——」『東洋学報』79(4): 026-055.
——2002「モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と徴税システム」松田孝一編 2002『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基盤的研究』平成12～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書（研究課題番号：12410096）：87-127.
—— 2004「モンゴル時代の度量衡——東トルキスタン出土文献からの再検討——」『東方学』107: 166-153.
松川節 1995「D. Cerensodnom & M. Taube 著, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung.*」『東洋史研究』54(1): 105-122.
『蒙古訳語』（『至元訳語』）（『事林広記』所収）
宮紀子 1998「『孝経直解』の出版とその時代」『東方学』95；『中国文学報』56；宮紀子 2006: 23-78.
——2007『モンゴル時代の出版文化』名古屋：名古屋大学出版会。
三宅俊彦 2005『中国の埋められた銭貨』東京：同成社。
森安孝夫 2001「ウイグル文字文化からモンゴル文字文化へ」（発表要旨）『日本モンゴル学会紀要』31: 175-176.
Mostaert, A., and F. W. Cleaves 1952 "Trois document mongols des Archives Secrétes Vaticanes", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 15: 420-506.
—— 1962 *Les lettres de 1289 et 1305 des ilkhan Aryun et Öljeitü à Philippe le Bel*, Cambridge : Harvard University Press.
Munkuyev, N.Ts. 1970 "Two Mongolian Printed Fragments from Khara-Khoto", *Mongolian Studies*, Amsterdam: Gruner: 341-357.
村上正二 1940「元朝における投下の意義」『蒙古学報』1；村上正二 1993: 1-41.
——1993『モンゴル帝国史研究』東京：風間書房。
村上正二訳注 1970『モンゴル秘史』1 東京：平凡社。
中村淳、松川節 1993「新発現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8: 1-92+8pls.
仁井田陞 1960『中国法制史研究 土地法・取引法』東京：東京大学出版会。
沖田道成 1997「元朝鷹狩り史料一考」『東洋文化学科年報』12: 122-128.
——1998「元朝鷹狩り史料一考（二）」『アジア文化学科年報』1: 155-168.
小野浩 1993「「とこしえの天の力のもとに」——モンゴル時代発令文の冒頭定型句をめぐって——」『京都橘女子大学研究紀要』20: 107-129.
小野浩 1997「とこしえなる天の力のもとに」『岩波講座世界歴史11 中央ユーラシアの統合』東京：岩波書店: 203-226.
愛宕松男訳注 1971『東方見聞録』2 東京：平凡社。
彭金章、王建军、敦煌研究院编 2000-2004『敦煌莫高窟北区石窟』1-3、北京：文物出版社。
Petech, L. 1990 *Central Tibet and the Mongols : the Yuan-Sa-skya period of Tibetan history*, Roma: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Поппе, Н.Н. 1938 *Монгольский словарь Мукаддимат ал адаб.* Часть I-II, III. Труды Института востоковедения XIV, Москва-Ленинград : Академия наук СССР.

—— 1941 *Квадратная письменность*, Москва : Издательство академии наук СССР.

Poppe, N. 1955 *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki: Suomalais-ugrilainen Seura.

—— 1957 *The Mongolian Monuments in ḥP'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J. R. Krueger, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

—— 1991 *Mongolian Loan Words in Kazak*, *Varia Eurasiatica*, Szeged 149-152.

Пучковский, Л.С. 1954 "Собрание монгольских рукописей и ксилографов Института Востоковедения Академии Наук СССР." *Ученые записки Института Востоковедения.* IX, 1954: 90-127.

Qasbayan_a 1996 *Dumdadu ǰayun-u mongyul kelen-ü sudulul*, Kökeqota: Öbür mongyul-un suryan kümüǰil-ün keblel-ün qoriy_a.

Qaserdeni, Danzan 1997 *Arǰai ayui-yin uyiyurǰin mongyul bičigesü-yin sudulul*, Shenyang: Liyuuning-un ündüsüten-ü keblel-ün qoriy_a.

『秦辺紀略』:『秦辺紀略』『四庫全書存目叢書』史部第228冊、臺南:荘嚴文化事業有限公司(乾隆鈔本);梁份『秦辺紀略』西寧:青海人民出版社、1987(点校本)

Rachewiltz, Igor. de. 1982 "The Preclassical Mongolian Version of the Hsiao-ching", *Zentralasiatische Studien*, 16: 1-109.

Ramstedt, G. J. 1976 *Kalmückisches Wörterbuch.* zweite, unveränderte Auflage, Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura (Lexica Societatis Fenno-Ugricae III).

Rozycki, W. 1994 *Mongol Elements in Manchu*, Bloomington.

Sečenčoγtu 1988 *Mongγul üges-ün ǰaγur-un toli*, Kökeqota: Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a.

『山居新語』(『山居新話』):王惲、楊瑀『玉堂嘉話 山居新語』北京:中華書局、2006(点校本)

史金波、聶鴻音、白濱譯注 2000『天盛改旧新定律令』北京:法律出版社。

『事林広記』:陳元靚『事林廣記』京都:中文出版社、1988(至順刊本)

島田正郎 2003『西夏法典初探』東京:創文社。

『書史会要』:『书史会要』上海:上海书店、1984年(洪武刊本)

『宋宰輔編年録』:『宋宰輔編年録校補』北京:中華書局、1986(点校本)

Stein, A.1928 *Innermost Asia.* v. 3, Oxford : Clarendon Press.

杉山正明 1982「斡王チュベイとその系譜——元明史料と『ムイッズル・アンサーブ』の比較を通じて」『史林』65(1);杉山正明 2004: 242-287.

—— 1983「ふたつのチャガタイ家——チュベイ王家の興亡」小野和子編『明清時代の政治と社会』京都:京都大学人文科学研究所;杉山正明 2004: 288-333.

—— 1990a「モンゴル命令文研究導論——真定路元氏県開化寺聖旨碑の呈示をかねて」『内陸アジア言語の研究』5;杉山正明 2004 : 372-402 + pl.26-27.

—— 1990b「草堂寺闊端太子令旨碑の訳注」『史窓』47;杉山正明 2004: 425-456 + pls.28-29.

—— 1991「山東鄒県嶧山仙人宮の聖旨碑」、『内陸アジア言語の研究』6;杉山正明 2004: 403-424 + pl.25.

—— 1993「八不沙大王の令旨碑より——モンゴル諸王領の実態」『東洋史研究』52(3);杉山正明 2004: 187-240.

—— 2004『モンゴル帝国と大元ウルス』京都:京都大学学術出版会。

『粛鎮志』:高彌高等『粛鎮志』『中国方志叢書』華北地方甘粛省第348冊、臺北:成文出版社、1970(順治抄本)

高橋芳郎 1981「宋代浙西デルタ地帯における水利慣行」『北海道大学文学部紀要』29(1): 1-40

—— 1982「唐宋間消費貸借文書試釈——賠償利息文言をめぐって——」『史朋』14: 1-8.

田中謙二 1965「典章文書の基本用語」『東洋史研究』23(4);田中謙二 2000: 371-396.

—— 2000『田中謙二著作集』第二巻 東京:汲古書院。

『通制条格』：『大元通制條格』臺北：華文書局（明抄本）、1980
藤堂明保編 1978『学研漢和大字典』東京：学習研究社。
Цэвэл, Я. 1966 *Монгол хэлний товч тайлбар толь*, Улаанбаатар : Улсын хэвлэлийн хэрэг эрхлэх хороо.
Tumurtogoo, D. 2006 *Mongolian Monuments in Uighur-mongolian Script (XIII-XVI Centuries): Introduction, Transcription and Bibliography*. Edited by D. Tumurtogoo with the Collaboration of G.Cecegdari (Language and Linguistics Monograph Series A-11), Institute of Linguistics, Academia Sinica.
Владимирцов, Б.Я. 1934 *Общественный строй монголов : монгольский кочевой феодализм*, Ленинград : Издательство Академии наук СССР.
王启涛 2005『吐鲁番出土文书词语考释』成都：巴蜀书社。
『五体清文鑑』：『五体清文鑑』Ⅰ-Ⅲ 北京：民族出版社、1957。
西藏自治區檔案館編 1995『西藏歷史檔案薈萃』北京：文物出版社。
『続増華夷訳語』：『北京圖書館古籍珍本叢刊』6（影印明抄本）
山田信夫 1978「タムガとニシャン」日本オリエント学会編『足利惇氏博士喜寿記念オリエント学イランド学論集』東京：国書刊行会；山田信夫 1993: vol.1, 496-484.
—— 1993『ウイグル文契約文書集成』全3巻，吹田：大阪大学出版会。
柳田節子 1995「宋代鄉原体例考」宋代史研究会編『宋代の規範と習俗』（宋代史研究会報告第五集）東京：汲古書院: 91-117.
吉田順一他訳注 1998『『アルタン=ハーン伝』訳注』東京：風間書房。
『元典章』：『大元聖政國朝典章』臺北：國立故宮博物院、1976（元刊本）
『元史』：宋濂等『元史』北京：中華書局、1976（点校本）
张传玺主编 1995『中国历代契约会编考释』全2册，北京：北京大学出版社。
照那斯图、杨耐思 1987『蒙古字韵校本』北京：民族出版社。
照那斯图 1990『八思巴字和蒙古语文献Ⅰ研究文集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
—— 1991『八思巴字和蒙古语文献Ⅱ文献汇集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

第二部　ウイグル文字テュルク語文書

はじめに

ハラホト出土のウイグル文字テュルク語（ウイグル語）の文書が正式に世に出ることは、おそらく初めてのことだと思われる。

とはいえ、計16点の文書の内容に体系的なつながりを見出すことは困難であり、ほとんど意味をなさない極小断片もあるわけだが、いくつか指摘できる状況がある。まず、同一個人とみられるキプチャク（qïpčaq）という人物が登場する3点の社会・法律・経済文書（F13:W66, F13:W68, F42:W2）は、彼を中心として共通する関係者のあいだで作成された可能性が高く、住民社会の諸側面を断片的にではあれ、照らし出しているように見える。

つぎに、内容の把握できる文書に限っていえば、仏教典をのぞいて書体がモンゴル期によくみられる草書体であること、語彙の特徴（「錠」、税目名、登場人物名）、年代のわかる漢文文書の紙背利用などから、モンゴル期に属することが確認できる。なかでもF9:W105の書簡の年代は紙背（オモテ面）の漢文文書から1319年以後に特定される。この文書は、この大きな利点に加えて、ハラホトの地に関係するウイグル人にたいしてモンゴル政権の統治がいかに浸透していたか、言葉を換えればウイグル人たちがモンゴル統治にいかに対処しようとしていたかを具体的に窺わせる史料として大きな価値をもつ。

その他の文書の年代を特定することはできないが、上に挙げたキプチャク関連の文書は、ウイグル人たちがハラホトと甘州、粛州との間を人や物、家畜を運搬して往復する姿を示すと同時に、やはりモンゴル統治下で税を支払い、また契約仕事がおこなわれていたことなど、社会経済的な側面のみならず法律制度の研究にも有益な史料となる。つまり、ハラホトにおけるウイグル人のあいだに契約関係が存在していたことは、トゥルファン出土文書などを利用する西ウイグル王国社会の研究視野が、ウイグル人ないしウイグル語・ウイグル文字を利用する社会全般へと一段と拡大したことを意味する。また漢文文書から引き継がれてきた法観念の系譜をたどる作業にもこれらの文書は寄与するだろうし、さらにはモンゴル期の中央ユーラシア史、アジア史の研究史料が加わった意味は小さくない。

仏教が存在し（F21:W32, F277:W56）、十二宮にまつわる神呪のようなもの（F9:W5）や、第六部のシリア文字シリア語（H彩101）およびシリア文字シリア語まじりテュルク語の写本（仮記号A～Jの5葉10面）に明らかなキリスト教信仰の定着などとあわせて、ハラホトの地のテュルク（ウイグル）言語社会における住民文化の複層性を、今回の文書群は際立たせていることになる。

これらの文書群の読解は、梅村が当初単独でF13:W66、F13:W68、F42:W2、F64:W1、F21:W32、F277:W56、F124:W22の計7点をカラーの紙焼き写真をもとにして担当した。その後、デジタル資料として新たに9点が追加されたが、成案を得るだけの時間に恵まれず、それらの調査を弘前大学の松井太氏に委ね、その成果をここに掲載することができた。9点とは、本項テキストの後半部に配置したF9:W5、F9:W105、F13:W65、F13:W67、F146:W1、F155:W6、F217:W1、F224:W1、Y1:W49である。とりわけF9:W105に関する注釈と解説は上にも述べたように、この文書の価値を導き出している。

(No.087) 文書番号 F13:W66

サイズ：縦 18.5cm　横 10cm

01　tmür tungčï tuḍup qanlïγ ystuq čulamïš
テミュル・トゥンチが充当して。カンのヤストゥク【錠】は、チュラミシュ

02　-ta satïp ol birim-kä birti išlär
の所で売って、その税として支払った。【彼は】使役用

03　ökūz-ni busa<γ>u-luγ inäk-lär birlä
牡牛を、仔牛をもつ牝牛たちと一緒に、

04　busa<γ>u yana adïrïp sanap qamču-ta asïγ
仔牛はまた別に分かち数えて、甘州で（利益／利息）

05　-lar birip sasïγ-lap yaṅïtï yana äv
を渡して、（悪臭を放って？）戻った。また【彼は】家

06　-täki ud-nï alïš baš-ïnta qïpčaq aḍl[ïγ]
にいる牛を受領長のところに【すなわち】キプチャクという名の

07　kiši-ning äv-intä yašurup öṣi täy(r)
人の家に隠して【いたと】自ら言っている。

【注釈】

01 tuḍ-: この動詞は多様な意味で用いられる。2 行目で birim 税（下記 02 参照）納入の事実は明らかであるので、全体の経緯は明瞭でないにしても、納税にかかわる用語として捉えておきたい（多鲁坤·梅村·森安 1990: 22-24；松井太 1998a: 036-037）。

01 qanlïγ yastuq: 従来のウイグル俗文書のなかで、ヤストゥクの語が使用される文書のほとんどすべてはモンゴル時代のものである（森安孝夫 1994；山田信夫 1993）。ヤストゥクそのものが完全にモンゴル指標だと断言できるかどうか確実ではない。しかし、モンゴル帝国の支配がハラホトに及び、さらに西ウイグルも含みこまれていく（梅村坦 1977a, b）13 世紀半ば以降のプロセスを通じて、帝国の徴税体系も次第に整備されていく（cf. 松井太 1998a, b；松井太 2004: 160-161）ことをみると、この qan がモンゴル可汗を指している蓋然性はたいへん高い。モンゴル時代の棉布納入リスト Radloff 1928: No. 38（cf. Clark 1975: No. 131）の 16-17 行に、qanlïγ tip yarïm böz birdim（カンのものとして半棉布を私は納入した）という qan の用例がある。以上のように、ここでは「(モンゴルの) カンのヤストゥク」と訳したが、qanlïq「王国」と読むこともできる。一般的な「王国」としての qanlïq の用例は qanlïq suü（王国軍）の形で（庄垣内正弘 1982: 54 (*ll.* 95, 98)）に見られるからである。

02 birim: モンゴル期のウイグル語文書には birim alïm～alïm birim と熟して頻出し、広義には一般的な「租税」の総称として、また狭義には田地に賦課される地税・穀物税（賦役・徭役労働に対置される）として用いられる（Matsui 2005: 69,72-75,78）。

04 sanap: sanap は S'NYP sanïp と書かれているように見える。5 行目の birip が P'RYP barïp と見えるように、この文書では a と ï/ï とが多少混同する。

05 sasïγlap: sasïγ < sasï- を「悪臭」と考えるのは ED: 855、856 によるが、S'SYX-L'-P は比喩的な表現かもしれない。マフムード・アル・カーシュガリー『トルコ語集成』の「bariγ」(悪臭のもの) の項に、「sasiγ bariγ」という熟語が紹介されている (Dankoff & Kelly 1982: 286)。

【解説】

本文書において、動詞はすべて三人称のみであるため書き手は確実とならない。文書の性格も今のところ不確実であるが、牛について細かい記載があるという文脈からみて、テミュル・トゥンチはチュラミシュのところで牛を売って得たヤストゥクを納税したのではないか。また、おそらく牛の増加による利益ないし貸借利息を甘州で支払ったような様子や、牛を隠しもっていた様子の描写がなぜあるのかと考えてみると、この文書は納税にかかわる何らかの不正を審理するときの記録かとも想像される。なによりも、ハラホトと甘州とが密接なかかわりをもっていたことを証するものとして注目されよう。なお人名キプチャクは、文書番号 F13:W68、F42:W2 にも登場する。同一人物の可能性がある。

(No.088) 文書番号 F13:W68

サイズ：縦 29.5cm　横 21.5cm

01　/// [yï]l [b]išinč ay [yg]rmi-kä mä[n] [q]ïpč[aq] ///
　　の年、5 月［20 日］に。私［キプチャクに］

02　///?N buγday krgäk bolup sarxapa baxš[ï] ///
　　小麦が必要となって、サルハパ師［より］

03　yiḍiṣ̱ing [buγ]day älig-tä alïp [mä]n qïpčaq ///
　　7 升の小麦を手にて受け取り、私キプチャクは

04　///(R) t<ä>vä-ni sarxapa-ṅï üč küri-lig čä yüki
　　ラクダ（に？）サルハパを、3 斗容量ほどの荷

05　birlä müṅdürüp sügčü-kä yidkürüp birür män
　　と共に載せて、粛州へ私が届けてやる。

06　yol sarẍapa-nïng yük-i küṅḍüz yoq bol(sar)
　　道中、サルハパの荷が日中に無くなっても、

07　tävä arïp ölsär män qïpčaq töläp baxšï
　　ラクダが弱って死んでも、私キプチャクが償って、師

08　-nï sügčü-kä yidkürüp birür män qač yük
　　を粛州へ私は届けてやる。いかほどの荷が

09　yoq bolsar baẍšï bilür tip bi(tig) ///?
　　なくなっても師が責を負う、との文書（を）

10 qïldïmï[z] [bu] [n]išan män qïpčaq̈-nïng(ol) ///
我々は作った。[この] ニシャンは私キプチャクのものである。・・・

11 bu ?///
この（ニシャンは？）・・・

12 tanu[q] ///
立会人 ・・・

【注釈】

01 [yg]rmi: 20 には ygrmi, ygrimi, yägrmi, yägärmi, yärgmi などの表記例があるが（cf. 山田信夫 1993: 302)、最も短いものとしても、その直前に 1 から 9 の数字を書くスペースはないと判断した。

02, 04, 06 sarxapa: 2 行目に sarxapa baxšï と熟して出たあとは、sarxapa もしくは baxšï いずれか一方のみとなっている。それぞれの読みには問題ないと思われる。当初 sarxapa を sarxaba と転写してペルシア語 surkhābī（鹿毛馬）(Steingass 1977: 672) やモンゴル語 sarbaa（2 歳馬）(Luvsandendev 1957: 351) を語源として考えてみた。しかし、松井太氏からの教示によれば（Matsui 2007 で指摘される予定)、すでに 1976 年の BTT VII の p.109 にチベット語人名として Sarhapa が現れる。ウイグル文タントラに Sarxapa と綴られているのである。本文書の Sarxapa がテュルク（ウイグル）人だったとしても、チベット語人名を借用したチベット仏教徒と解釈する可能性が生まれる。その場合、baxšï (< 博士）は「師」と訳すべきこととなり、本テキストの和訳はそれに従うことにした。

03 älig-tä alïp: 文字通りには「手にて受け取って」であるが、山田信夫 1993 の Sa 09: 9 (iligdä alïp)、Sa 16: 2 (ilig-tä alïp), Sa 27: 4-5, 8 (ilig-tä alïp), RH 03: 4-5 (ilig-tä alïp), WP 06: 17 (''älig-tä birip)などの例も含めて、「直接に受け取る」ことを意味しているにちがいない。

【解説】

キプチャクとサルハパ師（博士）との間で交わされた契約書。キプチャクは小麦 7 升の代価で、サルハパと 3 斗容量（25.2 リットル）(松井太 2004: 158) ほどの荷物をラクダで粛州まで安全に運ぶという内容である。ハラホトと粛州との往来はウイグル商人にとって非常に重要なルートであり、本文書は少なくともその通行の事実を示し、また日中の荷物の遺失には運搬者キプチャクが責を負うが、それ以外は荷主サルハパが責を負うらしきことなど、運搬実態の探求に大きな手がかりをもたらす文書である。

(No.089) 文書番号 F42:W2

サイズ：縦 20.5cm　横 7.6cm

01 ///M? ? ?Z(?)///
・・・

02 ///???ig(?) us-la(?)p (bolmaz) un biti[g] ?///
を（？）（区別しないように）。書簡・・・

03 ///y(?) qïpčaqdan samur birip ïdtï(m) bişkä ?///
キプチャクから松の実を（私は）渡し送った。我らに

04 ///?lïγ bor bärgän (')Y(?)/// -tin birip ïdïngla[r]
・・・のブドウ酒を兄嫁・・・から、お前たちは渡し送れ。

05 ///???R(?) čao ïdtïmïz uγut birip ïdγïl
・・・ 鈔を我らは送った。麦酒酵母をお前は渡し送れ。

【注釈】

03 samur: samur モンゴル語「松の実」(Lessing 1960: 668)。

04 bärgän: bärgän < Mo. bergen と考えておきたい。

05 uγut: uγut は、ED: 80 により、ビール酵母。カーシュガリーの説明は次のとおり。「uγut は、次のようにビールを造るのに使う酵母の名称。さまざまな香草を発芽大麦から作った粉と混ぜる。捏ねてからヘーゼルナッツほどの大きさに切って放置し乾燥させる。そうして出来た酵母を砕いて、大麦と一緒に加熱しておいた小麦のうえに、加熱小麦 1mann あたりに 1 盛り（ヘーゼルナッツ大）の割合でふりかける。その小麦を、なにか清潔なものでくるんで 3 日間発酵させてから取り出し、大桶に入れてさらに 10 日間発酵させる。最後に水を上から注いで漉す。これが"小麦酒"である。」(Dankoff & Kelly 1982: 98)。なお 1mann は 2raṭl すなわち、現代アラビア語の重量単位では地域差があるが、約 1kg から 6kg ほどにあたる。

【解説】

草書体の文字や「鈔」、モンゴル語起源の単語を含むように、モンゴル期の要素が多い文書である。物のやりとり、鈔を送ったことからみて、供出命令のようなものではなく商取引に関する書簡の可能性が高いと思われる。

(No.090) 文書番号 F64:W1

サイズ：縦 12.5cm 横 9.3cm

01 ///(N?) -tačï iš KW///
・・・する者が仕事・・・

02 ///(P?) yorï(y)ur 'ärkän///
・・・途上にあるあいだは・・・

03 ///? sïng<ar>\SY/ il bodun ? ///
・・・の側（が？）民・・・

(04) bildürüp ///
知らせて・・・

05 /// oy qïlïnïp ///
・・・（穴がつくられて？）・・・

【注釈】

03 SY: 行間スペースからみて、後からの付記に間違いないが、三人称単数所有語尾 -si を示すもの

か。
(04) bildürüp: この行は、3 行目との行間隔が他の間隔と同じである一方、4 行目との間隔は狭い。後からの付記とも見えるし、また別の理由があるのかもしれない。

【解説】
今のところ、この断片から知られることは少なく、「仕事」や「民」の語から、何らかの公務につらなるものか、というような想像をすることにとどめる。なお、李逸友 1991: 202 に本件と同一記号の漢字辞書断片が挙げられている（図版肆柒 (2)）が、寸法も形状も異なる。

(No.091) 文書番号 F21:W32

サイズ：縦 22cm　横 8cm

01　(K?)(Y?)///(K?)(Y?) il-tä yämä qač yïl-lar ///
　　･･･の国にて、また幾年･･･

02　ärdmäkingä 'YNPLY qan adïn　(")S???///
　　過ぎた後に　･･･　王は他の　･･･

03　-lïγ boldï : qamaγ ??///
　　･･･なった。すべての･･･

04　[tu]rup šudïγ?///
　　とどまり、清浄を･･･

【注釈】
04 šudï: サンスクリット語 śuddhi 「清浄」「浄」を語源とする可能性は、庄垣内正弘 1993: II 340 より。

【解説】
仏典関連で、経典のコロフォンあるいは題記の断片のようにもみえるが、情報は少ない。2 行目の'YNPLY は、歴史上の人物名である可能性を考えるべきかもしれない。

(No.092) 文書番号 F277:W56

サイズ：縦 24cm　横 11.8cm

01　///　(P)?? ???　T'YN? T'? ///
　　･･･

02　qayu-nï qayu-nï körsär män : a??///
　　（何／何処）かを、何かを私が観じるなら･･･

03 anï oq qunup alïp : ol äd tavar
それをこそ拭い取り、その財産

04 -ta ulatï-lar ün-ä : adïn ta(pï)γ
などが出現し、他の（諸）奉仕

05 -la(r?)n ädgü asïγ qïlγu üčün
（で？）善き利をなす故に

06 olar-nïng oq iš-lär-ining
それらのまさしき諸作用の

07 /// ? ?/// (?P)///
・・・

【注釈】
04 tapïγ: 奉仕の一例は庄垣内正弘 1982: 68（第 235 行）参照。

【解説】
この印刷仏典の同定はまだおこなえていない。

(No.093) 文書番号 F124:W22

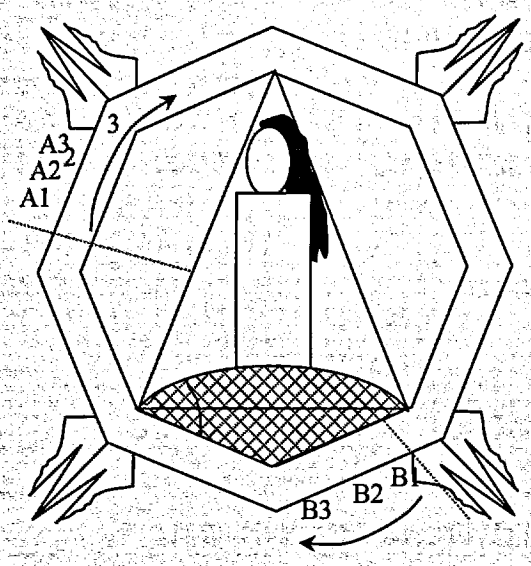
サイズ：縦 7.2cm　横 8cm

01 βYD'W WPW
02 βWP'W βWPW \β"NX /
03 βWPW β'D'N
04 βWPW βWN
05 βWLW
06 βWP KW
07 β PWL(W/D) \βW(P?)Z/ KWP ?
08 KW
09 KW TYD (Y?)
10 βWYTYL (β/W?)
11 KW βY(P/W?)(W/D?)
12 (K?P?) WD

【解説】
非テュルク言語のウイグル文字による語彙ないし音韻の一覧のようなものと思われる。乱れた文字で読みにくい。仮に転字の可能性だけを示した。

(No.094) 文書番号 F9:W5

サイズ：縦 38cm　横 38.9cm



A01-04	B01-04	qoyn / qaduru / sävinč / tigin-/
		ヒツジを / 戻しつつ / 歓喜の / 王子
A05-08	B05-07	-kä / tïḍïγ / qïldačï-/-lar
		に対して / 障碍を / なす者 / たち。
A09	B08	maray-a
A10-13	B09-10	š-a / š-a / š-a / š-a
A14-15	B11-12	xung / xung
A16-17	B13-14	gača / gača
A18-19	B15-16	biča / biča
A20-21	B17-18	tača / tača
A22-23	B19-20	xača / xača
A24-25	B21-22	quluč / quluč
A26-27	B23-24	bača / bača
A28-29	B25-26	mača / mača
A30-31	B27-28	pada / pada

【注釈】

A08-09 qïldačï-lar: B07 では 1 行につめて書かれる。

A10-13: B09-10 では 2 行に詰めて š-a を 4 回記す。

【解説】

八角形の中心に、2 匹の魚の上に立つ女性像を描き、その周囲に放射状に陀羅尼の一種と思われるウイグル文が A、B の 2 回にわたって記される。図像は、黄道十二宮の双魚宮（魚座）に関係するものと推測できる。ウイグル文 A01-02、B01-02 は双魚宮と「ヒツジ (qoyn)」すなわち白羊宮（牡羊座）との関係に言及するものかもしれない。

(No.095) 文書番号 F9:W105

サイズ：縦 27.5cm　横 41cm

01 buyanḍämür sözüm qaraḍämür-kä biz-ning äv-tä
私ブヤンテミュルのことば。カラテミュルへ。私たちの家で

02 m-ä satpa oγlï barča äsän tükäl ol bir köngül
も、サトパとその息子はみな元気・無事です。一つの心

03 bolγïl • qayu m-ä söz bolsar qara baγ[a](ḍ)[u] (r)
となれ。何でも便りがあるなら、カラ=バートル

04 oγlï-tïn äšidük ärki sän
の息子から君は聞きましたか？

05 aybuq-a čingsang ašaḍämür önši-qa ayïḍmaq ïdtïm
アイブカ丞相・アシャテミュル院使への言上（の書簡）を私は送りました。

06 ič tangda sözläšip bir yaraγ-lïγ čuyšiu
内堂(?)で相談して、一つの適切な推収が

07 bolup yiši kälsär ïdγay ärür • näḍäg (bol)m[a]sar
あり、訳史が来れば、私は送るつもりです。どのようにもならなければ

08 ïdγu sang ärmäz turur • yana söz buyan qy-a-
送納すべき地税はありません。また一件。ブヤン=カヤ

09 -tïn bägät-lär-kä on bir qapčuq badam • bir
からベグたちへの、11 袋の巴旦杏、1 枚の

10 čabïlangï on b(i)š qar-a quduruq on tört
腹帯、15 本の黒いしりがい、14 枚の

11 sün bitigü kägdä iki qapčuq viuki ïdtïm ärti
宣を書く紙、2 袋の viuki を、私は送っていました。

12 buyan qy-a qurmïš kimpao-tin tiläp alγïl
ブヤン=カヤが整えたものをキムパオから求めて受け取って下さい。

13 yana buyan qy-a-nïng arq-a-sï tälim ärti
また、ブヤン=カヤの援助が多くありました。

14 alïp taydu tigin-kä ïdγïl yana mäning buyan
受け取ってタイドゥ=ティギンに送って下さい。また、私の、ブヤン=

15 qy-a birmiš bir čabïlangï yana öṣgä birmiš
=カヤが与えた1つの腹帯を、再び他に与えて

16 ätidtim song köngül alïp yana ayïḍïp ïdyay män
私は整えさせました。後に心を受け、また私は言上して送ります。

17 buyan qy-a yalngïz-ï-nïng turmaq-a baš köz iḍig
ブヤン=カヤ独りの供物として、頭・目の装

18 tümäg-i yana yägrmi stïr alḍun öṣgä arq-a-larï
飾（として）再び 20 両の金、他にも援助が

19 bar ärti tip turur
あった、と言っています。

【注釈】

01 buyanḍämür: ハラホト漢文文書 Y1:W89（李逸友 1991: 98）では同名人物（卜顔帖木 < Buyan-Tämür）が亦集乃路総管府から巡検に任命され、水渠ごとの社長を総管府に出頭させている。本文書後文で推収 (čuyšiu) や地税 (sang) など田地関係用語がみえることを考慮すると、同一人物の可能性があるかもしれない。なお税糧納入簿 F13:W129（李逸友 1991: 110）にも同名の不顔帖木 (Buyan-Tämür) が現れるが、こちらは「吾即」というタングト姓をもつ人物の弟であるから別人であろう。

02 satpa oγlï: Satpa < Tib. Satapa に由来する人名か。松井 1998b: Texts 4, 15 も参照。本処は「サトパとその息子」と解したが、「サトパの息子」の可能性も残る。

02 ol, 03 bolsar: いずれも一見すると別語のようにみえるが、これは両行の後半部分で文字の一部がシワに隠れた状態で撮影されたためである。

04 äšidük: äšiddük (< v. äšid-) 「聞いた」の短縮形とみなす。いったん äšidti と書いたのを修正しているらしい。

05 aybuq-a čingsang: čingsang < Chin. 丞相。本処では明らかに抬頭されており、モンゴル政権高官であることは確実。アイブカ (Aybuq-a ~ Ay-Buqa) は元代に頻出する人名。同名人物としては陰山オングト (Önggüd) 駙馬家当主で世祖クビライの女婿となったアイ=ブカが有名であり、地理的にもハラホト＝亦集乃路と近接するが、本文書は延祐年間の官文書を二次利用したものであるから年代的に齟齬する。むしろ『元史』巻 113・宰相年表 2・至正二十二年・同二十三年（1362～1363）に中書平章政事としてみえる愛不花 (Ay-Buqa) と同一人物の可能性が高い。モンゴル時代には右丞相・左丞相に限らず平章政事も「丞相 (čingsang)」と称されたこととも整合する。

05 ašaḍämür önši: önši < Chin. 院使。集賢院・宣政院（総制院）・宣徽院・通政院・将作院・太医院・制用院・宣徽院・太常礼儀院などの諸官署に長官（複数のこともある）として院使が任命される。その中には、モンゴル皇帝の親衛隊ケシク（kesig > 怯薛）からケシクでの職掌（šükürči > 速古兒赤＝天蓋持ち、bayurči > 博兒赤＝食膳係、kelemeči > 怯里馬赤＝通訳官 etc.）を持ちつつ院使として任命されることがあり、『元典章』・『秘書監志』など元代政書類では官署名を略して「院使」単独で呼称される例が頻見する。「アイブカ丞相」と併記されることからみて、本処の人名アシャテミュル (Ašaḍämür ~ Aša-Tämür) も同様にケシク出身の院使であったと思われる。なお、強いてエセンテミュル ("S'ND'MWR = 'Äsänḍämür ~ Äsän-Tämür) と読むことも不可能ではない。

06 ič tangda: tang は漢語「堂」の借用か。元代漢文史料では中央政府（中書省・尚書省および宰相）を「都堂」・「省堂」と称するので（ハラホト漢文文書では F13:W127＝李逸友 1991: 172 が「省堂

鈞旨」で始まる)、本文書の ič tang を「内堂」と解してよければ、これも元の中央政府機関をさす表現かもしれない。ウイグル語 ič「内、中」が政府中枢に関係して用いられる例としては、ウイグル可汗国時代の「内宰相」や西ウイグル時代の ičin sangun ~ ičräki sangun も参照 (Matsui 2006: 44)。

06 čuyšiu: 漢語「推収」の音写とみた。ウイグル漢字音では推は ČW = ču であるが (庄垣内 2003: 130)、サンクトペテルブルク所蔵ハラホト出土モンゴル語印刷文書断片には Mong. čui-gon / Chin. 推官という逐語対訳例がみえ (G110 = Munkuyev 1970: Fragment 1)、モンゴル期のウイグル字表記として推 > ČWY = čuy ~ čui も確認できる。Chin. 収 > Uig. šiu の用例はすでに確認されている (庄垣内 1987: 143)。

「推収」は、不動産所有権の移転 (寄進・売買) に伴う土地税負担者の登録修正手続を意味すると解釈される。以下の『元典章』諸条を参照:巻 19・戸部 5・田宅・民田・捨施寺観田土有司給據「もし自ら寺院道観に (土地の) 寄進を願う者があれば、かならず役所に出頭のうえ寄進する土地の四至・面積を申告し、さらにその者の在所の村保や隣近所・親戚らに確認のうえ、間違いがなければ公式の証明書を発給して明確に土地税を推収した上で、はじめて寄進を許可することとせよ【或有自願出捨之家、須赴有司、具四至條段陳告、以憑村保・隣舎・親戚人等保勘、別無違碍、出給公據、明白推収税石、方許捨施】」;巻 19・戸部 5・田宅・典売・田宅不得私下成交「擬すらくは、期限を設け、土地を売買した者には、役所の承認を経ずに売り渡してしまっている土地の土地税の額を、所属の官司・県に申告のうえ推収させよ【擬合立限、令賣買田地人、將在先不經官過割田粮數目、經所屬司縣出首推収】」;巻 19・戸部 5・田宅・典売・買賣田宅告官推収「今後、田宅を典売する際は、先に役所から証明書を発行した後に正式の売買契約を結び、きまり通りに課税して随時に推収することとせよ。‥‥もしも本当に貧困のため田宅を典売する必要があるなら、上記の通り役所から証明書を発行したうえで売買を行ない、買主・売主一同はただちに書類を役所に持参し、負担すべき土地税を推収して新しく買った地主に負担させ、上記の通りに送納させよ【今後典賣田宅、先行經官給據、然後立契、依例投税、随時推収。‥‥若委因貧困必合典賣田宅、依上經官給據出賣、買主・賣主一月(ママ)随即具状赴官、將合該税石推収與見買地主、依上送納】」。

07 yiši: < Chin. 訳史。元代の諸官署の属官として頻見。

07 näḍäg bolmasar: 「どのようにもならなければ」とは、「適切な推収の手続が何も行なわれなければ」という文脈と解する。

08 sang: 元来は漢語「倉」から借用され、ウイグル語を経由してモンゴル語にも sang として借用される。原義の「くら、倉・倉庫」から、「(倉に納める) 穀物現物」、さらに公的な倉庫に納入される「倉糧・倉粮、地税」をも意味する。元代蒙漢合璧碑の対訳例も併せ、松井 2004b: 8-9, 15-21 を参照。先行する推収 (čuyšiu) との関連から、本処でも「地税」と解釈する。

09 bägät: pl. < bäg「ベグ、官吏、主、長、貴族」。

09 qapčuq: qap に指小辞 +čuq が接続した形式 (Ligeti 1966: 161; ED: 581)。ウイグル語 qap は「皮袋」の原義から漢語の「斗」(元代には 8.4 リットル) に対応する容量単位としても用いられるが (松井 2004a)、qapčuq はそれよりも小さい容量か。

09 badam: "almond (*Prunus amygdalus*)" (WHCD: 101; Schwarz: 53)。明代の高昌館訳語には在証されるが (Ligeti 1966: 137)、11 世紀のカーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšġarī, *Dīwān luġāt at-Turk*) には見えない。本文書により、遅くともモンゴル時代にはペルシア語 bādām からテュルク語・ウイグル語へ借用されていたことが新たに確認できる。

10 čabïlangï: 本処の字形は Č'PYL'K(')Y と読め、15 行目の Č'PYL'KY と読める語と同一であろう。両者を勘案して čabïl(a)ngï ~ čabïlangï と転写し、モンゴル語 čabilang (~ čabilaγur ~ čabilu'ur)「腹帯」(MKT, p. 1221) に人称語尾 +ï が接続したものとみなす。次に列挙される quduruq の解釈とも整合しよう。

10 quduruq: 原義は「(動物の) 尾」(ED: 604)。これに対応するモンゴル語 qudurya は『元朝秘史』で「鞦 (しりがい)」と対訳される (NT 08:08:08)。本処でも前項の「腹帯 (čabïlangï)」との関係か

ら、馬具としての「しりがい」と考えておく。

11 sün bitigü kägdä: sün (~ suin) < Chin. 宣（庄垣内 1987: 33-34, 62-63）。抬頭されているから、皇帝の命令としての「宣」であることも確実である。本処の「宣を書く紙」とは料紙の「宣紙」をさすものであろう。

11 viuki: 漢語からの借用語らしいが、不明。KYWKY = kiuki とも読める。

12 kimpao: < Chin. 金宝。文脈からは人名とみなす。

13 arqa:「背中」の原義から多様な意味をもつが（ED: 215）本処では「援助」と考えた。18 行目にもみえ、その文脈では「寄進、布施」と解釈すべきかもしれない。

14 taydu tigin: 山田信夫 1993 の Sa12 に地名として在証される taydu は明らかに Chin.大都の借用だが、本処の文脈では taydu は人名要素と思われる。

16 ätidtim: < v. ätid- (caus. < v. ät- ~ it- ~ et-)「整えさせる」（ED: 44-45）。

17 turmaq-a: 字形は TWM'X-' ~ TWRMX-'と読める。やや不自然だが、後文の文脈を考慮して turma「供物」（ED: 549）に与格 +qa が連綴されていると解釈する。

17-18 baš köz iḍig tümäg-i: ウイグル仏典では、iḍig (~ itig ~ etig) tümäg という二詞一意 (hendiadys) は Chin. 荘厳の対訳として在証される（Uigurica II: 40, line 108; ED: 506; Zieme・百濟 1985: 102）。先行する baš「頭」と köz「目」は何らかの仏像に関係するものかもしれない。

17-18 stïr: 行の左側に挿入されている。漢語の両（約 40 g）に対応する重量単位・貨幣単位（前田 1973: 19-39; 森安 1997: 9-13）。

【解説】

ウイグル字ウイグル語書簡。オモテ漢文面は仁宗アユルバルワダ (Ayurbarwada) 延祐五～六年（1318－1319）間の官用銭粮帳簿類で、李逸友 1991: 143 に移録されている。ただし李逸友 1991 はウラ面の本文書を「蒙古文契約」と誤解している。本来なら本文書の記号は裏面を示す要素を加えるべきであろう。

内容をまとめつつ、本文書の歴史的背景を以下のように推測しておきたい。

① 01－04 行：時候の挨拶。差出人はブヤンテミュル、宛先はカラテミュル。「カラ=バートルの息子」とは、書簡を実際に宛先に送達する人物の名であろう。

② 05－08 行：差出人ブヤンテミュルは、新たに田地を取得したものの、そこにかかる地税 (sang) 負担者の変更手続（推収 > čuyšiu）を完了していなかったと推測される。そのために官庁との折衝の必要があり、モンゴル政権高官たるアイブカ丞相・アシャテミュル院使らに書簡を送り、その内容をカラテミュルにも周知しておいたのであろう。

③ 08－12 行：ベグ、すなわち政府官僚たち（アイブカ丞相らのことか？）への贈物の列挙。これらの贈物は、田地の推収についてベグたちに便宜を図ってもらうためのものかもしれない。08 行目以降に現れるブヤン=カヤという人物は、差出人ブヤンテミュルのごく近い関係者――おそらくは商業上の共同経営者――であり、それゆえにブヤン=カヤの荷物発送をブヤンテミュルが請け負ったものか。その荷物輸送を実際に担当したのが 12 行目のキムパオという人物であろう。

④ 13－19 行：やはりブヤン=カヤの事業に関する報告と一部の財物の送り状。

04－05 行目下方にパクパ字朱方印鑑あり。おそらくは、オモテ漢文面の帳簿様文書は数枚の紙を連貼した巻子本であり、その紙縫部分の紙背にこのパクパ字官印を押していたのであろう。連貼された紙から 1 枚を剥離してその紙背を本ウイグル文に用いた結果、パクパ字印鑑は右側だけが残っている。

極少断片

F13:W65、F13:W67、F146:W1、F155:W6、F217:W1、F224:W1、Y1:W49 の 7 件は、わずかな行数・語数からなる極少断片である。ウイグル語と確認できる F13:W67、F224:W1 以外はウイグル字モンゴル語の可能性も残る。

以下に可能な限りの校訂訳註・解説を提示する。

(No.096) 文書番号 F13:W65

サイズ：縦 6cm　横 5cm

01　(?????)///

02　///(D)(??)SY
　　.....

03　///čuńši///(?)///

【解説】

内容不明。02 行目の ///D(??)SY の後にはチベット字 wa がみえる。

(No.097) 文書番号 F13:W67

サイズ：縦 11.5cm　横 16.3cm

01　ikinti ülüš
　　第 2 部

【解説】

仏典を包み、オモテに部号を示したものと思われる。

(No.098) 文書番号 F146:W1

サイズ：縦 9.3cm　横 6cm

01　///-[n]ing | Y'WYY |
　　....のもの

02　///-[n](i)ng
　　....のもの

【解説】

01、02 行の -ning をウイグル語（属格語尾）と解すると、契約文書末尾の証人の記名・捺印部分

断片と推測することができる。01 行目の -ning に続いて、上下の水平線の間に挟まれるウイグル字 Y'WYY がみえるが、これは人名に由来するニシャン印であって、文書本文を構成するものではないと思われる。

(№099) 文書番号 F155:W6

サイズ：縦 10.5cm　横 5cm

3 行ほどウイグル字がみえるが、破損・損傷が著しく、解読不能。

(№100) 文書番号 F217:W1

サイズ：縦 10.5cm　横 8.7cm

01　　kiki (bitk)[ač](i) ///
　　キキ書記……

02　　m-a langčung ///
　　マ　郎中……

【注釈】

01 kiki: 本文書とは同一人物ではありえないが、同名人物としてカンクリ（Qanglï > 康里）族出身の元代文人官僚キキ（嶷嶷）が有名。彼自身はいくつかのウイグル語資料を執筆しており、そこでは自分の名を Kki-kki ~ Ki-ki ~ Kikä と記す（Zieme・百済 1985: 36-38. 亦都護高昌王世勲碑ウイグル文面の用例を Geng / Hamilton 1981: 22 は Käkä, 劉・Kahar 1984: 71 は Kiki と転写するが、2006 年 9 月に筆者（松井）が実見したところでは Kikä)。本処は同一人名の新たな表記として注目できる。

01 bitkäči: この「書記」は推測に基づく再構であり、他の語であればモンゴル語の書簡であった可能性も残る。

02 m-a: は漢語姓「馬」の音写であろう。Chin. 郎中のウイグル字音写 L'NKČWNK = Uig. langčung = Mong. langǰung の在証例は蒙漢合璧碑文に確認される（Cleaves 1949: 117; 松川 1997: 91)。

【解説】

書簡の封筒。一枚紙を細く丸めて短冊状に押したたみ、合わせ目に差出人名（01 行）・宛名（02 行）を記したものが 2 断片に破損したものであろう。写真左側の断片で 2 つの残画のようにみえるものは、右側の断片 langčung「郎中」語頭の L- のフックと語中の -K- の一部である。すなわち、左断片が合わせ目の下、右断片が上にあったことになる。

(No.101) 文書番号 F224:W1

サイズ：縦 6cm　横 8cm

［前　缺］
01　/// [bi]rürmän yana
・・・・私は支払う。また

02　////(?)YRSY-tin
・・・・・・・・・・から

03　////(?)-ta äv
・・・・・・から、家
［後　缺］

【解説】
おそらくは貸借契約文書の断片。

(No.102) 文書番号 Y1:W49

サイズ：縦 6.5cm　横 11cm

gon čungḍi
管 忠徳

【解説】
これも書簡の封筒で、差出人の漢語名をウイグル字音写したものであろう。KWN＝gon は漢語姓の管（パクパ字表記は gon）に対応するとみた。人名の再構はあくまでも試案である。

参考文献

BTT VII: Kara,G. / P.Zieme, Fragmente tantrischer Werke in uigurischer Übersetzung, Berlin, 1976

Clark, L. V. 1975 Introduction to the Uyghur Civil Documents of East Turkestan (13th-14th CC.), Ann Arbar : Xerox University Microfilms, 1979.

Cleaves, F. W. 1949 "The Sino-Mongolian Inscription of 1362 in Memory of Prince Hindu", *Harvard Journal of Asiatic Studies* 12: 1-133, -3 figs., +pls. I-XXVII.

Dankoff, R. & J. Kelly (eds.) 1982, 1984, 1985 *Mahmūd al-Kāšγarī, Compendium of the Turkic Dialects (Dīwān Luγāt at-Turk)*, I-III, Harvard University Printing Office.

多鲁坤=闕白爾・梅村坦・森安孝夫 1990「ウイグル文仏教尊像受領命令文書研究——USp. No. 64 などにみえる"čuv"の解釈を兼ねて——」『アジア・アフリカ言語文化研究』40: 13-34, -2 pls.

ED: Clauson, G., An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish, Oxford. 1972.

Geng, Shimin / J. R. Hamilton 1981 "L'inscription ouïgoure de la stéle commemorative des Iduq qut de Qočo", *Turcica* 13: 10-54.

Lessing, F. D. 1960 *Mongolian - English Dictionary*, University of California Press & Cambridge University Press. (Rep. 1973, Bloomington)

Ligeti, L. 1966 "Un vocabulaire sino-ouigour des Ming: Le *Kao-tch'ang-kouan yi-chou* du Bureau des Traducteurs", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 19: 117-199, 257-316.

李逸友 1991『黒城出土文書（漢文文書巻）（内蒙古額済納旗黒城考古報告之一）』科学出版社。

劉迎勝・卡哈爾=巴拉提 (Kahar Barat) 1984「亦都護高昌王世勲碑回鶻文碑文之校勘與研究」『元史及北方民族史研究集刊』8, 1984: 57-106.

Luvsandendev 1957 *Mongol Oros Toli*, Moskva.

前田直典 1973「元代の貨幣単位」『元朝史の研究』東京大学出版会: 19-39.（初：『社会経済史学』14-4, 1944）

松井太 1998a「モンゴル時代ウイグリスタン税役制度とその淵源——ウイグル文供出命令文書にみえる Kāzig の解釈を通じて——」『東洋学報』79(4): 026-055.

—— 1998b「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』XIII: 1-62 + 15pls.

—— 2002「モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と徴税システム」『碑刻史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』（平成 12～13 年度科学研究費補助金・基盤研究（B）(1)研究成果報告書):87-127 -6pls.

—— 2004a「モンゴル時代の度量衡——東トルキスタン出土文献からの再検討——」『東方学』107: 166-153.

—— 2004b「モンゴル時代のウイグル農民と仏教教団」『東洋史研究』63-1: 1-32. (rev.)

Matsui, D. 2005 "Taxation Systems as seen in the Uigur and Mongol Documents from Turfan: An Overview", *Transactions of the International Conference of Eastern Studies 50*:67-82.

—— 2006 "Six Uigur Contracts from the West Uigur Period (10th-12th Centuries)" 弘前大学人文学部『人文社会論叢』人文科学篇 15: 35-60.

—— 2007 "A Mongolian Decree from Chaghataid Khanate Discovered at Dunhuang", in: P. Zieme (ed.), *Aspects of Research into Central Asian Buddhism : In Memoriam Kōgi Kudara*, Turnhout.

松川節 1997「カラコルム出土 1348 年漢蒙碑文」『内陸アジア言語の研究』12: 83-98, +1 pl.

MKT:『蒙漢詞典 (*Mongγol Kitad toli*)』増訂本, 内蒙古大學出版社, 呼和浩特, 1999.

森安孝夫 1991『ウイグル＝マニ教史の研究』（大阪大学文学部紀要 31/32)。

—— 1994「ウイグル文書劄記（その四)」『内陸アジア言語の研究』IX: 63-93.

—— 1997「オルトク（斡脱）とウイグル商人」『近世・近代中国および周辺地域における諸民族の移動と地域開発』科研費報告書 (No. 07451082): 1-48.

Munkuyev, N. Ts. 1970 "Two Mongolian Printed Fragments from Khara-khoto", in: L. Ligeti (ed.), *Mongolian Studies*, Amsterdam: 341-357.

Radloff, W. 1928 *Uigurische Sprachdenkmäler*, Leningrad. (Rep. in 1972, Osnabrück)

Schwarz, H. 1992 *An Uyghur-English Dictionary*, Western Washington.

Steingass 1977 A Comprehensive Persian-English Dictionary, Sixth Impression, London.

庄垣内正弘 1982『ウイグル語・ウイグル語文献の研究 I (“観音経に相応しい三篇の Avadāna”および“阿含経”について)』神戸市外国語大学外国学研究所: 215 + 16pls.

—— 1987「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』2 (1986): 17-156.

—— 1993『古代ウイグル文阿毘達磨倶舎論実義疏の研究』I – III, 京都：松香堂。

—— 2003『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』京都大学大学院文学研究科。

Uigurica II: By F. W. K. Müller, Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften (Phil.- Hist. Klasse) 1910-3.

梅村坦 1977a「違約罰納官文言のあるウィグル文書——とくにその作成地域と年代の決定について——」『東洋学報』58(3/4): 01-040.

—— 1977b「13 世紀ウィグリスタンの公権力」『東洋学報』59(1/2): 001-031.

WHCD: 『維漢詞典』烏魯木斉，新疆人民出版社，2000.

山田信夫 (著)、小田壽典・P. Zieme・梅村坦・森安孝夫 (編) 1993『ウイグル文契約文書集成』3 巻、大阪：大阪大学出版会.

Zieme, P. 1979 "Uigurische *laf* „Spende"", *Altorientalische Forschungen*, VI: 275-277.

Zieme, P. /百濟 康義 1985『ウイグル語の觀無量壽經』永田文昌堂。

第三部　チベット文書

はじめに[1]

第三部は、今回のプロジェクトの対象となるハラホト出土文書群に含まれるチベット語文書についての論考である。ただし、筆者が原典を見たことはなく、筆者のもとに送られてきた写真に基づく分析である。なお、それらの文書については、文書番号やサイズなど文書学的情報は添付されていなかった。当初送られてきた3枚の写真については、石濱裕美子氏による報告（以下「石濱報告」）がある。それによると、氏が別に入手したデジタル写真には、各写真の台紙（？）に「チベット　番号なし　A1」、「チベット　番号なし　B1」、「チベット　番号なし　B2」（「チベット　番号なし」の部分はモンゴル語）と記されているという。実際、写真を見るとB1とB2は同一文書の表裏であり、一方A1は別文書の片面と推定される。

その後、最近になって3点の写真が追加されてきた。そのうち1点は文書Aの片面、すなわちA2にあたり、あと2点は、文書A、Bとは異なる同一文書の断片であることが判明した。そこで、これらのチベット文書を整理するに際して、本稿では編集部の方針に従い、文書AをTIB01、文書BをTIB02、残りの断片2点をTIB03A、TIB03Bと呼ぶことにする。

TIB01とTIB02は、正方形に近い形状のベージュ色の紙に9ないし10行のチベット文が行書体(dpe-yig)で記されており、書式および判読できる単語から仏典と推定される。ただし文書様式や書体から判断して、両者は同一文書に属すものではなく別文書であると考えられる。

TIB01は、紙面の破損によって両面とも文字が判読しがたく、数語（sngags「真言」、rgya-gar「インド」、'khor-lo「チャクラ」）以外に手がかりがないので内容の同定は難しい（第1節）。

TIB02は、両面とも文面が比較的よく判読でき、テキストを最終的に同定できる可能性がある。「石濱報告」も指摘するように、聴聞録(gsan-yig ないし thob-yig)の形式をとっている。内容は、Mahâkâla「大黒」についてのlo-rgyus「物語／歴史」と推定されるが、現時点ではまだ特定の文書の一部と同定するに至っていない。従って、本論文では現時点におけるテキストの読みと解釈、および、TIB02と同一文書と同定される可能性がある文献を提示する（第2節）。

TIB03は、紺の方形の紙に6行のチベット文が金字で書かれた仏典で、ダラニを含んでいるところからタントラ経典である可能性が高い（第3節）。

---

[1] 本論文で発表するチベット語文書は、当初、吉田順一教授を研究代表者とする研究班の研究分担者である石濱裕美子氏が担当し、石濱氏は写真3点についての転写テキストと解釈を「研究成果報告書」(2006年3月)に提示している（「石濱報告」）。武内は、文書の出版に向けて、吉田・石濱両氏からの協力依頼をうけたので、石濱氏の研究にもとづき、それに加筆修正するかたちで最初の原稿を作成した。その後、2007年11月の時点で新たに3点の文書写真の追加があったので、TIB03について井内に共同執筆を依頼し本論文を作成した。ただ今回、筆者の力不足と時間不足のため最終的な文書の同定に至らず、判明したデータを本稿で提示するものである。なお、本稿執筆にあたり、Dan Martin、岩尾一史両氏から教示を受けた。記して感謝したい。

文書の年代は、テキストの同定をまって決定すべきであるが、スタインおよびコズロフコレクション中の類似のハラホト出土チベット文書と比較した結果、ハラホト出土チベット文書の中期から後期である 13 世紀から 16 世紀につくられた可能性が高いと推定する。文書の性格と位置づけは、スタイン、コズロフ文書と比較して決定するべきものであるから、両コレクションを含むハラホト出土チベット文書全般について第 4 節で概説する。

(No.103) 1. TIB01

サイズ：縦 7.5cm、横 8.7cm、各行の上部とテキストの左右両端に、朱で経線と緯線が引かれている。貝葉（pothi）ではなく、冊子本（胡蝶装）ないし折本の一葉と推定される。

【テキスト】[2]

Recto

01R.1 $$ // [yul dang rnams] la / [kya] /// tshal lo //
国 と に 穀物？ 求める

01R.2 /// rgya gar gis m[dzad pa'i lhan khrel] nyi ma'i
... インドがなさった恥？ 太陽の

01R.3 ['khor 'di la 3 rteg 'khor] lo ??? sngags
輪これに 3 脚 チャクラ...真言

01R.4 /// ye ge [yod]
...文字 ある

01R.5 ?[yo]?? ?i ma khal]///
... 駄？ ...

01R.6 /// [kha] ???? [mkhal]
... 口 .. 腎臓？

01R.7 [la] ???? [sngags] ?i [kha na] ///
に .. 真言 の 口 に ...

01R.8 ///
...

01R.9 /// 3 ///
...3...

---

[2] R: recto「表面」、V: verso「裏面」。ローマ字転写は、「ワイリー方式」に基づく。ただし、^ はいわゆる a-chen を表す。[abc]は読みが未確定であることを示す。01R.3,01R.9,02R.6 の[3]と 02R.3 の[2], 02V.3 の「1」はチベット文字の数字である。

Verso

01V.1 /// lta ///

... 見る ...

01V.2 ///

...

【解説】

両面とも10本の朱の罫線と両端に縦線が引かれた中にチベット文が書かれている。紙の破損と文字が薄くなっているために判読が困難だが、わずかに読める語から仏典であることはわかる。Verso面は、紙面の中央に2行のチベット文のみが記されており、タイトルである可能性もあるが十分に判読できない。

(No.104) 2. TIB02

サイズ：縦7.2cm、横10.1cm。

【テキスト】[3]

02R.1 $$ // des gyi ljang dbu gar la // des dbu pa dge' [g]ser la //

彼が Gyi-ljang dbu-gar に 彼 (Gyi-ljang) が Dbu-pa dge'-gser に

02R.2 des / mkhan po [bdra? ya?] ra bo de la // des ^a nan ta 'bhi rya la //

彼 (Dbu-pa) が Mkhan-po bdra-ya? ra-bo-de に、彼(mkhan-po)が A-nan-ta-'bhi-rya に、

02R.3 des [- - shri] la // des bdag la 'o // $$ 2 pa yid ches pa'i

彼(A-nan-ta)が. . に、 彼が 私に である。第2 信頼する

02R.4 lo rgyus ni // gyi [ljang] dbu gar bas 'di la yid byed [cing?] yod par

物語 は Gyi-ljang dbu-gar-ba が これに 想起したもので

02R.5 'dug // de'i dusu [pha spu]n gyi l[jang] [s]gur po zhes bya bas gshin

ある。 その時に兄弟[である]Gyi-ljang sgur-po という者が

02R.6 rje dmar po dang // mno[l] dmar nag lto[gs] pa // mngon 3 du mngag

赤ヤマーリ尊 と ? 赤 黒 飢えたを 実際 に 送る

02R.7 nus [c]ing mi m(ngago /mnga'o) m[th]us bsg[ra]l ba la // nyin 1 khong gis

できるし人(/否) 派遣する (/ある) 解脱 する に 一日 彼が

02R.8 gos bs[g]on kha [dbyus] pa la kho 'khros sde // khyad kyang sa s[dis?]

服 ... に 彼 怒って 差異? も

[3] 転写テキストの下に語義をふしたが、まだ全文の翻訳に至っていないので、暫定的なものである。

02R.9 du zhag bdun [be] mi bzhags zer ba la // dbu gar bas 'di
に 7日 人／否 置くと言うに Dbu-gar-ba が これ

02V.1 [y]i bsgrub pa la bsdad pas / sgur po zhag[s] na kho rang gi
意 成就した に 留まることで、Sgur-po は 日に 彼自身の

02V.2 mthu['] log nas shi ba byungs ngo // yang rkya yul na pha tshan
力 を 誤って 死に 至った。 また Rkya 国 で 父族[の]

02V.3 [1] la rkyal po g[do]n pas // rtsis mkhan gyis [bu] chung gi ro
一人に 王 [が]取り出すので? 会計人 が こども の 体（死体？）

02V.4 la gto byas pas // ja sigi nang du bcug nas dbusu bskug
に gto(の儀礼)を施したので、茶碗の中 に入れて真ん中に（／Dbu に）賭けた？

02V.5 [pa la] // 'phan yul [du] dbu pa dge' gser gyis nyos pa la //
ところ 'Phan-yul で Dbu-pa dge'-gser が 買ったところ

02V.6 rgyal po des dge' gser gyi tshang zla (thad /thid) [na] pa byaso / lan 1
その王が Dge'-gser の 兄弟 ...1 回

02V.7 dge' gyis khyod su la 'jan byas pas // gyi ljang dbu gar
Dge'がお前は 誰 に 夫 したことで Gyi-ljang dbu-gar-ba

02V.8 ba 'jig zer // dge' gser gyis dbu gar ba ngas bsad pas
を滅ぼすと言った。Dge-gser が Dbu-gar-ba を 私が 殺したので

02V.9 [chog] // kho gang nu yod pa'i lo rgyus gyis 1 byas pas / rgyal
可能？ 彼 何 弟？ いる 話 で 一つしたので、

02V.10 po dga' nas [//] mkhan [byas] pas // dbu gar ba ban du byan /
王は 喜んで 作者？ したので、 Dbu-gar-ba を ...

【解説】

テキスト 02R 面の冒頭から 3 行目にかけて、
des A la // des B la // des C la // des D la // des E la // des bdag (= 私)la'o //「彼が A に、彼(=A)が B に...彼(=E)が私（＝著者）に[と法が継承される]のである」
というように、仏法が、インドの聖者から私まで師資相承される系譜が記されている。これは聴聞録(gsan-yig ないし thob-yig)[4]といわれるジャンルの文献に見られる書式である。聴聞録には、「石濱

[4] 聴聞録に関する研究については、Leonard van der Kuijp "Fourteenth Century Tibetan Cultural History VI: The Transmission of Indian Buddhist Pramanavada according to Early Tibetan Gsan-yig." *Asiatische Studien*, vol. 49, no. 4 (1995) 919-941 参照。

報告」が指摘するように、ツォンカパの聴聞録（東北目録 No. 5267）やパクパの聴聞録（『サキャ全書』vol.7, No. 315）[5]などが有名だが、本文書との関連では、ダライラマ5世の聴聞録[6]を調べてみる必要があるだろう。

相承の系譜として、最初にあるべきインドの聖者のところは欠けているが、本文書にあらわれる最初の2名は次のように同定できる。

Gyi-ljang dbu-dkar-ba: gyi ljang dbu gar (02R.1); gyi ljang dbu gar ba (02R.4, 02V.7-8); dbu gar ba (02R.9, 02V.10)： この人物は、11 世紀に活躍しインド、ネパール、カシミールでサンスクリットを学び、仏典のチベット語翻訳にたずさわった訳経者である（*Gangs-can mkhas-grub rim-byon ming-mdzod*、p.266）[7]。彼の伝記は、ダライラマ5世聴聞録にもある[8]。

Dbu-pa dge'-gser: dbu pa dge' [g]ser; (02R.1,02V.5); dge' gser (02V.6)：この人物は、Blue Annals (p. 364)

---

[5] *The complete works of CHOS RGYAL PHAGS PA*, vol. 2. 東京、1968。福田洋一・石濱裕美子『西蔵仏教宗義研究第四巻トゥカン「一切宗義」モンゴルの章』）東洋文庫、1986、p. 160。

[6] Ta-la'i Bla-ma V Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. *Thob-yig Gang-ga'i Chu-rgyun.* Nechung & Lakhar, Delhi 1971.

[7] Ko-zhul Grags-pa 'byung-gnas and Rgyal-ba-blo-bzang-mkhas-grub, *Gangs-can mkhas-grub rim-byon ming-mdzod,* 甘粛人民出版社、蘭州、1992.(Martin 1997: 602).

[8] Dan Martin 氏が当該箇所を送ってくれたので下記に提示する。

@355a * / / gdams pa 'di nyid rtsa khungs ma chod pas bzang ran gyi rtog dpyod med la / phyogs 'dir sbyangs pa'i mkhas pa dag gis sa lugs dang gyi ljang lugs zhes srol mi gcig pa gnyis su bzhed nas / rdzong lugs mgon pod gnyis kyi dkar chag tu / ches tshan phan tshun ye ma 'dres par mdzad pa ni deng sang man ngag gi snying po dang phur bu dang srog gi spu gri'i skor las mgon gnyis tsam ma gtogs dbang lung gi brgyud par sa chen mi bzhugs pas 'khrul gzhi byas pa 'dra ste / mdo smad gzhag ra lha rtser grags pa'i lha gnyan gnas pa'i yul ljongs su 'khrungs pa'i bla ma gyi ljang lo ts'a ba bla chen 'brog mi'i gzhung rdzogs pa'i slob ma gcig yin / rgya gar du byon nas la l'i ta badzra / a'a tsarya dmar po sogs pan grub mang po la zab khyad kyi chos gsan pa'i nang nas mgon po'i skor 'di rnams dbus gtsang sa'i cha stod du mal lo ts'a ba blo gros grags sogs la gnang bar 'phrin las gsang ba dang las mgon zangs gri can gnyis sogs gtso che ba la stod lugs / mdo smad du byon nas ldang 'chang ston pa thogs med mthu rgyas kyis bsgral zhing slob ma tshar dgu ston pa dang gru gu ston pa sogs la sgrub thabs che chung phur bu'i lugs sogs gnang bas smad lugs su grags / gyi ljang gi skor mal la gsan nas sa skya pa chen po thugs gtsigs che bas gsang ba'i tshul gyis nyams len mdzad tshul sogs tshar chen gyi dkar chag chen mor shin tu gsal / sa skya tshad la med pa'i snyan brgyud gser chos kyi

@355b bdag po rnal 'byor dbang phyug yar klungs pa yab sras la 'di'i bka' babs shing dbang rjes gnang yang nyi shu dgu'i mtshan ma gtogs mi mdzad pas dam dog che / snyan brgyud rol mtshor / srol 'dzin phyi ma 'gas 'di pa'i man ngag dang sa lugs bsras pa ni dag dug bsres pa'i gos dang mtshungs gsungs pa brag steng pa nas mal la brgyud pa'i skor la sgos ming spyi la btags sam yang na gsung rgyun dngos gzhi dang mi mthun pa'i yig skyon shor ba yin / gang ltar phan tshun mi bsre gsung ba'i dgongs gzhi gyi ljang lugs 'di gzhan la ltos mi dgos par dbang brgyud man ngag thams cad rkang tshugs pas lha dang man ngag mgon pod dngos gzhi dang mi mthun pa mtha' dag bsre bslad mi byed pa'i don yin gyi 'di sa lugs su mi gtogs par mi bzhed la / rna thos tsam las man ngag gi gnad ma rtogs pa la la dag gyi ljang skor rgya gar du med pa'i bod mar 'dod pa sogs kyi ngan smras byed pa ni / mgon po gshin rje ltar sgrub pa lha bcu bdun ma 'di jo bo chen po d'i pam ka ra / pandi ta 'jam dpal dbyangs / pan chen byams pa gling pa sogs mang po la yang yod pas rang nyid kyis mi shes pa rgyu mtshan du byas te phal cher la ngan smras byed pa'i mus pa dkon grags pa lta bu rnams bag yod pa'i gnas la 'god par 'gyur ro / /

に、Rngog dbu-pa ge-ser として、訳経者 'Gos khug-pa lhas-btsas の弟子の一人として記される人物と同定でき、Gyi-ljang と同じ 11 世紀の人である。同様のことは別の史書にも記されている[9]。なお、彼は Padma-dkar-po の史書（p.412）では、Brdog ges-ra という変わった名前で現れる。

その 2 名につづき「私（＝著者）」に至るまでの 3 名は、はっきり同定できないが、コンテキストから 11 世紀以降 12 世紀から 13 世紀ころの訳経者と推定される。これと同じ系譜が先に述べたダライラマ 5 世の聴聞録にある可能性もあるが、いまのところ同一のものを見いだしていない。

文書の内容は、Gyi-ljang dbu-dkar-ba が語る lo-rgyus「物語／謂れ／歴史」で、そこに Gyi-ljang dbu-dkar-ba の兄弟である Gyi-ljang sgur-po や第 2 の相承人である Dbu-pa dge'-gser とその兄弟などが登場し、「Dge-gser が Dbu-dkar-ba を殺した」という記述(02V.8)もある。また、Rkya-yul(ないし Yang-rkya-yul)、'Phan-yul という地名もあらわれる。前者は、Rgya「中国／インド」の異綴りでなければ不明。'Phan-yul は、古チベット語『年代記（第 4 章)』にはじめて現れ現代にまで至る中央チベットの地名である[10]。

Lo-rgyus の内容については、おそらく同じ話がどこかの文献にあるはずで、その可能性が一番高いのは、本断片に登場する Gyi-ljang lo-tsa-ba「訳経者」によって編集された Mahâkâla テクストのコレクションである Gyi-ljang Po-ti であろう[11]。ただ、筆者の手元には十分な資料がなく、詳細な比較

---

[9] Las-chen kun-dga' rgyal-mtshan, Bka'-gdams-kyi rnam-par thar-pa bka'-gdams chos-'byung gsal-ba'I sgron-me, Jamyang Norbu ed. (New Delhi, 1972): vol. 1, p.204.

[10] 佐藤長『チベット歴史地理研究』（岩波書店、1978）p.402 参照。

[11] 先述した『ダライラマ 5 世聴聞録』のなかに(vol. 1, foll. 349-350)、Gyi-ljang po-ti についての記述があるのを、Dan Martin 氏が送ってくれたので、参考までに下記に提示する。

rtsa ba'i gsum pa bla ma gyi ljang lo ts'a ba nas brgyud pa'i gyi ljang po ti'i skor ni / tshar chen chos kyi rgyal pos mdzad ba'i khog phub yi ge'i dkar chag zab don gnad kyi lde mig / de las byung ba'i chos skor la / sngon du 'gro ba lo rgyus kyi yi ge / snod rung du bya ba dbang dang rjes gnang gi yi ge / rtsa bar gyur pa rgyud kyi yi ge / nyams su len pa sgrub thabs kyi yi ge / dkar chag tu ma 'khod pa'i yi ge dang lnga / dang po la / 'gor bla ma dam pa rnams la phyag 'tshal lo rdo rje nag po chen po'i skye rgyud ni zhes yod pa'i yig rnying /mchod rten/ gur mgon gyi skye rgyud rdzogs so'i mtha' can / 'gor dpal nag po chen po la phyag 'tshal lo de la sngon gyi dus na rgyal bu gcig dang blon po'i bu gcig gis zhes yod pa'i / rdo rje/ lha dngos kyi lo rgyus dang bram ze mchog sred sogs brgyud pa'i bla ma rnams ston pa'i yi ge dge slong dharma gzi brjid la gnang ba lags so'i mtha' can / rdzong chung pa dam pas mdzad pa'i lcam dral gnyis ka'i lo rgyus 'dren pas mtshon te rgyud sgrub thabs bstod pa thams cad du lha mo'i rnam gzhag mdzad kyang lugs 'di la lha mo'i sgros med pas 'thad par ma mngon zhing kun mkhyen rdo rje gdan pa dang rdo rje 'chang tshar pa chos rje gnyis kyang mi bzhed do / / 'di dharma gzi brjid kyis mdzad ces dkar chag na 'dug go /

@349b gnyis pa snod rung du bya ba dbang dang rjes gnang gi yi ge la / dpal nag po chen po'i dkyil 'khor gyi chog bram /rdo rje/ /mu/ ze mchog sred kyis mdzad pa rgya gar gyi mkhan po la l'i ta badzra dang bod kyi lo ts'a ba gyi ljang dbu dkar gyis bsgyur ba / rdo rje gdan pa gcig lha lnga dang gcig bcu bdun pa'i dbang chog yin par bzhed pa gsan yig dang phyag dpe gnyis kar 'dug pa brjod don lhag po mi 'dug pas dpyad dgos par snang ngo / 'di dang tshig sna ring thung cung zad yod pa'i mchan bu dang bcas pa nag po ro 'dzin dang gyi ljang gis bsgyur ba dang dga' ldan pa kun bsod kyis mdzad pa'i dbang chog gnyis dpe ma 'byor bas ma thob / la l'i ta badzra 'di phal cher dur khrod rnams su bzhugs pas mtshan dur khrod nag po ro 'dzin du grags zhes khog phub dang rdo rje gdan pa'i gsan yig tu snang na'ang 'dir dbang chog 'dra min gnyis byung ba'i sngon mar la l'i ta dang phyi ma la nag po ro 'dzin zhes so sor byung ba dang 'byung khungs bsdus don na mi gcig par bshad cing 'jam dbyangs mkhyen brtse'i gsan yig na'ang so sor snang ba brtag dgos 'dug go / 'gor dpal nag po chen po'i dkyil 'khor gyi cho ga 'di la spyi don gsum ste zhes yod pa'i dbang chog rgya gzhung gis /rdo rje/

対照と同定作業は、文書内容からして筆者の興味の外にあるので、より近い専門家によって研究が深化されることを希望する。

以上述べたように、この文書は聴聞録の形式をとった物語(lo-rgyus)であり、梵漢文からの翻訳経典ではなく、チベット撰述の仏典である。11 世紀の訳経僧があらわれることや書体から判断して、13ー15 世紀に作られたと推定する。実際、スタインやコズロフのコレクションの中にも、本文書と類似の書体と様式をもつ同時代の文書がある。本文書が書かれた背景については、スタイン、コズロフ両コレクションのハラホト出土チベット文書全体の中で考える必要がある。

(No.105) 3. TIB03

サイズ不明、文書 A、B とも正方形に近い形状の紺地の紙に 6 行のチベット文が行書体の金字で記されている。

【テキスト】

TIB03 A

A.1]ms kyi dngo[s] /// s[nyung] pa'i
の 実体を 減らす?

A.2] /// ram pa ?? sam [gyi] // byung
ram pa sam gyi 出た

---

bcad dkyil 'khor gshegs su gsol ba'o rdzogs so'i mtha' can dharma gzi brjid kyis mdzad pa / 'di'i rjes su des mdzad pa'i dbang gi lag len dang gcer bu zangs gri can gyi rjes gnang zur 'debs yod 'dug pa ma thob / 'gor ye shes mgon po'i dbang bskur ba'i rjes la zhes yod

@350a * / / pa'i bran bdud rjes gnang gi zur /mu/ 'debs kyi yi ge las mgon gyi rjes gnang rdzogs so'i mtha' can rnams / yig cha dang 'jam dbyangs mkhyen brtse'i gsan yig na rjes gnang gi yi ge rnying pa zhes snang ngo / / gsum pa rtsa bar gyur pa rgyud kyi yi ge la / 'gor bcom ldan 'das rdo rje mkha' 'gro la phyag 'tshal lo 'phags pa mkha' 'gro ma rdo rje gur zhes yod pa'i gtso rkyang ston /mchod rten / pa'i rgyud rdo rje gur gyi le'u bco lnga pa las phyung ba / 'di me 'bar mar yang bzhugs / lha bcu bdun dngos ston pa dur khrod nag po'i rgyud brtag pa bcu gnyis /rdo rje/ /mu/ pa bla ma nag po ro 'dzin dang gyi ljang dbu dkar gyis zhus te gtan la phab pa / 'di'i sngags btu'i le'u'i 'gyur khyad tshigs bcad ma lo pan gnyis kyi g.yar dam brgyud pa zhes dkar chag tu gsungs pa le'u bcu gcig pa 'di kha las logs su ma rnyed cing rje mkhyen brtse'i gsan yig na'ang mi snang ngo / / nag po chen po 'di'i rgyud la dur khrod chen po sku'i rgyud / dur khrod nag po gsung gi rgyud / gri gug brtsegs pa thugs kyi rgyud ces gsum yod pa las glegs bam du yang dur khrod nag po'i rgyud las mi bzhugs shing nyams len man ngag rnams kyang 'di kho na la brten pa'o / / rdzong chung pa'i dkar chag na lha mo srog gi 'khor lo'i rgyud drangs shing gter ma yin pas gyi ljang du 'thad mi 'thad the tshom mdzad 'dug kyang rang lugs la dogs pa tsam yang ma dgos so / /

A.3 tshor gnas su gc[o]d pa'i phyir // na
受 処 に 断つ から na

A.4 tang pha phar de mi ta // 'dus tshogs
tang pha phar de mi ta 集会の?

A.5 snang ba dngos gzung phyir // kha na re
現れを真実と 捉えるから kha na re

A.6 ga la rmig klu // rig pa brtson rang
ga la rmig klu 知 を 求め (精進)

TIB03 B

B.1 dbang po'i zh[en] ///
根 の [欲]

B.2 kar ma rag sha [ki? nya?] ni // ? [po] ///
karma rag sha ki nya ni ?? po ??

B.3 zhen pa bz[l]og pa'i phyir // bhe gha ///
欲を 退ける から bhe gha

B.4 ni song gang ?? // tshul kun zhen
ni song gang 一切の方法は欲を

B.5 pa bzlog pa'i phyir // ? [gnari] sa
退ける から gnari sa

B.6 bha 'du tri // ?? //
bha 'du tri

【解説】

形状や書体から判断して、A (写真左側) と B (写真右側) は、同一文書の表裏ではないが、同じ文書に属していると考えられる。両文書の裏面については写真も情報もないので不明である。A と B の文面は続きではなくギャップがある。B は文書の最後のページと思われる。両文書とも 7 句から成る偈頌で、「- pa'i phyir (～であるから)」の後にダラニ dharani と思われる文が続き、それが繰り返される文章のスタイルであることがわかる。今回、特定の文書との同定には至らず、またダラニと思われる字句の意味は不明であるので、チベット文字をローマ字に転写するに留めた。紺紙金泥の経典だが、pothi ではなく正方形に近い紙に書かれているのが特徴的である。ダラニを含むタントラ経典であろう。年代はハラホト出土文書の後期である 14 世紀から 16 世紀に書かれたと推定する。

4. ハラホト出土チベット文書

この機会に、これまで余り知られていないハラホト、エチンゴル出土のチベット語文書について簡単に紹介しよう。筆者の調査では、スタインコレクション に1041点 、コズロフコレクションに81点あり、それぞれ英国図書館(British Library, Oriental and India Office Collections)とロシア科学アカデミー、セントペテルブルグ支部に保存されている 。武内は、1995 年以来両コレクションの調査を始め、その後、井内真帆（大谷大学）の協力を得てカタログ作成を進めてきた。その結果、ハラホト出土チベット文書には、古チベット語文書様式を保持した11、12世紀の写本から16世紀の版本までが含まれること、またエチンゴル出土文書の年代はそれより遅く20世紀に至ることがわかってきた。

文書内容は、仏典が大部分だが、占い、暦、チベット語・モンゴル語対訳辞書など多岐にわたる。書式、様式もきわめて多様で、古チベット語文書様式の写本から古典チベット語様式の写本と木版本 、西夏語やモンゴル語との2言語文書などがあり、外形も、単葉・貝葉・巻子・折本・冊子本(胡蝶装、袋とじ)と様々である。

従来のチベット文献史では、吐蕃帝国期に始まった古チベット語文献は9世紀半ばの帝国崩壊とともに途絶え、仏教後伝とともに始まる古典チベット語文献の出現までの10ー12世紀は空白期と見なされていた。しかし、最近の研究成果によって、敦煌石窟出土のチベット語文献の多くが、帝国崩壊後の9世紀後半から10世紀に、漢人・コータン人・ウイグル人などによって作られたことが判明した。その後、11世紀初頭に敦煌石窟が閉鎖された後も、12世紀西夏時代まで古チベット語文書の伝統が持続したことを実証するのがハラホト出土文書である。そして、13世紀から14世紀にかけて、古チベット語写本が古典チベット語版本へと移行し、15ー16世紀に古典チベット語の伝統が確立する。その意味で、11世紀から16世紀に作られたハラホト出土チベット文書は、言語・綴り・書体・様式における古チベット語から古典チベット語、写本から版本への推移を写しだす貴重な資料なのである[12]。

本稿の研究対象であるチベット文書は、スタイン文書、コズロフ文書と比較することで、ハラホト出土チベット文書の比較的後期である13ー16世紀に書かれた仏典であると推定できる。文書作成の歴史的・仏教史的背景としては、10世紀の東トルキスタンから河西においてチベット仏教とくに新しく導入・翻訳された密教が、漢人・コータン人・ウイグル人などに広く浸透していたこと、そしてその後、チベット仏教信仰が西夏やモンゴル人に受け継がれたことが挙げられる。ただ、ハラホトやエチンゴルという、チベットやモンゴルはもとより西夏においても辺境の地で長期間にわたってチベット文書がつくり続けられた背景については不明な点がおおく、本文書とスタイン・コズロフ両文書の研究によって今後解明する必要がある。その意味で、今回紹介・提示したチベット文書はチベット文献史において貴重な新出資料なのである。

参照文献略号

Martin 1997：Dan Martin, Tibetan Histories, A Bibliography of Tibetan-Language Historical Works, London: Serindia Publications, 1997.

[12] 武内紹人「帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方学』第104號（2002年7月）106-124 および井内真帆による第11回国際チベット学会における発表(Bonn, 2006、proceedings に掲載予定)を参照。両コレクションのハラホト文書は、武内、井内によってカタログを作成中である、スタイン文書のデータベースは、IDP（国際敦煌学プロジェクト）の website で公開する予定である。

第四部　西夏文字・梵字文書

はじめに

ハラホト出土文書中、西夏文資料はとりわけ多くの割合を占めることは周知のことであるが、西夏語と他言語の併記資料もいくつか確認されている。西夏語－漢語対訳語彙集、チベット文字による音注仏典の他、西夏文資料中にインド系文字で陀羅尼などが記される資料があり、本件もその一つである。

この文書は、いくつかの陀羅尼が列挙される仏教文献の一つである。各陀羅尼の題名が西夏文字西夏語で記され、かなりデーヴァナーガリー文字に近いネワール文字で陀羅尼部分が記される。西夏文字部分はネワール文字に合わせて、左から右に横書きされるが、これはあまり例を見ない表記である。西夏文は一般的に右行から左行に縦書き、仏画などで横書きされる場合でも通例右から左に書かれるからである。印面の楷書体は、字形・字体ともに他のハラホト出土西夏文書と変わらないため、年代推定に寄与しない。

本文献は刊本であり、縦の余白で仕切られた三つの印面からなる。各面は、西夏文字にして 10 文字分、ネワール文字にして 10－12 文字分を１行とし、上から下に９行記される。左部（半分以上を欠損）をＡ、中央部をＢ、右部をＣと便宜上呼ぶことにする。ＡとＢの紙が接合されているかは写真のみでは判断できない。Ｃ右端の断裂が当初からか、後の断裂かも判断しがたい。ＢとＣを例に説明すると、余白があるものの、この二つの部分の各行は連続しており、Ｂ１行目末はＣ１行目冒頭に連続し、Ｃ１行目末はＢ２行目冒頭に繋がる。以下同様である。

Ａは過半を欠損するが、９行目（最終行）末はＢ１行目冒頭に繋がる。Ａ欠損部の更に左側に最低１つの印面があったことは想定できよう。同じように、Ｃ９行目（最終行）最後の西夏文字はおそらく２字欠損するが、更に後続する部分があったことが推測できる。

ハラホトからは、西夏文、漢文陀羅尼が多数出土しているが、その言語学的・仏教学的研究は端緒の段階である。本資料の陀羅尼と、西夏文・漢文で相当する陀羅尼を比較研究することは有意義であろうが、本稿の主旨と離れるため、陀羅尼は転写と最低限の注にとどめることにし、西夏文字部分を中心に訳注を挙げたい。西夏語推定音の表記は荒川慎太郎（1997, 2002: 121-123）などにもとづく。

やや特殊な形態の資料であるため、Ａ各行、Ｂ・Ｃの連続する各行、の順でローマナイズ、訳注を記すことにしたい。01a, 01b-c のように表記する。

なお、陀羅尼部分の転写と内容比定の大半は、早稲田大学文学学術院岩田孝教授のご教示によるものである。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所高島淳教授にも貴重なご意見を頂戴した。お二人に深くお礼申し上げたい。

(№106) 文書番号 F13:W83

断片・首尾欠・9行・天地線有
サイズ：縦　11cm　横　16cm

A 部分

01a　///?a ?
　　…

02a　///(ga) mi ta (jña)
　　…

03a　///? mi ma ?ā
　　…

04a　///? vi ma r?
　　…

05a　///pāṇi hūṃ hūṃ ?
　　…

06a　/// ma ṇi ?a ni
　　…

07a　///憾悉發
　　…国護大

08a　/// viśuddhe hūṃ
　　…

09a　///ta viloki
　　…

BC 部分

01b-c　ni garbha saṃrakṣaṇi ākarṣa — ṇi hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā 發

02b-c　帝㲉弁蹉須 oṃ vimale vi — pule jayavare amṛte hūṃ hūṃ
　　密持仏母呪

03b-c　phaṭ phaṭ svāhā 發帯哉弁 --- 蹉須 oṃ bhara bhara sambhara sa
　　大寒林仏　母呪

04b-c　mbhara indryabalaviśodhani — ru ru cale hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svā

05b-c (h)ā 緲隆絆蕊頲 namaḥ --- saptānāṃ saṃyaksambuddhakoṭī
準提仏母呪

06b-c nāṃ tadyathā oṃ cale cūle cunde --- svāhā 豺敥羱毅蕊(緲)
聖光有天母（総）

07b-c [緲](頲) namo ratnatrayāya namo --- mārīcī devatāyām āvarta?
[持]（呪）

08b-c y[i]ṣyāmi tadyathā oṃ varttāli --- vadāli varāli varāhamu ??

09b-c khi sarva-duṣṭa-praduṣṭānāṃ mukhaṃ --- cakṣu vandha vandha svāhā 豺[敥]///
聖(光)…

【注釈】

07a 頲薂殺: 逐字訳は「国護大」となり、前後の数字を欠くが、後述する『普遍光明焔鬘清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経』中の陀羅尼の名、「随求大護大明王陀羅尼」などと類似する陀羅尼名の一部と考えられる。

08a viśuddhe hūṃ .. : 『普遍光明焔鬘清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経』(大正 1153)の梵本（高楠順次郎 1928a: 632）に、欠損部を含む 08a から 01b-c にかけての陀羅尼と近似するものがある。以下の下線部が対応箇所である。

oṃ amṛtavare vara vara pravara viśuddhe hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā. oṃ amṛta vilokini garbha saṃraksani ākarṣaṇi hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā.

01c-02b 殺瘁緲絆蕊頲: チベット語から訳された西夏語経典には『大密呪受持経』と訳せる経典が存在する（Кычанов et al. 1999: 478-480）。

02b oṃ vimale .. : 『普遍光明焔鬘清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経』の梵本（高楠順次郎 1928a: 632）に、02b から 03b にかけての陀羅尼と近似する部分がある。比較のため、当該梵本部分と本資料部分を挙げる。

大正蔵：oṃ vipule vimale jayavare jayavāhini amṛte hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

本資料：oṃ vimale vipule jayavare amṛte hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā.

03b-c 帚肢: 「寒林（śītavana：王舎城のそばにある、死人を葬った地）」を、西夏語では、「涼しい・林」のように意訳する。

03c oṃ bhara .. : 以降、04c まで、田久保周誉（1950: 69）、八田幸雄（1985: 95）に挙がる『普遍光明焔鬘清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経』の真言とほぼ同一の陀羅尼が記される。

05b 緲隆: 緲 2ja:n（李範文 1997: 411）、隆 1thi:（李範文 1997: 848）はそれぞれ近似音の漢字「準、提」を音写したものと考えられる。12 世紀の西夏語－漢語対訳資料『番漢合時掌中珠』においても、それぞれの漢字注音は「準」及び「提」である（西田龍雄 1964: 209, 218 など）。漢訳の「準提」、あるいは「准提」「准胝」とは、水の神 Cundī を指す。

05b-c namaḥ saptānāṃ .. : 以降、06c まで田久保周誉（1950: 67）、八田幸雄（1985: 66-67）に挙がる準提観音菩薩真言とほぼ同一の陀羅尼が記される。

06c-07b 豺敥羱毅蕊(緲)[緲](頲): チベット語から訳されたと思しき西夏語経典に類似する題名を見出せる。豺敥羱毅蕊緲である。（Кычанов et al. 1999: 437）は 2、3 文字目を音写と考え『聖摩利天母総持』と訳すが、原資料は写本であり、2 文字目を読み誤った可能性もある。筆者は敥羱を摩利支天の意訳と捉え「光有」とした。いずれにせよ、摩利支天 Mārīcī は日月の光線の神格であり、

後続の陀羅尼からも、この陀羅尼が摩利支天に関するものであることは明らかである。陀羅尼を示す漢訳「総持」は、西夏語でも同様の意訳𗥃𗍫を持つ。不鮮明ではあるが、07b の最後の西夏文字は、𗥃を「旁」として明らかに「偏」を持ち、筆者は𗍫を推定した。𗍫は一般に「最も」（李範文 1997: 398 など）を意味するが、「総持」を訳出する例も確認できる。例えば西夏法典中の「仏頂尊勝総持」下線部の訳出に𗍫𗍫が使われる（史金波他 1998: 245 下）。

07b-c namo ratnatrayāya .. : 以降、09c まで、『仏説大摩里支菩薩経』（大正 1257）の陀羅尼に近似する部分がある（足利惇氏 1960: 140, 高楠順次郎 1928b: 263 下-264 上）。対応箇所は以下のようになる。

namo ratna-trayāya namo mārīcī devatāyā hṛdayaṃ āvartayiṣyāmi. tadyathā oṃ varttāli vadāli varāli varāhamukhi sarva-duṣṭa-praduṣṭānāṃ bandha bandha mukhi svāhā.

09b-c mukhaṃ cakṣu: 足利惇氏（1960: 140）によれば、京都大学所蔵梵本のみこのくだりを有するが、語順は cakṣu-mukhaṃ（「目・口」）である。

09c 殿: 右端を欠き、𗤓 2na: などである可能性もある。𗤓は一般に二人称単数を表わす動詞接尾辞である（西田龍雄 1989: 416-417 など）が、この文字だとすれば、当該の箇所では na 「那」の音写と考えられる。後続する陀羅尼も残存せず、これ以上の推測はできない。

【解説】

首尾を欠く断片資料であるが、残存部分は全て、梵字による陀羅尼と西夏文字によるその題名（略題）である。ハラホト出土仏典中、西夏文・漢文の陀羅尼は少なくないが、当該資料のような陀羅尼は珍しい。チベット文字以外のインド系文字を理解し、かつ西夏文字も読める者がこの地に存在したことをうかがわせるという意味でも、重要な資料と言えよう。行配列の形式と小型の版型から、丸められて携帯されたか、あるいは小さな容器などに収納された可能性もある。内容はこれまでに知られた陀羅尼の集合体であり、大まかに言えば、受持・読誦することにより消難の功徳をもたらす内容のものが多い。

参考文献

荒川慎太郎 1997「西夏語通韻字典」『言語学研究』16：1-151.

_____ 2002「西夏文『金剛経』の研究－言語学的研究・校訂テキスト・訳注」博士論文，京都大学.

足利惇氏 1960「摩利支天陀羅尼の梵本」『中野教授古稀記念論文集』（中野教授古稀記念論文集編集委員会編）：135-143.

Кычанов, Е.И. (составитель),Т. Нисида(вступительная статья), С. Аракава(издание подготовлено) 1999 *Каталог тангутских буддийских памятников: Института востоковедения Российской академии наук*. Киото: Университет Киото.

八田幸雄 1985『真言事典』東京：平河出版社。

李範文編著 1997『夏漢字典』北京：中国社会科学出版社。

西田龍雄 1964『西夏語の研究Ⅰ』東京：座右宝刊行会。

_____ 1989「西夏語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典　第2巻　世界言語編(中)』：408-429. 東京：三省堂。

史金波・魏同賢・E. I. 克恰諾夫主編 1998『俄蔵黒水城文献8』上海：上海古籍出版社。

高楠順次郎編 1928a『大正新脩大蔵経』第20巻密教部3　東京：大正新脩大蔵経刊行会。

_____ 1928b『大正新脩大蔵経』第21巻密教部4　東京：大正新脩大蔵経刊行会。

田久保周誉 1950『真言陀羅尼蔵の解説』　東京：豊山教育財団。

※ 本稿では文字鏡研究会の許諾を得た上で、西夏文字に今昔文字鏡フォントを使用している。

第五部　アラビア文字文書

はじめに

ハラホト文書のうち、アラビア文字の文書はあまり多くない。知られているものとしては、大英図書館所蔵のスタイン文書中に、ペルシア語のハラホト文書が 1 点ある（The British Library: Or.8212/1825）。この文書については、*Innermost Asia* に片面の写真が掲載されており（Stein 1928: III, pl.CXXXVII）、E.Edwards による簡単な解説もある（Stein 1928: I, 466）。大英図書館の International Dunhuang Project 画像データベースからは裏表とも閲覧できる(http://idp.bl.uk)。

今回この共同研究において解読することになったハラホト文書の中に、アラビア文字の文書、あるいは部分的にアラビア文字を含む文書が 16 点存在することがわかった。これらの解読に当たって、中央アジアのイスラーム関係文書の専門家である磯貝健一氏と矢島洋一氏に協力をお願いし、またウイグル文書の専門家である松井太氏にも部分的に協力をお願いした。16 点の文書の内訳は、アラビア語 3 点（うち 1 点は使用言語不明だがアラビア語の可能性がやや高い）、ペルシア語 10 点、テュルク語 3 点である。ペルシア語 10 点のうち 7 点が漢語文書末尾の添書であり、その中にはパクパ文字モンゴル語を伴うものが 6 点、テュルク語の語尾を持つテュルク語の単語を文中に含むものが 1 点ある。アラビア語 3 点ペルシア語 3 点については磯貝・矢島の両氏に解読をお願いし、テュルク語 3 点、漢語文書末尾のペルシア語添書 7 点については磯貝・矢島・松井の 3 氏に解読をお願いし、解読結果の取りまとめを宇野伸浩が行った。なお、パクパ文字モンゴル語の添書部分については、モンゴル文文書の担当者が解読を行い、解読結果をここで取り上げている。

内容がある程度明らかになった文書を分類すると、書物の一部だと思われるものがペルシア語 3 点、アラビア語 2 点、行政文書と思われるものがテュルク語 1 点、漢語行政文書末尾の添書であるものが、ペルシア語・モンゴル語 6 点、ペルシア語・テュルク語 1 点である。

解読結果から明らかになったことは、16 点の文書中にスーフィー関係の書物の一部と思われるものと有名なペルシア語叙事詩『フスラウとシーリーン』の一部があったことであり、当時の中央アジアからモンゴル高原にかけてのイスラーム文化を考える上で興味深い。また、漢語行政文書末尾に書かれたペルシア語･モンゴル語あるいはペルシア語･テュルク語の添書の実例が 7 例出てきたことは、文書行政のプロセスを考える上で興味深いと言える。

一　アラビア語文書

(No.107) 文書番号 F20:W60

サイズ：縦 14.5cm　横 13cm

01　/// ?? ('insān/lisān) ????? ///
　　…（人間／舌）…

02 ///['a]jma'īna (kulla-hum?) ṣaġīran 'aw kabīran ///
皆（彼らすべて？）小さくとも大きくとも

03 /// ('abdan?) ('alā?) (ṭā'āti?) ??? ///
（僕を…の信仰に？）…

04 /// ??? (al-yawma) naẖtum 'alā ['afwāhi-him]
…（今日、）われらは［彼らの口］に封印する。

05 /// ?? fa-hum lā yarji'ū[na] ///
…だから彼らは引き返せない。

【解説】

F20:W60 と F20:W61 はともにアラビア語で書かれており、書体が類似している。外形は、細部に異なるところはあるが、ほぼ左右対称である。このことから見て、この2文書は、もともと同一書物の一葉の表裏であったか、あるいは同一書物の数葉が重ねて破られたものの一部である可能性がある。また、F20:W60 は1行目の上に赤線の枠の一部が見えており、頁の上辺を含む断片であることが分かる。短い文の中に『クルアーン』からの引用が F20:W60 に2回、F20:W61 に1回あり、何らかの宗教的な文献である可能性が考えられる。

F20:W60 は、5行分見えているが破損が激しく、判読しにくい部分がある。2行目に『クルアーン』第2章第282節の一節から、4行目に同第36章第65節の一節から、5行目には同第2章第18節の一節からの引用が見られる。該当箇所の井筒俊彦訳を挙げておく。[ ]内は本文書において破損している箇所。

ṣaġīran 'aw kabīran (2-282)「小さくとも大きくとも」(井筒俊彦 1964: 上, 69)

al-yawma naẖtum 'alā ['afwāhi-him] … (36-65)「今日は、彼らの口に封印してやる。…」(井筒俊彦 1964: 下, 33)。

[ṣummun bukmun 'umyun] fa-hum lā yarji'ū[na] (2-18)「つんぼで、唖で、めくらだから、ひっ返そうにも由がない」(井筒俊彦 1964: 上, 13-14)。

(№108) 文書番号 F20:W61

サイズ：縦 15.5cm　横 12cm

01 /// 'alay-him bi-mā ẓalamū fa-hu[m lā] ///
「…彼らが働いた悪事によって、彼らに…そして彼らは

02 yanṭiqūna bi-ḥaqqi KHY'Ṣ wa-bi-ḥa[qqi] ///
口が利けなくなってしまう。」「カーフ・ハー・ヤー・アイン・サード」に関して、また、…に関して、

03 wa-ṬS wa-YS wa-al-qur'ān ??? ///
と「ター・スィーン」と「ヤー・スィーン」と『クルアーン』…

04 wa-bi-ḥaqqi ahiyyā šarā hiyyā ///

また、「アヒッヤー・シャラー・ヒッヤー」に関して…

05 wa-(yūnus al-naḥl al-faj[r]?) ///
また、(「ユーヌス」と「蜜蜂」と「暁」？) …

06 ?????????? ///
…

【注釈】

02 bi-ḥaqqi: 「～に関して」
02 KHY'Ṣ: كهيعص は、『クルアーン』「マルヤムの章（第19章）」冒頭の文字。
03 ṬS: طس は、『クルアーン』「蟻の章（第27章）」冒頭の文字。
03 YS: يس は、『クルアーン』「ヤー・スィーンの章（第36章）」冒頭の文字。
04 ahiyyā šarā hiyyā: モーセに帰される、神の名に関する言葉。詳細については下記の解説を参照。
05 yūnus: 『クルアーン』「ユーヌスの章（第10章）」を指すか。
05 al-naḥl: 『クルアーン』「蜜蜂の章（第16章）」を指すか。
05 al-faj[r]: 『クルアーン』「暁の章（第89章）」を指すか。

【解説】

この文書はアラビア語で書かれており、1行目末尾と2行目冒頭の間に"ā"の一語しか入る余地がなく、頁の右辺と思われる紙の端の直線が残っていることから、この文書は右端に欠けがないことがわかる。

1～2行目にかけて、『クルアーン』第27節第85節からの引用が見られる。該当箇所の井筒俊彦訳を挙げておく。[ ]内は本文書において破損している箇所。

[wa-waqa'a al-qawlu] 'alay-him bi-mā ẓalamū fa-hu[m lā] yanṭiqūna「そうして、散々悪事をはたらいて来た報いとして最後の断は下り、彼らは一言も言えなくなってしまう」(井筒俊彦 1964: 中, 238)。

2～3行目に見える كهيعص (KHY'Ṣ)、طس (ṬS)、يس (YS)の語は、それぞれ、『クルアーン』「マルヤムの章（第19章）」、「蟻の章（第27章）」、「ヤー・スィーンの章（第36章）」の冒頭の文字である。したがって、この部分は『クルアーン』の「断片文字 ḥurūf muqaṭṭa'a」(『クルアーン』のいくつかの章の冒頭にある謎の文字列) に関する記述と思われる。

4行目の ahiyyā šarā hiyyā は、モーセに帰される、神の名に関する言葉である。その点について説明しておきたい。まず、クルトゥビー (al-Qurṭubī, 671/1272年没) の『クルアーン注釈 *al-Jāmi' li-'aḥkām al-Qur'ān*』の2章255節の注釈に、以下のような伝承が伝えられている (al-Qurṭubī / al-Baradūnī 1987: 271)。

> 以下のように言われている。イスラエルの民がモーセに偉大なる神の名について尋ねると、モーセは彼らに言った。「アヤー・ハヤー・シャラー・ハヤー。ayā hayā šarā hayā」すなわち、「生ける者よ、自立する者よ」の意である。

この伝承は、以下の『旧約聖書』「出エジプト記」3章13-14節に基づくと思われる。

> モーセが神に言った、「御覧下さい、わたしがイスラエルの子らのもとに行き、『あなた方の先祖の神がわたしを遣わされた』と彼らに言う時、彼らがわたしに『その名前は一体何というのか』ときいたならば、わたしはどう彼らに答えたらよいのです」。神がモーセに言われるのに「わたしはあらんとしてある者である」。また言われた、「イスラエルの子らにこう言いなさい、『〈わたしはある者〉がわたしを君たちのもとに遣わされた』と」(関根正雄 1969: 12-13)。

この中の「わたしはあらんとしてある者である」の部分はヘブライ語では

אֶהְיֶה אֲשֶׁר אֶהְיֶה ehyeh ašer ehyeh

である。本断片に見える「アヒッヤー・シャラー・ヒッヤー」も、クルトゥビーの述べる「アヤー・ハヤー・シャラー・ハヤー」と同様、このヘブライ語の発音を伝えたものと思われる。

(No.109) 文書番号 F135:W73

サイズ：縦 6.5cm　横 11.5cm

01 /// (fa-'ará?) (bi-šayḫ?) ??? /// (bi-hā?) ///
02 /// ?? ('iki-him?) (mālu-hā/mā la-hā) /// ???? ///

【解説】
語尾などからアラビア語である可能性がやや高いが、これだけではまったく何の文書か判定できない。一行目の bi-šayḫ「シャイフに」は、nasīj「織物」、yusabbiḥu「(彼は) 賛美する」などの読みも可能である。

二　ペルシア語文書

(No.110) 文書番号 F20:W63a

サイズ：縦 7.5 cm　横 15.5 cm

01 /// dāram (wa) (hīč) (ḥiss?) ///
私は持っている。(いかなる感覚も？) ...

02 /// (wa?) (dard-i ān?) (dar) (dil) (manzila?) ??? /// ??? ///
(その痛みは心の中で？) ...

03 /// [ā]dāb-i darwīš dar darwīšī ba-dān-ki ādāb-i darwīš dar bāṭin (riḍā?) ///
デルヴィーシュ道におけるデルヴィーシュの作法　以下のことを知りなさい。デルヴィーシュの作法は、内面に (満足？) ...

04 /// ??? darwīšī rā dar bāṭin sih ḥālst yakī (agar / ānki) darwīšī (šāda šud?) wa (šākir) (ki?) (dāna[d]?) ///
デルヴィーシュには、内面に三つの心的状態がある。ひとつは、デルヴィーシュが...(感謝する) ...

05 /// ??? (az?) (ḥaqq?) (ta'ālā?) (ki?) (ba-awliyā'-i?) (ḫwud?) kunad dar (ḥādiṯa?) (ānki?) (šāki[r]) ([buwa]d?) (bārī / yārī) (kārih) (nabuwa[d]?) ///
... (自分の聖者たちに？) ...する... (感謝する) ... (嫌悪はしない。)

06 /// [ḫu]dāy ta'ālā rā ?????? (kārih) (buwad) (čunānki) (kasī?) ḥijāmat kunad kārih (buwad) dard rā (kand?)
至高なる神を...嫌悪する。(誰かが？) 瀉血する (如く)。...嫌悪する。痛みを (取った？) ...

07 /// (daraja)(rasa[d]?) /// ?? ḫudāy ta'ālā kārih buwad (badīn) (wa) (īn)
... (段階に達する？) ...至高なる神...嫌悪する... (そしてこの)

08 /// ?? (kunad?) (ki?) (az?) ḫudāy ta'ālā
...至高なる神

【注釈】

03 [ā]dāb-i darwīš dar darwīšī: 下線で示した部分のみ朱でかかれており、以下の節のタイトルであることがわかる。dar darwīšī の意味は「デルヴィーシュたることについての」あるいは「デルヴィーシュ道における」。

04 ḥāl: 心的状態。スーフィズムの用語で、修行者の心に生起する状態・気分・感情を指す。『岩波イスラーム辞典』の「ハール」の項目参照（大塚和夫ほか 2002: 788）。

【解説】

F20:W63a と F20:W63b はペルシア語で書かれており、文書の外形がちょうど左右逆であることからみて、同一文書の表裏である可能性が高い。darwīš などの語から判断して、なんらかのスーフィー文献の一節を書写したものであり、スーフィー関係の書物の一葉の表裏であると思われる。ただし、文献の同定には至らなかった。

(№111) 文書番号 F20:W63b

サイズ：縦 7.5cm　横 15.5 cm

01 /// ??? (ān) (bāšad) ki ??? ///

02 /// ??? darwīš ??? /// ??? (hargiz) (badān) (daraja) (narasa[d]?) ///
デルヴィーシュ... (決してその段階に達しない？) ...

03 /// rā būd čunānki dar (ḥiss) ast ki (darwīšān) gila kardand pīš-i rasūl 'alay-hi al-salām (ki?) (tawāngar[ān]?) ?? ///
(感覚？) にあるように。(デルヴィーシュたちが) 使徒—彼ニ平安アレ—の前で不平を言った。「(富者たちは？) ...

04 /// ??(zadand?)(ki) ṣadaqa wa zakāt wa ḥajj wa jihād mī kunand wa mā namī tawānīm kardan rasūl 'alay-hi al-sal[ām] ///
...自発的喜捨と定めの喜捨と巡礼と聖戦を彼らはしているのに、私たちはすることができません。」使徒—彼ニ平安アレ—は、

05 dar[wī]šān rā nawāḫt ki (firistāda) būdīd (kuntu?) marḥaban bi-kum wa-bi-man ji'tum min 'indi-him az nazdīk-i (qawm?) ??? ///
デルヴィーシュたちをなぐさめた。「汝らは、『(私は？) 汝らと、汝らを送った人々を歓迎する』【といわれる如く】(...人々の？) 許から (送られた) のだ。...

06 man īšān rā dūst mī dāram īšān rā ba-gūyīd ki har ki bar darwīšī (sayr?) kunad barāy-i ḥaqq ta'ālā ?? ///

私は彼らを気に入っている。汝ら、彼らに言ってやるがよい。「デルヴィーシュ道を（行く？）者は誰でも、至高なる神のために…

07 sih (ḫil'at?) būd (ki?) (hargiz?) (tawāngarān) rā nabūd ?? dar (bihiš[t]?) ??? ki ?? /// (bihišt?) (čunān?) ///
三つの（賜衣が？）あった。それは富者たちには（決して？）ないものであった。…（天国？）で…（天国？）…

08 ??? (dunyā?) (sitāragān?) ///
（現世？）（星々？）…

【注釈】

05 (kuntu?) marḥaban bi-kum wa-bi-man ji'tum min 'indi-him: ハディースか。イブン・ハンバル (Ibn Ḥanbal, 241/855 年没) のハディース集に、marḥaban bi-kum wa-bi-man ji'tum min 'indi-hi「ようこそ、汝らと、汝らが彼の許から来たところの人」とある (*Musnad Aḥmad*, Musnad al-mukṯirīn min al-ṣaḥāba, Musnad 'Abd Allāh b. Mas'ūd)。

(№112) 文書番号 F116:W96c

サイズ：縦 12cm　横 14.5cm

1．アラビア文字

01 /// (AMT?) namūda ki (bāz ḫwāst?) wa (īn?) ??? ///
…した。(問責？) と（この？）…

【注釈】

01 AMT: F116:W565 文書のペルシア語添書の末尾が iqāmat namāyand と読めるならば、この-AMT も iqāmat の一部かもしれない。

2．パクパ文字

01 ///ʔu t'u la
…のため。

【解説】

F116:W96 は 3 断片からなり、最小断片の F116:W96c に、アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語の添書が各 1 行ある。李逸友 1991 がこの文書を「錢粮類」に分類するように（李逸友 1991: 107)、漢文の内容は「見在錢粮」の管理に関係することは確実だが、破損缺落部分が多いため詳細は不明。

【漢語・ペルシア語合璧文書の全体に関する解説】

今回分析の対象としたアラビア文字文書群の中には、漢語官文書末尾にアラビア文字ペルシア語で添書したものが含まれる。これらのアラビア文字をはじめとする非漢語添書の情報はすでに『黒城出土文書』（李逸友 1991）でも提示されている（同書では「亦思替非文字」として言及される）が、転写・解読案は示されていなかった。さらに、原文書を検討した結果、添書の文字・言語の情報は少なからず訂正を要することが判明した。以下に文書番号順に列挙し、添書の情報を整理して

おく。

①F116:W96c（＝李逸友 1991: 107）：アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語添書各 1行。

②F116:W544（＝李逸友 1991: 176）：アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語添書各 4行。

③F116:W556（＝李逸友 1991: 119）：アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語添書各 1行。

④F116:W565（＝李逸友 1991: 139）：アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語添書各 1行。

⑤F116:W566（＝李逸友 1991: 138）：アラビア文字ペルシア語添書 1 行。パクパ文字モンゴル語添書 2 行。

⑥F116:W582（＝李逸友 1991: 119）：アラビア文字ペルシア語・テュルク語添書 1 行。李逸友はこの添書に言及していない。

⑦ARAB01：アラビア文字ペルシア語添書 1 行。パクパ文字モンゴル語添書 2 行。漢語部分は残存せず、添書部分のみ。李逸友 1991 には掲載されていない。

①～④のパクパ文字はきわめて草書化されているため、李逸友 1991 ではいずれもウイグル文字モンゴル文と誤解されている。また①のアラビア文字添書もウイグル文字モンゴル文と誤解され、⑥のアラビア文字添書は言及されていない。⑦は掲載されていない。

⑦を除く 6 件の文書の漢語本文についてみれば、一部には缺落部もあるものの、いずれも「右、劄付亦集乃路総管府。准此」という定型文言で結ばれている。従って、これらの漢語文書は、亦集乃路総管府の上級官庁である甘粛行省（甘粛等処行中書省）が発信した劄付とみなすことができる。

さて、モンゴル政権が発行した漢語の行政文書には、しばしば非漢語の添書がなされた。第 2 代モンゴル皇帝オゴデイ（太宗）時代に中華地域に発行される漢語官文書には、モンゴル語・ウイグル語を解する書記官僚がその内容をチェックした上で、文書末尾の年月日の前後にウイグル文字モンゴル語の指示が添書されていたことが、『黒韃事略』や草堂寺コデン太子令旨碑の分析から知られている（杉山正明 1990 ＝杉山正明 2004: 450-451; 森安孝夫 1997）。ハラホト出土文書に目を転じると、納税命令文書 F193:W13（李逸友 1991: 184）に「見た (üǰeben)」というウイグル文字モンゴル語添書（松川節 1995: 112; 松井太 2002: 99-100）、また末尾と思しき部分に「放糧簿」という漢語題記をもつ大英図書館所蔵 Or. 8212-764 文書にも、ウイグル文字モンゴル語で大麦の数量を記録した例がみえる。なお、Or. 8212-764 文書は Maspero により漢文 2 行のみが移録されているが，モンゴル文には言及がない（Maspero 1953: 209, No. 513 (i); Cf. 松井太 2004a: 161）。

一方、モンゴル語だけでなくアラビア文字ペルシア語の添書も加えられる例として、曲阜亜聖兗国公廟宛て中書礼部発行の禁約命令榜文（Chavannes 1908, Nos. XXVI, XXVII）が知られる。この榜文には、パクパ文字モンゴル語で「諸人を禁約する榜文 (deleme haran-i qoriγulqu bang bičig)」（照那斯圖 1991: 147-150; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004: 422）、ペルシア語で「記念（として？）この石に押印。この場所に馬を連れて…する人は、そのために入るべからず。…面倒を起こすべからず。アフマド・ブン・フサイン・ブン・ムハンマド・ブン・ハサン・アフマドが作成した。この石に…もし外に送るならば…勝利があらんことを。…年に」（Pelliot 1913: 187; Cf. 田坂興道 1964: 700-701）という添書が記されている。

今回検討した上記ハラホト文書群を、これらの諸例ともあわせ検討するならば、モンゴル系・テュルク系・ムスリム出身の中書省・行省の上級官僚が、漢語文書の内容をチェックした上で、それに対応・関連する行政上の指示を添書したという状況が推測できる。上記①～⑦の劄付の発行者たる甘粛行省のムスリム高官としては、楊志玖（2003: 247）が掲げる 3 名の他に、ラシード『集史』がクビライ時代末期の「甘州 (Qamjū) の省」すなわち甘粛行省の長官として言及するハージャ (Ḫwāja)という人物が知られる（Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies (Tashkent), MS. 1620, fol.177a; Boyle 1971: 283）。このような添書による指示に、オゴデイ時代以来のモンゴル政権の行政伝統を看取することも可能であろう。

ただし、上掲の中書礼部の禁約命令は、そもそも「榜示」つまり官吏以外の一般民衆にも周知さ

せることを想定していた。これに対し、今回検討した上記①～⑦ハラホト文書群のペルシア語・モンゴル語添書は、河西地域の行財政を統括する甘粛行省がその管轄下にある亦集乃路総管府へ実務処理のために送達した漢語文書に記されたものであり、モンゴル政権の地方行政システム・文書伝達過程の実態を示す上できわめて興味深い。

この他、末尾の定型文言から前掲①～⑦と同様に甘粛行省が発信した箚付と考えられる漢語文書として、以下の7点を李逸友1991から抽出できる。

⑧F116:W160（李逸友1991: 137）
⑨F116:W433（李逸友1991: 175-176）。
⑩F116:W434（李逸友1991: 176-177）：パクパ文字1行あり。
⑪F116:W543（李逸友1991: 176）。
⑫F116:W561（李逸友1991: 136）：ウイグル文字モンゴル文1行・パクパ文字年款あり。
⑬F116:W564（李逸友1991: 107）：ウイグル文字モンゴル文2行あり。
⑭F116:W581（李逸友1991: 138-139）：パクパ文字年款あり。

①～⑭は、料紙（「宣紙」）の上でも共通することが着目される。また前掲①～④の例も勘案すると、⑫⑬でウイグル文字モンゴル文とされている添書は実際にはパクパ文字モンゴル文の可能性もある。ただし、ペルシア語添書の有無という相違の歴史的背景については、漢語文書の内容をふまえた上であらためて検討する必要がある。

(№113) 文書番号 F116:W544

サイズ：縦48.5cm　横130cm

1．アラビア文字

01　/// ??? ?? ??? (maṣāliḥ?) (nāmuḥtāl?) (radd?) (rasānad?) (ki?) (MṬ?) ///
（求められている？）…（公益の？）…（を虚偽なく返し届けるように？）

【注釈】

01 MṬ: F116:W556文書に maṭlūb の語が見えるので、これらの添書がある程度定式化されていたとすれば、このMṬもmaṭlūbの一部である可能性が高い。

2．パクパ文字

01　ba
…

02　c'i
…

03　///?
…

04　///? nu t'u la
…のため。

【注釈】

01 ba, 02c'i, 03///?: 1～2 行目は押印してある部分に書かれているパクパ文字を転写したものである。また 3 行目は僅かに文字の一部が見えるが、どのような文字かは不明である。

【解説】

この文書は上掲⑨F116:W433, ⑩F116:W434, ⑪F116:W543 と同一の案件に関係する。李逸友 1991 はこれらを「站赤類」の「簽補站戸文巻」としてグループ化している（李逸友 1991: 176)。この文書群は、駅伝の運営を負担する站戸が各地で疲弊・消耗しているため、新たに民戸から站役を負担できる人戸を選抜し戸籍を作成することを命じる中書省の決定をうけ、甘粛行省が亦集乃路総管府に送達した劄付である。年代決定の上では、⑪F116:W543 に「伯顔太師」＝メルキト族バヤン(Bayan)、「撒敦答剌罕」＝サドン=ダルハン（*Sadun, キプチャク族エルテムル El-Temür > 燕鐵木兒の弟)、「孛羅右丞」＝ボラド右丞（Bolad）ら、順帝トゴンテムル時代の中央政府の権臣が言及されているのが重要となる。バヤンが太師号を賜るのが元統元年（1333）六月、一方サドンは後至元元年(1335)三月には死去しているので、劄付発行もこの間のこととなる。

(№114) 文書番号 F116:W556

サイズ：縦 31.5cm　横 62.5cm

1．アラビア文字

01　/// (YT?) rā (yābad) ki maṭlūb ast
　　求められている…を（得るように）

【注釈】

01 YT: F116:W565、F116:W566、ARAB01 文書の添書には明らかに al-wilāyat と読める箇所があるので、この-YT も wilāyat の語の末尾である可能性がある。

01 yābad: yābad「得るように」と読んだが、namāyad「…するように」とも読み得る。

2．パクパ文字

01　///qu yin t'u la
　　…のため。

【解説】

アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語の添書各 1 行。この文書は、李逸友が「至正 11 年考較銭粮文巻」に分類しているように（李逸友 1991: 119）、前年至正 10 年(1350)の財政収支をチェックするよう亦集乃路総管府に甘粛行省が命令したもの。

(№115) 文書番号 F116:W565

サイズ：縦 35.5cm　横 69cm

1．アラビア文字

01　/// (AH?) ġallāt-i hāḏihi al-wilāyat rā (iqāmat) (namāyand?)

この地域の穀物の…を（整えるように？）

2．パクパ文字

01 ///? yin c'a ŋun t'u la
…の倉【倉糧】のため。

【注釈】

01 c'a ŋ: ウイグル文字表記では sang。漢語「倉」に由来するウイグル語 sang～tsang 「倉、御倉；（倉に納入される）穀物；地税」からの借用語。蒙漢合璧碑文では「地税；倉糧」と対訳される（松井太 2004b: 8-9）。漢文の文脈に鑑みて、本処ではウイグル語と同様に「倉に納入される穀物」の意であり、具体的には漢文で問題となっている軍糧をさすものであろう。

【解説】

アラビア文字ペルシア語・パクパ文字モンゴル語の添書各 1 行。李逸友は、この文書を「大徳 4 年 (1300) 軍粮文巻」に分類する（李逸友 1991: 139）。カイドゥ (Qaidu) に率いられた中央アジアの反元朝勢力に対抗してモンゴル高原に派遣された元朝軍（中央軍団とチュベイ王家軍）への軍粮支給に関係する文書。内容は「去年は不作のため（軍糧として支給するための）在庫の穀物が少ない」という亦集乃路総管府の訴えに対し、甘粛行省があらためて現地から粮食の調達を命じたもの。

(No.116) 文書番号 F116:W566

サイズ：縦 34.5cm　横 63cm

1．アラビア文字

01 /// [hāḍi]hi al-wilāyat rā hijdah kīsa (waq'?) namā [yad/yand?] ///
この地域（の…？）を…18 袋（尊重するように？）…

【注釈】

01 waq': waq'「考慮、尊重」と読んだが、daf'　撃退、排除」の可能性もある。
01 namā: namāyad あるいは namāyand「…するように」の一部か。

2．パクパ文字

01 ši
…

02 leu
…

【注釈】

01 ši, 02leu: 押印してある部分に書かれているパクパ文字を転写したものである。この文書には、パクパ文字の添え書きがはっきりとは確認できないが、アラビア文字の左上の焼けこげの部分に、ごくわずかに何らかの文字の一部が見えている。これがパクパ文字による添え書きの可能性がある。

【解説】

アラビア文字ペルシア語添書1行、パクパ文字モンゴル語添書2行。この文書は、前掲 F116:W565 と同様に「大徳4年 (1300) 軍粮文巻」に属し、内容も F116:W565 とほぼ共通する(李逸友 1991: 138)。

(No.117) 文書番号 F116:W582

01 /// ???? dar taḥṣīl-i (arpa) (wāqi'?) (namāyand) ??? (yarlīγindïn?) ????
···大麦の徴収について、···するように。···の勅令にて。

【注釈】

01 dar taḥṣīl-i arpa wāqi' namāyand: この部分は、テュルク語の単語も含むが、文章としてはペルシア語。

01 arpa: テュルク語で「大麦」(Clauson 1972: 198)。ハラホト地域での税粮が主に小麦と大麦で納入されていたことも勘案できる。李逸友 1991: 183-185 の納税命令書・納税証明書類を参照せよ。

01 wāqi': ここは wāqi'のようにも見えるが、namūdan の3人称複数現在形 namāyand とともに複合動詞を形成しているはずであり、wāqi'ではやや意味が通じにくい。F116:W566 文書の waq'と関係あるか。

01 yarlīγindīn: テュルク語 yarlïγ~yarlïq「命令、勅令;詔書」(>Mo. jarliγ~Chin. 聖旨) に3人称位奪格語尾 -indïn「~にて」が後続したもの。この語の直前を qān と解読することができれば、漢文行政文書にみえる定型表現「皇帝聖旨裏」の対訳表現と考えられる。なお、フレグ=ウルス発行のペルシア語特許状にも、文書発給者が依拠する権威の所在を示すために、フレグ=ウルス当主名に yarlïγindïn を後続させた「~の勅令にて」というテュルク語表現が散見する。Herrmann 2004: 73-78(V), 79-83(VI), 90-96(VIII), 97-101(IX), 118-123(XIV)参照。

【解説】

漢文の長文の末尾にペルシア語・テュルク語の文が付されている。この文書の漢文面は、『黒城出土文書』(李逸友 1991) の119頁に採録されている。ただし、そこではペルシア語・テュルク語の文の存在に言及していない。

<漢文面も含めた文書全体についての考察>

李逸友 1991: 119, F116:W582, 宣紙、行書。

(1) 01 [ ]
02 [ ]定各路達
03 [魯花赤]
··· (中缺) ···

(2) 01 [ ]□□□□□□□處委部粮正官
02 [ ]緻連収粮倉分無欠通関申省
03 [ ]□□違限不見申到省府□□
04 [ ]□勒部粮官吏催併閉納斉足緻
05 [連]首領官吏違限的奉招状申来□□
06 [ ]
07 [ ]

08　[　　]
09　[　右箚付亦集乃路]總管府准此
10　（ペルシア語・テュルク語1行）

【注釈】

(2)01 部粮正官：類似の表現として黒城漢語文書 F116:W463「部粮官」、F116:W313「部粮正官」がある（李逸友 1991: 115-116）。F116:W463 で「部粮官」と呼ばれているのは亦集乃路総管府の同知セヴィンチ=ブカ（Sävinč-Buqa > 小雲赤不花）という人物（李逸友 1991: 115, F116:W465 にも登場する）であるから、「部粮（正）官」は「粮斛を担当する正規の官」の意であって、官職名ではないと思われる。

(2) 04-05 催併閉納斉足繳[連]：類似の表現として黒城漢語文書 F116:W463「収納斉足」、F116:W471「赴倉尽納斉足繳連無欠」、F116:W610「催并閉納斉足繳連無欠通関」、F116:W313「赴倉閉納」という用例がある（李逸友 1991: 115-116）。「催併」は「催并」（催促する）に同じか。「閉納」＝「掲借閉納」＝すでに税粮を完納している人戸からさらに税粮を出させて滞納者の穴埋めをさせること。『大元通制条格』巻 14・倉庫・掲借閉納（1930 年北平図書館影印抄本 14/17a-17b; 岡本敬二 1975: 89-90）、『大元聖政国朝典章』典章 24・戸部 10・租税・納税・禁勒借錢閉納（1976 年国立故宮博物院影印元刊本 24/3a-3b）参照。「斉足」は「すべてそろえる」ということであろう。F116:W618（李逸友 1991: 116）にみえる「納足」は、上記諸例の「閉納斉足」の略記か。

【解説】

『黒城出土文書』（李逸友 1991: 119）は本文書を「至正 11 年(1351)考較錢粮文巻」の一つとみなして移録する。しかし上記注釈に掲げた諸例に着目すると、むしろ「大徳 11 年(1307)税粮文巻」（李逸友 1991: 115-116, F116:W471, F116:W618, F116:W313, F116:W610）との類似点が多い。この「大徳 11 年税粮文巻」は、民戸に税糧を期限内に亦集乃路総管府の「倉分（くら）」へ送納させ、その税収額を行省に報告せよ、という甘粛行省からの「箚付」の指示により、税収額を報告するための関連文書群である。おそらく、本 F116:W582 文書こそが甘粛行省から亦集乃路総管府への箚付そのものであろう。

(No.118) ARAB01

サイズ：縦 29cm　横 18cm

1．アラビア文字

a 01　///? wa ġallāt-i
　　の穀物

b 01　/// hāḏihi al-wilāyat ///
　　この地方

【注釈】

a 01 ///?wa ġallāt-i, b 01 /// hāḏihi al-wilāyat///：アラビア文字の部分は、二つの小さな断片に分かれているが、小断片 a の右辺の上半分と小断片 b の左辺の下半分がちょうどぴったり合わさり、1 行のペルシア語文として、wa ġallāt-i hāḏihi al-wilāyat（この地方の穀物）と読むことが可能である。

2．パクパ文字

a 01　///? la ///
　　…

c 01　///(n)e me ·ul k'u y///
　　…（加えさせる）…

【解説】

この文書は、アラビア文字とパクパ文字が書かれている小さな断片 a、アラビア文字だけが書かれている小さな断片 b、パクパ文字だけが書かれている比較的大きな断片 c の 3 断片からなる。文字数がわずかであり文脈は分からないが、この文書のアラビア文字の書体は、前掲の漢語文書 F116:W566（李逸友 1991: 138-139）の末尾のペルシア語添書の書体と非常に似ている。また、ペルシア語文としては、この F116:W566 末尾のペルシア語添書の前半部分、および前掲の漢語文書 F116:W565（李逸友 1991: 139）の末尾のペルシア語添書の前半部分とほぼ同文である。これらのことから考えて、これらの 3 断片は、漢語文書末尾の添書の一部である可能性が極めて高い。

(№119) 文書番号 Y5:W1

サイズ：縦 5.5cm　横 7cm

01　[bar ū] zad pīl [pā-yi ẖwīštan rā]///
　　槍（ヒールバー）の一撃を彼にみまい、

02　[šīka]st uftād bar ẖaṣm-i ja[hān-sūz]///
　　さしも凶暴な敵も敗北を喫し、

03　zi ẖūn čandān rawān šud [jūy dar jūy]///
　　滔々と流れる血潮は、

04　///??????///
　　…

【解説】

この文書は、ペルシア語で書かれており、ニザーミー（Niẓāmī Ganjawī, 1209 年？没）の叙事詩『フスラウとシーリーン *H̱usraw wa Šīrīn* 』の断片であることが判明した。和訳は岡田恵美子訳による（ニザーミー／岡田恵美子 1977: 110）。

この部分は、「フスラウがバフラームと戦い、バフラーム・チュービーンが逃走したこと」の章のうち三～四バイト分にあたる。[　]内は本文書において破損している箇所。

[bar ū] zad pīl [pā-yi ẖwīštan rā　bi-pā-yi pīl burd ān pīl-tan rā]
[šika]st uftād bar ẖaṣm-i ja[hān-sūz　bi-farruḫ fāl ẖusraw gašt pīrūz]
zi ẖūn čandān rawān šud [jūy dar jūy　ki ẖūn mī-raft wa sar mī-burd čūn gūy]
[kamand-i rūmiyān bar šakl-i zanjīr　ču mū-yi zangiyān gašta garah-gīr]
[bi-hindī tīġ har kas rā ki dīdand　saraš čūn ṭurra-yi zangī burīdand]

[damāġ āšufta šud bahrāmiyān rā　　čunānki az rawšanī sar-sāmiyān rā]

最初の三行は上記の三バイトに完全に一致するが、続く四行目は次のバイトに一致しない。むしろ三バイト下の šud や bahrāmiyān の一部のように見える。

なお、上記テキストはテヘラン大学刊本（Niẓāmī / Zanjānī 1376: 100）による。同刊本の番号付けでは2,282〜2,287バイト目にあたる。

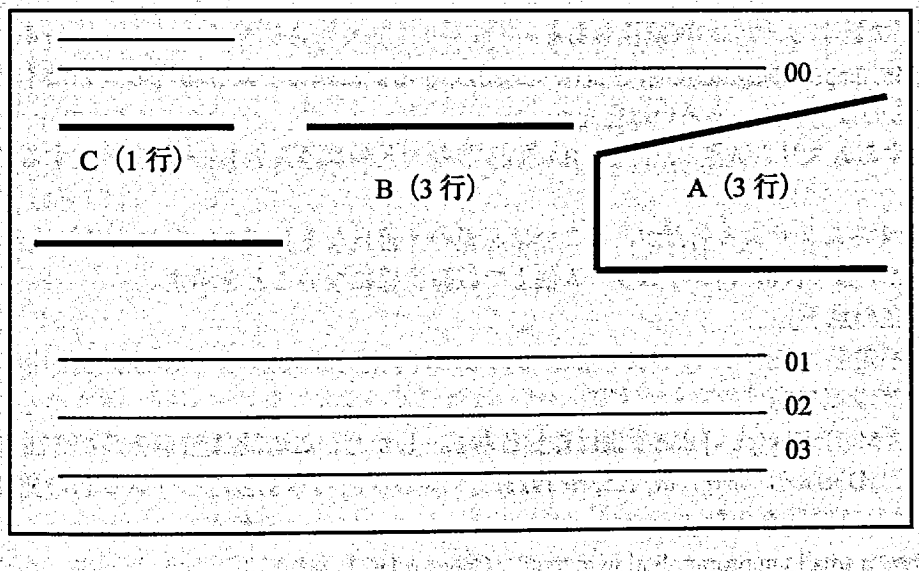
該当部分の全体の和訳を、岡田恵美子訳によって以下に挙げておく（ニザーミー／岡田恵美子 1977: 110-111）。

> 王は象の背中にてとび上がらんばかり、ナイル河のごとく猛り、バハラームに向かって突進した。槍（ピールバー）の一撃を彼にみまい、象の巨体（ピール）（バハラーム）を象の足（パー）に踏み敷いたのである。さしも凶暴な敵も敗北を喫し、幸運によってホスローは勝利を得た。
>
> 滔々と流れる血潮は、鞠のごとく首級を運び去る。鎖のようなギリシア人の輪縄は、ネグロの毛さながらに捩れ、インドの剣は、敵にゆきあたるや、その首をまるでインドの捲毛を刈るように切り落とし、バハラームの兵士らは白昼の明るみに晒された狂人のごとく取り乱す。かくてこの軍団は、バハラームと負傷した僅かの者を除けば、誰ひとりその狂乱の中からぬけ出すことはできなかった。

三　テュルク語文書

(No.120) 文書番号 F148:W1

サイズ：縦 11.3cm　横 15cm



00　aram ay (salap?) ??? (S(?)) (KHH?) ('abd?) (lu aġa)
正月【に】（動かして？）…（アブド？）=ル=アカ

[A]　?????? -da (tükün?) ??? (KHH?) ????
…に、（合計？）…

[B] on (LA?) (KHH?) ?????
10 …

[C] ???????
…

01 (ōtāgūm?) (nāṣir?) sözüm ḥasan ḥurr oġulum-nï
わが長官（へ？）（ナーシル？）、私のことば。善良な自由人たる私の息子を

02 ??? (-mäk?) üčün tabārukān (alġïl?) (ǰolčïn?) -nïng
…するために、祝福とともに受け取れ。旅行者の

03 (otaġnï) (MHM?) ?? (ïtulsun-lar)
テントを…【が】送られるべし。

【注釈】

00 salap: < sal-「動かす、責任をとる」(Clauson 1972: 824)。
00 S(?): ペルシア語 si「3」の可能性がある。
00 KHH: 同じ字形の語が[A] [B]にもみえる。KNH と書かれている可能性もある。
00 'abd: 不確定。他の語の可能性も残る。この語以降は行左上に書かれる。
00 lu aġa: lu は漢語姓「魯」の音写か。モンゴル語 aqa「兄；(人名要素、称号)」はテュルク語に借用され、またペルシア語史料ではしばしば AĠA＝āġā と綴られる。本処もその影響か。
[A] DWKN: 古ウイグル語 tükün「合計」(Erdal 1991: 301, 303) のアラビア字表記（語頭の D / T が交替したもの）と想定しておくが、他の可能性もある。
[B] LA: アラビア数字の「7」の可能性もある。
01 ōtāgūm: < Mo. ötegü ~ ötügü「長老、長官」と解釈できる。ただし一人称語尾のついた本語が差出人の称号となるのは不自然。あるいは宛先か。
01 nāṣir: 頻出するムスリム人名。ただし、BAČQH とみてトルコ語人名 Bačaqa を想定することも可能か。
01 ḥasan: 頻出するムスリム人名だが、ここでは原義の「善良なる」で用いられた可能性がある。
01 ḥurr: アラビア語「自由人」。イスラーム法上で奴隷状態にないことを示す。
01 oġulum: 「私の息子」。
02 -mäk: 動詞不定形。ただし、-MAK = -mäk ではない可能性もある。
02 tabārukān: アラビア語「祝福とともに」。
02 ĞWLČYN: < Mo. ǰolčin (pl.< ǰolči)「旅行者」とみる。しかし、この語は元来テュルク語 yolčï からの借用なので (Doerfer 1963-75: IV, 225, Nr.1927)、テュルク語の本文書にモンゴル語の発音を表す形でみえるとすれば問題を含む。
02 otaġnï: < otaγ "a small temprorary building; tent" (Clauson 1972: 46).
03 ïtulsun: < ïdul-「送られる」。ただし、etil- (~itil-)「作られる、建てられる」、itil-「押される」など他の可能性もある。Clauson 1972: 56-57 参照。

【解説】

アラビア文字テュルク語で書かれた行政文書らしく、その点で貴重な例であるが、他に類例がないこともあって解読しにくい。とくに、[A][B][C]の箇所は不明な点が多い。

(No.121) ARAB02

01 /// ??? (yār? ẖurmā jarī?) ///
02 /// ?? (dïm?) türk ilinä ///
03 /// ??? ol imāmlar ///
04 tüšmäs (MSL?) ///
05 qadaqï sav (qatar?) ///
06 (yoġurt?) yaġ Q ///
07 ????? (barča?) ///
08 ???? ///

【注釈】

01 ẖurmā: ペルシア語 ẖurmā 「なつめやし」。
02 dïm: 動詞の過去一人称単数の語尾。あるいは、قودیم qudïm と読み、qud-「そそぐ」に語尾がついた形と考える可能性もある。
02 türk ilinä: 「テュルク人に」。
03 ol imāmlar: 「そのイマームたち」。
04 tüšmäs: 動詞 tüš-（落ちる）の否定動名詞あるいは超越形。「落ちない（こと）」の意。
05 qadaqï: qadaq「欠点」に限定語尾-ï が後続したもの。ただし、裏面にあたる ARAB03 に水路を意味する arïġ の語があり、これが水路やその浚渫に関する文書であるとすると、qadaq「欠点」ではなく qïdïq「岸、土手」の可能性もある。Clauson 1972: 598 に arık kıdığ 'the bank of a canal' の用例がある。
05 sav: 「言葉」。ただし、上と同様の理由で、suv「水、川」の可能性もある。語末のアラビア文字 f に三点を付した文字は、摩擦音[β]あるいは[v]を表すためにホラズム語や一部のペルシア語写本で用いられるほか、テュルク語でも『クタドグ・ビリグ』のカイロ写本・フェルガナ写本に使用例がある。カーシュガリーの写本でも同様である(Maḥmūd al-Kāšġarī / Dankoff & Kelly 1982-85: I, ix)。
05 qatar: 「固まる」。
06 yoġurt: 「ヨーグルト」。Clauson 1972: 905 参照。.
06 yaġ: 「油」。
07 barča: 「すべて」。

【解説】

解読に用いた ARAB02 と ARAB03 の写真は、両者とも 1 枚写真の左側にアラビア文字が 8 行書かれた小さな文書の断片と右側に漢字が 2 行書かれた比較的大きな漢語文書の断片が写っている。アラビア文字が書かれた断片は、おそらく一枚の文書の表裏であり、テュルク語で書かれている。このテュルク語の文書と右側に写っている漢語文書は、まったく内容的に見て関係ないと思われる。テュルク語の文書は、文字は比較的はっきりしているが、断片であり文章として解釈するのは困難であるため、和訳はせず、語句の意味を解説するに止めた。

(No.122) ARAB03

01 /// (bu?) savlarï ??? ///
02 /// yanglïġlar (dïn aḥaqq?) ///
03 /// (muḥammad?) ????????? ///

04 /// qan-ning ????? (yangl[ïġlar]?) ///
05 /// (lā yu'sā?) arïġ ??? ///
06 /// hirgiz arïtmas ///
07 /// (mu'anlar?) ///
08 /// ?? ///

【注釈】

02 yanglïġlar: yanglïġ「〜のようなもの」の複数形。
02 aḥaqq: 「より相応しい」。yanglïġlardïn aḥaqq で「類似のもののうちより相応しいもの」あるいは「類似のものよりも相応しいもの」の意か。またはテュルク語 ačïq「苦い」、ačuq「開いた」か。
03 muḥammad: 預言者ムハンマドを指すのでなく、人名あるいはその一部。
04 qan-ning: 「ハンの」「王の」。
04 yanglïġlar: 2 行目の単語と形が似ているため yanglïġlar と読んでおくが、単語の後半は欠損している。
05 arïġ: 「水路」。
06 hirgiz arïtmas: hirgiz「けっして〜しない」、arït-「きれいにする」、-mas 否定動名詞あるいは超越形をつくる語尾。したがって、「けっしてきれいにしない（こと）」の意。
07 mu'anlar: 「生活の糧」「負担」を意味するアラビア語 ma'unat の複数形 mu'an にテュルク語の複数語尾-lar が後続したもの。

【解説】

前項に述べたように、この文書は、ARAB02 と表裏の関係にあり、テュルク語で書かれている。ARAB02 と同様に、右側にある漢語文書とは内容的にまったく関係がない。断片であり文章として解釈するのが困難であるため、この文書も和訳はせず語句の意味を解説するに止めた。

参考文献

Boyle, J. A. 1971 *The Successors of Genghis Khan*, New York: Columbia University Press.
Chavannes, E. 1904-1908 "Inscriptions et pièces de chancellerie chinoises de l'époque mongole (1-3) ", *T'oung Pao* 5, 1904: 357-477; *T'oung Pao* 6, 1905: 1-42; *T'oung Pao* 9, 1908: 297-428.
Clauson, G. 1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford: Oxford University Press.
Doerfer, G. 1963-75 *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen,* I-IV, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
Erdal, M. 1991 *Old Turkic Word Formation,* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
Herrmann, G. 2004 *Persische Urkunden der Mongolenzeit,* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
呼格吉勒圖・薩如拉（編）2004『八思巴字蒙古語文献匯編』呼和浩特：内蒙古教育出版社。
井筒俊彦（訳）1964『コーラン』上・中・下（岩波文庫）、東京：岩波書店。
照那斯圖 (Junast) 1991『八思巴字和蒙古語文献II　文献匯集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
李逸友（編）1991『黒城出土文書（漢文文書巻）』北京：科学出版社。
Maḥmūd al-Kāšġarī / Dankoff, R. & Kelly, J. (ed.) 1982-85 *Compendium of the Turkic Dialects*, I-III, Cambridge (Mass.): Harvard University Printing Office.
Maspero, H.(ed.) 1953 *Les documents chinois de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie centrale*, London: The Trustees of the British Museum.

松井太 2002「モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と徴税システム」『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』（平成 12〜13 年度科学研究費補助金・基盤研究Ｂ１研究成果報告書）87-127.

松井太 2004a「モンゴル時代の度量衡」『東方学』107:166-153.

松井太 2004b「モンゴル時代のウイグル農民と仏教教団」『東洋史研究』63(1): 1-32.

松川節 1995（評） D. Cerensodnom & M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*.『東洋史研究』54(1): 105-122.

森安孝夫 1997「ウイグル文字新考──回回名称問題解決への一礎石──」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』東京：東方学会: 1238-1226.

Niẓāmī / Barāt Zanjānī (ed.) 1376 *Ḫusraw wa Šīrīn*, Tihrān.

ニザーミー（著）／岡田恵美子（訳）1977『ホスローとシーリーン』（東洋文庫）、東京：平凡社。

岡本敬二（編）1975『通制條格の研究訳註２』東京：国書刊行会。

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之（編）2002『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。

Rašīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḫ*, Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies (Tashkent), MS. 1620.

Pelliot, P. 1913 "Les plus anciens monuments de l'écriture arabe en Chine", *Journal Asiatique* jui.-août., 1913: 177-191.

al-Qurṭubī / al-Baradūnī (ed.) 1987 *al-Jāmi' li-'aḥkām al-Qur'ān*, vol. 3, al-Qāhira.

杉山正明 1990「草堂寺闍端太子令旨碑の訳注」『史窗』47: 87-106 +2 pls.

杉山正明 2004『モンゴル帝国と大元ウルス』京都：京都大学学術出版会。

関根正雄（訳）1969『出エジプト記：旧約聖書』（岩波文庫）、東京：岩波書店。

Stein, M. A. 1928 *Innermost Asia*, I-IV, Oxford: Clarendon Press.

田坂興道 1964『中国における回教の伝来とその弘通（上）』東京：東洋文庫。

楊志玖 2003『元代回族史稿』天津：南開大學出版社。

第六部　シリア文字文書

はじめに

シリア文字文書について、今後の言語学的・思想的研究の手掛かりとするべく、テキスト転字・和訳を試みたが、著しく困難であった。まず、11 点のシリア文字文書は、全体のレイアウトや紙、シリア文字の字体等の観点から、明らかに二つの系統に分類することができる。一つは、H 彩 101 で、もう一つは残りの 10 点である。シリア文字文書では以下、篇号を取って前者を「H」、後者を「F」と呼ぶことにする。ただし、字体に関してはシリア文字全体から見ると、互いに近い。いわゆる「ネストリアン」と呼ばれる字体である。ただし、いずれも字体が統一されてはいない。なお、今回は扱わなかったが、この他にシリア文字で筆写された文書の断片が 5 点ある。これらは文字の系統、言語の系統についてはほぼ F と同じと思われるが、字体や筆記方法は相当異なっており、おそらく F とは別の筆写者による別の文章だと思われる。

まず、H は標準的なシリア文字、シリア語であることを確認した。内容の概要については、キリスト教の三一神関連の内容であることが判明した。しかし、H は元々乱筆で、墨がにじんでいたり薄い字が多い上、破損が激しく判読不能部分が多いため、一部を除いては、ある程度の長さの文単位で内容を通常の仕方で解読することは不可能である。そこでまずは、書かれてある通りの文字に従って、シリア語の単語として同定できた部分を直訳してみた。その結果は、科学研究費の報告書にある（武藤慎一 2006）。

しかしそれでは、たとい個々の単語の意味を解せたとしても、文章全体としては意味をなさない場合が多かった。この文書の特徴として、字が小さい上に字体の一貫性が乏しいためである。シリア文字の場合、相互に類似した文字が多いため、これは致命的問題になりうる。もともとシリア語の単語は三文字前後の短いものが多い上、単語の前後に一文字からの接辞ないし別の単語が分かち書きされずに、連続して筆記される。さらに、シリア文字では基本的には子音しか表記されないため、同一文字の単語でも読み手の母音の振り方によって幾多の意味を持ちうる。本書でも、解釈が分かれる場合等、分かりにくい個所は注釈で母音の解釈を示した。そこで、最終的には文字の形態上の微小の差異よりは、文脈や内容による一貫性により重きを置いて解読した。そのため、どうしても補足・推測部分が増加してしまったが、その分全体の大意は把握しやすくなった。

このような状況なので、ローマナイズの方法としても文字単位では一意的なものが少ないため、原則的には単語単位で確定していった。その結果、逐一説明していないが、文意が明白な部分は少々大胆に文字を同定し、そうでない場合は相当慎重にローマナイズせざるを得なかった。ただし、もちろん一文字でも一意的な場合は、単独で確定した。なお、セヤーメ（複数形を指示する記号）や母音記号等、シリア語の補助記号も散見されるが、ローマナイズでは表記ができない。逐一言及しなかったが、日本語訳に反映したのはもちろん、特筆すべき個所は注釈を加えておいた。

なお、シリア語部分の日本語訳についてだが、日本語はシリア語と語順が逆の場合が多い。完全な文はもちろん同行内で日本語の語順に従って訳し、それが複数行にわたっていて分かりにくい場合は、補足、注釈を加えた。しかし、本文書はテキスト破損等により不完全な文が多数を占める。その結果、文意が明らかでない場合はシリア語の語順に従って並べた。

次に、F については一瞥して、保存状態が悪いものや欠損部分が大きいものもあるが、全てほぼ同一の書き方で、おそらく同一の筆写者による一連の文章だと思われる。従って本書では、これらの文書群全体を一まとまりのものとして扱った。F は H とは大幅に異なる特殊な字体が用いられている。H の解読は、F のいくつかの字の確認には役立ったが、それだけで全ての字を同定することはできなかった。しかも、その若干の特殊な文字は F 全体にわたって頻出している。それでも、文字と内容が確定できた個所がある。まずは、最も確実な三個所で、F21:W37-0751, 11-12、F21:W37-0751(2), 05, 07-08、F21:W35-0752, 04 である。これは朱書き部分であり、全てが標準的なシリア文字、シリア語である。共通点としては、全てが聖書本文の引用であることが挙げられる。

F の地の文については、一部の文字は標準的なシリア文字との同定が困難であった。シリア語の聖書引用個所で確定できた文字は、地の文でも確認することができる。その確認された文字を手掛かりにすれば、標準的なシリア文字の体系と F で使用されているシリア文字との対応関係が判明すると思われた。シリア語個所で使用されていて、テュルク語個所で基本的に使用されていない文字は、ヘー (H)、とタウ (T) である。これらには、それぞれヘート (Ḥ) とテート (Ṭ) という発音上類似した文字があるので、いずれもテュルク語の発音を記述するに、不要だったのだろう。逆に地の文では、標準的なシリア文字ではない字もいくつか見いだされる。これらは、頻繁に使用されている。これ以外の文字、つまりほとんどの文字は標準的なシリア文字である。ただ幸い F は H と異なり、全体として欠損部分が少なく、比較的鮮明な文字も多いこともあって、最終的には全ての文字と標準的なシリア文字との対応関係が判明した。

F の地の文では、「メシア」すなわちキリストとその別称「われらの主」の併置、というキリスト教の常套句が用いられている (F21:W37-0751, 09)。しかも、初期シリア・東シリア式の綴りで三度確認できる語「機密」(秘義／象徴) も、特にシリア・キリスト教思想を代表する最重要語に数えられている (武藤慎一 2004)。また、「メシア」、「われらの主」は H にも登場している。つまり、聖書の引用部分にはシリア語文が、地の文にはシリア語の単語が含まれる。以上のことから、シリア語の観点からだけでも F は全体としてシリア・キリスト教関連の内容の文章である、と言える。全ての個所の転字作業を行ったところ、地の文のほとんどはシリア語ではなく、テュルク語であった。この F の 10 ページ (5 葉) についてのテキストは「二 シリア語まじりテュルク語文書」としてまとめた。

一 シリア語文書

(No.123) 文書番号 H 彩 101

サイズ：縦 33.5cm 横 18.5cm

H 彩 101a

01 /// ['B' W]BR['] /// WRWḤ' DQWDŠ' L'LMYN B(R)ŠYT 'YTWH[Y] (H)W' M[LT'] WH[W]

[父と] 子と聖霊は永遠に…。初めに [言葉] があった。また、その

02 [M]LT' '(Y)[TW]HY HW' BRŠYT LWT 'LH' W'LH' ['Y](T)WHY [H]W' [HW M]L(T)' HN'

言葉は初めに神のもとにあった。また、[その] 言葉は神であった。これは

03 'YTWHY HW' BRŠYT L[WT 'LH' KL B'Y]DH (H)[W'. WBL'DWHY '](P)L' ḤD' [HWT]

初めに［神のもとに］あった。［あらゆるものは、彼の手で成った。そして、彼なしでは］一つも［成らなかった］。

04 MDM DHW'. BH ḤY' HW'. [W]ḤY(') (')YTYHW[N] NWH[R'] (D)B[NYNŠ' WH]W NWHR'

成ったものは。彼の中に命が生じた。そして、命は人間の光である。そして、その光は

05 BḤŠWK' MNHR WḤŠ(W)K' L' 'DRKH NṬR N(P)ŠK MRY' ??? /// WM'LK MKYL

闇の中に輝いている。そして、闇は彼【光】に及ばなかった。主はあなたの魂を見守った…。また、その後あなたを導いている。

06 WBD /// ??? 'B' W(B)R' WRWḤ' DQWDŠ'. ??? /// ?? MN ??Š' Š??

また、父と子と聖霊が…なので、…。…から

07 LṬWR ??? ?LQṬ ??? Ḥ'R<'> HWT W'ḤDNY ///(Q)R' ?///? ??? W'T[']()(?) (M)L'KH

…の山に彼は集めた。彼女は自由になった。そして、彼は私を捉えた。…彼は呼んだ…。（また、彼の御使いが来た。）

08 ??? (W)'MRY L'T??? WL' ?TR ?BY. QR'. /// ??? /// G'Y LBR'

「…そして、言いなさい…」。彼は宣言した。…「子を呼びなさい」。

09 ??? MN 'GWN' /// B'Y LRWḤ' DQWDŠ' NTLN /// (Q)L'TK QR(')

「…試練から。聖霊を求めなさい。彼は私たちを与えることになる…。私は、あなたに激しい痛みを与えた」。彼は宣言した。

10 BŠM 'B' SYM ??? WB[ŠM] (B)R'SYM B'WBK WBŠM RW[Ḥ' D](Q)WDŠ'

父の名の中に…が置かれている。そして、子［の名］の中に置かれている。あなたの懐の中に。そして、聖霊の名の中に

11 (S)YM ??? W///? LTHWMH DYM' WNSR /// TWL(T') D'B' [W](D)BR' WD

…が置かれている。また、海の底へ…。また、彼は…父と子と【聖霊】の三分の一を引き裂いた。

12 (R)[WḤ' DQWD]Š' ???? WR?///?T BD W'TMLY /// WDW' (D)B ḤYL' R?/// 'TKŠP

聖霊【の】。…。実際また、彼は…（で）満たされた。また、嘆いた。力を使い果たした。…彼は祈願した。

13 /// BN' SGY" DTL' Š/// WŠRYT QṬR' D[ḤR]ŠWT' MN 'ZH DMŠYḤ[']' ???? BR

彼は自らが引き上げた多くの者たちを涵養した…。また、あなたは子なる…、メシアの山羊

から魔術の鎖を解いた。

14 ??N WML'T BŠ(M)(?) ??? ?Š(M)(?) MŠ[Y]Ḥ' WŠRYT QṬR' DḤRŠWT' (M)N 'BDK
われらの…。…また、あなたは…（の名、）メシア（の名）で満たした。またあなたは、あなたの僕から魔術の鎖を解いた。

15 /// ??? ??? ?Š? /// ??? ??
…

16 ??? /// ??? /// ?Ṭ? ///
…

17 ??? ??? ?? /// ?? ????? ?G /// ??? MT/// ???///?S
…

18 ///T' ??///??///?DH DMŠ<Y>Ḥ['] 'L(H') (BR) MN 'SWR' WQṬR(')
…子なる神、メシアの…、枷と鎖から

19 /// QDYŠ' NŠTR/// MN LWT 'MWR' D??? WMLPN'
…聖なる者たち。…の住民たちのもとから彼は解放されることになる。…また、教師たち

20 ?/// ??///? (ḤKM') (?) W'YN' /// ????? /// ŠWQR(')
…（知恵）と目…偽り

21 'SWR' WQṬR' ???/// ?Ṣ?? ??///? ??? W'N ?///???
枷と鎖…また、もし…

22 KTB 'NŠ NŠTR'. (W')N ?? ??/// ????? ???T'. KTB 'NŠ ???
彼が誰かを記した【ならば】、その者は解放されることになる。また、もし…誰かを記したならば、…

23 (W)'N TḤYT 'R'' KTB 'NŠ [N](Š)TR'. W(')N BGŠ' W'N BL?ŠT' 'SWR' ??Š
また、もし彼が地の下で誰かを記したならば、その者は解放されることになる。また、もし地底で。また、もし…で。枷…

24 ?/// W'N B????? ??????? 'MYR ??NŠ NŠ[TR]'. W'N B'QBWHY DYM'
…また、もし…で。…言われている…。その者は解放されることになる。また、もし海の果てで。

25 ?/// ?? L'(N)Š? NŠTR' ??? /// ??? KTB L'NŠ (NŠTR')(?). BḤYLH RB' DYŠ(W')
…誰かを…、その者は解放されることになる。…誰かを記した（ならば、その者は解放されることになる）。イエスの大きな力で、

26 (MŠYḤ')(?) MRN W'LH(N) '/// [NŠ]TR(') ///?? ḤNN' MN 'L(H)' DNWR'. HKN'
【イエス】、われらの主なる（メシア）、またわれらの神…、（その者は解放されることになる）。

…火の神からの憐れみ。このように

27 ??? 'SWR' WQṬ[R'] /// ????? /// ?M QDM 'YNWHY 'MYN BŠ(M) ///
…枷と鎖…。…彼の目の前で真に…の名で

28 ?///?Š? ?/// 'LH' LBNY YSRYL MN ŠM/// ??
…。名目上のイスラエルの子らにとって、神

29 D??? ??? N(Š)TR' PW??N ??? ?? WQṬR' DḤRŠWT' WNT?N ???????
…彼は解放されることになる。われらの…。また、魔術の鎖は…。また、

30 MR(Y)' W'MYN ??? 'HYH 'ŠR 'HYH ???N BR PWD' MN 'SWR' W(Q)[Ṭ](R)'
主、また真に…「エヒイェー・アシェル・エヒイェー」、子なるわれらの…。枷(と鎖)から外れること…

31 D? /// ?Š? /// ??? [N]ŠTR'. W??Š GBRYL ??? WBŠM ??TB'
…彼は解放されることになる。また、ガブリエル、…また…の名で

32 ?? ?/// WSRP'. W'RKS WŠWLṬN' ?/// ??? ML'N ?? WD???
…また、セラフィムたち。そして、諸原理と諸力…私たちの言葉…

33 ML'K' QD(YŠ)' NŠTR'. ??? (D)MŠYḤ' ?? M???D' BYŠWT' D[YW]'
聖なる御使いたち。彼は解放されることになる。…メシア(の)…悪、[悪鬼ども]

34 ?????????????????????? D'B' WDBR' [WD]RWḤ' D
…父と子と【聖】霊の

35 QWDŠ' ??? DBH 'PNYW ŠL<Y>Ḥ' QDYŠ' L['M](?)M' MN ṬM['W] D(M)ṬR
聖【霊の】。…彼によって聖なる使徒たちは、降り注ぐ汚れから[諸国民]を立ち返らせたのである。

36 Š'(D)' WBH ///ṬRD LB<Y>ŠW(T)' MN 'PY 'R'' ??? BH WHW ḤYL' ?///Y'
悪霊ども。また、彼によって…彼は悪を地表から追い出した。…彼によって。また、それは力である。…

37 ??N DWN ??? (B)YŠ' WKLHW(N) ḤRŠWT(HWN) ? RS??? WṢN'T??? W'YN'
それは、…悪い…と彼らの全ての魔術を裁く。…浄める…。また、目がそれを企んだ。

38 ///?? WKLWYT'. ?/// 'GR' ?????????? WKL MDM DB
…また、禁じられている。…報酬…。そして、あらゆるものが溶けてなくなった。

39 ??? MN QDM 'YN[WHY] /// ??? BR PNY' 'YKN'
…[彼の]目の前から、…子。次のようにして、彼は立ち返っている…

40 D(B)MLTH DMḤYN[N] ///?RQ' ???? QŠ(Y)' Š'D' (')PNYW WKRYH'
[われらの] 救い主の言葉で…、愚か者、頑迷な…、悪霊どもを彼らは立ち返らせたのである。また、病気の人が

41 'T' S?? WGRB' ?? /// ?? WD(Y)[W]' ??? WRWḤ' (BY)Š' PLY BTHWM'
来た…。また、らい病の人々…。また、悪鬼ども…と悪い霊を彼は深淵の中で虱潰しに探した。

42 ṢL(Y)B' DKY' WBKNR NT?///D??///??? ??MṢ??? ???????? SGD' 'S///
十字架は清く、ハープで…。…礼拝している。

43 (B)R MN D'LY' [W]MN DTḤTY' [W]MN D(K)L KRS' (W)ZBN[NY]' DKL 'DT' QDYŠT'
子を高き所のものたち、また低き所のものたち、また【その】間の全部のものたち、そしてあらゆる聖なる教会の人間たちが。

H彩101b

44 /// WPKR ??? WBṬL /// ??? ??? HN? /// ??? MN KL ??? /// ??? ?? '? /// ????/// ? /// ???? ? ???? ?
…また、彼は…縛り、廃した…。全ての…から、…

45 DŠRY' MN MṢ'TH ṬMY(R') /// ?LT' ? /// ?T' DŠRT ??? ?? /// ??? /// ??????? /// WBŠM RWḤ(') [DQW]DŠ' NŠTR(') ??? ?? ??? ???? ? WQṬ(R)' ??
彼は、葬られた者のただ中から解放するからだ…。彼女が解放したからだ…。また、彼は聖霊の名によって解放されることになる…。また、鎖…

H彩101c

46 ??? (H)KYL MLT' ḤYT' DQT' D?? (W)Š'(D)['] ??? ?? ???? ??? ?(W)ŠRYT MN /// DQBWR' DNQR HN' ???' HKN' NTṬRD(W)[N] /// Š(')D'
…こうして、生ける御言葉は…と悪霊どもを粉々にする…。また、彼女【御言葉】は彼が掘り出した墓の…から解放した…。このようにして…悪霊どもは、追い出されることになる。

47 'YQR' [D'B]' WDBR' WDRWḤ' DQW[D]Š' MṢLM' KLHWN /// (Q)DYŠ' B? L?? ??? /// ŠLYḤ' W? /// ?? WMLPN' WYḤ<Y>D[Y'] /// ??T QDYŠ' MṢL(L)T' /// ????
聖なる…全てを造り出す父と子と聖霊の栄光…。使徒たちと…と教師たちと隠修士たち、聖なる、澄んだ…。

【注釈】

00 紙のほとんどを占める中央部分の横書き43行を中心として、その左右の余白に縦書き各2行で、合計47行からなる。本書では、中央部分をH彩101a、右部分をH彩101b、左部分をH彩101cと

した。状態が悪く、欠行が多数あり、破損が著しい。

01 ['B' W]BR['] /// **WRWḤ' DQWDŠ' L'LMYN:** これは、朱書き個所。BR['] WRWḤ' DQWDŠ' が06行目とほぼ一致しているので、それによって復元した。「父と子と聖霊」はキリスト教の三一神。これに「永遠に」を加えて、神への頌栄の定型句である。

01 B (R)ŠYT: ここから05行目の NṬR までは、ヨハネ福音書 1:1-6 の引用。破損していない部分を見ると、新約のヨハネ福音書 1:1-6 のペシッタ訳の厳密な引用なので、破損部分はそれによって復元した。

01 M[LT']: この語は基本的には女性名詞であるが、ここでは男性扱い。神の「御言葉」(ギリシア語のロゴス)、つまり神の御子、キリストを指す。この特殊な意味の場合は男性扱いになる。にもかかわらず、46行目の注釈参照。

06 'B' W(B)R' WRWḤ' DQWDŠ'. ??? /// ?? MN ??Š' Š??: 朱書き。

08 (W)'MRY: 'MRY は動詞'MR(言う)の命令形の女性単数形。

11 WD: W(また/そして)とD(…の)の二語からなる。いずれも単独では書かれず、他の単語の前に置かれ、その単語と連続して筆記される語。ここでのように、WとDが連続する場合でも、その後に別の単語が連続して筆記されなければならないにもかかわらず、ここでは分かち書きされている。おそらく行末に位置するため、次の12行目冒頭の(R)[WḤ']を追記するスペースがなくなったためであろう。

13 WŠRYT QṬR' D[ḤR]ŠWT': この一節は、次の14行目でも繰り返されているので、14行目によって一部復元した。

13, 14, 29, 37 ḤRŠWT': 比較的頻出している。同一の綴りで ḥaršutā(口のきけないこと/耳の聞こえないこと)と読む可能性もあるが、ここでは文脈から ḥarāšutā(魔術)と一貫して解しておいた。

13, 14, 18, 26, 33 MŠYḤ': 「油注がれた者」、つまり「キリスト」のこと。

13 DMŠYḤ ['] **???? BR:** この????部分は朱書き。

14 ??N: 朱書き。

15 ///: 最初の破損部分には、朱書きの形跡あり。

18 'L(H'): 朱書き。

29 PW??N: 朱書き。神名。

30 'HYH 'ŠR 'HYH: 出エジプト記3:14の引用。これは、神名として用いられていたヘブライ語で、訳すと「私は『私はある』という者である」という意味である。

30 ???N: 朱書き。神名。

31 GBRYL: 「ガブリエル」は、旧新約聖書に出てくる天使の名。

32 WSRP'. W'RKS WŠWLṬN': 「セラフィム」、「諸原理」、「諸力」はそれぞれ、聖書に登場する天使の種類のうちの一つだが、この三種類の天使が同時に登場する個所はない。ただ、「諸原理」と「諸力」もしくはその類義語は新約で常に二つ一組で登場する(エフェソ書1:21; 3:10; コロサイ書1:16; 2:10)。

34 D: 類例として、11行目の注釈参照。

39 QDM 'YN[WHY]: 27行目に類似した表現 QDM 'YNWHY があるので、それによって復元しておいた。

40 新約に頻出する記述に基づいて、まとめたもの。

43 MN D'LY' [W]MN DTḤTY' [W]MN D(K)L KRS': 世界(宇宙)を上下と中間の三層構造で捉えている。

43 MN: このH文書のほとんどの MN は、men(ーから)の方であるが、この43行目の MN については、三つとも man(者)の方である。

43 ZBN[NY]': 形容詞 zabnānāyā の男性複数形。直訳すると、「時間の中の」「移ろいゆく」「過ぎ去る」で、「永遠の」の対義語。ここでは、「現在、まだ地上で生きている」の意で、名詞扱いされて

いる。「生身の人間」という意味で用いられている。
44 WBṬL: BṬL は、動詞 bṭel のパエル形の baṭel と取った。
46 MLT' ḤYT': ここでは、明らかにいわゆる「ロゴス」としての神の「御言葉」を指すにもかかわらず（01 行目の注釈参照）、meltā ḥaytā と女性単数形を取っている。これは初期シリア・キリスト教の伝統に従っているものである。

【解説】

H 文書の冒頭部分は、新約のヨハネ福音書 1:1-6 のペシッタ訳の厳密な引用であるが、それ以外は 30 行目を除き、聖書の引用個所が判明したものはない。冒頭の引用に続いて、「父と子と聖霊」というキリスト教の三一神について述べられている。中央部分は、破損が激しく内容が読み取りにくいが、人間の束縛と解放が主題になっている。文体としては詩的で修辞的な表現が多い。30 行目は旧約の出エジプト記 3:14 の引用であるが、ヘブライ語の神名の音訳であるので、少々特殊である。逆に H が、聖書の引用以外の文章を含むことも確実である。例えば聖書には、32 行目のように「セラフィム」、「諸原理」、「諸力」という三種類の天使が同時に登場する個所はない。

H 全体にわたって、登場人物としては神や天使たちから使徒たちを始めとする人間まで、広く登場するが、特に末尾部分には上中下の三層構造による世界（宇宙）の区分が明示されている。実際、空間的にも山という高い場所から地上、そして海底、地下まで、宇宙論的な構造を持っている。語彙としては、全体にわたって「聖なる」が頻出するが、特に末尾部分では病気や清め、そして礼拝関連の語句が使用されているので、典礼と関連が深い内容であると思われる。詳細は後日の本格的な思想研究を待たなければならないが、「名」の多用や詩的表現等、表現方法や語彙の観点から、シリア・キリスト教、東シリア教会（いわゆる「ネストリウス派教会」）の文書であることは確実である。全体としては、「父と子と聖霊」という表現が冒頭から一貫して登場することから、三一神がこの文章の主題と言ってよい。なかでも、三人称単数の「彼」の多くがこれを指していることからも分かるように、子なる神、メシア（キリスト）に特に多く触れられている。

二　シリア語まじりテュルク語文書

以下に取り扱う F 群の 5 葉、表裏 10 ページの文書については、武藤によるシリア語部分に関する調査検討の一方で、第一葉のオモテ面すなわち F21:W37-0751（現在の A）について最初に試験的に配布された白黒写真のコピーをもとに、梅村も当時同僚であった高橋英海氏のシリア文字知見の助けを借りつつ読解を手がけた。その結果、このシリア文字写本はテュルク語写本であるとの結論に達していた。他方、本プロジェクトとは全く別ルートで 5 葉の写真全体に接する機会を与えられていたベルリンのペーター・ツィーメ（Peter Zieme）氏が私的に読解を進めていた。

このようにして、今回の F 群の読解と解釈と画像資料の公式公表に際しては、シリア語部分およびテュルク語全体の解釈の見通しを早くに得ていたツィーメ氏の協力を得ることができた。とりわけテュルク語読解は、ツィーメ氏の案に基本的に大きく依拠することとなった。また、内容としての順をたどることが可能な順序、すなわち仮に A/B が一葉の表裏を成し、以下 C/D、E/F・・・として I/J までの記号をつけて配置したのもツィーメ氏の案に依るものである。最終的には表裏すべてのカラーデジタル写真データがもたらされた。ウラ面の右上には赤と黒２色の※マークが記入されている。ただし写真の写り方をみると、紙の破損部分が表裏で異なっているなど、写真撮影がいつどのような状態でおこなわれたのか疑問の点もある。

内容は、主としてツィーメ氏と、シリア語部分に関する武藤の検討から、新約聖書のマタイ、マルコ、ルカの福音書あるいはヤコブの手紙がモチーフとなっていることが判明する。ハラホトにおけるキリスト教の足跡を追う手がかりとして、今後たいへん重要な史料となるであろうし、宗教学、

言語学の観点からの研究資料としても高い価値をもつことは疑いない。本来は多くの語注や解釈解説が必要となるが、仮の翻案を示すにとどめ、別の機会に本格的な研究が発表されるよう期し、ここでは当面の資料提示という基本的な作業に重点をおいた。

なお、今回は読解案を提示するに至らなかったが、シリア文字テュルク語文書と考えられる断片が5点ある。1点は137a,bという表裏各7行のもの1点（8.1cm×8.2cm）。つぎにF137とF137cという表裏各12行の小断片（1行の語数は少ない）1点（8.8cm×3.1cm）。そして、別に4断片をまとめて写しこんだSYR01とSYR02という写真データがある。どちらがオモテでどちらがウラかは不明である。そのうち1断片は西夏文字1行のみで裏がなかったのか、SYR02の画像には写っていない。残り3断片がシリア文字である。そのうちの1極小断片は両画像で片面（1行）のみが写しこまれている。残る2断片は表裏とも5行ずつのものと、10行ずつのものである（図版編の88〜93）。以上、西夏文字の1点をのぞいて、5点のシリア文字でおそらくテュルク語の断片についてであった。

テキスト提示に際して、シリア語部分については武藤の案も勘案しつつ梅村の責任で転写と和訳を調整した。また転写方法について一言しておく。シリア文字文書全体への「はじめに」でも述べられた文字の形について言えば、テュルク語表記としては、シリア文字のガーマル(G)、カープ(K)、コープ(Q)が、またアーレプ（ʾ）、エー（ʿ）、ときにユード（Y）が混用されたりする。今は、古テュルク語の一般に用いられる正字法を原則とした転写形を示すこととするが、語頭ʾYまたは語中Yで示される母音のうち、表記可能なものはiで、そうでないものはäではなくてeで表す。

参考文献については「ウイグル文字テュルク語文書」も参照されたい。

あらかじめ、A〜Jの記号と原文書記号との対照表を示しておく。また、これらの文書の語彙索引については、参照の便を考えてA〜Jの記号も付した。

A　F21:W37-0751
B　F21:W37-0751(2)
C　F21:W37-0755
D　F21:W34
E　F21:W37-0754
F　F21:W37-2
G　F21:W37-0752
H　F21:W35-0752
I　F21:W35-0753
J　F21:W36-0753

A
(№124) 文書番号 F21:W37-0751

サイズ：縦16cm　横11.5cm

01　eligin . alïp . evingkä . birlä .
　　手を取ってあなたの家に一緒に

02　eltgil . qačan . kim . ol . čïyay .
　　あなたは連れて来なさい。もし誰かその貧しい人

03 -nï . evingä . eltip . bir . ayaq .
をあなたの家に連れて来て、一椀の

04 aš . nä . negü . kim . bir . ayaq .
食物が何であれ、誰であれ、一椀の

05 aš . yetürüp . ïdmasar . -s<ä>n .
食物をあなたがすぐ食べさせてやらなかったなら

06 boldï . bününg . üzä . yazuq .
ば、 このために、 罪

07 qïlïnč . yazuq . qazγan . -ma SMWSN .
行（になる）。罪を深めず･･･

08 netig . kim . arïγ . onglion . nom .
ちょうど誰か、清浄なる福音の教えの

09 bitig . -tä . MŠYḤ' . MRN . yarlïqamaqï
書にある我らの主メシアの教え

10 mu . turur ※ ※ ※
のようではないか？：

11 KL DMŠQ' LḤD MN HLYN Z'(W)R'
「これらの小さき者たちのうちの一人に飲ませる者はみな、

12 KS' DQRYR' BLḤWD

冷たい水の一杯だけでも」

【注釈】

語句の区切りには赤点が打ってあり、これは「.」で示した。赤点はI文書（F21:W35-0753）およびその裏のJ文書（F21:W36-0753）にも見える。中間のB～Hで用いられるのは黒点である。

08-09 nom bitig: 教えの書は、H=F21:W35-0752,03にも出てくるが、福音書または聖書のこと。（梅村）

09 MŠYḤ' MRN: シリア語。我らの主、メシア（キリスト）。MŠYḤ'は、H彩101でも頻出する。また、MRNはE=F21:W37-0754,09にもあり、H彩101でも登場する。（武藤）

11-12: 朱書き。シリア語。マタイ福音書10:42のペシッタ訳の厳密な引用である。（武藤）

【解説】

シリア語で引用される聖書以外でも、テュルク語本文部分について、他葉とも関連してマタイ福音書25:42-43「あなたがたは、私が空腹のときに食べさせず、渇いていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、私を訪ねてくれなかった・・・」の一節や、さらには同じく25:45-46「『これらの最も小さき者の一人にし

なかったのは、すなわち、私にしなかったのである。』そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」の部分も関係していると考えられる。(Zieme、梅村)

B

(No.125) 文書番号 F21:W37-0751(2)

サイズ：縦 16cm・横 11.5cm

01 [a]lqu qayu yalnguq bir mäning
いかなる人であっても、唯一 私の

02 atïm . üčün bir čïγay-qa suv
名前のために一人の貧しい人に水を

03 bir . ičip suvsamïšïnta · teg
与えなさい。飲んで、渇いているときに、ただ

04 yal<a>nguz bir čan . soyïq suv
ひとりで一杯の冷たい水を

05 ičürsär . BŠM' DTLM(Y)D' . buyan
飲ませるのなら、(彼は私の)「弟子の名のもとに」(あるものなので) 功徳

06 -qa saqïnïp t<a>rs<a>q-lig atï
とみなして キリスト教徒の名

07 üčün 'MYN 'MR 'N' LK[WN] DL' NWBD
において、「私は、よくよくあなたがたに言っておくが、失うことはない、

08 [']GRH tip čïn qïlïnč yarlïq
彼の報酬を」と。真実の行いを私は告げ

09 yarlïqaγay-m<ä>n sizlärkä NWḤM'
下そう、あなたがたに。 復活の

10 uluγ-lar-nïng kün üzä anïng
偉大なる日に、 彼の

11 ol ädgülüg qïlïnč-nïng
その善き行いの

12 utlï-sï yanqï-sï (näng) yoq
報酬と見返りは(何も？)ない。

【注釈】

05 BŠM' DTLM(Y)D': シリア語。マタイ 10:42 の引用。しかも、これを A=F21:W37-0751,11-12 の引用とこの B=F21:W37-0751(2),07-08 の引用の間に入れて初めて、マタイ 10:42 の完全な引用となる。（武藤）

07 NWBD: シリア語。未完了相三人称男性単数形。主語は A=F21:W37-0751,11 の KL（みな）である。（武藤）

07-08 'MYN 'MR 'N' LK[WN] DL' NWBD ['']GRH: 朱書き。シリア語。マタイ 10:42 のペシッタ訳の厳密な引用。（武藤）

08 ['']GRH: H 彩 101a, 38 にもある。接尾辞（所有代名詞の）の「彼の」とは、引用元のマタイ 10:42 によると、（イエスの）「弟子の」を意味する。（武藤）

09 NWḤM': シリア語「復活」。（Zieme）

C
(No.126) 文書番号 F21:W37-0755

サイズ：縦 16cm 横 11.5cm

01 čïγay-qa bir ötmäk birsär
貧しい人にあなたが一塊のパンを与えるなら

02 -siz . xošnut qutluγ köngül
ば、満ち足りた祝福の心

03 birlä . bir mingü t<ä>ngri alqïš
をもって、唯一永遠の神が祝福を

04 qïlγay eving barqïng
されるだろう、あなたの家と家財

05 üzä . ašïng buyanïng
の上に。あなたの食物と功徳は

06 kün küningä ükligäy
日を追って 増すだろう。

07 bir mingü t<ä>ngri-kä bušï
唯一永遠の 神に 献納を

08 birmiškä nom birür . bar
した時に（神は）教えを与える。すべて

09 -[č]aqa utlïlïγ birmäs
の人に報酬を与えはしない。

10 inčip bušï sadaqa birigli
しかし、献納サダカ(?)をする

11 kiši-ning kõngli-ning ičintä
人の 心の 中に（神は）

12 [y(a)r]l(ï)qïnga (LR?)///' utlï yanqï
命令のもとに ･･･ 報酬と見返りを

【注釈】

02 xošnut: ペルシア語 xošnud「adj.満ちたりた」とみなす。(Zieme)

07 bušï: Chin.布施からの借用。本文書群では「献納」と訳した。（梅村）

09 birmäs: 否定サフィックスの-maz/-mäz は、-mas/-mäs と書かれている。(Zieme)

D

(№127) 文書番号 F21:W34

サイズ：縦 16cm 横 11.5cm

01 birür . bir mingü t<ā> ngri s<ā>ning
与える。唯一永遠の神は あなたの

02 taqatïngta artuq närsär
崇拝を上回る何ものも

03 tilämäs . s<ā>ning kūčūng yitmiščä
求めない。あなたの力の及ぶかぎりの

04 birmišing bir mingü t<ā>ngrikä
献呈は、唯一永遠の 神に

05 suqïmlïq turur tip . ol
呼びかけることだと。彼（神）は

06 qorqïnčïy törü küni üzä
恐ろしい 定めの日に

07 bizkä qol tigküči bizkä
我らに手を差し出すもの、我らに

08 elig tutdačï . uzun yolqa
手をつかむもの。長い旅のための

09 azuq bu čïyay-qa lab

食物はこの貧しい人に、

10 bušï birmäklig turur čïγay
献納をすることなのだ。貧しい人

11 üzä r<a>qïm qïlmaqlïγ
の上に慈悲をおこなうこと

12 turur . s<ä>n 'YDL?/// ZM' Ṭ'R
なのだ。あなた ··· ···

【注釈】

09-10 lab bušï: bušï は Chin. 布施の借用であることは C=F21:W37-0755 文書注釈のとおり。Uig. Lab は Skt. lābha「獲得、所得、利」から派生し、bušï（布施）と同義語であり、両語がしばしば二詞一意(hendiadys)を構成する(Zieme 1979)。H=F21:W35-0752,01, 06 にもみえる。（梅村、松井）

E
(No.128) 文書番号 F21:W37-0754

サイズ：縦 16cm 横 11.5cm

01 'YṬWYQ (?) barmaγay . inčip
··· 彼は行かないだろう。そうして

02 birkä iki yanqï ötägäym<ä>n
一つに対して二つの見返りで私は報いる、

03 angar tip . ymä bir čan soγïq
彼にと。また 一杯の 冷たい

04 suv ičürmiškä bir-kä iki
水を飲ませたとき、一つに対して二つの

05 utlï birgäym<ä>n tip yarlïqasar
報酬を私は与えようと説かれるなら、

06 čïγay-nï evingkä kigürüp
貧しい人をあなたの家に招き入れて

07 bir aq aš birip ïdsar
一（椀の）白い食物をあなたが与え送るなら

08 s<ä>n . anïng yanqïsïn PWR'N'-sïn
ば、 その お返し、報いを

09 MRN s<a>nga ymä birmägäymü
我らの主はあなたにも与えないだろうか？

10 birür.amtï s<ä>n t(a)rs(a)qa antaγ
彼は与える。いま、あなたキリスト教徒よ、そのように

11 timägil kim.m<ä>n čïγay turur
言ってはならぬ、誰も。私は貧しい。

12 m<ä>n negü ärsär mä yoq.negü
私は何ものも持っていない。何

【注釈】

07 īd-sar: 'WDS'R ud-sar と読めるが ud-「従う」では意味がとりにくい。紙面への砂の付着をみると'YDS'R とも読めるので īd-「送る」と読んでおきたい。(梅村)

09 MRN: A=F21:W37-0751,09 の注釈参照。

F

(№129) 文書番号 F21:W37-2

サイズ：縦 15.8cm 横 12cm

01 bir ün bu azuq yart??a
ひとつの名声、この食物･･･

02 kintin čïγayqa birsär-m<ä>n qanča
あとから貧しい人に私が与えるならどこへ

03 'KS??R tip kõrgil.(G)?(LY)
･･･ と 見なさい。･･･

04 bir tul qunčuy-nung iki
一人の未亡人（夫人）には2

05 yarmaqnïng adïn närsäsi
ヤルマクのほかに 何も

06 yoq ärti.ol iki yarmaq
無かった。彼女は2ヤルマク

07 -nï isirkämädin.birip
を 惜しみなく与えて

08 ///// barïng-tïn čïγay-qa

あなたの持ち物(?)から貧しい人に

09 P? Ţ?K ??G isirkämägil
惜しんではならぬ。

10 inčip ol čïγaynï r<a>qïm
そうして彼は貧しい人（未亡人）に慈悲

11 -lïq /// qut qolunur
･･･幸せを乞い求める

12 ///p ärsär . qačan kim
であった。いつ誰か

【注釈】

04-07: マルコ 12:41–44、ルカ 21:1–4 の内容と一致している。（武藤）

05, 06 yarmaq: ヤルマクは、コイン（硬貨）のこと。（梅村）

08 barïng-tin: bar が barïm（財産）の省略形であるとすれば(ED: 353)、その 2 人称所有語尾の-ïng＋奪格の-tin という語形か。（梅村）

G

(No.130) 文書番号 F21:W37-0752

サイズ：縦 16cm 横 11.5cm

01 qatïγ köngül-lüg y<a>lnguqa
強い 心をもつ 人に

02 sanga ol törü küni üzä
あなたに、 その定めの日に、

03 ap oγul qïz ap qul
やれ息子と娘、やれ奴

04 küng ap ata ana ap äd
婢、 やれ父 母、 やれ財

05 tavar ap yir suv ap
産、 やれ田地、 やれ

06 altun kümüš asïγ qïlur
金 銀が 利をなし、

07 sanga tolp [qa]mαγ yürüng altun

あなたに　すべての　白い金と

08　kümüš　birür　t///
銀を　与える

09　birlä　birsär　'WYZ///R　tip
と共に与えるなら…　といって、

10　özütin　saqïnma　sayïryamnï (?)
その魂を　求めるな。(獲物?) …

11　YṬ?　M???　///
…　…

12　arïtur　ärsär . 'NYṬ(Y)G　'　G
清浄であるならば　…

H
(№131) 文書番号 F21:W35-0752

サイズ：縦 16cm　横 11.5cm

01　čïgayqa　lab　bušï　birmäk
貧しい人に献納をすることは

02　suy　yazuqnï　arïtur . netig
罪を清めることである。ちょうど

03　kim　nom　bitigtä　yarlïqayur
彼が教えの書の中で説いているように【:】

04　ZDQT'　'T(Y)N　ḤṬH'　tip　suy
「施しは罪を取り除く」と。罪

05　yazuqnï　yüdüp　ketärtäči
を　運んで動かす人が

06　čïyayqa　lab　bušï　birmäklig
貧しい人に献納をして

07　turur　tip . ičgärsär　r<a>qïmlïq
いるといって運ぶのなら慈悲を

08　qïlur　ol　uluγ-raq　KYZČ (?)?YQ

為す、彼は。より大きくもより･･･

09 -raq ärsär yoq . anča tänglig
でもあるはずがない。こうして同じように

10 uluγ küčlüg turur . kim
大きく力強くあるのは彼、

11 ölümtin qutγarur :
死から救う（免れている？）人。

【注釈】

02, 04 suy: Chin. 罪の借用語。ここの例のように suy yazuq と熟しているのは、I=F21:W35-0753,10 も同じ。

04 ZDQT' 'Ṭ(Y)N ḤTH': 朱書き。シリア語。これも新約からの引用だと思われるが、新約にはこれと全く同一の表現はない。この 3 語の中で最も特徴的な語は'Ṭ(Y)N で、ここでは動詞'Ṭ'のプアル形の能動分詞の女性複数形'āṭyan である。この語は新約中で 3 回しか用例がない。そのうち、2 回は ḤṬH'と一組で使用されている。ḤṬH'の方は、両方ともここでは複数形で、所有代名詞を伴った形になっている。

一つ目は使徒 3:19 だが、エトプアル形という受動態なので、「罪を取り除く」行為の主語が明らかでない。二つ目はヤコブ 5:20 で、ここではプアル形の能動分詞となっている（'āṭē）。従って、この個所は唯一、「罪を取り除く」行為の主語がある。それは、「罪人をその迷いの道から連れ戻す」という善行をなす人である。文脈上は様々な善行の勧めの中にあり、その主体も様々な名で呼ばれている。語彙上も、少し前の 5:16 で善行の一つの祈りについて、zadiqā（正しい人）という表現が使用されている。これは、04 行目の 3 語の中の ZDQT'と同じ語根の名詞である。この語は、F のもう一つの引用個所であるマタイ 10:42 の直前に 3 回登場し（マタイ 10:41）、この個所は内容的にもヤコブ 5:20 と呼応している。しかも、これはヤコブ書の最末尾の一句だが、このヤコブ書全体のテーマが善行と信仰との関係である。従って、語彙から見ても、内容から見ても、ヤコブ 5:20 の引用と考えるのが最も自然である。（武藤）

I

(№132) 文書番号 F21:W35-0753

サイズ：縦 15.7cm　横 11.5cm

01 sayu . G'ŠYŠBD . SL?K qayu
すべての ･･･ ･･･ いかなる

02 kiši . kim . yükünč-kä . alqïš-qa
人でも 礼拝に、 賛美に

03 qurb<a>na-qa . kelsär-sizlär
聖体礼儀にあなたがたが来るのなら

04 qurb<a>na-ta (ŢYM)L(') bolγalï . kičip
聖体礼儀にて･･･となるために進んで、

05 qolur . birg[äl]i t<a>rs<a>qa kim
求め、与えるためキリスト教徒は誰でも、

06 yükünč-kä alqïš-qa kelmišingtä
礼拝に 賛美に あなたが来たときに

07 qorqïnč . ayïnč . üzä . tursar
恐怖の上に【あなたが】立つならば、

08 -s<ä>n . taqï . artuqraq . ymä
さらにはなはだしくは

09 arïγ . 'RZ' . qurb<a>na . tapïnur
清浄なる聖体機密に奉仕している

10 ärkän . qïlmïš suy yazuqungnï .
間に、かつて犯したあなたの罪を

11 saqïnu . qotqï . yabaš . köngül
考えつつ、つつましく穏やかな心

12 birlä . qorqa . bezä . titräyü
をもって恐れ揺れ震えながら

13 tursar . s<ä>n ištin(?) . PYRN'(??)///
あなたが立つならば、行いから･･･

【注釈】

03 qurb<a>na: ここでは「聖体礼儀」を指す。この葉の裏、J=F21:W36-0753,06 にもある。(武藤)

09 'RZ': 複数形。シリア語。qurb<a>na と合わせて、「聖体機密」のこと。単独では、「機密」、「秘義」の意味 (J=F21:W36-0753,02 参照)。(武藤)

J

(№133) 文書番号 F21:W36-0753

サイズ：縦 16cm 横 11.5cm

01 SW?'?Y . YŢ?'R . arïγ .
清浄なる

02 '(RZ)' . t[a]p[ïn](ur) . ärkän . tolp .

機密に奉仕する間に、すべての

03 yertinčü . -n(üng) yazuqïn . qolur . (är)kän .
世界の罪をもって請う間に、

04 bir . ikir(čgü) . birlä . söz .
ひとつの疑いをもって言葉を

05 sözläšmäk . yaramas .
話すことはふさわしくない。

06 r<a>qya . bolmas . arïγ . 'RZ' . qurb<a>na .
（あなたは?）司祭ではない。清浄なる聖体機密に

07 tapïnur . ärkän . öngtün . kök .
奉仕する間に、東方の空（は?）

08 iki . qutluγ . yalïn(guq) . q<a>rïšlï .
祝福された人の２スパン【の長さ】

09 Y?? . bar . čanï . qorqa . aymanu .
･･･すべてを恐れおののきながら

10 bezä . titräyü . är[kän] . W Ṭ R K .
揺れ震えつつある間に ･･･

11 K(?)' . (K)WRGNW . (P)'G(G)'L(Y) . ärmäsär .
･･･ ･･･ ･･･ ･･･でないのなら、

12 ???(R)'?Y . '(R)?(') ṬW(R)W(?) . (GY)R

13 ?G??W .ög-lär . qang . -lar
･･･ 母ら、父ら

【注釈】

06 'RZ': 複数形。シリア語。（武藤）

参考文献（テュルク語文書については第二部の参考文献も参照）

Balicka-Witakowski, Eva/al. 2001 *The Heirs of the Ancient Aramaic Heritage*, (The Hidden Pearl, II), Roma: Trans World Film.

Brockelmann, Carl 1928[2] *Lexicon Syriacum*, Halis: Max Niemeyer.

江上波夫 2000『モンゴル帝国とキリスト教』東京：サンパウロ。

England, John C. 1996 *The Hidden History of Christianity in Asia: The Churches of the East before 1500*, Delhi: ISPCK/Hong Kong: CCA.

Erdal, Marcel 2004 *A Grammar of Old Turkic*, Leiden/Boston: Brill.
フォルツ, R. C. 2003『シルクロードの宗教――古代から 15 世紀までの通商と文化交流――』常塚聴訳、東京：教文館。
Gillman, Ian/Klimkeit, Hans-Joachim 1999 *Christians in Asia before 1500*, Surrey: Curzon.
Hage, Wolfgang 1978 "Einheimische Volkssprachen und syrische Kirchensprache in der nestorianischen Asienmission", in: Gernot Wießner (ed.), *Erkenntnisse und Meinungen*, II, Wiesbaden: Harrassowitz, 131-160.
Hage, Wolfgang 1988 *Syriac Christianity in the East*, Kottayam: SEERI.
Hatch, William H. 2002 *An Album of Dated Syriac Manuscripts*, Piscataway: Gorgias.
Kiraz, George Anton 1993 *Computer-Generated Concordance to the Syriac New Testament*, I-VI, Leiden: Brill.
Kiraz, George Anton 2002 *Comparative Edition of the Syriac Gospels: Aligning the Sinaiticus, Curetonianus, Peshitta and Harklean Versions*, I-IV, Piscataway: Gorgias.
Moffett, Samuel H. 1998^2 *A History of Christianity in Asia*, I: *Beginnings to 1500*, New York: Orbis Books.
Muraoka, Takamitsu 1987 *Classical Syriac for Hebraists*, Wiesbaden: Harrassowitz.
Muraoka, Takamitsu 1997 *Classical Syriac: A Basic Grammar with a Chrestomathy*, Wiesbaden: Harrassowitz.
武藤慎一 1999「アフラハトにおける神の下降と人間の上昇――解釈学的観点から――」『基督教学研究』19: 39-57.
武藤慎一 2004『聖書解釈としての詩歌と修辞――シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス――』東京: 教文館。
武藤慎一 2006「シリア文字文書」吉田順一編『ハラホト出土文書（モンゴル文）の研究』（課題番号 14310174)、平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、東京：早稲田大学文学学術院、139-146.
Nöldeke, Theodor 1966 *Kurzgefasste syrische Grammatik*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft (Leipzig, 1898^2).
Payne Smith, Jessie (ed.) 1903 *A Compendious Syriac Dictionary*, Oxford: Clarendon Press.
Payne Smith, Robert (ed.) 1879-1901 *Thesaurus Syriacus*, I-II, Oxonii: Typographeo Clarendoniano.

逐語索引

モンゴル語

文書番号が 84H・F***:W***/****となっている文書は、F***:W***の部分のみで表示した。

abay_a F21:W28,01
ab<a>y_a F61:W9,35
abay_a-yin F21:W28,05
abbasu F192:W1,18
[a]bbasu F192:W1,07
abčirabasu MON02,05
abču F61:W9,06; F211:W2,03
abdula MON02,02; MON02,07; MON02,13
abita F41:W11,05
abqu F61:W9,21
abuba F17:W9,05; F79:W6,04; F250:W3,04
abudala F124:W1,04
abuya MON03,05
abuy_a F61:W6,13; F61:W9,25; F61:W9,31; F79:W7,03; F116:W92,02; F116:W572,06; F209:W69,04; F209:W69,18; F211:W2,04
abuy[_a] F116:W62,04; F116:W595,05
abuyai F116:W507,03
abuysan F29:W1,02
abuysan F61:W6,17
abuysan-i F14:W16,03
abur_un F135:W80,04
abutuya[i] F224:W3,07
ačǰu F61:W6,08; F61:W6,09; F61:W6,13
ačiqu F61:W6,06
adiraman F209:W68,16
adisdid F42:W3c,11
(aduyusun) F192:W1,13
ay Y1:W119,05
aysuǰu F79:W6,04
aȳu F61:W9,22
alban F61:W9,26; F209:W67,04
(alban/altan?) F43:W23,03
alban-da[ča] MON04,06
ali MON02,05; MON02,07
altan → (alban/altan?)
alqudai MON02,12
aluy F144:W3,05; HF197B,01
amitan-u F20:W64,05
amuyulang F21:W27,04
amun F9:W31b,06; F17:W9,02; F116:W29,03; F116:W349,05; F250:W3,04
am[un] F17:W9,05
amuṉ F17:W9,04
amun-i F17:W9,08; F61:W6,07; F61:W6,09; F61:W9,23
(amur) F21:W28,03
anu F20:W64,05; Y1:W101,03
aṉu HF125d,03
aqa F42:W1,04
aq_a F209:W67,02; F209:W67,03
aračabs̄_a MON02,14
arad F43:W23,02
(aralǰi)/// F111:W2,04
aran F9:W31b,13
(arasun?) Y1:W119,02
arba F61:W9,06; F61:W9,19; F79:W7,02; F79:W7,03
arban 84HF84,08; F9:W57,06; F9:W57,11; F9:W57,12; F9:W57,14; F9:W57,16; F9:W57,18; F9:W57,20; F9:W57,22; F9:W57,33; F9:W57,36; F9:W57,40; F9:W57,42; F9:W57,43; F9:W57,45; F9:W57,46; F9:W57,50; F9:W57,61; F14:W16,02; F19:W72a,01; F61:W9,05; F116:W349,03; F116:W511,05; F116:W595,04; F144:W3,03; F144:W3,06; F209:W68,16; F214:W1,01; F214:W1,04; HF125a,11; HF125b,01; HF125c-a,01; HF125d,10; HF197B,02; MON02,02; MON04,03; Y1:W101,02
(arban) F9:W57,23; F9:W57,31; F9:W57,39
[a]rban F9:W57,08
[arban] MON01,16
arȳui F144:W3,04
(arilyabasu?) F192:W1,19
arqay F9:W57,57
arsl[an?] F135:W80,01
asayuǰu F209:W69,04; F209:W69,18
asaqbasu F192:W1,15
asaqču F197:W30,03
asiy F17:W9,07; MON01,09
as_iy F79:W6,08
asiy-iyan F250:W3,04
asiy-tu F250:W3,04
asuǰu F17:W9,02; F17:W9,04; F79:W7,03
ata F41:W11,03

atuγai F111:W1,02
auǰi-ṯur Y1:W119,01
ausi F211:W2,02
ayimay F42:W3a,05
ayimay-un F135:W80,01; F135:W80,03
ayu F9:W57,07; F9:W57,10; F9:W57,12; F9:W57,14; F9:W57,16; F9:W57,18; F9:W57,20; F9:W57,22; F9:W57,23; F9:W57,25
ạčüs F144:W4,03
ạde F61:W6,02; F61:W6,05
(ạribesü?) F61:W6,17
ạyediǰü HF125d,09
ba F42:W3b,03; F61:W6,02; F61:W9,03; F61:W9,26; F62:W19,03; F111:W2,02; F209:W67,04; F211:W2,03
(ba?) F116:W2,06
bay F43:W23,05
bayatur F116:W2,07; F209:W67,03
baysi F29:W1,01
bayular_un F9:W57,04
bayulbasu F192:W1,19
bayulyaǰu 84HF84,04; F20:W64,01
bai F61:W9,26
baitemür F245:W5,03; MON01,04; MON01,19
balyad F234:W1,08
(baribasu?) F192:W1,16
bariydays<a>d 84HF84,03
barǰu F9:W31b,12; F9:W31b,14; F116:W2,02;
barš F79:W5,01
basa F9:W31b,11; F9:W31b,16; F41:W11,06; F61:W6,15; F61:W6,17; F61:W9,03; F211:W2,03; MON01,13
[basa] MON01,09
bau MON02,09
bau-ača MON02,01
baulaǰu F19:W72a,02
bausin F79:W6,11; F209:W69,08; F209:W69,20; F250:W3,08
[bausin] F62:W19,05
bausu F250:W3,12
(bayaliγ?) F234:W1,13
bayan F20:W64,02; HF125d,08; MON02,16
bayiyulbasu F192:W1,11; F234:W1,06
[ba]yiyul_qun F234:W1,04
bayilyabasu F224:W3,03
bayil/// F42:W3a,02
bečin F14:W16,02; F14:W16,03; MON03,09
[be]kilebesü F192:W1,14
belge F41:W11,04
ber F9:W31b,06; F9:W31b,10; F9:W31b,12; F20:W64,06; F61:W6,14; F62:W19,06; F79:W6,12; F116:W503,05; F116:W512b,02; F116:W521,08; F209:W69,08; HF125c-a,06; MON01,07; MON02,07; Y1:W119,06
(ber?) HF197B,06
beri F9:W57,04; F20:W64,01; F192:W1,19
bi F14:W16,07; F17:W9,02; F29:W1,01; F41:W11,02; F61:W6,08; F61:W6,13; F61:W6,15; F61:W6,25; F61:W9,30; F61:W9,32; F61:W9,33; F61:W9,34; F61:W9,35; F61:W9,36; F61:W9,37; F61:W9,38; F62:W19,06; F62:W19,09; F62:W19,14; F79:W6,11; F79:W6,14; F79:W6,15; F79:W7,08; F124:W1,02; F124:W1,04; F124:W1,05; F135:W80,09; F135:W80,11; F209:W69,02; F209:W69,06; F209:W69,08; F209:W69,11; F209:W69,12; F209:W69,13; F209:W69,14; F209:W69,16; F209:W69,19; F209:W69,21; F209:W69,24; F209:W69,25; F209:W69,26; F209:W69,27; F250:W3,01; MON01,18; MON01,19; MON01,20; MON01,21; MON01,22; MON01,23; MON02,01; MON02,10; MON02,11; MON02,12; MON02,13; MON02,14; MON02,16; MON02,17; MON02,18
(bi) F124:W1,03
[bi] F17:W9,08; F41:W10,04
bičibe F124:W1,05; F135:W80,11; MON02,16
bičig 84HF84,04; 84HFA205,01; F9:W57,56; F14:W15,03; F14:W16,01; F41:W10,03; F61:W6,05; F61:W6,20; F61:W6,24; F61:W9,28; F62:W19,08; F116:W521,02; F192:W1,11; F209:W69,09; F209:W69,22; F234:W1,10; MON04,05
bi[čig] F116:W349,04
bičig-iyen F29:W1,09-10; F135:W80,09; F234:W1,05; F250:W3,11
bičig-iyer F116:W29,02; F116:W62,02
bičig-iy[er] F116:W204,02
bičig-i[yer] F116:W572,02
bičigiyen F79:W6,13
bičigün F62:W19,07; F250:W3,09
bičin F209:W69,01; F209:W69,15; F250:W3,01
bida HF125c-a,08
bidạni HF125d,09
bilig-tü F210:W23,03
bing F9:W57,53
bodi F42:W3b,01
bolai F214:W1,05

bolba F61:W6,09; F61:W6,15; F61:W9,17; F61:W9,19; F61:W9,21; F61:W9,27; F79:W6,07; F79:W6,09; F79:W7,06; F209:W69,05; F250:W3,06; MON02,07
(bolba) F62:W19,01
bol[ba] F17:W9,07
bolbasu F17:W9,09; F61:W6,15; F62:W19,05; F79:W6,10; F209:W69,07; F209:W69,20; F210:W23,03; F224:W3,07; F250:W3,07
bolyan F9:W31b,08
bolγaṉ Y1:W119,07
bolǰalduγsa[n] HF125a,06
bolǰu F17:W9,03; F20:W64,02; F20:W64,03; F29:W1,01; F61:W9,04; F79:W6,02; F79:W6,03; F79:W7,02; F135:W80,02; F209:W69,02; F209:W69,16; F250:W3,02; HF125b,04; HF125c-a,10; MON01,12; MON02,01
bolǰuγu HF125b,05
bolqui-yi F61:W6,10
bolsuyai F29:W1,09; F61:W6,19; F135:W80,08
boltu[yai] F42:W3c,12
bolumui F20:W64,06
bögesü F9:W31b,13; F9:W31b,15; F9:W57,03
bögetele Y1:W101,02
bögken F135:W80,01; F135:W80,11
böküṉ F135:W80,05
buγdaγ-tur Y1:W119,03
buydai F17:W9,02; F17:W9,04; F17:W9,05; F17:W9,08; F61:W9,05; F61:W9,19; F209:W69,04; F209:W69,17; F214:W1,03; F214:W1,06; MON01,02
bu[ydai] F79:W5,04
[bu]ydai MON01,06
buydai-yi F209:W69,06; F209:W69,18
bui F9:W57,51; F9:W57,62; F17:W9,09; F41:W11,06; F61:W9,14; F61:W9,24; F62:W19,04; F209:W69,07; F209:W69,20; F210:W23,02; F250:W3,07
b[ui] F79:W6,10
buliyan 84HF84,02
buliyan F9:W31b,13
buluyan F116:W349,05
buq_a F42:W1,09; MON01,20
bur F116:W2,01
buralgi F116:W62,02; F116:W349,04
buruyu F20:W64,04
busu F250:W3,08
bu[Y]su F135:W80,07
busu-ača F29:W1,06
buu F9:W31b,11; F224:W3,07
buyayuldaqu F9:W57,57
buyan F42:W3b,02; HF125a,09; HF125d,04
buyaṉ HF125c-a,02
buyan-i HF125c-a,07
buyaṉ-ṯur F210:W23,04
buyanbuq_a F245:W5,01
buyu F43:W23,03; F116:W512b,02; MON04,05
büḏgebesü F79:W7,05
büḏgeǰü F79:W7,03; F79:W7,04; F209:W69,05; F209:W69,06; F209:W69,09; F209:W69,18; F209:W69,22; F250:W3,10
büḏg[eǰü] F62:W19,07
bügüde HF125d,02
bügüd[e] HF125c-a,10
bügüde-yi MON06,03
bükes F29:W1,01
bükü F250:W3,02; F250:W3,06; F250:W3,11; HF125d,07
bükü-ṯür F116:W2,05
bülegei HF125d,03
bürčečeg Y1:W119,04
büsiregčid F20:W64,05
bütegebesü F79:W6,08
bütegeǰü F79:W5,07; F79:W6,12
bütegetele F79:W6,09
büteǰü Y1:W119,07
büt[ügeǰ]ü Y1:W119,08
bütüṉ-ün Y1:W119,03
bṵri F61:W9,18; F250:W3,05
čaḏqulang F137:W1,02
čay-un F192:W1,01
(čayun?) F19:W72b,04
čayan F61:W6,07; F61:W9,23; F137:W1,02
\čayan/ F17:W9,04
čayaṉ F17:W9,05
čaṉ/// F62:W19,03
čau F19:W72b,03; F79:W5,02; F79:W5,03; F79:W6,06; F144:W3,07; Y1:W119,08
\čau/ F79:W5,04
ča[u] F224:W3,03
čau-yi F61:W6,12; F144:W3,02
čečeg Y1:W119,03
čeregtü F245:W5,02
čerig MON04,06
čerig-tür MON04,04-05
či F116:W2,06; HF125c-a,06; Y1:W119,07

čilgütei F116:W2,01
čimada HF125c-a,09
čimalayulbasu F192:W1,15
čin HF125a,08; HF125c-a,05
čing-ün F14:W16,06
čiubun F245:W5,02
čobu F245:W5,05; F245:W5,07
čoỹ Y1:W119,05
č(o)ng(du)n F124:W1,05
čonǰa/// F62:W19,09
čonǰ[a] F62:W19,03
čöken F20:W64,03
čölge-ṯur F9:W31b,14
čölke F116:W511,01
čölke-y<i>n F116:W213,01
čübei F116:W507,01
ḏai F19:W72a,02
dayulǰu F61:W6,13
daỹusỹaǰu F210:W23,05
dalun Y1:W119,02
darasun F42:W1,06; F42:W1,08
[d]arasun F211:W2,02
darǰi F124:W1,04
daruba F209:W68,02; F209:W68,04; F209:W68,06; F209:W68,08; F209:W68,10; F209:W68,12; F209:W68,13; F209:W68,14; F209:W68,15; F209:W68,16
daruqu F61:W9,24
daulaš_a MON01,21
daul[aš_a] F21:W28,02
dausatala F61:W9,22
(de)bter F192:W1,07
degel F9:W57,27; F192:W1,08
degel-ün F116:W2,03
deger_e F224:W3,06; MON02,10
dege[r_e] F224:W3,05
degü F209:W67,02; F209:W69,08
degüben MON02,03
[delgerebesü] F192:W1,21
demleǰü MON02,04
ding F9:W57,54
doluyan F9:W57,18; F9:W57,19; F9:W57,29; F79:W7,04; F116:W349,06; F116:W503,03; F116:W511,03; F116:W521,06; F209:W67,01
doluya[n] F224:W3,02
(d[oluy]an?) F192:W1,02
doluyan-a F9:W57,43
dolun F209:W68,15
dorǰi F61:W6,02; F61:W6,08; F61:W6,15; F61:W6,23
dorun_a F9:W57,07; F9:W57,10; F9:W57,21; F61:W9,12
dotaysi MON01,14
dotan_a F62:W19,04; F209:W69,07; F209:W69,19; F250:W3,07
dotun_a-ača F9:W31b,06
dönǰi F135:W80,04
dörben F9:W57,12; F9:W57,13; F9:W57,31; F9:W57,34; F79:W5,01; F116:W503,01; F116:W521,04; HF125a,11; HF125b,01; MON02,03; MON02,04; MON02,15
(dörben) F9:W57,41
d[örbe]n MON04,04
dörben-e 84HF84,08; F9:W57,45
ḏorben F61:W9,13; F61:W9,15; F61:W9,29
dumda F9:W57,23
duraṯu F43:W23,05; F43:W23,06
(durdun) Y1:W119,04
dutayu F20:W64,03
(dutayun) F9:W31b,09
düil<e>dekü F9:W57,55
düli HF125c-a,04
ebečin F135:W80,06
ečegs_en F135:W80,07
ed F9:W57,27
ede 84HF84,04; F9:W57,06; F9:W57,08; F9:W57,11; F9:W57,13; F9:W57,15; F9:W57,17; F9:W57,19; F9:W57,21; F9:W57,23; F9:W57,24; F9:W57,51; F9:W57,62; F210:W23,02; MON02,04; MON04,07; MON06,03
eden-ṉi Y1:W119,06
edeni F116:W512a,02
ed̲kebesü F9:W57,27
ed̲(ke)be(s)ü F192:W1,08
edüge 84HF84,03; F116:W521,06; F116:W595,06; HF125d,06; MON03,05; MON04,07
[e]düge F116:W92,03; F116:W503,03
edüged-tü[r] F43:W23,02
egün-eče F234:W1,03
egüskebei HF125c-a,03
eǰiy_e-ṯe HF125d,05
[eke] MON01,05
(elči) F9:W31b,08
ele F116:W2,02

eǰigen-i F29:W1,03
eǰigen-ü F29:W1,05
emčile(gül)besü F192:W1,20
emegen-ü F250:W3,03
emün_e F9:W57,12; F9:W57,13
emüne_e F9:W57,10
ende MON01,17
ende Y1:W119,08
ene F29:W1,05; F41:W10,04; F61:W6,09; F61:W6,20; F61:W6,23; F61:W6,24; F79:W5,06; F79:W6,09; F79:W6,14; F79:W6,15; F116:W2,02; MON04,05; Y1:W101,02
ene HF125c-a,07
en_e F9:W31b,07; F17:W9,05; F17:W9,05; F17:W9,08; F61:W9,09; F61:W9,14; F61:W9,16; F61:W9,18; F61:W9,21; F61:W9,25; F61:W9,26; F61:W9,29; F61:W9,32; F61:W9,33; F61:W9,34; F62:W19,07; F62:W19,08; F62:W19,09; F62:W19,10; F62:W19,11; F79:W7,03; F79:W7,07; F209:W69,06; F209:W69,11; F209:W69,12; F209:W69,18; F209:W69,24; F209:W69,25; F250:W3,08; F250:W3,11; F250:W3,12; MON02,07; MON02,11; MON02,13
[en]_e F79:W7,06
engke F21:W28,03; F21:W28,05
erdenis-un F42:W3c,11
er_e F29:W1,03
eregütü F29:W1,08
(ergigambu?) 84HFA205,01
eríbesü F224:W3,04
erigütü F61:W6,19
erketü F210:W23,03
erügdekü F9:W57,60
erüsün F210:W23,04
ese F197:W30,02
es_e 84HF84,03; F224:W3,04; F234:W1,06; F79:W6,08; F79:W7,05; HF125c-a,07; HF125d,06
[e]s_e MON01,08
esen F21:W28,05
esentemür[-ün] MON01,13
esergü F9:W57,05
ešin_e F9:W31b,03
eš_ün F116:W572,05
eteged F61:W9,14; F210:W23,01
[yaday]si MON01,14
yadan_a F9:W31b,06; F62:W19,04; F250:W3,07; F209:W69,07; F209:W69,19
yadar Y1:W119,05
yaǰar F61:W9,26
(yaǰar?) F192:W1,05
yaǰar-tur F41:W11,05
yaǰar-un F21:W27,02; F61:W9,09; F61:W9,29
yaǰar-yi F61:W9,08; F61:W9,16; F61:W9,16; F61:W9,21
yal-ṯu MON06,04
yaqai F61:W6,01; MON02,15
yar-iyar F61:W6,12-13
yarbasu F192:W1,21; MON01,08
y[arya]basu F192:W1,19
yaryaqu MON02,07
yolumta F9:W57,54
yučin F9:W57,24
[y]učin F144:W4,09
yulir F116:W29,03; F116:W349,05
yunan MON02,03; MON02,04
yurbaȳula F61:W9,27
yurban F9:W57,10; F9:W57,11; F9:W57,32; F9:W57,41; F14:W16,04; F14:W16,04; F42:W3c,11; F61:W6,01; F116:W503,02; F116:W503,04; F116:W511,04; F116:W511,06; F116:W521,07; F116:W572,04; F116:W595,05; F116:W92,02; F144:W3,07; F209:W68,06; F209:W68,10; F209:W68,11; F211:W2,05; F214:W1,02; F214:W1,03; HF125a,10; HF125c-a,01; HF125d,10; HF197B,03; HF197B,05; MON01,15; MON03,06
yurb[an] F116:W521,05
yur[ban] F234:W1,11; MON04,04
ȳurban MON01,03
yurban-a F61:W9,03
yutusun Y1:W119,06
yuyila F116:W204,05
yuyumu F116:W503,05; F116:W521,08
ga F9:W57,52
gamǰu F42:W3c,09
(ged/ked) F42:W3c,08
gegegen → (kenüken/gegegen?)
geg[en] F21:W28,01
(ger) F192:W1,19
ger-tür F250:W3,06
[ger-tür] F17:W9,09
gereči F29:W1,11; F61:W6,25; F62:W19,12; F79:W7,08; F124:W1,02; F135:W80,12; F135:W80,13; MON02,14; MON02,17; MON02,18

(gereči) F124:W1,03; F124:W1,04; F124:W1,05
ger<e>či F61:W9,35; F61:W9,36; F61:W9,37; F61:W9,38; F79:W6,16; F79:W6,17; F209:W69,13; F209:W69,14; F209:W69,26; F209:W69,27
gere[či] F62:W19,13
ger[eči] F61:W6,26
geregeči F250:W3,13
gergei-lügeben HF125d,09
gesigün F9:W57,61
gi F9:W57,56
ging F9:W57,57; MON02,01; MON02,09
güi F9:W57,60; F137:W1,02
günǰiber F14:W16,06
günü-eče F17:W9,03
gürü MON06,06
i HF125d,07
ibü F61:W9,10; F61:W9,13; F61:W9,37; F209:W68,04; F209:W68,06; F209:W68,08
idegen HF125b,02
ilaǰu F20:W64,06
ilebe 84HF84,06
ilebei F9:W31b,09
ileb/// F42:W3a,03
ileged F197:W30,03
ilemüi F21:W28,04
ilyal F20:W64,05
ilǰigeči-eče F79:W5,03
indu MON02,18
inu F41:W11,04; F61:W6,11; F61:W9,09; F61:W9,17; F61:W9,29; F79:W7,04; F135:W80,05; F137:W1,01; F144:W3,06; F144:W3,07; F144:W4,07
inu Y1:W119,08
irebei HF125c-a,09
iredkün F9:W31b,14
iregsen-tür F211:W2,05
ireǰü F61:W6,16
irekü F144:W3,04
irekü-tür F42:W3b,03
iresügei HF125c-a,06
irgen-e F9:W31b,07
irgen-ü F79:W7,05
irgenü F62:W19,02
irüči F61:W6,24
isda F61:W9,35
isi F19:W72b,01
(isi/yisi)ne F116:W213,01
isin_e F116:W454,01; F116:W62,01
isin_e-yin F111:W2,01
isinei F116:W511,01; F116:W572,01; F144:W3,04
isinei-yin F116:W29,01
isin_ne F116:W512a,01
ištemür F209:W68,14
ǰabsar F61:W9,09; F61:W9,14
ǰabsar-tu F61:W9,10; F61:W9,11; F61:W9,12; F61:W9,13
(ǰaγabaqai?) F41:W11,04
ǰayalduydaqu F9:W57,60
ǰayun F42:W1,06; F42:W1,08
ǰayura F9:W31b,05
ǰalyaldubasu F192:W1,18
ǰam F209:W67,04; MON04,06
ǰam-tur F209:W68,01; F209:W68,03; F209:W68,07; F209:W68,09; F209:W68,11
ǰamčid F111:W2,03
ǰamǰiu F245:W5,08
ǰang F197:W30,01; F250:W3,02
ǰaqa Y1:W119,02
ǰaq_a F116:W2,03
(ǰaryu) F192:W1,07
ǰarim F29:W1,04; F79:W5,06; F79:W6,03
ǰarimud F20:W64,04
ǰarsai F79:W7,08
ǰasabasu F192:W1,20
ǰasay-un F29:W1,08; F135:W80,08
ǰayayabar MON02,08
ǰegüden HF125b,09
ǰiyar_un F116:W29,02
ǰil 84HF84,06; F9:W57,02; F14:W16,02; F14:W16,03; F14:W16,08; F17:W9,01; F17:W9,06; F41:W11,01; F61:W6,01; F61:W9,01; F79:W5,01; F79:W7,01; F116:W349,02; F116:W349,05; F116:W511,03; F116:W511,08; F116:W521,04; F116:W572,04; F116:W595,04; F116:W595,06; F116:W92,03; F135:W80,10; F209:W67,01; F209:W69,01; F209:W69,15; F234:W1,11; F250:W3,01; HF197B,02; HF197B,04; MON01,16; MON02,15; MON03,09
[ǰ]il F111:W1,01
[ǰi]l F116:W503,01
[ǰi]l-ün F144:W3,03
ǰirayad F42:W1,07
ǰiran F144:W3,02

Jiryuyan F9:W57,16; F9:W57,17; F116:W204,11; F209:W67,02
Jiryuyan-a F9:W57,33; F116:W349,03
Ji[ryu]yan-a F9:W57,42
Jirun F116:W212,02
Jiruqai F9:W57,63
Jo F209:W68,14
Jobalang-ud F210:W23,02
Jobki-tur F9:W57,10; F9:W57,14; F9:W57,18; F9:W57,21-22
Joqiqu F192:W1,10; F192:W1,14; F192:W1,15; F192:W1,21; F9:W57,28
Joqi[qu] F192:W1,09
Jo[qiq]u F192:W1,17
J[oq]iqu F192:W1,16
(Joq)iqu F192:W1,21
Jögebesü F192:W1,10
Jrly F14:W16,05
Jrly-iyar F9:W31b,01
Jrly-un F61:W6,19
Jüg F9:W57,02; F9:W57,04
Jü(g) F9:W57,03
Jug F9:W57,07; F9:W57,12; F9:W57,16; F192:W1,03
(Jug) F9:W57,19
kebeg F61:W9,02; F61:W9,33
kebid F192:W1,20
kebidki F209:W68,15
ked F137:W1,02; F234:W1,06
kei F192:W1,04; HF125b,03
kejiy_e F210:W23,05; HF125c-a,08
keleldükü-yi F43:W23,04
kem F61:W9,17; F79:W6,07
kem-tür F79:W7,05
kemeged HF125c-a,09
kemegsen-ü MON04,06
kemejü F116:W2,06
kemejüg[ü] HF125a,01
kememü HF125c-a,06
kemen F29:W1,09; F41:W10,03; F61:W6,20; F61:W6,22; F61:W9,27; F62:W19,08; F79:W6,13; F111:W1,02; F116:W2,05; F135:W80,09; F209:W69,09; F209:W69,22; F234:W1,09; F250:W3,10; MON01,16; MON02,10
ke[m]en F234:W1,04
ken F20:W64,06; F61:W9,22
(kenüken/gegegen?) F137:W1,02
ker F20:W64,06; F116:W503,05; F116:W512b,02; F116:W521,08; HF125c-a,06; HF197B,06; MON01,07; Y1:W119,06
kereg F79:W5,03; HF125a,04
kereg-dü F61:W9,04
kereg-tü F17:W9,03; F250:W3,02
kereg-t[ü] F79:W5,02
[kereg-t]ü F79:W6,02
keregtü F29:W1,01; F79:W7,02; F135:W80,02; F209:W69,02; F209:W69,16; MON02,01
kes_i F29:W1,09
kesig F116:W29,03; F116:W349,05; F116:W521,03; F116:W572,03; F116:W595,03; F144:W3,05; F42:W1,05; F61:W6,06; HF197B,01
kes[ig] F42:W1,07
ke[sig] F116:W62,03
k[e]s[ig] F116:W204,03
[ke]sig F42:W1,03
keyid-tür-iyen Y1:W101,03
kibesü F9:W57,27; F192:W1,12; MON02,09; MON02,10
kičir F135:W80,02; F135:W80,04
kičiyegdekü F210:W23,04
kiged F9:W31b,05
kii F209:W69,02
kisang F245:W5,07
kiu F245:W5,04
kiyes///??/// F192:W1,04
köbegetü-ber F116:W2,01
köbegüd-teče F116:W2,07
köbegün F116:W511,02
köb<e>gün F61:W9,02; F61:W9,03; F61:W9,33; F61:W9,34
[k]öbegün MON06,02
köbegün-ü F116:W204,03; F116:W521,03; F116:W572,03; F116:W595,03
ködege F42:W3a,06
kögeler F144:W3,06; F9:W57,48
kögel[er] F116:W595,04; F144:W3,03
köke F124:W1,02; F209:W69,14
kölesün F61:W6,11; F61:W6,17; MON02,06
kölesün-i F61:W6,13
kölge HF125a,07
kölker F41:W11,01
köndelen F61:W9,10
köüler MON03,04; MON03,09
kü F210:W23,01; F245:W5,04
küčü F9:W31b,11

kučündür HF125c-b,02
küügüng F116:W2,07
(küleǰü?) F14:W16,03
küliyeber MON01,10
kümün F245:W5,10; HF125b,10; HF125d,08; MON04,04
k[ümün] MON01,08
kümün-e F61:W6,04
kümün-ṯür F61:W6,06; MON02,06
[kü]mün-ü F43:W23,05
kündü F61:W6,19; F234:W1,07
künesürken F9:W31b,06
küngere-eče F29:W1,02
künün F42:W3b,04
kürb[e] F42:W1,09
kürči F144:W3,04
kürčü F42:W1,06
kür[e]g[en] F20:W64,01
kürgegülüged MON04,05
kürgeǰü F9:W31b,14; F61:W6,16
kürgekü F61:W6,09
kürgetügei F9:W31b,11
kürkü F20:W64,03
kürsü F116:W2,06
kürtele F61:W6,14; F116:W204,06; F116:W503,02; F116:W503,04; F116:W511,04; F116:W521,05; F116:W521,07; F116:W595,05; F116:W92,02; F144:W4,06; HF125d,06; HF197B,03; HF197B,05; Y1:W101,03
[kür]tele F144:W3,07
kürteṉ F210:W23,02
kürtügei 84HFA205,02
kürügsen F61:W6,06
küṯeder F135:W80,12
lab HF125b,02
li F61:W6,04
linǰiber F9:W31b,02
liu HF125b,08; HF125d,08
[liu] HF125c-b,03
lobuki F9:W31b,05
lorsai F61:W6,03
lorsi F61:W9,38; F79:W5,02; F79:W6,02; F79:W7,06
l[u] F116:W454,01
lui F209:W68,02
luu F9:W31b,03
mayui F21:W28,02; F111:W2,02
mayun F9:W31b,13
maltan F79:W6,11; F79:W6,15
man-a F9:W31b,04; F9:W31b,14
maṉaγar HF125c-a,04
maṉdur HF125d,04
mani F116:W507,01
manu F9:W31b,03; F29:W1,03
mede Y1:W119,07
medeged Y1:W101,01
medekü F61:W9,27
medeṯügei F116:W349,02; F116:W503,06
medeṯü[gei] F116:W521,09; F116:W572,08
[m]edeṯü[gei] HF197B,07
meṯü F137:W1,01; F137:W1,02
mibü F61:W9,04; F61:W9,08
mingling F144:W4,02
minu F61:W9,22; F61:W9,24; F209:W67,03; F250:W3,08; Y1:W119,01
miq_a-i F211:W2,02
mital[ǰu] MON01,11
mod F192:W1,08; F192:W1,12
modun F9:W57,53
moγai F111:W1,01; F116:W349,02; F116:W349,05; F116:W503,06; F116:W511,08; F116:W595,06; F116:W92,03; F209:W67,01
mon_a F29:W1,05; F61:W6,16
mo{Y}n_a F135:W80,06
mongγul F209:W68,12
morin HF125a,07; MON01,11; MON01,16
mön F43:W23,03
mör F9:W57,03; F192:W1,15; F192:W1,21
mör-tür F192:W1,18
(mösür/mösükü) F9:W57,50
moṉ F17:W9,06; F61:W6,12; F61:W9,11; F79:W5,05; F79:W6,08; F209:W69,04
moṉggüǰeng-ün F135:W80,03
moṉketü F250:W3,13
munamaš_i-yin F111:W2,03
müren-iyer F61:W9,07
ṉada MON06,01
nadača F29:W1,06
nayur F9:W31b,04
naiman F9:W57,20; F9:W57,38; F79:W7,01; F209:W69,03; F209:W69,05; F214:W1,05; F224:W3,02; MON02,15
(naiman) F9:W57,37
naiman-a F9:W57,40; F135:W80,10

namur-un F144:W4,03
nasun-ṯur F20:W64,03
nasutu F29:W1,03; MON02,03
natun F116:W454,03
negegdekü F9:W57,52
nere F192:W1,07; F192:W1,18
nereṯü F43:W23,05; MON02,02
ṉereṯü HF125d,08
nige F250:W3,09
[nige] MON01,15
nigečiten F250:W3,05
nigen F9:W57,06; F9:W57,32; F9:W57,44; F9:W57,46; F14:W16,02; F14:W16,04; F17:W9,01; F17:W9,03; F17:W9,04; F29:W1,04; F41:W11,02; F41:W11,03; F41:W11,05; F61:W6,12; F61:W6,18; F61:W9,18; F61:W9,19; F79:W7,04; F135:W80,04; F135:W80,05; F209:W68,02; F209:W68,04; F209:W68,05; F209:W68,07; F209:W68,08; F209:W68,13; F211:W2,02; F224:W3,01; F224:W3,03; F250:W3,05; MON01,06; Y1:W101,02; Y1:W119,03; Y1:W119,04; Y1:W119,05; Y1:W119,06
nigeṉ Y1:W119,01
nige[n] MON01,02
[n]igen F116:W507,04
[ni]gen F209:W68,01
nigen-e F9:W57,30
nigen-ṯür F61:W6,17-18
ṉigül-i F210:W23,01
nigül-iyeṉ F210:W23,05
nǰegel F17:W9,07
nǰ<e>gel F61:W6,10
nišan F41:W10,04; F61:W6,23; F61:W6,24; F61:W9,32; F61:W9,33; F61:W9,34; F62:W19,09; F79:W6,14; F79:W6,15; F79:W7,06; F79:W7,07; F209:W69,11; F209:W69,12; F209:W69,24; F209:W69,25; F250:W3,11; F250:W3,12; MON02,11; MON02,13
niš[an] F62:W19,10
ni[šan] F62:W19,11
noqai 84HF84,06
noya[n] F42:W1,04
noyad F9:W31b,03; F111:W2,02; F116:W349,02; F116:W503,06; F116:W512a,01; F116:W521,01; F116:W521,09; F116:W572,08
no[yad] F116:W204,09
noyad-ta F116:W213,02; F116:W29,01; F116:W62,01; MON03,01
noyalaqu F192:W1,18
(noyalaqu) F192:W1,07
noyan-u F21:W28,01
(nöküd?) F9:W31b,10
nökür F61:W6,24
NWP'CY-yiṉ Y1:W119,04-05
od F61:W9,17; F61:W9,18
o[dabasu] MON01,14
oḏči F19:W72a,02
oduysan F9:W31b,07
odun F9:W57,05; F9:W57,26; F9:W57,30; F9:W57,31; F9:W57,32; F9:W57,33; F9:W57,34; F9:W57,35; F9:W57,36; F9:W57,37; F9:W57,38; F9:W57,40; F9:W57,42; F9:W57,45; F9:W57,47; F9:W57,49
odu[n] F9:W57,44
od[un] F9:W57,43
(o)du(n) F9:W57,39
(odun) F9:W57,29; F9:W57,33
odun-u F9:W57,02
oγturγui-ṯur F9:W57,25
olan F20:W64,04
oldi F61:W6,03
olǰu F116:W2,01
on F61:W9,21; HF125b,03
[on] MON01,04
on-u F61:W9,30; F209:W69,05
[on-u] MON01,07
ong F42:W3a,01
ong-un F42:W3a,04
ongdur F61:W6,12
onu F79:W5,05
oqur F9:W57,26; F9:W57,30; F9:W57,32; F9:W57,33; F9:W57,35; F9:W57,38; F9:W57,40; F9:W57,43; F9:W57,45
[o]qur F9:W57,47; F9:W57,49
(orayulbasu) F192:W1,07
orayulb[asu] F9:W57,27
ordin-ača F250:W3,02-03
oryubasu MON02,08
orta F245:W5,05
oruba F209:W68,07; F209:W68,09
or<u>ba F209:W68,11
oruq̄u F61:W9,15
osal F61:W6,14
o{Y}sal Y1:W119,06
osul MON01,12

ou F9:W57,55; F209:W68,10
ousi F61:W9,02; F61:W9,12; F61:W9,30; F61:W9,32
öber-ün MON02,02
öber_e F20:W64,06
öbür F79:W6,07
öbür-ün F209:W67,03
öbür_ün F9:W57,04
öčüke[d] F116:W212,02
öčüken F21:W28,02
ögbe F29:W1,05; F61:W6,11; F61:W6,20; F62:W19,08; F135:W80,06; F135:W80,09; F250:W3,11; MON02,04
[ögbe] MON01,06
ögbei F29:W1,10; F79:W6,13
ögčü F61:W9,20
ögčügü HF125b,02
ög{e}be F61:W9,09; F61:W9,16; F61:W9,28
ögegegülkü-yi MON03,08
ögesü Y1:W119,08
öggegülküyi F116:W204,09
ögiged F61:W6,18
ögkü F61:W6,15; F116:W595,09; MON02,12
[ög]kü F79:W6,07
ögkü-yi Y1:W119,07
ögsü F62:W19,08
ögsügei F79:W6,13
ö<g>sügei F250:W3,10
ögtele F17:W9,08; F62:W19,04
ögügči F61:W6,24
ögür_ün F61:W6,05
öki F9:W57,03
ökin F192:W1,19
ölgentemür F135:W80,13
öljei F9:W31b,08; F9:W31b,15
öljeitemür F197:W30,02
öljitemür F43:W23,03; F43:W23,04
örün_e F9:W57,14; F9:W57,17
(örün_e) F9:W57,15
ǫgbe F209:W69,10; F209:W69,23
ǫgkü F209:W69,05
ǫgsü F209:W69,09; F209:W69,22
ǫgtel F209:W69,06; F209:W69,19
ǫmün_e F61:W9,09
ǫrün_e F61:W9,10
qabunki F9:W31b,04
qabur F14:W15,01
qabur-un F116:W204,10
(qadirm_a)-yin F29:W1,04
qadq̄ulduγan-ṯur HF125d,02
qaγačaqu F20:W64,04
qaγan-u F9:W31b,01
qala F61:W9,26
qamtu MON02,12
qamṯu F61:W9,06
qamuγi F61:W6,11
qara F9:W31b,04; F9:W31b,12
qar_a F209:W67,02; F250:W3,03
qarabuq_a F209:W69,21; F209:W69,25
qaratayur F209:W69,13
qariγultuγai MON04,06
qariγuluγsan-i F42:W3c,09
qarǰi F234:W1,03
qariγaṯu F9:W31b,04
qas F137:W1,02; F209:W67,04
(q)aš F192:W1,07
qaṯun-u F144:W3,05
qaṯun-u F116:W29,03; F116:W349,05; F116:W62,03; HF197B,01
q̄aṯun-u F144:W4,05
qi/// F62:W19,14
qibaǰarγui-la F61:W9,13
qilim F245:W5,06
qočurb[a] F116:W212,03
qočuruysan F116:W204,07
qočuruγsan F61:W9,20
qoγulai F9:W31b,07
qoǰid[aysan] F116:W204,07
qola F197:W30,02
qolača F21:W27,02
qolbaǰu F61:W6,18
qoms_a F61:W6,10
qong F9:W31b,02
qonid MON02,04
qonin F61:W9,01; MON02,01; MON02,03
qonin-ṯur MON02,05
qonin-u F211:W2,02
qor F61:W6,09; MON02,09
qorin F9:W57,06; F9:W57,08; F9:W57,11; F9:W57,13; F9:W57,15; F9:W57,16; F9:W57,19; F9:W57,20; F9:W57,22; F9:W57,24; F9:W57,30; F9:W57,35; F9:W57,36; F9:W57,47; F9:W57,49; F41:W11,01;

F61:W6,01; F61:W9,06; F79:W6,01; F79:W6,05; F135:W80,10; F214:W1,04; F214:W1,05; F224:W3,01; F224:W3,02
(qorin) F9:W57,37
qoriyan F192:W1,13
qoruqai MON06,04
qoš Y1:W119,05
qotun-ṯur HF125d,07
qoyar F9:W31b,08; F9:W57,07; F9:W57,08; F9:W57,39; F9:W57,61; MON01,04; MON01,07; F14:W16,06; F116:W204,06; F144:W4,02; F209:W68,03; F209:W68,09; F209:W68,14
(qoyar/quǰir) F9:W57,30
qoyar-a F9:W57,38; F9:W57,47; F41:W11,02
qoyili F61:W9,02; F61:W9,30; F61:W9,32
qoyili-la F61:W9,12
qoyin_a F20:W64,02; F29:W1,06; F61:W6,16; F135:W80,06; MON01,05
qoyitu F41:W11,06; F61:W9,07
qubi F17:W9,01; F9:W57,29; F61:W9,01; F116:W204,04; F116:W572,04; F116:W595,06; F116:W92,03; F209:W69,01; F209:W69,15; F250:W3,01; HF197B,04
qub[i] F116:W204,05
qudal-iyar F9:W31b,12
(qudaldu) F192:W1,12
qudalduǰu F29:W1,02
quǰir F135:W80,10 → (qoyar/quǰir)
qulayai F135:W80,08; MON02,09
qulayan-ača 84HF84,02
qulaydaqu F9:W57,59
qulatai-ača F135:W80,03
quluyan_a F9:W57,63
qumaqai-ṯur F211:W2,04
qung F61:W9,07
quqayčin F135:W80,05
qur_a HF125b,03
qurdaq̄_a F144:W4,04
(qurim?) F9:W57,26
quriyaydaqu F9:W57,56
quubitai F9:W31b,08
saban MON02,01; MON02,11
saban-u MON02,10
sačubasu F192:W1,10; F192:W1,12
(salki?) F192:W1,04
sambu F62:W19,03
sambu-yin F41:W10,04
samǰing F197:W30,01
sanabasu F29:W1,07
sanaǰu F29:W1,04; F250:W3,09
saṉ<a>ǰu F61:W9,31
sang F9:W57,52; F9:W57,58; F61:W6,06; F61:W9,29; F61:W9,30
sang-i F61:W6,08
sang-ṯur F61:W9,23
sangasiri F116:W204,03
sangbatu-ača F29:W1,03
sangči-a F61:W6,08
sanggasiri F116:W511,02; F116:W521,03; F116:W572,03; F116:W595,03
sanggüng-a 84HFA205,02
saṉǰin Y1:W119,02
sara F116:W204,04; F116:W349,02; F116:W349,06; F116:W503,01; F116:W503,03; F116:W511,05; F116:W511,08; F116:W521,04; F116:W521,06; F116:W572,04; F116:W572,04; F116:W595,04; F116:W595,06; F116:W595,07; F116:W595,07; F116:W62,05; F116:W92,01; F116:W92,03; F135:W80,10; F144:W3,01; F144:W3,06; F144:W3,06; HF197B,02; MON03,04; MON03,06
sar[a] F116:W507,04
sar<a> F250:W3,05
sa[ra] F116:W511,03
s[ara] F144:W4,03; HF197B,04
[sa]ra MON03,06
[sara] F116:W204,05
sara-luγ_a F116:W572,05
sara-ṯur F209:W69,05
sara-yin 84HF84,07; F9:W57,29; F9:W57,32; F9:W57,34; F9:W57,35; F9:W57,38; F9:W57,41; F9:W57,44; F9:W57,46; F9:W57,48; F17:W9,01; F41:W11,01; F42:W1,07; F61:W6,01; F61:W9,01; F79:W5,01; F79:W7,01; F79:W7,04; F209:W69,01; F209:W69,15; F214:W1,01; F214:W1,04; F224:W3,02; F234:W1,11; MON02,15; Y1:W101,02
(sara-yin) F9:W57,30
sara-yi[n] F192:W1,02; F209:W67,01
sara-y[i]n MON03,09
sara-y<i>n F144:W3,03
sar<a>-yin F250:W3,01
[sa]ra-yin F42:W1,05; F79:W6,05

sarambai F209:W69,02; F214:W1,02
saranbai F209:W69,06; F209:W69,11
saras HF197B,03
sara[s] F116:W204,06
sa[ras] F116:W521,07
[sa]r[as] F116:W511,06
[saras] HF197B,05
sara_sun F144:W3,07
sara_su{Y}n F116:W92,04
saras-un F116:W92,02; F116:W204,08; F116:W503,02; F116:W595,05; MON03,07
sarĭja F116:W29,02
sarmabai F9:W31b,05
sartayul MON01,18
(sasuu) F124:W1,04
sau F245:W5,09
sa_yid F234:W1,02
sayidin F224:W3,04
sayĭjai F61:W6,03
sayim/// F42:W3c,10
sayin F20:W64,02; F21:W27,04; HF125b,05
sayitemür F209:W69,26
sayitur F43:W23,04
sebligü(lbe)sü F192:W1,13
sedkil HF125c-a,03
segülen F211:W2,01
seĭjeg MON02,17
selte Y1:W119,02; Y1:W119,04; Y1:W119,05
seülkü F61:W9,19
si 84HFA205,02; F79:W6,03; F214:W1,02; HF125a,02; HF125b,08; HF125d,08
[si] HF125c-b,03
sibayučin-u F135:W80,02
(sibar?) F192:W1,05
sibau F209:W68,13
sibirqui F209:W68,08
si̲kübesü F192:W1,12
si̲kügdükü F9:W57,53
s[igüsü] F116:W572,03
sigüsün F116:W204,05; F144:W3,05; MON03,07
sigü[sün] F116:W572,07
si[güsün] F116:W204,08
sigüsün-ü MON03,03
siĭyi F61:W6,04
sĭjir F144:W4,09
sĭj[ir?] F19:W72a,01
[s]ĭjir F144:W3,08
siltan F209:W69,09; F62:W19,07; F79:W6,12
si<l>tan F209:W69,21
siltuyuča F79:W7,07
simu F79:W6,17
sin F9:W57,58
sin-ün F14:W15,01
sinde F250:W3,01
sinede F9:W57,37; F79:W7,01; F79:W7,04; F209:W69,01; F209:W69,15; MON02,15; Y1:W101,03
sinei F61:W9,25
s[inei] F250:W3,03
singgün F42:W3c,09
singküri F61:W6,03
singlamau F116:W512a,02
sin̲ggi F61:W6,04
singsi F250:W3,06
sini F9:W57,06; F9:W57,07; F9:W57,10; F9:W57,12; F9:W57,14; F9:W57,16; F9:W57,18; F9:W57,20; F9:W57,22; F9:W57,24; F9:W57,39; F9:W57,39; F9:W57,41; F9:W57,42
(sini) F9:W57,44
sin[i] F9:W57,46
sini-t̲e F61:W9,01-02; F234:W1,12
sini-t̲[e] F116:W204,11
sini-t̲ür F9:W57,29; F9:W57,31; F9:W57,34
(sini-t̲ür) F9:W57,32
sinide F17:W9,01
sir_a F41:W11,02
sirsi F61:W6,27
siuŋsi F61:W6,02
siuĭja F79:W7,06
siükiin F14:W16,01
soŋda F209:W68,12
soĭja?/// F62:W19,03
soĭimbu F61:W9,37
soĭimbu-la F61:W9,11
soĭulu F61:W9,34
soĭĭu-ača F61:W9,04
soĭĭu-t̲ur F61:W9,08
sombu F79:W6,16
sona-yin F79:W6,14
songgan F111:W2,01
songgan-u F116:W512a,01

songgun F9:W31b,03; F116:W29,01; F116:W62,01; F116:W204,01; F116:W511,01; F116:W521,01; F116:W572,01; F116:W595,01

songgun-u 84HFA205,01

soni F209:W68,13

sonu F79:W5,02; F79:W6,10

sorumbu F209:W68,02

součing-luγ_a F43:W23,04

[souč]ing-un F43:W23,03

sögüd̲čü F21:W27,03

subaγ F9:W57,59

sub<a>γ F61:W9,26

sun HF125c-a,04

suu 84HFA205,01; F62:W19,05

sügčü-t̲ür F116:W507,02

süǰi-t̲ür F41:W11,07

süǰülü F61:W9,03

süke F61:W6,12; F79:W5,04; F144:W3,02; F211:W2,04; F224:W3,03

süke[s] F79:W5,06

sükes-i F61:W6,17

sünesün HF125d,03

šagiṙiba F61:W6,25

šara F209:W69,16; F209:W69,19; F209:W69,24

šau HF125a,09

šim F17:W9,07; F42:W3c,10; F61:W6,07; F61:W6,10; F61:W6,21; F79:W5,04; F79:W6,06; F209:W69,04; F209:W69,17; F214:W1,03; F250:W3,04

šim-iyer F61:W9,15; F61:W9,25; F79:W7,02; F209:W69,03; F209:W69,17; F250:W3,03

šim-t̲ur F61:W6,21; F250:W3,05

šin HF125b,07

šin F61:W6,02

[šiqui] F17:W9,08

šün F116:W595,07

šüm F9:W57,59

šiltaγalaǰu HF125c-a,07

šin F61:W6,23

šin-i HF125a,03; HF125a,08; HF125c-a,05

šinide F9:W57,48

šiqui F17:W9,02

(šultus_a?) F211:W2,05

ta F116:W2,06

t̲ai F62:W19,05; F79:W6,11; F250:W3,08

tayambai F209:W69,08; F209:W69,12

tayar F61:W6,07; F61:W6,21; F61:W9,05; F61:W9,15; F61:W9,18; F61:W9,19; F61:W9,23; F61:W9,29; F17:W9,03; F17:W9,04; F209:W69,03; F214:W1,02; MON01,06

taya[r] F214:W1,05

t[ayar] MON01,15

[t]ayar F79:W7,03; MON01,02

taγar F61:W9,06

tayar-tur F61:W6,10; F224:W3,01

tayar[-tur] MON01,03

tabin F61:W6,11; F144:W3,07

tabun F9:W57,14; F9:W57,15; F9:W57,35; F9:W57,39; F29:W1,02; F61:W6,04; F61:W6,05; F61:W6,07; F61:W6,12; F61:W6,21; F61:W9,01; F61:W9,17; F61:W9,21; F61:W9,23; F61:W9,30; F79:W5,04; F79:W6,06; F79:W7,01; F209:W68,12; F209:W69,01; F209:W69,15; F211:W2,04; F250:W3,01; F250:W3,03; MON02,03

tabun-a F9:W57,35; F9:W57,36; F9:W57,49; F79:W6,01; F79:W6,05

tais_i-yin F9:W31b,02

taki[y]_a HF197B,04

tamayači F245:W5,04

[tam]γ_a F41:W11,07

tamγ_a-tu F41:W11,05

tan F61:W6,04

taqaltu F61:W9,36

taqiγdaqu F9:W57,54

taraan F250:W3,02

tariγ_a F9:W57,55

tariiq̄u F61:W9,17

tariqu F144:W4,08

tariyan F61:W9,04; F61:W9,06; F61:W9,25; F209:W69,02; F209:W69,16; HF125b,04

tariyan-ača F61:W9,18

tariyan-i F61:W9,20

tariyan[-i] F79:W6,09

tariya=qu F61:W9,16-17

taš F9:W31b,04

taštemür MON01,22

tata[γda]qu MON04,05

tatan F9:W31b,13

tata[q]u F9:W57,03

tebīš MON02,17

tegüber HF125c-a,09

tegüs F20:W64,06; F21:W28,03; F61:W9,20; F61:W9,31; F116:W572,06; F116:W595,05; F116:W62,04; F116:W92,02; MON03,05

[tegü]s F250:W3,09

tejigebesü F192:W1,13

tejiyegen F9:W31b,07

tekin Y1:W119,01

temegen F41:W11,04; F135:W80,05; F209:W68,01; F209:W68,02; F209:W68,03; F209:W68,04; F209:W68,05; F209:W68,06; F209:W68,09; F209:W68,10; F209:W68,12; F209:W68,14; F209:W68,15; F224:W3,05

temür F9:W31b,08; F9:W31b,15; F214:W1,05; MON01,20

temür-eče F209:W69,03; F209:W69,16

temür-ün F135:W80,01

temür-yin F41:W11,02

tende F61:W6,14

tengri MON02,08

tere F79:W6,07; F192:W1,03; HF125b,02

[te]re F79:W7,05

terigülen F116:W92,01; F116:W92,03; F116:W572,04; F116:W595,04; F144:W3,06

terigü[len] F116:W511,05; F116:W521,04

ter[i]gülen MON03,06

t[eri]g[ü]l[en] F144:W3,01

t[erigü]l[en] F116:W204,04

[t]erigülen MON03,04

[ter]igülen F116:W62,05

tetürü F20:W64,04

tngči F21:W28,01

toldi F209:W68,10

tonilbai HF125d,06

tonil[ǰaq]u-yin HF125c-a,02

tonilqu HF125c-a,08

toquči F209:W69,27; F62:W19,06

toqun F209:W67,04

toqutemür F61:W9,38

tökü(m) F192:W1,13

töl MON02,06

töregsen(ü/i) F111:W1,03

törügsen MON02,02

tuytemür F224:W3,06

tula F20:W64,06; F29:W1,04; F43:W23,05; HF125c-a,02; HF125d,05; MON04,07

tung F62:W19,05

tungči F21:W28,05; F245:W5,06

tungsu F79:W6,11

tungsui F250:W3,08

tunsudai F209:W69,20

turbasu F135:W80,07

tursiju F9:W31b,09

tusudai F209:W69,07

tutuy F61:W9,28

tutuy̆_laǰu F61:W9,08

tu{'}tuy MON02,12

(tügütü?) MON04,07

tügütü-de MON04,03

tükel F116:W204,02; F116:W521,02; F116:W572,02; F116:W595,02; F42:W3c,12

t[ü]men MON04,04

türegen_e F116:W2,03

tüsürbe F214:W1,06

tüsürb[e] F214:W1,03

tüsürkü F61:W6,08

-T'K'N HF125a,05

-TWR HF197B,05

uy̆u_kei F61:W9,07

ulayan F111:W1,01; F9:W31b,12

ulayan-u F14:W16,04

ulus F9:W31b,06

ulus-i F9:W31b,09

umtayai F61:W6,14

umur_a F61:W9,11

undan F116:W204,08; F116:W572,07; F144:W3,05

unda[n] F116:W521,03

un[d]an MON03,07

[un]dan MON03,03

[unda]n F116:W572,03

uqaǰu F111:W1,02

urbab<a>su F61:W9,22

uridu F116:W503,05; F116:W511,07; F116:W521,08; MON03,08

[uri]dus-un F192:W1,18

urtu F9:W57,26; F9:W57,31; F9:W57,33; F9:W57,34; F9:W57,36; F9:W57,37; F9:W57,39; F9:W57,42; F9:W57,48

(urtu) F9:W57,29; F9:W57,44

usun F61:W9,07

usun-u F9:W57,59

(utasu) F192:W1,23

utasun F9:W57,57

üdüd-tür F9:W57,07; F9:W57,08; F9:W57,11-12; F9:W57,13;

F9:W57,15; F9:W57,17; F9:W57,19; F9:W57,21; F9:W57,23; F9:W57,24; F9:W57,26; F9:W57,50; F9:W57,61

üdür F20:W64,01; HF125a,09; HF125a,10; HF125c-a,04; MON02,05

üdür-tür F9:W57,52; F9:W57,52-53; F9:W57,53; F9:W57,54; F9:W57,55; F9:W57,56; F9:W57,57; F9:W57,58; F9:W57,59; F9:W57,60; F9:W57,63

üge F9:W31b,03; F61:W9,24; Y1:W119,01

ügeben F14:W15,03

ügegü F9:W31b,11; F20:W64,03; F116:W212,04

ügegün F9:W31b,09

ügei F17:W9,09; F62:W19,04; F79:W6,10; F209:W69,07; F250:W3,07; MON02,06; MON02,06; MON06,06

ü[gei] MON01,09

ügei-yin HF125d,04-05

ügüleǰü MON03,02

ügülemü F116:W62,02

ügüler_ün F116:W2,02; MON06,02

ügüleyü F116:W2,05

ügüle/// MON06,01

ügüsi F61:W9,36

üikü F61:W6,03

üiledbesü F210:W23,01

üileḏbesü HF125c-a,08

üileḏčü HF125b,06

üileddekü̈i F9:W57,51; F9:W57,62

üileḏkü̈i-e HF125c-a,03

üiledügči HF125d,04

üiles F9:W57,51; F9:W57,62

üimi F61:W6,02

üǰegüldekü F9:W57,63

üǰeldükü F42:W3c,12

üǰetüge[i] MON04,02

üǰir_e HF125c-a,05

üker F17:W9,01; F41:W11,01; F135:W80,10

ükü F209:W68,04

ükübe F209:W68,05; F209:W68,07

ükübesü MON02,08

ü[kübesü] MON01,10

[ükübesü] MON01,12

ükügsed-ün HF125d,02-03

ükükü F20:W64,04

ükütegüs-e 84HF84,04

ülü F9:W57,03; F9:W57,05; F9:W57,28; F9:W57,50; F9:W57,52; F9:W57,53; F9:W57,54; F9:W57,55; F9:W57,56; F9:W57,58; F9:W57,60; F9:W57,61; F9:W57,63; F62:W19,06; F79:W6,12; F192:W1,10; F192:W1,15; F192:W1,17; F192:W1,21; Y1:W119,07

ümer MON01,23

ümer_e F9:W57,19; F9:W57,21

(ümer_e) F9:W57,17

ümü F79:W7,08

ünege F41:W11,03

ünegenü F41:W11,04

ün_e F135:W80,04; F144:W4,07

ür_e F61:W9,15; F192:W1,10; F192:W1,12

üsün F9:W57,55

üsün-tür MON06,05

ụdüi F61:W9,14

ụgei F209:W69,20

ụlü F209:W69,09; F209:W69,21

vabtan F61:W6,05

vabṭan F42:W1,04

vaubun F245:W5,01; F245:W5,03

visi F116:W454,03

vu F111:W2,01; F116:W204,01; F116:W213,02; F116:W29,01

v[u] F116:W511,01

vu-yin F116:W62,01

vubun 84HFA205,02

vuu F116:W595,01

vuu-yin F116:W521,01; F116:W572,01; F9:W31b,03

yabudal F9:W57,02

yabuyulba F41:W10,03

yabuyuldaqu F9:W57,58

yabuyuld(a)qu F9:W57,05

yabuǰu F9:W31b,10; F9:W31b,12

yabuqu F17:W9,07; F61:W9,14; F79:W6,09; F79:W7,02; F79:W7,06; F209:W69,03; F209:W69,17; F250:W3,06

yabuqun F9:W31b,13

yabutuyai F61:W9,24

yabuyu F192:W1,03

yayubar MON02,09

yayun F61:W6,14

yayun-a F209:W69,08; F209:W69,21

yayun-ṭur F62:W19,06; F79:W6,11-12

yayun-u F20:W64,05

yang HF125d,07

yaqur F17:W9,02

yaramay F79:W5,05

yeke F61:W9,10



yerü F245:W5,10
yi F9:W57,52
yin F116:W349,01
[-y]in MON03,01
ying F197:W30,01
yisine → (isi/yisi)ne
yisin_e F116:W595,01
yisinei-yin F116:W204,01
yisinei-y<i>n F116:W521,01
yisün 84HF84,06; F9:W57,22; F9:W57,22; F9:W57,23; F9:W57,34; F9:W57,41; F9:W57,48; F116:W349,02; F116:W511,08; F116:W62,05; F209:W69,17; F234:W1,11; F245:W5,10
yisün-e F61:W6,01; F9:W57,40
(yisün-e) F9:W57,31
yonadiqudai F209:W68,06
yorčiba F209:W68,01; F209:W68,03
\yorčiba/ F211:W2,04
yorčibai F211:W2,03
yosu F9:W31b,11
yosuyar F29:W1,08; F61:W6,19; F62:W19,02; F62:W19,07; F79:W6,08; F79:W7,05; F116:W503,05; F116:W595,09; F135:W80,08; F234:W1,07; F250:W3,09; MON03,08
yo[suyar] F116:W511,07
-YY'R MON03,02

不明あるいは解釈困難な綴り

aya??i Y1:W119,03
b/// F234:W1,08
ǰas///?? F192:W1,08
§??/// F14:W16,03
""W?///?WN F137:W1,01
"RP'/// F144:W4,05
"Y???/// F21:W28,06
'C/// F234:W1,08
'L/// F42:W3a,05
'R?/// F14:W16,08
'S?/// F42:W3b,04
'W"YW F192:W1,05
'W'C/// F192:W1,20
'W/// F42:W3c,09; F79:W5,07
'WD'"/// F116:W212,01
'WLM F29:W1,01
'WY'/// F116:W512a,03
'WY?///YYS F14:W16,08
'WYL/// F116:W512b,01
'WYN F42:W3c,10
'Y(R/C)'KD?///KYL F137:W1,01
'Y?/// F137:W1,01
'?///SKẌ F62:W19,02
'??/// MON02,05
D'N-('C'?) F197:W30,04
K'/// F42:W1,01
K'P/// F42:W3b,02
K'YYCY F192:W1,06
KWY///Y F41:W10,03
KWY?/// HF125a,02
KWY?///???S???(P')SW F192:W1,11
KWY??/// MON04,08
KWY??KWP'SW F192:W1,09
KWYL??/// HF125a,09
KWYM??/// F14:W16,08
KWYSY? F61:W6,22
K/// F116:W572,04
M F17:W9,06
M/// MON06,03
N///?/// F17:W9,06
(P'P'S/WLB'S)/// F192:W1,22
P'R F209:W67,05
P'///???/// F234:W1,14
PWL/// F19:W72b,02
PWYR///?///WN F192:W1,22
(PYN?) F234:W1,09
PY/// F116:W507,03; F42:W3a,01
P?N F43:W23,06
P??? F124:W1,03
P???' F124:W1,01
P/// F224:W3,08; F234:W1,12
P///KD'???/// F14:W16,06
S'CYR F192:W1,06
(S'S'S?) F42:W1,03
S'DK///??? F42:W1,01
S'D/// F42:W1,08
S'?/// F42:W1,02
SWRD?S F42:W3b,02
SY/// F144:W4,08
S/// F17:W9,06
T""?///??? F9:W57,04
T'D/// F144:W4,04
T'K/// F42:W3a,06

TW F14:W16,04

TW/// F42:W3c,11; F43:W23,01

TW///? F14:W16,07

TWN/// F9:W57,01

TWR F116:W503,04; F116:W521,05; F116:W521,07; F144:W4,06; F19:W72b,01; F42:W1,02; MON06,06

TW(T?)/// F197:W30,03

TWWR F192:W1,05

TWY?/// F116:W212,05

TWY/// F14:W16,09

TW?R F42:W1,02

T?? F192:W1,04

T/// F62:W19,01; F116:W213,01; F116:W213,02; F116:W503,03; F144:W4,02; F19:W72b,01; HF125b,08; MON01,01; MON04,04

T///SW/// F42:W1,03

T///WRS_' F42:W3c,10

WY??? F41:W11,07

WY/// F192:W1,06

WY///WYW F192:W1,06

X'?/// HF125a,05

X'???///??/// F116:W507,01

XW/// MON06,06

XWCYLYCYN-tur HF125a,10

XYD??N///??/// F14:W16,07

X/// F214:W1,01

Y'R/// F62:W19,02

Y'YL?/// F234:W1,09

YW/// F42:W3b,01

YY F192:W1,05

YY/// F124:W1,02

Y/// F192:W1,03; HF125a,04

??C? F14:W16,07

??N F116:W213,03

??N F234:W1,10

??WY??P'SW F192:W1,11

??XWY-(tur?) F9:W31b,10

??YCW F211:W2,05

???-yi MON06,01

???L??TWS F124:W1,03

???N F43:W23,06

????CW F14:W16,07

????N F116:W213,03

??///N F234:W1,08

?///'YY'''///'S///?/// F192:W1,24

??///?SW F192:W1,08

?///N-TWR F41:W11,06

?///(S)W F192:W1,21

?///YYC///?? F192:W1,06

?///? F192:W1,05

///-YY'R F234:W1,01

///' F42:W3c,07

///' F9:W57,03

///' HF197B,02

///' MON01,01

///' MON01,07

///' MON03,10

///'-'C' 84HF84,01

///'W F144:W3,02

///čig-tür F116:W512a,02

///D'N 84HF84,02

///D///P'SW F192:W1,20

///güdgegsen-ü F20:W64,02

///K'R F192:W1,06

///K'Y HF125c-a,10

///küyi 84HF84,05

///KW///D///??? F192:W1,23

///L F234:W1,07; MON01,15

///L' F116:W2,03

///laqu-yi F116:W512b,03

///luyan Y1:W101,01

///L///N F234:W1,02

///(M?) F79:W6,10

///M??S?? F192:W1,01

///MDW F41:W11,03

///MY F9:W57,01

///N F116:W2,02; F116:W2,06; F116:W62,03; F116:W62,04; F116:W92,01; F224:W3,08; F41:W10,01; F41:W10,02; F43:W23,06; MON01,09; MON03,05

///(N?) F20:W64,07

///N-T' F21:W27,03

///N-W MON01,05

///ŋai F62:W19,03

///ngǰang-un F42:W3b,01

///R 84HF84,06

///RP'N F116:W92,04

///S_' F61:W6,26

///S'CY F42:W3b,02

///T'Y F144:W3,04

///W F192:W1,02; MON01,03; MON06,04

///WN F116:W512b,02; F42:W1,02
///WN_' F192:W1,21
///WN-TWR F116:W512b,01
///WR/// F19:W72a,03
///WS///N F19:W72a,01
///W/// F111:W1,03
///Y F79:W6,04; MON03,09
///YK'N-W F116:W512a,03
///YN MON01,10
///YW F192:W1,05
///?L///L'R_WN/// HF125d,01
///?M?/// F14:W16,01
///?N F192:W1,20
///?W F19:W72b,02
///?W??D///???///??/// F137:W1,03
///?Y??/// HF125b,03
///??MW 84HF84,03
///??S??Y F41:W10,02
///??tuγai F9:W31b,16
///??W?CYP?SW F192:W1,08
///??YP'SW F192:W1,10
///???K'D' F42:W3b,04
///???lig F234:W1,05
///???N F19:W72b,04
///???N F42:W3c,08
///???///???KW F144:W4,01
///?///N MON04,02
///?///N///L?N F211:W2,01

モンゴル語文書中の漢字

二 F9:W57,09
上十三 HF125d,10
上十[四] HF125a,11
下十三 HF125c-a,01
下[十四] HF125b,01
中都 F14:W15,04
月 HF125a,11; HF125b,01; HF125c-a,01; HF125d,10

モンゴル語（パクパ文字）

a F116:W505,03; F116:W584,02; F155:W11,06
aǰu•u F210:W24,01
ami t'anu F155:W11,03
amun F116:W584,09
am[un] F116:W510,03; F116:W519,04
[a]mun F116:W514,02-03
[ai] Y1:W2,02
a/// F116:W519,07
ba F116:W544,01
be F155:W11,08
be ye sun F155:W11,03
ber F210:W24,01
[bí] Y1:W2,01
bo[l]ǰu F210:W24,02
bö•e su F210:W24,01
bun F197:W32,01
bú F155:W11,08
bü t'u k'u F155:W11,05
b?/// F116:W584,03
chi MON07,01
ci Y1:W2,02
c'a ŋun F116:W565,01
c'hi F197:W32,01
c'i F116:W544,02; Y1:W2,02
čhi F116:W728(W554),02
či Y1:W2,01
č'a qi ???/// F155:W11,03
č'aq lan F155:W11,04
č'i Y1:W2,01
č'üg F14:W15,05
da F116:W519,02
da(n?) F14:W15,05
da•a rin F210:W24,02
[di] Y1:W2,01
du F116:W510,05
du/// F116:W505,05
(d/ǰ)u• MON08,01
d?/// F116:W584,06
ei Y1:W2,03
é du•e F116:W584,06; F210:W24,01
ėi Y1:W2,03
fi Y1:W2,03
f[i]/// F116:W519,03
fu F197:W32,01
[f]/// F116:W510,02
γan F116:W728(W554),01
γaw MON07,01
γi Y1:W2,03
γuŋ MON07,01
geiŋ li F116:W728(W554),03

gi F197:W32,01; Y1:W2,01
giw MON07,01
ɢi Y1:W2,03
[hi] Y1:W2,02
har [ban] F116:W510,07
ii Y1:W2,03
ji Y1:W2,02
ǰa ya[ši li F116:W728(W554),03
ǰeun F197:W32,01
ǰi Y1:W2,01
ǰü F155:W11,05
ǰ?/// F155:W11,07
ki Y1:W2,01
k'e ši gun MON05,02
k'e•u MON05,01
k'i Y1:W2,01
[k'u](ŋ) F116:W728(W554),01
k'ur [t'e le] F116:W514,05
k'?/// F155:W11,02
la ARAB01a,01
le F116:W518b,03; F116:W584,08
leu F116:W566,02
[li] Y1:W2,02
lu F116:W505,01
l[u]/// F116:W519,01
lu• F155:W11,01
l?/// F116:W510,08
mi Y1:W2,02
na F116:W514,02
na mu ru F116:W584,08
na t'u F116:W519,03
na t'/// F116:W584,01
na•a t'/// F116:W505,02
na•a t'u F116:W510,02
(n)e me •ul k'u ARAB01c,01
(ni?) F155:W11,01
[ni] Y1:W2,01
no yad F116:W518b,07
no [yad] F116:W584,12
nu F116:W544,04; MON05,02
n?/// F116:W518a,03
ŋi Y1:W2,01
ŋiw F197:W32,01
(ñ)i Y1:W2,01
oi Y1:W2,03
[pi] Y1:W2,01
[p'i] Y1:W2,01
qi Y1:W2,03
qo t'an F210:W24,02
qu F116:W518b,06; F116:W556,01; F116:W584,11; MON08,01
[qu] lir F116:W518b,03-04; F116:W584,08-09
qur ban F116:W584,05
ra F116:W510,05
ri Y1:W2,02
sa ba F155:W11,02; F155:W11,04
sen F210:W24,01
saŋ ga ši ri MON05,01
seu F197:W32,02
sėw F210:W24,02
[si] Y1:W2,02
su F155:W11,01
ši F116:W566,01; MON07,01
[ši] Y1:W2,02
šil t'a •a/// F155:W11,05
[t]i Y1:W2,01
t'e [ri •u len] F116:W514,04; F116:W514,06
[t'e ri] •u len F116:W584,06-07
t'en de F155:W11,06
(t')i Y1:W2,01
t'od qa •ul F210:W24,02
t'ö rög č'in F155:W11,06
t'u F155:W11,07
t'u la F116:W544,04; F116:W556,01; F116:W565,01; F116:W96c,01
t'[u la]/// MON08,01
t'uw F14:W15,05
u ri t'u F116:W584,10
u ri [t'u] F116:W518b,05
ui Y1:W2,03
ụin shi F116:W169,01
ü è le dug sen F155:W11,07
ü li ge ri yer F155:W11,02
ü lig de yu F155:W11,04
wi Y1:W2,02
ye F116:W510,06
yé [sun] F116:W584,07
yér t'in ǰü F155:W11,02
[yér t'in ǰü] F155:W11,04
yi F116:W510,06; F116:W584,11; Y1:W2,02

yi ji nay F116:W505,01; F116:W519,01
yi ji [nay]/// F116:W510,01
yin F116:W556,01; F116:W565,01, F155:W11,05; MON08,01
yi/// F116:W169,01; F116:W518b,06
y/// ARAB01c,01
za ra F116:W510,04; F116:W514,07; F116:W584,04
za ra/// F116:W505,04
za [ra] F116:W519,06; F116:W584,05
zi Y1:W2,02
(z?)/// F116:W519,05
ži MON07,01; Y1:W2,02
žin F197:W32,01
•a(n)|(t)u F116:W728(W554),01
•an F116:W584,04
•ed F155:W11,03
•i Y1:W2,02
•r F210:W24,02
•u F116:W518b,02
•?/// F116:W518a,02; F116:W518b,01

先頭文字不明

?er F155:W11,08
///?u F116:W96c,01

ウイグル文字テュルク語

'ärkän F64:W1,02
adïn F21:W32,02; F277:W56,04
adïr-ïp F13:W66,04
al-γïl F9:W105,12
al-ïp F9:W105,14; F9:W105,16; F13:W68,03; F277:W56,03
alḍun F9:W105,18
ališ F13:W66,06
anï F277:W56,03
ar-ïp F13:W68,07
arq-a-larï F9:W105,18
arq-a-sï F9:W105,13
asïγ F277:W56,05
asïγ-lar F13:W66,04
ašaḍämür F9:W105,05
aḍl[ïγ] F13:W66,06
ay F13:W68,01
aybuq-a F9:W105,05
ayïḍ-ïp F9:W105,16
ayïḍmaq F9:W105,05
äd F277:W56,03
ädgü F277:W56,05
älig-tä F13:W68,03
ärdmäk-ingä F21:W32,02
ärki F9:W105,04
är-mäz F9:W105,08
är-ti F9:W105,11; F9:W105,13; F9:W105,19
är-ür F9:W105,07
äsän F9:W105,02
äši-dük F9:W105,04
ätid-tim F9:W105,16
äv F224:W1,03
äv-in-tä F13:W66,07
äv-tä F9:W105,01
äv-täki F13:W66,05
bača F9:W5,A26～27; F9:W5,B23～24
badam F9:W105,09
bay[a](ḍ)[u]r F9:W105,03
bar F9:W105,19
barča F9:W105,02
baš F9:W105,17
baš-ïnta F13:W66,06
baxš[ï] F13:W68,02
baxšï-nï F13:W68,07
baẍšï F13:W68,09
bägät-lär-kä F9:W105,09
bärgän F42:W2,04
biča F9:W5,A18～19; F9:W5,B15～16
bildür-üp F64:W1,04
bil-ür F13:W68,09
bir F9:W105,02; F9:W105,06; F9:W105,09; F9:W105,09; F9:W105,15
birim-kä F13:W66,02
bir-ip F13:W66,05; F42:W2,03; F42:W2,04; F42:W2,05
birlä F13:W66,03; F13:W68,05
bir-miš F9:W105,15; F9:W105,15
bir-ti F13:W66,02
bir-ür F13:W68,05; F13:W68,08
[bi]rür-män F224:W1,01
biṣ-kä F42:W2,03
biš F9:W105,10
[b]išinč F13:W68,01
biti[g] F42:W2,02

bi(tig) F13:W68,09
bitig-ü F9:W105,11
(bitk)[äč](i) F217:W1,01
biz-ning F9:W105,01
bodun F64:W1,03
bol-dï F21:W32,03
bol-γïl F9:W105,03
(bol)-m[a]-sar F9:W105,07
(bolmaz)un F42:W2,02
bol-sar F9:W105,03; F13:W68,09
bol(sar) F13:W68,06
bol-up F9:W105,07; F13:W68,02
bor F42:W2,04
bu F13:W68,11
[bu] F13:W68,10
buγday F13:W68,02
[buγ]day F13:W68,03
busa<γ>u F13:W66,04
busa<γ>u-luγ F13:W66,03
buyanḍämür F9:W105,01
buyan F9:W105,08; F9:W105,12; F9:W105,13; F9:W105,14; F9:W105,17
čabïlangï F9:W105,10; F9:W105,15
čao F42:W2,05
čingsang F9:W105,05
čuṅši F13:W65,03
čuyšïu F9:W105,06
čulamïš-ta F13:W66,01
gača F9:W5,A16～17; F9:W5,B13～14
gon čungdi Y1:W49,01
ïd-γay F9:W105,07; F9:W105,16
ïd-γïl F9:W105,14; F42:W2,05
ïd-γu F9:W105,08
ïd-ïng-la[r] F42:W2,04
ïd-tïm F9:W105,05; F9:W105,11
ïd-tï[m] F42:W2,03
ïd-tïmïz F42:W2,05
ič F9:W105,06
iḍig F9:W105,17
iki F9:W105,11
ikinti F13:W67,01
il F64:W1,03
il-tä F21:W32,01
inäk-lär F13:W66,03
iš F64:W1,01
iš-lär F13:W66,02
iš-lär-ining F277:W56,06
kägdä F9:W105,11
käl-sär F9:W105,07
kiki F217:W1,01
kimpao-tin F9:W105,12
kiši-ning F13:W66,07
köngül F9:W105,02; F9:W105,16
kör-sär F277:W56,02
köz F9:W105,17
krgäk F13:W68,02
küṅḍüz F13:W68,06
küri-lig-čä F13:W68,04
langčung F217:W1,02
m-a F217:W1,02
mača F9:W5,A28～29; F9:W5,B25～26
maray-a F9:W5,A09; F9:W5,B08
m-ä F9:W105,02; F9:W105,03
män F9:W105,16; F13:W68,05; F13:W68,07; F13:W68,08; F13:W68,10; F277:W56,02
mä[n] F13:W68,01
[mä]n F13:W68,03
mäning F9:W105,14
müṅdür-üp F13:W68,05
näḍäg F9:W105,07
[n]išan F13:W68,10
oγl-ï F9:W105,02
oγl-ï-tïn F9:W105,04
ol F9:W105,02; F13:W66,02; F277:W56,03
(ol) F13:W68,10
olar-ning F277:W56,06
on F9:W105,09; F9:W105,10; F9:W105,10
oq F277:W56,03; F277:W56,06
oy F64:W1,05
öküz-ni F13:W66,03
öl-sär F13:W68,07
önši-qa F9:W105,05
öṣgä F9:W105,15; F9:W105,18
öṣi F13:W66,07
pada F9:W5,A30～31; F9:W5,B27～28
qač F13:W68,08; F21:W32,01
qadur-u F9:W5,A02; F9:W5,B02
qamaγ F21:W32,03
qamču-ta F13:W66,04
qan F21:W32,02

qanlïγ F13:W66,01
qapčuq F9:W105,09; F9:W105,11
qara F9:W105,10
qara bayγ[a](ḍ)[u]r F9:W105,03
qaraḍämür-kä F9:W105,01
qayu F9:W105,03
qayu-nï F277:W56,02; F277:W56,02
qïl-dačï-lar F9:W5,A07; F9:W5,B07
qïl-dïrïγ[z] F13:W68,10
qïlγu F277:W56,05
qïlïn-ïp F64:W1,05
qïpčaq F13:W66,06; F13:W68,03; F13:W68,07
qïpčaq-dan F42:W2,03
qïpčaq-nïng F13:W68,10
qoyn F9:W5,A01; F9:W5,B01
[q]ïpč [aq] F13:W68,01
quduruq F9:W105,10
quluč F9:W5,A24～25; F9:W5,B21～22
qun-up F277:W56,03
qur-mïš F9:W105,12
qy-a F9:W105,12; F9:W105,15; F9:W105,17
qy-a-nïng F9:W105,13
qy-a-tïn F9:W105,08
samur F42:W2,03
sana-p F13:W66,04
sang F9:W105,08
sarxapa F13:W68,02
sarxapa-ṙï F13:W68,04
sarẍapa-nïng F13:W68,06
sasïγla-p F13:W66,05
sat-ïp F13:W66,02
satpa F9:W105,02
sän F9:W105,04
sävinč F9:W5,A03; F9:W5,B03
sïng<a>r F64:W1,03
song F9:W105,16
söz F9:W105,03; F9:W105,08
sözläš-ip F9:W105,06
söz-üm F9:W105,01
stür F9:W105,18
sügčü-kä F13:W68,05; F13:W68,08
sün F9:W105,11
ša F9:W5,A10～13; F9:W5,B09～10
šing F13:W68,03
šudï-γ F21:W32,04
tača F9:W5,A20～21; F9:W5,B17～18
tang-da F9:W105,06
tanu[q] F13:W68,12
ta(pï)γ-la(r?)n F277:W56,04
tavar-ta F277:W56,03
taydu F9:W105,14
tälim F9:W105,13
tmür F13:W66,01
tävä F13:W68,07
t<ä>vä-ni F13:W68,04
tä-y(r) F13:W66,07
tïḍïγ F9:W5,A05; F9:W5,B05
tigin-kä F9:W5,A04; F9:W5,B04; F9:W105,14
tilä-p F9:W105,12
ti-p F9:W105,19; F13:W68,09
tölä-p F13:W68,07
tört F9:W105,10
tungčï F13:W66,01
turmaq-a F9:W105,17
tur-ur F9:W105,08; F9:W105,19
t[u]r-up F21:W32,04
tuḍ-up F13:W66,01
tükäl F9:W105,02
tümäg-i F9:W105,18
ud-nï F13:W66,06
uγut F42:W2,05
u-latï-lar F277:W56,04
usla(?)-p F42:W2,02
üč F13:W68,04
üčün F277:W56,05
ülüš F13:W67,01
ün-ä F277:W56,04
viuki F9:W105,11
xača F9:W5,A22～23; F9:W5,B19～20
xung F9:W5,A14～15; F9:W5,B11～12
yalngïz-ï-nïng F9:W105,17
yana F9:W105,08; F9:W105,13; F9:W105,14; F9:W105,15; F9:W105,16; F9:W105,18; F13:W66,04; F13:W66,05; F224:W1,01
yaṅ-tï F13:W66,05
yaraγ-lïγ F9:W105,06
yašur-up F13:W66,07
yägrmi F9:W105,18
yämä F21:W32,01
[yg]rmi-kä F13:W68,01

yïl-lar F21:W32,01
[yï]l F13:W68,01
yiḍi F13:W68,03
yiši F9:W105,07
yidkür-üp F13:W68,05; F13:W68,08
yol F13:W68,06
yoq F13:W68,06; F13:W68,09
yorï(y)ur F64:W1,02
ystuq F13:W66,01
yük F13:W68,08
yük-i F13:W68,04; F13:W68,06
'YNPLY F21:W32,02
KW/// F64:W1,01
T'YN? F277:W56,01
(')Y?///-tin F42:W2,04
(' ')SL??/// F21:W32,02
(?)YRSY-tin F224:W1,02
///(D)(??)SY F13:W65,02

シリア文字テュルク語

adïn F21:W37-2,05【F,05】
al-ïp F21:W37-0751,01【A,01】
alqïš F21:W37-0755,03【C,03】
alqïš-qa F21:W35-0753,02【I,02】; F21:W35-0753,06【I,06】
[a]lqu F21:W37-0751(2),01【B,01】
altun F21:W37-0752,06【G,06】; F21:W37-0752,07【G,07】
amtï F21:W37-0754,10【E,10】
ana F21:W37-0752,04【G,04】
anča F21:W35-0752,09【H,09】
angar F21:W37-0754,03【E,03】
anïng F21:W37-0751(2),10【B,10】; F21:W37-0754,08【E,08】
antaγ F21:W37-0754,10【E,10】
ap F21:W37-0752,03【G,03】; F21:W37-0752,03【G,03】; F21:W37-0752,04【G,04】; F21:W37-0752,04【G,04】; F21:W37-0752,05【G,05】; F21:W37-0752,05【G,05】
aq F21:W37-0754,07【E,07】; F21:W37-0752,07【G,07】
arïγ F21:W37-0751,08【A,08】; F21:W35-0753,09【I,09】; F21:W36-0753,01【J,01】; F21:W36-0753,06【J,06】
arït-ur F21:W37-0752,12【G,12】; F21:W35-0752,02【H,02】
artuq F21:W34,02【D,02】
artuq-raq F21:W37-0753,08【I,08】
asïγ F21:W37-0752,06【G,06】
aš F21:W37-0751,04【A,04】; F21:W37-0751,05【A,05】; F21:W37-0754,07【E,07】
aš-ïng F21:W37-0755,05【C,05】
ata F21:W37-0752,04【G,04】
atï F21:W37-0751(2),06【B,06】
atï-m F21:W37-0751(2),02【B,02】
ayaq F21:W37-0751,03【A,03】; F21:W37-0751,04【A,04】
ayïnč F21:W35-0753,07【I,07】
ayman-u F21:W36-0753,09【J,09】
azuq F21:W34,09【D,09】; F21:W37-2,01【F,01】
äd F21:W37-0752,04【G,04】
ädgülüg F21:W37-0751(2),11【B,11】
är-mäsär F21:W36-0753,11【J,11】
är-sär F21:W37-0754,12【E,12】; F21:W37-2,12【F,12】; F21:W37-0752,12【G,12】; F21:W35-0752,09【H,09】
är-ti F21:W37-2,06【F,06】
ärkän F21:W35-0753,10【I,10】; F21:W36-0753,02【J,02】; F21:W36-0753,07【J,07】
är[kän] F21:W36-0753,10【J,10】
(är)kän F21:W36-0753,03【J,03】
bar-ïng-tïn F21:W37-2,08【F,08】
bar-mayay F21:W37-0754,01【E,01】
barča-nï F21:W36-0753,09【J,09】
bar[č]a-qa F21:W37-0755,08【C,08】
barq-ïng F21:W37-0755,04【C,04】
bez-ä F21:W35-0753,12【I,12】; F21:W36-0753,10【J,10】
bir F21:W37-0751,03【A,03】; F21:W37-0751,04【A,04】; F21:W37-0751(2),01【B,01】; F21:W37-0751(2),02【B,02】; F21:W37-0751(2),04【B,04】; F21:W37-0755,01【C,01】; F21:W37-0755,03【C,03】; F21:W37-0755,07【C,07】; F21:W34,01【D,01】; F21:W34,04【D,04】; F21:W37-0754,03【E,03】; F21:W37-0754,07【E,07】; F21:W37-2,01【F,01】; F21:W37-2,04【F,04】; F21:W36-0753,04【J,04】
bir- F21:W37-0751(2),03【B,03】
bir-kä F21:W37-0754,02【E,02】; F21:W37-0754,04【E,04】
bir-g[äl]i F21:W35-0753,05【I,05】
bir-gäy-m<ä>n F21:W37-0754,05【E,05】
bir-igli F21:W37-0755,10【C,10】
bir-ip F21:W37-0754,07【E,07】; F21:W37-2,07【F,07】
bir-mägäy-mü F21:W37-0754,09【E,09】
bir-mäk F21:W35-0752,01【H,01】
bir-mäk-lig F21:W34,10【D,10】; F21:W35-0752,06【H,06】
bir-mäs F21:W37-0755,09【C,09】
bir-miš-ing F21:W34,04【D,04】

bir-miš-kä F21:W37-0755,08【C,08】
bir-sär F21:W37-0752,09【G,09】
bir-sär-m<ä>n F21:W37-2,02【F,02】
bir-sär-siz F21:W37-0755,01【C,01】
bir-ür F21:W37-0755,08【C,08】; F21:W34,01【D,01】; F21:W37-0754,10【E,10】;F21:W37-0752,08【G,08】
birlä F21:W37-0751,01【A,01】; F21:W37-0755,03【C,03】; F21:W37-0752,09【G,09】; F21:W35-0753,12【I,12】; F21:W36-0753,04【J,04】
bitig-tä F21:W37-0751,09【A,09】;F21:W35-0752,03【H,03】
biz-kä F21:W34,07【D,07】;F21:W34,07【D,07】
bol-dï F21:W37-0751,06【A,06】
bol-γalï F21:W35-0753,04【I,04】
bol-mas F21:W36-0753,06【J,06】
bu F21:W34,09【D,09】;F21:W37-2,01【F,01】
buši F21:W37-0755,07【C,07】; F21:W37-0755,10【C,10】; F21:W34,10【D,10】; F21:W35-0752,01【H,01】; F21:W35-0752,06【H,06】
buyan-ïng F21:W37-0755,05【C,05】
buyan-qa F21:W37-0751(2),05【B,05】
bününg F21:W37-0751,06【A,06】
čan F21:W37-0751(2),04【B,04】;F21:W37-0754,03【E,03】
čïγay F21:W34,10【D,10】;F21:W37-0754,11【E,11】
čïγay-nï F21:W37-0751,02【A,02】; F21:W37-0754,06【E,06】; F21:W37-2,10【F,10】
čïγay-qa F21:W37-0751(2),02【B,02】;F21:W37-0755,01【C,01】; F21:W34,09【D,09】;F21:W37-2,02【F,02】;F21:W37-2,08【F,08】; F21:W35-0752,01【H,01】; F21:W35-0752,06【H,06】
čïn F21:W37-0751(2),08【B,08】
elig F21:W34,08【D,08】
elig-in F21:W37-0751,01【A,01】
elt-ip F21:W37-0751,03【A,03】
eltgil F21:W37-0751,02【A,02】
ev-ing F21:W37-0755,04【C,04】
ev-ingä F21:W37-0751,03【A,03】
ev-ing-kä F21:W37-0751,01【A,01】;F21:W37-0754,06【E,06】
id-masar-sän F21:W37-0751,05【A,05】
id-sar F21:W37-0754,07【E,07】
ič-ip F21:W37-0751(2),03【B,03】
ičgär-sär F21:W35-0752,07【H,07】
ičin-tä F21:W37-0755,11【C,11】
ičür-miškä F21:W37-0754,04【E,04】
ičür-sär F21:W37-0751(2),05【B,05】
iki F21:W37-0754,02【E,02】; F21:W37-0754,02【E,02】; F21:W37-0754,04【E,04】; F21:W37-2,04【F,04】; F21:W37-2,06【F,06】;F21:W36-0753,08【J,08】
ikin(čgü) F21:W36-0753,04【J,04】
inčip F21:W37-0755,10【C,10】; F21:W37-0754,01【E,01】; F21:W37-2,10【F,10】
isirkä-mädin F21:W37-2,07【F,07】
isirkä-mägil F21:W37-2,09【F,09】
iš-tin F21:W35-0753,13【I,13】
kät-är-täči F21:W35-0752,05【H,05】
kel-mišing-tä F21:W35-0753,06【I,06】
kel-sär-sizlär F21:W35-0753,03【I,03】
kič-ip F21:W35-0753,04【I,04】
kigür-üp F21:W37-0754,06【E,06】
kim F21:W37-0751,02【A,02】; F21:W37-0751,04【A,04】; F21:W37-0751,08【A,08】; F21:W37-0754,11【E,11】; F21:W37-2,12【F,12】; F21:W35-0752,03【H,03】; F21:W35-0752,10【H,10】; F21:W35-0753,02【I,02】; F21:W35-0753,05【I,05】
kintin F21:W37-2,02【F,02】
kiši F21:W35-0753,02【I,02】
kiši-ning F21:W37-0755,11【C,11】
kök F21:W36-0753,07【J,07】
köngli-ning F21:W37-0755,11【C,11】
köngül F21:W35-0753,11【I,11】;F21:W37-0755,02【C,02】
köngül-lüg F21:W37-0752,01【G,01】
kör-gil F21:W37-2,03【F,03】
küč-üng F21:W34,03【D,03】
kümüš F21:W37-0752,06【G,06】;F21:W37-0752,08【G,08】
kün F21:W37-0751(2),10【B,10】;F21:W37-0755,06【C,06】
kün-i F21:W34,06【D,06】;F21:W37-0752,02【G,02】
kün-ingä F21:W37-0755,06【C,06】
küčlüg F21:W35-0752,10【H,10】
küng F21:W37-0752,04【G,04】
lab F21:W34,09【D,09】; F21:W35-0752,01【H,01】; F21:W35-0752,06【H,06】
mä F21:W37-0754,12【E,12】
m<ä>n F21:W37-0751(2),09【B,09】;F21:W37-0754,11【E,11】; F21:W37-0754,12【E,12】
mäning F21:W37-0751(2),01【B,01】
mingü F21:W37-0755,03【C,03】; F21:W37-0755,07【C,07】; F21:W34,01【D,01】;F21:W34,04【D,04】
mu F21:W37-0751,10【A,10】
nä F21:W37-0751,04【A,04】
näng F21:W37-0751,12【A,12】
närsä-r F21:W34,02【D,02】

närsä-si F21:W37-2,05 【F,05】
negü F21:W37-0751,04 【A,04】; F21:W37-0754,12 【E,12】; F21:W37-0754,12 【E,12】
netig F21:W37-0751,08 【A,08】; F21:W35-0752,02 【H,02】
nom F21:W37-0751(2),08 【B,08】; F21:W37-0755,08 【C,08】; F21:W35-0752,03 【H,03】
oyul F21:W37-0752,03 【G,03】
ol F21:W37-0751,02 【A,02】; F21:W37-0751(2),11 【B,11】; F21:W34,05 【D,05】; F21:W37-2,06 【F,06】; F21:W37-2,10 【F,10】; F21:W37-0752,02 【G,02】; F21:W35-0752,08 【H,08】
onglion F21:W37-0751,08 【A,08】
ög-lär F21:W36-0753,13 【J,13】
ölüm-tin F21:W35-0752,11 【H,11】
öngtün F21:W36-0753,07 【J,07】
ötä-gäy-m<a>n F21:W37-0754,02 【E,02】
ötmäk F21:W37-0755,01 【C,01】
özüt-in F21:W37-0752,10 【G,10】
qačan F21:W37-0751,02 【A,02】; F21:W37-2,12 【F,12】
[qa]mayı F21:W37-0752,07 【G,07】
qanča F21:W37-2,02 【F,02】
qang-lar F21:W36-0753,13 【J,13】
q<a>rïšlï F21:W36-0753,08 【J,08】
qatïγ F21:W37-0752,01 【G,01】
qayu F21:W37-0751(2),01 【B,01】; F21:W35-0753,01 【I,01】
qazγan-ma F21:W37-0751,07 【A,07】
qïl-γay F21:W37-0755,04 【C,04】
qïl-mïš F21:W35-0753,10 【I,10】
qïlïnč F21:W37-0751,07 【A,07】; F21:W37-0751(2),08 【B,08】
qïlïnč-nïng F21:W37-0751(2),11 【B,11】
qïlmaq-lïγ F21:W34,11 【D,11】
qïl-ur F21:W37-0752,06 【G,06】; F21:W35-0752,08 【H,08】
qïz F21:W37-0752,03 【G,03】
qol F21:W34,07 【D,07】
qol-ur F21:W35-0753,05 【I,05】; F21:W36-0753,03 【J,03】
qolun-ur F21:W37-2,11 【F,11】
qorq-a F21:W35-0753,12 【I,12】; F21:W36-0753,09 【J,09】
qorqïnč F21:W35-0753,07 【I,07】
qorqïnčïγ F21:W34,06 【D,06】
qotqï F21:W35-0753,11 【I,11】
qul F21:W37-0752,03 【G,03】
qunčuy-nung F21:W37-2,04 【F,04】
qurb<a>na F21:W35-0753,09 【I,09】; F21:W36-0753,06 【J,06】
qurb<a>na-qa F21:W35-0753,03 【I,03】
qurb<a>na-ta F21:W35-0753,04 【I,04】
qut F21:W37-2,11 【F,11】
qutγar-ur F21:W35-0752,11 【H,11】
qutluγ F21:W37-0755,02 【C,02】; F21:W36-0753,08 【J,08】
r<a>qïm F21:W34,11 【D,11】
r<a>qïm-lïq F21:W37-2,10 【F,10】; F21:W35-0752,07 【H,07】
r<a>qya F21:W36-0753,06 【J,06】
sadaqa F21:W37-0755,10 【C,10】
sayïryam-nï(?) F21:W37-0752,10 【G,10】
sanga F21:W37-0752,02 【G,02】; F21:W37-0752,07 【G,07】
s<a>nga F21:W37-0754,09 【E,09】
saqïn-ïp F21:W37-0751(2),06 【B,06】
saqïn-ma F21:W37-0752,10 【G,10】
saqïn-u F21:W35-0753,11 【I,11】
sayu F21:W35-0753,01 【I,01】
s<a>n F21:W34,12 【D,12】; F21:W37-0754,08 【E,08】; F21:W37-0754,10 【E,10】
s<a>ning F21:W34,01 【D,01】; F21:W34,03 【D,03】
siz-lär-kä F21:W37-0751(2),09 【B,09】
soyïq F21:W37-0751(2),04 【B,04】; F21:W37-0754,03 【E,03】
sõz F21:W36-0753,04 【J,04】
sözläšmäk F21:W36-0753,05 【J,05】
suqïm-lïq F21:W34,05 【D,05】
suv F21:W37-0751(2),02 【B,02】; F21:W37-0751(2),04 【B,04】; F21:W37-0754,04 【E,04】; F21:W37-0752,05 【G,05】
suvsamïš-ïnta F21:W37-0751(2),03 【B,03】
suy F21:W35-0752,02 【H,02】; F21:W35-0752,04 【H,04】; F21:W35-0753,10 【I,10】
tapïn-ur F21:W35-0753,09 【I,09】; F21:W36-0753,07 【J,07】
t[a]p[ïn]-(ur) F21:W36-0753,02 【J,02】
taqat-ïng-ta F21:W34,02 【D,02】
taqï F21:W37-0753,08 【I,08】
t<a>rs<a>qa F21:W37-0754,10 【E,10】; F21:W35-0753,05 【I,05】
t<a>rs<a>q-lig F21:W37-0751(2),06 【B,06】
tavar F21:W37-0752,05 【G,05】
teg F21:W37-0751(2),03 【B,03】
ti-mägil F21:W37-0754,11 【E,11】
ti-p F21:W37-0751(2),08 【B,08】; F21:W34,05 【D,05】; F21:W37-0754,03 【E,03】; F21:W37-0754,05 【E,05】; F21:W37-2,03 【F,03】; F21:W37-0752,09 【G,09】; F21:W35-0752,04 【H,04】; F21:W35-0752,07 【H,07】
tig-küči F21:W34,07 【D,07】
tilä-mäs F21:W34,03 【D,03】
titrä-yü F21:W35-0753,12 【I,12】; F21:W36-0753,10 【J,10】

tänglig F21:W35-0752,09【H,09】
t<ä>ngri F21:W37-0755,03【C,03】;F21:W34,01【D,01】
tngri-kä F21:W37-0755,07【C,07】;F21:W34,04【D,04】
tolp F21:W37-0752,07【G,07】;F21:W36-0753,02【J,02】
törü F21:W34,06【D,06】;F21:W37-0752,02【G,02】
tul F21:W37-2,04【F,04】
tur-sar-s<ä>n F21:W35-0753,07【I,07】;F21:W35-0753,13【I,13】
tur-ur F21:W37-0751,10【A,10】;F21:W34,05【D,05】;F21:W34,10【D,10】;F21:W34,12【D,12】;F21:W37-0754,11【E,11】;F21:W35-0752,07【H,07】;F21:W35-0752,10【H,10】
tut-dačï F21:W34,08【D,08】
ulurγ F21:W35-0752,10【H,10】
ulurγ-lar-nïng F21:W37-0751(2),10【B,10】
ulurγ-raq F21:W35-0752,08【H,08】
utlï F21:W37-0755,12【C,12】;F21:W37-0754,05【E,05】
utlï-lïγ F21:W37-0755,09【C,09】
utlï-sï F21:W37-0751(2),12【B,12】
uzun F21:W34,08【D,08】
üčin F21:W37-0751(2),02【B,02】;F21:W37-0751(2),07【B,07】
ükli-gäy F21:W37-0755,06【C,06】
ün F21:W37-2,01【F,01】
üzä F21:W37-0751,06【A,06】;F21:W37-0751(2),10【B,10】;F21:W37-0755,05【C,05】;F21:W34,06【D,06】;F21:W34,11【D,11】;F21:W37-0752,02【G,02】;F21:W35-0753,07【I,07】
xošnut F21:W37-0755,02【C,02】
yabaš F21:W35-0753,11【I,11】
yal<a>nguz F21:W37-0751(2),04【B,04】
yalïn(guq) F21:W36-0753,08【J,08】
yalnguq F21:W37-0751(2),01【B,01】
y<a>lnguq-a F21:W37-0752,01【G,01】
yanqï F21:W37-0755,12【C,12】;F21:W37-0754,02【E,02】
yanqï-sï F21:W37-0751(2),12【B,12】
yanqï-sï-n F21:W37-0754,08【E,08】
yaramas F21:W36-0753,05【J,05】
yarlïq F21:W37-0751(2),08【B,08】
[y(a)r]l(ï)q-ïnga F21:W37-0755,12【C,12】
yarlïqa-γay F21:W37-0751(2),09【B,09】
yarlïqa-sar F21:W37-0754,05【E,05】
yarlïqa-yur F21:W35-0752,03【H,03】
yarlïqamaq-ï F21:W37-0751,09【A,09】
yarmaq-nï F21:W37-2,06【F,06】
yarmaq-nïng F21:W37-2,05【F,05】
yart??a F21:W37-2,01【F,01】
yazuq F21:W37-0751,06【A,06】;F21:W37-0751,07【A,07】
yazuq-ïn F21:W36-0753,03【J,03】
yazuq-nï F21:W35-0752,02【H,02】;F21:W35-0752,05【H,05】
yazuq-ung-nï F21:W35-0753,10【I,10】
yetinčü-n(üng) F21:W36-0753,03【J,03】
yetür-üp F21:W37-0751,05【A,05】
yir F21:W37-0752,05【G,05】
yit-miš-čä F21:W34,03【D,03】
ymä F21:W37-0754,03【E,03】;F21:W37-0754,09【E,09】;F21:W37-0753,08【I,08】
yol-qa F21:W34,08【D,08】
yoq F21:W37-0751(2),12【B,12】;F21:W37-0754,12【E,12】;F21:W37-2,06【F,06】;F21:W35-0752,09【H,09】
yüd-üp F21:W35-0752,05【H,05】
yükünč-kä F21:W35-0753,02【I,02】;F21:W35-0753,06【I,06】
yürüng F21:W37-0752,07【G,07】

テュルク語の可能性のある未読語彙

'KS??R F21:W37-2,03【F,03】
'NYṬ(Y)G F21:W37-0752,12【G,12】
'(R)?(') F21:W36-0753,12【J,12】
'YDL?///ZM' F21:W34,12【D,12】
'YṬWYQ(?) F21:W37-0754,01【E,01】
'WYZ///R F21:W37-0752,09【G,09】
G'ŠYŠBD F21:W35-0753,01【I,01】
(GY)R F21:W36-0753,12【J,12】
(G)?(LY) F21:W37-2,03【F,03】
(K)WRGNW F21:W36-0753,11【J,11】
KYČ(?)?YQ-raq F21:W35-0752,08【H,08】
K(?)' F21:W36-0753,11【J,11】
(LR?)///' F21:W37-0755,12【C,12】
M??? F21:W37-0752,11【G,11】
(P)'G(G)'L(Y) F21:W36-0753,11【J,11】
PYRN'(??)/// F21:W35-0753,13【I,13】
P? F21:W37-2,09【F,09】
SL?K F21:W35-0753,01【I,01】
SMWSN F21:W37-0751,07【A,07】
SW?'?Y F21:W36-0753,01【J,01】
Ṭ'R F21:W34,12【D,12】
ṬW(R)W(?) F21:W36-0753,12【J,12】
(ṬYM)L(') F21:W35-0753,04【I,04】
Ṭ?K F21:W37-2,09【F,09】
YṬ? F21:W37-0752,11【G,11】
YṬ?'R F21:W36-0753,01【J,01】
Y?? F21:W36-0753,09【J,09】

?G??W F21:W36-0753,13【J,13】
??G F21:W37-2,09【F,09】
???(R)'?Y F21:W36-0753,12【J,12】

チベット語

チベット文書語彙索引[1]

'di[2] 01R,3; 02R,4; 02R,9
'du 03V,6
'dug 02R,5
'dus 03R,4
'jan 02V,7
'jig 02V,8
'khor 01R,3
'khor lo 01R,3
'khros 02R,8
'phan yul 02V,5
1[3] 02V,3; 02V,6; 02V,9
2 02R,3
3 01R,3; 01R,9; 02R,6
[gnari] 03V,4
[gyi] 03R,2
]ms 03R,1
^a[4] nan ta 'bhi rya 02R,2
ban 02V,10
bcug 02V,4
bdag 02R,3
bdra? 02R,2
bdun 02R,9
be 02R,9
bha 03V,6
bhe 03V,3
brtson 03R,6
bs[g]on 02R,8
bsad pas 02V,8
bsdad pas 02V,1
bsg[ra]l ba 02R,7
bsgrub pa 02V,1
bskug [pa la] 02V,4-5
bu chung 02V,3
byan 02V,10
byas pas 02V,4; 02V,7; 02V,9; 02V,10
byaso 02V,6
byed 02R,4
byung 03R,2
byungs ngo 02V,2
bzhags 02R,9
bzlog pa'i / bz[l]og pa'i 03V,3; 03V,5
ches pa'i 02R,3
chog 02V,9
cing 02R,4; 02R,7
dang 01R,1; 02R,6
dbang po'i 03V,1
dbu gar ba 02V,8; 02V,10
dbu gar bas 02R,9
dbu pa dge' [g]ser 02R,1
dbu pa dge' gser 02V,5
dbusu 02V,4
dbyus pa 02R,8
de 03R,4
de'i 02R,5
des 02R,1; 02R,2; 02R,3; 02V,6
dge' 02V,7; 02V,10
dge' gser 02V,6; 02V,8
dmar 02R,6
dngo[03R,1
dngos 03R,5
du 02R,6; 02R,9; 02V,4; 02V,5; 02V,10
dusu 02R,5
g[do]n pas 02V,3
ga 03R,6
gang 03V,4
gang 02V,9
gc[o]d pa'i 03R,3
gha 03V,3
gi 02V,1; 02V,3
gis 01R,2; 02R,7
gnas 03R,3

---

[1] 校訂記号の[ ]は、[abc]のように見出し語の冒頭にくる場合は、見出し語の順序が変わるのを避けるため省略して、abcと表記した。
[2] ': いわゆるa-chung
[3] 1, 2, 3: チベット文字による数字
[4] ^: いわゆるa-chen

gos 02R,8
gshin rje dmar po 02R,5 – 6
gto 02V,4
gyi 02V,6
gyi [ljang] dbu gar 02R,1
gyi [ljang] dbu gar ba 02R,4; 02V,7-8
gyi l[jang] [s]gur po 02R,5
gyis 02V,3; 02V,5; 02V,7; 02V,8; 02V,9
gzung 03R,5
ja sigi 02V,4
kar 03V,2
kha 03R,5
kha 01R,6; 01R,7; 02R,8
khal 01R,5
kho 02R,8; 02V,9
kho rang 02V,1
khong 02R,7
khrel 01R,2
khyad 02R,8
khyod 02V,7
klu 03R,6
kun 03V,5
kya? 01R,1
kyang 02R,8
kyi 03R,1
la 03R,6
la 01R,1; 01R,3; 01R,7; 02R,1; 02R,2; 02R,3; 02R,4; 02R,7; 02R,8; 02R,9; 02V,1; 02V,3; 02V,4; 02V,5; 02V,7
lan 02V,6
la'o 02R,3
lhan 01R,2
lo 01R,1
lo rgyus 02R,4; 02V,9
log 02V,2
lta 01v,2
lto[gs] pa 02R,6
m[ngag po] 02R,7
m[th]us 02R,7
ma 03V,2
ma 01R,5
mdzad pa'i 01R,2
mi 03R,4
mi 02R,7; 02R,9
mkhal 01R,6
mkhan 02V,10
mkhan po [bdra? bas?] ra bo de 02R,2
mngag 02R,6
mngon 02R,6
mno[l] 02R,6
mthu['] 02V,2
na 03R,3; 03R,5
na 01R,7; 02V,1; 02V,2
nag 02R,6
nang 02V,4
nas 02V,2; 02V,4; 02V,10
ngas 02V,8
ni 03V,2; 03V,3
ni 02R,4
nu 02V,9
nus 02R,7
nyi ma'i 01R,2
nyin 02R,7
nyos pa 02V,5
pa 03R,2
pha 03R,4
pha spun 02R,5
pha tshan 02V,2
phar 03R,4
rgya gar 01R,2
rgyal po 02V,6; 02V,9-10
rkya yul 02V,2
rkyal po 02V,3
mams 01R,1
ro 02V,3
rteg 01R,3
rtsis mkhan 02V,3
s[dis] 02R,8
sa 02R,8
sde 02R,8
sgur po 02V,1
shi ba 02V,2
sngags 01R,3; 01R,7
su 02V,7
tshal 01R,1
tshang zla [thad (/thid)] [pha (/na)] pa 02V,6
ya? 02R,2
yang 02V,2
ye ge 01R,4
yi? 02V,1
yid 02R,3; 02R,4

yod 01R,4
yod pa'i 02V,9
yod par 02R,4
yul 01R,1
zer 02V,8
zer ba 02R,9
zhag 02R,9
zhag[s] 02V,1
zhes bya bas 02R,5

アラビア語

ahiyyā F20:W61,04
['aſwāh] F20:W60,04
['a]jma'īna F20:W60,02
'ará F135:W73,01
'aw F20:W60,02
'abdan F20:W60,03
'alā, 'alay- F20:W60,03; F20:W60,04; F20:W61,01; F20:W63b,03; F20:W63b,04
bi- F20:W61,01; F20:W61,02; F20:W61,02; F20:W61,04; F20:W63b,05; F20:W63b,05; F135:W73,01; F135:W73,01
fa- F20:W60,05; F20:W61,01; F135:W73,01
al-faj[r] F20:W61,05
-hā F135:W73,01; F135:W73,02; F135:W73,02
-hi F20:W63b,03; F20:W63b,04
hiyyā F20:W61,04
-hum/-him F20:W60,02; F20:W60,04; F20:W60,05; F20:W61,01; F20:W61,01; F20:W63b,05; F135:W73,02
ḥaqq F20:W61,02; F20:W61,02; F20:W61,04
'insān F20:W60,01
ji'tum F20:W63b,05
kabīran F20:W60,02
KHY'Ṣ F20:W61,02
kulla F20:W60,02
-kum F20:W63b,05
kuntu F20:W63b,05
la- F135:W73,02
lā F20:W60,05
[lā] F20:W61,01
lisān F20:W60,01
mā F20:W61,01; F135:W73,02
māl F135:W73,02
man F20:W63b,05
marḥaban F20:W63b,05
min 'indi F20:W63b,05
al-naḥl F20:W61,05
naḫtimu F20:W60,04
al-qur'ān F20:W61,03
al-salām F20:W63b,03
al-sal[ām] F20:W63b,04
šarā F20:W61,04
šayḫ F135:W73,01
ṣaġīran F20:W60,02
ṭā'āti F20:W60,03
ṬS F20:W61,03
wa- F20:W61,02; F20:W61,03; F20:W61,03; F20:W61,03; F20:W61,04; F20:W61,05; F20:W63b,05
yanṭiqūna F20:W61,02
yarji'ū[na] F20:W60,05
al-yawma F20:W60,04
YS F20:W61,03
yūnus F20:W61,05
ẓalamū F20:W61,01

ペルシア語

ādāb F20:W63a,03
[ā]dāb F20:W63a,03
agar F20:W63a,04
ān F20:W63a,02; F20:W63b,01
ānki F20:W63a,04; F20:W63a,05
arpa F116:W582,01
awliyā' F20:W63a,05
az F20:W63a,05; F20:W63a,08; F20:W63b,05
badān F20:W63b,02
badīn F20:W63a,07
bar F20:W63b,06; Y5:W1,02
[bar] Y5:W1,01
barāy F20:W63b,06
bārī F20:W63a,05
bāṭin F20:W63a,03; F20:W63a,04
bāz F116:W96c,01
bihišt F20:W63b,07; F20:W63b,07
būd, būdīd, nabūd, ast, bāšad, buwad, [buwa]d, nabuwa[d]

F20:W63a,04; F20:W63a,05; F20:W63a,05; F20:W63a,06; F20:W63a,06; F20:W63a,07; F20:W63b,01; F20:W63b,03; F20:W63b,03; F20:W63b,05; F20:W63b,07; F116:W556,01
čandān Y5:W1,03
čunān F20:W63b,07
čunānki F20:W63a,06; F20:W63b,03
dāna[d], ba-dān F20:W63a,03; F20:W63a,04
dar F20:W63a,02; F20:W63a,03; F20:W63a,03; F20:W63a,04; F20:W63a,05; F20:W63b,03; F20:W63b,07; F116:W582,01
[dar] Y5:W1,03
daraja F20:W63a,07; F20:W63b,02
dāram, mī dāram F20:W63a,01; F20:W63b,06
dard F20:W63a,02; F20:W63a,06
darwīš, darwīšī, darwīšān F20:W63a,03; F20:W63a,03; F20:W63a,03; F20:W63a,04; F20:W63a,04; F20:W63b,02; F20:W63b,03; F20:W63b,06
dar[wī]šān F20:W63b,05
dil F20:W63a,02
dunyā F20:W63b,08
dūst F20:W63b,06
firistāda F20:W63b,05
gila F20:W63b,03
ba-gūyīd F20:W63b,06
ġallāt F116:W565,01; ARAB01:a01
hāḏihi F116,W565,01;F116,W566,01; ARAB01,b01
har F20:W63b,06
hargiz F20:W63b,02; F20:W63b,07
hīč F20:W63a,01
hijdah F116:W566,01
ḥādiṯa F20:W63a,05
ḥajj F20:W63b,04
ḥāl F20:W63a,04
ḥaqq F20:W63a,05; F20:W63b,06
ḥijāmat F20:W63a,06
ḥiss F20:W63a,01; F20:W63b,03
ḫaṣm Y5:W1,02
ḫil'at F20:W63b,07
ḫudāy F20:W63a,07; F20:W63a,08
[ḫu]dāy F20:W63a,06
ḫūn Y5:W1,03
ḫwāst F116:W96c,01
[ḫwīštan] Y5:W1,01
ḫwud F20:W63a,05
īn F20:W63a,07; F116:W96c,01
iqāmat F116:W565,01
īšān F20:W63b,06; F20:W63b,06
ja[hān-sūz] Y5:W1,02
jihād F20:W63b,04
[jūy] Y5:W1,03; Y5:W1,03
kand F20:W63a,06
kardan, kardand, kunad, mī kunand, namī kardan F20:W63a,05; F20:W63a,06; F20:W63a,08; F20:W63b,03; F20:W63b,04; F20:W63b,04; F20:W63b,06
kārih F20:W63a,05; F20:W63a,06; F20:W63a,06; F20:W63a,07
kasī F20:W63a,06
ki F20:W63a,03; F20:W63a,04; F20:W63a,05; F20:W63a,08; F20:W63b,01; F20:W63b,03; F20:W63b,03; F20:W63b,04; F20:W63b,05; F20:W63b,06; F20:W63b,06; F20:W63b,07; F20:W63b,07; F116:W96c,01; F116:W544,01; F116:W556,01
kīsa F116:W566,01
mā F20:W63b,04
man F20:W63b,06
manzila F20:W63a,02
maṣāliḥ F116:W544,01
maṭlūb F116:W556,01
namūda, namāyad, namāyand F116:W96c,01; F116:W565,01; F116:W566,01; F116:W582,01
nāmuḥtāl F116:W544,01
nawāḫt F20:W63b,05
nazdīk F20:W63b,05
[pā] Y5:W1,01
pīš F20:W63b,03
pīl Y5:W1,01
qawm F20:W63b,05
radd F116:W544,01
rasa[d], narasa[d] F20:63a,07; F20:63b,02
rasānad F116:W544,01
rasūl F20:W63b,03; F20:W63b,04
rawān Y5:W1,03
riḍā F20:W63a,03
sayr F20:W63b,06
sih F20:W63a,04; F20:W63b,07
sitāragān F20:W63b,08
šāda F20:W63a,04
šākir F20:W63a,04
šāki[r] F20:W63a,05
[šika]st Y5:W1,02

šud F20:W63a,04; Y5:W1,03
ṣadaqa F20:W63b,04
taḥṣīl F116:W582,01
ta'ālā F20:W63a,05; F20:W63a,06; F20:W63a,07; F20:W63a,08; F20:W63b,06
tawāngar[ān] F20:W63b,03; F20:W63b,07
tawānīm F20:W63b,04
[ū] Y5:W1,01
uftād Y5:W1,02
wa F20:W63a,01; F20:W63a,02; F20:W63a,04; F20:W63a,07; F20:W63b,04; F20:W63b,04; F20:W63b,04; F20:W63b,04; F116:W96c,01; ARAB01,a01
waq' F116:W566,01
wāqi' F116:W582,01
al-wilāyat F116:W565,01; F116:W566,01; ARAB01,b01
yābad F116:W556,01
yakī F20:W63a,04
yārī F20:W63a,05
zad, zadand F20:W63b,04; Y5:W1,01
zakāt F20:W63b,04
zi Y5:W1,03

トルコ語

aḥaqq ARAB03,02
alġīl F148:W1,02
arïġ ARAB03,05
arïtmas ARAB03,06
aram F148:W1,00
ay F148:W1,00
'abd lu aġa F148:W1,00
barča ARAB02:07
bu ARAB03,01
-da F148:W1,[A]
-dïm ARAB02,02
hirgiz ARAB03,06
ḫasan F148:W1,01
ḫurr F148:W1,01
ḫurmā ARAB02,01
ilinā ARAB02,02
imāmlar ARAB02,03
-ïndïn F116:W582,01
ïtulsun-lar F148:W1,03
jarī ARAB02,01
ǰolčïn F148:W1,02
-mäk F148:W1,02
mu'anlar ARAB03,07
muḥammad ARAB03,03
nāṣir F148:W1,01
-nï F148:W1,01
-ning/-nïng F148:W1,02; ARAB03,04
oġul F148:W1,01
ol ARAB02,03
on F148:W1,[B]
otaġ F148:W1,03
ötäg F148:W1,01
qadaq ARAB02,05
qan ARAB03,04
qatar ARAB02,05
salap F148:W1,00
sav ARAB02,05
savlar ARAB03,01
söz F148:W1,01
tabārukān F148:W1,02
tükün F148:W1,[A]
türk ARAB02,02
tüšmäs ARAB02,04
üčün F148:W1,02
-um/-üm F148:W1,01; F148:W1,01; F148:W1,01
yaġ ARAB02,06
yanglïġlar ARAB03,02
yangl[ïġlar] ARAB03,04
yār ARAB02,01
yarlïġ F116:W582,01
yoġurt ARAB02,06

シリア語

B H彩101a, 01; H彩101a, 01; H彩101a, 02; H彩101a, 03; H彩101a, 04; H彩101a, 05; H彩101a, 06; H彩101a, 08; H彩101a, 10; H彩101a, 10; H彩101a, 10; H彩101a, 10; H彩101a, 14; H彩101a, 23; H彩101a, 24; H彩101a, 24; H彩101a, 25; H彩101a, 27; H彩101a, 31; H彩101a, 41; H彩101a, 42; H彩101b, 45; F21:W37-0751(2), 05 【B,05】
(B) H彩101a, 40

[B] H彩101a,03
BD H彩101a,06; H彩101a,12
BGŠ' H彩101a,23
BH H彩101a,04; H彩101a,35; H彩101a,36; H彩101a,36
BLḤWD F21:W37-0751,12【A,12】
[BL'DWHY] H彩101a,03
BNY H彩101a,28
B[NYNŠ'] H彩101a,04
BN' H彩101a,13
BR H彩101a,13; H彩101a,30; H彩101a,39
(B)R H彩101a,43
(BR) H彩101a,18
BR' H彩101a,08; H彩101a,11; H彩101a,34; H彩101c,47
BR['] H彩101a,01
(B)R' H彩101a,06; H彩101a,10
BṬL H彩101b,44
BYŠWT' H彩101a,33
B<Y>ŠW(T)' H彩101a,36
(B)YŠ' H彩101a,37
(BY)Š' H彩101a,41
B'Y H彩101a,09
B? H彩101c,47

D H彩101a,01; H彩101a,04; H彩101a,06; H彩101a,09; H彩101a,11; H彩101a,11; H彩101a,11; H彩101a,13; H彩101a,13; H彩101a,13; H彩101a,14; H彩101a,18; H彩101a,19; H彩101a,24; H彩101a,25; H彩101a,26; H彩101a,29; H彩101a,29; H彩101a,31; H彩101a,32; H彩101a,34; H彩101a,34; H彩101a,34; H彩101a,35; H彩101a,35; H彩101a,40; H彩101a,40; H彩101a,43; H彩101a,43; H彩101a,43; H彩101a,43; H彩101b,45; H彩101b,45; H彩101c,46; H彩101c,46; H彩101c,47; H彩101c,47; H彩101c,47; F21:W37-0751,11【A,11】; F21:W37-0751,12【A,12】; F21:W37-0751(2),05【B,05】; F21:W37-0751(2),07【B,07】
(D) H彩101a,04; H彩101a,11; H彩101a,33
[D] H彩101a,10; H彩101a,12; H彩101a,34; H彩101b,45; H彩101c,47
DB H彩101a,38
(D)B H彩101a,12
DKY' H彩101a,42
DQT' H彩101c,46
DWN H彩101a,37
DW' H彩101a,12
D(Y)[W]' H彩101a,41
D[YW]' H彩101a,33
D?? H彩101c,46

GBRYL H彩101a,31
GRB' H彩101a,41
G'Y H彩101a,08

HKN' H彩101a,26; H彩101c,46
(H)KYL H彩101c,46
HLYN F21:W37-0751,11【A,11】
HN' H彩101a,02; H彩101c,46
HN? H彩101b,44
HW H彩101a,36
H[W] H彩101a,01
[H]W H彩101a,04
[HW] H彩101a,02
HWT H彩101a,07
[HWT] H彩101a,03
HW' H彩101a,02; H彩101a,03; H彩101a,04; H彩101a,04
(H)W' H彩101a,01
(H)[W'] H彩101a,03
[H]W' H彩101a,02

ḤD F21:W37-0751,11【A,11】
ḤD' H彩101a,03
(ḤKM')(?) H彩101a,20
ḤNN' H彩101a,26
ḤRŠWT(HWN) H彩101a,37
ḤRŠWT' H彩101a,14; H彩101a,29
[ḤR]ŠWT' H彩101a,13
ḤŠWK' H彩101a,05
ḤŠ(W)K' H彩101a,05
ḤṬḤ' F21:W35-0752,04【H,04】
ḤYLH H彩101a,25
ḤYL' H彩101a,12; H彩101a,36
ḤYT' H彩101c,46
ḤY' H彩101a,04
ḤY(') H彩101a,04
Ḥ'R<> H彩101a,07

KL H彩101a,38; H彩101a,43; H彩101b,44;

F21:W37-0751, 11【A,11】

(K)L H彩101a, 43

[KL] H彩101a, 03

KLHWN H彩101c, 47

KLHW(N) H彩101a, 37

KLWYT' H彩101a, 38

KNR H彩101a, 42

KRS' H彩101a, 43

KRYH' H彩101a, 40

KS' F21:W37-0751, 12【A,12】

KTB H彩101a, 22; H彩101a, 22; H彩101a, 23; H彩101a, 25

L H彩101a, 01; H彩101a, 07; H彩101a, 08; H彩101a, 08; H彩101a, 09; H彩101a, 11; H彩101a, 25; H彩101a, 25; H彩101a, 28; H彩101a, 35; H彩101a, 36; F21:W37-0751, 11【A,11】

LK[WN] F21:W37-0751(2), 07【B,07】

LQṬ H彩101a, 07

LWT H彩101a, 02; H彩101a, 19

L[WT] H彩101a, 03

L' H彩101a, 05; H彩101a, 08; F21:W37-0751(2), 07【B,07】

L?ŠT' H彩101a, 23

L?? H彩101c, 47

MDM H彩101a, 04; H彩101a, 38

MḤYN[N] H彩101a, 40

MKYL H彩101a, 05

MLPN' H彩101a, 19; H彩101c, 47

MLTH H彩101a, 40

MLT' H彩101c, 46

M[LT'] H彩101a, 01

[M]LT' H彩101a, 02

[M]L(T)' H彩101a, 02

(M)L'KH H彩101a, 07

ML'K' H彩101a, 33

ML'N H彩101a, 32

ML'T H彩101a, 14

MN H彩101a, 06; H彩101a, 09; H彩101a, 13; H彩101a, 18; H彩101a, 19; H彩101a, 26; H彩101a, 28; H彩101a, 30; H彩101a, 35; H彩101a, 36; H彩101a, 39; H彩101a, 43; H彩101a, 43; H彩101a, 43; H彩101b, 44; H彩101b, 45; H彩101c, 46; F21:W37-0751, 11【A,11】

(M)N H彩101a, 14

MNHR H彩101a, 05

MRN H彩101a, 26; F21:W37-0751, 09【A,09】; F21:W37-0754, 09【E,09】

MRY' H彩101a, 05

MR(Y)' H彩101a, 30

MṢL(L)T' H彩101c, 47

MṢLM' H彩101c, 47

MṢ'TH H彩101b, 45

MŠQ' F21:W37-0751, 11【A,11】

MŠYḤ' H彩101a, 33; F21:W37-0751, 09【A,09】

MŠYḤ ['] H彩101a, 13

MŠ[Y]Ḥ' H彩101a, 14

MŠ<Y>Ḥ ['] H彩101a, 18

(MŠYḤ')(?) H彩101a, 26

MT/// H彩101a, 17

(M)ṬR H彩101a, 35

M'LK H彩101a, 05

M???D' H彩101a, 33

N(P)ŠK H彩101a, 05

NQR H彩101c, 46

NSR H彩101a, 11

NŠTR' H彩101a, 22; H彩101a, 25; H彩101a, 33

NŠTR(') H彩101b, 45

N(Š)TR' H彩101a, 29

(NŠTR')(?) H彩101a, 25

[N]ŠTR' H彩101a, 31

[N](Š)TR' H彩101a, 23

[NŠ]TR(') H彩101a, 26

NŠTR/// H彩101a, 19

NTLN H彩101a, 09

NTṚRD(W)[N] H彩101c, 46

NT?N H彩101a, 29

NT?///D??///??? H彩101a, 42

NṬR H彩101a, 05

NWBD F21:W37-0751(2), 07【B,07】

NWHR' H彩101a, 04

NWH[R'] H彩101a, 04

NWḤM' F21:W37-0751(2), 09【B,09】

NWR' H彩101a, 26

PKR H彩101b, 44

PLY H彩101a, 41

PNY' H彩101a, 39

PWD' H彩101a, 30
PWR'N' F21:W37-0754, 08【E,08】
PW??N H彩101a, 29

QBWR' H彩101c, 46
QDM H彩101a, 27; H彩101a, 39
QDYŠT' H彩101a, 43
QDYŠ' H彩101a, 19; H彩101a, 35; H彩101c, 47
QD(YŠ)' H彩101a, 33
(Q)DYŠ' H彩101c, 47
(Q)L'TK H彩101a, 09
QRYR' F21:W37-0751, 12【A,12】
QR' H彩101a, 08
QR(') H彩101a, 09
(Q)R' H彩101a, 07
QŠ(Y)' H彩101a, 40
QṬR' H彩101a, 13; H彩101a, 14; H彩101a, 21; H彩101a, 29
QṬR(') H彩101a, 18
QṬ(R)' H彩101b, 45
QṬ[R'] H彩101a, 27
(Q)[Ṭ](R)' H彩101a, 30
QWDŠ' H彩101a, 01; H彩101a, 06; H彩101a, 09; H彩101a, 35
QW[D]Š' H彩101c, 47
(Q)WDŠ' H彩101a, 10
[QW]DŠ' H彩101b, 45
[QWD]Š' H彩101a, 12

RB' H彩101a, 25
RS??? H彩101a, 37
RŠYT H彩101a, 02; H彩101a, 03
(R)ŠYT H彩101a, 01
RWḤ' H彩101a, 01; H彩101a, 06; H彩101a, 09; H彩101a, 34; H彩101a, 41; H彩101c, 47
RWḤ(') H彩101b, 45
RW[Ḥ'] H彩101a, 10
(R)[WḤ'] H彩101a, 12
R?/// H彩101a, 12
R?///?T H彩101a, 12

SGD' H彩101a, 42
SGY" H彩101a, 13
SRP' H彩101a, 32
SYM H彩101a, 10; H彩101a, 10
(S)YM H彩101a, 11
S?? H彩101a, 41

ṢL(Y)B' H彩101a, 42
ṢN'T??? H彩101a, 37

ŠLYḤ' H彩101c, 47
ŠL<Y>Ḥ' H彩101a, 35
ŠM H彩101a, 10; H彩101a, 10; H彩101a, 31; H彩101b, 45
Š(M) H彩101a, 27
Š(M)(?) H彩101a, 14; H彩101a, 14
[ŠM] H彩101a, 10
ŠM' F21:W37-0751(2), 05【B,05】
ŠM/// H彩101a, 28
ŠRT H彩101b, 45
ŠRYT H彩101a, 13; H彩101a, 14; H彩101c, 46
ŠRY' H彩101b, 45
ŠWLṬN' H彩101a, 32
ŠWQR(') H彩101a, 20
Š'D' H彩101a, 40
Š'(D)' H彩101a, 36
Š'(D)['] H彩101c, 46
Š(')D' H彩101c, 46
Š?? H彩101a, 06
Š/// H彩101a, 13

THWMH H彩101a, 11
THWM' H彩101a, 41
ṬḤTY' H彩101a, 43
ṬḤYT H彩101a, 23
TLM(Y)D' F21:W37-0751(2), 05【B,05】
TL' H彩101a, 13
TWL(T') H彩101a, 11

ṬMY(R') H彩101b, 45
ṬM['W] H彩101a, 35
ṬRD H彩101a, 36
ṬWR H彩101a, 07

W H彩101a, 01; H彩101a, 02; H彩101a, 05; H彩101a, 05; H彩101a, 06; H彩101a, 06; H彩101a, 06; H彩101a, 07; H彩101a, 07; H彩101a, 08; H彩101a, 10; H彩101a, 10; H彩101a, 11; H彩101a, 11; H彩101a, 11; H彩101a, 12; H彩101a, 12; H彩101a, 12;

H彩101a, 13; H彩101a, 14; H彩101a, 14; H彩101a, 18; H彩101a, 19; H彩101a, 20; H彩101a, 21; H彩101a, 21; H彩101a, 23; H彩101a, 23; H彩101a, 24; H彩101a, 24; H彩101a, 26; H彩101a, 27; H彩101a, 29; H彩101a, 29; H彩101a, 30; H彩101a, 30; H彩101a, 31; H彩101a, 31; H彩101a, 32; H彩101a, 32; H彩101a, 32; H彩101a, 32; H彩101a, 34; H彩101a, 36; H彩101a, 36; H彩101a, 37; H彩101a, 37; H彩101a, 37; H彩101a, 38; H彩101a, 38; H彩101a, 40; H彩101a, 41; H彩101a, 41; H彩101a, 41; H彩101a, 42; H彩101b, 44; H彩101b, 44; H彩101b, 45; H彩101b, 45; H彩101c, 47; H彩101c, 47; H彩101c, 47; H彩101c, 47; H彩101c, 47

(W) H彩101a, 08; H彩101a, 22; H彩101a, 23; H彩101a, 43; H彩101c, 46; H彩101c, 46

[W] H彩101a, 01; H彩101a, 03; H彩101a, 04; H彩101a, 04; H彩101a, 11; H彩101a, 34; H彩101a, 43; H彩101a, 43

YḤ<Y>D[Y'] H彩101c, 47

YM' H彩101a, 11; H彩101a, 24

YSRYL H彩101a, 28

YŠ(W') H彩101a, 25

ZBN[NY]' H彩101a, 43

ZDQT' F21:W35-0752, 04【H,04】

Z'(W)R' F21:W37-0751, 11【A,11】

'B' H彩101a, 06; H彩101a, 10; H彩101a, 11; H彩101a, 34

['B]' H彩101c, 47

['B'] H彩101a, 01

'DRKH H彩101a, 05

[']GRH F21:W37-0751(2), 08【B,08】

'GR' H彩101a, 38

'GWN' H彩101a, 09

'HYH H彩101a, 30; H彩101a, 30

'HDNY H彩101a, 07

'LH(N) H彩101a, 26

'LH' H彩101a, 02; H彩101a, 02; H彩101a, 26; H彩101a, 28

'L(H)' H彩101a, 26

'L(H') H彩101a, 18

['LH'] H彩101a, 03

'MR F21:W37-0751(2), 07【B,07】

'MRY H彩101a, 08

'MYN H彩101a, 27; H彩101a, 30; F21:W37-0751(2), 07【B,07】

'MYR H彩101a, 24

'N H彩101a, 21; H彩101a, 23; H彩101a, 23; H彩101a, 24; H彩101a, 24

(')N H彩101a, 22; H彩101a, 23

'NŠ H彩101a, 22; H彩101a, 22; H彩101a, 23; H彩101a, 25

'(N)Š? H彩101a, 25

'N' F21:W37-0751(2), 07【B,07】

['](P)L' H彩101a, 03

'PNYW H彩101a, 35

(')PNYW H彩101a, 40

'PY H彩101a, 36

'RKS H彩101a, 32

'RZ' F21:W35-0753, 09【I,09】; F21:W36-0753, 06【J,06】

'(RZ)' F21:W36-0753, 02【J,02】

'R'' H彩101a, 23; H彩101a, 36

'SWR' H彩101a, 18; H彩101a, 21; H彩101a, 23; H彩101a, 27; H彩101a, 30

'S/// H彩101a, 42

'ŠR H彩101a, 30

'TKŠP H彩101a, 12

'TMLY H彩101a, 12

'T' H彩101a, 41

'T[']() H彩101a, 07

'T??? H彩101a, 08

['Y]DH H彩101a, 03

'YKN' H彩101a, 39

'YQR' H彩101c, 47

'YTWHY H彩101a, 03

'YTWH[Y] H彩101a, 01

'(Y)[TW]HY H彩101a, 02

['Y](T)WHY H彩101a, 02

(')YTYHW[N] H彩101a, 04

'? H彩101b, 44

'BDK H彩101a, 14

'DT' H彩101a, 43

'LMYN H彩101a, 01

'LY' H彩101a, 43

['M](?)M' H彩101a, 35

'MWR' H彩101a, 19

'QBWHY H彩 101a, 24
'Ṭ(Y)N F21:W35-0752, 04【H,04】
'WBK H彩 101a, 10
'YNWHY H彩 101a, 27
'YN[WHY] H彩 101a, 39
'YN' H彩 101a, 20; H彩 101a, 37
'ZH H彩 101a, 13

?BY H彩 101a, 08
?G H彩 101a, 17
?LT' H彩 101b, 45
?M H彩 101a, 27
?Ṣ?? H彩 101a, 21
?Š? H彩 101a, 15; H彩 101a, 31
?TR H彩 101a, 08
?T' H彩 101b, 45
?Ṭ? H彩 101a, 16
??MṢ??? H彩 101a, 42
??N H彩 101a, 14; H彩 101a, 37
??Š' H彩 101a, 06; H彩 101a, 23; H彩 101a, 31
??T H彩 101c, 47
??TB' H彩 101a, 31
???N H彩 101a, 30
???T' H彩 101a, 22
???' H彩 101c, 46
???///??S H彩 101a, 17
??///??///?DH H彩 101a, 18
?///Y' H彩 101a, 36
?///?Š? H彩 101a, 28

///T' H彩 101a, 18
///?RQ' H彩 101a, 40

執筆者紹介 ①生年 ②所属・職名 ③専門 ④主要論著

吉田順一（YOSHIDA Jun'ichi）

①1940年

②早稲田大学文学学術院教授

③モンゴル史

④「内モンゴルにおける伝統農耕と漢式農耕の受容」（早稲田大学モンゴル研究所編『近現代内モンゴル東部の変容』、雄山閣、2007）、『「モンゴル秘史」研究』（モンゴル文、中国・民族出版社、2005）、吉田順一・賀希格特克陶・井上治・永井匠他共訳注『「アルタン=ハーン伝」訳注』（風間書房、1998）

チメドドルジ（Chimeddorji、齐木德道尔吉）

①1954年

②内蒙古大学民族学与社会学学院教授

③女真言語文字、金朝史、清朝蒙古史

④『辽夏金元史徵・金代卷』（内蒙古大学出版社、2007）、齐木德道尔吉・吴元丰・那日松主编『清内秘書院蒙古文档案汇编』1-7 輯（内蒙古人民出版社、2003-2006）、齐木德道尔吉、巴根那编著『清朝太祖、太宗、世祖朝实录蒙古史史料抄一乾隆本、康熙本比较』（内蒙古大学出版社、2001）

井上 治（INOUE Osamu）

①1963年

②島根県立大学総合政策学部・大学院北東アジア研究科教授

③モンゴル史、16世紀以降のモンゴル語文献

④『ホトクタイ=セチェン=ホンタイジの研究』（風間書房、2002）、Vladimir L. USPENSKY, Osamu INOUE and Tatsuo NAKAMI,*Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St.Petersburg State University Library*(Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa,2001) 吉田順一・賀希格陶克陶・井上治・永井匠他共訳注『「アルタン=ハーン伝」訳注』（風間書房、1998）

永井 匠（NAGAI Takumi）

①1966年

②早稲田大学オープン教育センター・第二文学部非常勤講師

③モンゴル史（特に16世紀）

④「隆慶和議をめぐるアルタン=ハーンと右翼モンゴル諸王公との関係について」（『日本モンゴル学会紀要』33、2003）、「隆慶和議と右翼モンゴルの漢人」（『史観』145、早稲田大学史学会、2001）、吉田順一・賀希格陶克陶・井上治・永井匠他共訳注『「アルタン=ハーン伝」訳注』（風間書房、1998）

舩田善之（FUNADA Yoshiyuki）

①1972年

②九州大学大学院人文科学研究院講師

③モンゴル帝国史、中国近世史

④「蒙文直訳体の展開 —「霊巌寺聖旨碑」の事例研究 —」(『内陸アジア史研究』22、内陸アジア史学会、2007)、「元代の命令文書の開読使臣について — その人的構成と巡歴ルートを中心に —」(『東方学』111、2006)、「元代の命令文書の開読について」(『東洋史研究』63-4、2005)

チョイジ (Coyiji、乔吉)

①1942年
②中国内蒙古社会科学院历史学研究员
③蒙古历史・文献・宗教
④『八思巴伝 (2版)』(校注、内蒙古人民出版社、1999)、『蒙古佛教史－大蒙古時期 (1206-1271)』(内蒙古人民出版社、1998)、『内蒙古寺庙』(内蒙古人民出版社、1994)

オヨーンビリグ (Borjigidai Oyunbilig、乌云毕力格)

①1963年
②中国人民大学国学院西域历史语言研究所教授
③清朝蒙古史
④「清朝対蒙古的立法概述」(『蒙古史研究』7、2003)、齐木德道尔吉・乌云毕力格・宝音德力根编『明清档案与蒙古史研究』1 (内蒙古人民出版社、2000)、*Über lieferungsgeschichte des Berichts über den persönlichen Feldzud des Kangxi Kaisers gegen Galdan* (1696-1697)(Otto Harrassowitz Verlag. Wiesbaden 1999)

ボインデルゲル (Jaqacidai Buyandelger、宝音德力根)

①1963年
②中国内蒙古大学蒙古史研究所教授
③蒙古古代史、中国北方民族史・民族史文献学
④宝音德力根・乌云毕力格・吴元丰主编『明清档案与蒙古史研究丛书』(22卷) (内蒙古人民出版社、2005)、「成吉思汗葬地大斡托克及其相关问题」(『内蒙古社会科学』1997年-2)、「关于王汗与札木合」(『蒙古史研究』3、1989)

梅村　坦 (UMEMURA Hiroshi)

①1946年
②中央大学総合政策学部教授
③中央ユーラシア史
④『内陸アジア史の展開』(世界史リブレット11、山川出版社、1997)、伊原　弘・梅村　坦著『宋と中央ユーラシア』(世界の歴史7、中央公論社、1997)、山田信夫著／小田壽典・P.ツィーメ・梅村　坦・森安孝夫編『ウイグル文契約文書集成』全3巻 (大阪大学出版会、1993)

武内紹人 (TAKEUCHI Tsuguhito)

①1951年
②神戸市外国語大学外国語学部教授
③チベット語を中心とするチベット=ビルマ系言語の記述と歴史・社会言語学的研究、敦煌・中央アジア出土古チベット語文献の研究
④Imaeda, Takeuchi, et. al.,*Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale, Tome IV* (Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign

Studies, 2007)、"The Tibetan military system and its activities from Khotan and Lob-nor." In Susan Whitfield (ed.) *The Silk Road: Trade, Travel, War and Faith.*(British Library, 2004)、"Sociolinguistic Implications of the use of Tibetan in East Turkestan from the end of Tibetan Domination through the Tangut Period (9th-12th c.)."In P. Zieme (ed.) *Turfan Revisited.* (Turnhout, Belgium: Brepols, 2004)

石濱裕美子（ISHIHAMA Yumiko）

②早稲田大学教育・総合科学学術院准教授

③チベット・モンゴル・満州・中国関係史

④『チベット仏教世界の歴史的研究』(東方書店、2001)、ダライ=ラマ十四世著・石濱裕美子訳『ダライラマの仏教入門』（光文社、1995)、ダライ=ラマ十四世著・石濱裕美子訳『ダライラマの密教入門』（光文社、1995）

荒川慎太郎（ARAKAWA Shintaro）

①1971 年

②東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授

③西夏語、西夏語文献

④「ロシア所蔵西夏語訳『般若心経註』の研究」（『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』（Contribution to the Studies of Eurasian Languages Series 10）、2006 年）、『西夏語辞典』(E. I. クチャーノフと共編、本文露英中国語）（京都大学文学部、2006)、「ロシア所蔵西夏文『大千国守護吉祥頌』断片の研究—東方学研究所サンクト=ペテルブルグ支所所蔵文書 Tang.477, No.7100 について—」(ユーラシア諸言語の研究刊行会編『庄垣内正弘先生退任記念論集　ユーラシア諸言語の研究』、2006)

宇野伸浩（UNO Nobuhiro）

①1958 年

②広島修道大学人間環境学部教授

③モンゴル帝国史

④「ラシード=ウッディーン『集史』の増補加筆のプロセス」(『人間環境学研究』1-1･2、広島修道大学、2003)、「チンギス=カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組」(『国立民族学博物館研究報告別冊』20、1999)、「『集史』の構成における「オグズ=カガン説話」の意味」(『東洋史研究』61-1、1999)

磯貝健一（ISOGAI Ken'ichi）

①1966 年

②京都外国語大学外国語学部非常勤講師

③中央アジア史、イスラーム法廷文書研究

④磯貝健一・矢島洋一「ヒジュラ暦 742 年カラコルムのペルシア語碑文」(『内陸アジア言語の研究』22、2007)、"A commentary on the closing formula found in the Central Asian waqf documents,"(Nobuaki Kondo (ed.), *Persian Documents: Social History of Iran and Turan in 15th-19th Centuries*, London, Routledge Curzon, 2003)、「一七世紀初頭ブハラの死地蘇生文書について」(『史林』82-2、1999)

矢島洋一（YAJIMA Yoichi）

①1970年

②京都外国語大学国際言語平和研究所嘱託研究員

③内陸アジア史

④磯貝健一・矢島洋一「ヒジュラ暦742年カラコルムのペルシア語碑文」（『内陸アジア言語の研究』22、2007）、「タリーカにおける世襲の問題」（赤堀雅幸他編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』、東京大学出版会、2005）、「モンゴルのイスラーム改宗と Kubrawiyya」（『西南アジア研究』53、2000）

松井　太（MATSUI Dai）

①1969年

②弘前大学人文学部准教授

③中央アジア史

④Taxation Systems as Seen in the Uigur and Mongol Documents from Turfan, an Overview（*Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 50, 2005）、「モンゴル時代の度量衡」（『東方学』107、2004）、「モンゴル時代のウイグル農民と仏教教団」（『東洋史研究』63-1、2004）

武藤慎一（MUTO Shin'ichi）

①1967年

②大東文化大学文学部准教授

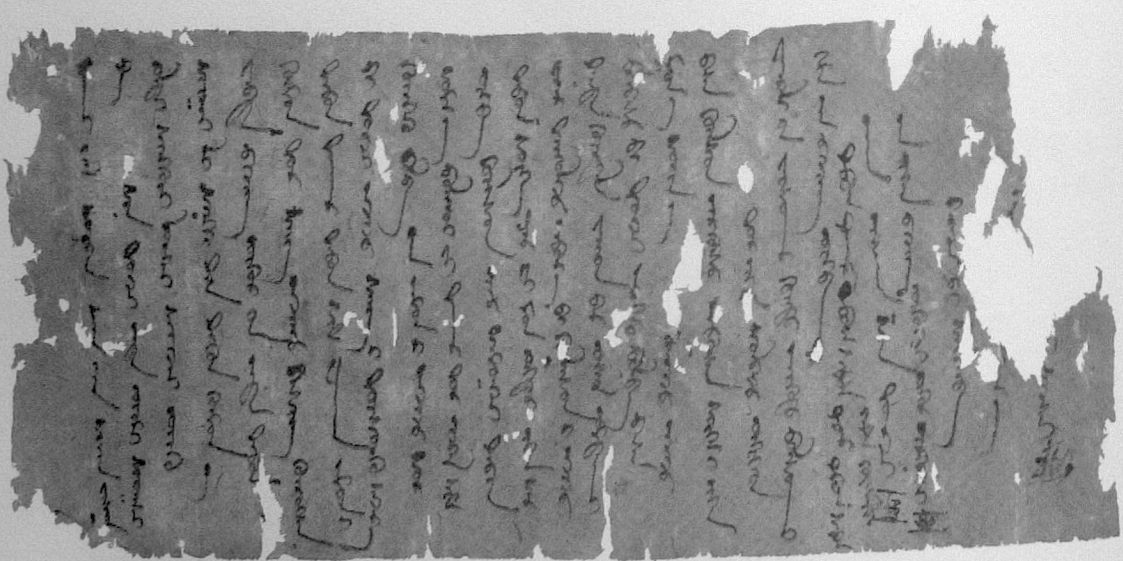
③キリスト教学、シリア学、解釈学

④ "The Syrian Origin of the Divine Condescension as the Key to Biblical Interpretation"*(The Harp* 20, 2006)、『聖書解釈としての詩歌と修辞 — シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』（教文館、2004）、「宗教生活から生活宗教へ — 四世紀シリア・キリスト教の転換 —」（『宗教研究』337、2003）

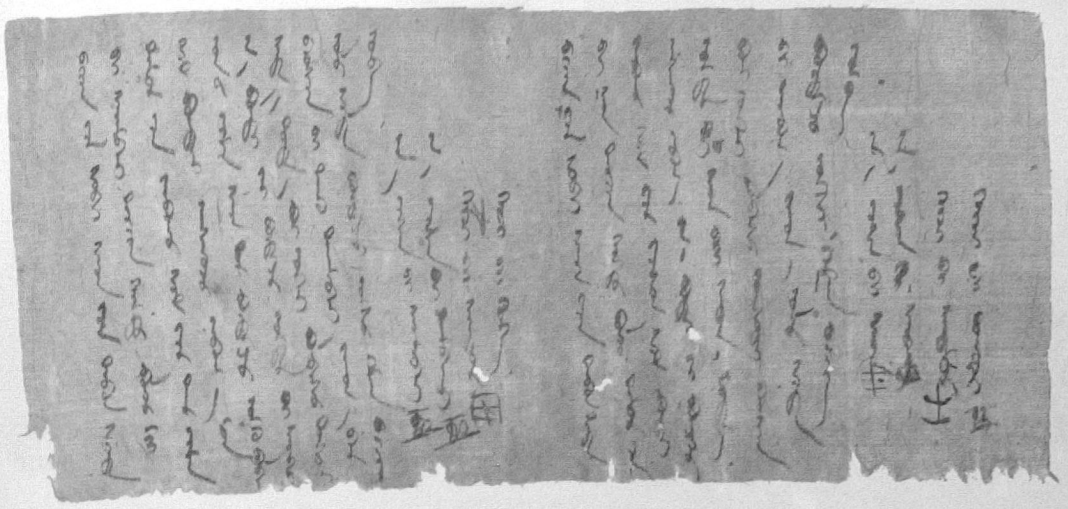
図　版　編



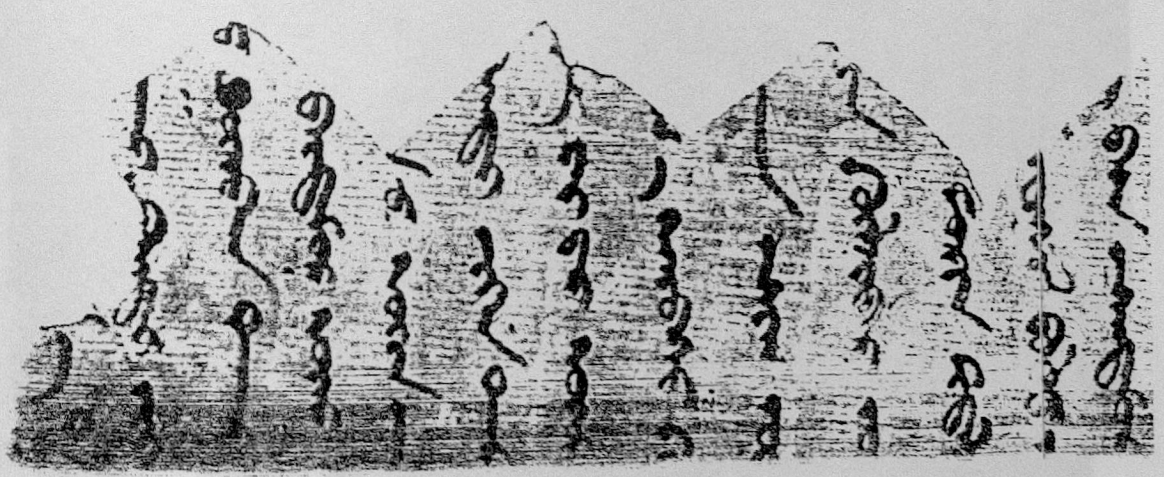
（No.001）文書番号F61：W9　（口絵参照）



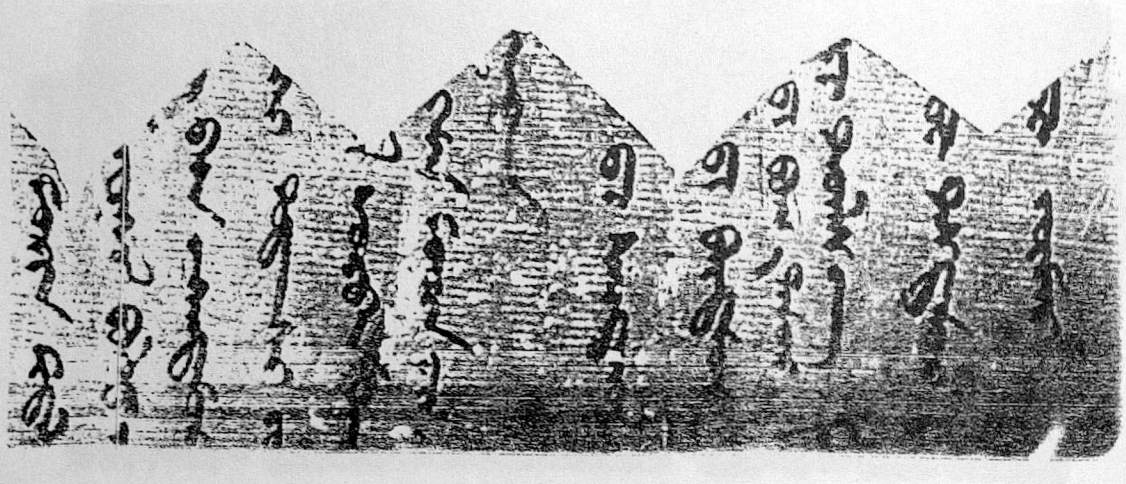
（No.002）文書番号F61：W6



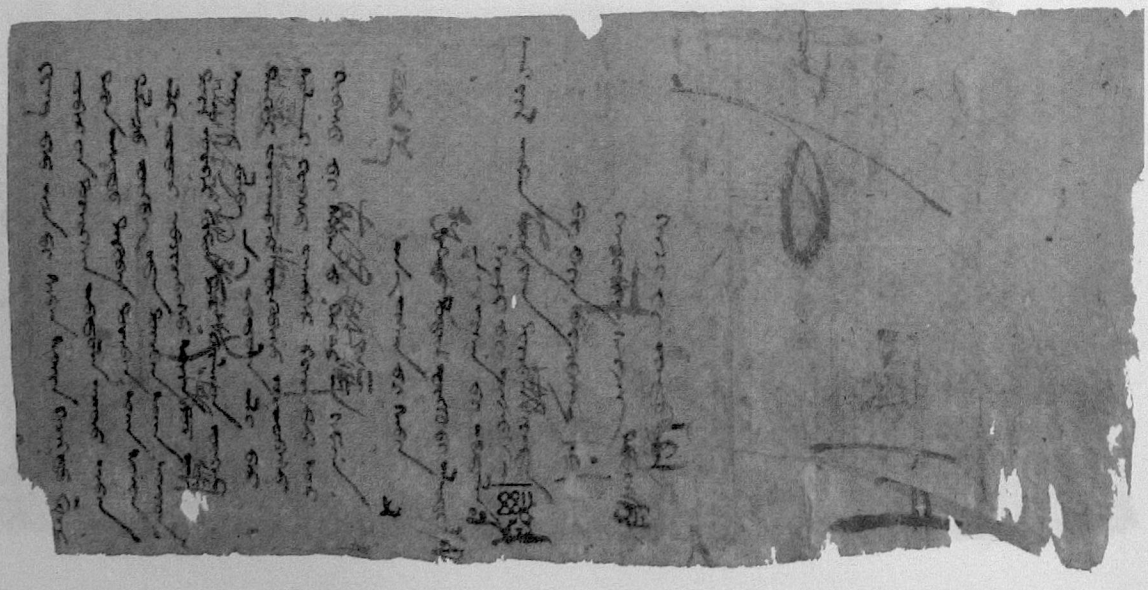
（No.003）文書番号F209：W69



（No.004-1）文書番号MON01－①



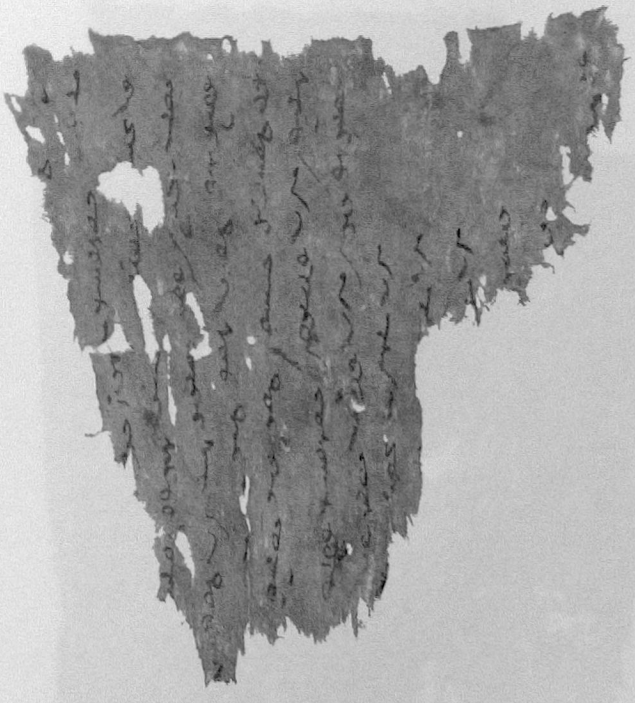
（No.004-2）文書番号MON01－②



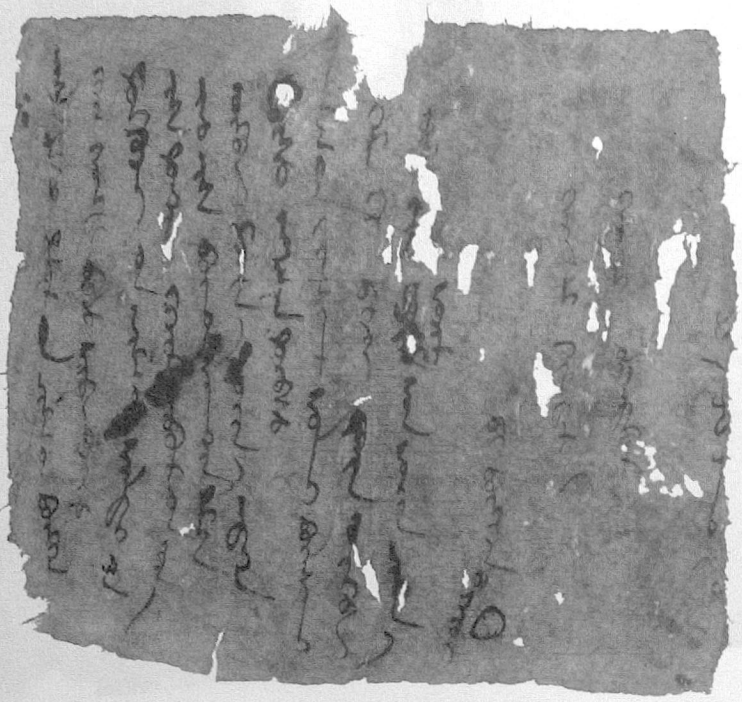
（No.005）文書番号MON02　（口絵参照）



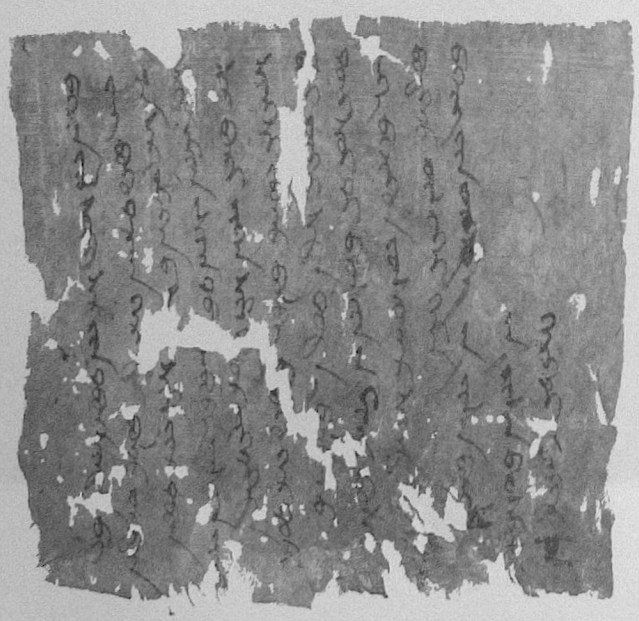
（No.006）文書番号F79：W6



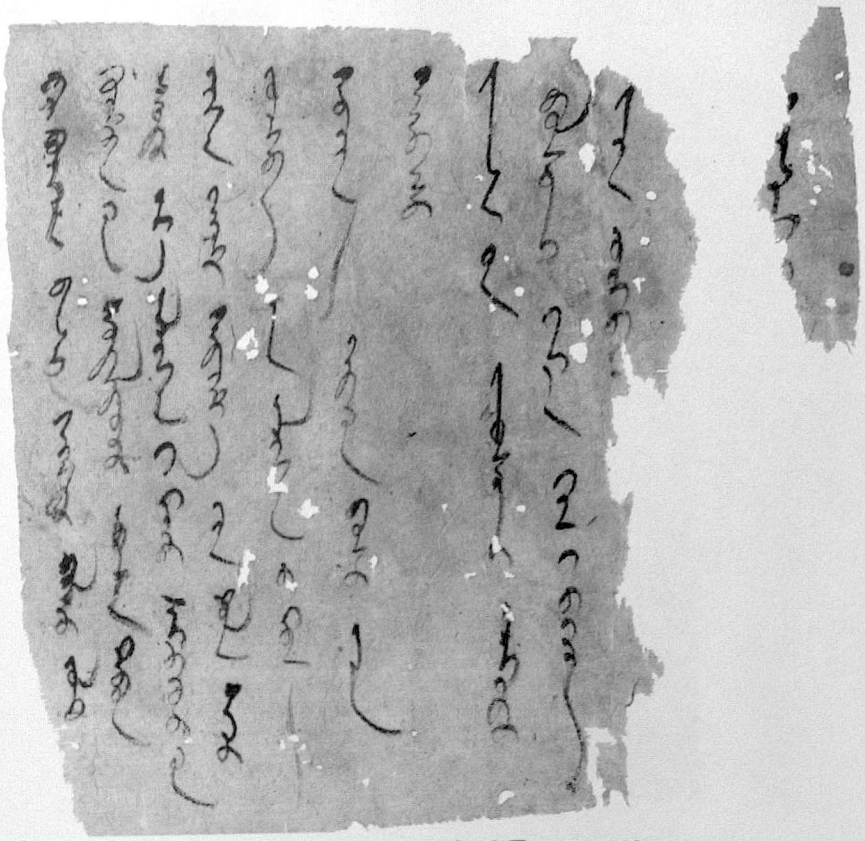
（No.007）文書番号F62：W19



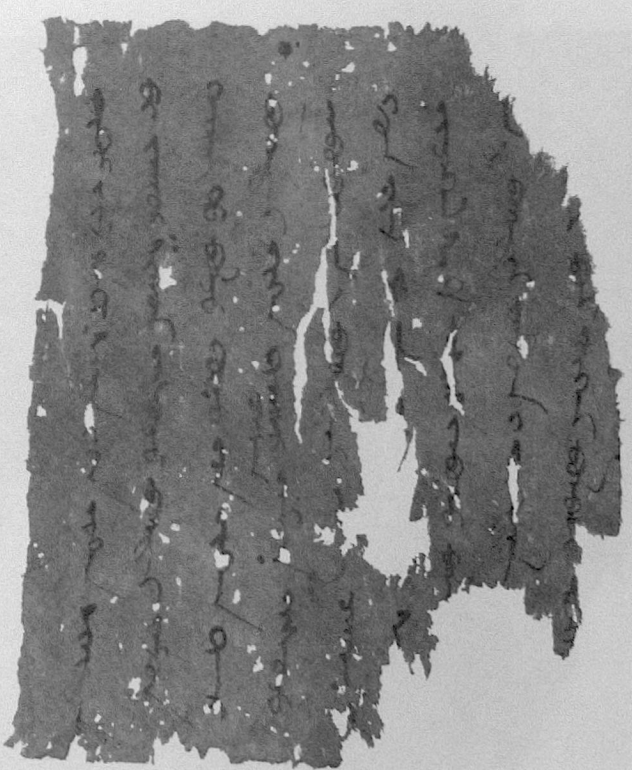
（No.008）文書番号F135：W80



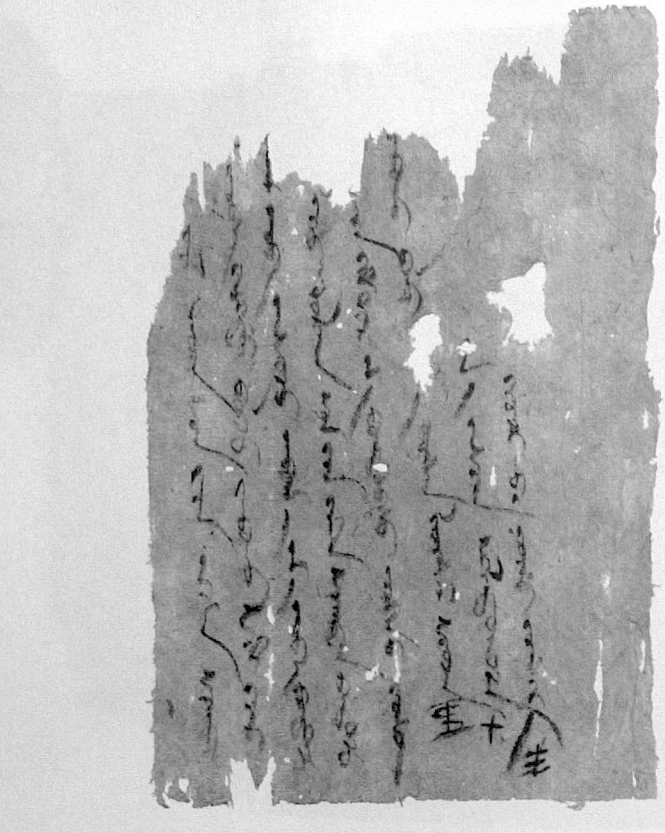
（No.009）文書番号F250：W3



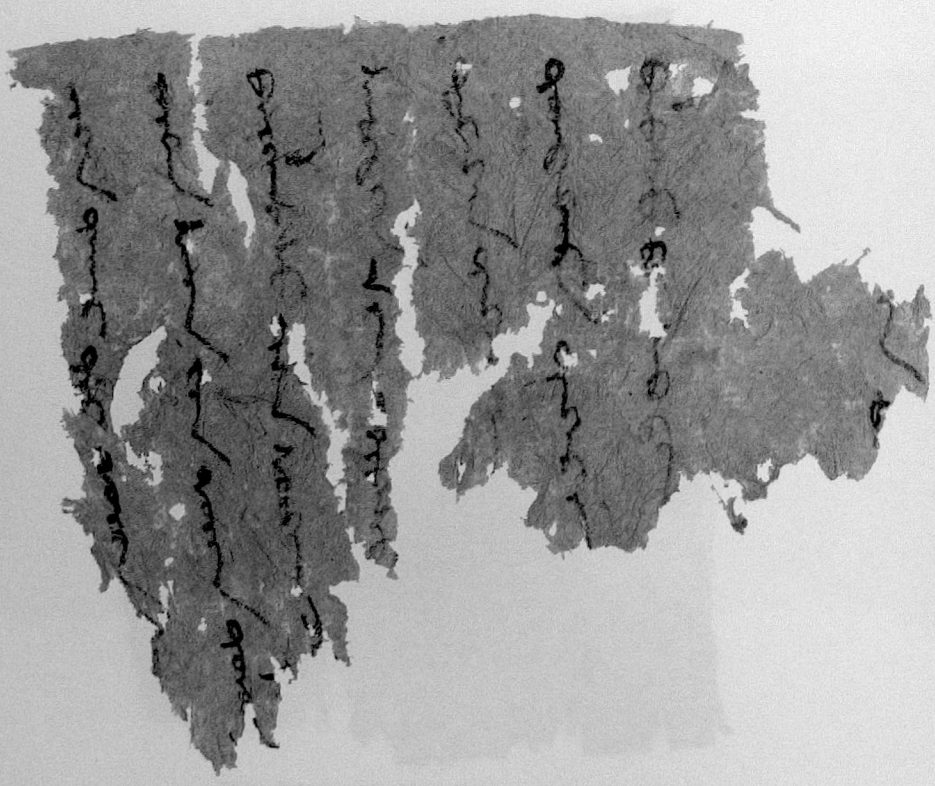
（No.010）文書番号F29：W1



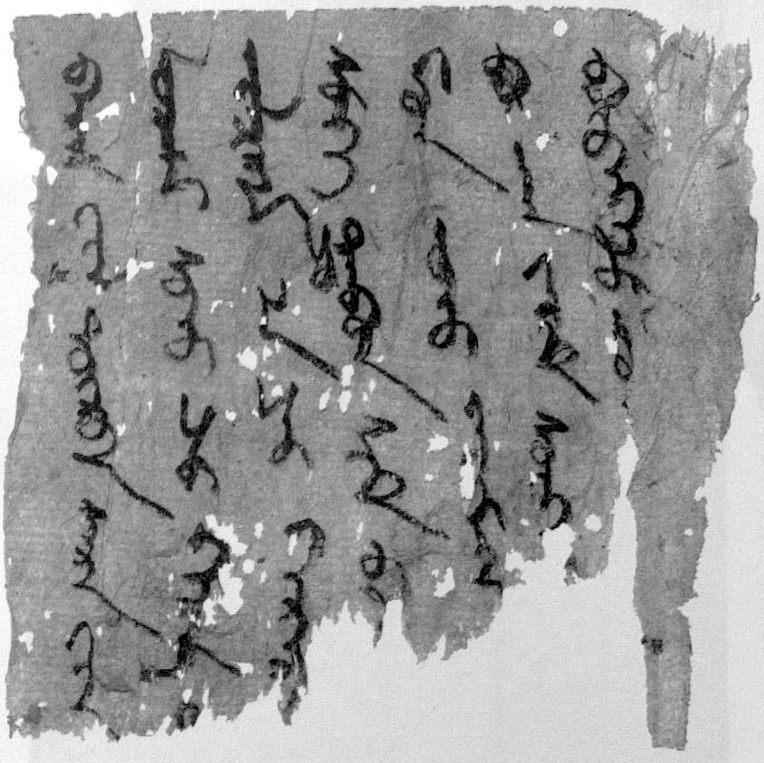
（No.011）文書番号F17：W9



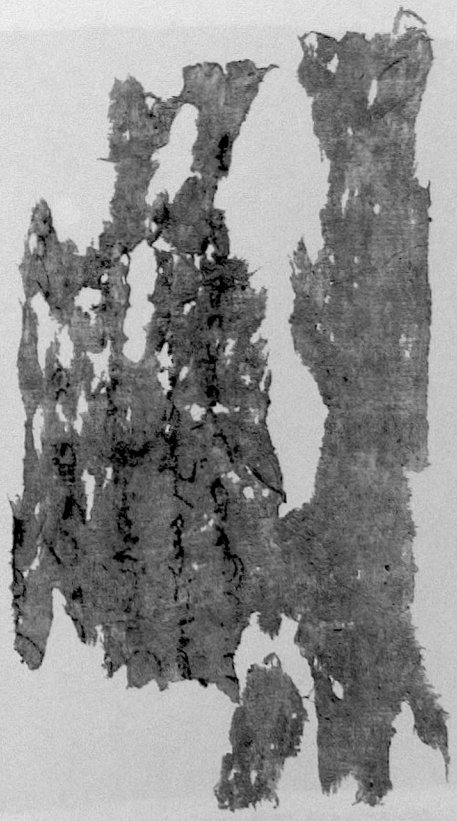
（No.012）文書番号F79：W7



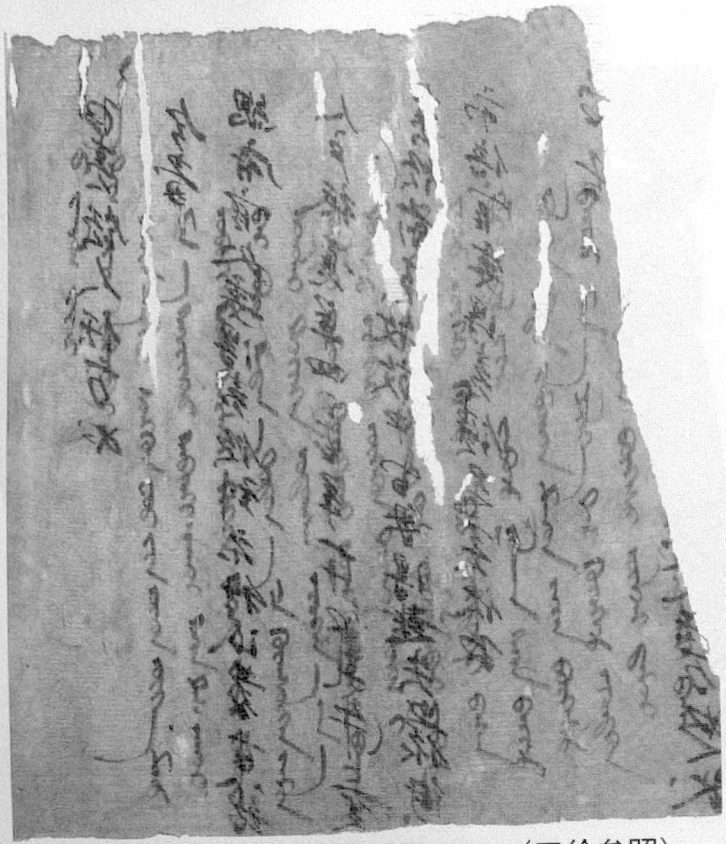
（No.013）文書番号F224：W3



（No.014）文書番号F79：W5



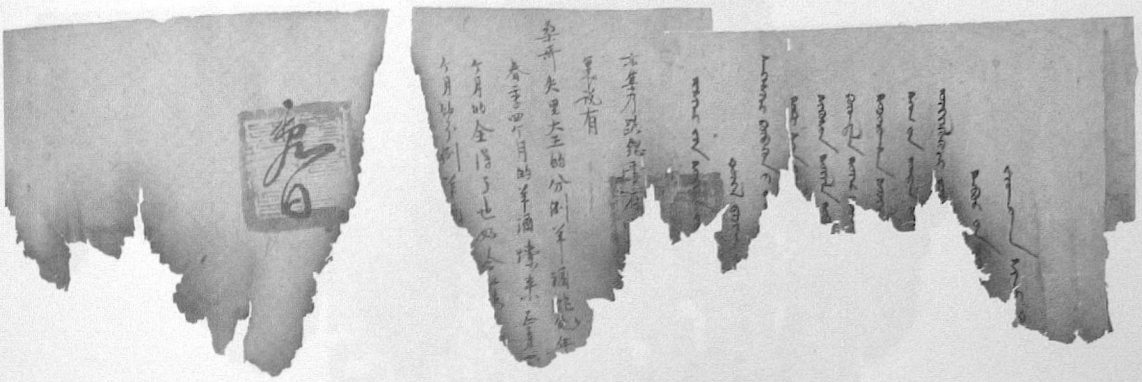
（No.015）文書番号F124：W1



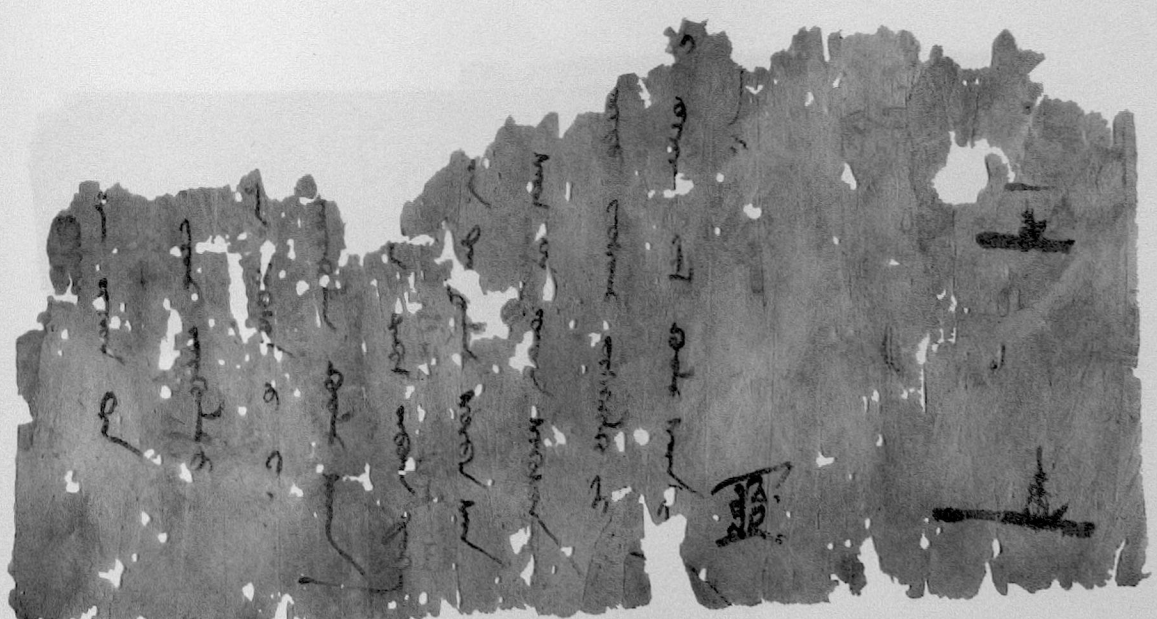
（No.016）文書番号F9：W31b　（口絵参照）



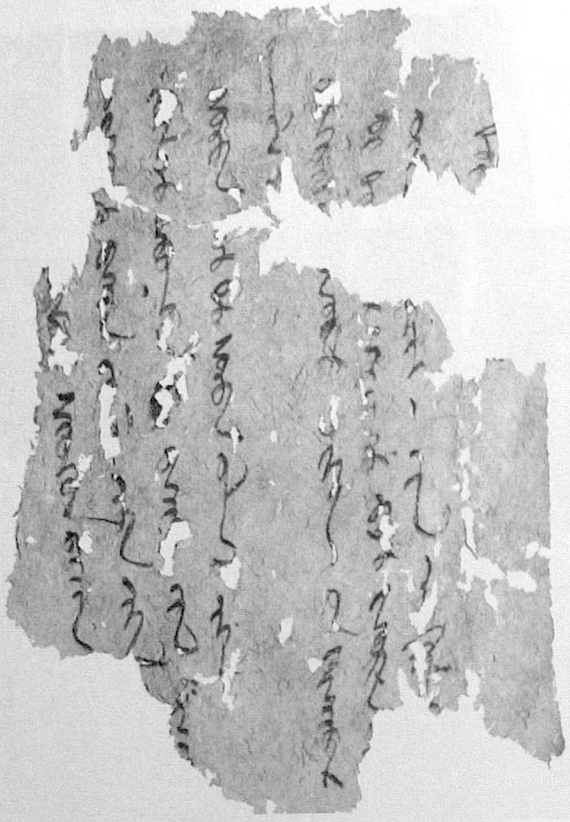
（No.017）文書番号F209：W68



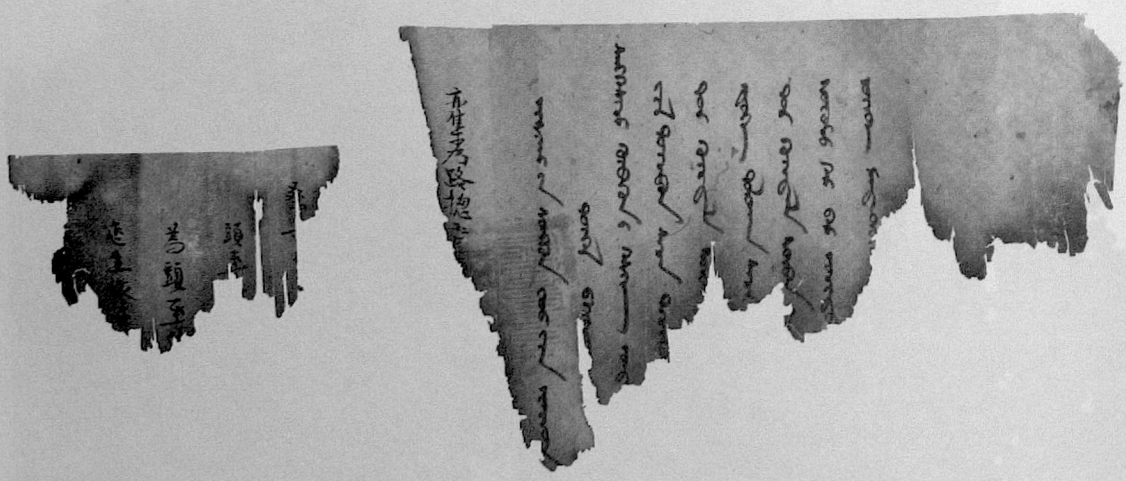
（No.018）文書番号F116：W204　（口絵参照）



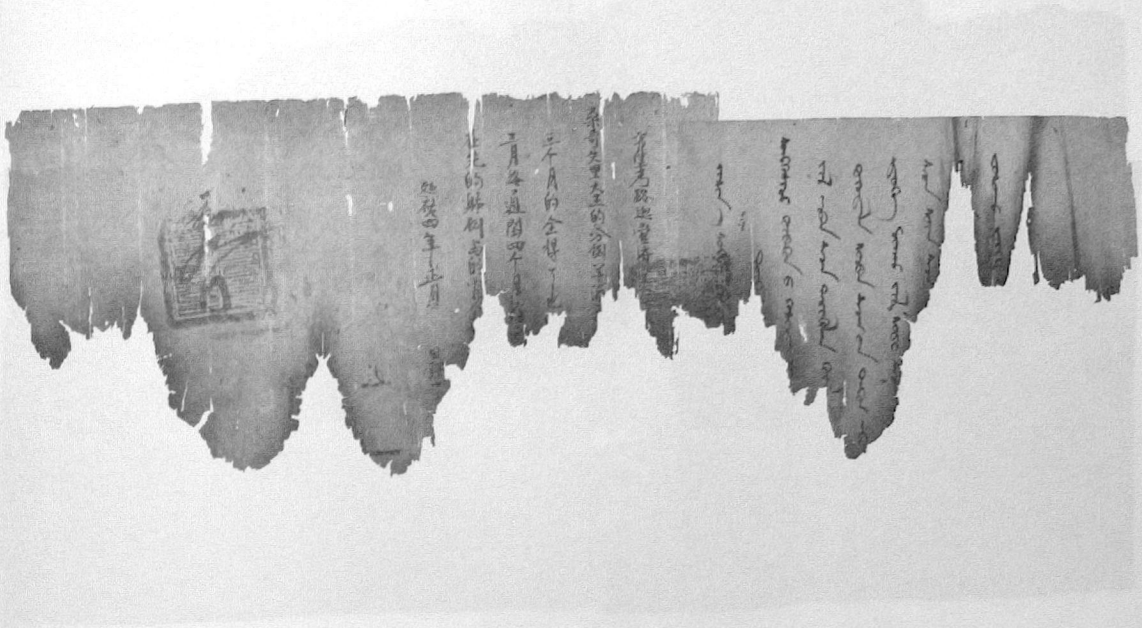
（No.019）文書番号MON03



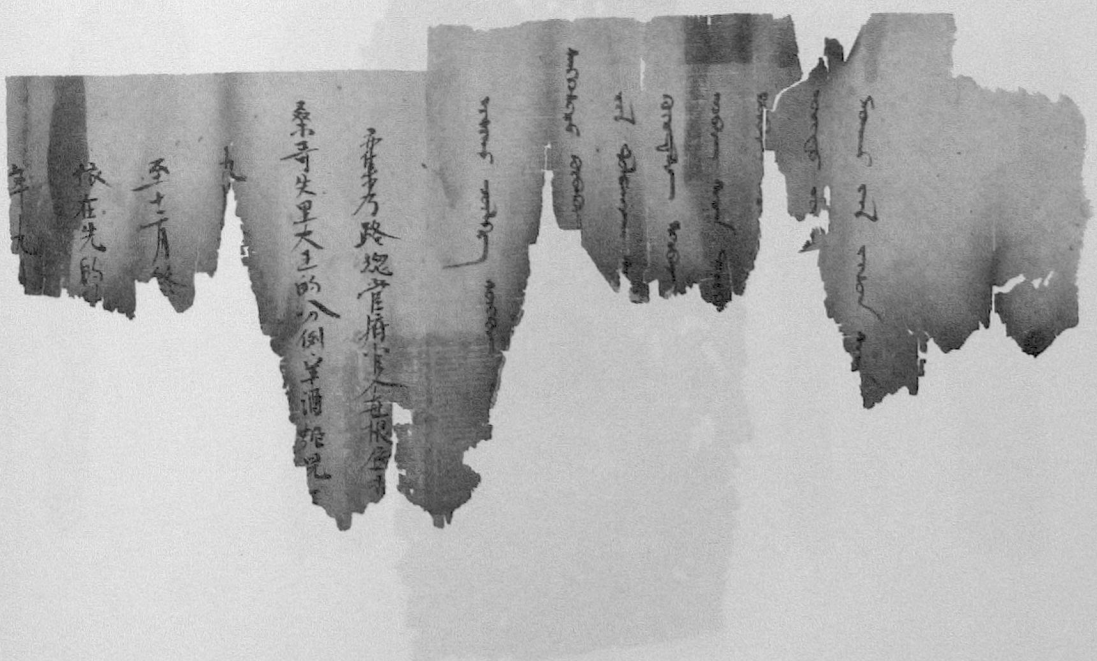
（No.020）文書番号F14：W16



（No.021）文書番号F116：W521



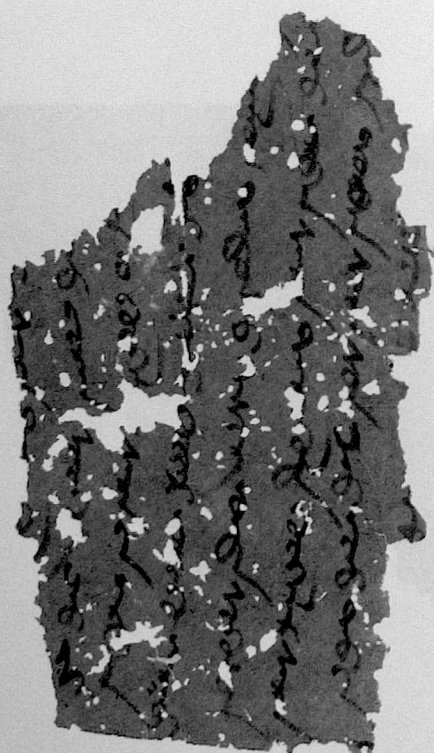
（No.022）文書番号F116：W595



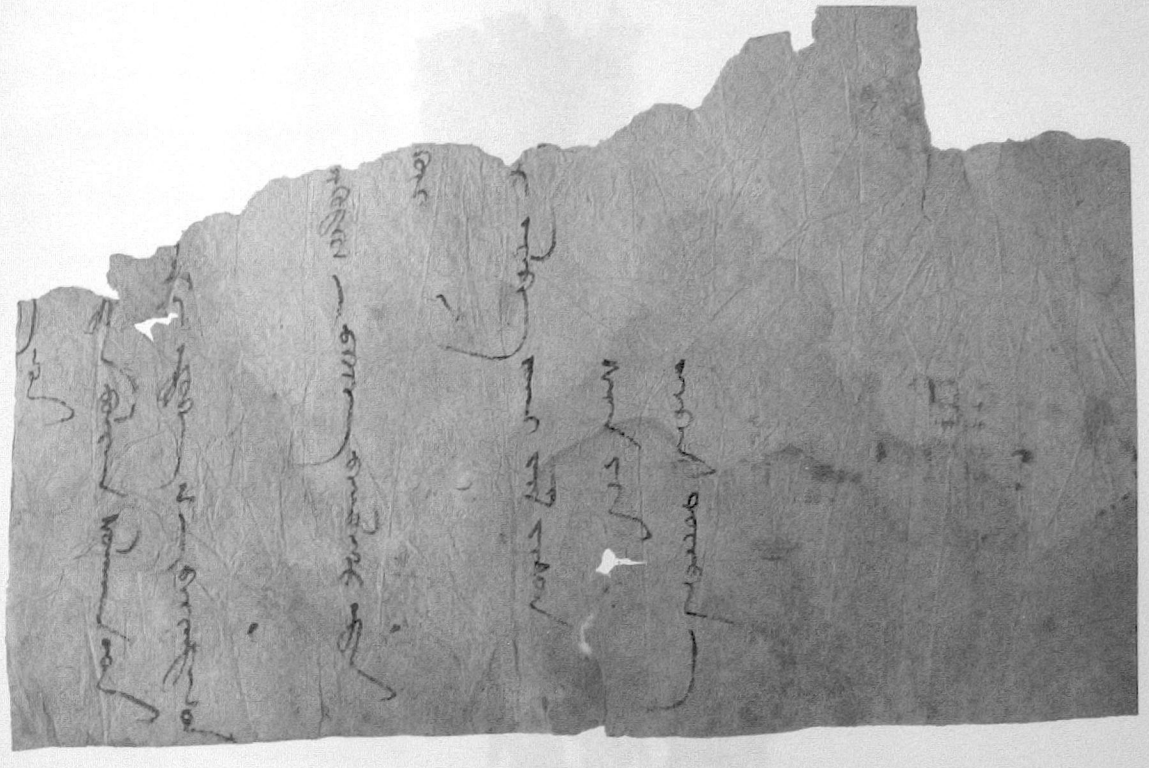
（No.023）文書番号84H・F116：W511／1683



（No.024）文書番号F116：W572



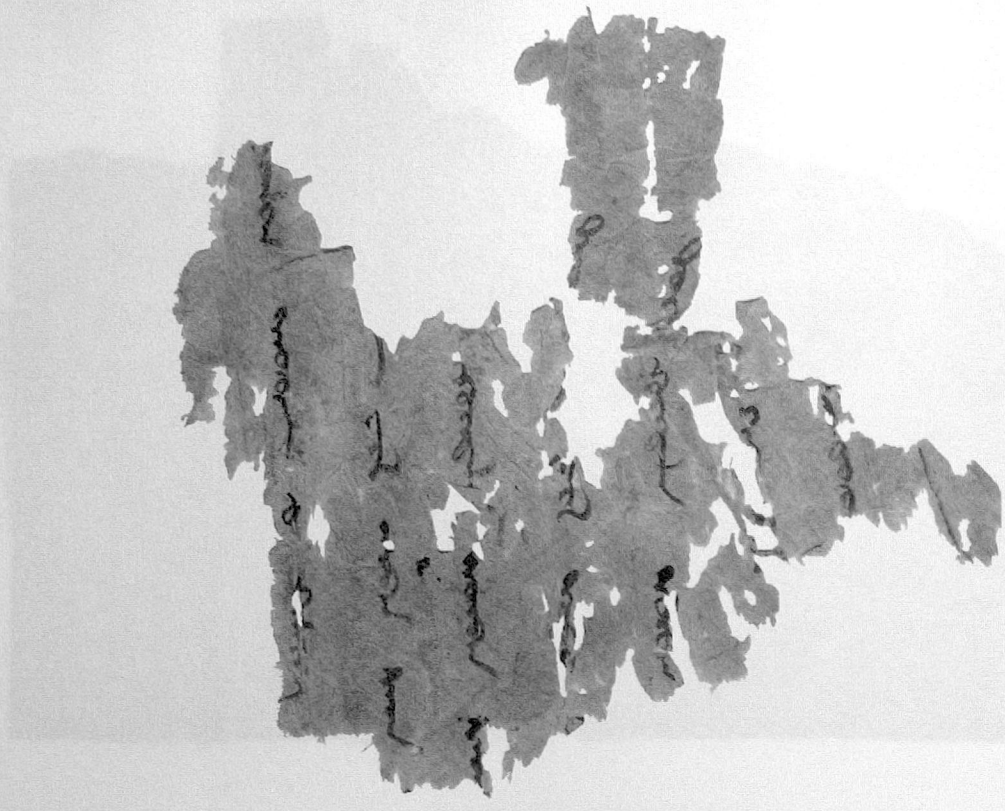
（No.025）文書番号F144：W3



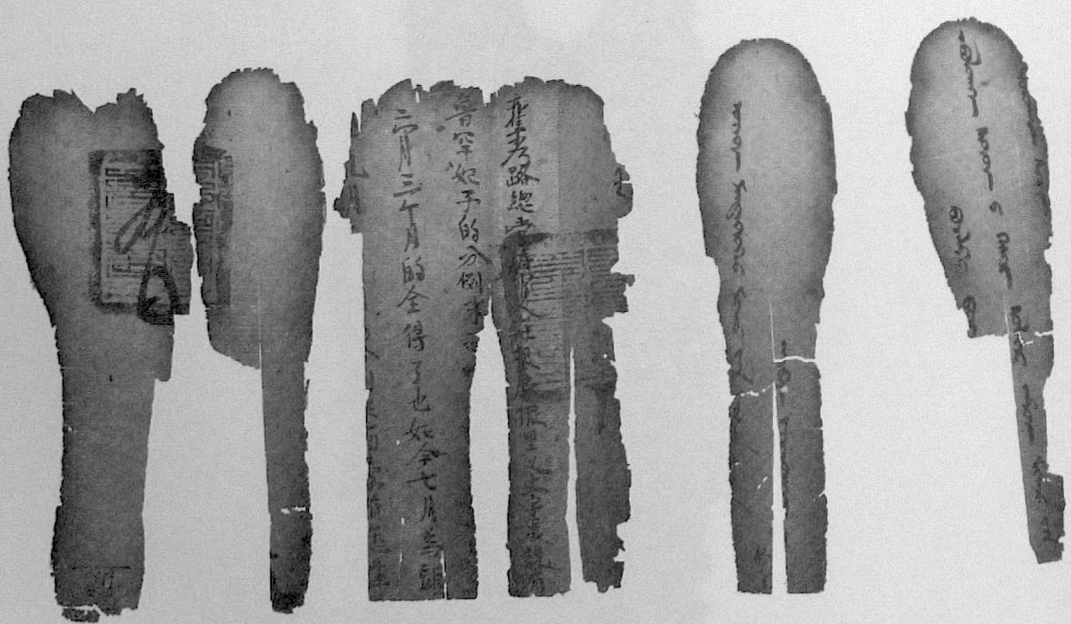
（No.026）文書番号84HF84



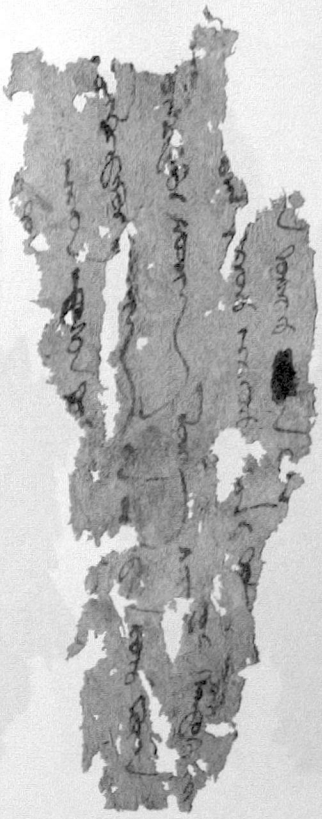
（No.027）文書番号MON04



（No.028）文書番号HF197B



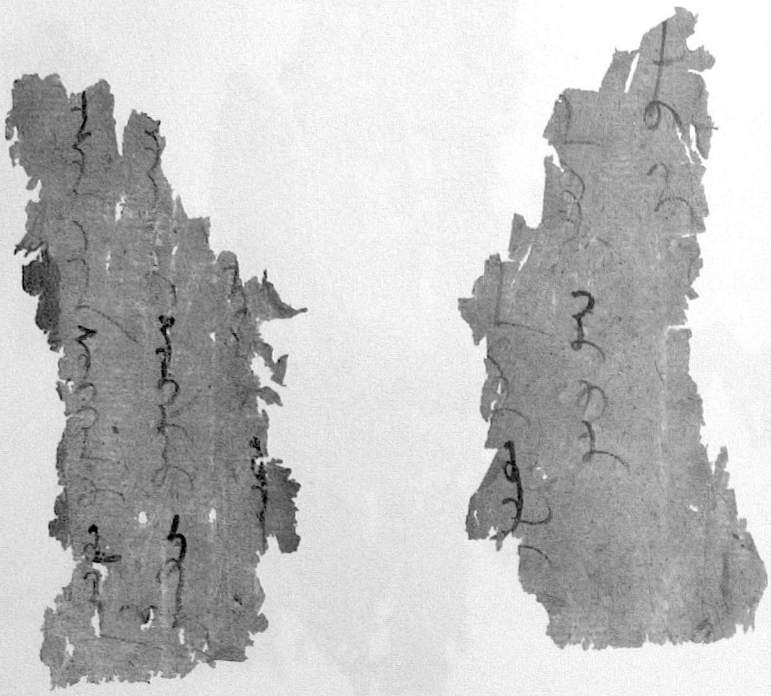
（No.029）文書番号F116：W349



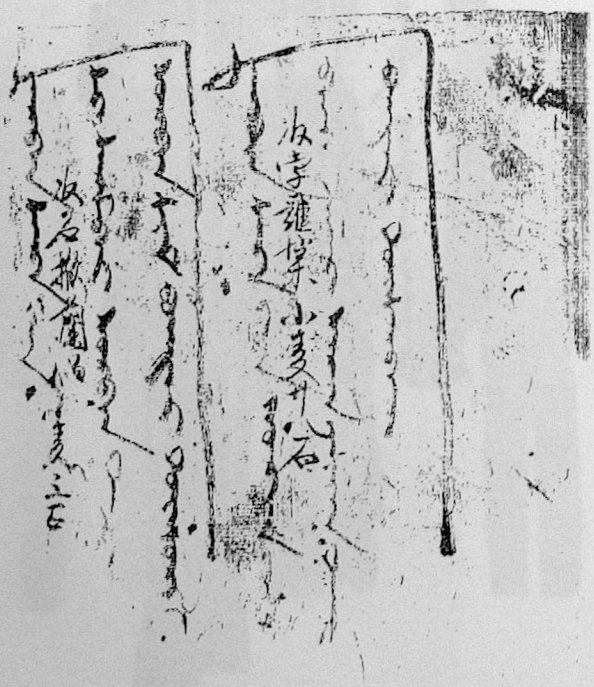
（No.030）文書番号F43：W23



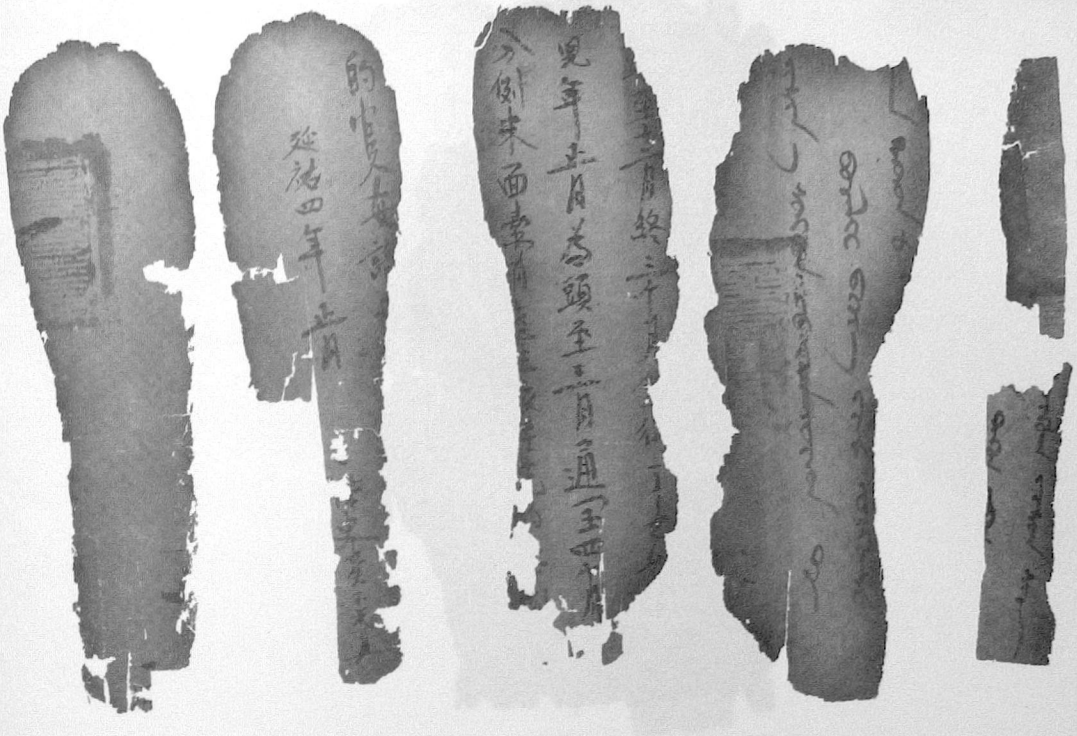
（No.031）文書番号F116：W503



（No.032）文書番号F116：W512



（No.033）文書番号F214：W1



（No.034）文書番号F116：W62



（No.035）文書番号F209：W67



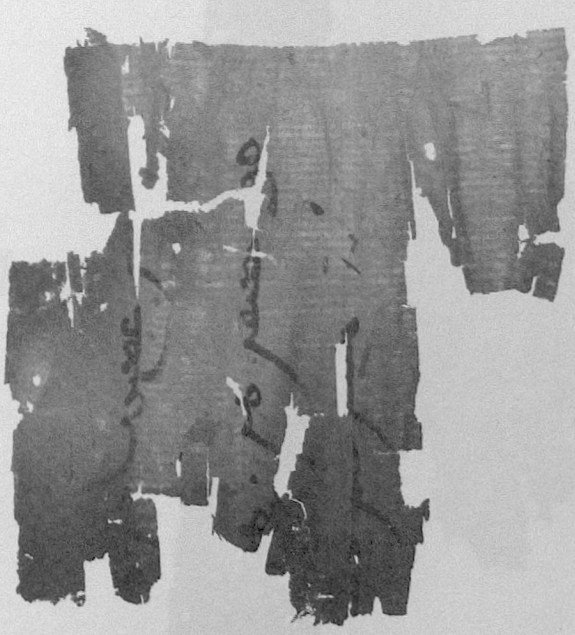
（No.036）文書番号F111：W2



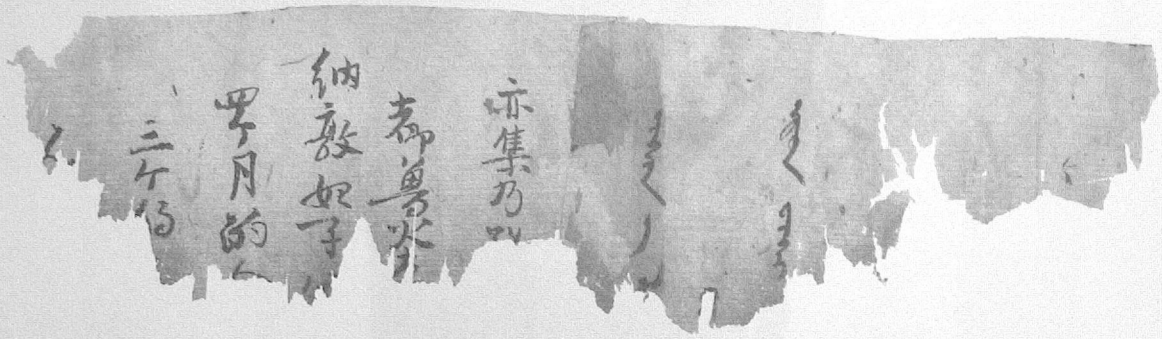
（No.037）文書番号F116：W92



（No.038）文書番号F116：W29



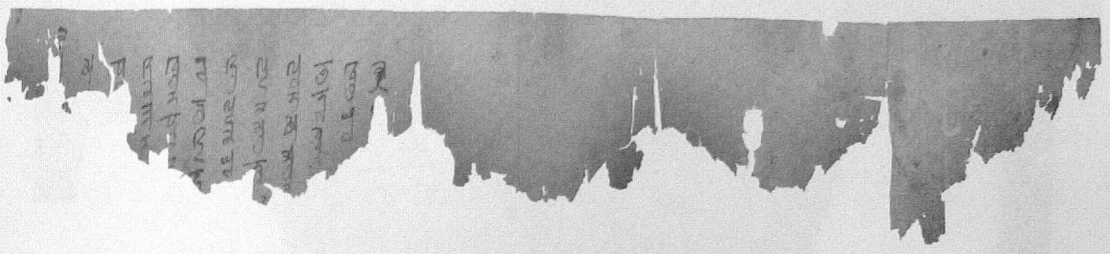
（No.039）文書番号F116：W213



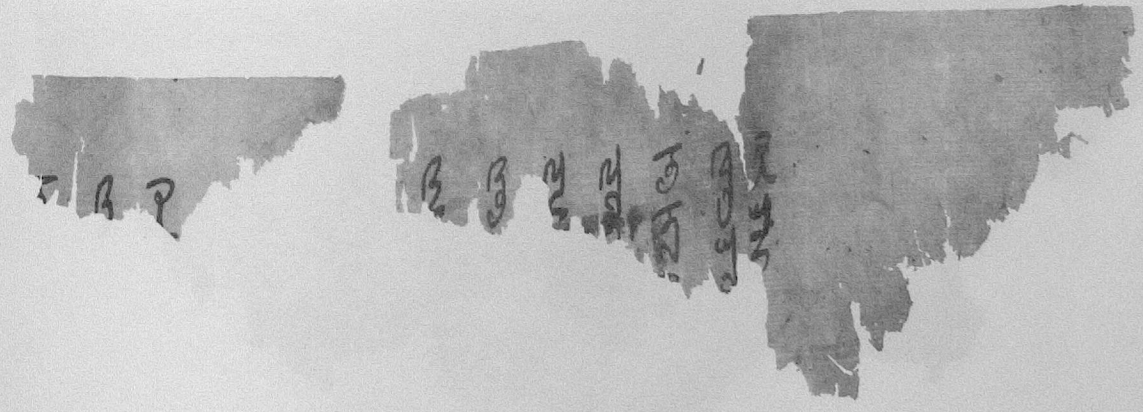
（No.040）文書番号F116：W454



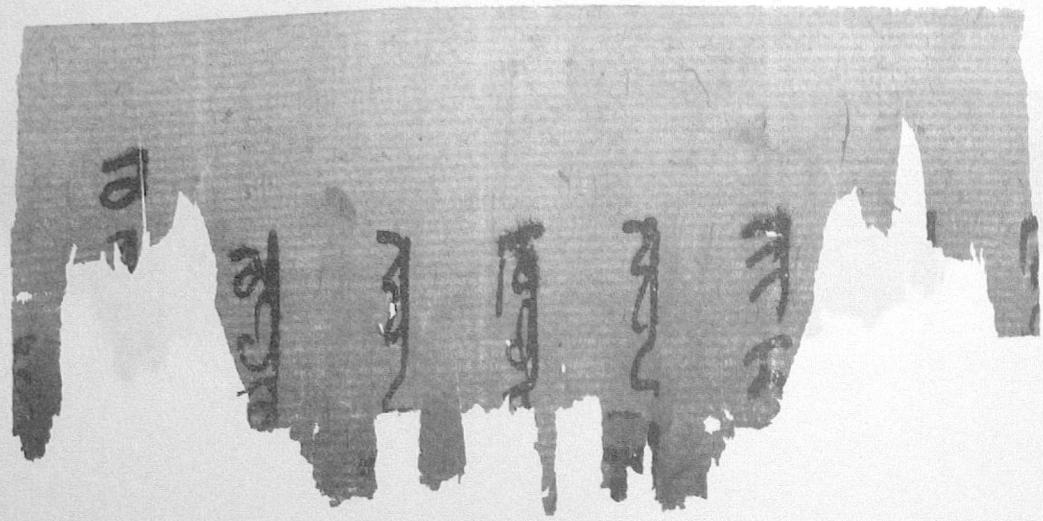
（No.041）文書番号84HFA205



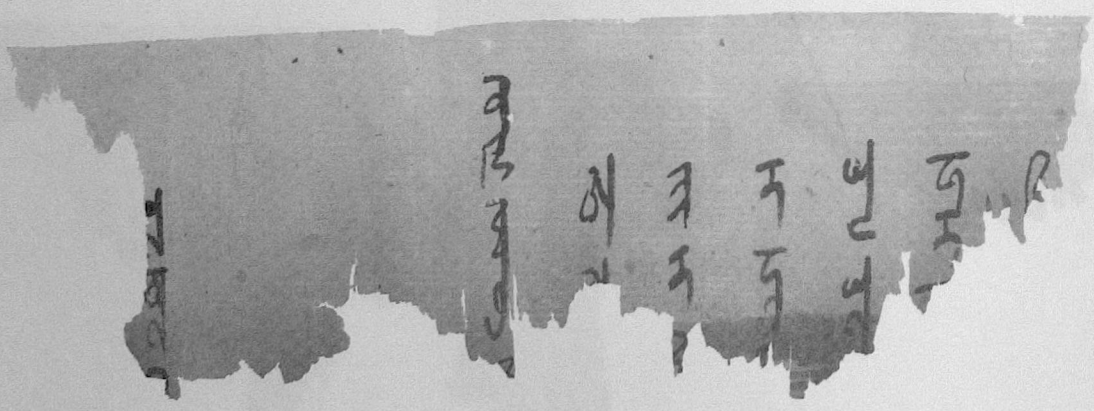
（No.042）文書番号84H・F116：W584/1758　（口絵参照）



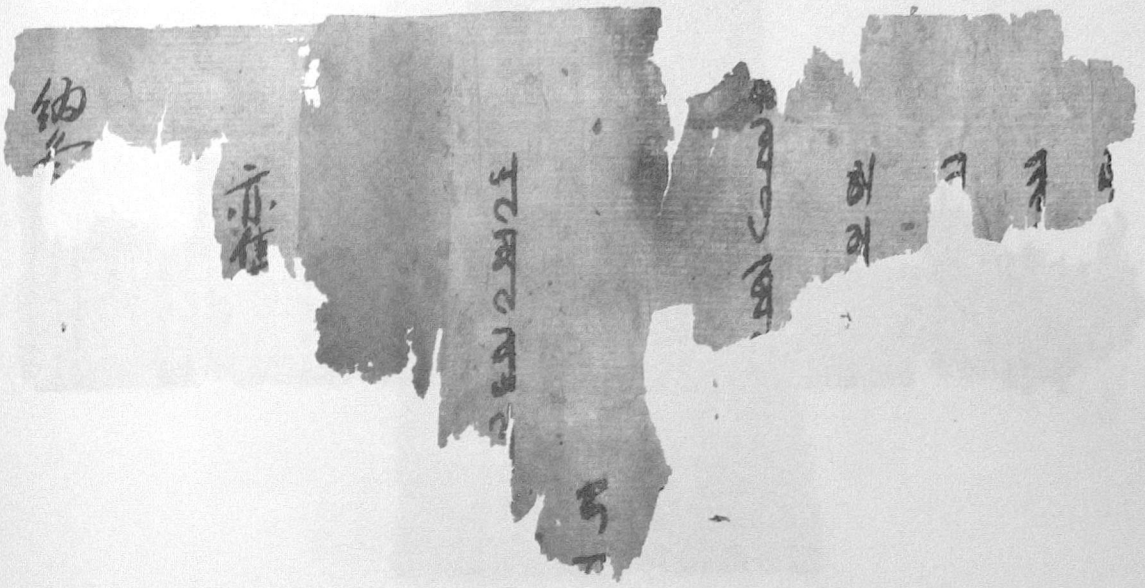
（No.043）文書番号84H・F116：W518/1690



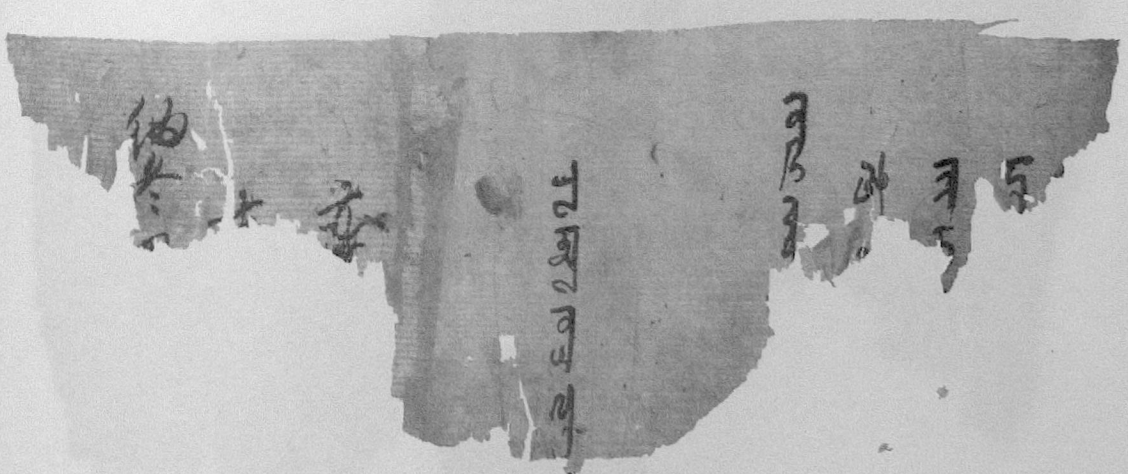
（No..044）文書番号84H・F116：W514／1686



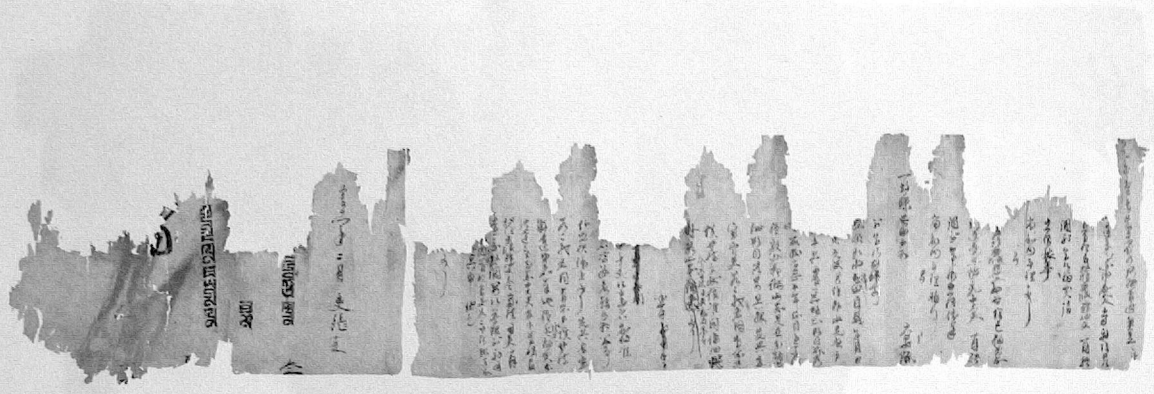
（No.045）文書番号84H・F116：W510/1682



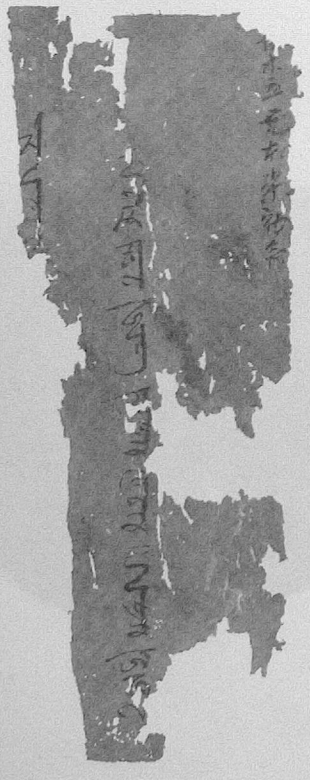
（No.046）文書番号84H・F116：W519/1691



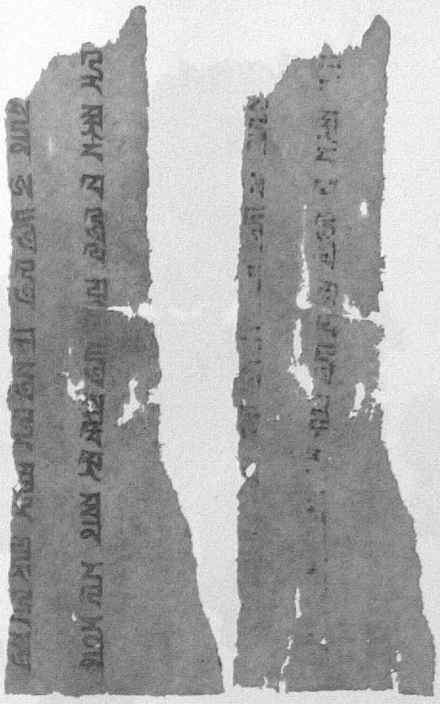
（No.047）文書番号84H・F116：W505／1677



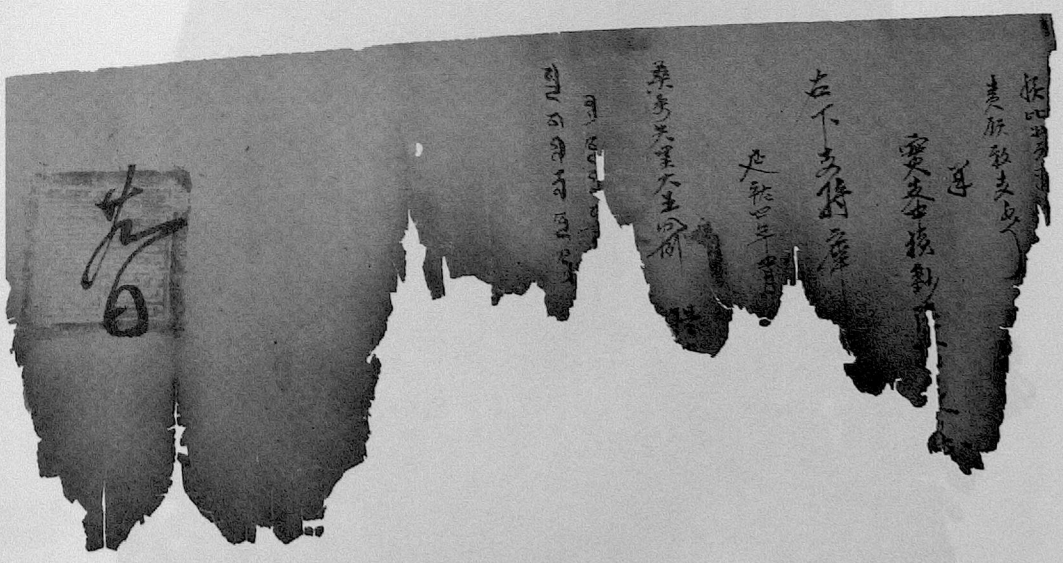
（No.048）文書番号F116：W728（W554）



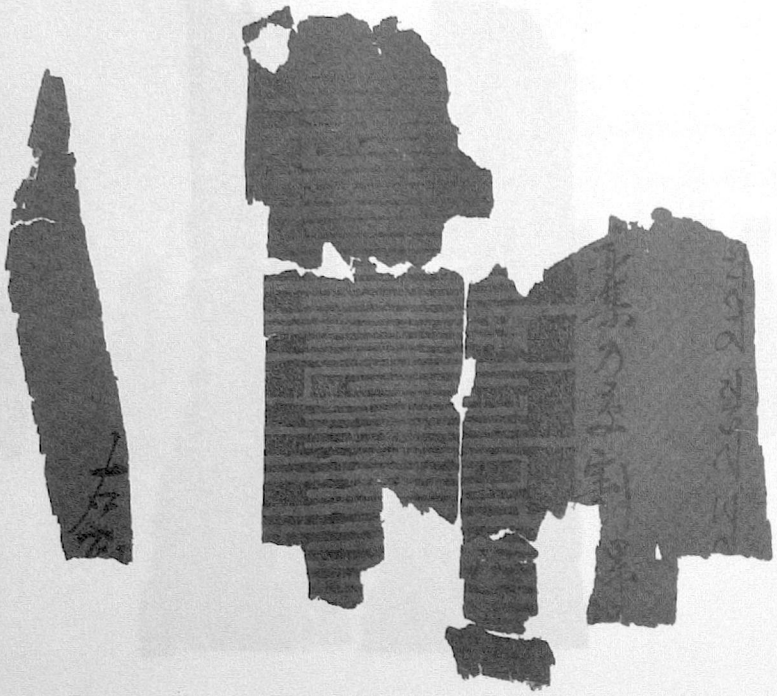
（No.049）文書番号F197：W32



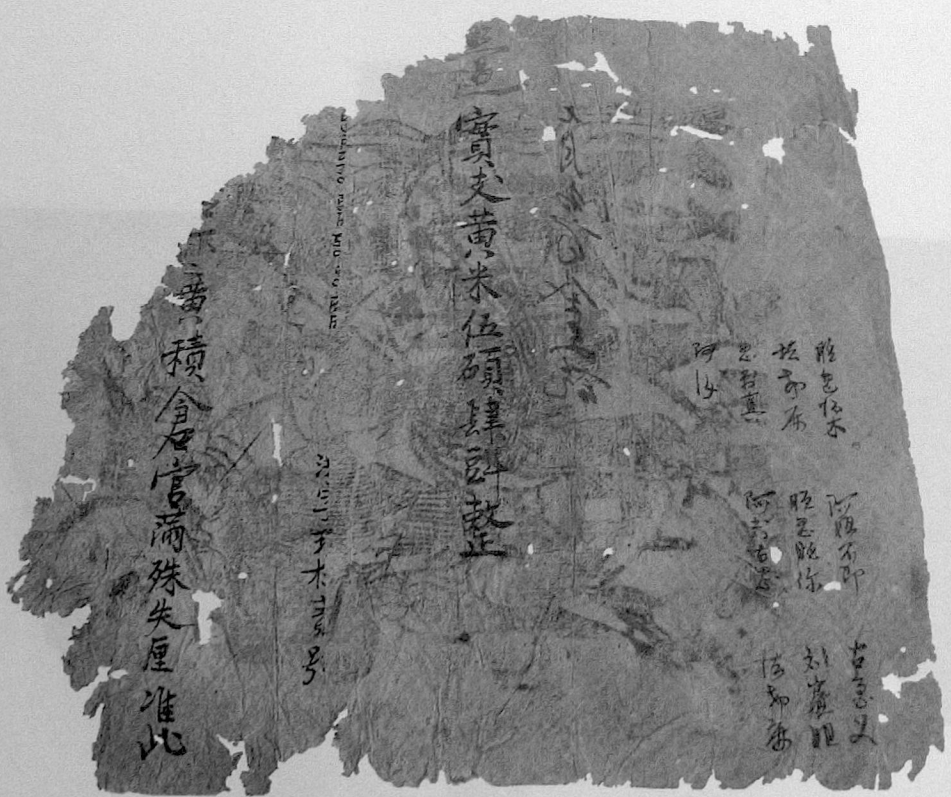
（No.050）文書番号F210：W24



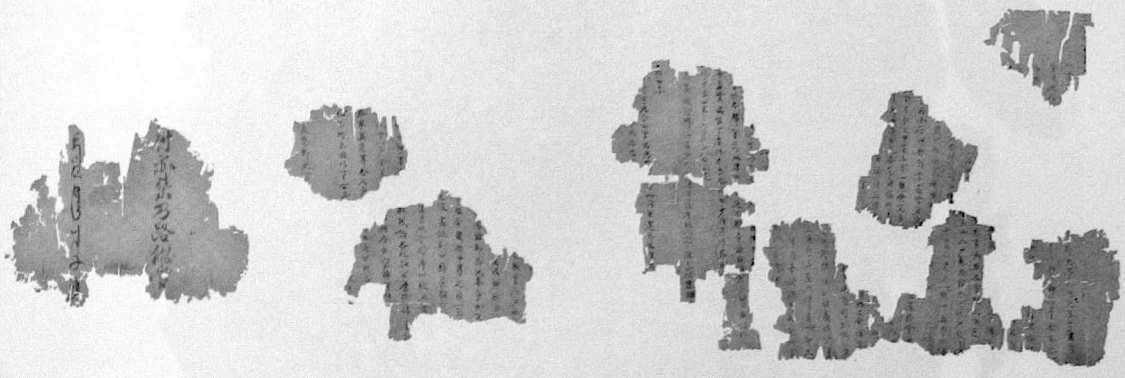
（No.051）文書番号MON05



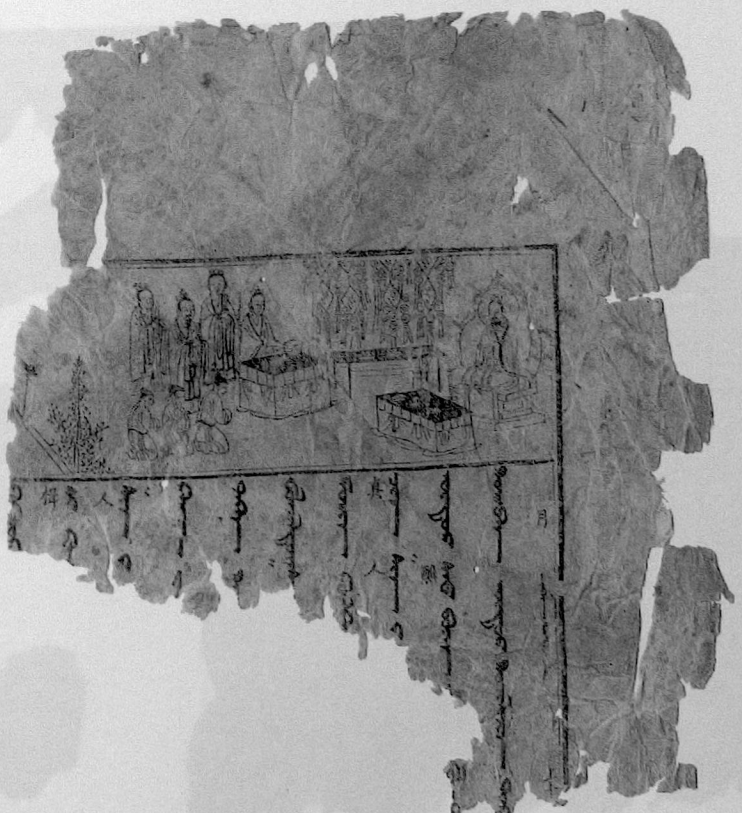
（No.052）文書番号F116：W169



（No.053）文書番号MON07



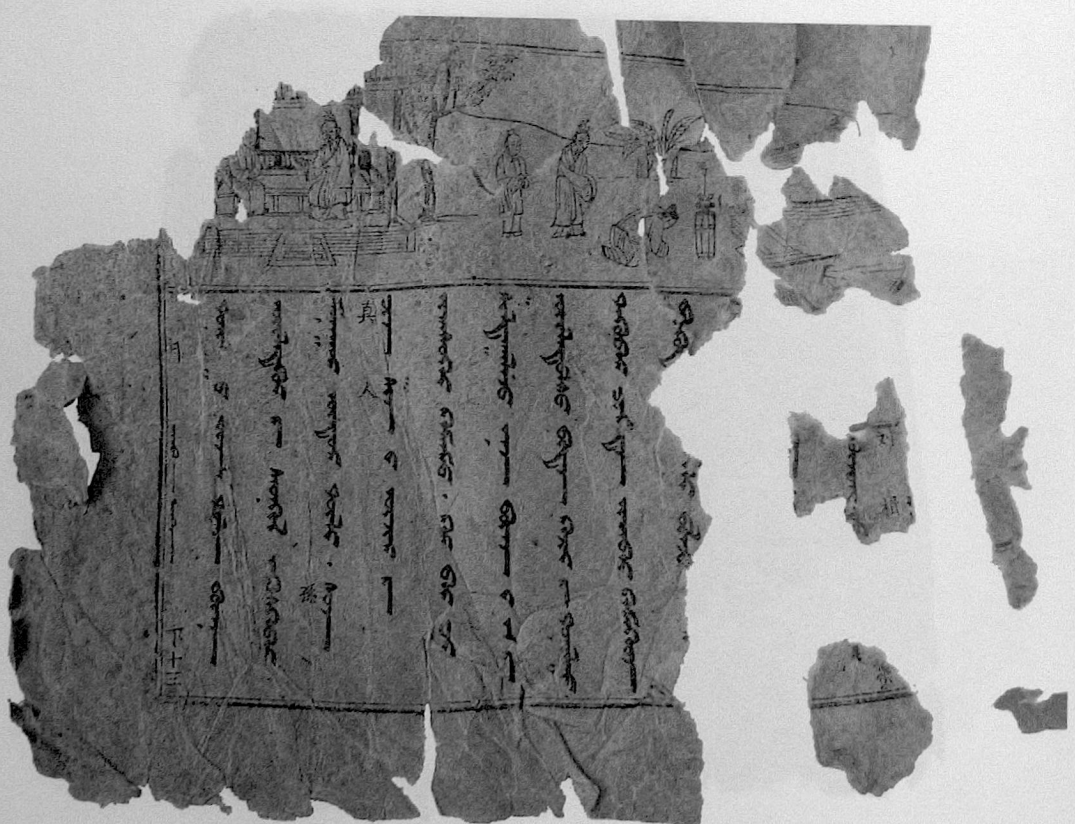
（No.054）文書番号MON08



（No.055）文書番号HF125a



（No.056）文書番号HF125b



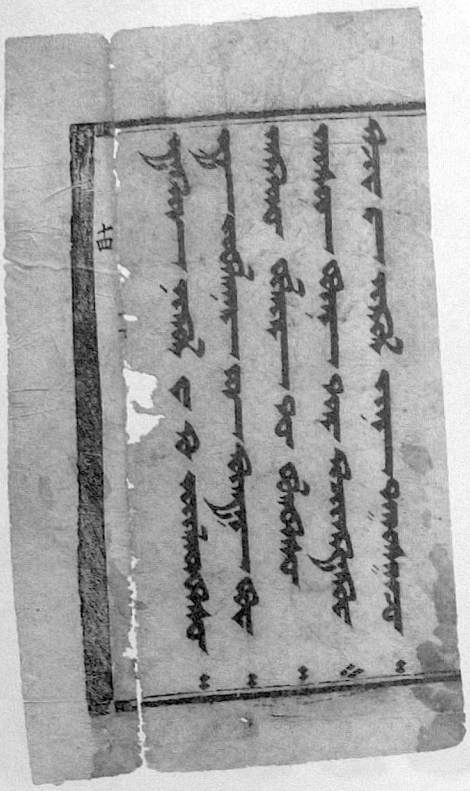
（No.057）文書番号HF125c　（口絵参照）



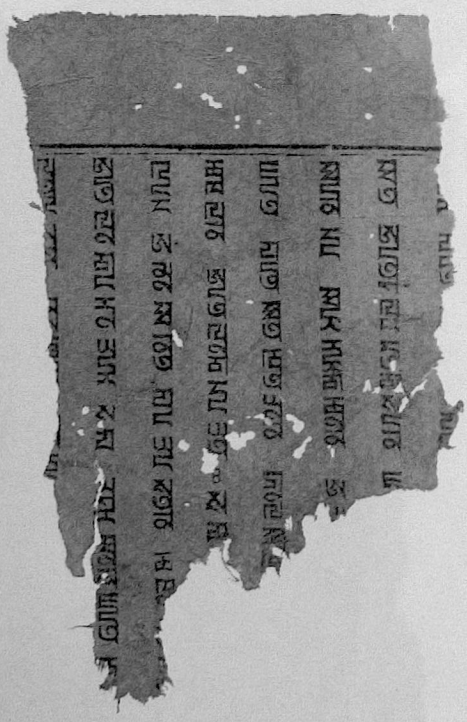
（No.058）文書番号HF125d



（No.059）文書番号F20：W64



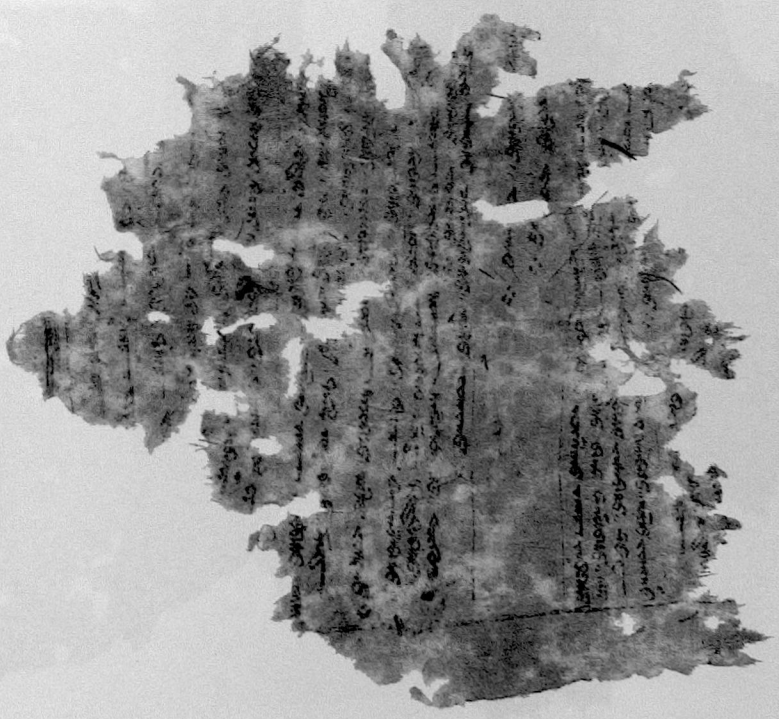
（No.060）文書番号F210：W23



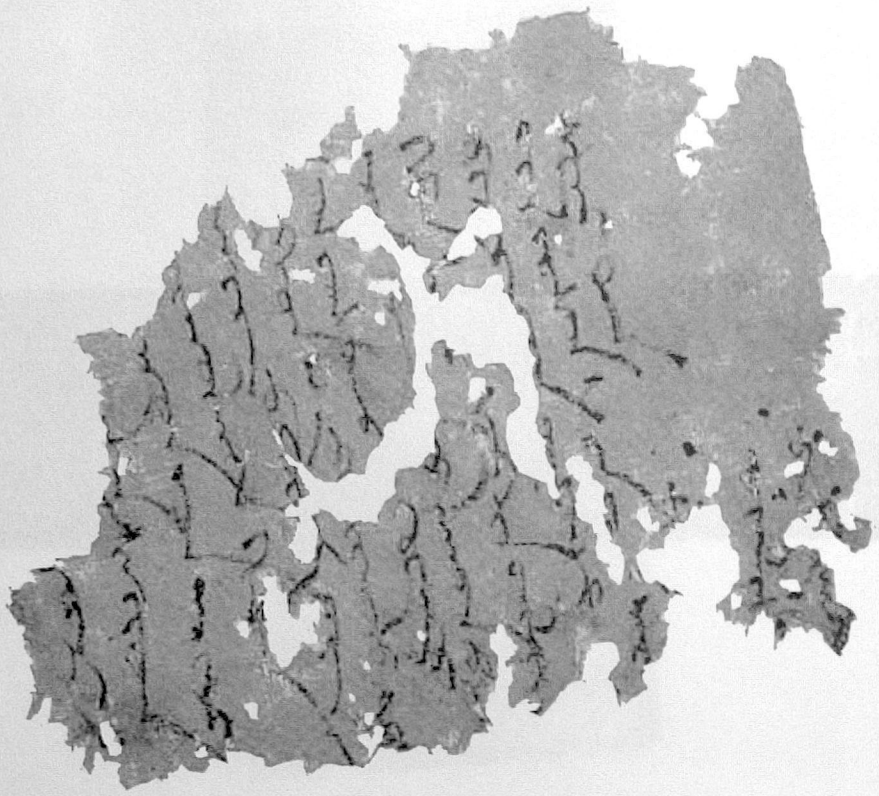
（No.061）文書番号F155：W11



（No.062）文書番号F9：W57　（口絵参照）



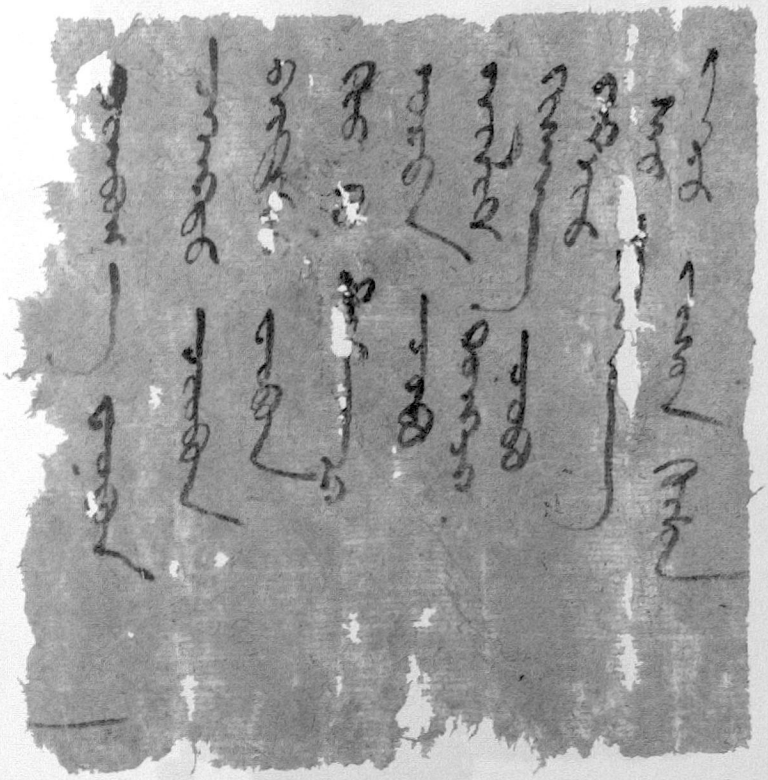
（No.063）文書番号F192：W1



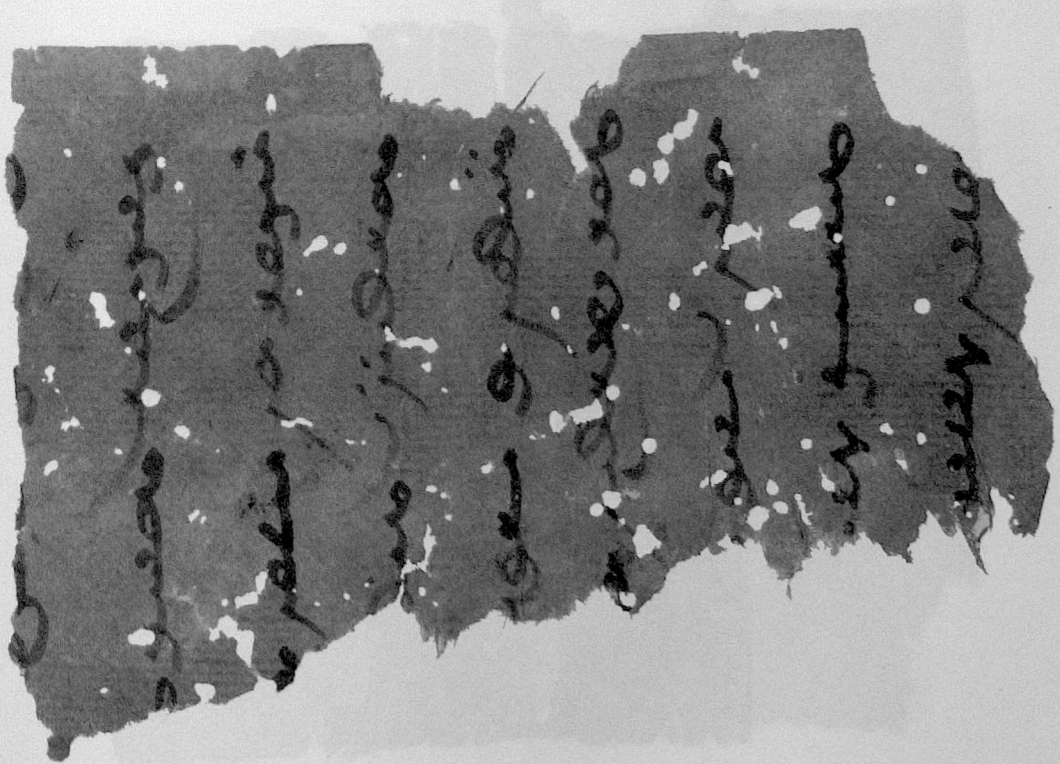
（No.064）文書番号F234：W1



（No.065）文書番号F42：W3



（No.066）文書番号F245：W5



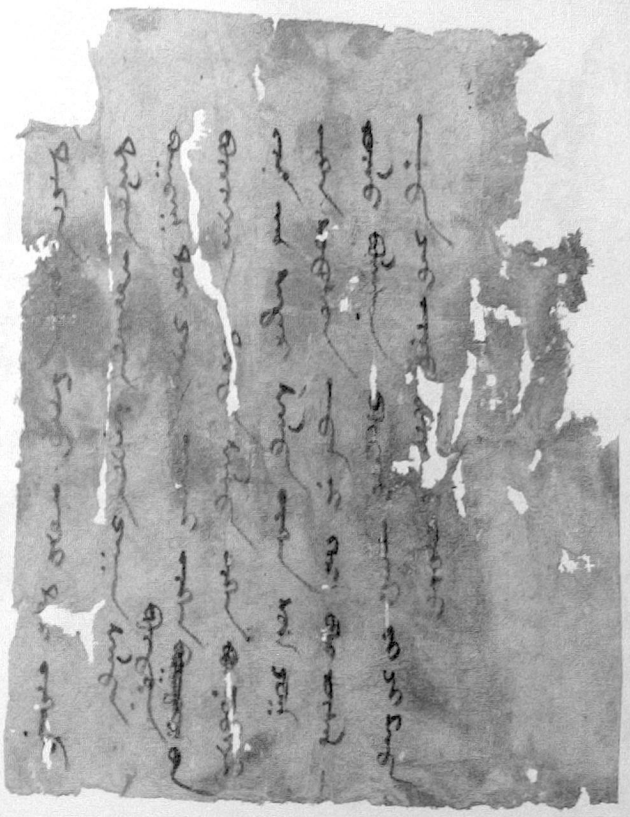
（No.067）文書番号F144：W4



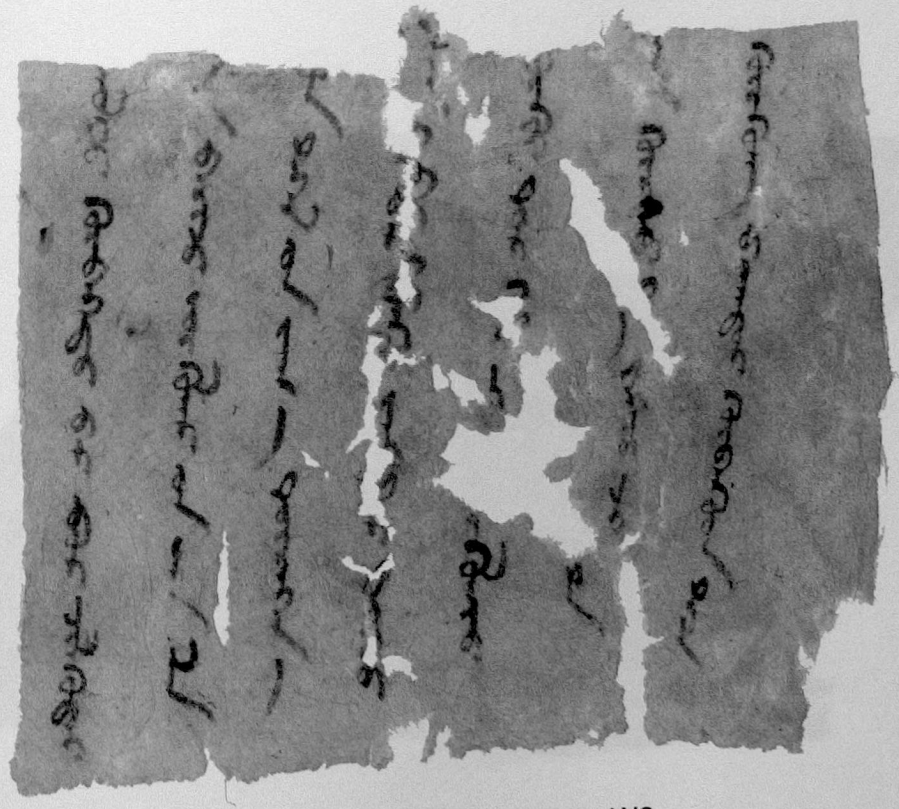
（No.068）文書番号F42：W1



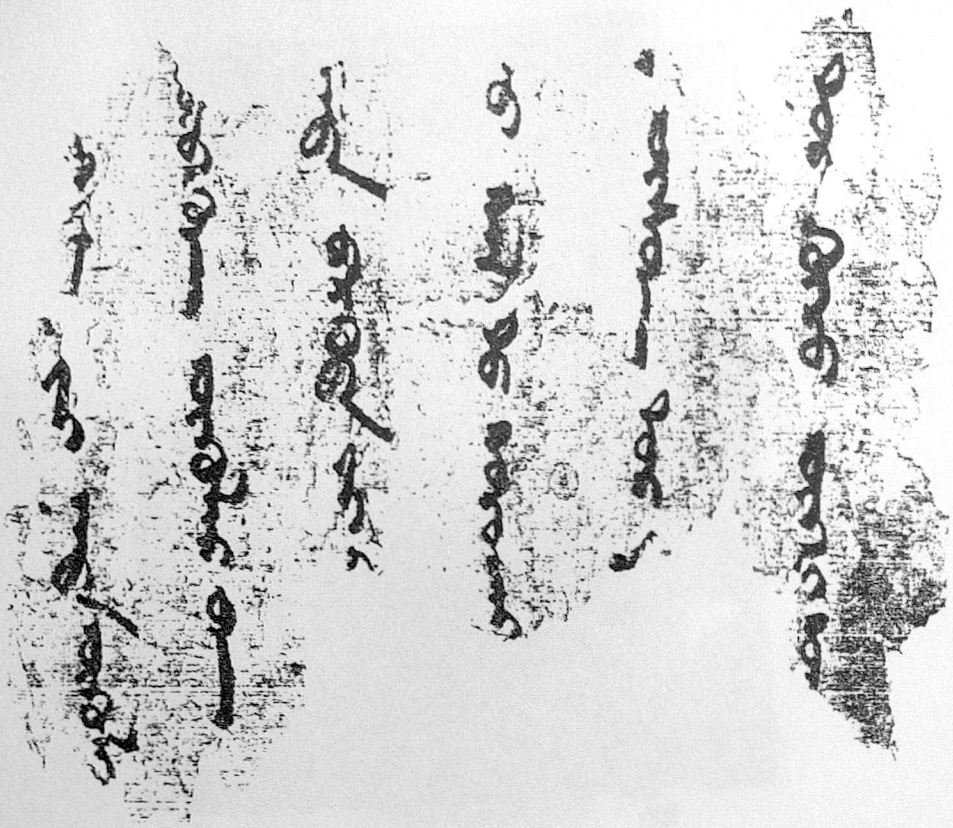
（No.069）文書番号F41：W11



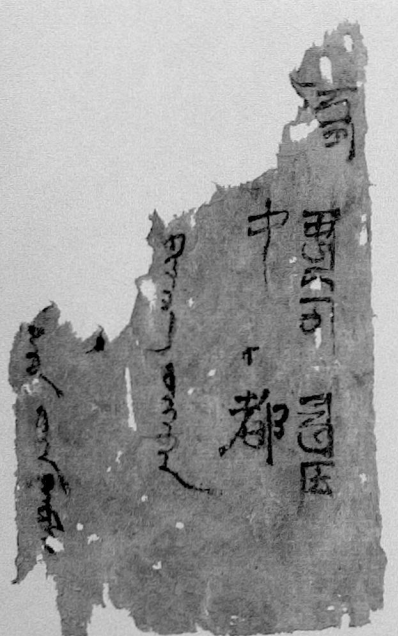
（No.070）文書番号Y1：W119



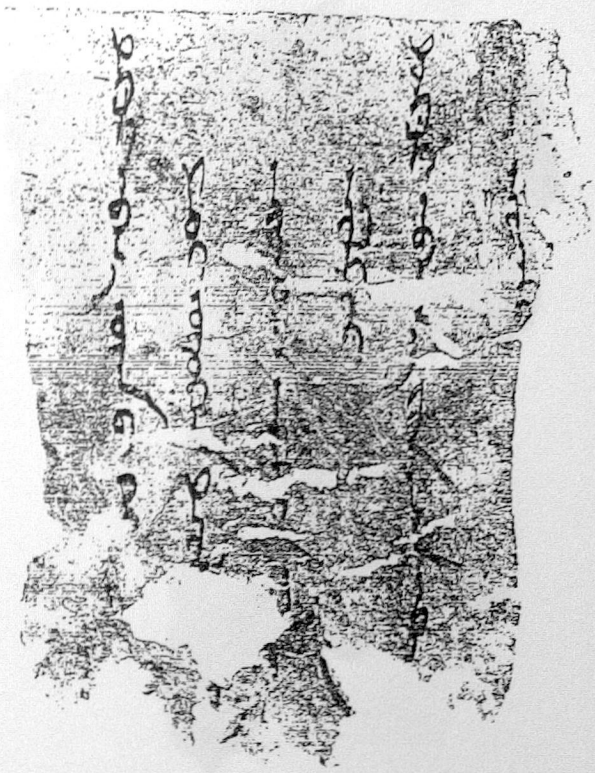
（No.071）文書番号F116：W2



（No.072）文書番号MON06



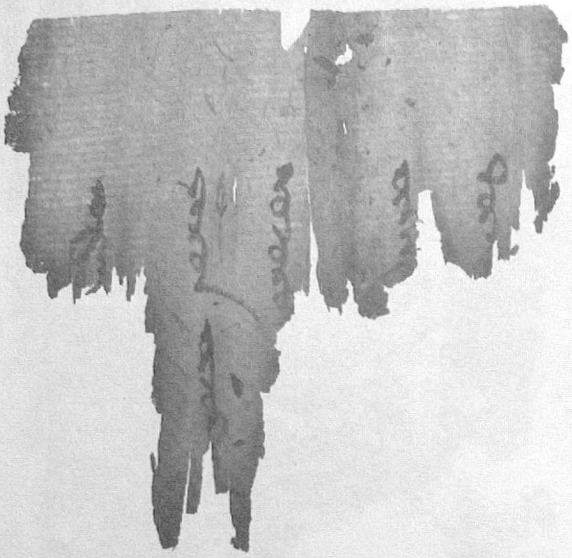
（No.073）文書番号F14：W15



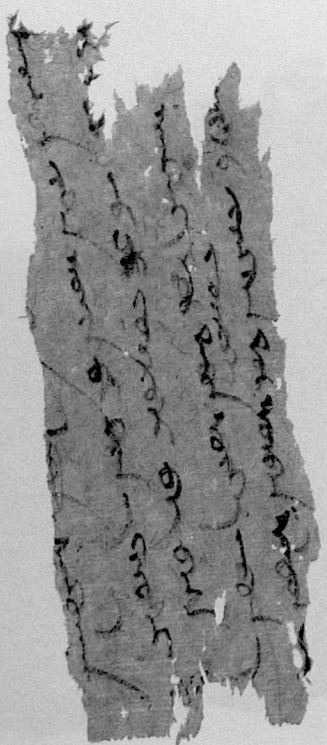
（No.074）文書番号F21：W28



（No.075）文書番号F21：W27



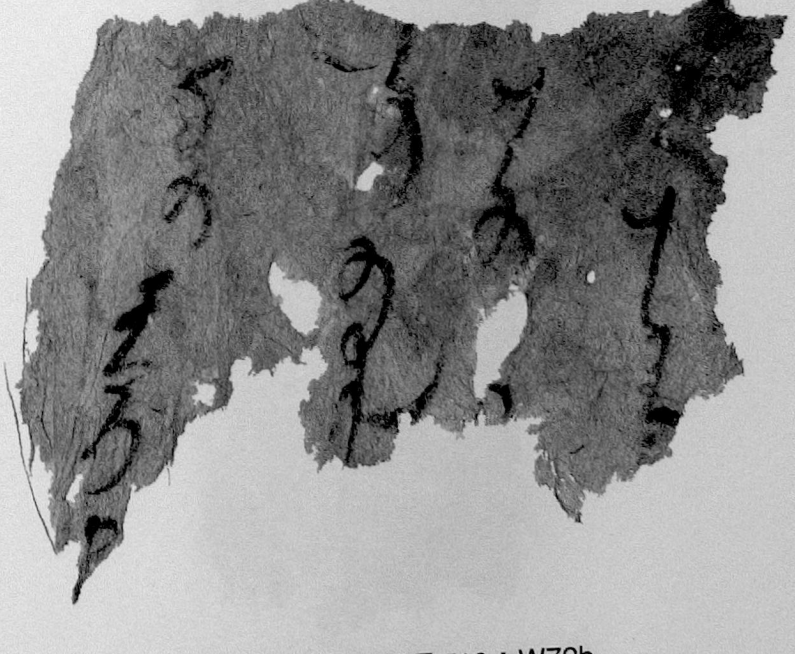
（No.076）文書番号84H・F116：W212／1384



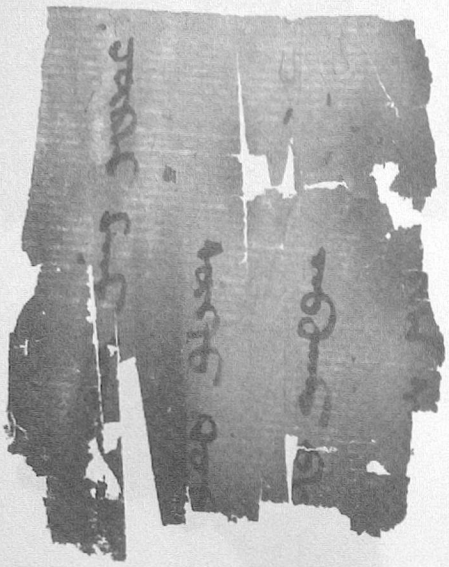
（No.077）文書番号F211：W2



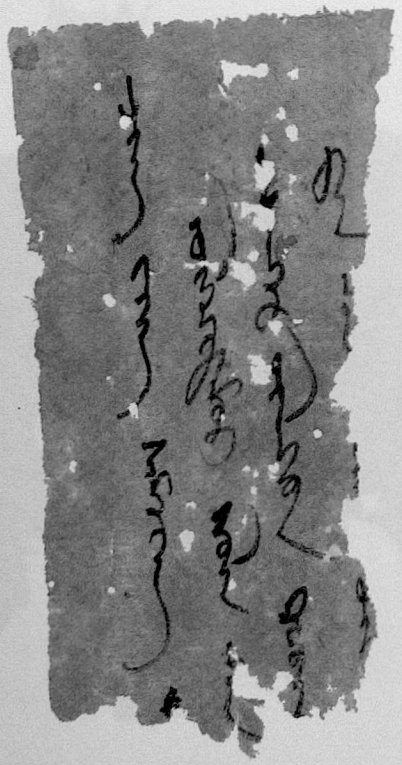
（No.078）文書番号F19：W72a



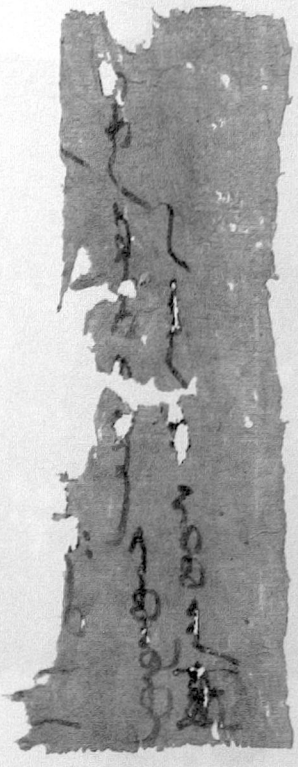
（No.079）文書番号F19：W72b



（No.080）文書番号84H・F116：W507／1679



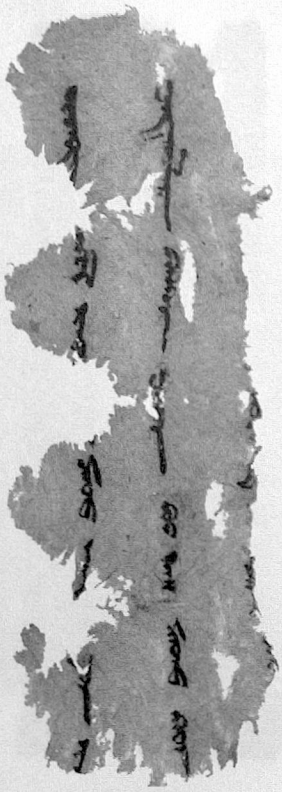
（No.081）文書番号F197：W30



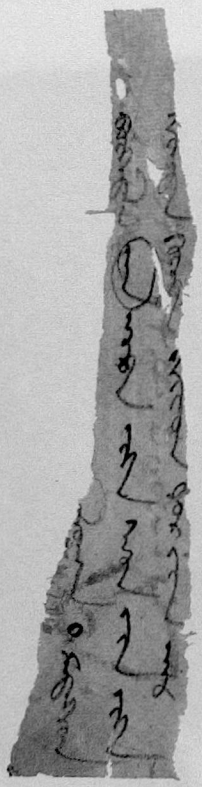
（No.082）文書番号F41：W10



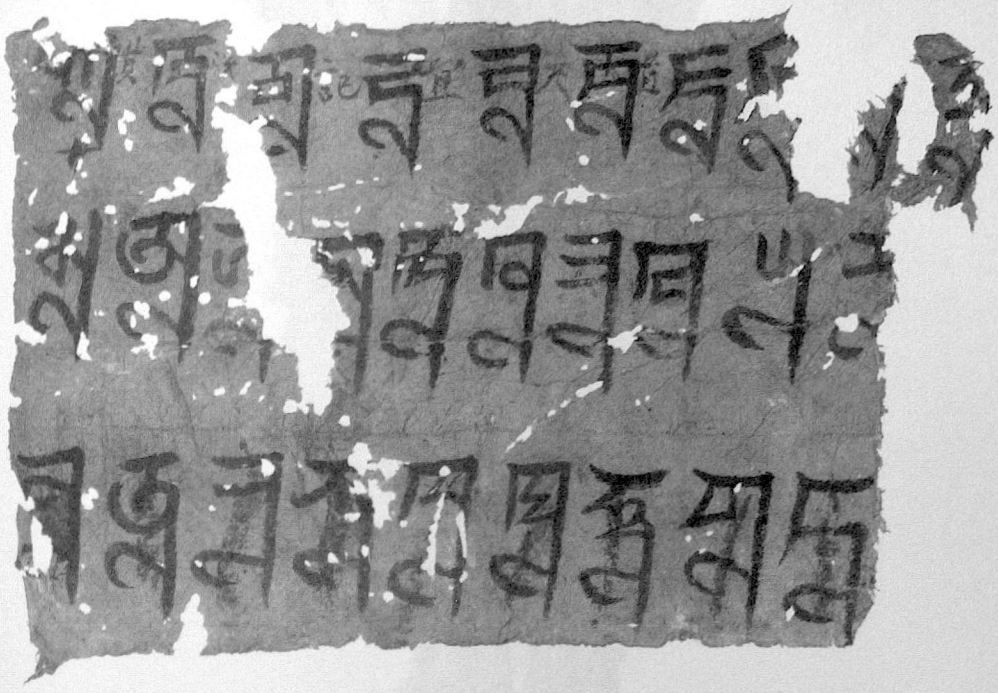
（No.083）文書番号F111：W1



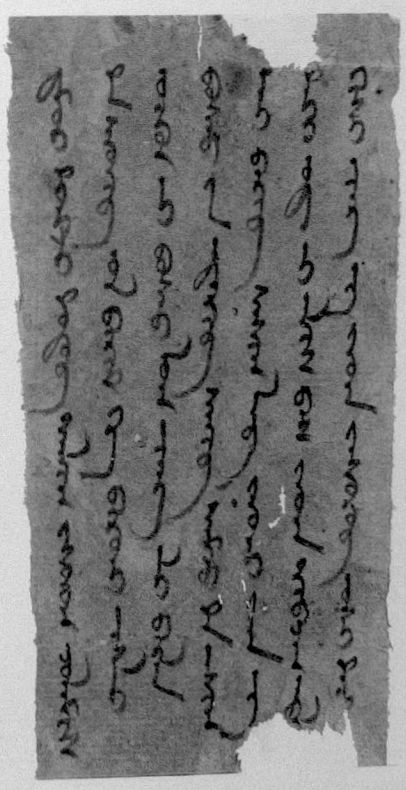
（No.084）文書番号F137：W1



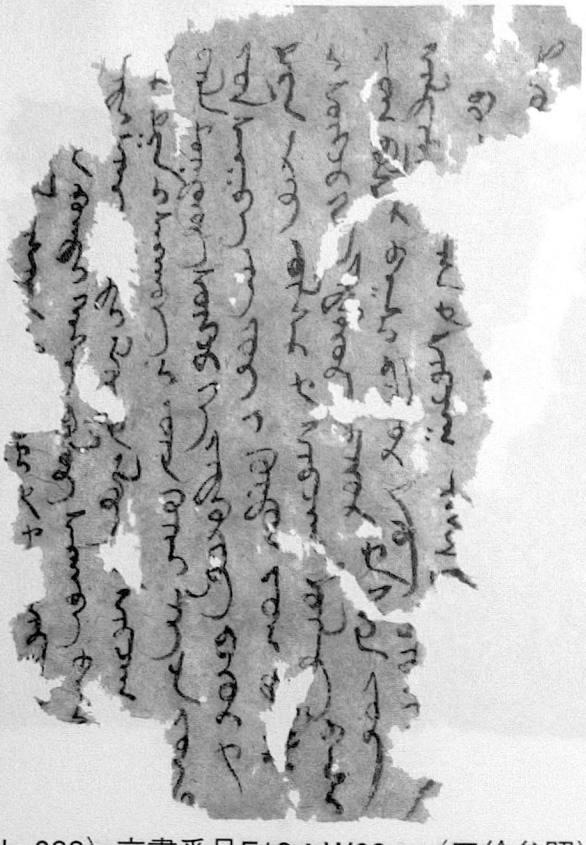
（No.085）文書番号Y1：W101



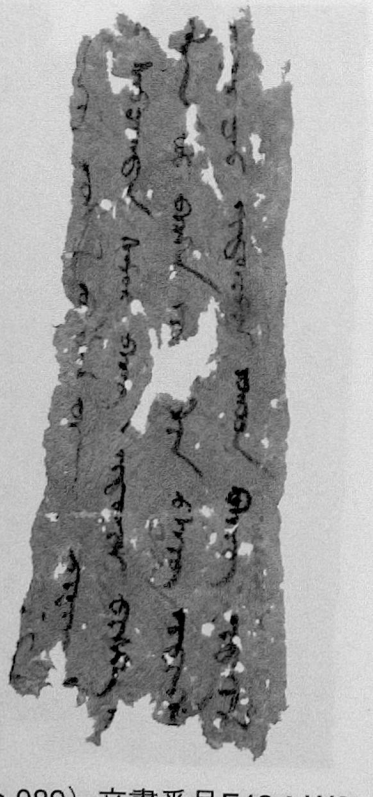
（No.086）文書番号Y1：W2



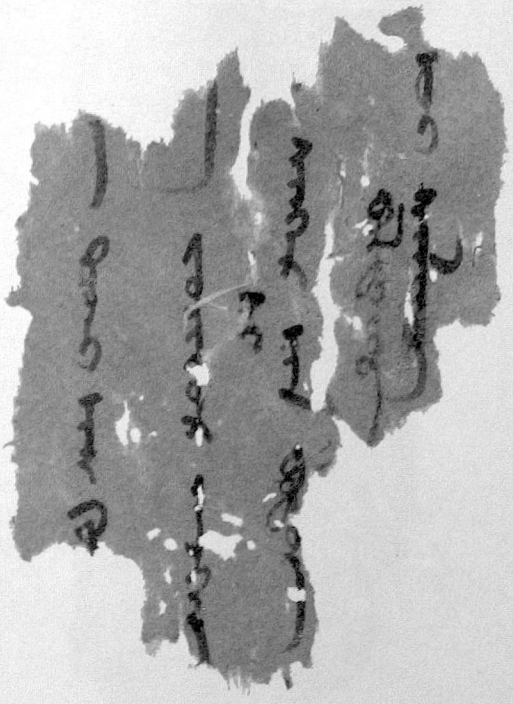
（No.087）文書番号F13：W66



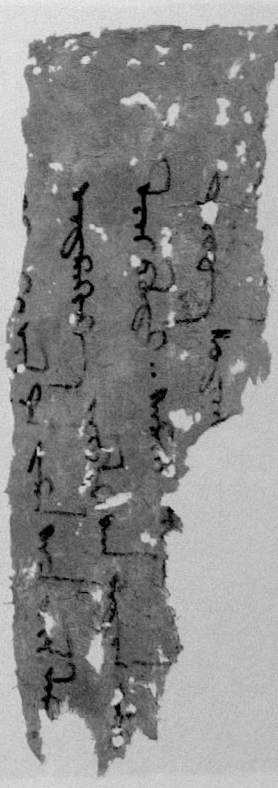
（No.088）文書番号F13：W68　（口絵参照）



（No.089）文書番号F42：W2



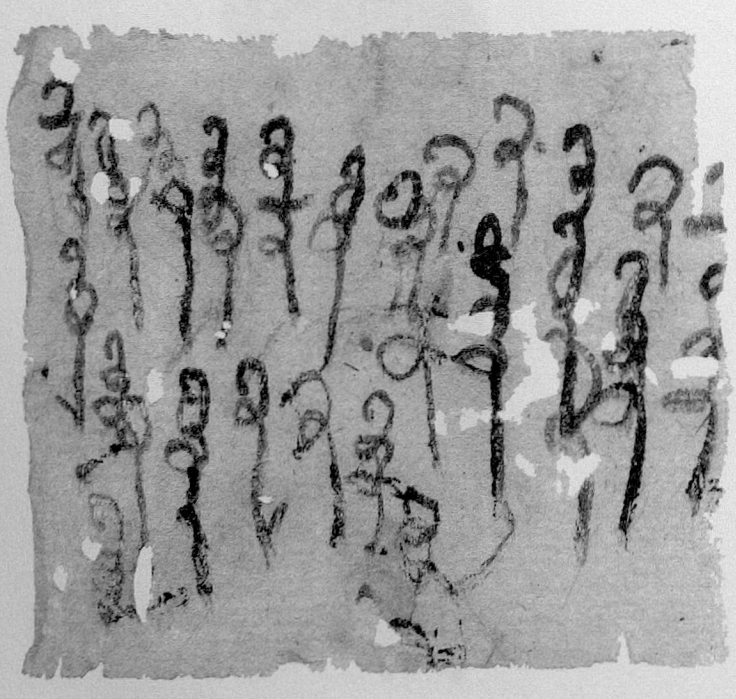
（No.090）文書番号F64：W1



（No.091）文書番号F21：W32



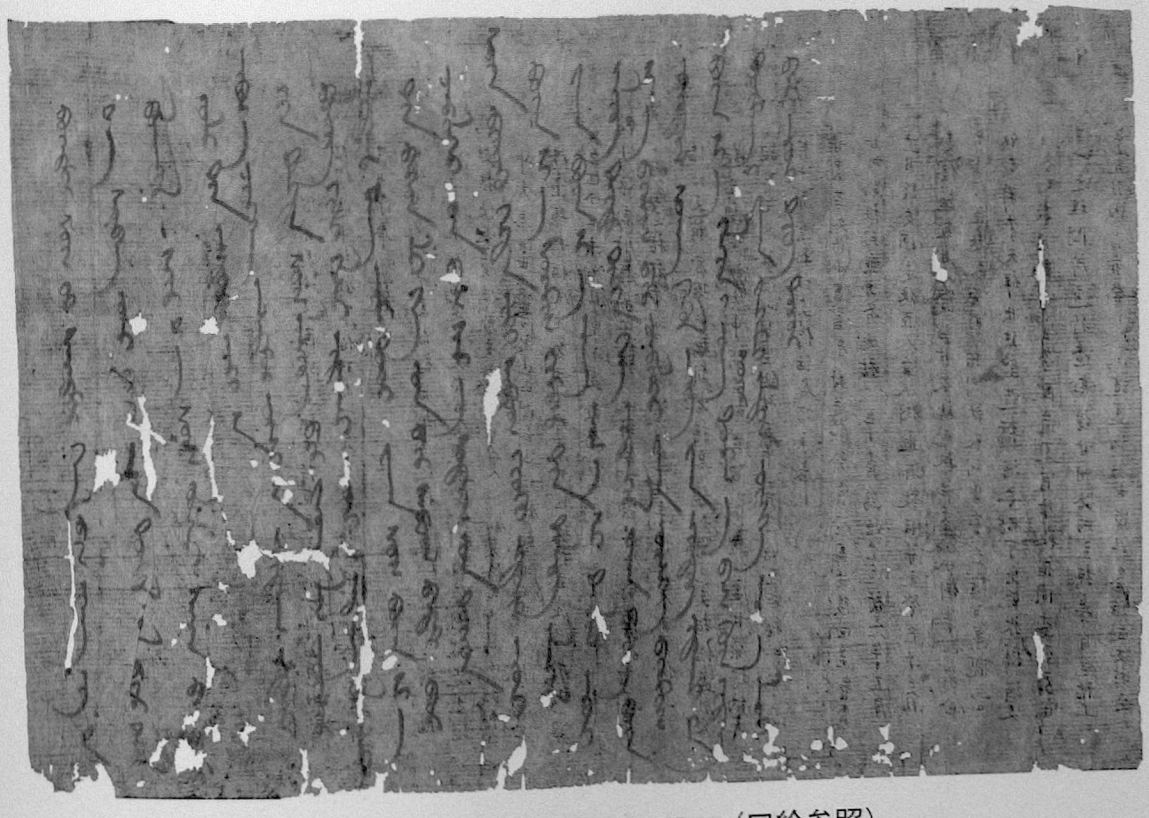
（No.092）文書番号F277：W56



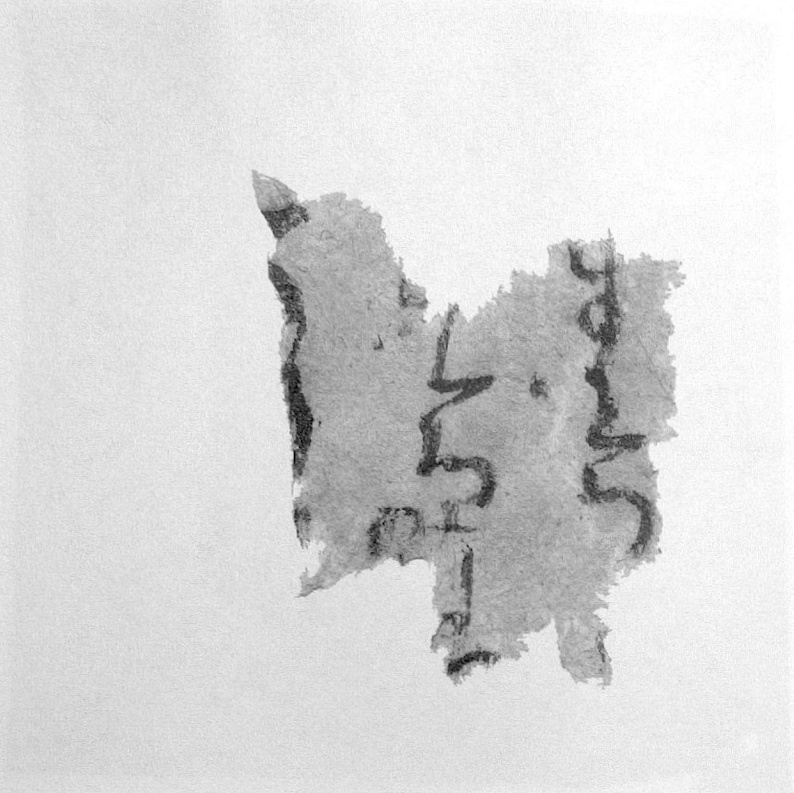
（No.093）文書番号F124：W22



（No.094）文書番号F9：W5



（No.095）文書番号F9：W105　（口絵参照）



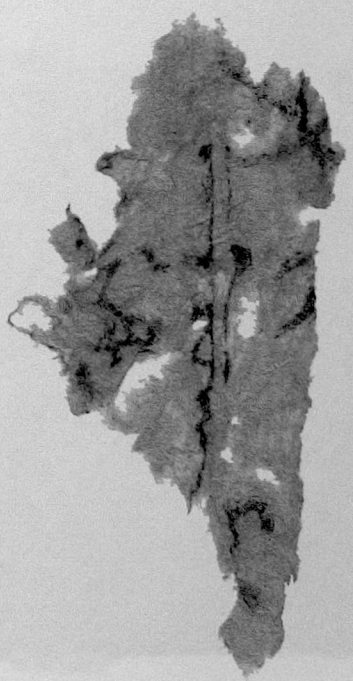
（No.096）文書番号F13：W65



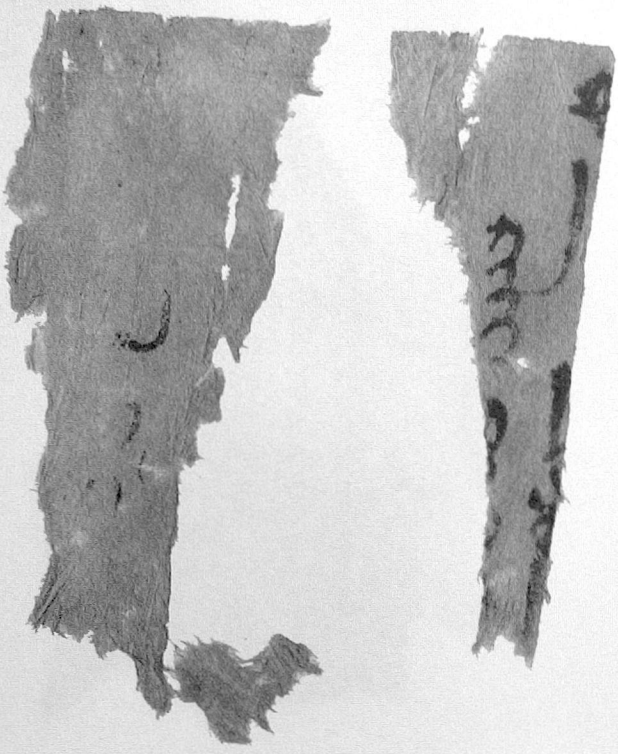
（No.097）文書番号F13：W67



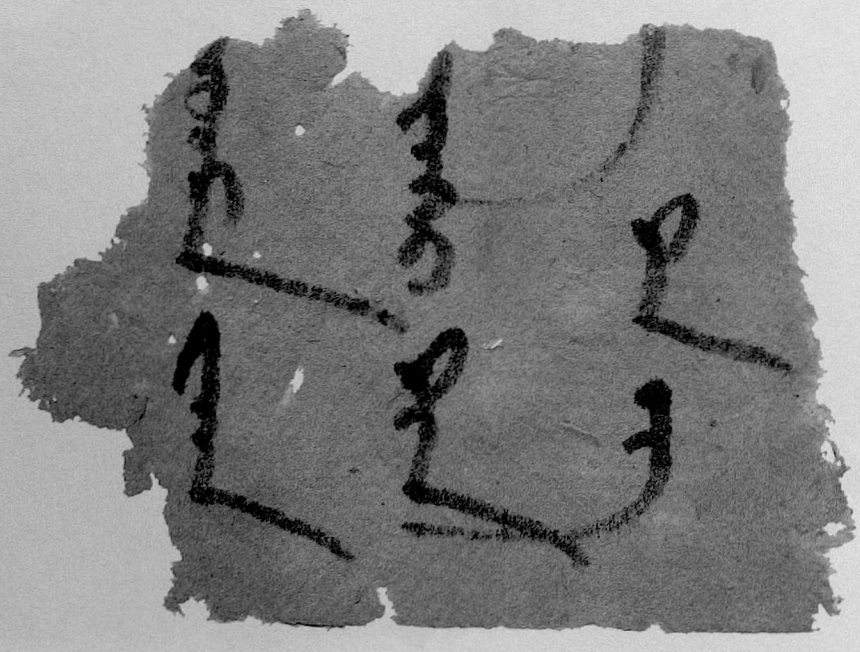
（No.098）文書番号F146：W1



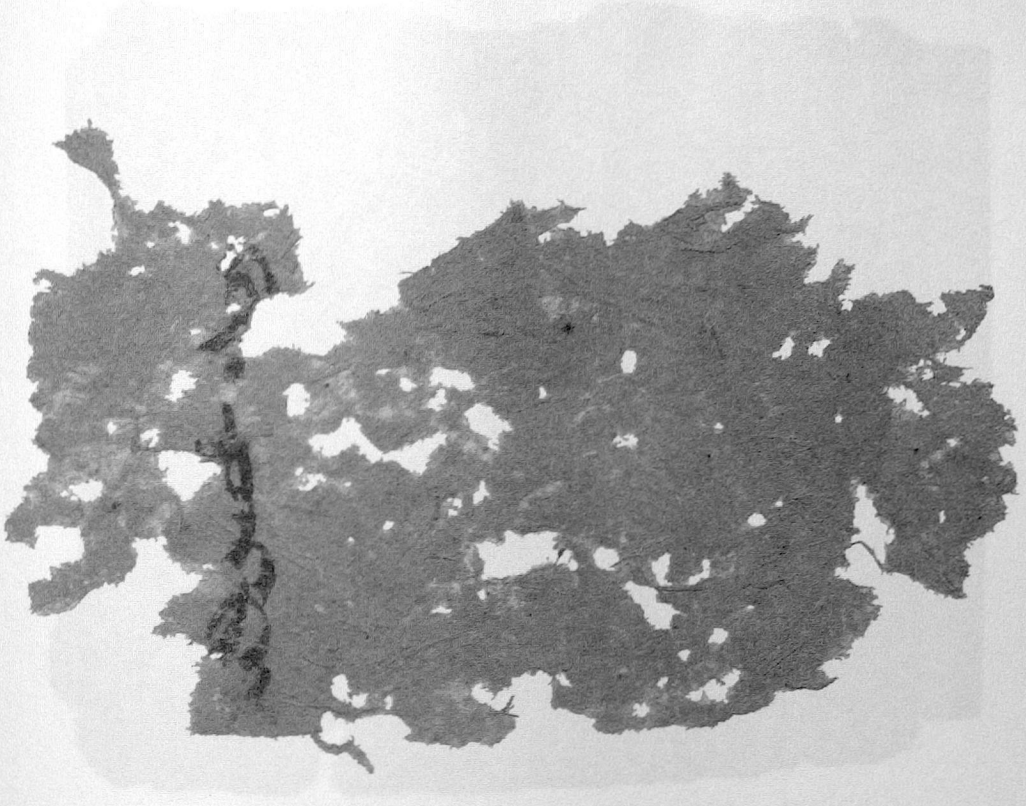
（No.099）文書番号F155：W6



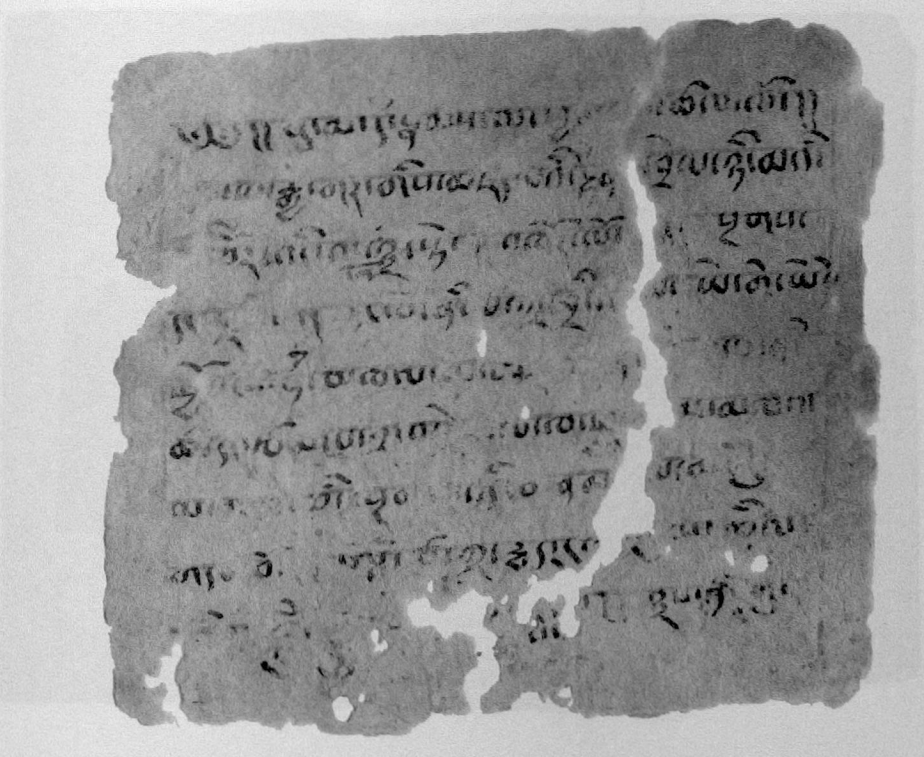
（No.100）文書番号F217：W1



（No.101）文書番号F224：W1



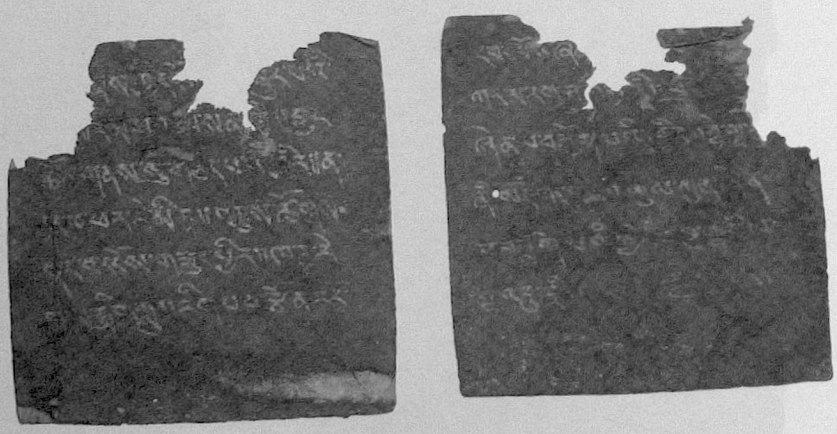
（No.102）文書番号Y1：W49



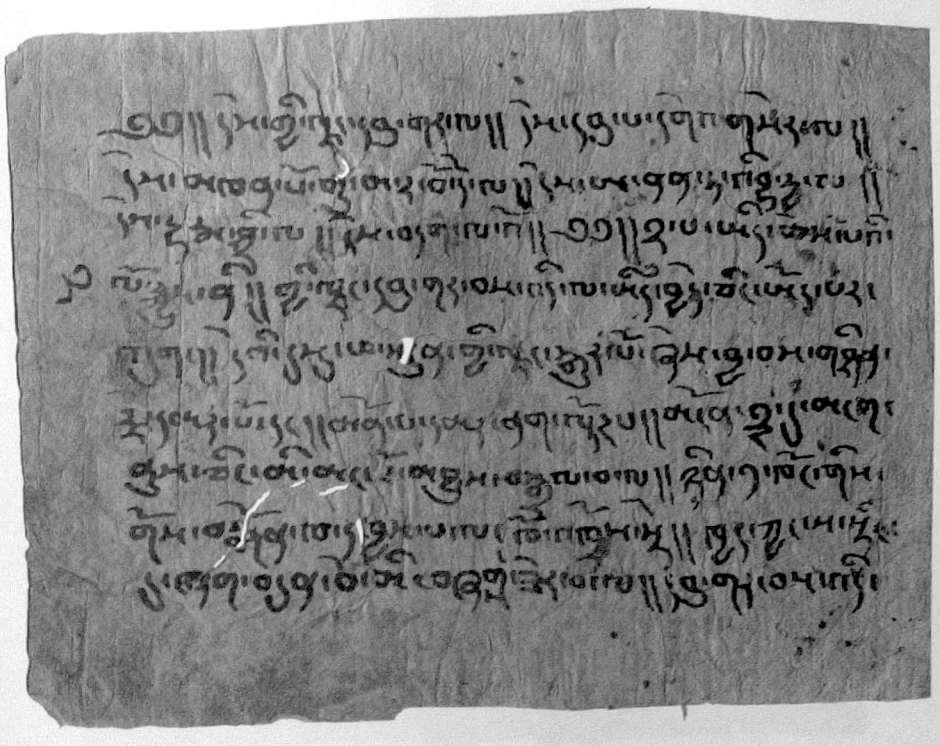
（No.103-1）TIB01－①



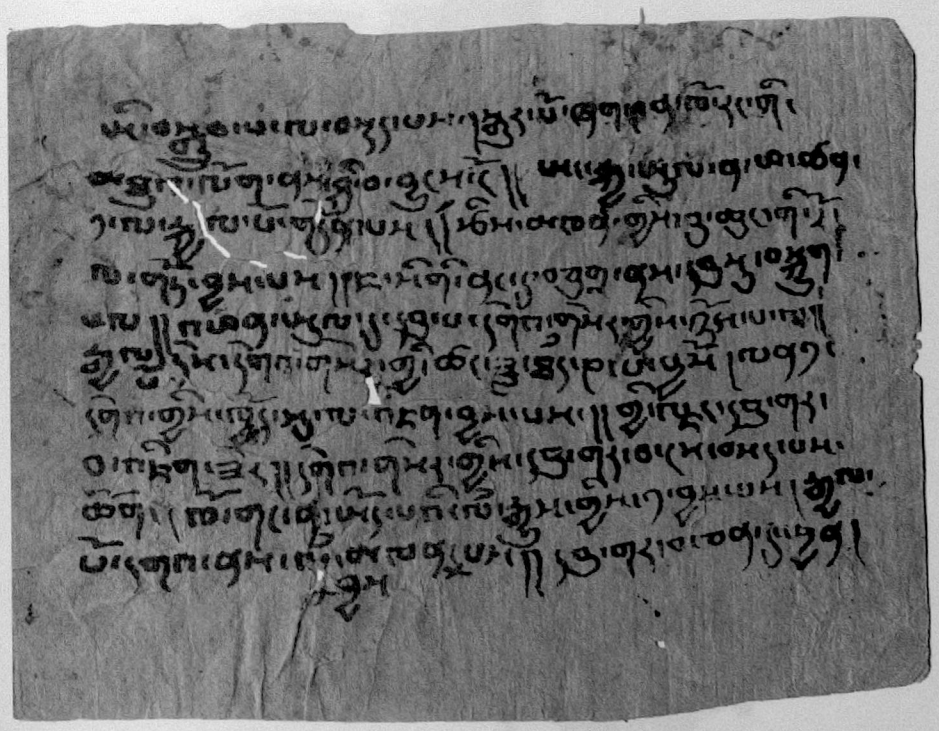
（No.103-2）TIB01－②



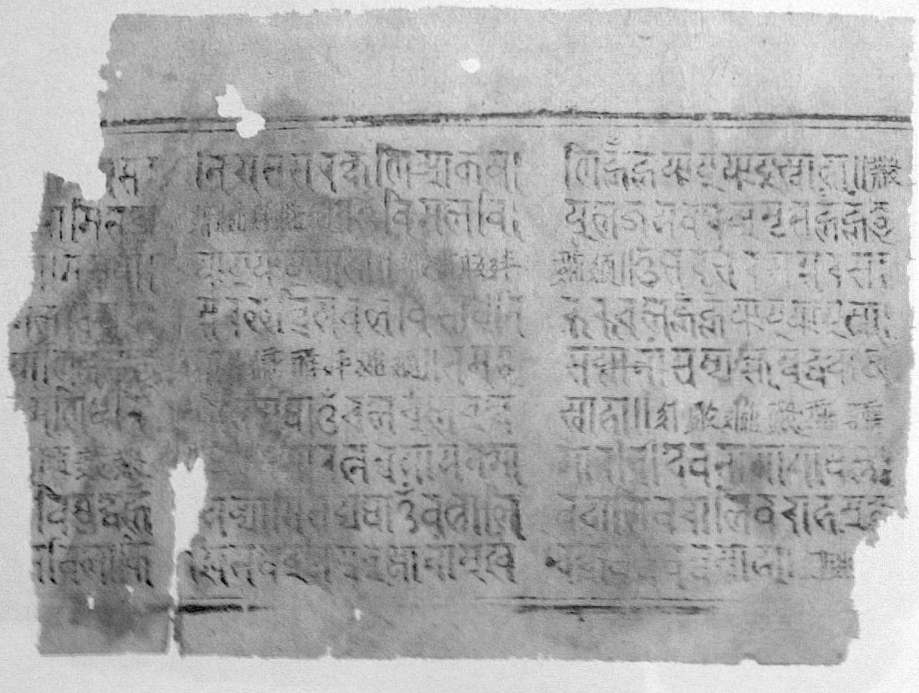
（No.105）TIB03　（口絵参照）



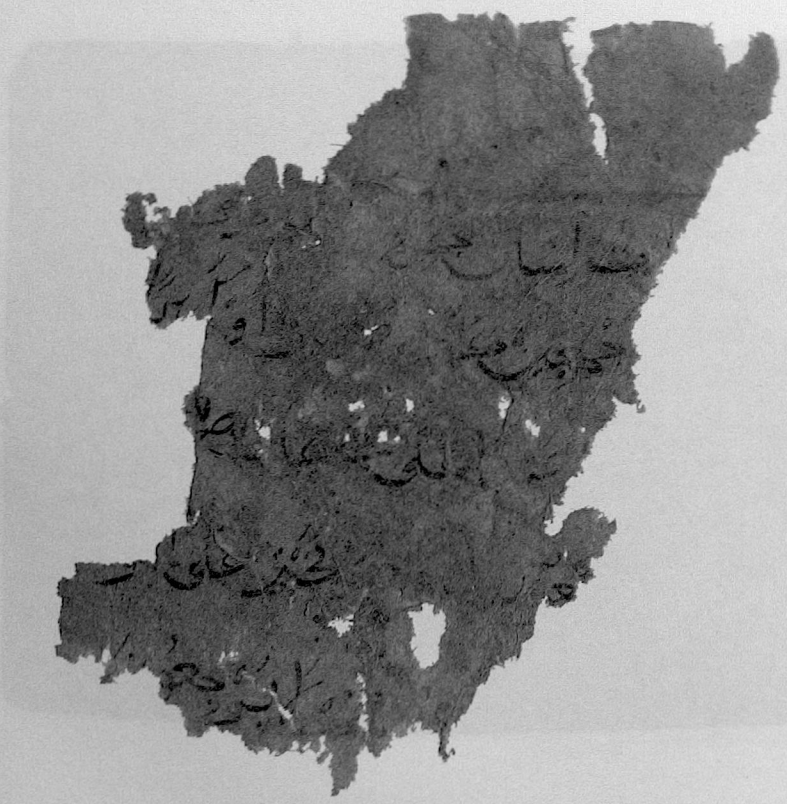
(No.104-1) TIB02—①



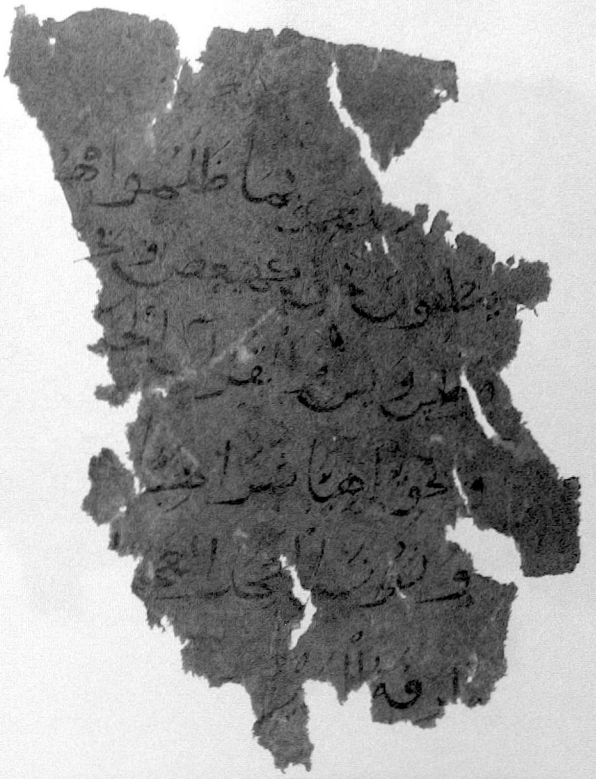
(No.104-2) TIB02—②



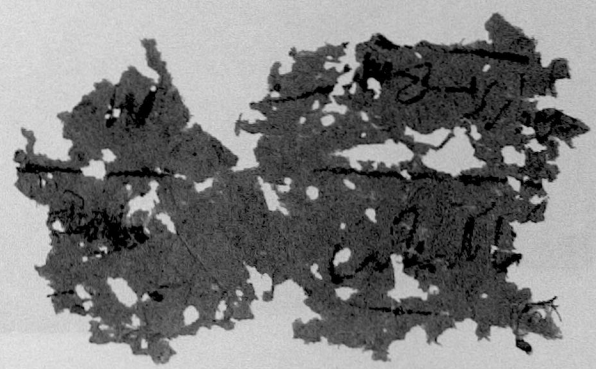
（No.106）文書番号F13：W83　（口絵参照）



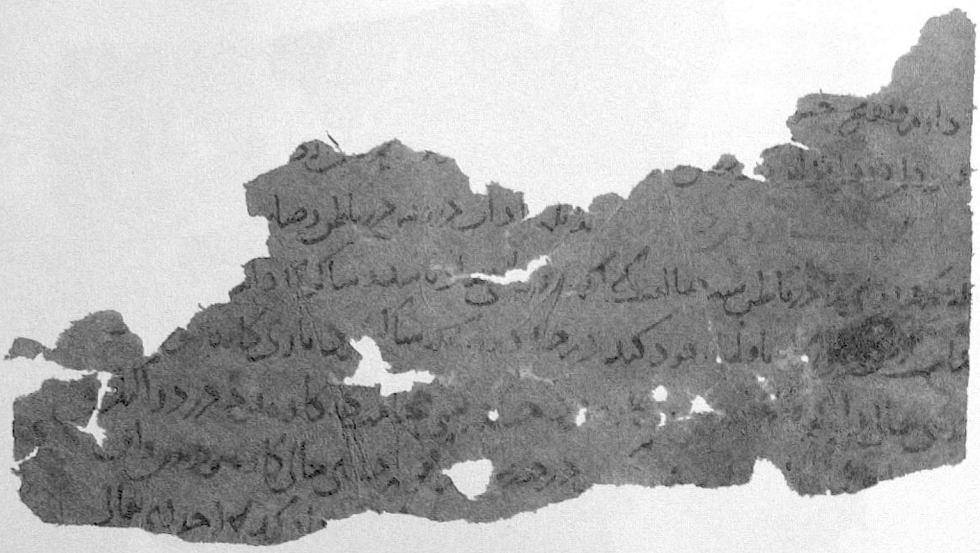
（No.107）文書番号F20：W60



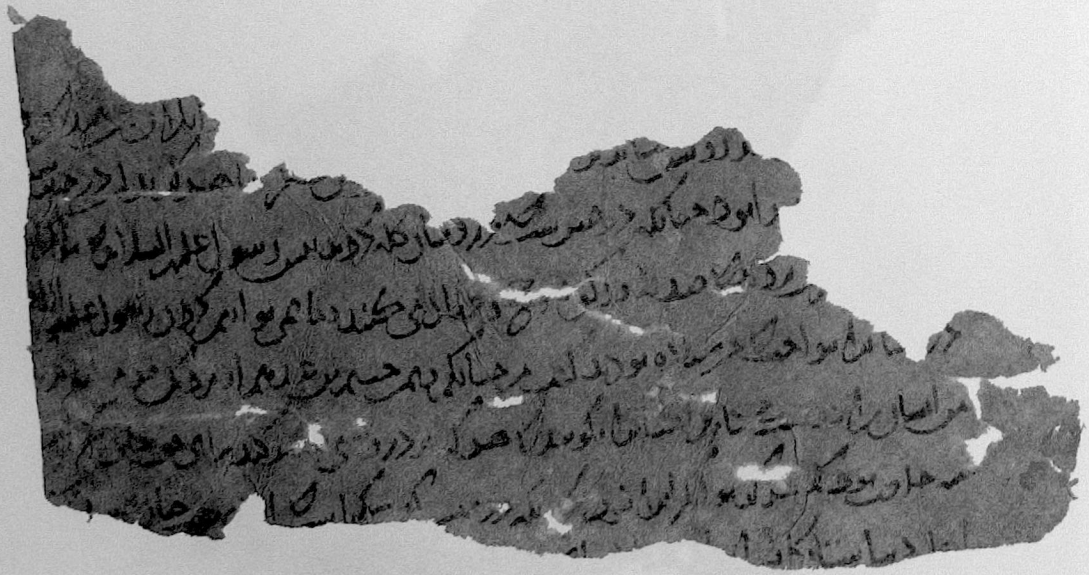
（No.108）文書番号F20：W61



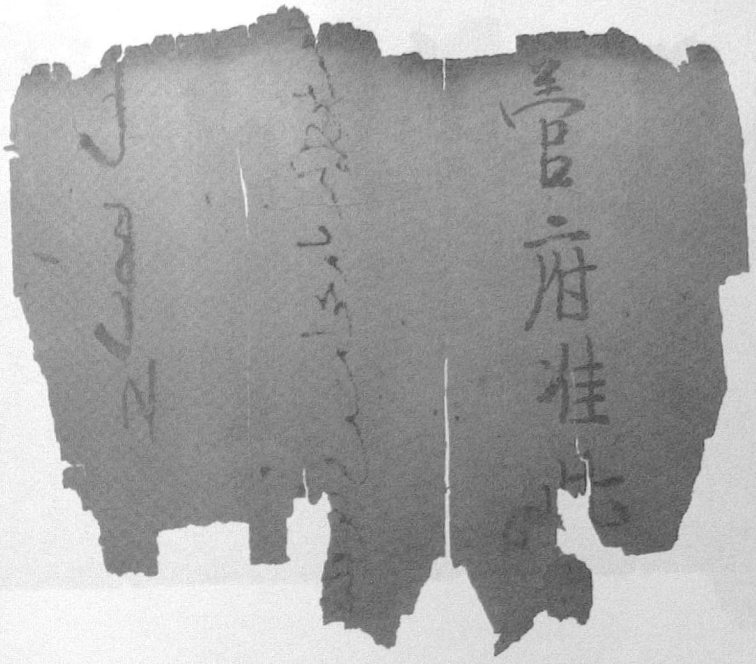
（No.109）文書番号F135：W73



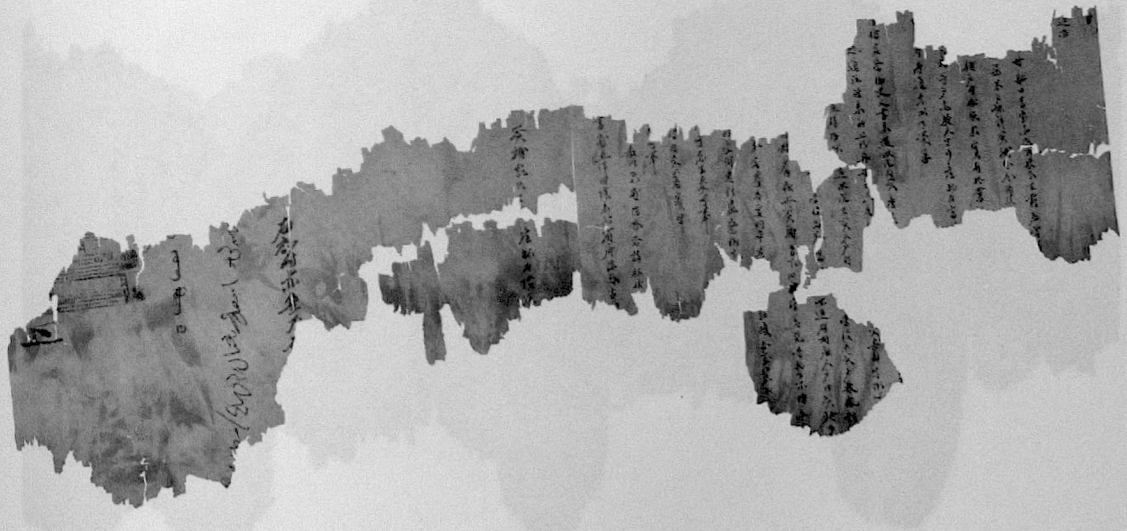
（No.110）文書番号F20：W63a　（口絵参照）



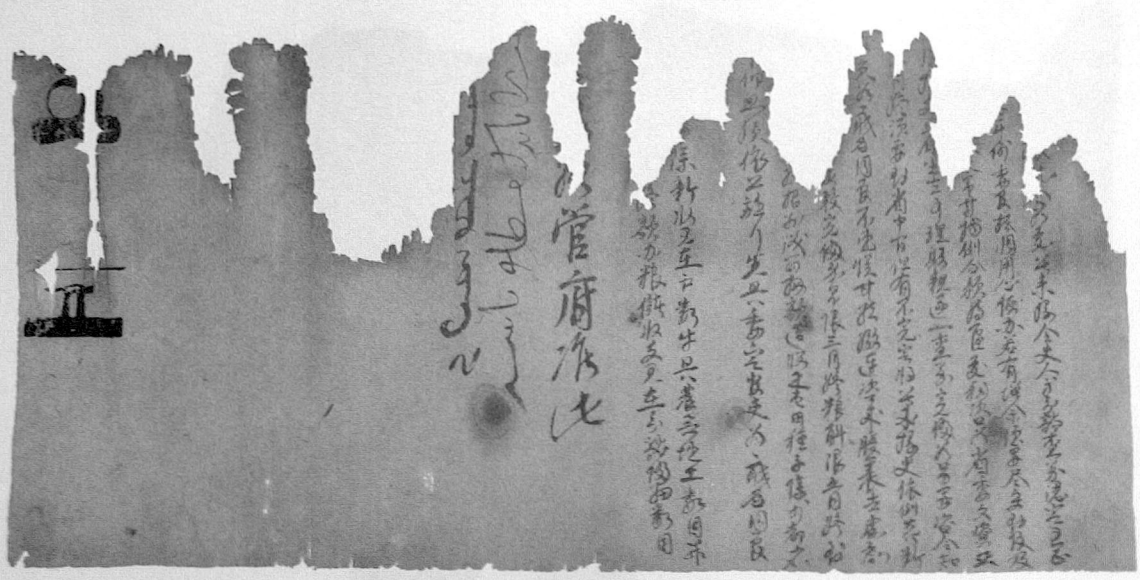
（No.111）文書番号F20：W63b　（口絵参照）



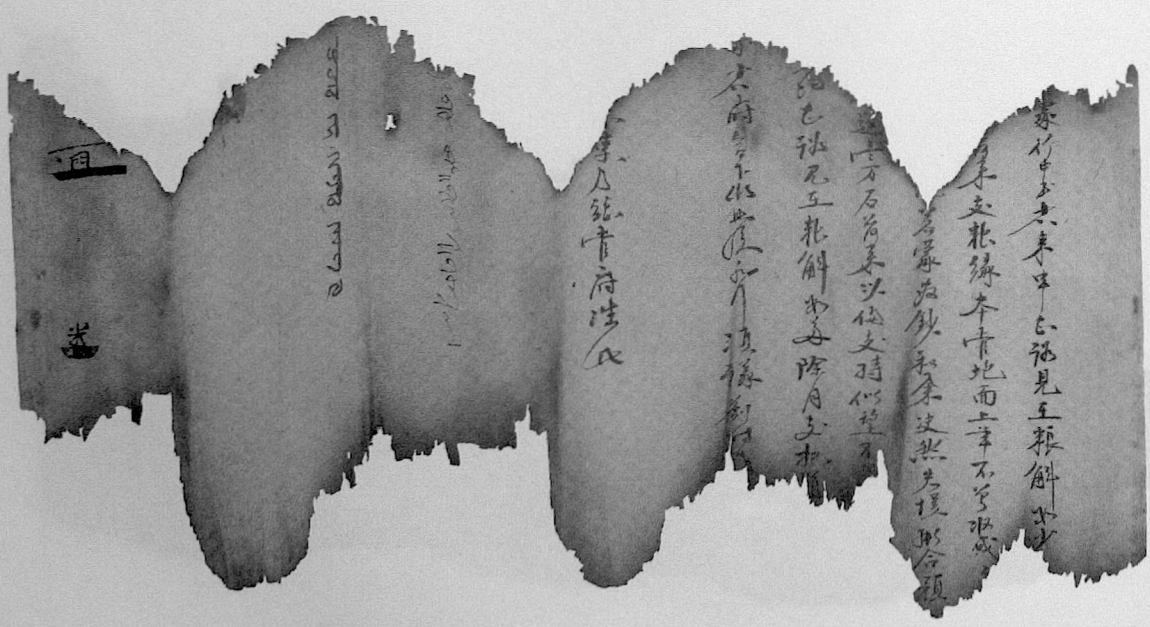
（No.112）文書番号F116：W96c



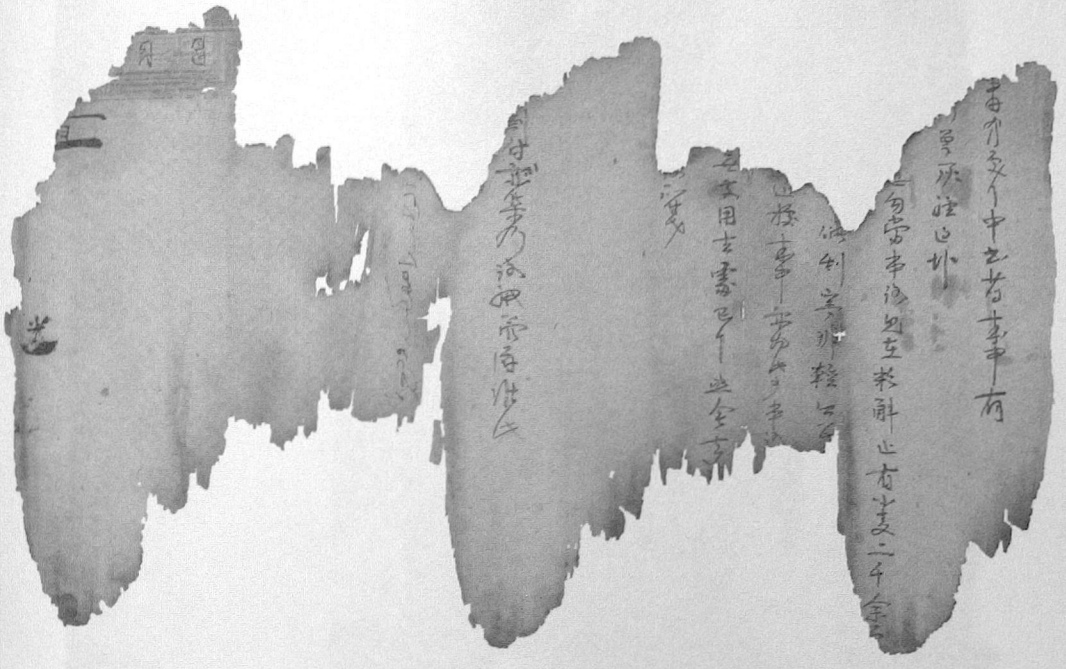
（No.113）文書番号F116：W544



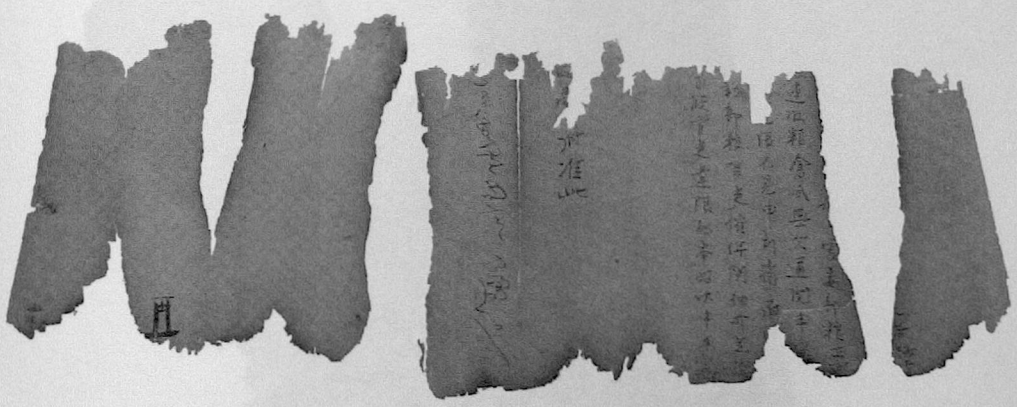
（No.114）文書番号F116：W556



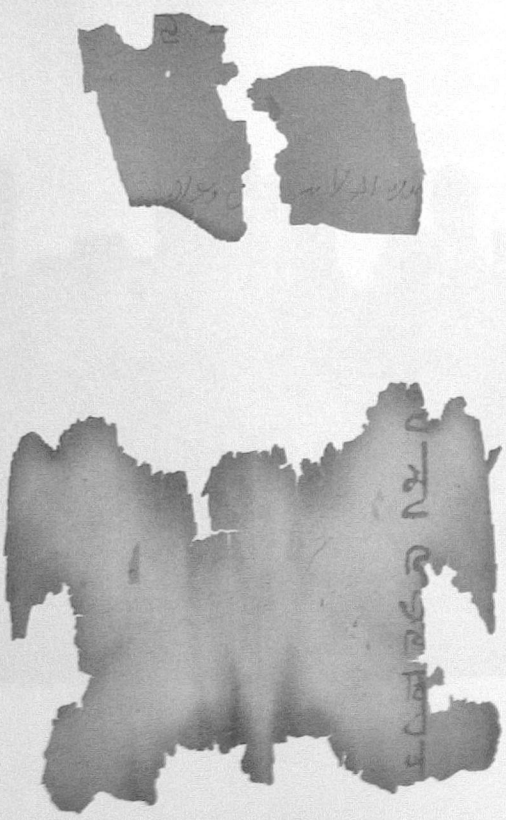
（No.115）文書番号F116：W565



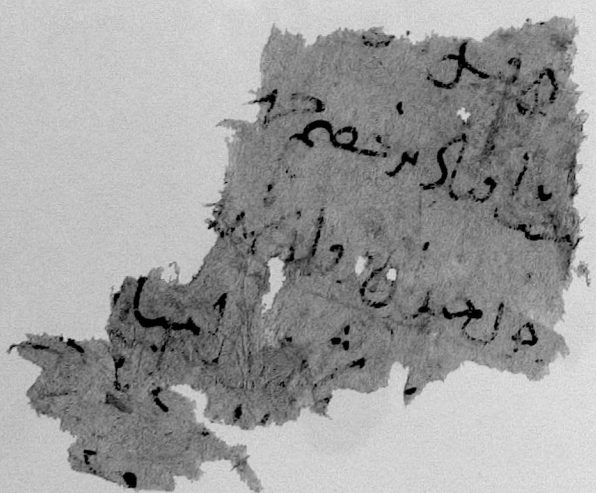
（No.116）文書番号F116：W566



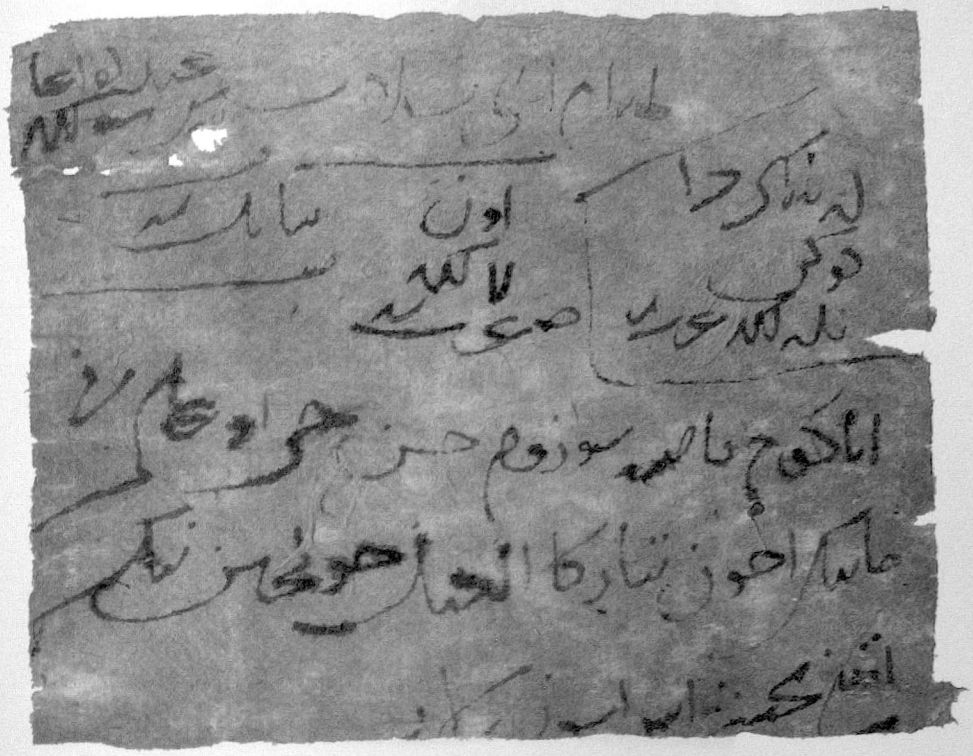
（No.117）文書番号F116：W582



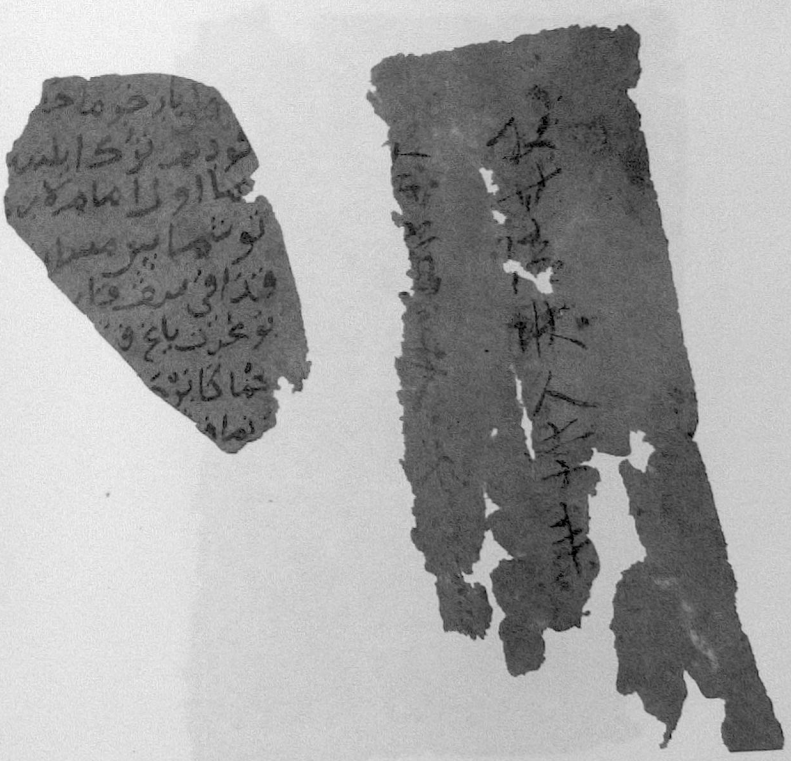
（No.118）文書番号ARAB01



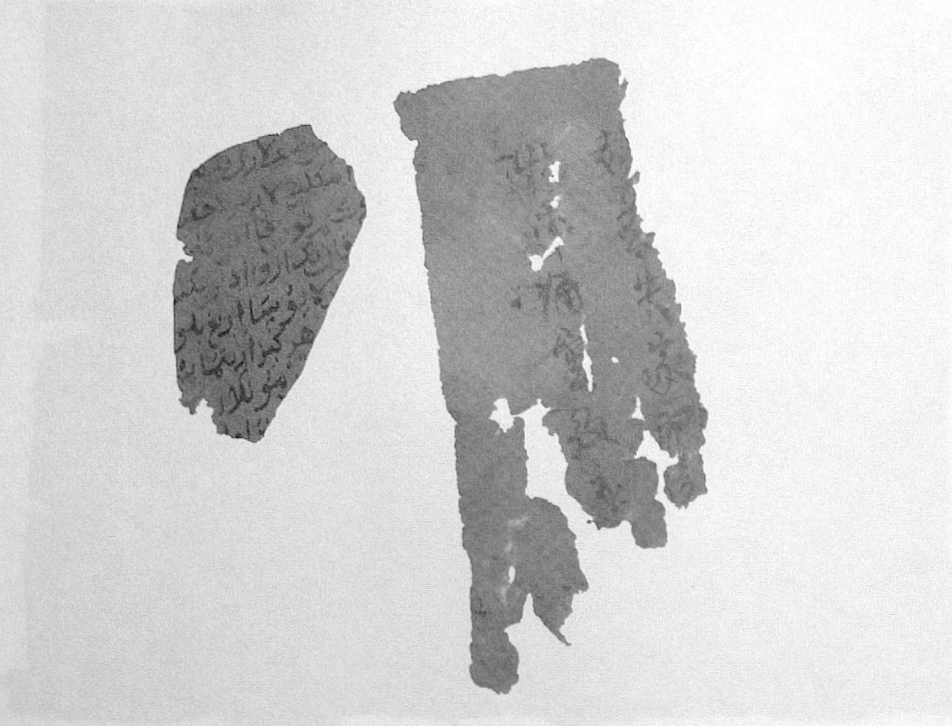
（No.119）文書番号Y5：W1



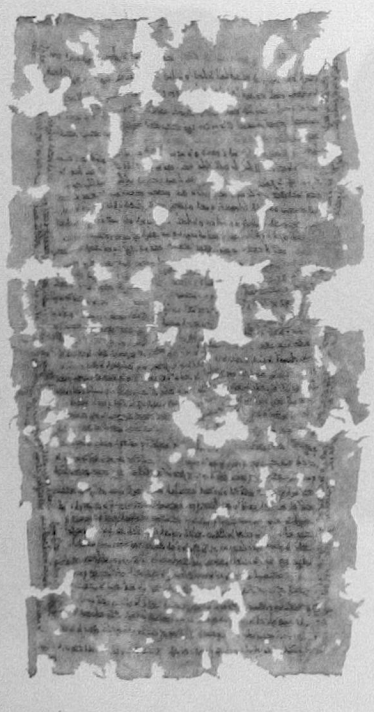
（No.120）文書番号F148：W1



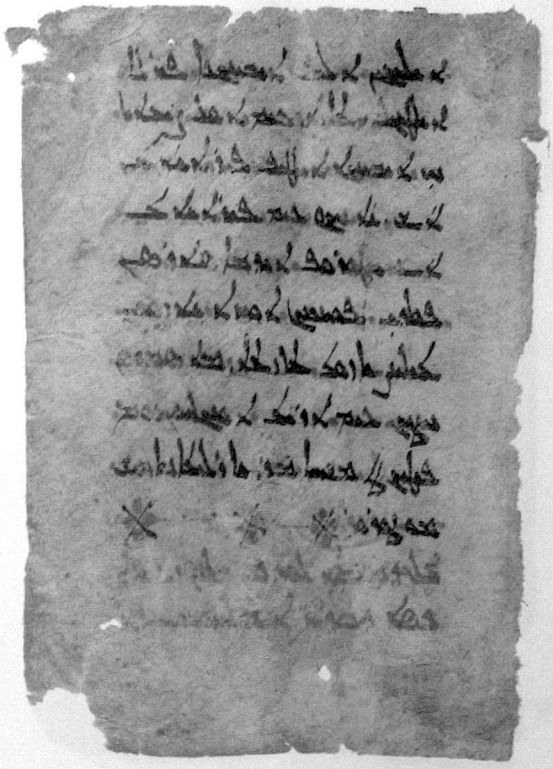
（No.121）文書番号ARAB02



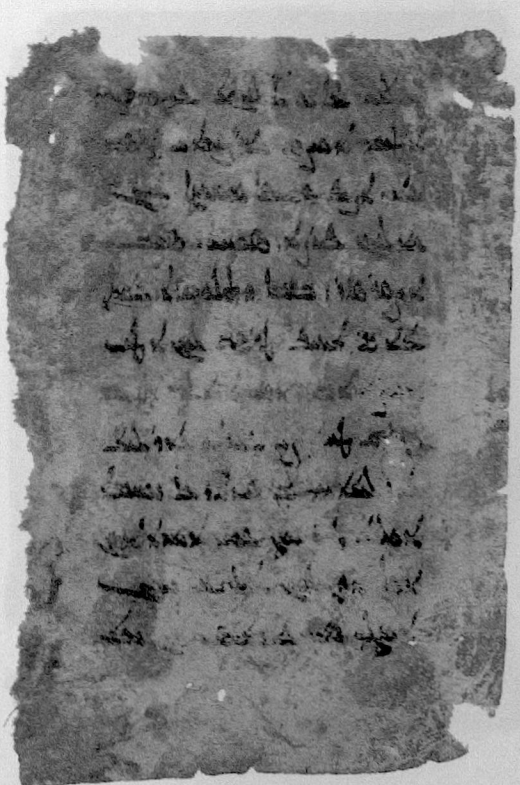
（No.122）文書番号ARAB03



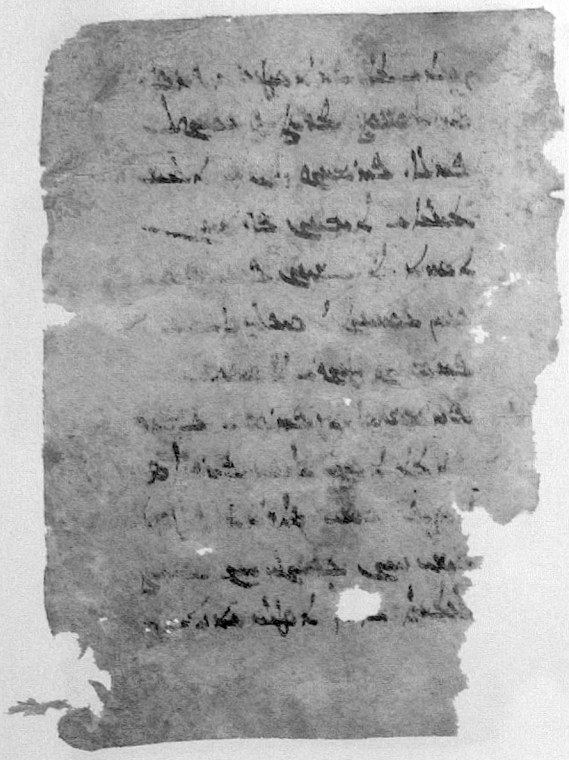
（No.123）文書番号H彩101　（口絵参照）



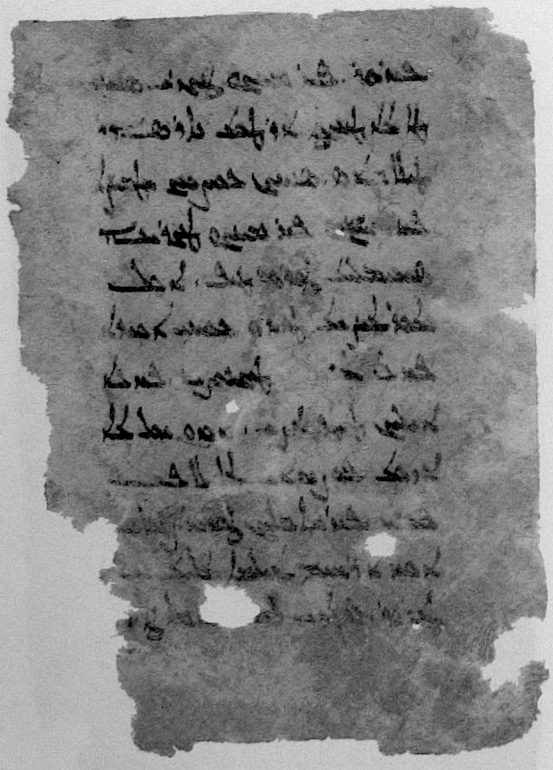
（No.124）A 文書番号F21：W37−0751　（口絵参照）



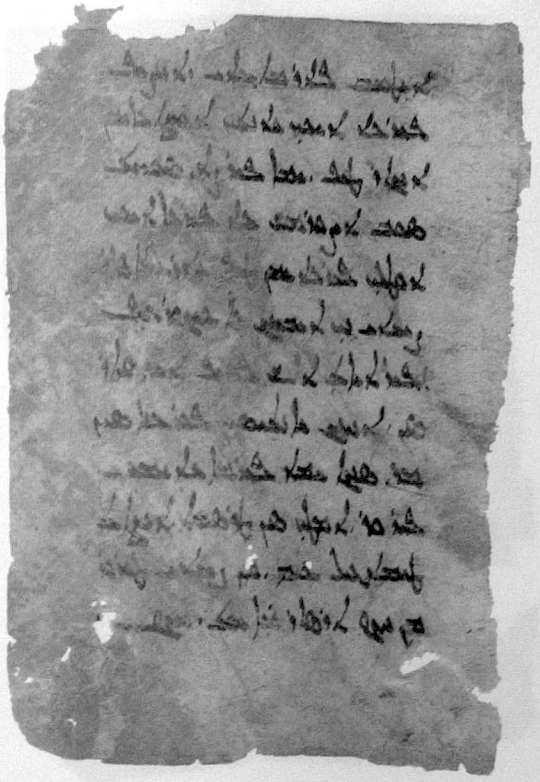
（No.125）B 文書番号F21：W37−0751（2）　（口絵参照）



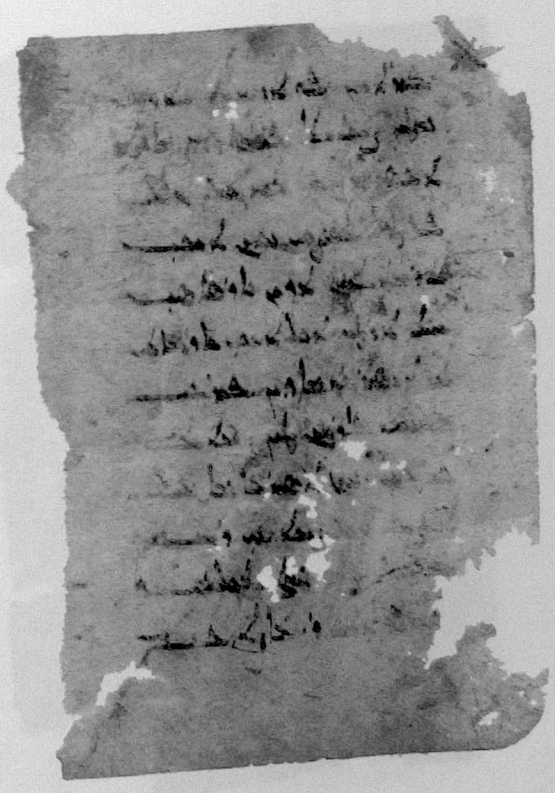
（No.126）C 文書番号F21：W37－0755



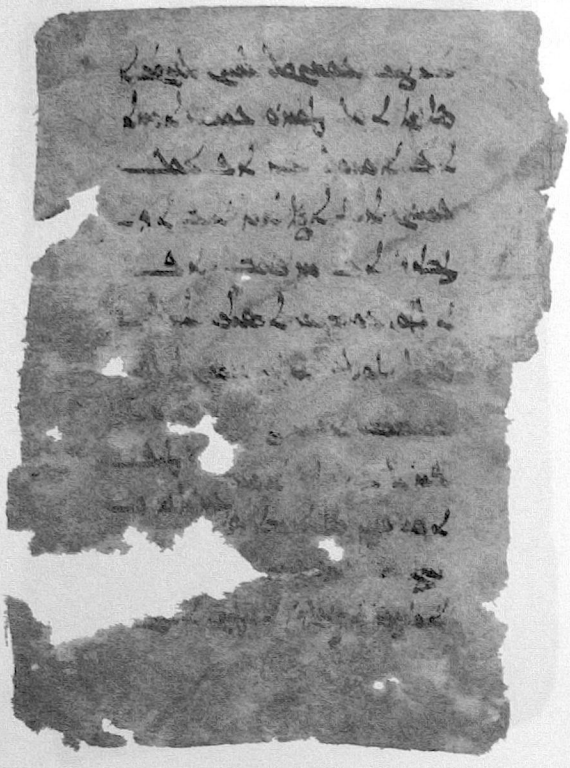
（No.127）D 文書番号F21：W34



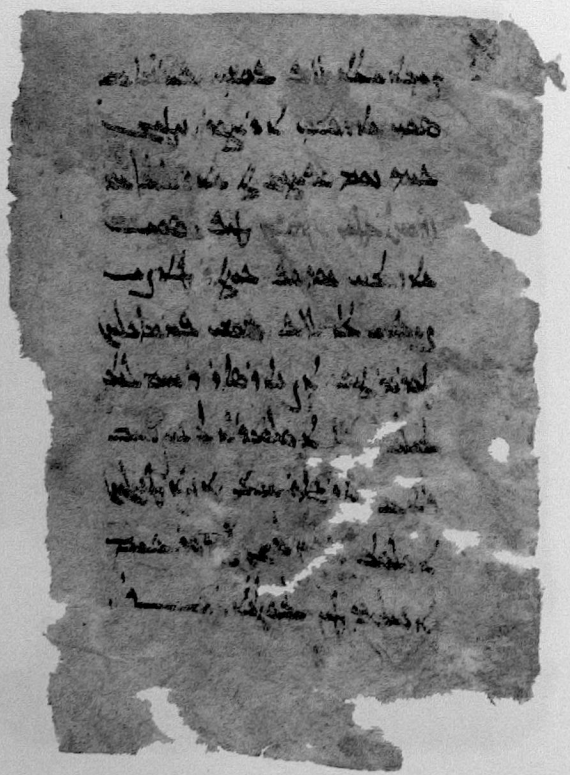
（No.128）E 文書番号F21：W37－0754



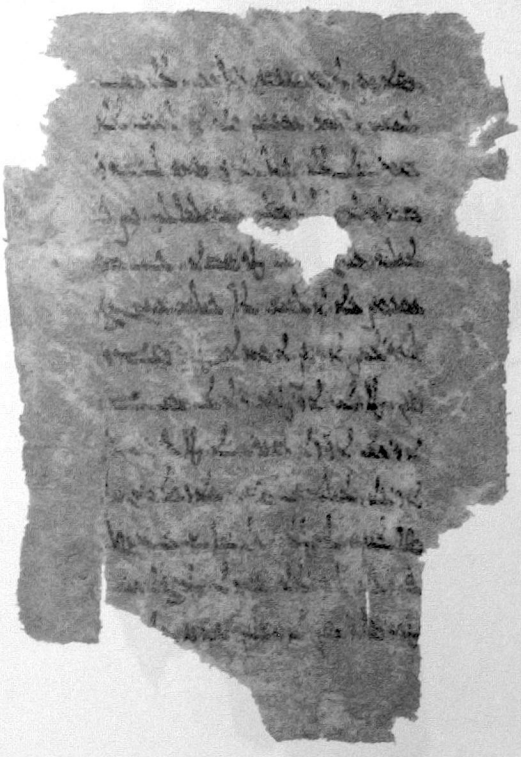
（No.129）F 文書番号F21：W37－2



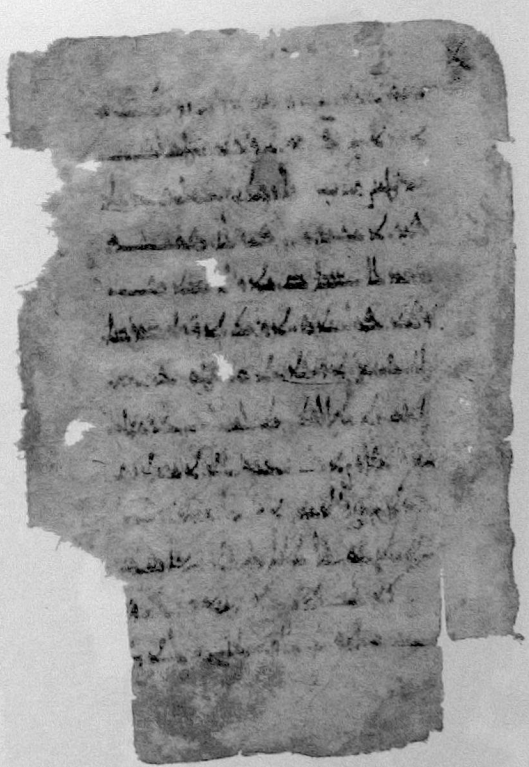
（No.130）G 文書番号F21：W37－0752



（No.131）H 文書番号F21：W35－0752



（No.132） I 文書番号F21：W35−0753



（No.133） J 文書番号F21：W36−0753

以下の1．～93．は資料番号・サイズを付記し図版のみを記載する。



1．84H・F20：W55／0704（19cm×13cm）



2．84H・F249：W8／2541（27cm×22.1cm）



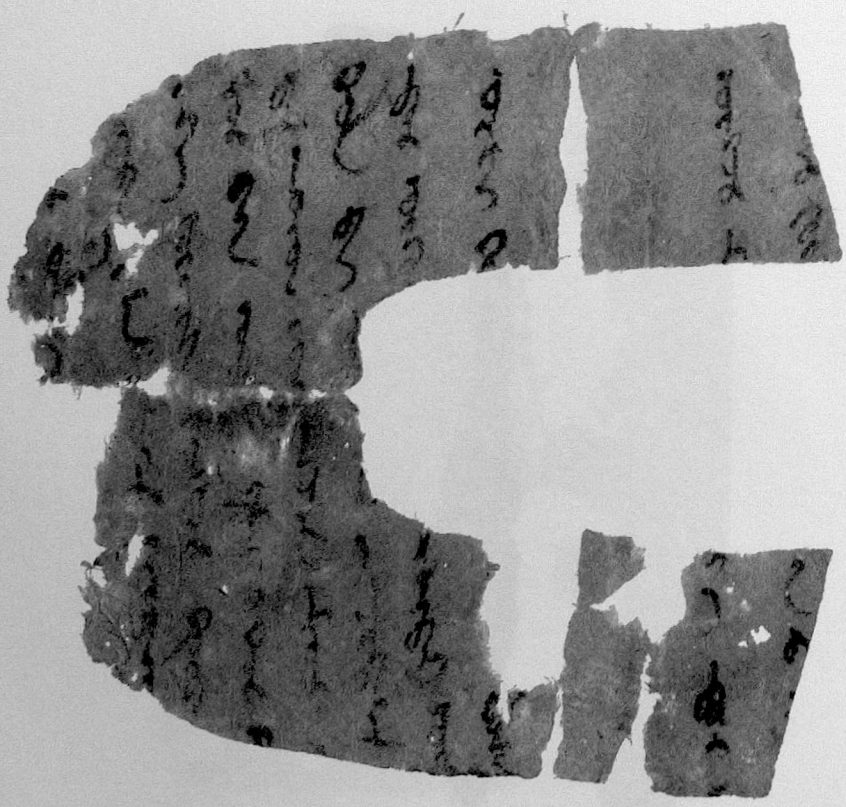
3. MON09（17.3㎝×5.5㎝）



4. MON10（17.3㎝×5.5㎝）



5. F9：W34a（15.1cm×15cm）



6. F9：W34b（15cm×18cm）

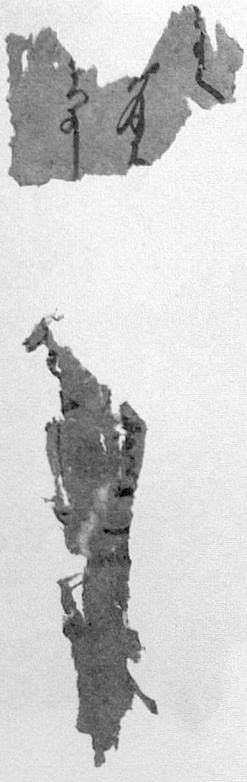


7. F9：W55（16.5cm×7cm）





8. F17：W8（23.7cm×4cm）



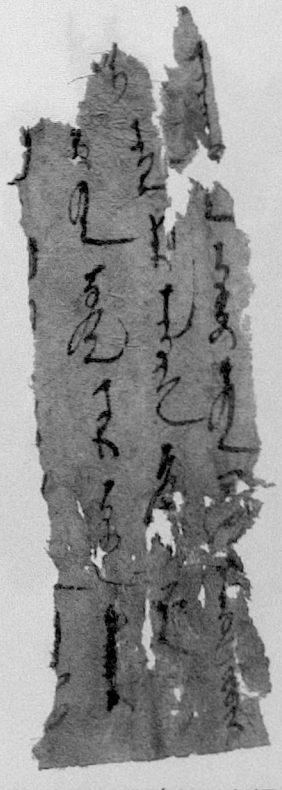
9. F19：W97（19.5cm×6.2cm）



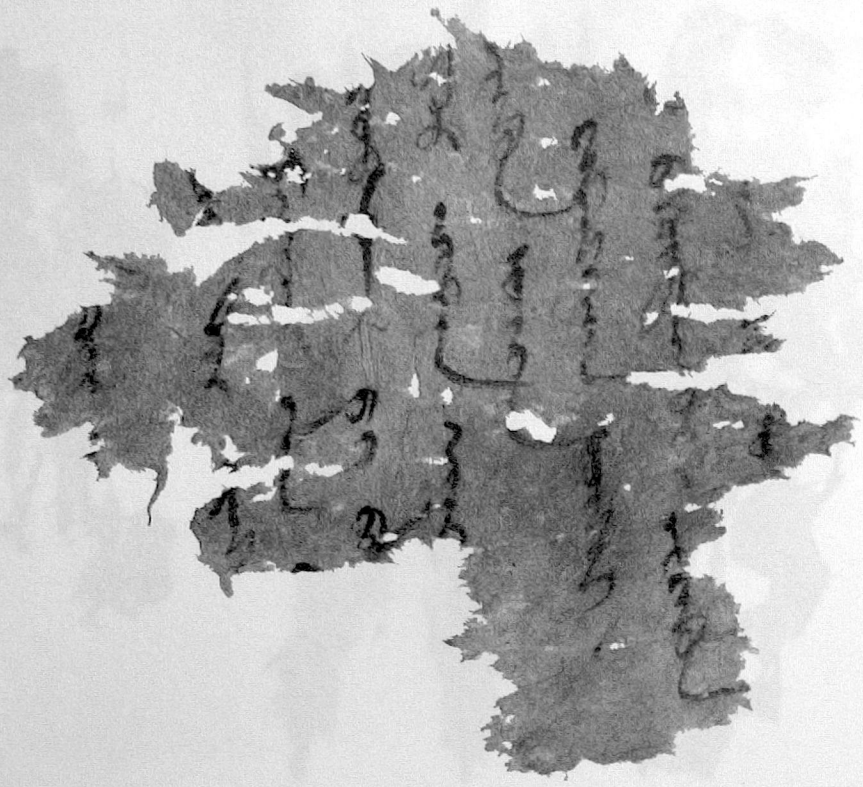
10. F21：W29（15cm×6cm）



11. F21：W31（20.3cm×28.4cm）



12. F43：W24（24cm×7.5cm）



13. F53：W1（16cm×18cm）

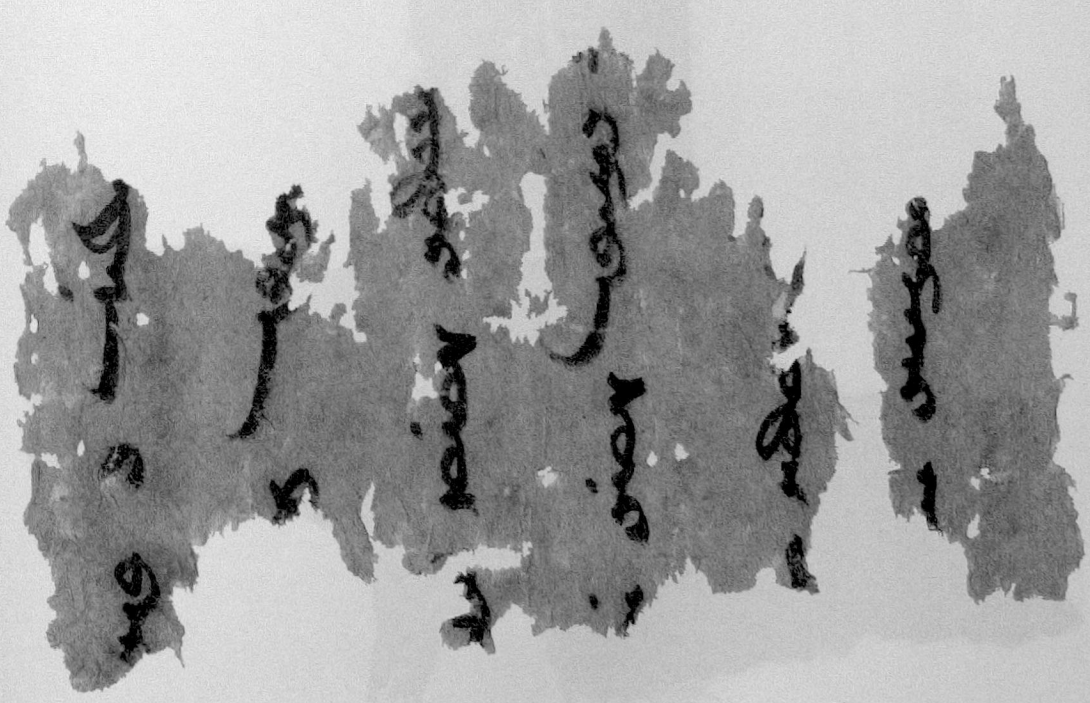




14. F79：W27（22.4cm×5cm）



15. F90：W7（7.4cm×7.5cm）



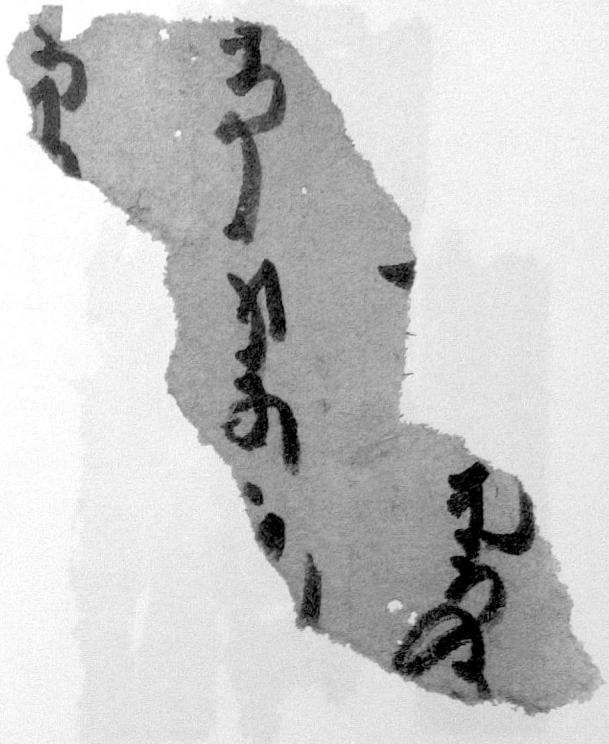
16. F90：W8（8.5cm×15cm）



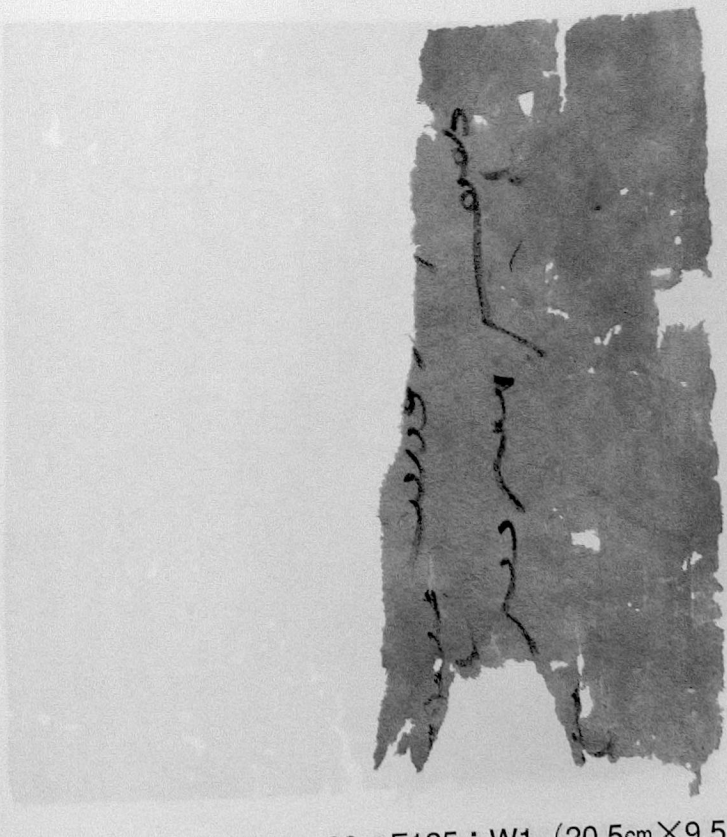
17. F92：W6（29㎝×12.5㎝）



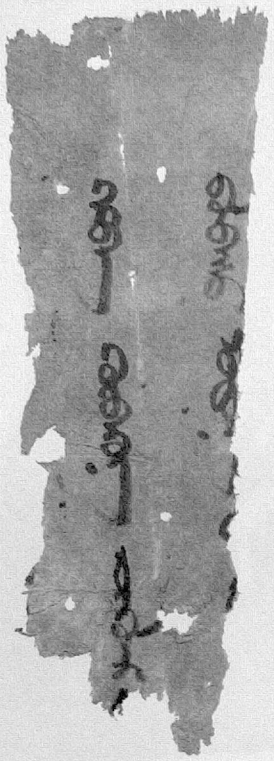
18. F116：W1（5.5㎝×13㎝）



19. F117：W1（10.3cm×9cm）



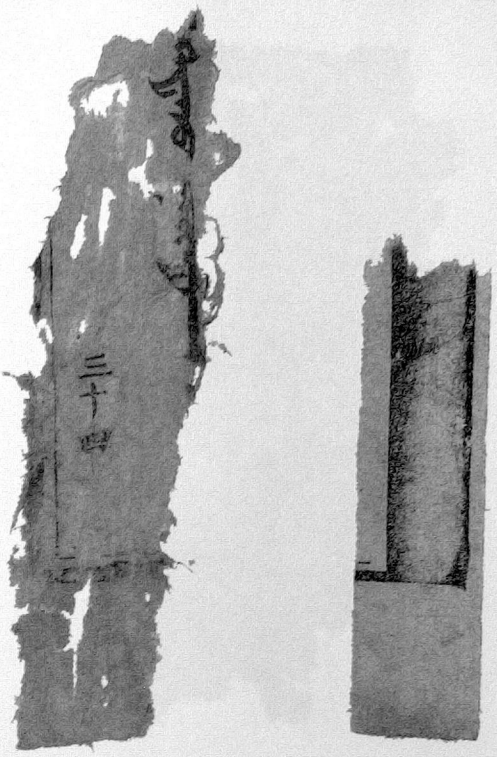
20. F125：W1（20.5cm×9.5cm）



21. F125：W2（16.5cm×6cm）



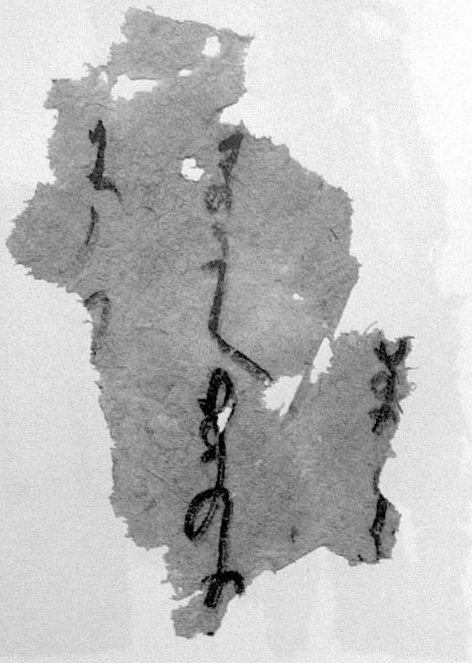
22. F193：W13（37.5cm×40cm）



23. F197：W31（16cm×11cm）



24. F209：W66（16.6cm×7.5cm）



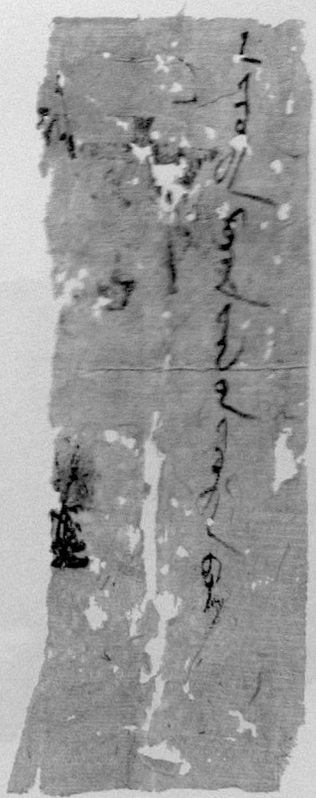
25. F224：W2（10cm×6.5cm）



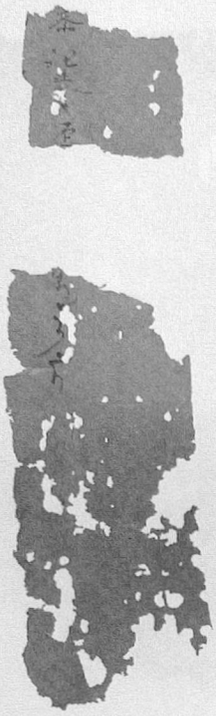
26. F224：W4（27.5cm×11.1cm）



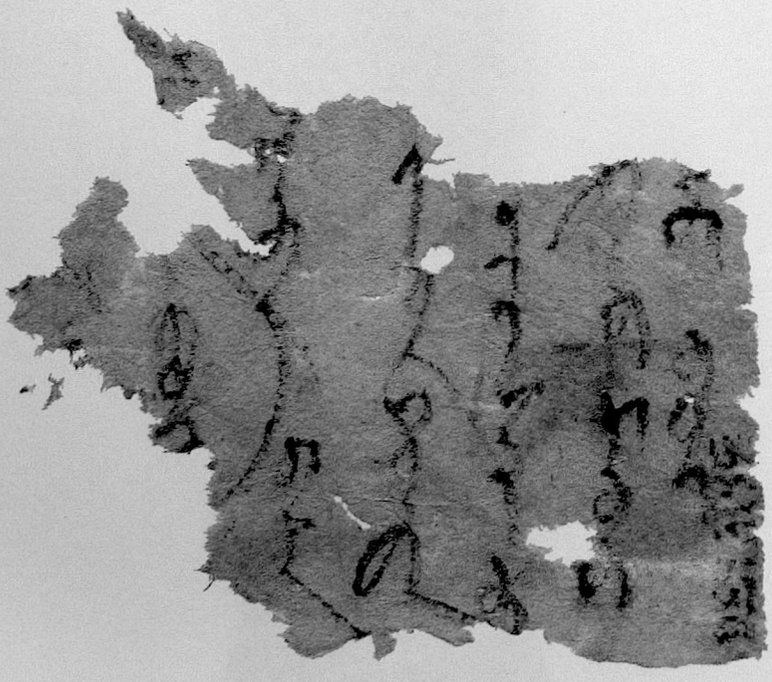
27. F247：W1（10.4cm×5.8cm）



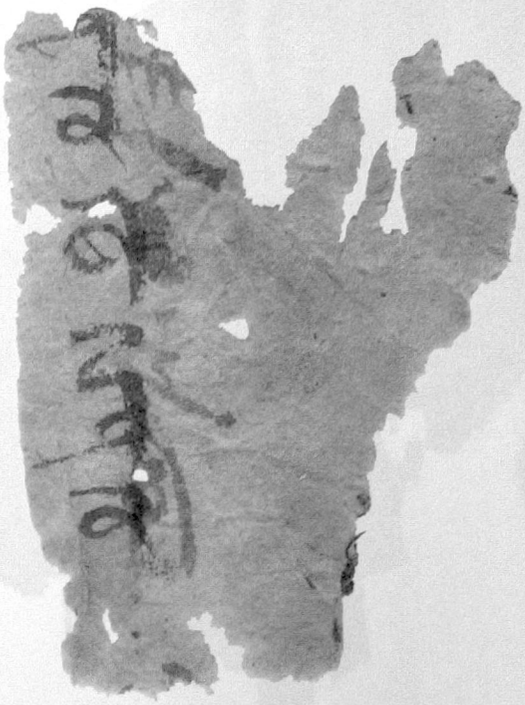
28. F270：W1（27.3cm×10cm）



29. MON11



30. Y1：W106（8cm×9cm）



31. MON12（7.3cm×5.5cm）



32. MON13（12.3cm×4.2cm）



33. MON14（19cm×18.7cm）



34. MON15（26.2cm×26.5cm）



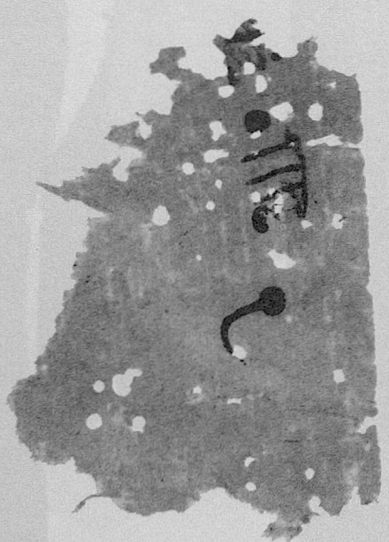
35. MON16（26㎝×58.5㎝）



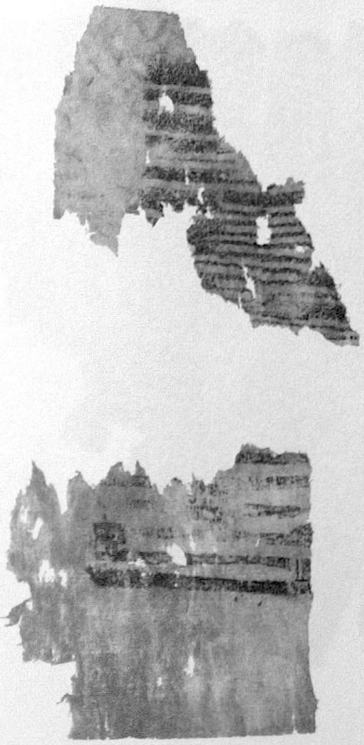
36. 84H・F116：W261／1433（26㎝×13.7㎝）



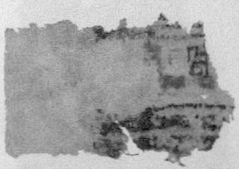
37. 84H・F21：W16／0733（7.7㎝×3.4㎝）

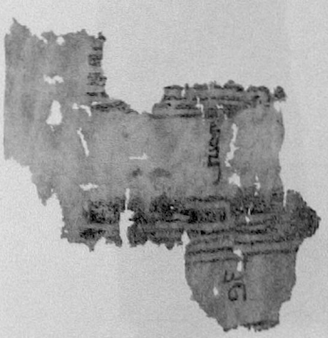


38. 84H・F68：W6／0912（7.1㎝×5.2㎝）



39. 84H・F114：W16／1170（23.8cm×12.5cm）





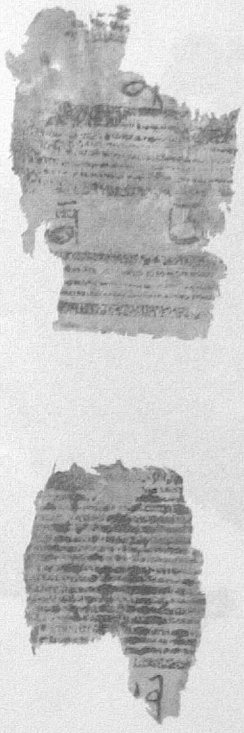
40. 84H・F114：W17／1171（26cm×12cm）



41. 84H・F116：W61／1233（13.5cm×15cm）



42. 84H・F193：W6／2240（25cm×12cm）



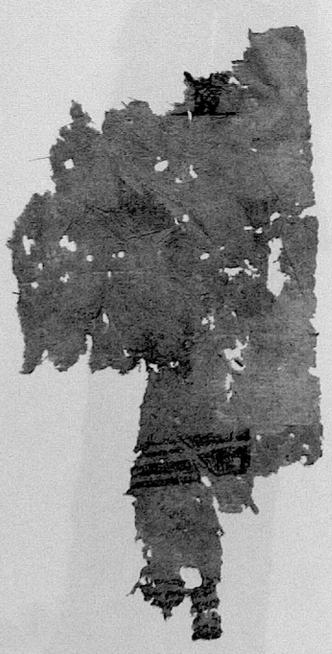
43. 84H・F210：W7／2392（16.5cm×6cm）



44. 84H・F170A（26.5cm×11.9cm）



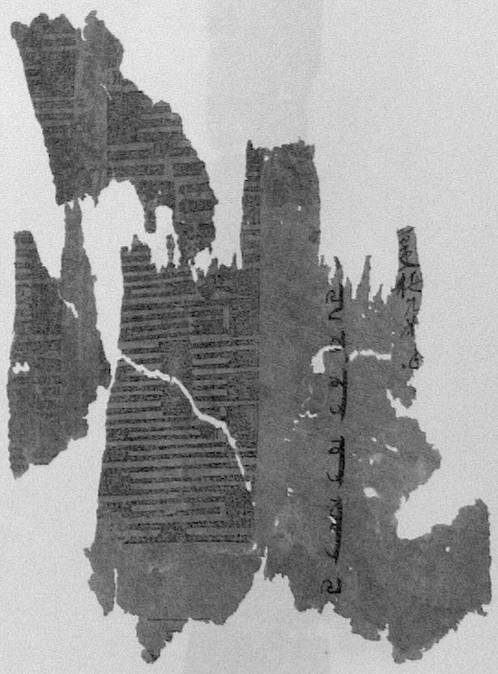
45. F19：W36（7.3cm×7.5cm）



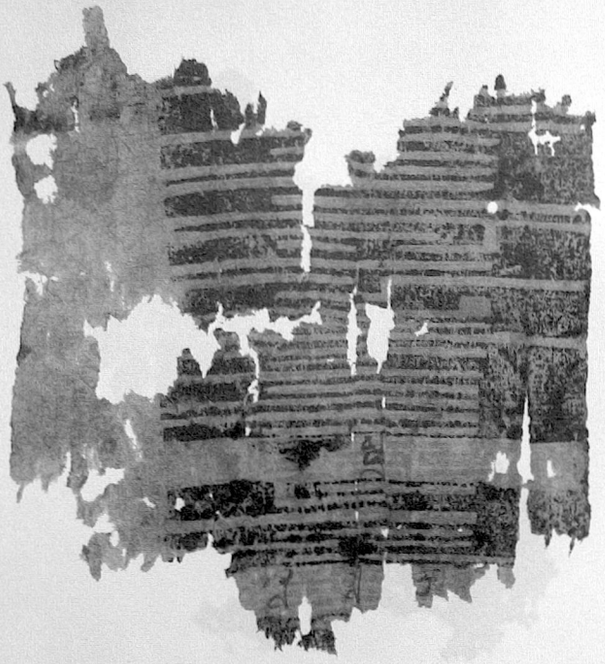
46. F19：W104（20cm×10.3cm）



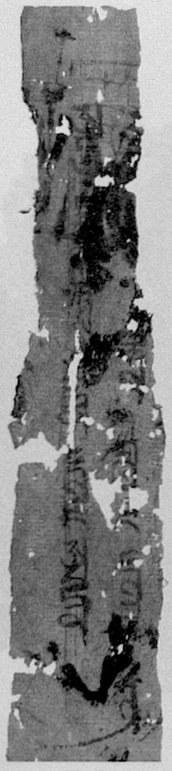
47. F50：W3（23cm×16cm）



48. F51：W20（30cm×23cm）



49. F73：W13（21㎝×18.5㎝）



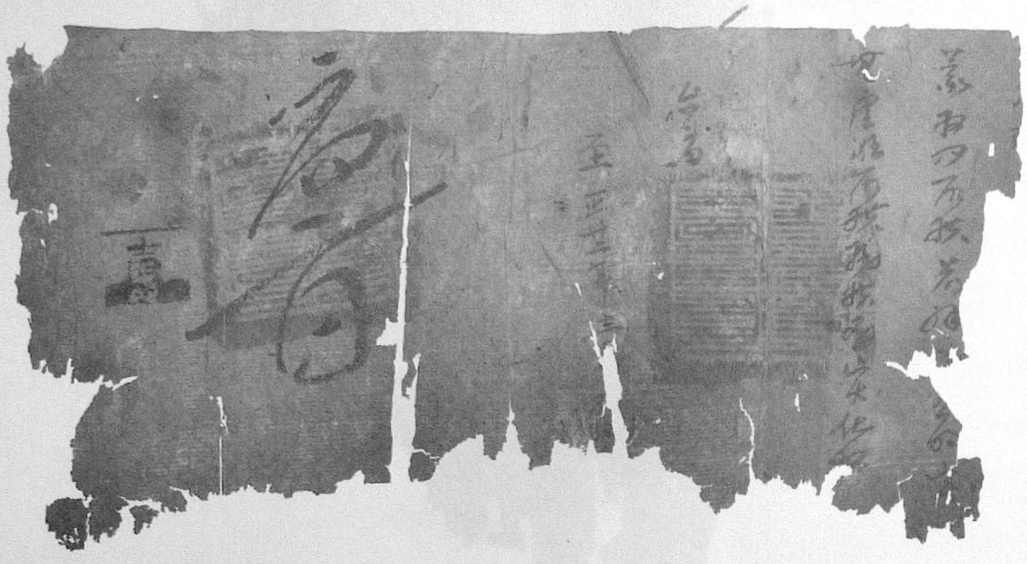
50. F80：W2（28.5㎝×5.7㎝）



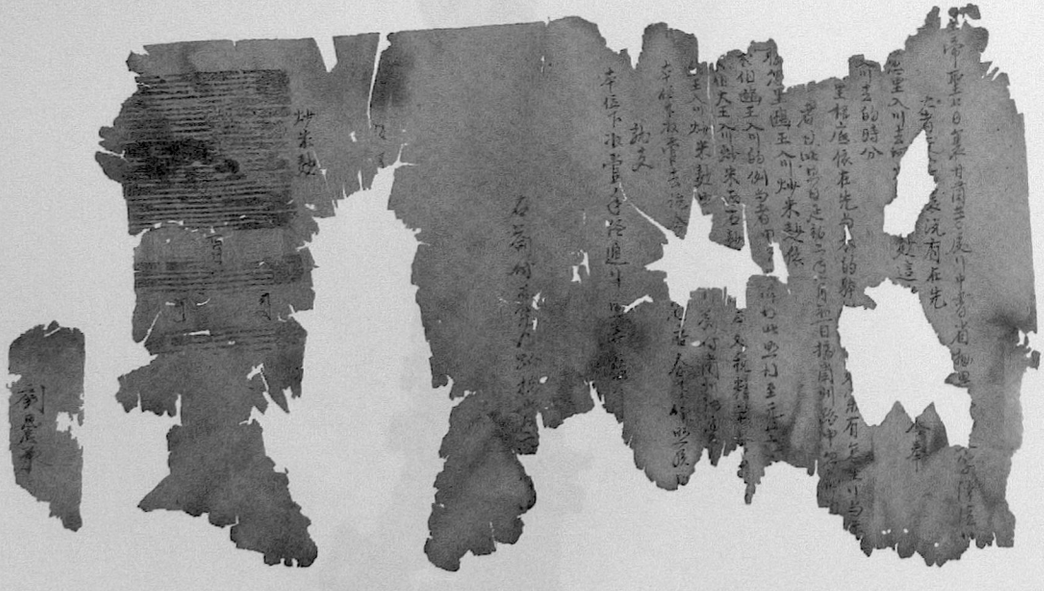
51. F80：W12（32.5㎝×25.5㎝）



52. F92：W1（22㎝×10㎝）



53. F116：W106（19.5㎝×38㎝）



54. F116：W561（34.5㎝×68㎝）



55. F146：W4（6.5cm×24.4cm）



56. F146：W2（15.5cm×7cm）



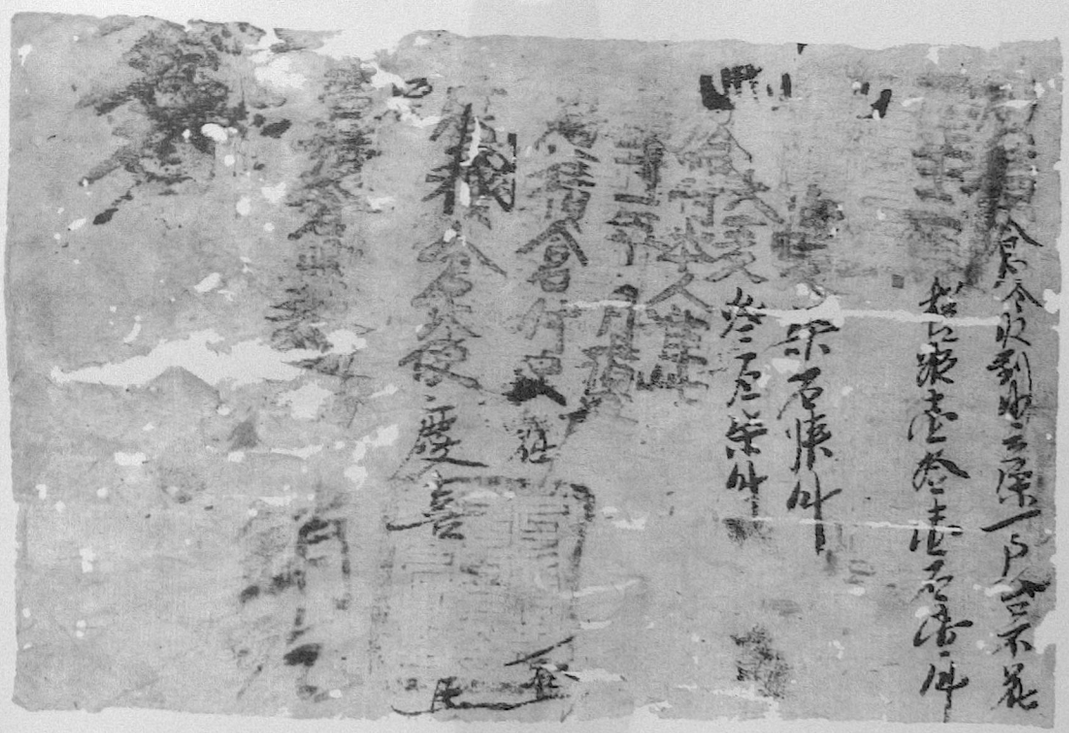
57. F146：W3（9.5cm×8cm）



58. F209：W65（12cm×2.2cm）



59. F245：W15（17.5cm×8.6cm）



60. F270：W6（17cm×26.8cm）



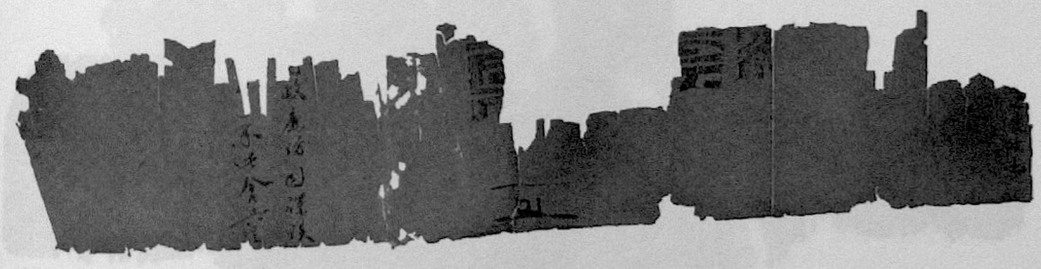
61. F279：W1（19.8cm×52.6cm）



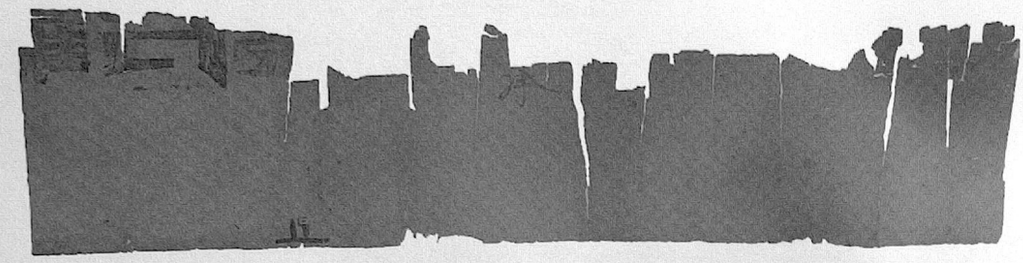
62. HF79（21.5cm×7cm）



63. HF124（33㎝×13.2㎝）



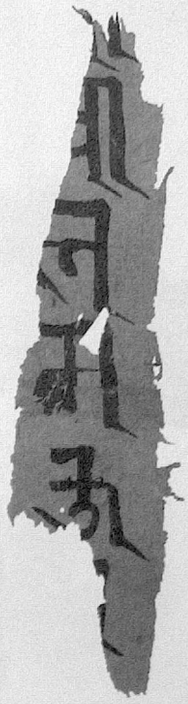
64. MON17



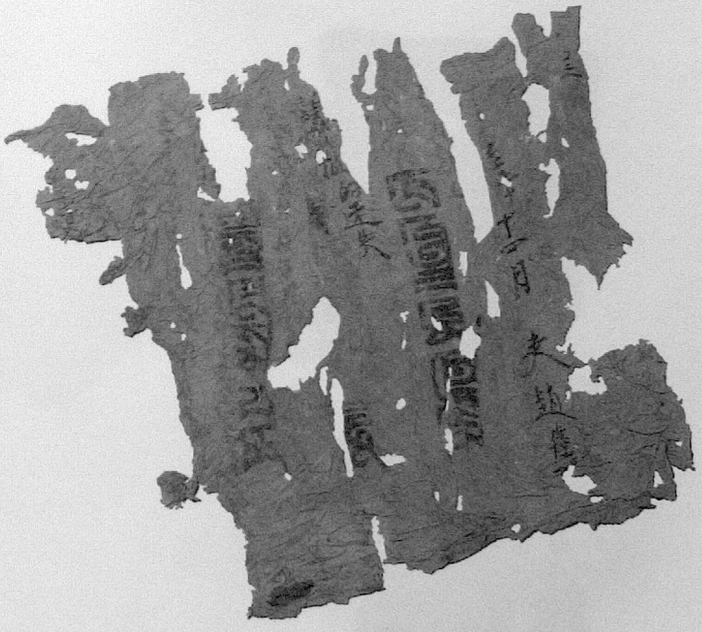
65. MON18



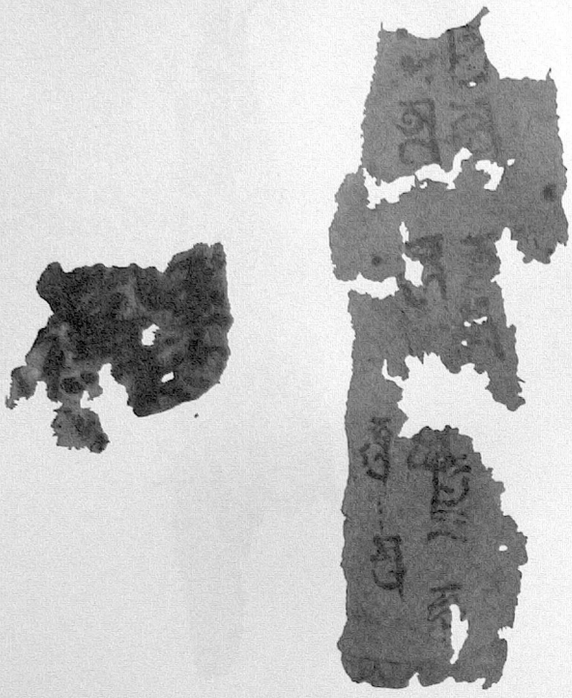
66. MON19



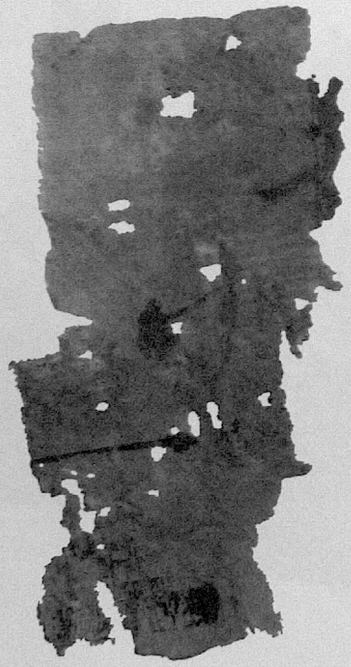
67. MON20



68. MON21



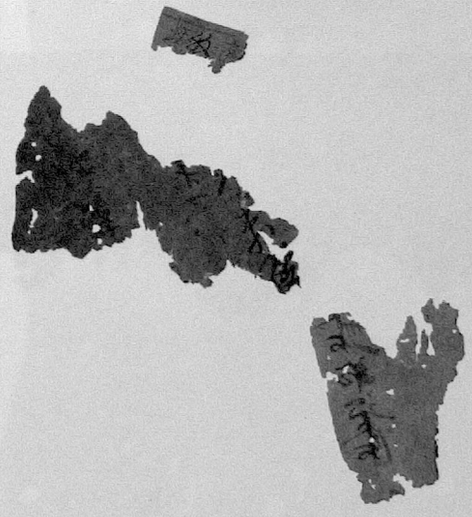
69. MON22



70. MON23



71. MON24



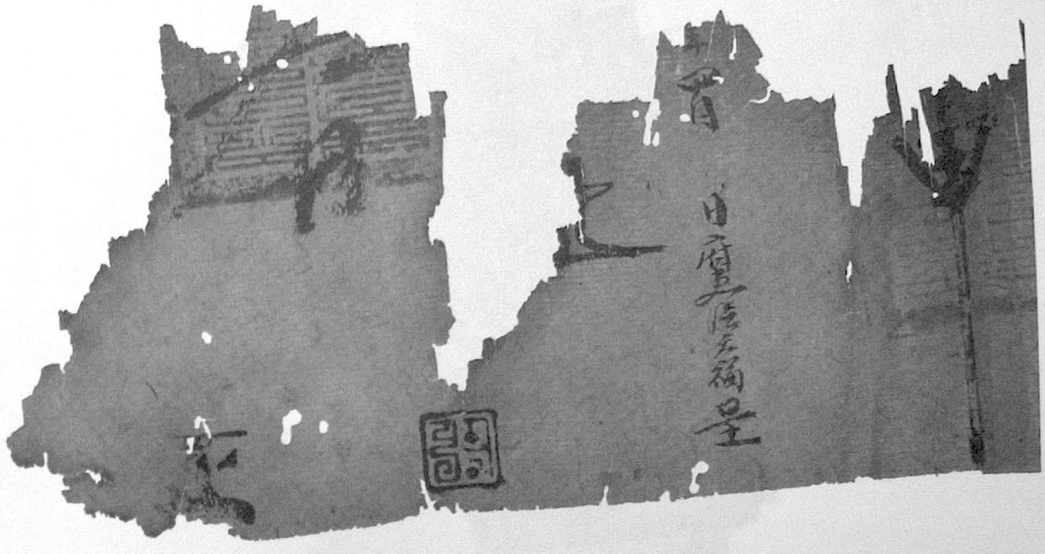
72. MON25



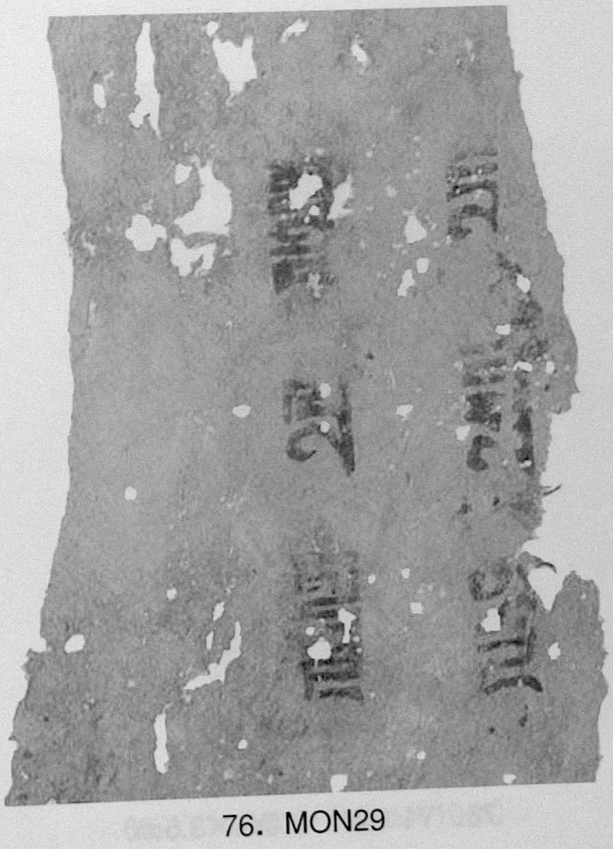
73. MON26



74. MON27



75. MON28



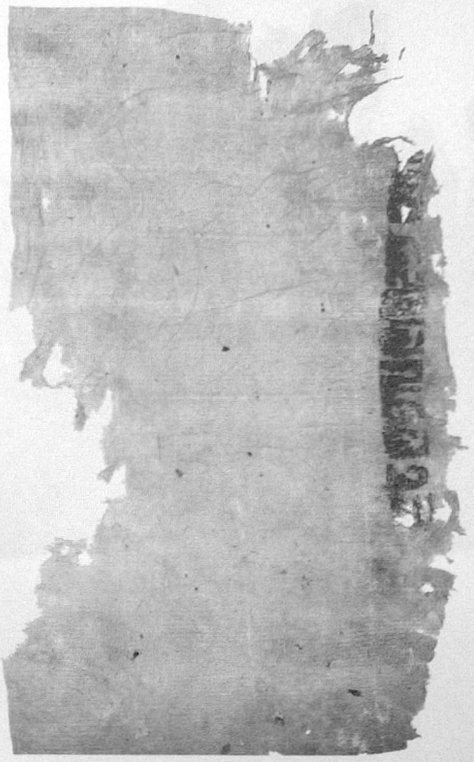
76. MON29



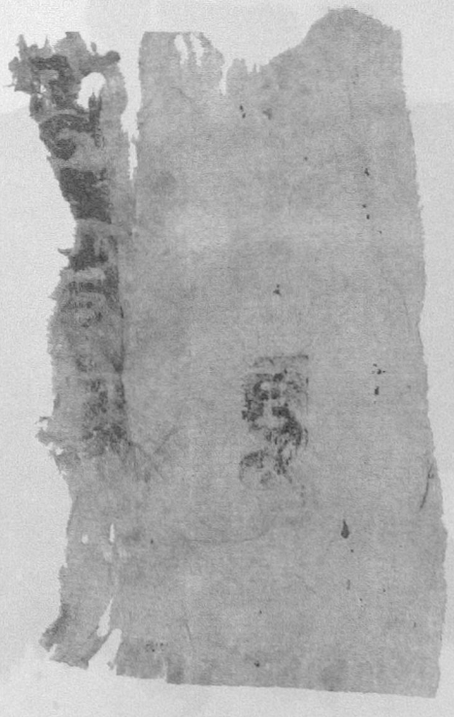
77. T9：W2（28㎝×29.8㎝）



78. Y1：W1（10㎝×3.5㎝）



79. Y1：W1B（27.3cm×16cm）



80. Y1：W10（16cm×10cm）



81. Y1：W96（25㎝×9.5㎝）



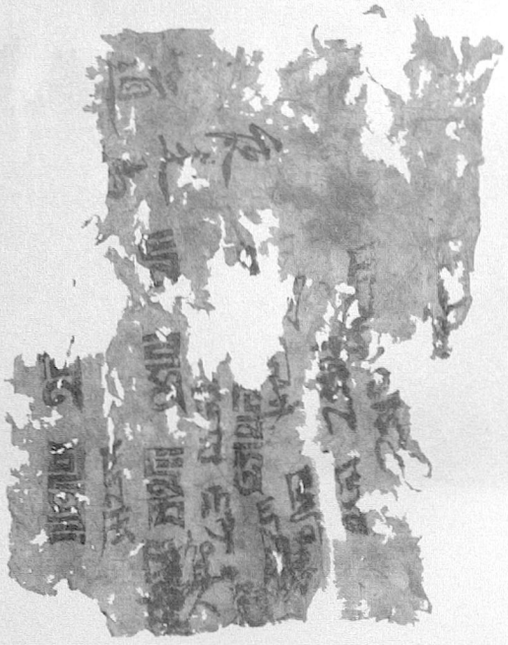
82. Y1：W102（13.5㎝×23㎝）



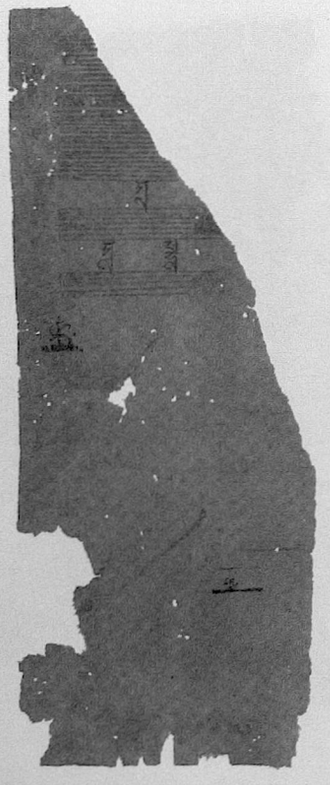
83. Y1：W103（15㎝×34㎝）



84. Y1：W105（22.5㎝×9.2㎝）



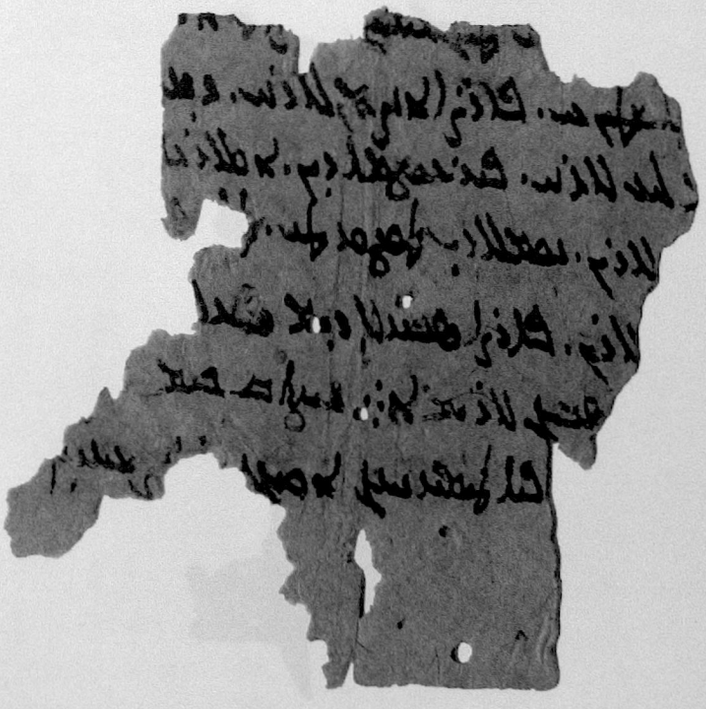
85. Y1：W107（27.3cm×22cm）



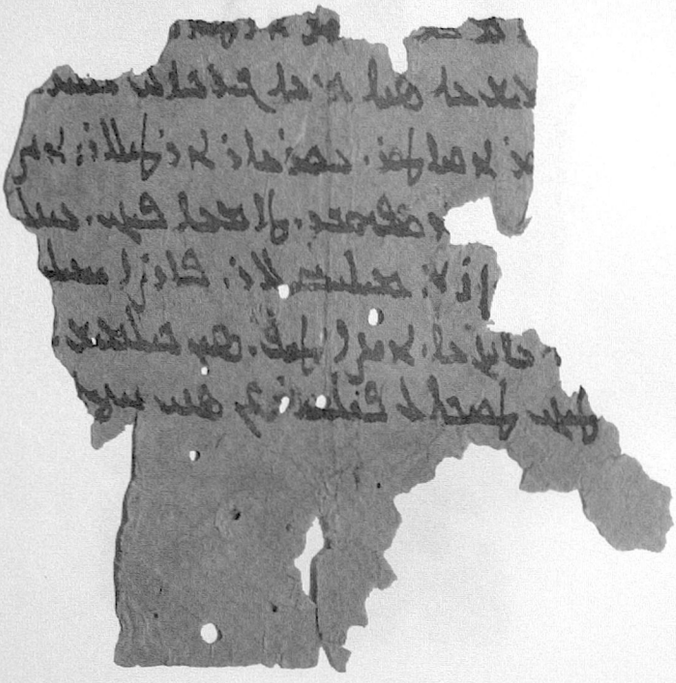
86. Y5：W11C（52cm×20.5cm）



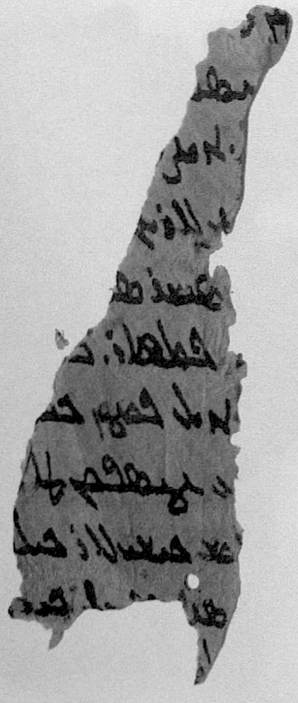
87. F249：W214／21567（10cm×4cm）



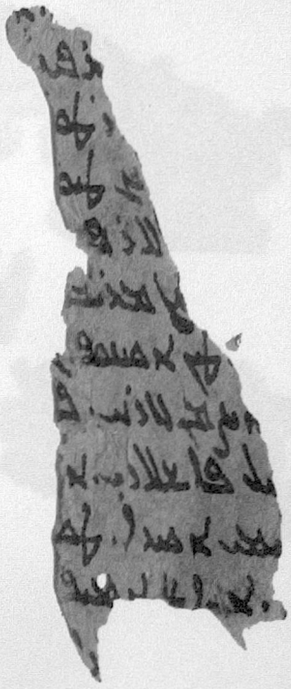
88. F137a（8.1cm×8.2cm）



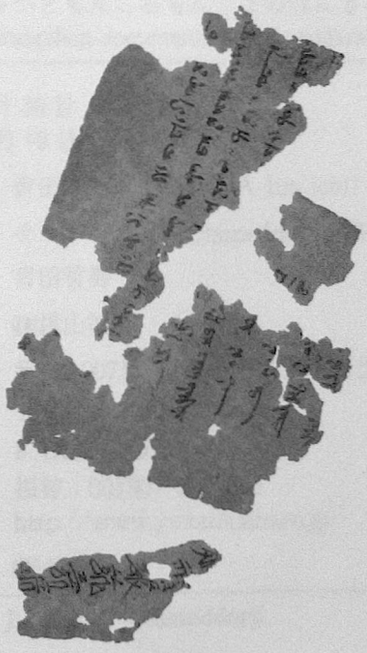
89. F137b（8.1cm×8.2cm）



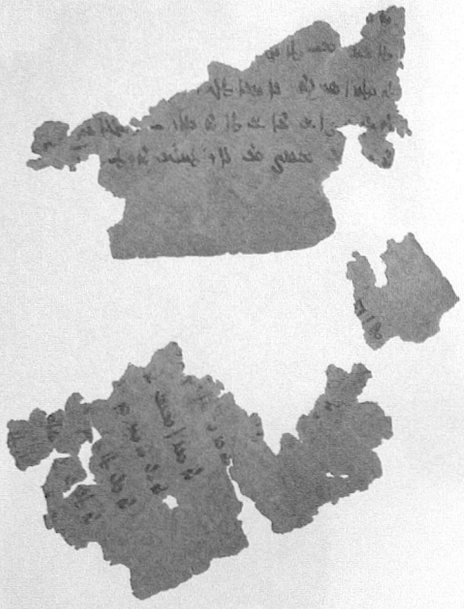
90. F137c（8.8cm×3.1cm）



91. F137（8.8cm×3.1cm）



92. SYR01



93. SYR02

ハラホト出土モンゴル文書の研究

（はらほとしゅつどもんごるもんじょのけんきゅう）

Study on the Mongolian documents found at Qaraqota

平成 20 年 3 月 20 日　初版発行
平成 20 年 11 月 10 日　2 版発行

編　　者　吉田順一（YOSHIDA Jun'ichi）
　　チメドドルジ（Chimeddorji、齐木德道尔吉）
発 行 者　宮田哲男
発 行 所　㈱雄山閣
　　〒102-0071　東京都千代田区富士見 2－6－9
　　TEL03－3262－3231 ㈹
　　FAX03－3262－6938
　　振替：00130－5－1685
　　http://www.yuzankaku.co.jp
印刷・製本　㈱ウエタケ

© YOSHIDA Jun'ichi ／ Chimeddorji

Printed in Japan 2008
ISBN 978-4-639-02025-7　　C3021